

ラブライブ！ 若虎と女神たちの物語

截流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

通っていた高校でとある事件を起こした高校生、諏訪部 志郎（すわべ しろう）は退学されそうになったがお情けにより音ノ木坂学院の共学化に向けての研究生として転入することになった。

しかし、彼には秘密があった……。彼は苦難の人生を歩み、時代の流れに散ったとある戦国武将が現代に新たに生を享けた姿だったのだ。

そんな彼が音ノ木坂学院で高坂穂乃果達と出会い、友人に支えられながら、μ'sを支えていく物語。

※作中に出てくる武将や歴史上の出来事に関しては作者自身の個人的な解釈が入っているのでご注意ください。

※感想や意見があればドシドシ書いてください！感想や意見を書いてくだされば作者のモチベーションがすごく上がります！

目次

プロローグ	終わりと始まり	1
1話	若虎、音ノ木坂に立つ	7
2話	新たな学び舎、新たな出会い	18
3話	始まりとの出会い	25
4話	再会	34
5話	若虎の決意	48
6話	女神の胎動	59
7話	ファーストライブを目指して	79
8話	初めての歌	98

9話	初陣 “ファーストライブ”	117
10話	新しい仲間 前編 志郎の想	
11話	新しい仲間 中編 炯眼は星	139
	空を見据える。	159
12話	新しい仲間 後編 花陽の決	
	意	171
13話	にご襲来	195
14話	説得と迎合	210
15話	センターは誰だ!?	233
16話	ラブライブへの道	254
17話	ラブライブへの道 期末試	

験編

269 2 6 話 将星、秋葉原に結集す 前編

287 1 8 話 一難去つてまた一難

451 2 7 話 将星、秋葉原に結集す 中編

302 1 9 話 それぞれの行く道

470 2 8 話 将星、秋葉原に結集す 後編

325 2 0 話 絢瀬絵里のやりたいこと

346 2 1 話 氷と炎はぶつかり、女神は天にはばたく

371 2 2 話 出会いはいつも突然に

390 2 3 話 μ s のアキバ訪問記

413 2 4 話 ワンダーゾーン

433 2 5 話 覇者との邂逅

584 3 3 話 西木野家別荘 枕投げの乱

536 3 0 話 夏色バケーション

513 2 9 話 合宿へ行こう!

486 3 1 話 非日常は人を狂わせる

561 3 2 話 非日常は人を狂わせる 制裁

編

編

編

編

編

編

編

編

4 3 話	崩れゆく翼	783	5 2 話	武田勝頼(すわべしろう)の想	
4 2 話	すれ違う想い	769	5 1 話	魂名開帳	935
4 1 話	奇跡の影に潜む火種	753	918		
4 0 話	雨上がり	739	5 0 話	志郎の真意、そして核心へ	
3 9 話	決壊	711	4 9 話	真姫の疑念	899
687			882		
3 8 話	最高のライブのために		4 8 話	謎の少年と猛進の志郎	
3 7 話	憂う若虎	666			867
656			4 7 話	志郎 vs にこりんぱな	決着
3 6 話	さらなる躍進と小さな歪み		845		
3 5 話	若獅子の夏休み	629	4 6 話	志郎 vs にこりんぱな	
3 4 話	朝日に誓う結末	619	4 5 話	若虎、再始動	825
599			4 4 話	虎の魂は死せず	807

番外編 秋の空の一等星 |

番外編 次代に開く花の蕾へ |

番外編 美しく誠実な貴女へ |

番外編 真姫の不安 |

番外編 紅月の夜に |

12911278125912351210

プロローグ 終わりと始まり

時は天正10年（1582年）3月11日、場所は甲斐国天目山。天下統一事業を推し進めた戦国大名である織田信長の嫡男、織田信忠を総大将とした世に言う「甲州征伐」の最後の舞台だ。

この甲州征伐のターゲットは、「甲斐の虎」と呼ばれ、最強の戦国武将の一角であった武田信玄の跡を継いだ武田勝頼である。彼は信玄と、彼が滅ぼした諏訪頼重の娘である、諏訪御料人の間に生まれた。しかし、かつて敵国だった国の姫の血を引いた勝頼は、その出自から、重臣や一門衆との折り合いはあまりよくなかったという。歴史上に名高い「長篠の戦い」で重臣を何人も失うという大敗北を喫するが、それから7年もの間、織田や徳川の攻勢を凌いでいた。

しかし北の隣国である越後を支配する上杉家の後継者争い、「御館の乱」において盟友、北条氏政に弟である上杉景虎の支援を頼まれるが、敵方の工作によりそれを反故にしてしまい、妻の実家の北条家とも争うことになってしまった。

そして1582年に入り、一門の一人である木曾義昌が織田に寝返ったことで彼を道案内とした甲州征伐が始まった。勝頼は将兵を集めて抵抗するが織田、徳川、北条の大

軍を前に兵士たちは逃げ出し、一門衆筆頭の穴山梅雪の寝返りをきっかけに家臣団は信濃の高遠城で玉砕した弟の仁科盛信や真田昌幸といったわずかの忠臣を除いて崩壊してしまった。

勝頼は、居城を捨てて重臣の小山田信茂を頼るが、その信茂は突如織田軍に寝返り、勝頼は天目山に逃れる。そしてやってきた滝川一益の軍勢を相手に最期の戦いを挑み、43人しかいないのにも関わらず、1000人ほどの損害を与えるが、持ちこたえることなどできるわけがなく、彼と息子の信勝は天目山の奥深くに潜り込んだ・・・。

「うむ、実に見事な武者姿よ。それでこそ武田の跡取りにふさわしいな。」

「ありがとうございます、父上。最期にこのようなものを賜うことができているこの信勝はまことの果報者でございます！」

「よく似合っていますよ、信勝。私も母として鼻が高いです。」

勝頼はその最期に際して、息子の信勝に武田家の正統な後継者の証である家宝の「楯無の鎧」を着せたという。これは武田の正当な後継者ではなく、あくまでも信勝が成人するまでの代理でしかなかった勝頼の最後の役目であった。

「それにしてもすまないな。わしが不甲斐ないばかりにこのようなことに巻き込んでし

まった……。それに桂、お主は実家に帰ることもできたであろうに。」

「よいのです、勝頼様。私はあなたの妻であり、血こそ繋がってはおりませんが信勝の母でもあるのです。覚悟はできています。」

勝頼の妻、桂（桂林院、または北条夫人。本名は不詳なので作者が勝手に名前を付けた）は兄の氏政から、戻ってくるようにと使者を送られたが、これを断り、自らの髪を切つて形見として使者に持たせて送り返したという。

「では勝頼様、私は先に逝きますね。」

「ああ……。」

「勝頼様……、今までありがとうございました。あなたの妻となれたこと、私の生涯の誉れでした……。」

桂は自らの喉に持つていた懐刀を突き立て、自害した。享年19歳。

「父上……。」

「ああ。介錯はわしに任せよ……。」

「父上、あなたは誰が何と言おうと私にとって最高の武将であり、私の誇りでした。父上の子として生まれることができて幸せでした。」

「わしもお主のような立派な息子を持って幸せだったぞ……！」

「ありがとうございます。ではお先に……ふんっ！」

勝頼の息子にして甲斐武田家の最後の当主であった、信勝も自刃して果てた。享年一六歳。

「桂……、信勝……、わしも今すぐそちらに逝くぞ……。」

勝頼は、鎧を脱ぎ腹部を露わにして刀を腹に向けた。

「父上……、私が不甲斐ないばかりに武田は滅びてしまいました。どうか、あの世で私を叱ってください……。」

そして勝頼は自らの腹に刀を突き立て、横一文字に切った。

（ぐっ……うおお……！もし……、もしも我が願いが叶うならば、次は血や家といったしがらみなどのない……、穏やかな……、安らかな世に生まれてみたいものだ……。）

そして勝頼の首を近習の刀が切り裂き、勝頼は三七歳の生涯を終える……、はずだった。

（ここはいつたいどこなのだ？ わしは天目山で自刃したはず……。それに体がうまく動かん……。）

「あ、志郎が起きたわ。おなかですいたのね、今ミルクを作ってあげるからね。」

(言葉遣いは面妖だが日ノ本の言葉であるのは間違いなさそうだな。)

「はーい、志郎。ミルクですよー。」

(ぬっ！やめろ！わしは武田四郎勝頼であるぞ．．．ってなんだと!?)

勝頼は抱き上げられたことに対して抵抗するが、その時に自分の手足と近くにあった鏡を見て驚いた。

(馬鹿な．．．、赤子になつているとは．．．。どおりで体は碌に動かんし、言葉も話せぬわけだ．．．。)

「ははは、志郎はやんちゃだなあ。誰に似たんだらうかね。」

「もう、このやんちゃっぷりはあなたそっくりよ、晴彦さん。」

「痛いところを突いてくるなあ、美代子は。」

(なるほど、この者たち、晴彦殿と美代子殿はここでのわしの両親か。二人とも朗らかなお人だ．．．。)

ミルクを飲んだ志郎(中身は勝頼)はすぐに眠りについた。

「あら、寝ちやった。いつにもましてかわいい寝顔ねえ。」

「寝顔がかわいいのはお前にそっくりだよ。」

「何言つてんのもう．．．！でも本当にぐっすり寝てるわね。」

「きつと立派に育つぞ、こいつは。」

こうして武田勝頼改め志郎は、諏訪部夫婦の下で健やかに育っていく。そして物語は志郎が17歳、高校二年生となる春に移っていく・・・。

1話 若虎、音ノ木坂に立つ

武田勝頼改め、諏訪部志郎がこの世に生を受けてから17年が経とうとしている3月の終わりごろ、彼は神田を彷徨っていた。

「このあたりのはずなんだがなあ……。」

彼は地図とにらめっこをしながら目的地までの道のりをゆつくりと進んでいた。

「ここを曲がってまっすぐ進めばようやく音ノ木坂学院に着くか……。」

彼が目指していたのは、秋葉原・神田・神保町に挟まれた地域にある『音ノ木坂学院』という学校であった。

「廃校が噂されているとはいえ、流石は名門校だな。校舎も見事だし、なくなってしまうのが惜しいくらいだ。」

彼はそう言いながら校舎や校門の内側を見て回っていた。しかし、なかなか入ろうとする素振りを見せない。

（くそっ……、春休みで人が全然いないとはいえ、これでは完全に不審者ではないか……。）
そう思い、校門に足を踏み入れようとするが、足を踏み出すことができないのだ。今ではただの高校生だが曲がりなりにも前世は猛将として名を馳せた志郎（勝頼）がたか

が校門をくぐるのに四苦八苦しているのはなんともシニールな絵面だが、それには訳があった。それは……。

「この学校が女子高でさえなければ悠々と入れるものを……！」

そう、この音ノ木坂学院は女子高なのだ。ではなぜ男である志郎がここに来たのか……。

その理由は2週間ほど前に遡る……。

2週間前、ある高校の校長室にて。

「失礼します、1年2組の諏訪部志郎です。」

「ああ、そこに座ってくれ。」

志郎は校長である還暦を迎えた白髪交じりの男性に促され、席に座った。

「さて、諏訪部君。話というのは……。」

「俺の処分についてですよね？」

「……話が早くて助かるよ。」

「俺が先生方に呼ばれる理由なんて、大方そんなものでしょう。」

志郎は自嘲的に笑いながら校長に言葉を返した。

彼はいったい何をしてこのような状況に至ったのか、それは3学期が始まったところに遡る。

彼のクラス、1年2組には一つ問題があったのだ。それはいじめである。いつ始まったのかは定かではない。クラス内カースト上位に位置する生徒のグループが自分たちよりも弱いと見た生徒を「いじる」と称してからかったりするの、1学期の中ごろからよくあつた話だった。志郎はこれに関して、

（くだらん。己より弱き者には尊大に振る舞い、強き者には媚びへつらう。400年経とうとも人の性は変わらないものか。それにしてもこのような箱庭の中の狭い世界の中で奴らはよくもまあ、我こそが天下人であるかのように振る舞えるのだ？）

と、呆れながら我関せずの姿勢を貫いていた。しかし、そんな志郎でも徐々に彼らの振る舞いに対して批判的な立場をとるようになっていき、10月に差し掛かるころには対立していくようになっていった。

志郎はある一人の男子生徒を気にかけていた。その生徒は秋山といい、気弱であったが心優しい少年だった。彼とはたまたま体育の授業でペアになったことをきっかけに交流を深めており、親友ともいえる間柄だった。しかし、カースト上位のグループは秋山に目を付けたのだ。志郎が彼らと明確に対立するようになったのは、友人である秋山を守るためだったのだ。

事件が起きたのは三学期の始まり頃のある日の放課後のこと。志郎は秋山と帰宅しようとしたが、彼はそそくさと教室を出て行った。怪しく思った志郎は秋山の後を追いかけて、誰も寄り付かない旧部室棟の裏につき、物陰からのぞいた時に彼は目を見張った。

秋山はカースト上位のグループに暴力を振るわれていたのだ。この時グループの子が話していたのを盗み聞きし、三か月前から定期的に金を貢ぐように脅されており、払えない時には制裁として暴力を振るわれていた。

志郎は親友でありながら秋山の苦しみを知ることが出来なかった自分の不甲斐なさと、卑劣な行為を笑いながら行う上位グループに対する怒りで胸がいっぱいになった。

そして、志郎は物陰から飛び出し、秋山に暴力をふるっていた生徒に飛びかかり、その顔を思い切り拳で殴りつけた。志郎はその場にいた上位グループの生徒を男女問わずに殴りつけたのだ。

その翌日に上位グループの生徒の親が学校に抗議しに来たのだ。親たちを落ち着けるために、教師陣は志郎を2週間の停学処分にするも怒りは収まらず、「志郎を退学させる、さもなければ裁判所に訴え出る。」という訴えに出たのだ。これを知った秋山はその両親と共に処分を軽減させるように訴え出たのだ。そして、上位グループを快く思っていない生徒たちも秋山に協力し、判断に困った教師陣は何日も議論を重ねた。その議論の結果を、志郎に直接伝えるために校長は彼を呼び出したのだ。

「それで、俺はいつたいたいののような処分を受ければいいんですか？」

「うむ、本来ならば向こうの要求を呑んで君を退学にしなければいけないのだが、向こう側にも非があり、何より秋山君とそのご両親があそこまで強く君を擁護しているものだからなかなか決まらなかったが・・・。」

「・・・。」

「諏訪部志郎君。君には、別の学校へ行ってもらうことになった。」

「は？」

「君には転校してもらおうと言ったんだよ。」

「ふざけないでください！俺はどのような処分も甘んじて受けるつもりでしたが、俺を追い出した後、秋山はどうなるんですか!？」

志郎にとって気がかりだったのは親友である秋山のことだった。秋山の唯一の友人である彼がいなくなってしまうと、これ幸いと上位グループが秋山に報復を仕掛けかねないと、志郎は懸念していたのだ。

「そ、それは向こう側も反省していると・・・。」

「あのような連中は口先だけでは恭しくしておりますが、あなた方が忘れたところに必ず奴らは同じことを繰り返す！秋山が報復される可能性だってありますし、自害する者が

出てからでは遅いんですよ!!」

「その辺に關しては考えてある。向こう側の生徒もかなり問題を起こしてららしいね。故に彼らにも追つて処分を出すようにしている。」

「なるほど、奴らが無罪放免にする気は無いと分かりました。しかし、転校するとはいえ、受け入れてくれる場所なんてあるんですか?」

「それは心配しなくてもいい。君は音ノ木坂学院を知っているかね?」

「音ノ木坂学院ですか? 確か地元の近くにあるのは知っていますが、あそこ女子高ですよね!」

「うむ、だがこれを見てほしい。」

校長は一枚の紙を志郎に渡した。

「共学化に向けた研究生の募集?」

「そう、音ノ木坂学院は年々生徒数が減つていき、廃校の危機を迎えていると噂になつてゐるんだよ。」

「ですが、校長がそれにかかわる理由は無いのでは?」

「理由ならあるとも。なんせその今の理事長は私の昔の教え子だった人だからね。」

「え、じゃあ校長は音ノ木坂にいたことが・・!?」

「あるとも、女子高だからといって男の教員がいないわけではないからね。最も、一人か

二人ほどしかいなかったから肩身は少し狭かったがね。」

「そんなことが……。」

「わしも数年だけとはいえ過ごした思い出深い場所が無くなつてしまふのは残念でならないんだ。君を利用するようで悪いが、どうか頼まれてくれないか？」

「……分かりました。そこまでおつしやるならその話に乗りましょう。ですが、俺を追い出したからには俺の分までこの学校に蔓延る奸物どもをなくしてより良い学校にしてくださいよ！」

「ああ、約束しよう。君のような真つ直ぐな心を持った生徒を追い出してしまったことへの償いは何としても果たしてみせるよ。」

「では、校長先生。今までお世話になりました。」

そして志郎は通っていた高校を去り、音ノ木坂学院の理事長に挨拶をするためにここまで来たのである。

(ええい、男は気合いだ！今の俺に退路はない、突き進め！俺よ！)

こうして自分を奮い立たせて、彼は校門に足を踏み入れていった。

そして志郎は理事長室の前にたどり着き、

（いよいよここまで来てしまった・・・。勢いに任せて入り込んできた方がいいが、大丈夫だろうか？ここに来て不審者呼ばわりされて通報されたら笑えんぞ・・・？いやいや、校長先生からは話は聞いているだろうし問題は無かろうて。）

志郎は覚悟を決めてドアをノックする。

「どうぞ。」

ドアの奥から女性の声が出た。

「はい、失礼します。」

そういつて志郎は理事長室に入る。奥にはグレーに近いベージュの髪をした女性が座っていた。

「あなたが、諏訪部志郎くんね。音ノ木坂学院にようこそ。私はこの学院の理事長を務めている南といいます。」

「初めまして。自分はこの度研究生としてこの学院に転入することになりました諏訪部志郎です。」

「そこまで堅苦しくしなくてもいいのよ？さあ、そちらに座ってください。」

「あつ、は、はい。では失礼します。」

理事長に促されて、少し慌てながら志郎は椅子に座った。

「あなたの話はそちらの校長先生から聞いています。とても真つ直ぐな生徒だとおつしやっていたわ。」

「はあ、それは光榮ですね。ですが、私がこの学校に来ることになった理由も存じているのでは？」

「……ええ、諏訪部くんのいう通りあなたがここに来ることになった理由も聞きました。」
「こんなことを言うのは無礼極まりないと存じますが、それを知っていてそのような言われるのは少し嫌みのように聞こえてしまったんですが。」

「それは悪いことをいつてしまったわね……。でも、私も嫌みで言つたわけでは無いのよ？」

「……。」

「確かにあなたのとつた行動は良いものとはいえませんが、それは友達のことを第一に考えてのことだったと私は考えています。」

「また同じような事を起こすかもしれませんよ？」

「この学院にはそんなことは起きないし、私が起こさせないわ。だからそんなことを心配する必要はないわ。」

「そうですね……。失礼なことを言つてすいません。」

「いいのよ、そんなことは気にしないで。自分の意見をはつきりということが出来るの

「はいいいことなんだから。」

「・・・ありがとうございます。」

「そうそう、研究生についての話をしましょうか。」

「そういえば研究生といつてもいつたい何をすればいいんでしょうか。」

「特にこれといつて特別なことはしなくていいわ。あくまでも共学化に向けた実験のよ

うなもので男子が入学しても問題ないかを調べるだけだから。」

「なるほど。あくまでも普通の生徒と同じということでもいいんですね?」

「ええ、そのとおりね。それともう一つ、実は研究生はもう一人いるのよ。」

「もう一人、ですか?」

「ええ、いくらなんでも男の子一人だけじゃ過ぎごしにくいんじゃないかと思つて二人募集していたの。その子はまだ挨拶には来てないんだけどね。」

「そうですか。流石に自分も男一人でやっていく自信がなかったので心強いです。」

そんな話をしながら志郎は、入学についての手続きやその他諸々の説明を受け、それが終わるのに、大体一時間ほどかかった。

「ふう。たった一時間ほどしか経つておらんというのに・・・、おつといかんいかん。口調が昔のものに・・・。少し疲れたなあ。」

志郎は少し背伸びをして、あくびを一つして歩き出した。

「しかし研究生がもう一人か。どんな奴なんだろう。」

そうつぶやき、音ノ木坂学院で上手くやっていけるかといったとりとめのないことを考えながら彼は帰り道を進んでいく。

志郎はまだ知らない。この音ノ木坂学院に新たな物語が生まれ、自分もまたその物語の一部になることを……。

2話 新たな学び舎、新たな出会い

「うーん、少し家を出るのが早かったかな。どれ、少しこのあたりを散策しようかな。」

今日から音ノ木坂学院の生徒（あくまでも研究生ではあるが）となる志郎は今、音ノ木坂学院の周辺を散策していた。

「お、ここが神田明神か。諏訪の大祝おわほうりの血を引く俺が参拝するのはあれかもしれないが、諏訪の神々も八百万の一柱だしそこまで気にはしないだろう。よし、お賽銭を入れて二礼、二拍手して……。」

（この音ノ木坂学院では平穩無事に過ごせますように……。）

「……つと、こんなもんで……。」

「お。お兄さんはどんなお願い事をしたん？」

「どわあああ!？」

気づくと志郎の後ろにはどこか微妙に間違っているような気がする関西弁を話す巫女が立っていた。

「いや何って言われても……、とかどどちら様ですか？」

「ん？ああそうやね。自己紹介しないといかんね。うちは東條希。よろしくね、音ノ木

坂学院初の男子生徒さん。」

「俺は諏訪部志郎だ。今日から音ノ木坂学院に通う……ってなぜそれを知っているんだ!?!」

「うちはこう見えて生徒会の副会長を務めてるん。理事長先生からえりちと一緒に言われたんよ。四月から男子生徒が二人入ってくるってね。なんで知ってるのかは、君の着ているそれを見てもしかしたら、と思っただからやね。」

「確かに制服着てたら分かるか……。えりちって言うのは?」

「えりちって言うのはうちの親友なんよ。うちと同じ三年生で生徒会長をしているんだよ。」

「なるほど。ていうか三年生だったんですか!?!し、失礼しました!!」

「別に気にしなくてもええよ、うちは堅苦しいの苦手やし。何なら呼び捨てにしてもええんよ?」

「いや、流石にそれはまずいんじゃないんすかね、東條先輩……。」

「うーん、なんか他人行儀やねえ。希って呼んでくれてもええんよ?」

「ただけ呼び捨てにされたいんすか……。じゃあ、希先輩でいいっすか?」

「うーん、はぐらかされた気もするけど別にいいや。じゃあ改めてこれからよろしくね志郎くん。」

「いちいちそ。」

希は志郎に手を差し伸べ、志郎はその手を取った。握手を交わした後、希はいきなり志郎の顔をじつと見つめた。

「ちよ、顔が近いですよ希先輩……。」

「話が変わるけど、志郎くんってなんか他の人とは違う雰囲気があるんよね。どうしてだろう?」

「?!?さあ、俺はいたって普通の男子高校生ですよ。特にこれといって変わったところなんてないっすよ。」

「そう言われると余計気になってきますなあ……。」

「とにかく、俺には特に何も変わったものなんてないですつてば。じゃあ、俺はこの辺で失礼しますよつと!」

そういうと志郎は走り出した。志郎は足が速く、百メートル走の記録も学年で上から数えた方が早い記録を持っているのだ。こうなった志郎を捕まえられるのはよつぽど運動神経のいい人間くらいだろう。

「うわあ……。めっちゃ足速いなあ……。まあ、この格好で走るわけにもいかんしねえ。」

（それに、嫌がつてるのに無理やり聞くのは良くないもんね。さて、うちもそろそ

ろ……。」

「希！」

「お、えりち。おはよう！」

希が声のした方向に振り向くと、そこには金髪をポニーテールにした、きりつとした印象をした碧眼の少女が立っていた。彼女こそ、先ほど話題にのぼっていた絢瀬絵里である。

「おはよう希。さつきなんか音ノ木坂の制服を着た男子とすれ違ったんだけど……。」

「あ、それ多分志郎くんやね。」

「あら、知り合いなの？」

「うん。さつき知り合ったばかり。少しからかったら逃げられちゃったんよ。」

「もう、希ったら何やってるんだか……。まあいいわ、私たちも行きましょう。」

「うん。着替えてくるからちよつと待ってて！」

そういつて希は社務所へと去っていった。

（さつきの子が転校生だったのね。だとしたら本当に女子高という伝統をかなぐり捨ててまでしないと大変なところまで来てしまっているのね……。だったら生徒会長である私が頑張らないと……。）

「……ち、えーりーち!!」

「うわあつ！の、希!？」

「もう、えりちつたらさつきから呼んでたのに無視するなんてひどいやん！」

「ごめんさい、少し考え事をしてたわ。」

「ふーん。あんまり根を詰めたらいかんよ?」

「分かつてるわ。行きましょ。」

そして絵里と希もまた学校へと向かっていった。

それからしばらく経ったころ、志郎は応接室で待つていた。

「ふう……。さつき全速力で走ったから少し疲れたわ……。息を切らしながら入ったもんだから理事長に心配されたし。ここで待つてろ、とは言われたが退屈だな。」

志郎は応接室のソファにもたれかかってくつろいでいたが次の瞬間、ノックの音がしたと同時に扉が開いた。

「はあー。やっと座れるわー。女子高つて疲れるなあ、誰だよ女子高が楽園だの桃源郷だの言つた奴は……。軽く詐欺じゃねえかよ……。」

応接室に入ってきたのは、志郎と同じ制服に身を包んだ、機嫌悪そうに髪を掻いている男子だった。

「ん．．．？なあ、お前さん．．．。」

「は、はい．．．？」

「おっと、こいつは見苦しいものを見せちまつてすまないな！俺は群馬から来た武藤幸雄っていうもんだ。気軽に幸雄って呼んでくれ！実はさつきから女子から奇異なものを見るような目線を雨のように浴びせられて辟易してたんだがまさかここでもう一人の男子に会えるとは僥倖だねえ！お前さんはなんて言うんだい？」

入ってきた男子はさつきの不機嫌な姿からは想像できないテンションで一方的に自己紹介をしてきた。

「あ、ああ。俺は志郎。諏訪部志郎だ。こちらこそよろしくな、幸雄。」

「志郎．．．？」

「ん？どうした？」

「いや、昔の知り合いに『しろう』って名前の奴がいたんだよ。志郎か、いい名前だなあ。よろしくな、兄弟！」

「兄弟!？」

「ああ、流石に兄弟は言い過ぎかもしれんが、俺たちや二人しかいない音ノ木坂学院の男子生徒なんだ。仲良くしようぜ？」

「ああ、そうだな。」

こうして二人は改めて握手をした。

「早速仲良くなってるようね。気があつたみたいで何よりだわ。」

今度は理事長が応接室に入ってきた。

「り、理事長先生。」

「あ、理事長。」

「この様子なら紹介する必要はないみたいね。」

「と、言いますと?」

「ええ、ここで顔合わせして紹介するつもりだったんだけど、少し用事が入っちゃつてね。そうそう、これから始業式があるんだけど、君たちにも参加してもらおうわ。」

「え?俺たちが参加していいんですか?」

「そうですよ、流石にいきなり生徒たちに紛れて並ぶのは・・・。」

「それなら問題ないわ。二人にははじつこの席に座ってもらおうわ。クラスに行ってもらうのはその後よ。というわけについてきてちょうだい。講堂へ案内するわ。」

「はゝ。」

志郎は新たな友を手に入れ、始業式に参加すべく共に理事長の背後に続いていく。

志郎の新たな学校生活がこれから始まろうとしていた。

3話 始まりとの出会い

「ふああ……。学校が変わったとはいえ、集会が退屈なのは共通してるもんだなあ。」

「分かんんでもないけどいきなり居眠りぶつこくのはどうかと思うぞ……。」

始業式が終わり、志郎と幸雄は教室に向かっていた。

「んじゃあ、俺はこつちだからまた後でな幸雄。」

「いや、俺もこつちなんだが？」

「え？」

「いつから転校生は別々のクラスになると錯覚していた？」

「なん……。だと？」

教室にて……。

「お前らー。今日はうちのクラスに入ってくる編入生を紹介するぞー。」

「編入生か。どんな子が来るんだろう。」

「楽しみだね、穂乃果ちゃん。」

「小耳に挟んだのですが、どうやら編入生は二人いるみたいですよ。」

「二人かあ。どっちが来るんだらう。」

まだ見ぬ編入生の話の花を咲かせるのは、茶髪のサイドテールの少女とベージュのロングヘアの少女と流れるような黒髪の少女たちだった。

「おーい、入ってきていいぞー。」

ガラツと教室の扉を開けて入ってきたのは二人の男子だった。教室は突然男子が入ってきたことでざわつき始めた。

「お前から静かにしろー。いきなり男子が入ってきたからびっくりするのはわかるが、こいつらはさっきの集会でも言われていた近いうちにくる共学化に向けた研究生だ。ほら、二人とも自己紹介してくれ。」

担任教師の山田に促された二人は自己紹介を始めた。

「今日からこの音ノ木坂学院に共学化に向けた研究生として編入することになった諏訪部志郎です。よろしくお願いします。」

「同じく研究生として今日からここに通うことになった武藤幸雄です。よろしくお願いします。」

「じゃあ二人は教室の窓側の空いてる席に座ってくれ。」

「はこ。」

そうして二人は指定された席に行った。

「じゃあ編入生の紹介も終わったしホームルームを始めるぞー。」

そしてしばらく経って……。

「まるで嵐のような質問攻めだったな。しかもただトイレに行くだけなのにすげー注目されっぷりだったぞ……。幸雄の気持ちがよく分かったよ。」

「だろ？俺たち男子が珍しいのは分からんでもないが流石に客寄せパンダみたいな見世物状態なのは気が休まらん……。」

志郎と幸雄は休み時間になるたびに押し寄せる質問攻めに来る女子の大群の相手をしていたので、精神的な意味で疲労困憊だった。帰りの時間になるころにはだいぶ落ち着いてはきたのだが、それでも彼らへの珍しいものを見るような視線は二人をげんわりさせるのには十分なものだった。

「そうだな。まあしばらく経てばほとぼりも冷めるだろう。」

「だといいんだがねえ。しっかし、世の男子たちが俺たちが今言った事を聞けば贅沢だっつってキレルんだらうな。現実つてもんを見てほしいぜ。ハーレムは精神的にかなり消耗するってな。」

「まあ、そりや普通の男子は俺たちみたいなことになる機会なんぞ滅多に來ないからな。」

「そういう意味では俺たちもラッキーなのかね。」

「そうそう。」

「そういえば志郎よお、女子ん中で誰が印象に残ったよ?」

「印象に残った子かあ……。一人じゃなくてもいいならあの三人組だな。ほら、最初に來た子たちだよ。」

「ああ、穂乃果と海未とことりね。奇遇だな、俺もそう思ってたよ。」

二人と、話題に上った少女たちがどんな形で出会ったのか、それはしばらく前の事……。

教室にて。

「まさかクラスが同じだけでなく席まで近いとはな。」

「まあ、いいんでね。お互い仲良くやろうや。」

そんな他愛ない会話をしていたところに一人の少女がやってきた。

「ねえねえ!あなた達が転校生の諏訪部くんと武藤くんだよね!?!私は高坂穂乃果って言うんだ!これからよろしくね!あ、うち『穂むら』っていうお饅頭屋さんやってるんだ、

よかつたら遊びにおいでよ！それからそれから……。痛っ!!」

一方的なマシンガントークを繰り広げていた少女の脳天に突然手刀が振り下ろされた。

「痛いよ海未ちゃん！」

「痛いじゃありません。いきなりそんなに話したらお二人に迷惑じゃないですか。あ、初めまして。私は園田海未と言います。すいません、穂乃果が突然……。」

穂乃果の脳天に手刀を振り下ろした海未と呼ばれる少女はお辞儀をした。

「いやいや、俺たちはそんな迷惑だなんて……。」

「そうそう、ただそつちの奴がものすごい勢いで話しかけてきたもんだからついびつくりしただけつすよ。高坂つて言つたつけ？あんた将来営業とかやつてみたら結構大成するんじゃないか？ははっ。」

「ほらね海未ちゃん。別に迷惑じゃないつて二人も言つてるよ！あと褒めてくれたし！」

「調子に乗らない！あと多分それはお世辞ですよ。」

「あ、バレた？」

幸雄はいたずらっぽい顔をして舌を出した。

「えー！今のお世辞だったの!?!せつかく褒められたと思つたのにひどいよー！」

「さつきのお返しさ。まあ悪く思いなさんな。」

穂乃果は幸雄に抗議するが、幸雄は悪びれる様子を微塵も見せず、彼女をいなしていた。

「全く穂乃果は……。ことりも何か言つてやつてください。」

「うーん、二人とも楽しそうだからいいんじゃないかな？あ、私は南ことりつていいます。穂乃果ちゃんと海未ちゃんとは幼馴染なんだ。よろしくね♪」

（ん？なんだらう。この子を見るとなんか既視感が……。さつきの高坂は多分名字が同じだけで昌信の子孫ではないだろうとしても、南……。なんか聞き覚えが……。あつ!?!）

少し考え事をしていた志郎はこつりに恐る恐る問いかけた。

「いきなりこんなことを聞くのは失礼かもしれないが、南は理事長先生の親族なのか？」

「え？お母さんの事？うん、そうだよ。お母さんはこの学校の理事長先生なんだあ。」

「なんかやけにそっくりだと思つたがそういうことだったのか。これで合点がいったな。」

「マジか？となると南はこの学院の生徒の中でもトップクラスの有力者じゃねーか！お嬢！何なりとこの武藤幸雄めに指図をお出しくだされ!!」

「……何してんだよ幸雄。」

「何ってゴマすりに決まってるだろ。下手に機嫌を損ねりや少数派たる俺らの首なん軽く飛ばされんぞ！」

「私はそんなことしないよお〜！」

揉み手をしながらわざとらしいくらいに恭しい態度をとる幸雄にことりは抗議し、志郎は幸雄をたしなめる。

「全く仕方のない男だな幸雄。からかってやるのも大概にしておけよ？」

「あれ、なんか諏訪部くんいきなり時代劇みたいな口調になったね。」

穂乃果は突然志郎の口調が変わったことを指摘し、志郎も指摘されたことで動揺を隠せなかった。

「あ、ああ。父さんが大河ドラマが好きでな、小さい頃から一緒になってみてたらたまにこういう口調になっちまったんだよ。はっはっは！」

（流石にわしが生まれ変わった武田勝頼なんて口が裂けても言えんからな。しかし流石に苦しすぎたか・・・？幸雄の奴なんかこっちを怪しげに見とるし・・・。）

「・・・いやあ、まさか俺と同じような癖を持っている奴がいたなんて！意外と世間は狭いもんだねえ!!」

「武藤さんもなんですか？」

「ああ、でも俺の場合は親父が時代劇好きなんだがな。」

「あはは、二人とも面白いね！ そうだ、志郎くん！ 幸雄くん！」

「な、なんだ？」

「あれ、呼び方変わったぞ」

「私たちと友達になろうよ！」

「ああ、それは別に構わないが……」

「わざわざ呼び方を変えんでもいいんでねえか？」

「だって名字で呼んでたらなんか他人行儀な感じがするんだもん。だから二人も下の名前前で呼んで？」

「そうですね、それに関しては穂乃果のいう通りですね。」

「うん！ ことりも賛成！」

「じゃあ穂乃果、海未、ことり。これからよろしくな」

「志郎と同じく、俺もよろしくな。」

そして時は戻り……。

「いやあ、あの三人組は確かにタダものな感じがしないな。」

「そうだな。」

「そうだ志郎。いきなりなんだが明日は暇かい？」

「ほんとに突然だな。別に予定はないが・・・。」

「だったら明日アキバに行ってみようぜ！一度行ってみたかったんだよな。」

「そっか、幸雄は群馬から来たんだもんな。」

「んじゃあ、俺はこっちだから。明日は楽しみにしてるぜ。あばよ！」

「じゃあな。」

志郎は幸雄と別れを告げ、そのまま家路を進んでいく。だが志郎はまだ知らない。このアキバ行きが二人の関係を大きく変え、さらに深いものに変えることになることを・・・。

4話 再会

土曜日の12時過ぎ頃の秋葉原駅から二人の男子高校生が出てきた。片方はとても上機嫌でもう片方は特にこれといって浮かれた様子は見せてない。

「かあく！ここが電機街とサブカルの聖地秋葉原かあ!!すげえ人が多いな。お、外国人もいるな！」

「そりやあ、世界的にも有名だからな。」

「志郎はえらくリアクションが薄くねえか？」

「そりやあ近場に住んでるからな。暇なときは散歩がてらに行くからな。」

「はあー！都内に住んでるやつはいいねえ！田舎もんじゃあこんなどこには滅多に来れんからな。」

「おまえだつてもう都内に住んでるじゃねえか。」

「そう！だからこれからは目いっぱい楽しめるぜ！ありがとう親父！今年の父の日は盛大に祝つてやるからな!!」

「今年の、ねえ。」

志郎は苦笑しながら、幸雄と歩を進める。歩いていくと駅前の大きなビルに差し掛

かった。

「ほう、これが噂に聞くUTX学院だな？ すぐえとこだよな、群馬じゃぜってえ見れないぜこんなもん。」

「ああ、話を聞くにこのUTX学院が出来たことで音ノ木坂学院の生徒がさらに減るようになっていったらしいな。」

「まあ、こんなもんが近くに建つちまつたらそりゃこつちに人が流れるよな。自然の摂理だわ。」

そう言つて志郎たちはUTX学院を後にした。

「いやあ、アキバはいいねえ。何度来ても飽きませんわこいつあ！」

「楽しんでもらえたようで何よりだよ。」

「何言つてんだよ！ むしろここに来て楽しいめな奴は絶対人生の何割かを損してるぜきつと。」

「はは、よつぽど気に入ったんだな・・・つてうん？」

「ん？ どしたよ志郎。なんか面白いもんでも見つけた？」

「いや、あれ。あの路地裏見ろよ・・・。」

「んん？うげ、やなもん見た。」

志郎と幸雄の目の先の路地裏にはいったい何がいるのかというところ。

「あの・・・、私たちこれから用事があるので・・・。」

「ええ？そんなつれない事言わないでよ。俺たちと遊ぼうぜ？」

「そうそう、用事なんてほつといてさ、いいだろ？」

「かよちんという通りです！凜たちはこれから用事があるんです！だからそこをどいてくださいー！」

「へえ、凜ちゃんとかよちんって言うんだ。二人ともかわいいじゃん。」

「かよちんを気安くかよちんって呼ばないで欲しいにや！」

「にやってwこいつ今語尾ににやってつけてたぞwイタいなw」

「やめろよ笑ってやるなよw凜ちゃんが怒っちゃうだろw」

路地裏では「かよちん」と呼ばれている丸みがかった髪をした気弱そうな少女、小泉花陽と「凜ちゃん」と呼ばれている活発そうなショートヘアの少女、星空凜が二人の大學生くらいの男に絡まれていたのだ

「はあ、ベタなナンパだねえ。都会って物騒だねえ。」

「いやいや、あんなの滅多にいないからな。さりげない都会に対する風評被害はやめろ。むしろ田舎の方がああやって粹がってる奴がいそうなんだが……。」

「あつ志郎てめえ、風評被害やめろって言いつつ田舎に対しての偏見丸出しじゃねえか！ だいたいうちの地元でもそんな奴はいねえっての！」

「じゃあ、お互いさまってところだな。ちよつと行つてくる。」

「助けにか？ 気持ちはわかるがむやみに突つ込むのは……って、ああ行つちまった。」

路地裏にて……。

「もう行こう、かよちん。こんな人たちに構う必要なんてないにや！」

「おいおい、ずいぶん言い方じゃないの凜ちゃん。」

花陽の手を引いてその場から離れようとした凜の腕を男の片割れが捕まえた。

「凜ちゃんに乱暴しないで！」

そういつて彼女は凜の腕を掴んだ男を突き飛ばした。気弱そうな彼女は友達を守るために勇気を振り絞って抵抗する意思を明確に示した。

「いつてえ……！ てめえ、女だからって優しくしてやったらつけあがりやがって……」

「これはちよつとお仕置きが必要みたいだな。」

そういうともう一人の男が花陽を殴ろうと拳を振り上げた。
「かよちん逃げて!!」

凜の悲痛な叫びも空しく男の拳が花陽に向かって飛んだ。花陽は恐怖のあまりか、せめて少しでも身を守ろうとしたのか身を縮めた。

「ひうつ……!……あれ?」

花陽に拳が当たるとはなかった。なぜなら……。

「女の子の顔を殴ろうだなんて感心しないな。」

志郎が拳を受け止めていたからだ。

「なんだよてめえ。てめえには関係ないだろ。」

「義を見てせざるは勇無きなりって言葉を知らんのか。あんたらみたいなのに絡まれてる奴を見たら助けようとするのが人つてもんだろ。」

「はあ? ガキが粋がつてんじゃねえぞ!!」

「お前も痛い目を見たいらしいな……!」

「来いよ。遠慮はいらんぞ。」

「ハイハイ! 御三方ともそこまでー! 盛り上がってるところ申し訳ありませんがストップしてくださいー!」

なんと志郎と男たちの間に割って入ったのは幸雄だった。

「幸雄!? どういうつもりだ。俺はこんな奴らには引けはとらんぞ。」

「落ち着け志郎、よく考えてみるよ。こんなところでケンカ騒ぎなんて起こしたら停学待ったなしだぜ? 俺たちは研究生なんだ。あまり悪目立ちはしない方がいい。」

「しかし……。」

「まあ、ここは俺に任せてくれ。」

幸雄はそう志郎に告げて男たちのもとに歩いて行った。

「いやあ、うちの友人が迷惑をおかけしました! ナンパを邪魔されたら怒りたくもありませんよねえ。ですから……。」

幸雄がそう言つてポケットを漁つて取り出したのは二枚の一万円札だった。

「お詫びといつてはなんですけど、こいつでその子たちを見逃してあげてください。悪くない金額だと思えますよ? ね?」

そう言つて幸雄は男たちのズボンのポケットにお札を一枚づつねじ込んだ。

「はっ、物分かりがいいじゃねえかよ。」

「いいぜ、見逃してやるよ。行こうぜ。」

思いがけない収入を手に入れた男たちは上機嫌で去つていった。

「ふう、行つたか。危ないところだったね君たち。」

「あ、あの……、助けてくださつてありがとうございます!」

「いやあ、俺は別に礼を言われるようなことはしとらんよ。礼ならこっちの俺の友人に言つてやつてよ。」

「か、かよちゃんを守ってくれてありがとうございました！でも私たちのためにお兄さんのお金が……。」

「そうだ幸雄。いくらこの子らを守るためとはいえ、二万円もの大金を……。」

「ににににに、二万円!?!?そんな大金を……!?!?どうしよう、あつ、これ全然足りませんが……。」

「かよちゃん、いいの!?!?それ今日発売のA—R—I—S—EのCDを買うために貯めてたお金でしよ!?!?」

「でもお返ししないと……!?!?」

「ああ、その必要はないよ。」

「へ?」

「で、でも……。」

幸雄の一言に凜と花陽は困惑するが、それを気にも留めずに幸雄は話を続ける。

「どういうことだ?」

「いやいや、俺があんなドグされ野郎どもに二万円もの大金なんて払うかよ。ありや二セもんや。」

「ニセもん……？お前ニセ札を持ってたのか！」

「流石にそんな犯罪に片足突っ込むような真似するわけないじゃん！ありや子供銀行券や。」

「こ、子供銀行券？」

「あのおもちやお札かにや？」

「そうそう、シヨートの嬢さんご明察！奴らにはおもちやをくれてやったわけさ。」

「よくばれなかつたな……。」

「まあ、数字が書いてある部分しか見せてないからね。頭の弱いアホしか引つかからな
いと思つてたが、見事にかかつてくれたみたいだな。」

「失敗したらどうするつもりだったんだよ……。」

「それはその時考えるさ。」

「ええ……。」

「まあ、そんなわけで君たちはそんな気を使う必要はないってこと。だからその金は自
分のために使いな。」

「はい……！ありがとうございます！あ、私小泉花陽つて言います……。」

「星空凛です！」

「俺は武藤幸雄だ。こちらこそよろしくな。」

「諏訪部志郎だ。よろしく。」

「あつ、かよちんそろそろ行かないとCD売り切れちゃうよ?」

「えつ? あつ! すいません! 私たちは用事があるのでこれで失礼します!」

「今度はあんなのに捕まるなよ。」

「何とか一件落着だな。ていうか子供銀行券なんてよく持っていたな。」

「ああ、カツアゲ対策でダミーの財布と一緒に持ち歩いていな・・・。」

「用意周到な奴め・・・。」

「志郎の方こそ後先考えずに突っ込むじゃねえか。」

「うぐう・・・。気を付けるようにしてるんだが、すまんな。」

「いやいや、果断に富むのもあんたのいいところだ。本当に昔と変わらないな。」

「ん? ちよつと待て、昔だと? お前とはこの前初めて会ったばかりじゃないか。」

「そうだな。『幸雄』と『志郎』の初対面はあの時だな。しかしあんた、いや・・・、あなたなら気づくと思っていたのですがまさか今の今まで気づかれていなかったとは、私もなかなかうまく馴染めたということでしょうな。」

「この口ぶり・・・、貴様何者だ・・・?」

先ほどまでの飄々とした態度から一変して慇懃な口ぶりで話し始めた幸雄に志郎はとある確信を抱きながらも問いかける。

「幸雄、お前ももしかして俺と．．．いや、わしと『同じ』なのか？」

幸雄は志郎の問いにニヤリと笑い、そして跪いて答えた。

「お久しゆうございます、『四郎』さま。いや．．．武田四郎勝頼様。それがしは真田安房守昌幸でございます。四百と数十年ぶりにお目にかかることができ、恐悦至極にございます．．．！」

「昌幸．．．。久しぶりだな．．．。まさかお主もこの時代に生まれ変わっていたとは．．．！わしもうれしいぞ．．．！」

武藤幸雄、その正体はかつて武田信玄と勝頼の二代に仕え、武田家の滅亡後は織田、北条、徳川、上杉、豊臣と次々と主家を変え、変幻自在の策を以て徳川の大军を二度にわたって翻弄し徳川家康に恐れられた『表裏比興の者』、真田昌幸が現代に再び生まれ変わった姿だったのだ。

「勝頼様。積もる話もたくさんありますがひとまずここを早急に離れましょう。」

「なぜだ？」

「先ほどの連中もそろそろ金が偽物だったと気づく頃でしょう。さすれば我らを血眼になって探しているはず．．．。とにかく話は場所を変えてからにしましょう。」

「なるほど、確かにそうだな。」

そして志郎と幸雄は路地裏から立ち去って行った。

それからしばらく経って公園にて……。

「しかしお前はすごいな昌幸。織田、上杉、徳川、北条に囲まれながら生き延びただけでなく大名になったのだからな。しかもあの家康を二度にわたってコテンパンにしたというのは痛快だな！」

「ははは……。それがしもあそこまで行けたのは本当に天に助けられたものですから。一歩間違えば即滅亡だったわけでございますからな。」

「天の助けか。わしもあの時お主のいう通り岩櫃に行っておれば変わっていたかもしれないのにな。いや、過ぎたことを言ってもしょうがないのだがな。」

そう言つて勝頼は苦笑した。

「勝頼様……。」

「すまん、せつかくの再開の時に暗い話をしてしまったな。」

「いえいえ。お気になさる必要は……。」

「そうだ昌幸、お主少し口調が堅苦しいな。せつかく今は同じ年の学友なのだから少し口調を軽くしてみたらどうだ。」

「はっ……、そうおつしやるならお言葉に甘えさせてもらいます。」

「うむ。そういえばお主はこの時代を満喫しておるか？まあ、聞くまでもないと思うが……。」

「ええ、今の時代は面白うございますな。ただ人が昔よりだいぶ腑抜けたのは玉にキズですがな。」

「ははは。確かにそれは言えてるな。まあ、わしらは戦乱に生きていたのだ。泰平の世のど真ん中に生きている者にそう思ってしまうのも無理はない。」

「勝頼様はどうですか？」

「わしか。わしはそうだな……。わしは何より武田と諏訪の相容れぬ血の呪縛から解放されただけで十分心が晴れやかになったな。なんせもう父を超えることを強いられることなどないのだからな。おっと、また暗い話をしてしまったな。」

「それだけ勝頼様は重きを背負ってきたということでしょう。」

「そうか。それより今の話をしよう。音ノ木坂学院についてだが、どう思う？」

「学校自体は悪くはありませんな。校舎、設備、立地……。どれも問題ないしかし……。良くも悪くも普通すぎる……。か。」

「左様です。今の音ノ木には決定打が足りない。共学化も悪くないがあれもその場しのぎにすぎないでしょう。」

「そうだろうな。どうしたものか・・・。」

「いた！あいつらだ!!」

「見つけたぞ!!よくもおもちやで騙してくれやがったなコルア!」

なんと先ほどのナンパ男たちがやつてきた。まさに怒髪天を衝くといった様子だったが志郎と幸雄は動揺は見せず、むしろその態度は余裕に満ちていた。

それもそのはずである。彼らは今こそただの高校生だが、中身は数多くの戦を経験した乱世の英雄なのだから二人のナンパ男がいくら凄もうがそれは子供の癩癩にしか見えなかった。

「どうする?悪目立ちは避けた方がいいと言ったのはお主だぞ?」

「まあ、この場には俺たち4人しかいませんし平気でしょう。しかし・・・。」

「わかつてる。短期決戦だろう?」

「流石は『志郎』、物分かりが早くて助かる。」

「てめえらさつきからなにごちやごちや話してんだよ!死ねやオラア!!!」

「あまりにも単純すぎて欠伸が出るわい。」

ナンパ男の一人は幸雄に殴りかかるが、幸雄はそれをあつさりとかわし、腕を掴んで

見事な一本背負いを決めた。

「ほう、『幸雄』もなかなかやるな。」

「よそ見してんじやねえぞマヌケェ!!」

もう一人のナンパ男が志郎に回し蹴りを入れるが

「お前の蹴りなんぞ見なくても防げるわ。」

そう言つて足を掴み、もう片方の足に足払いをかけて倒れたところを腹のど真ん中に肘の一撃をぶち込んだ。

「まあこんなもんか。」

二人のナンパ男は二人の一撃をくらいあつさり気絶してしまった。

「全く今どきの者は弱いもんだな。」

「いや、流石にエルボードロップはえげつなさすぎでしょう……。」

物足りない様子の志郎とそれをドン引きしながらたしなめる幸雄は何事もなかったかのように公園を去った。

志郎と幸雄。武田勝頼と真田昌幸の生まれ変わりである二人の男は、これから音ノ木坂学院でどのように過ごしていくのか、そして二人は廃校を阻止するためにどのような動きを見せるのか……。それはまだ誰も知らない。

5話 若虎の決意

「いやあ……、今日も日本は平和だねえ……。」

「そうだな……。」

音ノ木坂学院に志郎と幸雄が転入してからかれこれ一週間近くが過ぎたころ、二人は特に何も起こらない日常を謳歌していた。

「平和なのはいいが、こうも何もない状態が続くと少し退屈じゃねえか?」

「分かんなくてもないが、こういうのも悪くないだろう。」

「でも何かしらのサプライズとかハプニングが起きてほしいものだよな! ははは……。」

そう言つて幸雄は笑つた。この時まで二人はそんな他愛ないことを話していたが、これから少し先に悠長なことを言つていられなくなるような現実に直面するのであつた……。

数十分後……。

「おいおい……いくらなんでも急展開すぎんだろ。なんだよ廃校決定って……」
「まあ、廃校は早くても三年後だ。俺たちがそこまで慌てる必要は……」

全校集会で、理事長の口より音ノ木坂学院の廃校について全校生徒に告げられていたのである。もちろん生徒たちも薄々そうなるのではと察していた者もいるし、みんながみんな知らないわけではなかったが、いざ理事長から直々に伝えられるとなると生徒たちにも不安が伝播していく。編入生であり新参者である志郎と幸雄も例外ではなかった。

「そもそもこうなってしまった以上、俺たちの存在意義がなくなってしまったようなものだしな。」

「ああ、そういうや俺たちは共学化に向けた研究生って立場だったんだっけか。確かにこうなると共学化もおじやんで俺らは用無しか。」

「流石に追い出される事はないが、役目がなくなると少し寂しくなるものだな。」

「まあ、うだうだ言っても仕方ねえよ。残りの二年間を謳歌するしか俺たちの役目はねえってこった。気楽に行こうぜ。」

二人で話しながら廊下を歩いていると掲示板の前にちよつとした人だかりが出来ていた。

「んだありや。」

「何が起きたんだろう。」

二人がその人だかりに寄ってみると、なんと彼らのクラスメートの高坂穂乃果が倒れていたのだった。

「どういう状況なんだ……。」

「あ、志郎くん。幸雄くん。穂乃果ちゃんが倒れちゃって……!」

「運ぶのを手伝っていただけませんか?」

「ああ、手伝おう。幸雄も頼む。」

「じゃあねえな。」

こうして四人で穂乃果を保健室へ連れて行ったのだった。

そして次の休み時間……。

「お、帰ってきたか。」

「穂乃果ちゃん、大丈夫……?」

穂乃果はこの世の終わりを見たかのような顔をしながら自分の席に座った。

「しっかしすげえ落ち込みっぷりだな。まさかあの穂乃果がここまで落ち込むとはな。」

「ああ、よっぽどこの学校が……。」

「違いますよ二人とも。穂乃果は多分勘違いをしています。」

「勘違い?」

そういつて海未が幸雄と志郎に語り掛けた瞬間……。

「どおとおおしよおおお!!全然勉強してないよお!!」

「は?」

「だって廃校になったら別の学校に入らなくちゃいけないでしょ!?!受験とか編入試験とか……!」

「たしかにこりや勘違いしてますわ。」

「だな。」

「志郎さんと幸雄くんはともかく海未ちゃんところりちゃんはそこそこ成績いいじゃん!!」

「おい今さりげなくすごい失礼なこと言ったぞこいつ。」

「少なくともこいつにだきやあ言われたくなかったな。」

志郎と幸雄が穂乃果の発言に対して抗議するが、それに割って入る形で海未は穂乃果を諭す。

「とにかく落ち着いてください。私たちが卒業するまで学校はなくなりません!」

「……え?」

そして時は過ぎて昼休み。五人は中庭で昼食をとっていた。

「いやあ、今日もパンが美味い!!」

「穂乃果、太りますよ。」

おいしそうにランチ○ツクのパンを食べる穂乃果を見て志郎と幸雄は、

「しかし、誤解を解いてから清々しいくらいの開き直りっぷりだな。」

「ああ、穂乃果の手首はドリルにでもなってるんじゃないのか?」

幸雄は穂乃果の態度の急変っぷりを皮肉るが、

「え? 私の手は普通だよ?」

「お前の皮肉も通じないとはな。」

「煽り耐性が低いんだか高いんだか……。ある意味これも才能か。」

皮肉にすら気づかない穂乃果の純真さ（または鈍感さ）に幸雄は苦笑するしかなかった。

「冗談はさておき、廃校が正式に決まるとなると一年生の募集がなくなるんだよな。」

「つまり来年は二年と三年だけになって、再来年は今の一年生だけになるってわけだな。」

「後輩が全くいないっていうのはなんだかわいそうだな……。」

五人の雰囲気は暗くなってきたところに、二人の少女が現れた。片方は金髪をポニー

テールに結った碧眼の少女で、もう片方は紫がかった髪をしている少女だった。

(希先輩……?すると隣の人は……)

(誰……?)

(生徒会長ですよ。)

流石の穂乃果も大声は出さずに小声で海未に問いかけた。

「ちよつといい?南さん、あなた理事長の娘よね。理事長は何か言っていなかった?」

「いえ、私も今日知ったばかりなので……」

「そう、ありがとう。」

「ほなあ。」

二人が去ろうとしたところに穂乃果が二人に話しかけた。

「あのっ!」

「なにかしら。」

「本当に学校はなくなっちゃうんですか?」

「……あなたが気にする事じゃないわ。」

そう言って絵里と希は去っていった。

放課後……

「かあーっ！あん時の生徒会長の言い草、気に入らねえなあ！厳肅そんな奴だとは思ってたが、あれじゃあただの偏屈じゃねえか！」

「おい、あまりそういうことは言うなよ幸雄。生徒会長だつて何かしらの考えはあるんだらうし……。」

「ふん、考えるだけで解決するなら苦労せんわ。それよりもお前もお前だ！」

「え？俺がどうかしたのか？」

「俺の目は誤魔化せねえぞ志郎。さっき副会長が去り際にお前に向かつてウインクしたの、あの三人組は気づかなかつたみたいだがどういうことだ？」

「さすがは『信玄の炯眼』とよばれた男、今もその目敏さは健在つてわけか。」

「さあ、話してもらおうか。」

そう言つて幸雄は志郎ににじり寄る。

「副会長とは始業式の日知り合つたんだ。神田明神に行つたら出くわしたんだよ。」

「なぜそれを早く教えてくれなかつたんだよ志郎おお!!あんなボインボインなパイ乙でナイスバディな人と知り合つてたなんて羨ましますぞ勝頼さまああ!!」

「口調が戻つてるぞ昌幸。別にあれ以来これといつて付き合ひがあるわけじゃないからな。お前が考へてるようなことは一切してないからな。」

「なんだ、つまんね。」

「つまんねって……。」

「いや、生徒会の、それも副会長と繋がりがあつたらそれなりに色々な動きが採れると思つたんだが、会長があれだしなあ……。」

「幸雄だつて生徒会に学年主任の先生に誘われてたろ。知つてるんだぜ。」

「なんだ知られてたか。確かに誘われたが本格的に所属してゐるわけじゃねえつて。仮所属さ。」

「仮所属？」

「そう、仮入部みたいなもんさ。ちよつと雑用するだけの簡単なお仕事よ。正式に入るかどうかは後で決める。」

「なるほど、お前にしては珍しいな。お前ならどちらかという裏で暗躍するのが得意で表舞台にはあまり立たないと思つてたのだから。」

「本当の策士というのは表裏を選ぶものではありませんからな。」

次第に二人の口調は『志郎』と『幸雄』のものから『勝頼』と『昌幸』のものに戻つてきていた。互いに熱が入り始めているのだろう。

「それで、勝頼さまは如何なさるおつもりで？」

「お前こそどうするのだ？」

「わしは勝頼さまと共に動くまで……。」

「お前というやつは……。わしとしてもこのまま座して待つというのも性に合わんからな。わしも何かしらの手を打ちたいところだが、音ノ木坂学院に生徒を集めるための旨みがなさすぎる。」

「我らの時代ならば、伝統があるというだけでもそれなりに人は集まるのでしようが……。伝統を重んじる者が少ない現代ではどうにもなりませんな。」

「うむ……。打つ手なしか。」

「まあ、わしらはただの研究生。そこまで積極的に動く必要もありませんが……。」

「いや、わしは動くぞ。否、わしだからこそ動かねばならんのだ。」

「それはどういった見で？まさか、ただ彼女らに絆されたというものではないでしょうな？」

幸雄は訝しげに志郎に問いかける。その眼光はもはや高校生の者ではなく、冷酷な策士のそれだった。

「ああ、それもある。それもあるのだが、わしは音ノ木坂学院の者たちとかつての自分が重なって見えたのだ」

「自分と？どういふことでございますか？」

「音ノ木坂学院が廃校するかもしれないという噂は前からあっただろう？しかし誰もどうすることは出来なかった。策もなくただ手をこまねくしかなかった。わしはそれ

責めぬ。わしだつて最期は手詰まりだつたのだ。」

「なるほど。」

「それに、現代の学生には母校というのは特別なものなのだ。お主らが父上を、武田信玄を慕っていたようにな。廃校になればその特別なものは消えてなくなってしまう。先ほどの穂乃果達の表情を見れば分かるだろう。お主も父上によつて取り立てられたのだ。思い当りが無いわけではないだろう。」

「むむ……。分からぬわけではございませぬ……。」

「家臣の者がわしを何かにつけて父上と比べていたのも父上を失つて心の拠り所が無くなつてしまつたからであらう。故にそうやつて『御屋形様ならこうした』、『御屋形様が生きていれば……。』と言つて過去に縋るしかなかつた……。」

「勝頼さま……。」

「まあ、これはわしの憶測でしかないのだがな。とにかくわしはな、そのような思いを音ノ木坂の者たちにさせたくないのだ。そういう後ろ向きな思いで『音ノ木坂学院は良かった』とは言わせないようにするのがわしの願いだ。そのためなら全力を尽くすし、策がある者がいれば全力で支えよう。」

そう言つた志郎の顔は寂しげではあつたが、堂々としていた。幸雄は、そんな志郎の顔にかつて見た顔を重ねていた。

(勝頼さまのこの顔……。まるで……。)

「勝頼さま……。」

「どうした昌幸。」

「やはりあなたは御屋形様……。いいえ信玄公の跡を継ぐにふさわしい将だったのですな。」

「どうしたいきなり。もうわしはただの高校生の諏訪部志郎だ。お主も真田昌幸ではなく、ただの武藤幸雄だろう。」

「はは。そうでしたな。わしらはもう武士ではなくただの高校生でしたな。この昌幸改め幸雄、あなたのお考えに感服しました！わしもあなた同様に全力を尽くしましょうー！」

「そうか、共にこの学院を救ってみせよう！」

「はっ!!」

こうして決意を新たに志郎と幸雄は音ノ木坂学院廃校を阻止するためのための策を練るが、突拍子もない策がある少女が持つてくることをまだ二人は知らない。

6話 女神の胎動

「見て見て見て見て!!」

音ノ木坂学院の二年生、高坂穂乃果は教室に入るや否や先に来ていた幼馴染の南ことりと園田海未、そして最近友人となった諏訪部志郎と武藤幸雄が話してるところに割り込み、机の上にあるものを広げた。

「え？」

幼馴染の二名は困惑し、

「これは……。」

「スクールアイドルの雑誌じゃねえか。どうしたんだいきなり。」

男二人は疑問を抱いた。

「アイドルだよアイドル！」

「いや見りゃ分かるがなぞ」

「こっちは大阪なので、これは福岡のスクールアイドルなんだって！最近スクールアイドルは人気でどんどん増えているみたいで、スクールアイドルのいる学校は入学希望者はどんどん増えているんだって!!」

「いやだからなせ」

「それで私考えたんだけど・・・、ってあれ？海未ちゃんは？」

志郎の問いもどこ吹く風とばかりにスクールアイドルについて話す穂乃果だったが、いつの間にやら海未の姿が忽然と消えることに気が付いた。

「あいつなら廊下に行ったべよ。」

幸雄がそう言うや否や穂乃果は廊下に向かつて走っていき、こどりは穂乃果を追っていった。

「海未ちゃん！まだ話は終わってないよ!!」

「わっ、私は用事が・・・、」

「いい方法を思いついたから聞いてよおお!!」

廊下に追ってきてきてまで食い下がってくる穂乃果に海未はため息をつきながら、「私たちがスクールアイドルを始めよう、だなんて言い出すつもりでしょう?」

「うっ海未ちゃんエスパー!?!」

自らの思惑を見破られた穂乃果は驚いた。

「いや、話を聞いてれば誰でも察しがつくと思うが・・・。」

「よっほど頭のキレが悪くなければの話だね。」

遅れて出てきた志郎と幸雄がツツコミを入れる。

「なら話は早い、それならさっそくアイドル部を!!」

「お断りします。」

「なんでえ!？」

(廊下に逃げた時点で察しろよ……。)

志郎と幸雄は喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「だつてこんなにかわいいんだよ!?!こんな服滅多に着られないよ!？」

雑誌を見せながら穂乃果はさらに食い下がろうとするが、

「そんな事で本当に生徒が集まると思いますか!?!その雑誌のアイドルだつてプロと同じような努力をしてここまで来たんですよ!!穂乃果みたいに好奇心だけで始めても上手くいくはずがないでしょう!!」

「うっ……。」

「おお、海未選手さつきと打つて変わつて攻勢に出たぞ……!」

「茶化する幸雄。下手すりゃ巻き込まれかねん。」

「あはは……。」

ぶつかり合う幼馴染たちと、それを見て実況してる新しい友人二名を見ていることりはただ苦笑するしかなかった。

「はつきり言います。アイドルは無しです!!」

海未ははつきりと穂乃果の提案を切り捨てた。

時は変わって昼休み。志郎と幸雄は廊下を歩いていった。

「なあ幸雄。さっきの穂乃果の提案、どう思ってる?」

「あれか? うーん。悪い話ではないと思うがね。まあ、出来るならの話でもあるが。志郎はどう思うよ。」

「俺も悪くない案だとは思ってる。スクールアイドルを作ってその人気を利用して集める……。それなら名物に欠ける音ノ木坂学院でも何とかなる。だが……。」

「まあ、言い出しつぺのあいづがあれじゃあ望み薄だわな。」

「ああ、彼女には悪いんだがな……。」

「いい案つてのは簡単に見つからんもんだねーつと。……ん?」

「どうした幸雄。ん? 音楽が聞こえる……。」

廊下を歩いていると、どこからか音楽が聞こえてきたので二人は音楽が聞こえてくる方に向かって歩いて行った。

「……は音楽室か。」

「中で誰か歌ってるな……。」

中を覗いてみると、赤い髪の少女がピアノを弾きながら歌を歌っていた。

「歌声……、結構澄んでてきれいだな。」

「ああ、しかしあの歌聞いたことねえな。かなりマイナーな歌手の歌かね……。」

「そこに誰かいるんでしょう？入ってきてもいいわよ。」

（うげっバレた……？）

（みたいだな。）

そう二人で小声で話し、覚悟を決めて音楽室の扉を開いた。

「いやあ、すまんね邪魔しちゃって。」

「歩いていたら君の歌が聞こえてきてな。つい立ち聞きしてしまった。」

「あなた達、確か研究生の先輩よね？」

「俺たちを知ってるのか。」

「そりや音ノ木坂にいる男なんて一部の先生かあなた達くらいしかいないじゃない。」

「んまあ、そりやそうだな。あ、一つ言わせてもらおうと先輩には敬語で話した方がいいぜ？俺たちは、んなことは気にしないタイプだが他の人だったら雷落とされても文句は言えねえぜ……？」

そう言つて幸雄は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「ヴえっ……、すいません。」

「謝る必要はないさ。こいつはこんな奴だからな、楽な話し方で話してくれ。そうしてもらえると助かる。」

「そ、そう?ならこのままでいくけど。」

「いやあそれにしても君つてすごく歌上手いねえ、ピアノも上手だし。将来はピアノストになれるんじゃないかね?」

「べつに、そんな大層なもんじゃないわよ。ただ好きでやってるだけ。それに……。」「それに?」

「ううん。なんでもないわ。先輩たちこそなんか用でもあるの?そっちの人は何か言いただげだけど。」

「ありや、分かつちまったか。実はスクールアイドルをやってくれそうな娘を……。」「お断りします。」

「即答かよ!?まだ前ふりしか言つてねえんだけど!」

「はあ……。さつきも女子の先輩から似たようなことを言われたのよ。もしかしてあなた達の知り合い?」

「少し聞いてもいいか?そいつはどんな感じの奴だった?」

「どんな感じつて……。茶髪のサイドテールで……。あとやたらうるさい人だったわよ。」

(幸雄、これは……)

(ああ、間違いねえ。穂乃果の奴先走りやがったな。)

「で？その人がどうかしたの？」

「ああ、そいつは知り合いでな。」

「その、なんだ。いきなり勧誘して悪かったな。あいつには後でお灸をすえとくからよ。邪魔したな。」

そう言つて幸雄は音楽室から出て、志郎がそれに続いたが、少女は二人を引き留めた。
「まって！」

「どした？まだ何か？」

「まだ名乗つてなかつたわ。私は1年の西木野真姫。あなた達は？」

「武藤幸雄。まあ、縁があつたらまた会おうや。」

「諏訪部志郎だ。いきなり邪魔してすまなかつたな。じゃあ。」

そして二人は音楽室の扉を閉めて去つていった。

「武藤先輩に諏訪部先輩……。覚えといへも損はなさそうね。」

「おい幸雄。お前があんなにすんなり引くなんてらしくないな。何か策でもあるのか。」

「ない。いや、正確に言えば潰されたと言ふべきかねえ。」

「潰された？」

「ああ、正直穂乃果の奴が先に目を付けていたのは計算外だった。本当ならあそこで煽てたり色々やって引き込もうとしたんだが……。」

「あいつが先に勧誘して手ひどく断られたみたいだな。」

「それともう一つ。あの娘はそういうおべっかとかは通用しないっぽいつてのもあるからなあ。」

「あの歌声はいいと思うんだがなあ……。」

「ああ、俺としてもこのまま引き下がるのは癪だからな。なんとしてでも引き入れてやるさ。それには新しい手を考えなくてはな……。」

「幸雄……。あまり邪道な手は使うなよ？」

そして放課後……。志郎は借りた本を図書館に返しに行っていた。

「幸雄の奴、今日は用事があるって言ってたな。生徒会にでも行つとるんかね。」

「おーい、志郎くん！」

本を返し終わり、げた箱から出て帰ろうとしたところでことりが志郎に駆け寄ってきた。

「おう、ことりか。どうしたんだ？」

「ねえ、志郎くん。このあとちよつと時間あるかな？」

「ああ、別に構わんがほかの二人はどうした？」

志郎が尋ねると、

「それは秘密。今から海未ちゃんも呼びに行くところなの。」
といつて微笑んだ。

二人が弓道場に着いて中を覗いてみると、なんと海未がへたり込んでいた。よく見てみると、海未の射た矢はどれもから大きく外れていた。

「どういう状況だよ……。あいつがあんなに外すなんて。」

一度海未の練習を見学した志郎にとつてはとても異様な光景に見えたが、それに構わずこころは、

「海未ちゃん。ちよつと来てー。」

と、海未を呼んだ。

「志郎には恥ずかしいところを見せてしまいましたね。」

「別に気にする事はないさ。誰しも不調なときはあるさ。」

「ありがとうございます。全く、穂乃果が悪いんです。あんなことを言うものだから全然練習に集中できません。」

「でもさ、それって少しはアイドルに興味を持ったってことだよな？」
「うっ。そ、それは……。」

（なるほど、そういうことか。今の話から察するに、海未は自分がアイドルになった姿を想像してしまつて悶えていたというところか。海未、この場に幸雄がいなくてよかつたな。いたら確実にそれをネタに弄りまわされてただろうからな……。）

「でも、本当にうまくいくとはとても思えません。」

「でも、こういう時っていつも穂乃果ちゃんが言い出してたよね。」

「そうなのか？ いや、大体想像はつくが……。」

「うん。私たちがまだ小さかったところに、大きな木に登ってみよう！ って穂乃果ちゃんが言い出した事があるの。私と海未ちゃんは無理だよって言つても穂乃果ちゃんは大丈夫だよって言つてどんどん登つていくから私たちも付いていくしかなかったんだよね。」

「ははは、目に浮かぶなあ。で、それでどうなつたんだ？」

「何とか登り切つたけど、乗つてる枝が折れちゃつて穂乃果ちゃんは上の枝に飛びついたけど、私たちは木の幹に掴まって滑り落ちそうになつちやつたんだ。」

「それって一つ間違えたら大ごとになつてただろうに……。」

「でもね、そこから見えた夕日がとてもきれいだつたの。穂乃果ちゃんは私たちがしり

込みしちゃうところを引つ張つてくれて、見たことのない場所に連れてつてくれるんだ
!」

「まあ、そのせいで散々な目にあうことも多かったですかね。穂乃果は強引すぎるんです。
す。」

「そうは言うが、悪くはないって顔をしてるぞ。」

「なっ!? そ、そんなこと私は言ってますよ!」

「だが、後悔したことはないんだろうな。きつと。」

「それは……。」

海未の目には、幼い頃に三人で木の上で見た夕日がまだ鮮明に浮かび上がっていた。

「着いたよ。二人とも、見て。」

こつとりが志郎と海未に見るように促した先には、

「ほっ、ほっ、ほっ……。うわあっ!! いったーい……。! やっぱ難しいなあ。みんなよ
くできるなあ。よし、もう一回やってみよう。」

何度も転びながら、めげる事無くステップの練習をしている穂乃果がいた。

「ねえ海未ちゃん、志郎くん。わたし、やってみようと思うんだ。海未ちゃんは どうする
?」

「私は……。」

「うわわわ！あいたたたた．．．。ってあれ、海未ちゃん？」

穂乃果がまたバランスを崩して転んだところに海未が駆け寄り、穂乃果に手を差し伸べていた。

「二人で練習をやっても意味がありませんよ。やるなら三人でやらないと。」

「海未ちゃん．．．！」

それを見ていた志郎は、そんな二人の姿を見てあることを感じていた。

（穂乃果は決して優秀な人物とは思えない。だがこうやって人を惹きつけ、ついていきたいと思わせる才が、カリスマがある．．．。父上のそれとは形こそ違えど、これもまた人を導き、高みへと上り詰めることが出来る、俺が持つことのできなかった才．．．。ならば俺のやることは．．．！）

「待てよ。三人じゃなくて、四人だろ？」

「え？」

海未とことりは志郎の言った事が一瞬理解できなかったのか戸惑っていたが穂乃果は、

「志郎くんもスクールアイドルをやりたいの!?!男子のスクールアイドルは予想外だったなあ．．．！」

「違う！そうじゃない！俺はお前たちの手伝い、つまりサポートをするって言ったんだ。」

まあ、歌もダンスもてんで素人だが出来ることならなんでもするぜ！」

「おお！ありがとう志郎くん！」

こうして、穂乃果達のスクールアイドルとしての活動が始まる、と思われたが・・・。

「失礼します！」

穂乃果達三人と志郎はアイドル部を設立するために部活設立申請書を持って生徒会室に来た。

「お、どうしたんだお前らいきなり。しかも志郎も一緒か。」

「あれ？幸雄くん生徒会室で何してるの？」

そう、生徒会室には生徒会長の絢瀬絵里と副会長の東條希だけでなく、幸雄の姿もあつたのだ。

「あ？見ての通り仕事好き。仮所属ではあるが俺も生徒会の一員でね。」

「そうなんだー。あ、そうだ！生徒会長、これを！」

穂乃果は申請書を絵里に渡した。

「これは？」

「アイドル部設立の申請書です！」

「それは見ればわかります。」

「では、認めていただけますね？」

「いいえ、部活は同好会でも最低でも5人の部員が必要なの」

「しかし、校内の部活動では5人以下のところがたくさんあると聞いています。」

「設立した当時は部員が5人以上いたはずよ。」

「となると、あと一人必要やね。」

希は笑いながらそう言ったが、

「いいえ、俺も彼女らと同じ一員ですが、あくまでもマネージャーに徹します。よってそういうことになるかとあと二人必要になります。」

志郎はそう反論した。

「あと二人……。分かりました。行こうみんな。」

穂乃果は海未達を促して出ていこうとした時、

「待ちなさい。どうしてこんな時期にアイドル部を始めるの？あなた達2年生でしょ？」

「廃校なんとしても阻止したくて。スクールアイドルって今凄い人気になっているんです。だから……。」

「だったら、例えば5人集めてきても認めることができないわね」

絵里は即座に穂乃果の提案を否定した。

「どうして?」

「部活動は生徒を集めるためにやるものじゃない。思い付きで行動したところで状況は変えられないわ。変なことを考えてないで、残りの2年に自分のために何をすべきかを考えるべきよ。」

そういつて絵里は穂乃果達に申請書を突き返した。

この時、志郎の心中は穏やかなものではなかった。せつかく穂乃果達が一生懸命考えたことを「変な事」と言い捨てたことに志郎は激しく憤っていた。だが、ここで怒りを露わにすれば彼女たちの思いはまさに無駄なものになってしまう。それに、絵里のことにも一理あるとも考えており、その二つの思いが彼の中でせめぎ合っていたのだ。

「さっきの言葉、誰かさんに言い聞かせてあげたいセリフやったなあ。」

穂乃果達が去ったあと、生徒会室で希は絵里に向かっていった。

「え? さっきのあのセリフ、生徒会長と関係があるんすか?」

幸雄はにやけながら希に尋ねた。

「希! まったく……一言多いのよ。」

「……。さーてと、じゃあ俺は先に失礼しますわ。」

「ちよつと武藤くん!?まだ帰つていいなんて・・・。」

「仕事ならあいつらが帰る前に終わらせちやいましたよ。そんな事より、あんな面白そうなことを却下するなんて、生徒会長も人が悪い。」

「面白半分で余計なことをしてほしくないからよ。」

「別にきつかけなんてそんなもんでしよう。彼女たちの目を見たところ、本気に見えませんでしたし。」

「あなたに何が分かるの?」

絵里は幸雄に訝し気に問いかける。

「俺は人を見る目には自信があるんすよ。『どこかの誰かさん』とは違つてね。言うなれば『炯眼』つてやつですかね?」

「あなたねえ・・・!!」

煽られた絵里は言葉尻に怒りをにじませるが、

「理屈をあれこれこねて何にも動きがとれないよりも、あいつ等みたいに勢い任せに動いた方が光明が差す場合もあるんですよ。正論であれば良いつてもんじゃあないんですよ、会長。」

「うっ・・・!!」

そう語る幸雄の目はあまりにも鋭くて冷たく、絵里でさえもたじろぐほどであった。

「んじゃあ、俺はこの辺で失礼しまーす！」

幸雄はそういつて、生徒会室から出て行った。

「なんなのよあいつ……。」

「これは随分な曲者が来ちやつたみたいやね。でも、ゆつきーくんのいうことも一理あると思うで？えりち。」

「それは分かるけど……。」

絵里はただ窓の外を見ることしかできなかつた。

場所は変わり、校舎前。穂乃果達は失意の中、桜並木の道を歩いていた。

「がっかりしないで穂乃果ちゃん。穂乃果ちゃんが悪いわけじゃないんだから。」

そういつてことりは穂乃果を励ました。

「生徒会長だつて気持ちにはわかつてくれていると思います。でも、部活として認められなければ講堂も使えないですし部室もありません。」

「そうだね。ああ、これからいつたいどうすれば……。」

「どうすればいいのでしょうか……。」

二人は深刻に悩んでいたが、

「このままやめてしまうのか？」

志郎は唐突に呟いた。

「このまま認められないからと言ってやめてしまうのか？ お前たちの想いとやらはその程度なのか？ 認められないならば認めさせてやればいい。あの生徒会長を見返してやればいい。そもそも俺たちはまだスタート地点にも立ってすらいないが、それなら立つために、そして立つた後も走り出せるように頑張ればいい。」

「そんなことは……。」

海末は無茶だともいえる志郎の言葉に反論するが、

「武の道を進むお前なら分かるはずだ。何事も頭で考えるだけでは始まらない……、動かねば始まらないことを……！」

そう志郎が言葉を返す。志郎は穂乃果の方を見て、

「お前は どうする？ このままやめるか、進んで死中に活を見出すか。すべては言い出しつぺのお前次第だ。」

「私……、やっぱりやるよ！ やるつたらやる!!」

「その言葉を待っていい」

「やっぱりお前さんならそう言うよな。」

後ろから幸雄が現れた。

「幸雄（くん）!?!」

「生徒会の仕事があつたのではないのですか?」

「ああ、あんなもん俺の手にかかればチャチャつと終わっちゃうよ。そんな事より俺も協力するぜ?」

「でも幸雄くん、生徒会が……。」

「ああ、俺別に仮所属だし。それに会長がああ言ったからって従う義理はないしな。」

「いいのですか幸雄?」

海未は呆れながら幸雄に問うが、

「ああ、俺は面白そうなことは全力で楽しむ主義でね。というわけで、俺も志郎同様出来る限りのサポートをしてやるよ!」

「幸雄、お前……。」

「ありがとう幸雄くん! よーし……! 音ノ木坂学院のスクールアイドル、やってみせる

よ!」

「うん!」

「はい!」

「!」

こうして、穂乃果を中心とした音ノ木坂学院の廃校を阻止するためのスクールアイドル活動が、今幕を開ける!!

7話 ファーストライブを目指して

穂乃果達がスクールアイドルとして動き出すことを決意した翌日、志郎たち五人は生徒会室にあることの許可を貰うために来ていた。

「講堂の使用許可をいただきたいと思ひまして。」

穂乃果は講堂の使用許可申請書を絵里に差し出してそう言った。

「部活動に関係なく生徒は自由に講堂を使用できると生徒手帳に書いてありましたので。」

穂乃果に続いて海未が申請が正当なものであると主張する。

「新入生歓迎会の日の放課後やな。」

希は申請書をのぞき込んで言った。

「何をするつもり?」

「それは……。」

絵里に聞かれて海未は言葉に詰まったが、

「ライブです。三人でスクールアイドルを結成したので、その初ライブを講堂でやることにしたんです!」

穂乃果は自分たちの目的を絵里と希に堂々と話した。

「穂乃果！」

「ま、まだできるかどうかは分からないよ……？」

「えー!?やるよー！」

「待つてください！まだステージに立つとは……。」

「お前ら……、ちゃんと踏ん切り付けてから交渉しろとあれほど……。」

穂乃果達がい争いを始めたので、志郎は呆れながらも三人をたしなめた。

「できるの?その状態で。」

「えっ。だ、大丈夫です！」

「新入生歓迎会は遊びじゃないのよ。」

「三人は講堂の使用許可を取りに来たんやろ?部活でもないのに内容まで生徒会がとや

かく言う権利はないはずや。」

そう言つて希は穂乃果達に助け舟を出した。

「……失礼しました!!」

何とか行動の使用許可を得た穂乃果達は生徒会室を出ていった。穂乃果はまだ講堂

が使えるようになったただけだというのに大喜びだった。

「やれやれ、一時はどうなることかと思つたよ。」

「ええ、まさか副会長が助け舟を出してくださいさるなんて……。」

志郎と海未は安堵の表情を浮かべながら話していた。

「ふふふ、あらかじめに手を回しといて正解だったな。」

「ええ!? 幸雄くん、副会長さんとながつてたの!？」

幸雄の言葉に穂乃果は驚いたが、

「嘘だよ。流石にそんなことするわけないだろ。」

「ええ!? また幸雄くんに騙されたー!!」

なんとか最初の壁を乗り越えた五人は和気あいあいと話をしながら教室に戻っていった。

一方、穂乃果達が出て行つた後の生徒会室では……。

「どうしてあの子たちの味方をするの?」

絵里の問いに対して希は窓を開けて答えた。

「何度やつてもそうしろつて言うんや。」

「え?」

希の答えを不思議に思った絵里の目に、ふと机の上に置かれているタロットカードが目に入った。

「カードが、カードがうちにそう告げるんや!!」

そう答えた瞬間、いきなり強い風が生徒会室に吹き込んでタロットカードを吹き飛ばした。そしてその中の一枚が壁に張り付いた。

張り付いたカードは太陽の正位置を示していた・・・。

講堂の使用許可が下りてから、ことりは衣装のデザインを担当することになり、衣装のデザインを考えていた。

「うーん・・・。こんなもんかな!」

「うわあ、かわいい!!」

ことりは出来上がった衣装のデザインを穂乃果達に見せた。

「おお、見事なものだな。」

「ああ、そんじよそこらのものにも劣らねえな!」

志郎と幸雄もことりの描いたデザインを見て感嘆した。

「本当!?!海未ちゃんはどう思う?」

ことりは海未にも意見を求めるが、海未は少し狼狽えたように見えた。

「こ、ここのスーツと伸びているのは……。」

「足だよ。」

「素足にこの短いスカートつてことでしょうか？」

「アイドルだもん。」

そんなやり取りをした後、海未は自分の足を見ながらもぞもぞとし始めた。

（なあ、幸雄。ひよつとして海未は足の太さを気にしてるのか？）

（だろうなあ。別に気にするほどでもないとは思うんだがな。）

（女子つてのはそんなものだろう。それに、海未の性格からしてあの衣装を着ることに抵抗があるんだろうな。よく見ると露出度は少し高いし。）

そう志郎と幸雄は小声で話していたが、穂乃果が海未の顔を見上げるようにのぞき込んで、

「大丈夫だよ！海未ちゃん、そんなに足太くないよ！」

と言った。

「コイツ俺たちが言わないようにしてたことを堂々と言いやがった!!」

志郎と幸雄のツツコミが同時に炸裂した。流石は元主従（前世）と言うべきか。

「人のことを言えるのですか!!」

海未に反論された穂乃果は自分の足を触って少し考え込んでから、

「よし、ダイエツトだ！」

「二人とも大丈夫だと思っけど……。」

「そうそう、気にしすぎなんだよ女って。男からすればもう少し肉付きがゲフォア!!!」

「ことに続いて幸雄がフォローを入れるが、海未に正拳突きを鳩尾に叩き込まれた。

「う、うおお……。なぜだ、フォローを入れたのに……。」

「あなたのそれはフォローになってないしセクハラです!!」

「理不尽だ……。」

「あ、それはともかく他にも決めておかなきゃいけないことがたくさんあるよね。サインでしょ? 街を歩く時の変装の方法でしょ?」

「そんなの必要ありません!」

「それより……、グループの名前決めてないし……。」

「おお!」

完全に盲点だったのか、穂乃果と海未が感嘆した。

そして図書館に行つて五人でグループの名前のアイデアを出し合ったが、漫才師のよなものだったり、アイドルがつけるものとは思えないようなものしか出ず、結局は朝に穂乃果が張り出した告知ポスターの前にグループ名募集のための箱を置くという、まさかの丸投げともいえる策に出たのであった。

「しっかし、あんなんで大丈夫なのかねえ？」

「まあ、ずっと悩んでるよりはマシなんじゃないか？」

「でも、まさか俺たちの案がああも全力で否定されるとはねえ・・・。」

「ああ、採用されるか否かは半々だと思ってるんだが少しショックだな。」

「風林火山、悪くはないと思っただがな・・・。」

志郎と幸雄は揃ってため息をついた。実はこの二人、グループ名に『風林火山』を提案したのである。もちろん穂乃果達からの評価は散々なものであつさり否決されてしまった。

「それはともかく今は練習場所探しだよな。とは言ってもこれといった成果はないけどな。」

二人は今、穂乃果達三人と別れて練習場所を探していたが、あまり状況は芳しくはなかった。

「空き教室なんかはどれもカギがかかってて使えないしな。」

「なあ志郎、一か八かだがいい場所がある。」

何をひらめいたのか、突然幸雄が志郎に提案した。

「マジか！それはどこだ？」

「屋上さ。」

幸雄は真上を指さしながらそう言った。

「おお、ここは屋上に行けるんだな。」

「ああ、雨の日は使えんがその場しのぎにはなるだろう。」

屋上に来た志郎と幸雄が話していると、

「贅沢は言つてられないよね。」

「でも、ここなら音を気にしなくてすみそうだよね。」

穂乃果達が遅れてやってきた。

「お、ようやく来たか。」

「うん。遅くなっちゃった。よーし！頑張つて練習しなくちゃ！」

「その意気だな。」

「まずは歌の練習から！」

「はいー！」

「まずはお手並み拝見つてか。」

幸雄がそう言つてから三人は一言も言葉を発してなかつた。そのまましばらく、沈黙の時間が続いた。

「・・・曲は？」

ことりは苦笑しながら切り出した。

「私は知りませんが……。」

海未も苦笑しながらそれに答える。

「……私も。」

三人はそのまま沈黙してしまった。

「マジかよ……。」

「おいおい、大丈夫かこれ……。」

志郎は空を見上げ、幸雄は頭を抱えた。

「あら、いらつしやい。」

「こんばんは。」

「おじやましまーす。」

「あら、後ろの二人は？」

「最近転校してきた友人です。」

「諏訪部志郎です。」

「武藤幸雄です。」

「志郎くんは幸雄くんね。穂乃果がいつもお世話になってます。」

結局練習にはならなかったもので、穂乃果の家で方針を話し合おうということになった。志郎と幸雄は海未に穂乃果の家まで案内をしてもらった。

「そうだ、お団子食べる？」

「いえ、結構です。ダイエットをしてるので。穂乃果は？」

「上にいるわよ。」

三人が穂乃果の部屋に向かうと、

「三人ともお疲れさま。」

団子を食べている二人がいた。

「あなた達……。ダイエットは？」

海未がドスの聞いた声で二人に聞くと、

「ああっ!!」

「朝言つてた事を忘れてたのか……。」

「努力しようという気は無いようですね。」

「とうかまずはいいつらに広辞苑で努力という言葉を調べさせてから赤のマーカーで二重線ひかせたほうがいいだろ絶対……。」

志郎達三人は呆れかえった。

「それで曲の方はどうなりましたか？」

「おお、そうだ。そっちはどうなんだ。」

海未と幸雄が話を切り出して場の雰囲気を作切りなおした。

「うん！一年生にすつごく歌の上手い子がいるの！ピアノも上手できつと作曲もできるんじゃないかって。明日聞いてみようと思うんだ。」

「もし作曲してもらえらるなら、作詞は何とかなるよねってさつき話してたの。」

「ほう、まだ確実というわけではないがなんとかなりそうだな。」

「なんとか、ですか？」

穂乃果とことりの答えに海未は疑問を抱いた。

「海未の言う通りだ。作曲はともかく、作詞してくれる奴に心当たりがあるのか？」

幸雄は穂乃果とことりに訊ねた。すると二人は海未ににじり寄って期待の眼差しで海未を見つめた。

「ひょっとして海未、お前作詞したことがあるのか？」

「ありません！そ、そんなことよりなんですか二人とも!？」

志郎の問いに反論した海未に対して、穂乃果とことりにはにやけながら

「海未ちゃんさあ、中学の時ポエムとか書いたことあったよねえ・・・？」

「読ませてくれたこともあったよねえ。」

(あの海未が追い込まれてる・・・)

(ありやよつぼどの黒歴史なんだろうなあ．．．w。幼馴染って怖ええ．．．)

穂乃果とことりによる尋問(?)を受けた海未は逃走を図ろうとするが、数分の攻防の末、部屋に戻された。

「お断りします!!」

「ええ!なんでなんで?」

「ええ!」

「まあ、そうなるだろうよ。」

「いいじゃねえか大先生、ここはいつちよ先生の腕前を．．．」

「何か言いましたか?」

「アツハイ、何でもないです。」

幸雄は海未をおちよくったが、彼女の一睨みで一蹴されてしまった。

「当たり前です!中学の時のだつて思い出さたくないくらい恥ずかしいんですよ!」

(わかるぞ、海未。若気の至りでやったことつて後でかなり来るんだよな。俺も家督を継いでから長篠まで「最強武田軍は俺が引き継ぐ!」とか「俺が新しき虎となり、天下を掴み覇を唱える!」とかいってたからなあ．．．)

そう志郎は心の中で海未に同情していた。

「でも私．．．、衣装を作るので精いっぱいだし．．．」

「穂乃果がいるじゃないですか！」

「いやあ、私は……。」

『おまんじゅう。うぐいすだんご。もうあきた。』

「無理だと思わない？」

「それは……。」

「これはひどい。」

「いやー。さすがにこれはねえわ。俺達でももつと上手く出来るわ。」

穂乃果が小学生の頃に授業で書いたのであろう詩を見て志郎と幸雄はあきれ返って
いた。

「志郎と幸雄はどうなんですか？」

海未は志郎と幸雄に矛先を向けるが、

「すまん。作詞はやったことはなくてな。」

「短歌なら出来なくもないが……。」

「おい幸雄！」

「へえ！志郎くん幸雄くん、やってみせて！」

穂乃果は目を輝かせながら二人にせがんだ。

「しょうがないな……。じゃあ……。朧なる 月もほのかに 雲かすみ 晴れて行く

への 西の山の端。」

「大ていは 地に任せて 肌骨好し 紅粉を塗らず 自ら風流・・・つと。」

「おお・・・。全然意味わかんないけどすごい!!」

「まあ、作詞の役には立たんがね。やっぱり海未がやった方がいいんでねえか?」

「お願い、海未ちゃんしかいないの。」

「私たちも手伝うから、何か元になるようなものだけでも!!」

「海未ちゃん・・・。」

穂乃果がそう言うのと、ことりは急に自分の胸をつかんで目を潤ませた。

(何をする気なんだ・・・?)

するとことりは海未に向かってただ一言、

「おねがあい!!」

そう言い放った。ただそう表現すれば何のことはない、ただのおねだりだがことりの甘い声やその仕草が相乗効果を生んで驚異的な威力を生み出すのだ。

「ぐほっ・・・!なんだこれは・・・。こんな風に言われたら断れないぞ・・・!」

「ああ、『俺たちの時代』に生まれてたらあいつ、天下を掌握できるんじゃないやねえかあ
りや・・・。」

真正面から「おねだり攻撃」を受けてない志郎たちでさえこの有り様である。もし世

の男が真正面から食らおうものならどんな無茶ぶりでも二つ返事で了承してしまうであらう。

「もう……。ずるいですよことり……。」

海未でさえ撃沈させてしまうのだから恐ろしい。

「やった！ そう言ってくれると思っただんだ！」

「ただし、ライブまでの練習メニューは私と志郎が作ります。」

「練習メニュー？」

「はい、まずはこれを見てください。」

そう言つて海未はスクールアイドルの動画を穂乃果とことりに見せた。

「楽しそうに歌ってるようですがずっと動きっぱなしです。それでも息を切らさずに笑顔でいる。かなりの体力が必要です。」

「なるほど、確かにずっと笑顔で歌って踊るってのはかなりしんどいだろうな。」

幸雄は海未の言葉に同意してうなずく。

「穂乃果、腕立て伏せしてもらえますか？」

「え？ こう？」

「はい、それで笑顔を作つて。そのまま腕立てできますか？」

穂乃果は海未に言われたとおりに笑顔のまま腕立て伏せをするが、

「うっ……。あつ……。うわあ！ いったああ!! いたいいたいといううう
ああああ……。!」

一回もできなかつたうえに顔を打つてその痛みで悶えていた。

「弓道部で鍛えている私はともかく、穂乃果やことりは楽しく歌えるだけの体力をつけ
なくてはなりません。」

「そっか、アイドルって大変なんだね。」

「まあ、この世に楽な道は無いってこつたな。」

「笑顔で腕立てか、やってみると意外と簡単だな。けどいい鍛錬にはなりそうだな。」

ことりと幸雄が海末の言葉に納得したそばで、志郎は難なく笑顔で腕立て伏せをして
いた。

「志郎くんすごい!!」

「これくらいお前らも朝飯前って言えるくらいにはならないといかんぞ?」

「いや、お前のその身体能力とこいつらのを比べるなよ……。」

「とにかく、明日の朝に神田明神の男坂に来てくださいね。」

「はーしー!」

「了解。」

そして、次の日の朝。神田明神の男坂を駆け上がった4人の姿があった。

「はあ、はあ……。ひく、もうこれきついよお……。！」

「もう足が動かない……。！」

「つーか、なんで俺まで走らされてんだよ志郎……。！」

「なんでって、お前この前少し運動不足かなって言うてたろ。いい機会じゃないか。」

穂乃果、こころは立つことができなくなり、幸雄が息を切らしてる中でただ一人だけ志郎は余裕綽々だった。

「だからお前のその（初陣から城攻めをするたびに敵将と一騎打ちしてくるような）化け物みたいな身体能力と一緒にするんじゃねえよ……。！」

「これから毎日朝と晩、歌とダンスとは別に基礎体力をつける練習をしてもらいます。」

「い、一日に二回も!?!」

「そうです、やるからにはちゃんとしたライブをします! そうじゃなければ生徒は集まりませんか。」

「なあ、海未先生よ……。俺もこれ毎日やるんかね……。！」

「幸雄は生徒会の仕事もありますから毎日やれ、とは言いませんができる限り顔は出してくださいね。」

「ういっす……。！」

「海未の言ってることはもつともだ。穂乃果にことりも半端なライブよりもしつかりしたライブにして成功させたいだろ？」

「はい。」

「はい、じゃあもう1セット！」

「よし！」

「君たち。」

穂乃果たちが練習を再開しようとしたところに、ある人物が現れた。

「副会长さん？」

「希先輩、今日もお手伝いですか。」

「そうや。志郎くんの言う通り、今日もお手伝いやで。神社はスピリチュアルな『気』が集まる神聖な場所やからね。みんな階段使わせてもらってるんやからお参りくらいしてき。」

希に言われた通り、志郎たちは初ライブが成功するようにお参りした。

「初ライブが上手くいきますように！」

「「「いきますように！」」」

「あの三人に、志郎くとゆつきーくん、みんな本気みたいやな。」

希はお参りをしている五人を後ろから見守りながら、そうつぶやいた。

8話 初めての歌

「ふー、やっと一息つけるぜ・・・。」

「といってもこれから授業があるがな。」

穂乃果たちの初めての練習に付き合った志郎と幸雄は登校してから真つ先に自分の席に座って一息ついていた。もともと身体能力がかなり高い志郎は何ともないようだが、頭の回転が優れ知略に富むが、身体能力では志郎に一步劣る幸雄は肩で息をしていた。

「おはよー。二人とも、今日は穂乃果たちと一緒にやないの?」

二人に声をかけたのは、穂乃果の友人のヒデコだった。その後ろには同じく穂乃果の友人であるフミコとミカもいる。

「おお、ヒフミ三人衆か。いや、さつきまで一緒だったんだがなんかやることあるつつつてどっかいったぞ。」

「確か一年の教室にいったみたいだぞ?」

「そうなんだ。でもそれより三人まとめて呼ばれるのはなんか釈然としないな。」

「いやだって、お前ら基本的に三人でいるとこしか見たことないぞ?なあ、志郎?」

「俺に振るか……。まあ、幸雄の言う通りでもあるな……。。」

「なんか漫才グループみたいじゃん！」

志郎と幸雄はヒデコ、フミコ、ミカの三人と話に興じていた。今までの話を見ていると、穂乃果、海未、ことりの三人としか関わりを持ってないように見えるが、一応他の女子とも関わりを持っているらしい。それはともかく、三人が自分たちの席に戻っていったあと、穂乃果と海未とことりの三人が戻ってきた。

「お、やっと戻ってきたか。おーい三人とも、結局あの後何やってたんだ？」

「はあ……。。」

「ありや、シカトされちゃった。」

幸雄が穂乃果に声をかけるも、穂乃果はただため息をつけて自分の席に座るだけだった。海未とことりも深刻そうな表情をしている。

「なんだ、さつきまでとは全然様子が違うぞ？」

「こりゃあ、確実に何かあったな。今は何言っても無駄だろうから昼休みにでも聞こうぜ志郎。」

「お、おう。」

そして昼休み、志郎たち五人はいつものように中庭で昼食をとっていた。

「さて、何があつたか聞かせてもらおうか。」

「ささ、なんでもいつてくれていいんだぜ？」

「うん……。実はね、私……。ちよつと簡単に考えすぎてたかなつて思つてたの。」
「簡単に？」

「興味深いねえ。それはいつたいどういう心境でそういう風に思つたんだね？」

「うん、実はね……。」

そして志郎と幸雄は、穂乃果たちは前日に言つていた『歌の上手い一年生』に作曲を頼みに行ったのだが手ひどく断られてしまい、そしてその後、その様子を見ていた絵里にスクールアイドルとして活動することのリスクを説かれ、「簡単に考えないでほしい。」と諭されたということを知り、穂乃果たちから聞いた。

「なるほど。そんなことがあつたのか。」

「あの生徒会長もその辺まで考えが回るとなると頭が固いわけじゃないつてわけか。確かに言つてゐることは正論だわな。正直な話、スクールアイドルに関するリスクは俺もわかつてはいたがそこら辺はきちんと伝えとくべきだったわな。」

「でもね、私ふざけて言い出したわけじゃないんだよ。ちゃんと練習メニューもこなしてるし……。」

「確かに頑張つてゐると思ひますが、生徒会長の言うことも受け止めなくてはいけません

ん。」

「そうだよね……。あと一か月もないもんね。」

海末の言葉を聞き、さらに穂乃果の表情が沈む。

「ライブをやるにしても歌う曲くらいは決めないと。」

「今から作曲者を探してる時間もありませんし……。歌は他のスクールアイドルの物を歌うしかないと思います。」

「そうだよね……。」

そして穂乃果たち三人はそのままうつむいて黙ってしまった。

（何とか励ましてやりたいものだが、わたしには曲作りの才など無い……。くそつ、全力でサポートすると言っておきながら何もしてやれることが見つからないとはまるで『あの時』のようではないか……。この勝頼も不甲斐なものだ……。）

志郎もまた、目の前に立ちはだかる現実の重さに苦悩していた。

沈んだ空気が5人を覆ったまま時間はいたずらに過ぎていき、気づけば放課後になっていた。志郎たちは帰る準備をしていたが、そこに何かを持っていると思わしき穂乃果が走ってきた。その表情には先ほどまでの憂鬱な様子はみじんも感じられなかった。

「入ってた!?!」

「ほんと!?!」

「おお！本当か！」

「で、何枚入ってたんだよ!？」

「あつたよー!!一枚!!」

穂乃果の手には小さくも丁寧に折りたたまれたピンク色の紙だった。穂乃果が言うには、先ほどグループ名募集のために置いた箱を片付けようとして開けたら入っていたらしい。

「一枚だけでも大きな収穫じゃないか。」

「何でもいいから開けてみようぜ！」

幸雄に急かされ、穂乃果は紙を開いた。そこには流れるような字体で「μ s」と書かれていた。

「ゆー……ず？」

「ゆーじゃなくってみゆーって読むんだぞお嬢さん。」

「多分、μ s（ミューズ）ではないでしょうか。」

「ああ、石鹸！」

「違います。」

「そのボケはキレがないな。」

「さすがに古いぜ。」

穂乃果のボケを海未、志郎、幸雄の3人が即答でツッコむ。

「おそらく神話に出てくる女神からつけたのだと思います。」

「へー……。」

「たしかギリシャ神話の音楽や芸術を司る9人の女神だったか。一説によれば3人だったり4人だったりするが、その辺は今はどうでもいいな。」

「しっかし、海未がギリシャ神話に造詣があつたとはちと意外だな。やはり中坊だったころの名残ですか？」

「あ、幸雄に虫が。」（ドゴォー！）

「へロドトスツ!!」

さりげなく海未をいじる幸雄の腹に海未による肘鉄が叩き込まれた。最近は二人の間で様式美となりつつあるが志郎は関わったら自分も巻き添えを食うような気がする。極力かわらないようにしている。

「いいと思う。私は好きだな！」

「ことりがそう言うのと、穂乃果は紙に書かれた字を見ながら少し考え、

「うん！今日から私たちはμ sだ!!」

そして場所は変わって一年生の教室がある廊下。そこでは幸雄が一人で考え事をしながら歩いていった。

(あの紙のあの字……。どこかで見覚えがあるような……。いや、そんなはずはあるまい。そんなことより作曲の件だ。なんとしても見つけねば……。流石に勝頼さま……。志郎ばかりにいろいろ負担をかけるわけにもいかん。ここいらでそろそろ俺も動かねばなるまい。やはり作曲はあの西木野のお嬢さんに頼むしかないがどうしたものか……。)

「あれ……。？武藤さん……。ですよね？こんなところはどうしたんですか？」

誰かが後ろから声をかけているので振り返ってみると、少し前に幸雄が志郎と共に助けた少女、小泉花陽がいた。

「お、お。小泉じゃねえか。いや、少し考え事をしててな。」

「そうなんですか、一年生の教室の近くでうろうろしてたから少し気になって……。迷惑でしたか？」

花陽は上目づかいで幸雄に話しかけるので、その仕草に幸雄はノックアウトされかけたが持ち直して、

「いやいや、そんなことはないさ。あ、そうだ。少し聞きたいことがあるんだけどよ、いいかな？」

「はい、私にできることなら何でもどうぞ。」

「え？今何でもする・・・じゃなくって、今西木野さんって娘を探してるんだがどこにいるか知らんかね？」

「あ、西木野さんは放課後は音楽室にいますよ。」

「あ、凜ちゃん。」

花陽の後ろから、凜が顔を出した。

「でも武藤先輩といい、さっきの先輩といい、西木野さんに何の用事があるのかな？」

「さっきの先輩？」

凜の言葉に疑問を抱いた幸雄は二人にたずねた。

「はい、スクールアイドルの先輩なんですけど・・・。」

「穂乃果め・・・、また先走りやがったな・・・。」

「武藤さんはさっきの先輩のお知り合いなんですか？」

花陽は幸雄にたずねた。そう、志郎と幸雄は花陽と凜と交流はあるが、まだスクールアイドルのサポートをしていることは明かしてなかったのだ。

「ああ、志郎と一緒にあいつらのサポートをしてるのさ。もつとも今んところは歌も決まってるないし、色々きついがね。」

「そうだったんですか・・・！あ、武藤さんと諏訪部さんも頑張ってくださいね！応援し

てますから！」

「凜も応援してるにや！」

「ありがとよ、でもそれはうちのアイドルたちに言ってくれよな！」

そう言つて幸雄は音楽室に向かつて走つていった。

さらに場所は変わつて音楽室。今、音楽室では西木野真姫がただ一人でたたずんでいた。一枚の紙に目を通し、少し前の出来事を思い返しながら……。

『はい、歌詞。一度読んでみてよ。』

『だから私は……。』

『読むだけならいいでしょ？今度聞きに来るから。そのときダメつて言われたらスツパリ諦める！』

『……答えが変わることはないと思いますけど。』

『だったらそれでもいい。そしたらまた歌を聞かせてよ。』

『……え。』

『私、西木野さんの歌が大好きなんだ。あの歌とピアノを聞いて感動したから、作曲お願いしたいなつて思つたんだ！』

「はあ……。」

「悩んでるな、お嬢さんよ。」

真姫がため息をつくると不意にどこからか声が聞こえた。

「よっ、西木野。何か悩み事かね。」

「武藤先輩、何か用ですか？」

「いや、穂乃果がここから出てくるのを見かけてな。また作曲を頼まれたみたいだな。」

「ええ、でも……。」

「その様子じゃ、今回は断り切れなかったみたいだな。だったらやってみたらどうだ？
いい機会だぜ？」

「でも私、こういう曲は……。」

「作れないのか？」

「つ、作れないわけじゃないわよ！ただ、こういうアイドルとかアニメとかそういう曲つて軽い感じがして苦手なの。だから……。」

「おいおい、そいつはもったいないぜ西木野さんよお。せっかくの才能が泣いてるぜ？」
「な、なによいきなり。どういうことよ、才能が泣いてるって。」

そう真姫が反応した瞬間、幸雄は（食いついた！）と内心でほくそ笑んだ。

「だってよ、せっかく歌が上手くてピアノも弾けて、尚且つ作曲もできるってのにそんな

ただ『軽い』っただけで食わず嫌いしちまうなんて、せつかくの作曲の才能がもつたいないと思わないか？」

「べ、別に好きな曲の趣味なんて人の勝手にしょ!？」

「ああ、そうだな。俺たち他人がどうこう言うもんじゃあない。それは確かに正論だな。だけどよ、見知らぬ領域に挑んでみるのもまたその恵まれた才をより豊かにするチャンスだと思っただがなあ。」

「~~~~っ……!」

真姫は幸雄の言葉に反論できなかった。彼の言葉にも一理あると思ったからだ。

「まあ、まずは試しにこの曲を聴いてみとくれや。」

そう言って幸雄は、制服のポケットから取り出したウオークマンを真姫に投げ渡した。真姫は恐る恐るイヤホンをつけて、再生ボタンを押した。

曲が流れ始めてから少し経った時、おそらく歌い始めに差し掛かった時、真姫の目が見開かれたのを幸雄は確かに見た。そして、真姫は曲が終わるまでのおよそ5分間ただただ真剣に聞いていた。

(あの反応を見る限り、俺の選曲に狂いはなかったはず……!もはやこれは賭けだ。頼むぞ……!)

そして曲が終わり、真姫はイヤホンを外した。

「いい曲ね。歌詞からも、メロディーからも意志の強さを感じ取れたわ。」

「その様子じゃあ、今聞いた曲を気に入ってくれたみたいだな。」

「ええ、私この曲は好きね。この人の歌をもっと聞いてみたくなかったかも。」

「そうか。実はその曲、俺が見てたアニメで流れてた曲なんだわ。」

「ヴェええ!!」

幸雄の言葉を聞いた真姫は素っ頓狂な声を出して驚いた。

「お前さん、動揺すると変な声出すよな。」

「い、いいじゃないのべつに！ 狙って出してるわけじゃないわよ！」

「まあいい。とにかく分かってくれたかね？ お前さんが忌み嫌ってるアイドルやアニメ

の曲も、さっきのお前さんみたいに人の心を震わせることができるのさ。」

「どういうつもりでこんなことをしたの？」

「別に他意なんてないさ。ただ、あなたにはカチカチに凝り固まった価値観で可能性や視野を狭めてもらいたくなかった……。それだけさ。」

「可能性……。」

「まあ、だからと言って作曲を強要するわけじゃない。作曲するかどうかはお前次第だ。そこは自分で答えを出すといい。じゃあな。」

幸雄はそう言い残して音楽室を去っていった。

その後、真姫はあるところに向かっていた。

『毎日朝と夕方に神田明神の階段で練習してるからよかったら遊びに来てね!』

そう、穂乃果たちが練習している神田明神の階段に向かっているのである。

『私、西木野さんの歌声大好きなんだ!』

『あなたにはカチカチに凝り固まった価値観で可能性や視野を狭めてもらいたくなくなつた……。それだけさ。』

神田明神に向かう真姫の脳裏には穂乃果と幸雄の言葉が鳴り響いていた。そして神田明神に着いた真姫は曲がり角の陰から穂乃果たちの様子を見ることにした。

「もうだめええ!!」

「もう……。動かないよお……。」

「だめです!まだもう二往復残ってますよ!それとも諦めますか?」

「もう!海未ちゃんの悪代官!!」

「それを言うなら鬼教官なような……。」

穂乃果たちの様子を一心不乱に見ていた真姫の背後から音もたてずに何者かの手が近づいて来た。そしてなんと真姫の胸をいきなりわしづかみにした。

「きゃあああああ!!」

「「ん?」」

「なに?」

「さあ・・・。」

「なんだ今の悲鳴は!?!」

志郎が急に立ち上がったが、幸雄はそれを制した。

「まあ、気にすることないだろ。」

(おそらく今の声は西木野だな?土下座しまくりで頼み込んで『あいつ』を伏兵代わりに伏せさせたが、いったい何してんだか・・・。だが、西木野が来たのは確実・・・。何とかうまくいったか・・・。)

階段の下の陰には巫女服を着て真姫の胸をわしづかみにしてる希と、わしづかみにさ
れてる真姫がいた。

「な、な・・・、なにすんのよ!!」

「まだ発展途上、といったところやな。」

「はあ?」

「でもまだ望みは捨てなくても大丈夫や、大きくなる可能性はある。」

「な、何の話!?!」

希の拘束を振りほどいた真姫は、希に反論した。

「恥ずかしいならこっさりという手もあると思うんや。」

「え？だから何!？」

真姫は希の言葉の真意がつかみ取れず、疑問の言葉を投げかけた。

「わかるやろ？」

希はただそう言つて神田明神へと去つていった。

(ゆつきーくんが土下座して「ここに人が来るから待つててくれ！」なんて言うから待つてたらこういうことやつたんやね。さて、うちのやれることはやった。あとは運しだいやね、みんな。)

希は階段で練習する五人組を見守りながらそうつぶやいた。すると幸雄が希の方を見たのでウインクを返し、幸雄はそれを受けてサムズアップで応えた。

そして翌日の朝……。

「どうしたんだ穂乃果、急に呼び出して。」

「何かいいことがあつたんじゃねえの？」

幸雄はしたり顔で志郎に応じた。

「いいこと？幸雄、その顔はなにか知ってるな？」

「いいや別に?」

幸雄はそう言って志郎をあしらった。

そして呼び出した穂乃果は志郎と幸雄が来たのを見計らって、CDをパソコンにいった。

「なんだそのCDは?」

「今日の朝、ポストに入ってたんだ。宛名と送り主の名前は書かれてないんだけど、多分、西木野さんがくれたんだと思う。」

「西木野が? 本当なのか。」

「まあ、とにかく聞いてみようぜ。」

「うん、いくよ・・・!」

幸雄の言葉にうなずいた穂乃果はCDの中身を再生した。

「・・・っ!」

ことりと海未は息を呑んだ。その次の瞬間、軽やかなピアノの音が流れ出した。

「I say: HEY! HEY! HEY, START: DASH!! : :」

「この歌声・・・!」

海未が作詞した歌詞が歌になっていたのだ。そして歌声の主は間違いなく西木野真姫のものだと穂乃果は確信した。

「すごい……、歌になってる!!」

「私たちの……。」

「私たちの歌……。」

穂乃果たちが真姫から送られてきた歌に聞きほれていると、スクールアイドルの動画サイトから、sに票が入ったとの通知が届いた。穂乃果はそれを見て微笑み、

「さあ、練習しよう!」

「うん!」

「ええ!」

そして穂乃果たちが屋上から降りた後、屋上に残った志郎は幸雄に質問をした。

「西木野が作曲してくれた件だが……やはりお前の差し金か? 昌幸。」

志郎の口調は、『武田勝頼』だった頃の威圧感を纏っているものになっていた。

「さあ、それはどうでしょうかな?」

幸雄は『真田昌幸』だった頃の口調でとぼける。

「隠さずともよい。昨日のあの神田明神での悲鳴、あれは西木野真姫のものだったのだから? 俺もあやつの声を聞いておるのだ。分からないはずがあるまい。」

「ははは……。お見通しでしたか。ですが西木野が作曲したのはあの者の意志でござ

います。ただわしはあやつの背中を押しただけにございます。」

「背中を押すにしては、刺激が強すぎたのではないか？あんな悲鳴を出されたら近所に誤解されかねんだろう。」

「そこは少し計算外でしたな。副会長はいったい何をしでかしたのやら……。」

「東條希まで巻き込んでおったのか！」

「ふふ、これも μ 、 s のためでございます。これでも『あの時代』に比べれば何百倍も真つ当な策のつもりなのでしたが……。」

「いや、よいのだ。わしはこの件では本当に何も打開策が見つからなかったのだ。穂乃果の働きもあるが、おぬしの知恵がなければ打開できなかつたであろう。お前がいてくれて本当によかつたよ。」

「ははは……。礼を言うのはまだ早いぜ『志郎』！俺たちはあいつらをサポートして廃坑を阻止しなくちゃならねえ。それには……。」

「分かっているさ『幸雄』、初ライブをなんと少しでも成功させる、だろ？」

「おうよー！」

「さて、これからも忙しくなるぞ！」

「ああ!!」

そして二人は穂乃果たちを追って屋上から降りて行った。その足取りは軽やかで、そ

れでいて力強いものだった。

9話 初陣 ”ファーストライブ”

「いよいよ明日か……。」

「ここまで長かったような短かったような……。でもあいつら練習もカンペキにこなして、歌も踊りも何とか形になったんだから心配はいらんだろ！」

穂乃果がスクールアイドルをやると言い出してからおよそ1ヶ月が経ち、ファーストライブ本番が翌日に控えてる状態だった。志郎も幸雄も主に練習方面でのサポートに従事しており、彼女たちの成長を実感していた。

「ムフフフフ……。いいでしょう。もし来てくれたらここで少しだけ見せてあげちゃいますよ。お客さんだけに特別に……。」

「もしお友達も一緒に連れてきていただけたらもう少し！」

「「本当!?!」」

志郎たちが校門に入ると、少し先の方に穂乃果とことりが何やら別の女子生徒を相手に何か怪しげな商人のように話しかけていた。

「何やってんだお前ら。」

「あ、志郎くん、幸雄くん！」

「実はね、この人たちに少しだけ踊りを見せてほしいって言われてね。ライブに来てもらう代わりに最初の部分だけ見せようとしてるとこなんだ!」

「はあ、そういうのはやめた方がいいだろ。ネタバレになっちまうし、何よりプレミア感が薄れちまうだろ?」

幸雄はそう言つて穂乃果たちをたしなめる。

「えー!別にいいじゃん!」

負けじと穂乃果も幸雄に対抗する。

「まあ、俺からすればどっちでもいいんだが・・・。」

「ほら志郎くんもこう言ってるし!」

「本気か志郎!?!」

「それより、海未がないのにどうやって見せるんだ?」

「「え?」」

志郎が海未の不在を指摘して、穂乃果たち三人はようやく海未がいなくなつてることに気が付いた。

「・・・やっぱり無理です。」

四人で学校中を探し回り、海未を見つけたのは屋上だった。

「えー、どうしたの？海未ちゃんなら出来るよ！」

そう言つて穂乃果は海未を励ます。

「・・・できます。歌もダンスもこれだけ練習してきましたし・・・、でも人前で歌うのを想像すると・・・。」

「なるほど、海未はあがり症だったのか。」

「そうだ！そういう時はお客さんを野菜だと思つてお母さんが言つてた！」

「ああー、そいつは名案だな。」

幸雄は穂乃果の緊張の解消法に賛成したが、

「私に一人で歌えと!？」

海未は少し考えてから穂乃果の案を拒否した。

「どうやったたらそういう結論になるんだ・・・。」

「大方、無人島で野菜に囲まれてる想像でもしてたんじゃねえの?」

「はあ、困つたなあ。」

「でも、海未ちゃんが辛いなら何か考えないと・・・。」

「無理強いするわけにもいかんしなあ。」

「ひ、人前じゃなければ大丈夫なんです！人前じゃなければ・・・！」

そう言つて頭を抱える海未を見て穂乃果は、

「色々考えるより慣れちやつた方が早いよ！」

そう言つて海未の腕をつかんで立ち上がらせた。

「じゃあ行くつか！」

そう言つて穂乃果たちが向かったのは……。

たくさんの人が行き交う電機街とオタクの街、秋葉原だった

「ひ、人がたくさん……！」

「当たり前でしょ！そういう所を選んだんだから！」

「しかし、穂乃果にしちや考えたもんだな。ここでピラ配りしてれば海未のあがり症を克服にも貢献できるし宣伝にもなるからな！」

「ひどいなー、幸雄くん私だつて結構やればできるんだよ！」

「まあ、名案であることには間違いないな。」

「私もいいと思うよ。でも、海未ちゃんが……。」

「ん？」

「ことりが見ている方に志郎たちが目を向けると、

「……あ、レアなのが出たみたいです。」

海未はガチャガチャを回していた。

「どうやらいきなりここは刺激が強すぎたらしいな……。」

結局、志郎たちは学校に戻って校門付近でピラを配ることにした。

「μ、sのファーストライブをやりまーす！よろしくお願いしまーす！」

「ありがとうございます。ぜひ来てください！」

「よろしくお願いします！」

「あ……、あの……。」

「だめだよそんなじゃ！」

「穂乃果はお店の手伝いで慣れてるじゃないですか。」

「ことりちゃんだつてちゃんとやってるよ？ほら、海未ちゃんも！それ全部配るまで

帰っちゃだめだからね！」

「ええ!!無理です!!」

「海未ちゃん、私が階段5往復できないって言った時なんて言ったっけ？」

「……わかりました、やりましょう！お願いします！μ、s、ファーストライブやりまー

す!!」

穂乃果の言葉で奮起した海未を見て、穂乃果は微笑んだ。

（穂乃果はすごいな……。さつきまで目も当てられない状態だった海未をここまで奮起させるとは……。やはり、只者ではないようだな……。）

志郎は穂乃果と海未の様子を見て改めて穂乃果の潜在的なカリスマ性に感服していた。

「あ、あの……。」

そんな志郎の後ろから誰かが声をかけた。

「お、小泉じゃないか。どうしたんだ？」

「あ、はい……。ライブ……。見に、行きます……。」

「おお、そうか。それはありがた」

「ほんと!？」

「来てくれるの!？」

志郎を押しつけて穂乃果とことりがやってきた。

「でしたら、一枚だけとは言わずこれを全部……。」

「海未ちゃん!」

「分かってます……。」

「まあ、とにかくそういつてくれて嬉しいよ。」

そう言つて志郎は花陽にビラを渡した。

そしてビラ配りが終わり、穂乃果と海未、そして志郎と幸雄の四人は穂乃果の部屋に来てスクールアイドル、『A—R—I—S—E』の動画を見ていた

「うーん、やっぱり動きのキレが違うよね。」

そう言って穂乃果は振り付けの練習をする。

「気持ちわかるが別にそこまで気にする必要はないだろう。」

「そうそう、ありのままのお前らで勝負すればええんやで。」

「うーんそうは言っても・・・。あっ!!」

「どうしました?」

穂乃果が急にパソコンの画面に張り付いたので不思議に思った海未は穂乃果に何があつたのかたずねた。

「ランクが上がってる!きつとチラシを見た人が票を入れてくれたんだよ!!」

「嬉しいものですね!」

「な、俺の言つたとおりだろ?」

「おまたせー。」

そんな明るいムードの中、ことりが袋を持って入ってきた。

「あ、それつてもしかして衣装!?!」

「うん、お店で最後の仕上げをしてもらったの！」

そう言って期待に胸を膨らませる穂乃果や息を呑む海未の前でことりは完成した衣装を取り出した。

「ジャーン!!」

「うわあ、かわいい・・・！本物のアイドルみたい!!」

「本当!？」

そう言つて喜び合う穂乃果とことりとは打つて変わつて海未は目を見開いて呆然としていた。

「なかなかいい衣装だな。なあ、幸雄。」

「おう、こりやなかなかいいなあつてどうしたんだ海未？そんな顔して。」

「ことり・・・、そのスカート丈は？」

「あ。」

「?。」

志郎と幸雄はことりと海未のやり取りを怪訝そうに見ていたが、話を聞いてみるとどうやらスカート丈は膝下にするようにと海未がことりにあらかじめ言っておいたらしい。

「うーん、流石に往生際が悪すぎるのでは・・・？」

「ああ、流石に悪あがきじゃあ……。」

話を聞いて少し呆れ気味に二人はそう言ったが、

「何か言いましたか？」

「いえ、なんでもありません。」

海未のドスの効いた声と殺気のこもった眼で詰め寄られては流石の二人も形無しだった。

「そういうことなら、私は一人だけ制服で歌います!!」

そう言つて海未は穂乃果の部屋から出ようとした。

「ええ!?!」

「そんなあ!」

「そもそも二人が悪いんですよ!?!私に黙つて結託するなんて!」

「……だつて、絶対成功させたいんだもん。歌を作つてステツプを覚えて衣装もそろえて、ここまですつとがんばつてきたんだもん……!三人でやつてよかつたつて、頑張つてきてよかつたつて思いたいの……!」

「穂乃果、お前……。」

穂乃果はそう言つて窓に駆け寄つてから、窓を大きく開け放して

「思いたいののおおのおおのおお!!」

「何やってんだ馬鹿もん！」

すかさず志郎の手刀が穂乃果の脳天に叩き込まれた。

「なにすんの志郎くん！」

「気持ちにはわかるが近所迷惑だ、たわけ！」

「まったく、何してるんですか穂乃果は……。」

呆れる海未にことりが語りかけた。

「それは、私も同じかな。私も三人でライブを成功させたい！」

「そうそう。三人一緒にやり遂げてこそ、本当にやってよかったと思えるんじゃないやねえの？」

「？」

「ことり……、幸雄……。」

海未は穂乃果を見て、ため息をつきながらうなずいた。

「……いつもいつもずるいです。わかりました……！」

「海未ちゃん……！だーいすき!!」

穂乃果はそう言つて海未に抱き着いた。

そしてその後、5人は神田明神でファーストライブが絶対に成功するようにと祈つてから家に帰った。

「明日のライブ、成功するといいですな……。」

「そうだな。だがそれは少し違うぞ昌幸。」

「違う、とは？」

「成功するといい、ではなく絶対に成功させる、そう思うのだ。あいつらのためにもな……。」

「勝頼さま……。そうですね。なら明日は死ぬほど忙しくなりそうですね！」

「ああ、明日は俺たちも忙しくなるぞ!!」

翌日、新入生歓迎会が終わりファーストライブが始まるまでの時間は残りわずかとなっていた。穂乃果たちは本番前の着替えなどの打ち合わせのため、先に講堂に行っており、志郎と幸雄はビラを配って客引きに勤しんでいた。

「μ'sのファーストライブはこのあとの午後4時から始まります！よろしくお願いします!!」

「しっかし、他の部活に客がどんどん取られちまつてるな……。ビラの減りも昨日に比べると遅いし……。」

「弱音を吐くな幸雄！あいつらが頑張っているというのに俺たちがそんな弱気でどうする。絶対に成功させるのだ……。」

「手伝うよ二人ともっ。」

「ミカ!?」

「もう、なんでそんなに驚いてるの〜。」

「いや、一人でいるのが珍しいって思ってたな。」

「ヒデコとフミコはどうした?」

「二人は講堂で音響と照明の準備をしてるよ!」

「すまん、お前たちにも手伝わせてしまつて・・・。」

「いいのいいの! 私たちだって学校のためにできることをしたいし! そんなことより二人は穂乃果たちのところに行つてあげて!」

「だが・・・。」

「まあ、ミカがそう言つてくれるならお言葉に甘えよーぜ。」

「あ、ああ。すまん、後は頼んだ!!」

そう言つて志郎と幸雄は講堂に向かつて走つていった。そして穂乃果たちがいるステージ裏の控え室につき、

「おーいお前ら、入るぞー。」

志郎たちがノックして開けると、

「えーい!」

「いやああああ!!」

なんと穂乃果が、海未がスカートの下にはいていたジャージを脱がせていた。

「なにしてんだよ……。」

「なっ……! 破廉恥です!!」

「解せぬ!!」

海未は近くに置いてあつた自分のカバンを志郎に投げつけたが、志郎がよけたので幸雄の顔面に直撃した。

「なんで避けたし……。」

「すまん、つい……。」

「いてて……。おお! みんな似合ってるじゃねえか!」

「海未ちゃん、かわいいよ!」

「ほらほら! 海未ちゃん一番似合ってるんじゃない? ね、志郎くんたちもそう思うでしょ?」

「ああ、なかなか様になつてるぞ!!」

「そうだな、確かに一番かもしれんな……。自信持てよ海未!」

「え、ええ……。」

男子二人に褒められてうろたえる海未に穂乃果は、

「それに、三人で並んじやえば恥ずかしくないでしょ！」

「はい……。確かにこうしていれば……。！」

「じゃあ、最後にもう一度練習しよ！」

「そーねっ！」

「じゃあ、俺たちは客席に行ってるよ。」

「健闘を祈ってるぜ!!」

そう言つて志郎たちは控え室から出て行つた。しかし、志郎たちの先には耐え難い現実が待ち構えていた。

「嘘だろ……。?そんな、馬鹿な……。！」

なんと講堂の客席には誰もいなかったのだ。

「すまん志郎……。こうなることは予測できなかったわけじゃないんだ……。！」

「なに……。?どういうことだ……。！」

幸雄は絞り出すように話し出した。

「まずそもそも、新入生歓迎会の日にライブを開いたこと自体がミスだったんだ……。！」

「ミス……。?」

「ああ、新入生歓迎会の後には体験入部があるだろ。新入生歓迎会では部活の紹介が

あつてそこで興味を持った一年生が自分が興味を持った部活へ行く。しかし俺たちは正式な部活じゃないから紹介できない。だから宣伝面では他の部活に遅れを取っていたんだ。」

「だが、何人かの生徒は興味を持って……。」

「それはあくまでも、『見る側』としての興味だ。メンバーになることなど露にも思つてなんかいないのさ。そもそも俺たちはここでメンバーを集めるはずだったろ？」

「あつ……!」

「それに一年生は30人しかいないんだ。ただでさえアピール力のない俺たちのところに来てくれる奴らは……。」

「なんで……。何故それを言わなかった……!!気づけなかった俺にも非はあるが何故言わなかったんだ……!」

「しようがねえだろ……!あいつらはこの日のためにどれだけ努力してきたと思つて!!それは一緒に練習してたお前が一番知つてるだろ……!」

「……!」

「俺はあいつらの努力をふいにするような真似はしたくなかつた……!あいつらの純粋な想いを否定したくなかつたんだ……!」

「幸雄……。」

『ヴーーーー!!』

始まりを告げるブザーが鳴り、ステージの幕が開いた。穂乃果たちは三人で手をつないで立っていたが、目の前の閑静な客席を前に呆然としていた。

「ごめん……、頑張っただけど……。」

そして穂乃果たちは自分たちに突き付けられた現状を理解して、泣きそうになりながら唇を噛みしめていた。

「すまん穂乃果！俺が悪かったんだ!!日程とか宣伝の仕方とか色々もつと考えてれば……!」

「違うよ幸雄くん!」

「なに……?」

「誰も悪くないよ。うん、よく考えたらそうだよ。最初っから上手く行きっこないよね!世の中そんなに甘くないっ!」

穂乃果は笑いながらそう言っただけで、その目には涙がたまっていた。そして、堪えきれずに泣きそうになったその時、志郎が叫んだ。

「泣くんじゃない!歌え!!」

「志郎……くん?」

志郎は客席に向かって歩いていき講堂のど真ん中、穂乃果たちの真正面の席にドカッ

と座った。

「俺が：いや、この場にいる俺たちが観客だ!!俺たちが見守ってやる、見届けてやる：！だから歌うんだ!!お前たちの今までの努力や思いは無駄なんかじゃない!!アイドルがそんな悲しい顔をするな!アイドルなら笑顔で歌って・・・、俺たち観客を笑顔にしてみせてくれ!!」

「志郎、お前・・・!ああ、そうだよな。その通りだ!!俺たちが見ていてやる!お前らは安心して歌え!!」

「志郎くん・・・。幸雄くん・・・!」

そんななか、一人の女子生徒がビラを持って講堂に飛び込んできた。

「はあ、はあ、はあ・・・。」

「小泉・・・!」

そう、小泉花陽だ。彼女は走ってきたのか息を切らしていた。

「あれ・・・?ライブは・・・?」

「・・・やろう!」

花陽を見て意を決した穂乃果は言った。

「歌おう、全力で!!だって、そのために今日まで頑張ってきたんだから!!」

「!!」

ことりと海未も穂乃果の言葉を聞いてはっとした。

「歌おう!!」

「穂乃果ちゃん．．．！海未ちゃん．．．!!」

「ええ!!」

「ああ、その意気だ．．．!」

三人の姿を見て、志郎は満足げに、そして誇らしげにつぶやいた。そして講堂が暗くなり、穂乃果たちの初ライブが始まった。志郎の近くに座った花陽は踊りだした穂乃果たちを見て目を輝かせていた。

（踊りそのものは今まで以上にできているがまだ他のスクールアイドルに比べてここちなさが少し残ってる．．．。だけどあいつらの顔．．．、充実してるな。さっきまでの雰囲気全部嘘みたいだ．．．。勝頼さまの激励と、小泉が来てくれたという奇跡が彼女たちの絶望を覆したというのか．．．!）

幸雄はそうつぶやいて客席にいる志郎の方に目を向けると、花陽の隣に凜が座っており、客席の後ろの方で椅子の陰から顔を出してる人物、そして講堂の入り口付近に真姫を見つけた。

（いつの間にこんな．．．。確かにライブは失敗かもしれないが、完全に負けたわけではないみたいだな。勝頼さまがいなければあいつらも挫けてしまったかもしれない。穂

乃果たちもすごいが、あいつらを立ち直らせた勝頼さまも……。やはり勝頼さまも御屋形様の後継者たる男だったのだ……!」

そして曲が終わり、ライブが終了した。歌い切った穂乃果たちの顔は充実に満ちていた。志郎を中心とした10人といない観客たちは穂乃果たちに拍手を贈った。

そんな中、講堂の後ろからいつの間に来ていたのかステージに向かって絵里が降りてきた。

「どうするつもり?」

絵里は穂乃果に向かって問いかけた。

「続けます。」

「なぜ?これ以上続けても意味があるとは思えないけど。」

「やりたいからです!今、私もっともつと歌いたい、踊りたいって思ってます。きつと海未ちゃんもことりちゃんも、こんな気持ち初めてなんです!!やってよかったって心から思えたんです!!」

そんな穂乃果の言葉を聞いて志郎はまた満足げに頬をほころばせた。

「今はこの気持ちを感じたい。このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない。応援なんて全然もらえないかもしれない。でも一生懸命頑張つて、とにかく私たちが頑張つて届けたい!今私たちがここに……。この思いを!!」

そして穂乃果はさらに絵里に向かって、ある決意を告げた。

「いつか私たち必ず・・・、ここを満員にしてみせます!!」

(ははっ! 大きく出たな穂乃果め。だが、あいつらならやってのけるはず・・・。いや、俺たちも絶対に実現させて見せるぜ!)

幸雄は穂乃果の宣言を聞いて不敵に笑いながらつぶやき、

(ふ・・・。やはり穂乃果は高みへと上り詰められる才があるのかもしれない・・・。)
志郎はそう思いながら穂乃果を見据えた。

「ねえ、ちよつといいかしら。」

ライブの後始末が終わり、帰ろうとする志郎を絵里が引き留めた。

「なんでしようか、生徒会長。」

「あなたはなぜ、彼女たちをサポートしようと思ったの?」

「と、言いますと?」

「彼女たちがやることが実を結ぶとは限らないってことはこのライブを見てあなたも分かっているんじゃないのかしら?」

「確かに今回の件で俺たちがいかに無力かを実感しましたよ。」

「それならなぜ・・・!!」

「羽ばたいていけると、あいつらには翼があると確信したからですよ。」

「翼・・・?」

「はい、あいつらにはどん底に落ちてもまた空高く羽ばたいていける翼があると穂乃果たちのやり切った顔を見て確信したんです。それに、俺は座して滅びを待つ主義ではないので・・・。あともう一ついいでしょうか?」

「なにかしら?」

「さつき会長はあいつらの活動を意味のある行為とは思えないって言いましたよね。」

「ええ、確かに言ったわ。」

「これだけは覚えておいてください。この世には価値の無いものこそあれど、意味を持たぬものなどない・・・と。では、失礼します。」

志郎はそう言って去っていった。

「意味を持たぬものなどない・・・か。あの子、いったい何者なのかしら・・・。」

「おーい、遅いぞ志郎!!」

校門には幸雄が待っていた。

「すまん、少し用事が残ってていな。」

「ほーん。で、どうするんだい？」

「聞くまでもないんじゃないか？」

「バレたか。あいつらはこんなところで止まってるような存在ではない。」

「ああ、故に俺たちはあいつらをさらに羽ばたかせなくてはいけない。今回のライブは長篠の戦だ。」

「長篠の戦・・・ですか。」

「ああ、今回のライブはあいつらにとっても俺たちにとってもかなり手痛い敗北だ。だが、『あの時』のようにそれを引きずるのではなく、糧にして立ち直らねばならん。」

「そうですね。」

「あいつらはさらに前を見据えてる。心情的には大丈夫かもしれないが、心意気だけでどうにかなるわけではない。だからこそ、俺たちがさらに補わねばならん。力を貸してくれるな?。」

「無論にございます！俺もこのまま失敗しっぱなしでは気が済みませんからな!!」

「ああ、共に頑張ろう!!」

こうして、sのファーストライブは終わり、穂乃果たちだけでなく志郎たちも新たな決意を胸に抱き、前に進んでいくのだった。

10話 新しい仲間 前編 志郎の想い

ファーストライブから数日が経ったある日の授業中、音ノ木坂学院に通っている一年生の小泉花陽は授業で使っているノートの陰に隠れている「メンバー募集中！」の文字を見ながら悩んでいた。

彼女は小学生だった頃からアイドルに憧れていたのだが、その引つ込み思案な性格が災いしてどうすることもできないまま高校生になっていた。だが、μ'sのファーストライブでの穂乃果たちのパフォーマンスを見てその一生懸命な姿に感動を覚え、自分も彼女たちと共に踊りたいと思っていた。だがしかし……。

「じゃあ……、小泉読んで。」

「は、はい。」

先生に指された花陽は先生に言われたところを読むが、

「もう少し声出して。」

「は、はい。」

声小さく、先生に注意され挙句の果てには

「はいそこまで。じゃあ今のところ、今井読んで。」

と中断されてしまった。

(無理だよ、こんなんじや……。)

そう思い、花陽はうつむいた。

「おお、いたいた。」

「またここに来ていたのか。」

時は変わって昼休み、志郎たち5人はアルパカ小屋に来ていた。

「ふわあああ。ふええ。ふ。ふ。」

「ほんとここ数日飽きないねえ。そんなにかわいいかね。」

幸雄はアルパカ小屋で白いアルパカが餌を食べてるのをうつとりとした表情で見ていることに呆れ気味に言った。

「ことりちゃん、最近毎日ここに来るよね。」

「急にハマったみたいです。」

「そうだったのか。」

穂乃果と海未から訳を聞いた志郎は、

(確かにどこか癖になりそうな見た目をしているな。)

と思いつながらアルパカを見た。

「ねえ、チラシ配りに行くよー。」

「あとちよつと〜。」

穂乃果がこつりを急かすもこつりは動こうとしない。

「なんかいつもとは構図が逆になってねえか？」

「奇遇だな幸雄。俺もそう思っていた。」

「もう……。」

「志郎と幸雄以外で5人、つまり7人以上にして部として認めてもらわないとちゃんとした部活はできないのですよ？」

「そうだよねえ〜。」

海末の言葉でさえもどこ吹く風といった状態であった。

「かわいい……かなあ？」

ふと穂乃果が疑問の声を漏らすと、茶色のアルパカが聞こえていたのか穂乃果たちの方に顔を向けた。

「ええ？かわいいと思うな。首のあたりとかふさふさしてるし。」

そう言つてこつりはアルパカの首を撫でまわした。

（確かに、父上の諏訪法性の兜の毛みたいで触り心地はよさそうだとは思うが……つて、そうじゃなくつて！）

「やめたほうがいいんじゃないか？」

志郎がことりをたしなめるも、

「大丈夫だよ。うわあつ！」

ことりが大丈夫だといった矢先にアルパカがこ通りの頬を舐め、びつくりしたことりは尻もちをついた。

「ど、どうすれば？あつ、ここはひとつ弓で！」

「ダメだよ!!」

「どうやってたらそういう結論が出るんだよ!!」

動揺してるのか、いつもなら絶対に言わなさそうな素っ頓狂で過激な対応策を海未が言い出したので穂乃果と幸雄は即座にやめさせるが、茶色のアルパカは海未の言葉を理解したのか唸り声をあげて志郎たちを威嚇した。

「おいどうすんだよ海未が変なこというからだぞ。責任をもって鎮めて差し上げろ。」
「私がですか!?!どうしろって言うんですか・・・!」

と慌てていると、志郎たちの後ろからジャージ姿の生徒が来て、

「よーしよし、大丈夫だよ。」

そう言つてアルパカをなだめてるうちに穂乃果たちはこ通りのもとへ行つた。

「おお、小泉じゃないか。」

「あ、諏訪部先輩、武藤先輩。」

生徒が花陽だと知った志郎は声をかけた。

「へえ、小泉って飼育委員だったんだな。なかなか手馴れてるな。」

「そ、それほどでもないですよ……。あ、お水替えなきや。」

と幸雄の賛辞に花陽は照れながら答え、ペットボトルの水を替える。

「大丈夫？ ことりちゃん。」

「うん。嫌われちゃったかなあ。」

「あ、平気です。楽しくて遊んでただけだと思うから……。」

ことりの言葉に答えた花陽に穂乃果が近づいて、

「アルパカ使いだね。」

そう言ってから穂乃果は

「おお！ ライブに来てくれた花陽ちゃんじゃない!!」

「駆けつけてくれた一年生の!」

「あ、はい……。」

穂乃果とことりの言葉に花陽はうなずいた。すると穂乃果は彼女の肩をつかんで、

「ねえあなた！ アイドルやりませんか？」

と花陽を誘う。

「おい、いきなりすぎだぞ。」

「君は光ってる！大丈夫、悪いようにはしないから!!」

そういつてさらに花陽に迫るが、

「どう見ても悪人にしか見えんのだが・・・。」

「俺の方がもつとうまく勧誘できるぞ?」

「お前はやめとけ幸雄。」

「でも、少しぐらい強引に頑張らないと。」

「あ、あの・・・。西木野さんが・・・。」

「あ、ごめん。もう一回言ってもらっていい?」

花陽が何か言いたげな様子だったが声が聞こえなかったので、穂乃果は聞き返した。

「に、西木野さんがいいと思います。す、すごく歌が上手なんです・・・。」

「そうだよね！私も大好きなんだあの子の歌声!」

そう言つて穂乃果は花陽の手を握つた。

「だったらスカウトに行けばいいじゃないですか。」

「行つたよ!でも絶対やだつて。」

「え?あ、すみません。私余計なことを・・・。」

そう言つて謝る花陽の手を穂乃果は優しく握つて

「ううん。ありがとう。」

と、笑顔でお礼を言った。その時、

「かくよちくん！早くしないと体育遅れちゃうよー!!」

と凧が花陽を呼んだ。それを聞いて花陽は

「あ、し、失礼します。」

と言つて凧と共に校庭に向かつていった。

「私たちも早く戻りましょう。」

「そうだね。」

という海未とことりに

「うん……。」

と、意味ありげな顔でうなずく穂乃果を志郎と幸雄は見ていた。

そして放課後、1年生の教室にて……。

「かーよちん。決まった？部活。今日までに決めるって昨日言ってたよ？」

「そうだっけ、明日決めよっかな……。」

「そろそろ決めないとみんな部活始めてるよ？」

「うん……。あ、凧ちゃんはどこ入るの？」

「凜は陸上部かな。」

「陸上かあ……。」

そういう花陽の表情を見て何かに気付いた凜は、

「あ、もしかして……、スクールアイドルに入ろうと思つてたり？」

と小声で聞いた。凶星を突かれた花陽は

「ええっ!? そ、そんなこと……。」

と弱弱しく反論するが、

「ふーん、やっぱりそうなんだね？」

花陽の口を指でやさしく抑えた凜は、

「だめだよかちゃん、嘘つくとき指合わせるからすぐ分かっちゃうよ。」

と花陽の癖を見て嘘を見破つてみせた。

「一緒に行つてあげるから先輩たちのところにいこ？」

と言つて凜は花陽の腕を引くが、

「ち、違うの! ほんとに……、私なんかじゃ……。」

「かちゃんそんなにかわいいんだよ? 人気出るよ。」

「でも待つて、待つて……!」

そう言つて花陽は踏みとどまる。

「ん？」

「あ、あのね……、わがまま言ってもいい？」

「しようがないなく、なに？」

「もしね、私が……アイドルになったら一緒にやってくれる……？」

「凜が……？」

「うん……。」

そんな花陽の言葉を聞いた凜は少し間をおいてから、

「無理無理無理無理、凜はアイドルなんて似合わないよ。ほら、女の子っぽくないし、髪の毛もこんなに短いし……。」

「そんなこと……。」

「それにほら、昔も……。」

そうやって凜は、小学生の頃に初めてスカートをはいたときに男子にからかわれて以来、制服以外ではスカートををはいてないことを話した。

「アイドルなんて、凜には絶対無理だよ……。」

そうやって笑いながら言う凜の表情はどこか悲しげだった。

「凜ちゃん……。」

花陽も凜にかける言葉が見つからなかった。

そのあと教室から出た花陽は掲示板の前にいる人影に気付いた。

「西木野さん……?」

そう、真姫である。真姫が掲示板の前に置いてあるμ sのメンバー募集のビラを見ていた。花陽は真姫に気付かれないように物陰に隠れた。

そして真姫は、見ていたビラをカバンに入れてそのまま帰っていった。

「今の……。」

掲示板に駆け寄っていった花陽は、ビラが置いてある机の前に何かが落ちているのを見つけた。

「これ……。」

中を開いてみると、真姫の写真が貼ってあった。どうやら真姫の生徒手帳みたいだったようだ。

「よ、なにしてるんだ小泉。」

「ぴゃあ!!」

不意に後ろから声をかけられた花陽は驚いて悲鳴を上げた。

「うお!?! す、すまん。驚かせてしまったな。」

「あ、諏訪部先輩。すみません、こっちこそ悲鳴を上げたりなんかして。」

「いや、こつちが急に声をかけたのが悪かったしな。って、何かを拾ったみたいだが……。」

「あ、これ西木野さんの生徒手帳で……。私に行こうかなって……。諏訪部先輩はどうかしたんですか？」

「ああ、幸雄は生徒会に行つてて穂乃果たちは先に帰っちゃまったから少し暇でな。」

「そうなんですか……。あ、あの！」

「ん？どうした。」

「あの、もしよかったら……。西木野さんに手帳を渡しに行くのに付き添ってくれませんか？」

「ああ、お安い御用だ……。って、ええ!？」

志郎は花陽の突然の頼みごとに驚いた。

「あ、あの、だめでしたか？」

花陽は上目遣いで志郎にたずねる。

「い、いやだめってわけではないが……。俺がついてって大丈夫なのか？」

（うおお……。！そうやって上目遣いで頼むのは反則ではないだろうか……。！）

「はい、一人じゃ恥ずかしいので……。」

「なるほど、そういうことならついて行ってやるか。」

「すいません！ありがとうございます。」

「じゃあ、さっそく住所の場所に行ってみるか。」

「とは言つて来てみたが……。」

「ふええ。すごい……！」

志郎と花陽が着いたのはなんと豪邸だった。志郎と花陽は西木野邸の威容に唾然としていた。

（おいおいマジかよ、西木野ってお嬢様だったのか!? いや、あの高飛車な態度からして想像できなくなかったが……。それより現代の豪邸ってなんであんな厳かに見えるんだ?! 躑躅ヶ崎館や新府城の屋敷の方が広いし厳かだが、それとは違う雰囲気……。）
と、内心では動揺しまくりではあるが何とか平静を保つてチャイムを押した。

「はい。」

すると若い女性の声が聞こえた。

「は、はい。真姫さんと同じ学校に通つてる諏訪部です。」

「えっと、真姫さんと同じクラスの小泉です。」

そう名乗ると、中から真姫の母親らしき女性が出てきて中に通され、お茶を出しても

らった。リビングには高級だと思われる家具や、数多くのトロフィーやメダルが置いてあり、志郎はまさしく金持ちの家だな、と感じた。

「ちよつと待つてて。病院の方に顔を出しているところだから。」

「病院・・・？」

と花陽は疑問を口にした。

「ああ、うちは病院を経営してて、あの子が継ぐことになつてゐるの。」

「そう、なんですか。」

（なるほど、あいつの家は病院の経営者で西木野自身はその跡取りというわけか。あいつも俺みたいな苦勞をしなければよいが。）

「よかつたわ。高校に入つてから友達が一人も遊びに来ないから心配してたの。」

そういつて真姫の母親は顔をほころばせた。

（あいつもこれくらい態度が柔らかければ問題は無いと思うが・・・。）

志郎がそんなことを考えていると、

「ただいまー。誰か来てるの？」

真姫が帰つてきた。母親に促されて部屋に入ると、

「こ、こんにちは・・・。」

「すまん、お邪魔してゐるぞ・・・。」

意外な来客を前に少し驚いたような顔を見せた真姫だったが、すぐにいつもの表情に戻って志郎たちのもとへ向かった。

「お茶淹れてくるわね。」

と言って母親が部屋を出てから、

「なんの用？」

と志郎たちに用件を聞いた。

「これ、落ちてたから……。西木野さんのだよね……。？」

そう言って花陽は真姫に生徒手帳を渡した。

「なんであなたが？」

「ごめんなさい……。」

「なんで謝るのよ。あ、ありがとう……。それで、先輩の方はなんの用ですか？」

「いや、俺は小泉に付き添いを頼まれてな。」

「そう。」

志郎の答えに不愛想に返事した真姫に花陽は質問をぶつけた。

「μ、sのポスター、見てたよね？」

「私が？知らないわ。人違いじゃない？」

「いや、ポスターの前に落ちてたからその言い分は苦しいんじゃない？？」

志郎が畳みかけると、動揺した真姫は、

「ちがつ、違うのっ……！うっ、いった！うわああ!!」

慌てて立ち上がろうとしたところ、テーブルに膝をぶつけてよろめいてそのままソファと一緒に倒れてしまった

「だ、大丈夫!?!」

「おいおい、大丈夫か?」

花陽と志郎が心配するが、

「へ、平気よ!まったく……、変な事言うから!!」

そう言つて真姫は二人に抗議するが、

「ふふ、ふふふ……。」

「くく、ははは……!」

花陽と志郎はそんな真姫を見て思わず笑ってしまった。

「私がスクールアイドルに?」

「うん、私いつも放課後に音楽室の近くに行つてたの。西木野さんの歌、聞きたくて。」

「私の?」

「うん。ずっと聴いてたいくらい好きで、だから……。」

「俺も西木野の歌声は好きだな。澄んでて綺麗だし。」

「ヴェえっ!?!」

二人に褒められ、顔を赤くした真姫だったが、

「私ね、大学は医学部って決まってるの。」

「そうなんだ……。」

「……。」

「ふう……。だから私の音楽は終わってるってわけ。」

「解せんな。」

「す、諏訪部先輩?」

今まで黙って聞いていた志郎が突然口を開いたことに花陽は驚いた。

「自分の音楽は終わったと言ったな。なら何故まだピアノを弾いてるんだ?」

「べ、別にいいじゃない。趣味程度に弾いたって。」

「ふむ、言い方が悪かったな。なら何故 μ sの曲を作ってくれたんだ?本当に終わっ

てるのなら穂乃果や幸雄に頼まれた時もそういつて断ることはできたと思うのだ

が……。」

「な、あなたに何がわかるのよ!」

志郎の言葉に真姫は思わず声を荒げた。

「怒らせてしまったならすまない。西木野の家庭の事情は俺には分からん。だが、俺にはお前の苦悩が少しだが分かるような気がするんだ。」

「あなた、別に医者でも何でもないでしょ?」

「ああ、そうだ。だが、俺の知ってる人にも似た様な境遇の人がいてな? 本当はやりたいうことをやれるはずだったが急に家業を継ぐことになってそれを諦めざるを得なかった。だが、それでも重圧に耐えながらも自分の道を進んでいった・・・、そんな男がいたことを俺は知ってる。」

「・・・。」

真剣な表情で話す志郎を見て真姫は口をつぐんだ。

「別にお前にそうなれって言ってるわけじゃないんだ。ただ、そうやって義務を言い訳にして自分のやりたいことを諦めて欲しくないんだよ。」

「先輩・・・。」

「・・・そんなことより小泉さんのことだけど、あなた、アイドルをやりたいんでしょ?」

真姫はとっさに話を変え、花陽に矛先を向けた。

「え?」

「そうなのか?」

話をそらされ慥然とした表情の志郎も興味を示した。

「この前のライブの時も夢中になって見てたじゃない。」

「え、西木野さんもいたの？」

「ああ、幸雄が入口の方にいたが結構くぎ付けだったって言ってたぞ？」

話をそらされた意趣返しに、にやけながら幸雄から聞いた話を言った。

「わ、私はたまたま通りがかっただけだから！」

動揺した真姫を見て、

（なるほど、幸雄がからかい甲斐があるっていうのも分かるな。）

と志郎は思った。

「と、とにかくやりたいならやればいいじゃない！」

「……。」

志郎は複雑な表情で真姫を見ていた。

「そしたら、私も少しは応援してあげるから。」

「……ありがとう。」

花陽は笑顔で真姫にお礼を言った。

「さて、あまり長居するのもなんだしそろそろ帰るか。」

「あ、そうですね。じゃあ西木野さん、また明日。」

そう言つて志郎と花陽は席を立て、部屋を出た。

「ええ、また明日。」

真姫が二人を見送つたすぐあと、志郎が戻つてきた。

「すまん、少し忘れ物をした！」

「え？落とし物なんて部屋には無いけど・・・。」

「いや、そうじゃなくつてな。」

「・・・？」

志郎の意図がくみ取れず、真姫は首をかしげた。

「お前がどういう道を歩もうが、俺はどうこう言う気は毛頭ない。だが、さつき俺が言った言葉を忘れないでくれ。」

「えっ・・・。」

「じゃあな、邪魔したな。」

真姫が呆然としてると志郎はさつきと出て行つてしまった。

その夜、真姫はμsの初ライブの動画を見ながら、
「さつきの言葉・・・か。」

そうつぶやく真姫の脳裏にはある言葉が残っていた。

『別にお前にそうなれって言ってるわけじゃないんだ。ただ、そうやって義務を言い訳にして自分のやりたいことを諦めて欲しくないんだよ。』

「じぶんのやりたいことを諦めて欲しくない、か。どうすればいいのかしら。」

そう言つて真姫はパソコンの電源を切つてベッドに入り、志郎が言っていた言葉を噛みしめながら眠りについた。

こうして今日も夜は更けていった・・・。

11話 新しい仲間 中編 炯眼は星空を見据える。

志郎が花陽と一緒に真姫の家に行っていた頃、幸雄は絵里と希と共に理事長室に来ていた。

「彼女たちのライブには生徒は全く集まりませんでした。スクールアイドルの活動は音ノ木坂学院にとってマイナスだと思います。」

（黙って聞いてりゃあ随分と好き勝手言うてくれているじゃねえか。確かに人が全然集まらなかったのは事実だが、何も全くって程じゃねえだろうに。よっぽどあいつらのことが気に食わないらしいな……。）

「学校の事情で生徒たちの活動を制限するのは……。」

「でしたら、学院存続のために生徒会も独自に活動させてください!!」

「それはだめよ。」

理事長は絵里の提案を認めなかった。

「なぜですか!!」

絵里は食い下がろうとするも、

「それに、全然人気がないわけじゃないみたいですよ。」

理事長はそう言つて絵里たちにパソコンを見せた。

「あつ……。」

「こいつは……!」

「この前のライブの……。」

パソコンに映っていたのは、*Ms*のファーストライブの様子だった。誰が録っていたのか、スクールアイドルの動画サイトにあげられていたらしい。

「誰かが録つてたんやなあ。」

そう言つて希は目を絵里の方に向けた。幸雄はその希の様子を見逃さなかった。

「失礼しました。」

絵里たちが理事長室から出てきた。理事長への嘆願はもちろん上手く行かなかつたからか、絵里の表情は険しかった。

(自分の思う通りに行かなかつたから……、と言うほどこいつも幼稚ではあるまい。こいつの表情からは焦りとどういいうわけか『困惑』を感じる……。)

「ねえ。」

「はい?何か御用で、会長さん。」

唐突に絵里が幸雄に声をかけ、幸雄は慇懃な口調で返事をする。

「さつきからずつと気になってたんだけど、なんでついてきたのかしら?」

「どうしてって言われましてもねえ……。俺も仮所属とはいえ、生徒会の一員ですし會長たちの仕事をサポートするのも仕事の一環かなって思いましたね?」

「別に今ついてくる必要はないと思うのだけど?」

「いやあ、今回は面白そうなものが見れそうだなと思っただんですが、当てが外れましたな。」

「面白い事、ですって……。? 私たちは真面目に学院存続を考えてるのよ! ふざけたこと言わないで!!」

幸雄の一言で絵里が激高する。

「別に俺はふざけてなんかいませんよ。そう見えるだけで普段からまじめですよ。」

絵里の一言を受けて幸雄の表情がいつもの飄々としたものから、一変して真剣なものに変わった。

「俺から言わせればふざけてるのはあんたの方だ。真面目に廃校阻止を望むなら何故あいつらの活動を否定する?」

「それは、彼女たちの活動がお遊びにしか見えないからよ! そんな遊び半分で物事を考えてほしくないのよ!」

「お遊び半分とはずいぶん言い草だ。じゃああんたにはあいつらの活動よりも崇高で

真面目な代案でもあるのか？」

「うっ……、それは……。」

絵里が幸雄の反論に言葉を詰まらせる。

「ないんだろう？ それほどこの学校は追い詰められてるんだ。体面なんか気にしないでがむしやらに頑張ってるあいつらの方がよっほど利口に見えるぜ？ 大体なぜあんたはそこまであいつらのスクールアイドルの活動を否定する？ 体面ばかり気にしてて息苦しくねえのか!？」

「……。」

幸雄の一方的な反論に押され、絵里は黙ってしまった。その表情は少し悲しげに見える。幸雄はその表情に既視感を感じた。

「……すまん。少し言い過ぎたわ。」

「いいのよ。私もカツとなつてごめんさい。」

「えりち……。」

「今日は先に帰るわ。じゃあね。」

そう言つて絵里は帰つていった。

「やれやれ、俺もガラじゃねえつてのに熱くなりすぎちまつた。」

「えりちはしっかりしてるように見えるけど、案外打たれ弱いんや。もうあんなことは

よしといてね。」

希が幸雄を諭そうとするが、

「いや、そいつは無理な相談だ。」

「えっ?」

「会長はどっかの誰かさんに似て不器用な人だ。もう少し柔軟になれなきや『あいつ』と似た様な末路をこの学校、そしてあいつもたどることになっちまう。それだきやあ断じて阻止しなくちゃならねえ。それこそ、俺が嫌われ者になつてもだな。」

「ゆつきーくん……。」

「とにかく、俺はこれからもしばらくは、sと生徒会のどつちつかずで行かせてもらうからよろしくな、希副会長。」

幸雄もまたそう言つて去つていった。

「ゆつきーくんは志郎くん、そして、s……。あの子たちならえりちの事、変えてくれるよね?」

希は誰もいない廊下で、タロットカードを見ながらつぶやく。希の手にしていたカードは、「運命の車輪」だった。

「かあーっ!! 実にやりにくいなあちくしょう!!」

幸雄は不機嫌な様子でげた箱から出てきた。

「あのまま会長をそのまま論破してやろうと思ったら、あんな黙りこくつちやつて! あんな表情されたらできるもんもできなくなっちゃうっつもの!」

（さっきのあの表情、ありや勝頼さまと同じ顔だった……。周りから理解されずに苦しむ勝頼さまの……。とにかく論破して心変わりさせるのはやはり無理があつたか……。あの会長、志郎並みに強情だったからなあ……。次の手を打つ必要があるが……。）

「……ばーい。……せんばーい。」

「うーん……。」

「武藤せんばーい!!」

そう言つて誰かが急に幸雄の背後から飛びかかつてきた。

「どわっ!? 何しやがる!」

「さつきから声かけてたのに無視する先輩がいけないにや!」

飛びかかつてきたのは凜だった。幸雄に無視されてたせいかな不機嫌そうだった。

「あー、悪かつた悪かつた。俺も少し考え事してたんだよ。」

そう言つ幸雄は凜をなだめる。

「そーいや小泉は一緒じゃないのか?」

「かよちゃんは用事があるって先に帰っちゃったにや。」

「そうなのか。」

「あ、そんなことよりも先輩に聞いてほしいことがあるんだ！」

「なんだよ。」

「実は凜ね、かよちゃんと一緒にスクールアイドルに入らないかって誘われたの。」

「なに!?!そいつは本当か！」

幸雄は凜の言葉に目を輝かせるが、

「でも断ったにや。」

「何故に?」

「だって凜って女の子っぽくないでしょ?スカートだって似合わないし髪も短いし……先輩もそう思うでしょ?先輩ってスクールアイドルの人たちのサポートしてるから、凜がアイドルなんて似合わないってわかるかなーって思ってた……。」

凜は自嘲気味に笑いながらそう話した。

「そんなことあ、ないと思うがなあ。」

「そうだよ、凜はやっぱり向いてな……って、え?」

凜は幸雄の想定外の返事に困惑した。

「星空は別に女の子っぽくないとは思わないんだがな。」

「え、でもだって……。」

(ふふふ、照れてるな。そういう所がいいと思うんだが無自覚なのがなあ……。いや、自覚ありでやられてもあざとすぎて困るが。)

「それにお前さん、こうやって地面に座るときに下にハンカチ敷いてるだろ？まず今どきの女子でもやらないことができる！これを女の子っぽくないとやるだろうか?!いや言えない!!」

「だって、それは地べたに座るとスカートが汚れちゃうし……。」

「そうそれ!!そうやって細やかなとこまで気が遣えるのって女子としてはかなりポイントが高いと思うぞ!!」

「それでも、凜は女の子っぽい恰好なんて似合わないよ！小学生の時だって男子に笑われちゃったし……。」

「星空……。」

凜の表情を見て幸雄は噓し立てるのをやめた。

(なるほど、こいつがアイドルをやりたいがらないのはこういうわけか……。こういう過去の経験から来たコンプレックスってのは簡単には無くせないからなあ。本当に思っていることとはいえ煽ってその気にさせるって戦法はまずいか……。)

「ほら、先輩だってそう思ってるでしょ?」

凜は黙った幸雄に悲しげに笑いながらそう言った。

（違うそうじゃねえ！くそっ．．．！あまり他人に自分の腹のうちを明かすのはやりたくねえが、そんなみみっちい矜持で女を泣かせるわけにはいかん！腹をくくれ幸雄：．．いや、真田安房守昌幸!!本音をぶちまける!!）

「だから凜はアイドルなんか向いてな．．．」

「そんなことはない!!」

「え．．．?」

幸雄が突然大声を上げたので凜は驚いた。

「確かに昔お前さんのスカート姿を笑ったやつがいるのは事実なんだろう。だけどそれいっつらはお前の表面しか知らないから笑っちゃったんだろう。だが今のお前さんを見たらしきつと後悔するだろうぜ? 『ああ、昔の俺はなんでこんなかわいいやつのことを笑ってしまったんだろう』ってな!」

「でもそれって凜の表面が女の子っぽくないってことだよね．．．?」

「それは違うぞ! お前さんはお前さん自身が思ってる以上に女の子らしいと思ってる! さつき言ったハンカチの件もそうだ、お前さんはほかの女子以上に女の子らしさが内面からにじみ出てる! だからきつとかわいい服も似合うと思うぞ?」

「．．．。」

凜は幸雄にまくし立てられて顔が真っ赤になっていた。

「まあ、もし笑うやつがいたら笑い返してやるがいいさ、ははははは！」

「ねえ、武藤先輩。」

「ん？なんだ星空？まだ足りないか？」

「ううん。先輩がかわいいって言ってくれるのは嬉しいし顔がすごく熱いんだけど……。」

ううん、そんなことより凜はアイドルに向いてると思いますか？」

そういう凜の手は少しだけ震えていた。

（凜め、震えてるな。よっぽど勇気を振り絞ったのか……。ならば俺も誠意を以て応えねばなるまい。）

一呼吸おいて、幸雄は口を開いた。

「ああ、お前……。いや、凜ならなれるさ。」

「ほんと？」

凜は幸雄に聞き返す。

「ああ、俺の人を見る目は誰よりも確かだからな。俺のこの『炯眼』に狂いはねえ、命だつて賭けてやるさ。」

幸雄は自分の目を指さしながら笑った。

「……そっか。」

凜は静かにそういった。

「まあ、やるかどうかはお前さん次第だから強制はしねえ。ゆっくり考えな。」

幸雄は立ち上がったて去ろうした。

「せーんぱいっ！凜すごく嬉しかったよ！でもまだアイドルをやるうかは迷ってるから家に帰ってから考えるにゃ！」

「そうか、考えな若者よ。」

「先輩は凜と一つしか変わらないのに変なの。」

（確かに見た目の歳はさほど変わらんが、中身はお前らの五倍近く差があるんだがな。）

「そうだ、これから一緒にラーメン食べにいこ？おすすめの店があるんだにゃ！」

「ほう、そいつは楽しみだな。」

そしてしばらくして……。

「ふう、美味かったなあ。」

「でしょ？凜のおすすめラーメン屋第一位のお店にゃ！かよちんにしか教えなかったんだよっ。」

「ほう、そんな店を教えてくださいましたのか。今度志郎と一緒にまた来ようかな。」

「諏訪部先輩になら教えてあげてもいいよ！」

「なんで上から目線なんだよ。」

「じゃあ先輩、凜はこっちだから。」

「おう、じゃあな。」

凜はそのまま走っていった。

「ふう、やれやれ。何とか上手く行ったみたいだな。あとはあいつの心次第だが。」

（肝心のコンプレックスは取り除くことはできなかったが応急処置はできた。あとは流れに身を任せるだけ・・・だな。）

幸雄はあとのことを考えながら帰り路を進んでいた。

「あ、かーちゃんに晩飯いらねえっていうの忘れてた。」

余談だが、この後ラーメンを食べてきたことを隠して夕食を食べて翌日の朝まで腹痛に苦しんだことは言うまでもなかった。

12話 新しい仲間 後編 花陽の決意

「色々あるんだなあ、みんな……。」

「ああ、色々あるんだよな。」

志郎と花陽は、真姫に生徒手帳を私に行くという目的を果たして帰り道を歩いていた。

（しかし、あいつのことを思つての事とはいえ少しばかり喋りすぎたかもしれんな……。まあ、流石にあれで俺の正体がバレるとは思われないが……。）

「あの、諏訪部先輩……。」

「なんだ小泉？」

「さつき西木野さんに言つてた西木野さんに似てる人つてどんな人だったんですか？」

「ぶほっ!!」

花陽が突然投げかけた質問に志郎は激しくむせた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「げほ……。ああ、心配ない。少しむせたただけだ。」

そう余裕そうに言い返した志郎だったが、

(うおおおお・・・!ここにきて掘り下げに来たか!!完つ全に想定外だったぞ?!?どうする、どうやって言い繕えばいいんだ?)

内心ではかなり動揺していた。

「あ、ああ。あまりホイホイ喋っていい話じゃないんだ、すまんな小泉・・・。」

「い、いえ、こちらこそ深入りしちゃってすいません・・・。」

慌てて謝る花陽を見て志郎の心に少しだけ罪悪感が芽生えた。

「ただほんの少しだけ言えることは、そいつはどんな苦しい時でも精一杯に自分のやりたい事とやるべき事を最後まで悔いなく果たした強い・・・いや、強すぎる男だったということだけだな。」

「強すぎる・・・ですか?」

「ああ、何事も過ぎたるは及ばざるが如し・・・。ほどほどが一番だつてことだ。とにかく不器用な男だったよ。」

そう寂しげに話す志郎の目を見て花陽は、

(なんだろう、こんな寂しそうな目をする人って初めて見たなあ。その人がどんな人かは分からないけど、きつと諏訪部さんにとつてかけがえのない人だったんだろうな・・・。)

と思っていた。無論花陽がその人物が誰なのかはまだ知らない・・・。

そして特に話に花を咲かせることなく歩いていた二人は「穂むら」の前を通りがかった。

「あ、お母さんにお土産買っていいのかな。」

「それはいい心がけだな。きつと喜ぶぞ。」

花陽が店の戸を開けると、

「あ、いらつしやいませー!」

店番をしている穂乃果がいた。

「あつ、先輩……。」

「よう、穂乃果。店番か?」

「うん、そうだけど珍しい組み合わせだね。」

「ああ、ちと用事があつてな。」

「いらつしやい、花陽ちゃん。」

「お、お邪魔します……。」

「私、店番があるから上でちよつと待ってて?」

「は、はい。」

「そうか、お邪魔するぞー。」

志郎と花陽は家上がり、穂乃果に言われた通りに階段を上った。

「あ、小泉。すまんがちよつと用を足してくる。」

「え?でも私どこに行けばいいか……。」

「なに、すぐに済ませてくるよ。」

そう言つて催したのか志郎はそそくさと階段から降りて行つた。

「どうしよう……。」

そのまま花陽は明りの無い二階の階段に一人取り残された

「えつとお……。」

そうつぶやいて、近くにあつた戸を開けてみると、

「ふぬぬぬぬにに……!このくらいになれば……!」

顔にきゆうりとパツクをつけて鏡の前でバスタオルを一枚だけ巻いた姿で胸を力の限りに胸を寄せていた穂乃果の妹、雪穂の姿があつた。花陽は見えてはいけないものを見てしまったと思つて早急に戸を閉めた。

「らーんらーんらーん、らーんらーん♪」

と、歌声が隣の部屋の中から聞こえてきたので今度は少しだけ開けて覗いてみると、

「ジャーン!ありがとー!!」

ライブのイメージトレーニングなのか、マイクを片手にノリノリでポーズを決める海

未の姿があつた。

もちろんこれまた見てはいけないものだと思つてそつと戸を閉めた。

「どうしよう……。」

花陽はどうしていいか分からずに途方に暮れていると、部屋の中から走るような足音が近づいてきて、

「ぬっ!!」

海未が悪鬼羅刹のような声を出しながら戸を開け、花陽が驚いて身を引かせるとさらに、

「ふっ!!」

雪穂が後ろに飛び出してきたのだ。そして二人は前後から花陽を睨みながら低い声で尋ねた。

「見ました……?」

周りから見ればシニールな絵面にしか見えない図だったが、花陽本人からすればまさに『前門の虎、後門の狼』といったところだったろう。もちろん正直にはいと言えそうにない状況で万事休すといった状態だったが、

「二人とも（お前ら）なにやってんの（だ）?」

救世主は二人現れた。

「ご、ごめんなさい……。」

「ううん、こつちこそごめん。」

「俺こそすまんかったな。あの場でお前を残してしまったのがまずかった。」

穂乃果と海未、花陽、そして志郎の四人は穂乃果の部屋でテーブルを囲んで座っていた。

「あと、俺に非があるのは分かるが何故俺は穂乃果に殴られたんだ？」

そういう志郎の顔目元が赤くなっていた。

「ごめん、雪穂の方を見ないようについ……。」

「ああ、そういうことなら仕方あるまい……。」

穂乃果は、バスタオル一枚だった雪穂を志郎が見ないようにとつさに志郎の目を覆うとしたが速さの加減が効かず、張り手をかますことになってしまったのだ。

「それはともかくとして、海未ちゃんがポーズの練習をしてたなんてねえ……。」

穂乃果がにやけ顔で海未に話を振ると、

「ほ、穂乃果が店番でいなくなるからです!!」

慌てて海未は穂乃果に反論する。

「ぶつ、ふふふ……。う、海未がノリノリでポーズを……。ふふつ。」

「志郎も笑わないでください!!」

「いやあすまんすまん。だがしかしこの場に幸雄がいなかったのが不幸中の幸いだったな。あいつがいたら二週間はいじりまわされていただろうな．．．。ははは。」

「このことは他言無用ですよ．．．!!」

「わかつてるわかつてるって．．．。ふふふ。」

「いいです ね!?!」

「アツハイ、すいませんでした。」

海末の超が付くほどの低い声と不自然なまでに爽やかな笑顔での恫喝を前に、志郎はただうなずくことしかできず、笑いもピタリと止まった。

「あ、あの．．．。」

花陽が話を切り出そうとするも、

「おじやましませす。」

ことりが入ってきたことで遮られてしまった。

「あ、お邪魔してます．．．。」

花陽がことりに対してそう言うと、

「え!?!もしかして、本当にアイドルに!?!」

そういつてことりは早合点して目を輝かせるが、

「違うよ、たまたま志郎くんと一緒にお店に来たからご馳走しようと思って……。穂むら名物『穂むら饅頭』、略してほむまん！おいしいよ。」

そう言つて穂乃果は自分の店の名物を花陽に勧める。

「あ、穂乃果ちゃん、パソコン持ってきたよ。」

「ありがとう！肝心な時に限つて壊れちゃうんだ。」

「パソコン？何に使うんだ？」

「ああ、志郎には教えてませんでしたね。実はネットにあのライブの動画が上がつてたみたいで……。」

「ほんとか!？」

「ええ、なんでも結構好評だとか……。」

ことりがパソコンをテーブルに乗せようとすると、花陽は邪魔にならないように饅頭とせんべいに乗っている皿をどかした。

「あ、ごめん。」

「い、いえ。」

「それで、ありましたか？動画は……。」

「まだ確かめてないけど、多分ここに……。」

「あつたあ!!」

「本当ですか!」

ところがサイトを開くと、ファーストライブの動画が再生された。

(本当にあの時のライブのだ……。しかもかなり綺麗に、そして見事なカメラワークで録られている……。ヒフミがやったのか? いや、あげたなら真っ先に穂乃果たちに報告するはず……。ならいったい誰が……。)

動画を見て穂乃果たちが踊っていた時の感想を話している中で志郎は真剣な表情で考えていた。

「あ、すまん小泉。そこからだと見えにくく……。小泉?」

「……」

花陽は両手に皿を持ったまま、真剣な表情でライブの映像にくぎ付けになっていた。

「小泉さん!」

海未が不意に花陽を呼んだ。

「あ、はっはい!」

「スクールアイドル、本気でやってみない?」

「え!? でも私、向いてないですから……。」

花陽はそう言って断ろうとするが、

「私だって人前に出るのは苦手です。向いてるとは思えません。」

「私も歌を忘れちゃったりするし、運動も苦手なんだ。」

「私はすごいおつちよこちよいだよ！」

「で、でも・・・。」

「プロのアイドルなら私たちはすぐに失格。でもスクールアイドルならやりたいって気持ちを持って、自分たちの目標を持ってやってみることはできる!!」

「ことりは優しく、そして力強く花陽にそう言った。

「それがスクールアイドルだと思います。」

「だからやりたいって思ったらやってみようよ!!」

「二人もここのりの言葉に賛同する。

「もつとも、練習は厳しいですが。」

「海未ちゃん？」

「あ、失礼。」

「ふふ、ふふふ・・・。」

三人は笑いあい、それを見る花陽の顔も穏やかなものになっていた。

「ゆつくり考えて、答え聞かせて？」

「私たちはいつでも待ってるから！」

「お邪魔しましたー。」

話が終わって、志郎と花陽は先に帰った。

「あの、先輩……。先輩はどうして、sのサポートをしようと思ったんですか？」

花陽はまた、志郎に質問した。

「どうして、か。あれは廃校を阻止するために始めたのは知ってるよな。俺は座して待つだけなのは好きじゃなくて、あいつらの積極的な姿を見てそれを手伝おうと思ったんだ。」

「そうなんですか。」

「最初の頃は歌も練習場所もグループも何もかも決まってくなくて幸雄と一緒に頭を抱えたもんだが、それでもあいつらは明るく前を向いて力強く歩いていた。そんな姿に見惚れたんだよな……。あ、惚れたって変な意味じゃないぞ？」

「ふふふ……。」

花陽は普段は冷静で悠然と構えている志郎が慌てているのが可笑しかったのか少し笑っていた。

「とにかく、あいつらの言う通りやってみたいと思ったら、やってみるのが一番だ。もちろん決めるのはお前自身だからゆっくり考えるといい。」

「は、はいーじゃあ私はこっちなので……。」

「ああ、またな。」

花陽は志郎と別れて帰っていった。志郎は花陽の後ろ姿を見送りながら、

(小泉花陽……。彼女ならきつと……。いや、それを決めるのはあいつだ。それにしても、まるでわが子を見るような気分だな。そういえば、信勝も現代ならば高校生だったか……。)

そう思う志郎の頭上には月が輝いていた。

翌日の放課後、花陽は中庭の木の下の椅子に座って落ち込んでいた。

(私、本当にできるのかな……。？さっきの授業で当てられた時も勇気を出して声を大きくしたら裏返って笑われちゃったし……。)

そんな花陽のもとにある人物が来た。

「何してるの？」

「西木野さん……。」

「あなた、声は綺麗なんだからあととはちゃんと大きな声を出す練習をすればいいだけじゃないよ。」

「でも……。」

そう言つて口籠る花陽に真姫は、

「ふう。あーあーあーあーあー。はい。」

発声練習の手本を見せた。

「え？」

「やって。」

「あーあーあーあー。．．．。」

「もつと大きく！はい立って！」

「は、はい！」

「あーあーあーあーあー。」

「あーあーあーあーあー。」

「一緒に！」

「あーあーあーあーあー。」

中庭に花陽と真姫の透き通った声が響き渡った。

「あっ！」

「ねっ、気持ちいいでしょ？」

真姫が笑顔でそう言うのと、

「うん．．．。楽しい。」

花陽もまた、笑顔でそう答えた。

「はい、もう一回！」

真姫は照れ隠しをするようにもう一回発声練習をしようとする、

「かーよちーん。西木野さん？どうしてここに？」

凜がやってきた。いつもは一人でいる真姫と一緒にいることを不思議に思ったが、励ましてもらってたんだ。」

「わ、私は別に……。」

「それより今日こそ先輩のところに行つて、アイドルになりますつて言わなきゃ！」
真姫の言葉を遮るように花陽の手を握った。

「そんな急かさない方がいいわ。もう少し自信をつけてからの方が……。」

「なんで西木野さんが凜とかよちんの話に入ってくるの!？」

「っ！別に歌うならそっちのほうがいいって言っただけ！」

「かよちんはいつも迷つてばっかりだからパツと決めてあげたほうがいいの!!」

「そう!?!昨日話した感じじゃそうは思えなかったけど。」

「あの、喧嘩は……。」

花陽は二人の仲裁をしようとするが、

「むうっ！」

「むう……!!」

二人は睨み合つたままだつた。

「あわわわ……。」

「かよちんいこ！先輩たち帰っちゃうよ!!」

凜が花陽の手を引いて連れて行こうとすると、

「待って！」

そう言つて花陽のもう片方の手を真姫がつかんだ。

「どうしてもつていうなら私が連れて行くわ！音楽に関しては私の方がアドバイスできるし、*Ms*の曲は私が作つたんだから!!」

と言いつつ放つた。

「あ、そういえば昨日も先輩が……。」

「あつ、いや、ええつと……。」

真姫は思わず言つてしまったといった表情で戸惑つたが、

「とにかく行くわよ！」

と言つて花陽の手を引いて歩きだした。

「待って！連れてくなら凜が！」

「私が！」

「凜が！」

「私が！」

そういういいいながら二人は花陽を引きずりながら穂乃果たちの所へ歩いていく。

「誰か……。ダレカタスケテーーー!!!」

花陽の悲鳴が学校にこだました。

花陽たち一年生三人組が、sの所にたどり着くころにはもう空は夕陽がさしていた。

(なんか小泉が調査員に捕まったエイリアンみたいになってるんだが、ツッコんだ方がいいんかね……。?)

(やめとけ幸雄。今それをやると確実にヤバいことになるぞ。)

「つまり、メンバーになるってこと?」

志郎と幸雄が一年生たちの尋常じやない様子について小声で話してる中でことりがそう聞くと、

「はい! かよちゃんはずっとずっと前からアイドルをやってみたって思ってたんです!」

「そんなことはどうでもよくって、この子は結構歌唱力はあるんです!」

「どうでもいいってどういうこと!?!」

「言葉通りの意味よ。」

凜と真姫が言いあっていると、

「わ、私はまだ、なんていうか……。」

「もう！いつまで迷ってるの!?絶対やった方がいいの!!」

「私もそれには賛成！やってみたい気持ちがあるならやってみた方がいいわ!」

まだ煮え切らない花陽に対して凜と真姫が喝を入れた。

（さつきまで星空と西木野は衝突していたが、花陽を思う気持ちは同じだったのだな。）

「で、でも……。」

「さつきも言ったでしょ、声を出すなんて簡単！あなただっただけでできるわ!!」

真姫は花陽の肩をつかんで激励した。

「凜は知ってるよ。かよちゃんがずっとずっとアイドルになりたいって思ってた事!」

凜もまた花陽の肩をつかんで激励する。その目はまっすぐに、そして力強く花陽の目を見つめていた。

「凜ちゃん、西木野さん……。」

「頑張つて、凜がずっとついてあげられるから。」

「私も少しは応援してあげるって言ったでしょ?」

凜と真姫が花陽を励ます様子を穂乃果たちは笑顔で見守っていた。志郎と幸雄もま

た然りである。

(がんばれ小泉。あと一步、一步だけ踏み出して見せろ……！)

志郎は花陽をまつすぐ見据え、心の中で激励の言葉をかけた。その時の志郎は、子を見守る父親のような顔をしていた。

「えつと……、私、小泉……。」

緊張しているのか花陽はうまく言葉を出せないでいたがその時、

「あつ……。」

凜と真姫は、彼女の背中を優しく押してあげた。花陽が振り向くと、凜と真姫はただ笑顔を向けた。

「……！」

幼馴染と新しい友の優しく、そしてこれ以上ないほど温かく強い後押しに目に涙を浮かべた。そして、花陽は意を決して先ほどまでの弱気な表情から打って変わって強い意志を目に込めて穂乃果たちの方を向き、ちらりと志郎の方を見た。

花陽の視線に気づいた志郎は、

(行け。)

ただその一言を、声に出さず口の動きだけで伝えた。声に出さずとも彼女なら進める、そう判断しての行動だった。

そして花陽はその志郎の声なき激励が伝わったのか一息呼吸を入れて、穂乃果たちに言葉を放つ。

「私、小泉花陽と言います。一年生で、背も小さくて、声も小さくて、人見知りで……特異なものも何もないです……！」

穂乃果たちは花陽の言葉に静かに耳を傾ける。

「でも……、でも……！アイドルへの『想い』は誰にも負けないつもりです！だから……、
μ'sのメンバーにしてください!!」

花陽は強い決意の言葉と共に頭を下げた。

「(ちらい)そー」

花陽がその言葉に顔を上げると、三人は笑顔で、そして穂乃果は手を花陽に差し伸べ、
「よろしくー！」

と、屈託のない笑顔で言った。

花陽は涙を流すも、穂乃果の言葉に応えるように笑顔で彼女の手を握り、握手を交わした。

そんな二人を祝福するかのように夕陽は西の空に赤々と強く輝いていた。

「かよちゃん、偉いよお……。」

凜は気弱だった幼馴染の成長に涙ぐんでいた。

「何泣いてるのよ……」。

「だって……、つて西木野さんも泣いてる?」

「だ、誰が!泣いてなんかないわよ!」

真姫はそう言い返すが、目にはうつすらと涙が光っていた。

「それで、二人は?二人はどうするの?」

「え?どうするつて……ええ!」

ここのりの言葉に凜と真姫は意外そうに驚いた。

「まだまだメンバーは募集中ですよ!」

「うん!」

海未とここのりも凜と真姫に笑顔で手を差し伸べた。

二人は少し戸惑った様子だったが、

『そうやって義務を言い訳にして、やりたいことを諦めて欲しくないんだよ。』

『俺の人を見る目は誰よりも確かだからな。俺の炯眼に狂いはねえ、命だって賭けてやるや。』

二人の脳裏には志郎と幸雄の言葉がまだ鮮明に響いていた。

「はい!よろしくお願いします!!」

そうやって二人は海未とここのりの手を取った。

翌日の朝……。

「まさか一気に三人も増えるとは思わなかったな！なあ志郎、お前もそう思うだろ!」

「ああ、だけど心の中ではきつとこうなることは分かっていたと思うんだ。お前の事だ、お前も分かっていたんだろう？だから西木野や星空に目をつけていたんだろう？」

「ほう、お見通しでしたか。しかし勝頼さまが小泉が穂乃果と握手していた時に泣いていたのがちと意外でしたな。」

「ああ、なんとというか年が近いせいかな信勝と重なって見えたのでな。」

「なるほど、そういうことだったのですか……。確かに年も近いですし勝頼さまに比べると些か慎重な性格でしたからな。」

「やはり若いうちに死なせてしまっただけに、そういう成長をもう少しだけ見たいという思いが強まってしまったのだろう。それに小泉を見ると何故か親心が芽生えてしまっただよな。」

「ああ、なんとなく分かりますな。源三郎もあの年ごろの頃は大人しかかったですからなあ。」

「源三郎も立派な真田の跡取りになってよかったな。」

「ええ、源次郎ともども自慢の息子ですわ。」

志郎と幸雄は前世における自分の子について話しながら神田明神に向かっていた。そして男坂階段の下に着くと上から

「真姫ちゃん!!真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃん!!」

と凜の声が聞こえてきた。

「よ!一年生諸君、入部して早々仲が良さそうで羨ましい限りですな!」

「それにしてもずいぶん懐かれてるな西木野。」

「ヴェエ、だったら早く引き離してよ!」

「お!」

「どうした幸雄。」

急に幸雄が素つ頓狂な声を上げたので志郎が幸雄の方を見ると、

「おお!」

なんと、花陽が眼鏡を取っていたのだ。

「小泉、眼鏡を取ったのか!」

「はい、コンタクトに変えたんです!に、似合ってますか・・・?」

花陽が志郎と幸雄に聞くと、

「ああ、実に似合ってるぞ!」

「眼鏡をかけててもかわいかったが、もっとかわいくなつたな!!」

志郎と幸雄がほめると、

「あ、ありがとうございます……。嬉しいです……。!」

そう言つて花陽は顔を赤く染めながら笑顔で二人に感謝した。

そんな花陽を見た二人は、

(うおおおおおおお!!かわいすぎかよ!!やべえよ天使が舞い降りたぞ!!)
(子供のようだと思つたがどうやら誤りだったか!!犯罪的にかわいぞ!!)

内心では悶絶していた。

「そういえば気になつたんだが、なんか呼び方が変わつてなかつたか?」

「確かに、昨日は星空は西木野さんつて言つてたような……。!」

「あ、お互いに名前で呼ぶようにしたんです。」

と花陽が首をかしげていた志郎と幸雄に教えた。

「なるほど、確かに互いの距離が縮まつていい方法だな。」

「だから、先輩たちも私たちのことは名前で呼んでよね。」

「凜たちも先輩たちを名前で呼ぶにや!!」

真姫と凜も話に加わつてきた。

「そうか、じゃあ志郎!俺たちも……。!」

「ああ！お言葉に甘えさせてもらおうか！！」

「花陽！凛！真姫！ようこそぞ、sへ！！これからよろしく！！」

「はい！！志郎先輩、幸雄先輩！こちらこそよろしくお願いします！！」

男二人と一年生三人は互いに向き合って改めて挨拶を交わした。

「それじゃ、挨拶もしたところで穂乃果たちが来る前にストレッチと体操を済ませるぞ

！」

「練習は海未と志郎が考えてるんだ、結構厳しいぜ？喰らいついて見せろよ！」

「はい！！」

花陽、凛、真姫の三人の快活な返事が雲一つない朝の空に爽やかに響いた。

13話 にご襲来

μ s に花陽たち一年生三人が入部してしばらく経った頃……。

「何とかメンバー集めの方は目途が立ったな。」

「ああ、これでようやく正式な部になれるってこつたな……つてうお!」

志郎と幸雄が話しながら神田明神の階段を登りきったところで何者かとぶつかったのだ。幸雄にぶつかった人物は何も言わずにそのまま階段を駆け下っていった。

「たく、ぶつかったらすいませんの一言くらい言えつての! 最近の若い連中は礼儀がなつてねえな!」

「いや、俺たちも(見た目的には)最近の若者なんだがな……。しかしこんな時期にコートにサングラスなんて完全に不審者じゃねえか……。?」

「まあいい、今日は海未が弓道部に顔を出してて休みなんだよな。」

「ああ、だから今日は穂乃果とことりが先に来てるはず……。ん?!」

「どうしたんだよ志郎? つてどういう状況なんだこりゃ?」

志郎と幸雄の視線の先には額を赤く腫らして気絶している穂乃果と、穂乃果のそばに呆然と座り込んでることりがいた。

「あ、志郎くん、幸雄くん。」

「どうしたんだ一体？」

「実はね、さつき誰か分からない人に解散しなさい！つて怒られちゃったの。」

「は？唐突だなそいつは。」

「それで、そいつはどんな格好をしていたんだ？」

「えつとね、コートを着ててサングラスをかけてて、ツインテールだったような……。」

「ここの言葉を聞いて志郎と幸雄は、

「おい、幸雄……。」

「間違いねえな、さつきそこでぶつかった奴だ。」

「え、そうなの？」

「ああ、だけど気にする必要はあるまい。次に来たときは俺と幸雄できつくお灸をすえ

てやるからな。」

「とりあえず穂乃果を起こして練習すつか。」

「そうだね。」

そして放課……。

「それではメンバーを新たに加えた新生スクールアイドル、μsの練習を始めたと思いますー!」

「いつまで言ってるんですか?それはもう二週間も前ですよ。」

穂乃果の音頭に海未がツツコミを入れる。花陽たちが加入してからずっと同じことを言っていたからだ。

「だって嬉しいんだもん!!」

穂乃果の心から嬉しそうな様子を見て海未はしようがないと言わんばかりに微笑む。

「なのでいつも恒例の、1!」

「2!」

「3!」

「4!」

「5!」

「6!」

「くうくくく!!六人だよ六人!!アイドルグループみたいだよね!」

「志郎くんたちは言わないの?」

「ことりの疑問に対して幸雄は、

「いやだって、俺たちはμsのメンバーじゃねえし。」

と答え志郎もまた、

「あくまでも俺たちはサポートだからな。」

と答えた。

「いつかこの六人が神6だとか仏6とか言われるのかなあ!!」

「仏だと死んじやつてるみたいだけど・・・。」

「毎日同じことで感動できるなんて羨ましいにやう。」

穂乃果の言葉に花陽がツツコミを入れて、凜がさりげなく毒を吐いた。

(まあそもそも俺と幸雄は一度死んでるんだよな・・・。)

「というか凜は実は意外と毒舌なんだな・・・。」

「私賑やかなの大好きでしょ?それにたくさんいれば歌が下手でも目立たないでしょ?

あとダンスを失敗しても・・・。」

「穂乃果?」

「冗談だよ・・・。」

「むしろたくさんいる方が間違えたときとか目立つんだぜ?」

「そうだよ。じゃないと今朝みたいに怒られちゃうよ!」

海未や志郎だけでなく、珍しくことりも穂乃果をたしなめた。

「解散しなさいって言われたんでしたっけ?」

「でも、それだけ有名になったってことだよね！」

「まあ、名が通ってなければアンチなんて湧かないしな。」

「それより練習、どんどん時間が無くなるわよ？」

真姫が髪をいじりながらそう言うのと凜が飛びついてきて、

「おお！真姫ちゃんやる気まんまーん！」

と茶化した。

「べ、別に私はとつととやって早く帰りたいの！」

「またまたあ。お昼休み見たよ？一人でこっそり練習してるの！」

「あ、あれはただこの間やったステップがかっこ悪かったから変えようとしてたのよ。

あまりにもひどすぎるから！」

「お、おい真姫……！」

志郎が止めようとするも……、

「そうですか……。あのステップ……はは……、私が考えたのですが……。」

海未が今まで見たこともないような表情で言った。

「ヴェえ!!」

「気にすることないにや。真姫ちゃんは照れ臭いだけだよね……。ん？」

「……ああ……。」「」

凜が階段を上りながら海未を慰めてる時、穂乃果たち7人が微妙な表情をしていたので凜も後ろを向いて窓を見ると、

「雨だ・・・。」

雨が降っていた。

「土砂降り〜！」

「最近梅雨入りしたっていつてたもんね。」

「それにしても降りすぎだよ！」

「しょうがねえだろ、梅雨なんだから。」

不満を漏らす穂乃果を志郎がなだめる。

「降水確率60%だっていつてたのに・・・！」

「60%なら降ってもおかしくないんじゃない？」

真姫がそういうと穂乃果は、

「だって昨日も一昨日も60%だったのに降らなかったよ!？」

と抗議した。

「まあ、俺たち人間風情は天の気まぐれには逆らえないってこつたな。」

「どういう意味!？」

「というか、昔のお百姓さんみたいですね。」

幸雄の言葉に穂乃果と海未がツッコんだ。

(俺は農民じゃなくて、元大名だったんだけどな・・・w)

と幸雄は腹の底でほくそ笑む。そんな他愛のないことを話していると、

「あ、雨少し弱くなったかも。」

とことりが言った。すると穂乃果は屋上の扉を開けて、

「ほんとだ! やっぱり確立だよ!! よかったあ!」

と言った。凧もそれに便乗する。

「これなら練習できるよ!」

「ですが、下が濡れていて滑りやすいですし、またいつ降りだすかも・・・あ!」

海未がまた雨が降りだすのを危惧するが、穂乃果と凧はそんな事はお構いなしといった様子で小雨の降る屋上に走り出した。

「大丈夫大丈夫、練習できるよ!!」

「う〜〜! テンション上がるにや〜〜!!」

凧はそう言うのと運動神経抜群な志郎でさえ驚くようなアクロバティックな動きをきめるが、

結局、そのあとはみんなでマ〇〇ナル〇に行くことにした。穂乃果は不機嫌そうにフライドポテトを貪り食っている。

「穂乃果、ストレスを食欲にぶつけると大変なことになりますよ。」

「雨なんで止まないの!!」

「私に言われても……。」

「練習する気満々だったのに、天気ももう少し空気読んでよ。ほんとにもう……!」

「気持ちには分かるが少しは落ち着け。後で泣くことになるのはお前自身なんだぞ?」

志郎も海未に続いて穂乃果を注意するが、

「じゃあ、志郎くんが止ませてよ!」

「んな無茶な……。」

この調子であった。

「穂乃果ちゃん。さつき予報見たら明日も雨だつて。」

「ええく!?」

そして穂乃果はため息をついてポテトを食べようとするがポテトはなくなっていた。

「あれ? 無くなった……。海未ちゃん食べたでしょ!」

「自分で食べたのも忘れたんですか!? 全く……。」

穂乃果に反論した後、海未も自分のポテトを食べようとするがこれまたなくなってい

た。

「あ！穂乃果こそ!!」

「私は食べてないよ!!」

「辞めろよ二人とも。みつともないぞ。」

「そうそう。俺と志郎の分を分けてやるから二人とも落ち着けて。な?」

志郎と幸雄が穂乃果と海未の言い争いを止めたところで真姫が話を切り出した。

「そんな事より練習場所でしょ。教室とか借りられないの?」

「うん……。前に先生に頼んだんだけど、ちゃんとした部活じゃないと許可できないって……。」

真姫の問いにことりが答えた。

「そうなんだよね。部員が5人いればちゃんとした部の申請をして部活にできるんだけど。」

「ん!ちよつと待て、お前今なんて言った!?!」

穂乃果の言葉を聞いた志郎が聞き返した。

「え?部員が5人いけばな〜って……。」

「穂乃果、ここにいてるやつを数えてみる。」

「え?8人だけ……。」

「サポーターである俺たち二人を引いても6人になるんだが・・・。」

「あああ!!忘れてた!!部活申請すればいいじゃん!!」

「忘れてたんかい!!」

穂乃果に志郎と幸雄がツツコむ。ツツコんだのはその二人だけのはずなのになぜか女子の声も紛れていた。

「え?」

「は?」

そして隣の壁越しのテーブルの奇抜な格好をした女子が志郎たちと一緒にツツコんでいたのを見て、

「誰だ今の?」

幸雄が疑問を口にしたが、それに割り込む形で真姫が、

「それより忘れてたってどういうこと?」

と聞くと穂乃果は、

「いやあ、メンバーが集まったら安心しちゃって・・・。」

と答えた。

「この人たちダメかも。」

真姫は呆れ気味にそういった。

「よし！明日さつそく部活申請しよう！それしたら部室がもらえるよ！はあく、ほつとしたらおなか減つてきちゃった。さーて・・・。」

穂乃果がハンバーガーを食べようとすると、壁の隙間から何者かの手が穂乃果のハンバーガーをつかみ取っていた。その手の主も気づかれたと察したのかそつと手を引き、そのままそそくさと忍び足で立ち去ろうとしたが、そうは問屋が卸さなかつた。

「ちよつと!!」

穂乃果は走つて立ち去ろうとした奇抜な格好の女子の腕を掴んだ。

「解散しろつて言つたでしょ!」

腕を掴まれた女子が穂乃果に言い返す。

「解散・・・?」

「志郎、多分あいつがことりの言つてたやつじゃねえか?」

「解散!」

幸雄が冷静に分析している傍らで花陽は解散という言葉聞いて動揺した。

「そんな事よりポテト返してよ!」

「そつち（かよ）!」

穂乃果のあまりにも斜め上すぎる言葉に幸雄と花陽は思わずツツコんだ。

「あーん。」

もうありませんよー、と言わんばかりに奇抜な格好をした女子は口を開けるが、穂乃果はその頬を引っ張って、

「買って返してよ!」

と言った。何とも食い意地が張ってるものである。そして女子の方も引っ張られたまま毅然と穂乃果に食いかかる。

「あんたたち歌もダンスも全然なってる! プロ意識が足りないわ!!」

「え?」

穂乃果が驚くとその隙に手を振り払い、

「いい!? あんた達がやってるのはアイドルへの冒涇、恥よ!! とつとつとやめることね!」

そう言って走り去っていった。

「なんだったんだあいつは・・・。」

志郎が呆然としたまま言った。

「うーん、なんかめんどくさいことになりそうだなあ・・・。」

幸雄は頭を掻きながら呟いた。

そして翌日、穂乃果と志郎たち5人は生徒会に部活申請に行ったが・・・。

「アイドル研究部!」

「そう。すでにこの学校にはアイドル研究部というアイドルに関する部活が存在します。」

「幸雄、お前知ってたのか?」

志郎は疑いの目を幸雄に向けるが、

「お、俺は本当に知らねえぞ!?マジでそんなのがあるなんてよお!第一知ってたらそっちに入部するように仕向けてるっての!」

幸雄は反論した。

「確かにその反応を見たら本当みたいだな。疑ってますまん。」

志郎は幸雄に謝罪した。

「まあ、部員は一人しかないんやけどね。」

と希が言った。

「え?でも部活には5人以上って・・・。」

穂乃果が希の言葉に異を唱えようとしたが、

「それはあくまでも設立の話さ。設立すればあとは何人になっても構わねえってことさ。」

幸雄が穂乃果に説明した。

「武藤君の言う通りよ。でも、生徒の数が限られている以上、いたずらに部を増やしたくないのよ。アイドル研究部がある以上あなたたちの申請を受けるわけにはいきません。これで話は終わり……。」

絵里は話を終わらせようとしたが、

「になりたくなければ、アイドル研究部と話をつけてくることやな。」

希が助け舟を出した。

「なるほど、部活同士が合併するなら部活を増やさなくて済むから問題ないっすね!」

と幸雄は手を合わせながら言った。

「そういうことや。さ、部室に行ってみ。」

そして希に促されて8人で部室に行ってみると、

「う……。」

「もしかしてあなたがアイドル研究部の部長さん!？」

穂乃果が驚きの声を上げたも無理はない。何故なら、昨日マ○○○○ルドでひと悶着あった奇抜な格好をした女子が目の前にいたのだから。

彼女の穂乃果たちに対する印象は最悪、果たしてそんな状態で穂乃果たちはアイドル研究部の部長、『矢澤にこ』と話をつけられるのだろうか……。

14話 説得と迎合

穂乃果たちはアイドル部設立させるため生徒会に申請しに行くが、すでにアイドル研究部があることを知らされる。そして希に促され、アイドル研究部の部室に話をつけに行くが部室の前で穂乃果たちに解散するように迫っていた少女と鉢合わせする。そしてその少女こそがアイドル研究部の部長の、矢澤にこだわったのだ。

そして穂乃果たちは気まずいのか互いに立ち尽くしていた。
「いやああああああああ!!!」

先に動いたのはにこだった。猫が威嚇するような声を上げて穂乃果を引つ掻くような素振りを見せ、穂乃果が驚いた隙に部室に逃げ込んだ。

「部長さん！開けてください、部長さん!!」

穂乃果がドアを叩くが開かない。内側から鍵をかけたのだろう。

「籠城する気か？」

「いや、俺たちを追い払う手立てが無い以上籠るのは得策じゃねえな。おそらく逃走経路を用意してるだろうな。」

志郎と幸雄がにこが次にとるであろう行動を分析する！

「じゃあ外からいくにや!!」

と言つて凜が走つていった。

「頼んだぞ凜!」

「志郎は行かないのですか? 足の速さなら凜にも負けないでしょうに……。」

その場に残つた志郎に海未は質問したが、

「いや、俺が追つかけるのは流石に……。ほら、なんか勘違いされるかもしれないし……。」
「まあ、志郎が真剣な表情で追つかけて来たらマジでビビらせちまうし第三者からしたら事件にしか見えねえだろうからな。」

志郎と幸雄が言うには絵面の問題のようだ。

「じゃあ俺が代わりに行つてくるわ。」

「すまん。」

「気にするな、あいつがいきそうな場所は大体割り出せる。そこで伏せてれば確保はできるだろ。」

と言つて幸雄も外へ行つた。

そして待つこと数分が経つた頃、幸雄と凜に抱えられながら気絶してるにこが戻つてきた。

二人の話によると、凜が一度は捕まえるも拘束を振りほどいて逃げられたのだがアルパカ小屋の陰で伏兵として待機していた幸雄がここを確保するために飛び出したところ、彼女が驚いてそのままアルパカ小屋に突っ込んでしまったという。

そして程なくには目覚め、何とか部室に入れてもらった。部室の中はありとあらゆるスクールアイドルのグッズが網羅されていた。

「……………うわあ……………」

「これはすごいな。」

「ああ、生半可なマニアなんぞ相手にならんレベルだな。」

穂乃果たちも、sだけでなく、志郎と幸雄も圧倒されていた。

「あ、A—RISEのポスター！」

「あつちは福岡のスクールアイドルね。」

「校内にこんな場所があったなんて……………」

「勝手に見ないでよね。」

ここは不機嫌そうに言った。

「……………これは……………」

「どうしたんだ花陽？大丈夫か？」

何か様子がおかしい花陽を志郎が心配するが、

「これは伝説のアイドル伝説DVD全巻BOX!!持つてる人に初めて会いました!!!」

「そ、そう?」

「すごいです!!」

「ま、まあね。」

それは杞憂だったようで、花陽はいつもとは打って変わって饒舌になり目を輝かせながらにこに迫った。にこもそっけなさそうに答えるが声は上ずっており、表情も満更でもないといった感じであった。

「へえ、そんなにすごいんだ。」

と穂乃果が言うと、

「知らないんですか!?!」

というと同時に置いてあったパソコンを起動させて、

「伝説のアイドル伝説とは、各プロダクションや事務所、学校などが限定生産を条件に歩み寄り、古今東西の素晴らしいと思われるアイドルを集めたDVDボックスで、その希少性から伝説の伝説の伝説、略して伝伝伝と呼ばれるアイドル好きなら誰もが知ってるDVDボックスなんです!」

いつもの花陽はどこに行ってしまったのかと思われるほどのマシンガントークに、
「花陽ちゃん、キャラ変わってない?」

「アイドル好きとは聞いていたがまさかこれほどは……。」

「これが数奇者って奴なんかね……？」

穂乃果たちは困惑していた。

「通販、店頭共に瞬殺だったそれを二セットも持っているなんて……。尊、敬！」

「家にもう一セットあるけどね。」

「本当ですか!？」

「じゃあみんなで見ようよ。」

「ダメよ、それは保存用。」

穂乃果の提案をにこが即答で拒否すると花陽は机に突っ伏して、

「で、伝伝伝……。」

と言いながら涙を流した。

「それで？何しに来たの。」

にこが話を切り出した。

「アイドル研究部さん！」

「にこよ。」

「にこ先輩、実は私たちスクールアイドルをやっております……。。」

「知ってる。どうせ希に言われて話をつけに来たんでしょ？」

「すごい、大体あつてる……。」

にこの予想があつていたことに志郎は舌を巻いた。

「まあ、いずれはそうなるんじゃないかって思つてたからね。」

「なら……!」

「お断りよ。」

「えっ?」

「お断りつて言つてるの。」

「私たちは、sとしての活動ができる場が必要なだけです。なのでここを廃部にしてほしいというわけではなく……。」

と海未が穂乃果のフォローに入るが、

「お断りつて言つてるの!言つたでしょ!あんたたちはアイドルを穢しているの!」

「でも、ずっと練習してきたから……!歌もダンスも!」

穂乃果はにこにこ対してひるむことなく反論する。

「そういうことじゃない。あんた達、ちゃんとキャラ作りしてるの?」

「はっ。」

にこの予想外の発言に志郎と幸雄は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「キャラ……?」

「そう！お客さんがアイドルに求めているものは楽しい夢のような時間でしょ!? だったらそれに相応しいキャラつてものがあろう！ ったくしょうがないわね。いい？ 例えば……。」

といつてにこは突然後ろを向いた。キャラ作りの手本を見せるつもりらしい。

「にっこにっこにー♡ あなたのハートに、にっこにっこにー♡ あなたに笑顔を届ける矢澤にっこにっこにっこにーって覚えてラブにっこっ♡」

これまた予想外に強烈なものが出てきたので八人は思わず黙ってしまった。

「どうっ？」

そしてにこに感想を求められるが、

「う……。」

「これは……。」

「キャラというか……。」

「わたし無理。」

「ちよつと寒くないかにゃー？」

「ふむふむ……！」

熱心にメモを取ってる花陽を除けばどれも微妙な反応で、真姫と凜に至っては真正面から切り捨てたのである。

(流石にこれは反応しづらい……！)

(アカン……、笑うな幸雄、絶対笑うな……！)

男子二名も言葉にこそ出してはいいがかなり戸惑っていた。

「そのあんだ、今寒いって……。」

「いや……すつごい可愛かったです！最高です！」

凧は苦し紛れに凧を褒めるが、にこの怒りが収まる気配は見えない。

「あ、でもこういうのもいいかも。」

「そうですね！お客様を楽しませるための努力は大事です！」

「素晴らしい！さすがはにこ先輩!!」

凧の言葉を皮切りに、ことりたちもにこを褒めそやすが、

「おい、露骨なごますりはやめとけ……！」

「花陽の以外は露骨すぎるよなあ。」

志郎はことりたちをたしなめ、幸雄は呆れてため息をつく。

「よーし！そのくらい私だって……。」

「出てって。」

「え？」

「とにかく話は終わりよ！出てって!!」

そうして穂乃果たちは部室を追い出されてしまった。

「あく！にこ先輩!!」

「今のは完全にお前らが悪いぞ。」

「うう……。」

「やっぱり追い出されたみたいやね。」

そう言つて現れたのは希だった。

「まあ、にこつちは難しい子やからねって、一人足りなくない?」

「あれ、そういえば……。」

「幸雄がいませんね。」

希の言葉で幸雄がいないことに気付いた穂乃果たちはあたりを見回す。

「帰ったんじゃない?」

「いや、あいつは帰ってないぞ。」

「じゃあ、どこに行つたつていうのよ。」

真姫の問いに志郎は苦々しい顔で応えた。

「どうやら俺たちはいつの間にかあいつの囷にされてたみたいだな。」

「囷つてどういうことよ!」

「言葉の通りさ。どうやら幸雄は矢澤先輩に接近する機会をうかがっていたらしいな。」

「まるで私たちがいいように使われたように聞こえるのですが。」

「別にあいつには悪意はない。ただこれだけ言えるのは、ここまであいつの思う通りになることが上手く行った以上ここからはあいつの領域だ。俺たちが手を出せるレベルの話じゃなくなったってことだけだな。」

一方部室では……。

「全く何なのよあいつら……。アイドルの何たるかを全然分かってないんだから！」

「ここは怒りが収まってない様子だった。」

「まあまあ、そういうなって先輩。あいつらもまだ駆け出しなんだしさ。」

「駆け出しだからって甘やかすつもりは……。っとうわああ!？」

「ここは驚いて椅子ごと転んだ。それもそのはず、穂乃果たちと一緒に追い出されたはずの幸雄が部室にいるのだから無理もない話である。」

「なんであんたここにいるのよ!？さっき追い出したはずでしょ!？」

「まあ、8人もいっぺんに相手にしてりや注意も散漫になるでしょうに。しかし、ガキの頃に習ってた戸隠流の忍術が役に立つとは思わなかったぜ。」

「はあ!？とりあえずあんたも出ていきなさいよ。」

そう言つてにこは幸雄を追い出そうとするが、

「おっと。ここでドアを開けてみる、あいつらは単純だからな。お前に受け入れてもらえたと思ひ込んで入ってくるぞ。そうなつたら今度は追い出しづらくなるぜ?」

幸雄はいつもの飄々とした表情をさらにやつかせながらにこに忠告する。

「……」

にこは幸雄を追い出すのを諦めた。

「で、それでなんの用なのよ。」

「なに、ちと話がしたいだけさ。あんたには興味があるんでね。」

「にこに……?」

「ああ。とりあえず逃げられるとは思わないほうがいいぜ?ここからは完全に俺の領域だ。包み隠さず話してもらうぜ?」

幸雄の垂れ目の三白眼がにこの目をぶれることなく見据える。にこも幸雄の真剣な表情を見て逃げたつもりが逆に退路を断たれたことを感じた。

「ふう、なんの話がしたいのよ。」

「おお、物分かりがよくて助かりますね。じゃあ、唐突に聞かせてもらいますが先輩ってスクールアイドルやってたでしょ?」

「!?」

にこは幸雄が知らないはずの話を出されて驚愕した。

「その表情を見る限り、本当みたいですね。」

「ええ、そうよ。希から聞いたのかしら?」

「まさか、アイドル研究部の存在も今日初めて知ったんですよ?ただ、あいつらへの接し方を見て薄々そうなんじゃないかって思ってただけですよ。」

「あんたやけに鋭いわね、何者なのよ。」

「なあに、人を見る目に長けたただの高校生ですよ。」

「なんか白々しいわね。……そうよ。私は一年生の頃、スクールアイドルをやってたわ。今は見てわかる通り、もうやってないし、アイドル研究部も私一人だけ……。」

「ほかのメンバーはみんなやめちまったんですか。」

「ええ、そうよ。一人やめ、二人やめ……。いつの間にか私だけしか部室に来なくなっていた。みんな言ってたわ、ついていけないって。」

「……。」

「私も分かつてはいるのよ。自分の意識が他人より高すぎたことぐらい。でも、好きな事なら必死にやりたいって思うでしょ!」

「だけどその思いが強すぎたあまりに、周りがついていけないのが分からず結局グループは空中分解しちまったってわけだ。んで今は自分が手に入れられなかったものを手に

入れてるあいつらが羨ましくて、あいつらの活動にケチつけてるんだろ？」

「なんなのよあんた……。」

「あ？」

「さつきから何なのよ！したり顔で核心をズバズバ突いてきて！あんたにあたしの何が分かるつてのよ!?!」

にこが幸雄に対して激高した。幸雄はこの言葉に、哀愁のこもった表情で答えた。

「分かるさ、痛いほど。俺はあんたと同じ……、いや、それ以上に見てられない末路をたどった男を見てきたからさ。」

「あたしと、同じ……?」

「ああ、具体的には違うが『あいつ』も理想の高い男だった。でも周りは『あいつ』をそこまで信頼してなかった。だから『あいつ』は信頼を得るために東奔西走、死に物狂いで走りまくった。でも結局空回りでしかなかった。でかい失敗をして大勢の仲間が離れて行った。それでも立て直そうと努力したけど残った仲間の大半に手のひらを返されて、何も報われることなく終わっちゃった。」

「……。」

「矢澤先輩はさ、そんな男にそっくりなんだよ。理想に向かって猪突猛進で進むとことか、理想が強すぎて周りが少し見えてなかった不器用なところかな。」

「褒めてるつもりなのそれ？」

「ああ、俺は完璧で優秀な人間も嫌いじゃないが、揺るぎない強さを持つてるがどこか足りてない奴はもつと好きだぜ。支え甲斐があるからな。」

「あんた、なかなか言うわね。」

「ええ、口は達者な方なんです。それより、もう一度スクールアイドルをやる気は無いかな？」

「はあ!？」

幸雄の突然の提案ににこは驚いた。

「あいつらとなれ合う気は無いわ。」

「そうじゃなくて、あんた一人でステージに立つんだよ！もちろん、俺はマネージャーでね。」

「いいの？あんた、それってあいつらを裏切ることになるわよ?」

「あいつらはこの学院を救うためにアイドルを始めたんだ。名物が増えるならあいつらもきつと喜ぶはずだ。それに一つの部に一つしかグループを作っちゃいけないって決まりはない。俺が陰で支えてあんたが歌ってみんなを楽しませる、悪い話じゃないと思うが……。」

「お断りよ。」

なんとにこは幸雄の提案をあっさりと断った。

「な、なんでだよ？まだ意地張ってるのか？悪い話じゃあ……。」

幸雄は食い下がろうとするが、

「意地なんて張ってないわ。確かにあんたと手を組めばきつと上手く行くんでしょね。でも私はね、なるなら自分の力であつて、自分の力でありたいの！イタいつて言われてもいいわ。だってそれがあたしの『女子道』なんだから。それに、あんたはあいつらのために力を尽くしてる方が似合ってるわ。」

と、にこは清々しい表情で幸雄を突き返した。

「……ははつ。まさかこの俺が言い負かされるとはな。やっぱあんた眩しいよ。そういうところも『あいつ』そっくりだ。」

「さつきから気になつてただけど、『あいつ』って誰よ？」

「それはまだ言えないな。とにかく、俺はあんたのことも応援してるぜ。じゃあな。」
幸雄はそう言つて部室から出て行つた。

そして帰宅後……。

「ん？電話か。志郎からか……。もしもし？」

「おお、幸雄か。矢澤先輩との話はどうだった？」

「ああ、とりあえず先輩の過去を聞いたぐらいだな。後は二人で手を組んでスクールアイドルやらないかって勧誘した。」

「過去か、俺たちも希先輩から聞いた。流石の幸雄も形無しらしいな。」

「そうなんだよな。俺はどうやらああいう根底にあるものが強い奴は少し苦手らしい。」

幸雄は珍しく弱音を漏らす。

「そこでなんだが、穂乃果から提案があつてな？実は、ごによごによ……。」

「おお！それはいい案だな志郎。実にあいつらしいや。」

「そこで明日……。」

「なるほど……。」

翌日の放課後、にこはいつも通り誰もいない部室に足を運んでいた。途中にこれから友達とどこかに遊びに行く計画を練っている生徒とすれ違い、それを少し羨ましいと思しながら……。

そして、部室のドアを開けると……。

「「「お疲れさまでーす!!」」」」

なんと部室には穂乃果たちがいた。志郎と幸雄も一緒だった。

「なっ・・・!」

「お茶です部長!!」

「部長!」

「今年の予算表です部長!」

「なっ・・・!」

いきなり部長と呼んで畳みかけてきた穂乃果たちにはこは困惑していた。

「部長く、ここにあったグッズ、邪魔だったんで棚に移動しておきました。」

「こら勝手に・・・!」

「さ、参考にちよつと貸して、部長のおすすめの曲。」

「な、なら迷わずこれを・・・!」

花陽は『伝伝伝』を取り出すが、

「あぁー!!だからそれは・・・!」

「所で次の曲の相談をしたいのですが部長!」

「やはり次はアイドルをさらに意識した方が良いかと思ひまして・・・。」

「それと、振り付けも何かいいのがあったら・・・。」

「歌のパート分けもよろしくお願いします！」

穂乃果たちを見て幸雄は、

「これで効果があるかね？」

と小声で志郎に問いかけた。

「ああ、向こうが歩み寄れなければこちらから歩み寄ればいい。穂乃果とことりが海未と知り合った時の経験をもとに考え付いたそうだ。」

「あいつらの？」

「ああ、海未は恥ずかしがり屋でなかなか周りに馴染めなかったが穂乃果が遊びに誘ってそこから友達になっただけらしい。」

「なるほど、まさにあいつらしいやり方だな……。」

そう言つて幸雄はこの方に目を向けた。

「こんなことで押し切れると思つてるの？」

ここは穂乃果に問いかけた。

「押し切る？ 私はただ相談しているだけです。音ノ木坂アイドル研究部所属の……、μ'sの『7人』が歌う次の曲を！」

「7人……？」

ここは穂乃果たちを見回す。

「ふふ、矢澤先輩。どうやらこいつらは、最初っからあんたと一緒に踊りたかっただけみたいっすね。」

幸雄はここに笑いかけた。

「俺もこの7人を全力で支えていきます！」

志郎も幸雄の後に続く。

「・・・厳しいわよ？」

「分かってます！アイドルへの道が厳しいことぐらい!!」

「分かってない！あんたは甘々、あんたも、あんたも、あんた達も!!」

「うひょく、手厳しいねえ。」

「その男二人！あんた達もよ!!アイドルを支えるんなら生半可な覚悟じゃ勤まらないわよ!!」

「ほほう、俺たちの覚悟を侮ってもらっては困りますね先輩！俺たちは最初っから全力ですよ!!」

志郎が挑戦するかのようになにに答えた。

ここは志郎たちを指さしながら厳しく、そして堂々と語る。

「アイドルっていうのは笑顔を見せる仕事じゃない・・・。笑顔にさせる仕事なの!!それをよく自覚しなさい!!」

「そしていつの間にか雨は止み、にこを加えて7人になり、アイドル研究部として正式に活動を認められた。sは屋上で練習していた。

「いい!? やると決めた以上、ちゃんと魂を込めてアイドルになりきってもらおうわよ!! 分かった!?!」

「!!!!!! はい!」

「声が小さい!!」

「!!!!!! はい!!」

一方生徒会室では、アイドル研究部への入部届を見て絵里が苦い顔をしていた。

「えりち。」

「ん?」

ふと、希に呼ばれて振り向くと、

「見てみ。雨、止んでる。」

希はどこか晴れやかな顔をしながら窓からすこしづつ晴れていく空を見ていた。絵里もまた窓に近づいてみると、屋上でにこが中心となって練習してる姿が見えた。

「こいつち……」

そうつぶやく希の顔はとても穏やかだった。

「「「「「につこにつこにー!!」「「「「「」

「全然ダメ。もう一回!釣り目のあんた!気合入れて!!」

「真姫よ!!」

「「「「「につこにつこにー!!」「「「「「」

「しっかし、これってやる意味あんのかね。」

「意味はなくはないさ。そう、この世に意味のないものはない。勝頼だった頃の人生にだって意味はあつたはずさ。」

「志郎……。」

志郎と幸雄が穂乃果たちが練習してる傍らで話していると、

「そここのあんた達!ぼさつとしてないであんた達も参加しなさい!」

「「ええ!?!」

「当たり前でしょう!アイドルを支えるんならあんた達もそのアイドルたちに染まらなきゃいけないんだから!はい!あんた達もやりなさい!!」

「どうするよ?」

にこの言葉を聞いて凜たちは不満そうにするが、

「何言ってるの！まだまだこれからだよ!!」

穂乃果はそう言つて凜たちを鼓舞して、

「にこ先輩！よろしくお願いします!!」

その言葉を聞いたにこは涙で潤んでいるのであろう目をこすつて、

「よーし！頭からいっくよー!!」

と笑顔で言つた。その笑顔は、雨が止んで雲の間から顔を出した太陽の如く、晴れやかなものであつた。

15話 センターは誰だ!?

「ここはやつぱり歌とダンスで決着をつけようじゃない!!」

アイドル研究部の部長にして、sの新メンバーである矢澤にこはマイクを片手に穂乃果や志郎たち8人の前で音頭を取った。

「決着?」

「みんなで得点を競うつもりかによ?」

こことりと凜がにこに質問する。

「その通り!歌とダンスが一番上手い者がセンター!どう?これなら文句ないでしょ?」

「でも、私カラオケは・・・。」

「私も特に歌う気はしないわ。」

海未と真姫は乗り気でない様子だがにこはそれを鼻で笑い、

「なら歌わなくて結構!リーダーの権利が消失するだけだから!」

と二人を挑発した。

「なあ部長、一つ質問いいか?」

志郎が挙手してここに質問した。

「なによ志郎、なんか分かんないことでもあんの?」

「なんでセンター争いにメンバーじゃない俺たちが呼び出されたんだ?」

事の発端は十数分前にさかのぼる……。

μ sは新しいPVの撮影に向けて、生徒会の副会長から全校に向けた取材を受けていたのだが、μ sの普段の様子を見た希のある言葉がことが始まるきっかけとなったのだ。

「うち前から思ってたんやけど、穂乃果ちゃんってどうしてμ sのリーダーなん?」

その言葉をきっかけに、部室で緊急会議が開かれたのだ。議題はもちろん「μ sのリーダーには誰が一番ふさわしいか?」である。

リーダーを決めるのは組織のその後の動きを左右するほど重要であることもあって会議は難航した。しかし埒が明かないと思ったにこにより、急ぎよ「μ sのリーダー決定戦」が開幕することとなった。

「と、いうわけであんた達には公平なジャッジを取ってもらおうと思ったから呼んだのよー!」

「なるほど。まあ、それなら納得いくな。」

「確かにリーダーを明確に決めるのは大事だな。俺なんか当主として認められるのにとれだけ苦勞したか……、ブツブツ……。」

「し、志郎くん?なんか顔色が悪いよ?」

穂乃果が急にどんよりとした雰囲気を纏った志郎の身を案じた。

「あ、ああ気にするな。たまにこいつこうなるんだよ。すぐに元通りになるから心配いらんぞ。」

と、幸雄が穂乃果に言った。そんなやり取りが繰り返されていた中で、

「くつくつく……。こんな事もあるうかと高得点の出やすい曲のピックアップは完了してるのよ……。これでリーダーの座は確実に……!」

にこはメモ帳を見ながらにやにや笑っていたが、

(矢澤パイセン……、ありや十中八九ろくでもないことを考えているな……。まあ、どうせくだらない小細工だろうからどうでもいいけどな。)

と思いつつながら幸雄は不気味に笑うにこを見ていた。

「さあ!始めるわよ!!」

そしてカラオケが始まってから数十分後……。

「ふう。恥ずかしかったです……。」

「「わあー!!」」

最後に歌い終わったのは海未だった。ちなみに得点は93点という高得点を叩き出した。ちなみに1位は真姫の96点で、2位は花陽の94点である。

「前から思っていたが、海未の歌声もなかなかのもんだよな。」

「ああ、メンバーの中ではかなりのもんだな。」

志郎と幸雄は海未の歌声を絶賛した。

「海未ちゃんが93点だから…、これでみんな90点越えだね!」

ことりがみんなの得点をノートにまとめながら言った。ここは自分の予想が大きく外れる結果になったからか、苦々しさと驚きを合わせたような表情で、

「化け物か…!」

と呟いた。

「ねえ、志郎くん達は歌わないの?」

「はあ?」

穂乃果が志郎に尋ねた。

「だって志郎くんと幸雄くんつてばさつきからずっと私たちの歌を聞いてばかりだから退屈じゃないかなって思ってたよ。」

「いや、あくまでもこれはお前らのセンターを決めるためのものであって俺たちが歌う

必要はないだろう?」

「そーそー、俺たちがしゃしゃり出る必要なんてないっしょ。」

志郎と幸雄は消極的に答える。すると穂乃果はニヤリと笑い、

「あれー? 志郎くんたち歌わないの〜?」

と二人をいつも弄られている分の仕返しを兼ねて煽ってみた。

「あ?」

穂乃果の煽りに志郎が食いついた。それを見て穂乃果がさらに続ける。

「だってせっかくカラオケに来たんだし歌わないと! ひよつとして志郎くんたち、私たちに『負ける』のが怖いのかな?」

「…ほう?」

穂乃果の最後の言葉を聞いた瞬間、志郎の目が鋭く光ったような感じがした。

「俺たちが『負ける』のを怖がってる…と言ったな?」

志郎が殺気立った表情で立ち上がりながら言った。

「俺たちも舐められたものだな志郎…。」

志郎に続いて幸雄も立ち上がった。

「あれ? ふ、二人とも…?」

二人の反応が予想外だったのか穂乃果の声は震えていた。それは無理もない話だつ

た。なぜなら二人とも高校生とは思えない、というより睨むだけで誰もが逃げ出しそうな殺気を放っているのだから。恐らくかつて戦国武将として生きた二人にとつては穂乃果の放った『負けるのが怖い』というのは禁句だったのだろう。武士ならば臆病者呼ばわりされて怒らない者はいないのだ。

「ちよつと穂乃果！なぜ二人を怒らせたのですか！」

「だって二人が歌うの聞いてみたかったし、いつもからかわれてるからその仕返しにつて…。」

「そこまで俺たちの実力を試したいか…！ならば…。」

「俺たちの歌を聞けええええええええええ!!！」

こうして二人によるマイク独占タイムが始まった。余談であるが穂乃果は後に「あの二人の前で『負けるのが怖い』と言った言葉を使うのはやめよう」と心に決めたらしい。

「くそ…。あいつらに勝てなかった…！」

「まあ、場数を踏んでるあいつらに勝とうってこと自体無謀だったんだよ。」

結局志郎たちは、志郎が85点、幸雄が88点という結果に終わった。

そしてカラオケを終えて穂乃果たちはゲームセンターに来ていた。

「次はダンス！今度は歌の時みたいに甘くはないわよ！使用するのはこのマシン、『アポカリプスモードエキストラ』よ!!」

「ほーん、なるほどね。ダンスの勝負ってどうするのかと思つてたがそう来たか。」

「確かにダンスっていうのはセンスの問題もあるから審判には公平性が欠けると思つていたが、ダンスゲームならその辺の問題は解決できるな……。そらつ、ここでフルコンだ！」

「そう！これなら公平に……。つてあんたらは何してんのよ!!」

にこがルールを説明してる傍らで志郎と幸雄はアーケードゲーム『戦国大戦』に熱中していた。

「何つて、公平な勝負が出来るなら俺らいらねえだろ？志郎も相変わらず『万死一生』から『火門の陣』、そして増援家宝のフルコン好きだなあ。ほい、『表裏比興の鬼謀』を二度がけつと。」

「幸雄の言う通りだな……。つてオイ！ただでさえキツイのに二度がけはやめろオ!!」

「志郎先輩たち、なんかすごい白熱してるね真姫ちゃん。」

「どうして男子つてあそこまでゲームで盛り上がるのかしらね。少しイミワカンナイ。」

「二人とも実力が拮抗してますね……。志郎、劣勢だからと言つて諦めてはいけません

よ！幸雄も優勢になったからって油断してはいけません！」

「志郎くんも幸雄くんも頑張れー！」

白熱する志郎たちを見て花陽と真姫は少し引き気味になっており、海未は二人の試合を熱心に観戦、穂乃果に至っては二人の応援をしていた。

（このギャラリいうるせえ・・・。）

（応援してくれるのは結構だが流石にやかましい・・・。）

志郎と幸雄は試合に熱中しつつ、心中ではかなりげんなりしていた。

「だから緊張感持って言うてるでしょ!!」

にこはそんなメンバーたちに業を煮やして声を上げた。

「凜は運動は得意だけど、ダンスはちよつと苦手だからなあ。」

「これ、どうやるんだろう・・・。」

（プレイ経験ゼロの素人が挑んでまともな点数が出るわけないわ。くくつ、カラオケの時は焦ったけどこれなら・・・!）

困惑する凜と花陽を見てにこは勝利を確信したが・・・。

「「すーい!!」」

ダンスゲームの筐体の方から穂乃果たちの歓声が聞こえたので振り返ってみると、
「なんかできちゃったー。」

そう言つて高得点を叩きだした凜の姿があつた。

「・・・え?」

にこはその様子を見て呆然としていた。運動神経が優れているとはいえ、ダンスが苦手な手でプレイ経験のない素人同然である凜が高得点を叩きだしたのだから無理もない話である。

「おーおー、こりやさつきから目論見が崩れまくりですな矢澤パイセン。もつともその目論見も漫画に出てくるチーズばりに穴だらけのガバガバ構想なんすけどね。」

志郎との対戦を終えた幸雄が笑いながらにこの肩を叩く。

「しかし凜はすごいな。ダンスが苦手と言つた割には最高ランクを叩きだしてるじゃないか。」

「凜ちゃんすごかつこよかつたよ!」

「えへへ・・・先輩もかよちんもそこまで褒められると照れるにやあ・・・あ、志郎先輩と幸雄先輩はどつちが勝つたんですか?」

志郎と花陽に褒められた凜は照れ隠しに志郎と幸雄の対戦の勝敗を聞いた。

「俺の負けだよ。流石は幸雄と言つたところだよ。」

「志郎の攻めはちつとばかり単純すぎんよ。まあ、筋は悪くないがね。」

「ねえ、志郎くんたちもこれやってみない?」

「ことりが志郎たちを誘った。

「俺たちが？」

幸雄は戸惑い気味だったが、

「ほう、その挑戦受けて立とうじゃないか！さつきのカラオケの雪辱を果たさせてもらおうか!!」

志郎はさつきのカラオケで最下位だったので挽回するつもりなのかやる気満々であつた。

「どれ、曲はそうだな・・・。これにしよう。」

「はあ!? あんた正気なの!?!」

志郎がプレイ曲を選択をしたとき、にこは志郎が選択した曲を見て思わず大声を上げた。

「いきなり大きな声出さないでよにこ先輩・・・。別に誰がどんな曲をやってもその人の勝手でしょ？」

「分かってないわね真姫! あいつが選んだのはこのゲームの中でも一番難しい曲なのよ! しかもそれを一番高い難易度の『EXPERT』でやろうってのよ!」

「そんな難しい曲を選んで大丈夫なのですか志郎?」

海未は志郎を心配するが、

「このゲームをやるのは初めてだが心配には及ばん。雪辱を果たすにはこれくらいはせんとな。それに個人的にも立ちほだかる壁は高いほど燃えるものだろう・・・!」

志郎は不敵な顔で応えた。その時の志郎の表情はまさに戦に臨む、戦場を前にして心が高ぶる武士のようだった。

「さあ、いざ尋常に勝負・・・!」

「「・・・」」

そして曲が終わり、穂乃果たちのいる筐体の周りは沈黙に包まれていた。

「はあ・・・、はあ・・・」

志郎は肩を揺らしながら激しく息をしていた。

「う、嘘でしょ・・・?」

ここは画面を見ながら戦慄していた。何故なら画面に映っていたのは、

『PERFECT!!』

パーフェクト、つまり一度もミスをせず、コンボを絶やさなかった「フルコンボ」を示す文字だったからだ。

「「「す、すごい・・・!」」」」

にこを除くメンバーは志郎のプレイを見てただただそれしか言葉が出せなかった。
「ねえ、凜ちゃん。あれ出来る・・・？」

「り、凜にはあれはまだ早すぎるにや・・・！」

「志郎の身体能力が高いのは知っていましたが無茶苦茶すぎます・・・！」

穂乃果たちはそれぞれ感想を言ったがどれも驚愕に満ちていたが、幸雄は

（流石は我らが御大将。強すぎた男、天下に隠れ無き弓取りと言われただけのことはある。あの時代でも武勇に長けていたが、現代になつてさらに身のこなしに磨きがかつたか。ここまで行くともはや怪物レベルだなこりやあ。）

平静を装っていたが、かつての主君の成長っぷりに舌を巻いていた。

「さあ、次はお前らの番だぞ。お前らはこれからスクールアイドルとして天下に羽ばたいていくのだ。これしきで驚いてる暇はないぞ！さあ、俺を超えてみせろ！！」

志郎は穂乃果たちにプレイを促すが、

「！！！！出来るかああああああ！！！！！！」

穂乃果たちのツッコミがゲーセンの音ゲーコーナーに響いた。

「それにしても面白かったね。」

ことりはみんなの成績をメモ帳に書き留めながら言った。ちなみにダンス対決では規格外だった志郎を除けば最初にプレイした凜がAAAランクを叩きだしてぶっちぎりの一位で、そこにAランクの穂乃果、にこ、海未。そしてBランクのこことりと真姫、Cランクの花陽と言う結果が出た。

「幸雄くんはBランクかあ。」

「なんかちよつと意外ね。」

「海未の厳しい練習を最初つからお遊び程度にこなしてた化け物と一緒にしないでくれませんかね高坂さんに西木野さんよお・・・。」

「ぐぬぬぬ・・・。こうなったら・・・!あんだ達ついてきなさい!最後の対決の場所に移動するわよ!!」

そう言ったにこに着いて行った穂乃果たちがたどり着いたのは、秋葉原の大通りだった。

「歌とダンスで決着がつかなかった以上、最後はオーラで決めるわ!!」

「オーラ?」

「そう!アイドルとして一番必要と言っても過言ではないものよ!歌も下手、ダンスもイマイチ、でもなぜか人を引き付けるアイドルがいる・・・!それはすなわちオーラ!人を引き付ける何かを持っているのよ!!」

「わ、分かります！何故か放っておけないんです!!」

にこの力説に、同じくアイドルマニアである花陽は賛同を示し、

「でもそのような物、どうやって競うんですか?」

海未は疑問を投げかけた。カリスマ性ともいえるそれは歌唱力やダンスの腕前とは違つて点数で競えるものではないので彼女の疑問も真つ当なものであった。

「ふふふ……これよ。」

にこは、sのビラを取り出した。

「オーラがあれば人は黙つて寄つてくるもの。一時間でこのチラシを一番多く配ることができた者が一番オーラがあるつてことよ!」

「今回はちよつと強引なような……。」

「でも面白いからやろうよ!」

（今度こそ……、チラシ配りは前から得意中の得意……!この『にこスマイル』で……!）

「じゃあ、今度こそ俺らは高みの見物だな。」

「ああ、あいつらの邪魔をするわけにもいかんしな。」

そう言つて志郎と幸雄は穂乃果たちから離れた場所に移動していった。

そして15分経った頃……。

「みんなまずまずといったところだな。」

「一人を除いてな。」

そう言つて幸雄が見ている先には無理やり通行人を引き留めてるにこの姿があつた。

「あはは……。あれは流石になあ……。」

志郎が苦笑してると、

「ありがとうごさいましたー!」

「すごい! ことりちゃん、もう全部配り終わつちやつたの!」

「う、うん……。なんか気づいたら無くなつて……。」

「あれ見ろよ志郎。ことりの奴もう全部配り終わつちまつたぜ。」

「ことりには何かしら人を引き付ける要素があつたわけか。」

(それにしてもはやけに早い気はするが今は気にすることではないかもな。)

「おかしい!! 時代が変わつたの!」

一方でここは一枚もチラシを受け取ってもらえず、半泣き状態であつた。

「まあ、パイセン。気にするこたあないつすよ。」

「あ、ああそうだな幸雄。たまたま先輩のオーラを感じ取れる人がいなかっただけです

よ……!」

志郎と幸雄がにこを慰めるが、志郎の目には涙が浮かんでいた。それもそのはず、かつては何かにつけて父、信玄と比べられ、家臣から軽視されていた志郎にとって、この惨状は親近感が芽生えるものであった。

「気持ち嬉しいけどこれじゃあ余計に惨めよ……！」

こうして対決を終えた穂乃果たちは部室に戻ってきた。最初はノリノリだったに今は今となっては完全に戦意喪失状態であった。

「はあ、結局みんなおんなじだ。」

「そうですね。ダンスの成績が悪い花陽は歌が良くて、カラオケの点数が悪かったことはチラシ配りの点数が良く……。」

「結局みんな同じってことだったんだね。」

そして今回の対決で分かったことを海未とことりがまとめた。

「たしかにこうしてみるともの見事にバランスが取れてるな。」

「ここまでくると却って芸術的だな。」

志郎と幸雄もうなずいた。

「でもここ先輩も流石です。みんなより全然練習してないのに同じ点数なんて。」

「う……！あ、アタリマエデシヨ。」

「やめろ凜! 矢澤先輩のライフはもうゼロだ!」

「悪気はないんだろうが追い打ちはやめたれ・・・。」

「でもどうするの? これじゃあ決まらないわよ?」

「で、でもリーダーは上級生の方が・・・。」

「仕方ないわねえ!」

花陽の言葉を聞いてふっかつしたにこがそう言うが、

「凜もそう思うにゃ。」

「私はそもそもやる気ないし。」

「あんだ達ぶれないわね・・・。」

最初っから意見に変化のない凜と真姫にツツコミを入れる。

「じゃあいいんじゃないかな、なくっても。」

「「「ええええ?!」「」」」

穂乃果が突然放った意見にその場にいた全員が驚いた。

「穂乃果、正気か貴様!?!」

「そうだ、流石にそれはぶっ飛びすぎじゃねえか?!」

志郎と幸雄も驚きを隠せなかった。人の前に立つリーダーの重要性をいやというほど感じてきた二人にとっては穂乃果の発言は、志郎がうっかり勝頼時代の口調に戻って

しまうほど衝撃的なものだった。

「うん、リーダーなしでも全然平気だと思うよ。みんなそれで練習してきて歌も歌ってきたんだし。」

「しかし……。」

「そうよ！リーダーなしのグループなんて聞いたことないわよ!!」

「だいたい、センターはどうするの？」

海末、にこ、真姫は穂乃果に反論を唱えた。が、穂乃果は、

「それなんだけど、私考えたんだ。みんなで歌うってどうかな。」

「[[[[「え?」]]]]」

「みんな?」

「家でアイドルの動画を見て考えたんだ。みんなで順番に歌えたら素敵だなあって。そんな曲作れないかなあって。」

「順番に?」

「そう!無理かな?」

穂乃果はみんなを見回して同意を求める。

「まあ、歌は作れなくはないけど……。」

と海末が答え、

「そういう曲、無くは無いわね。」

と真姫が答え、

「ダンスはそういうの無理かな?」

「ううん。今の七人なら出来ると思うけど。」

と穂乃果の問いにことりが答えた。

「じゃあそれが一番いいよ!みんなが歌って、みんながセンター!!」

「私、賛成。」

「好きにすれば。」

「凜もソロで歌うんだー!」

「わ、私も!」

「やるのは大変そうですけどね。」

「だが、面白そうではあるよな。」

「・・・ああ、そうだな。」

そして穂乃果たちは部長による決定を仰ぐため、にこの方を見た。

「仕方ないわねえ。ただし私のパートはかっこよくしなさいよ?」

「了解しました!」

にこの言葉にことりは笑顔で答えた。

「よし！そうと決まれば早速練習しよう！」

そう言つて穂乃果たちは屋上に向かつていった。

「本当に良かったのかねえ？」

「いや、実質的なリーダーはすでに決まつてる。あいつらなら分かつてるはずさ。」

幸雄の疑問に志郎は答えた。

「まあ、それもそうか。」

「ああ、何事にも囚われずに一番やりたいこと、一番楽しそうなことに怯まずに真つ直ぐ向かつていく……。それがあいつの、高坂穂乃果にしか無いことだと俺は思っている。」

そう幸雄に語り掛ける志郎の顔は爽やかな表情をしていた。

「だが、少しは面白くないんじゃないか？まだ16年とちよいしか生きてない小娘に自分より大将としての資質が優れてる、なんて認めてしまうのは。」

「ああ、そりゃあ俺だつてかつては大名だったから面白くはないさ。でも自分より優れてる者を認めることは大事だし、それにあいつらと接してきてあいつなりの凄さというものを見てきたんだからな。だからこそ、俺たちはあいつらに力を貸すんじゃないか？」

「はは、その通りですな。勝頼さまも成長してゐるではないですか。」

そして二人は穂乃果に続いて階段を上つていく海未たちを、そして彼女たちを引つ

張っていくかのように走って階段を上っていく穂乃果を、笑顔で見つめた。

「じゃあ、はじめよ!!」

そう言って穂乃果は屋上の扉を開け放した。

16話 ラブライブへの道

「タスケテ・・・じゃなくて、大変です!!」

にこを加えて7人になった μ sが新PVを公開してからしばらく経ったある日、花陽が息を切らしながら部屋に飛び込んできた。

「どうしたってんだよ一体!」

そんな尋常じゃない様子に幸雄が驚いた。そして花陽は息を整えてから、

「大変です!ラブライブです!ラブライブが開催されることになりました!!」

とみんなに『ラブライブ』が開催されることを告げた。みんなその言葉を真剣な表情で聞き、穂乃果が真っ先に口を開いた。

「え!?ラブライブ!?!・・・ってなに?」

その穂乃果の言葉を聞くや否や、花陽はパソコンを起動し、ラブライブの公式ホームページにアクセスして、みんなに説明した。

「スクールアイドルの甲子園、それがラブライブです!エントリーしたグループの中からスクールアイドルランキング上位20位が決勝に出場、ナンバーワンを決める大会です!!噂には聞いていましたが遂に始まるなんて・・・!!」

「へえ〜。」

「スクールアイドルは全国的にも人気ですし……。」

「盛り上がることも間違いなしにや〜!」

「なるほど、そんな大会があるんだな。」

「今のランキングから上位20組とすると、1位のA—RISEは絶対出場として、2位3位は……。まさに夢のイベント……! チケットの発売はいつでしょうか? 初日特典は……。」

いつの間にか自分の世界に入り込んでる花陽に穂乃果が、

「つて花陽ちゃん、見に行くつもりなの?」

と言うと、花陽はキツ!と穂乃果を睨んで突然立ち上がり、

「当たり前です!!これはアイドル史に残る一大イベントなんですよ!!見逃せません……!!」

と穂乃果に力説する。

「花陽つてアイドルのことになるとキャラ変わるわよね……。」

「凜はこつちのかよちゃんもすきだよ!」

真姫は花陽の別人とも思えるほどの変わりっぷりを見て呆れながら言った。

「なんだ、出場するのかと俺は思ってたんだが。」

「うん、そういうことだから私たちも頑張ろーって言うのかと思ってたよ。」

志郎と穂乃果の言葉を聞いた花陽は、

「うえええええ!? そ、そんな．．．！ 私たちが出場だなんて恐れ多いです．．．！」

と、部室の端っこにもものすごい速さで後ずさってから言った。心なしか、いつものおどおどした花陽に戻ってるように見える。

「キャラ変わりすぎ。」

「三つ顔を持つてる阿修羅もびっくりやで．．．。」

「凜はこっちのかよちゃんも好きにや〜。」

真姫と幸雄も冷静にツッコむ。

「でも、スクールアイドルやってるんだもん！ 目指すのも悪くないかも。」

「ていうか目指さなきゃだよ！」

「でも、そうは言っても現実には厳しいわよ。」

穂乃果とことりが盛り上がっているとところに真姫は簡単にはいかないといった。

「確かに、まだμ、sは上位の連中に比べれば無名も同然だからな．．．。」

真姫の言葉を受けて志郎はため息をついた。

「ですね．．．。確か先週見た時はそんな大会に出られるような順位では．．．。」

海未がμ、sの順位を確認してみると、

「穂乃果！ことり！」

「ん？あつ！」

「順位が上がってる!!」

「うそ!!」

「どれどれ？」

なんと順位が上がっており、真姫も驚いて立ち上がり凜と一緒に順位を確認しに行つた。

「ほう、急上昇のピックアップアップスクールアイドルっていうのにも選ばれてるな。」

「コメントもたくさん来てやがるな！えっと、『新しい曲、かつこよかったです!』、『7人に増えたんですね!』、『いつも一生懸命さが伝わって大好きです!』……か。こりや
すげえや。」

志郎も幸雄も、sの躍進ぶりに驚いていた。

「うわあく!!もしかして凜たちって人気者!？」

「もしかしなくても、だな。やったな！」

目を輝かせる凜の肩を幸雄が叩いた。

「そのせいね。最近校門で出待ちされるようになったのは……。」

と、真姫が合点がいったような表情で呟いた。

「出待ち!?うそお、私全然ない……。」

穂乃果はその単語を聞いて驚いて落ち込んだ。

「確かにそういうこともあります。アイドルとは残酷な格差社会でもありますから……。」

「うう……。」

花陽の言葉を聞いてさらに穂乃果は落ち込む。

「あー、そういうことだったのか。」

「どういうことだ?」

幸雄の言葉に疑問を持った志郎が理由を聞くと、

「いやな?この前真姫が出待ちされてるのを見たんだよ。いやあく流石、美人さんは格が違いますわ。この前なんかも……。」

と、ケラケラ笑いながら言った。

「どうして見てたなら助けてくれないのよ!」

真姫は顔を真っ赤にして幸雄に詰め寄ったが、

「断ろうとしたら悲しい顔をされて断れなくなつて結局写真撮られてあげたの、見てたんだぜ。ファンの想いを無下にしない西木野真姫さんの優しい思いを無駄にしたくなかつたんだもん☆」

とおどけながら幸雄は真姫の追及をいなした。

「でも、写真なんて真姫ちゃん変わったにや〜。」

と凜が真姫の側に寄ると、

「わ、私は別に・・・!」

「あ、顔が赤くなつたにや〜。」

「へいへーい、赤くなつてる〜!これぞ顔面赤備えつてヤツだな。」

と真姫を凜と幸雄がからかうと、

「~~~~~!!」

「うにやつ!」

「うぐおつ!?!」

真姫は凜の額にチョップ、そして幸雄になんと金的蹴りを照れ隠しにお見舞いした。

「痛いよ〜!うえ〜ん・・・。」

急な攻撃に尻もちをついた凜はウソ泣きをし、

「おおおお・・・!よくも俺の大事な二文銭（意味深）を・・・!なんで俺ばかりこんな

目に・・・!!」

幸雄に至つては転がり悶えていた。

「あんた達が悪いんでしょ!」

「幸雄は完全にオーバーキルな気がしなくもないが、まあ自業自得だわな……。」
と志郎は三人を見ながら苦笑した。

「みんな聞きなさい！重大ニュースよ!!」

そんなところにこが屋上の扉を開けて飛び込んできた。

「ふふふ、聞いて驚くんじやないわよ？今年の夏、遂に開かれることになったのよ！スクールアイドルの祭典……！」

「ラブライブ、ですか？」

にこがみんなの期待を煽りながらラブライブの開催を教えようとしたが、全員知っている上に、全部言い切る前に、ことりに言われてしまった。

「知ってたの？」

「ええ、さつき花陽から聞きました。」

にこに対して、志郎が淡々と答えた。

そして、出場の許可を取るべく、穂乃果たちは生徒会室の前までやってきたが、
「どう考えても答えは見えてると思うわ。」

真姫は穂乃果にくぎを刺した。

「学校の許可あ？ミトメラレナイワア！」

「ぶふお！やめろよ凜www会長に見られたらどうすんだよwww」

凜が絵里のモノマネ(?)をして、幸雄は大爆笑していた。

「だよねえ、今度こそは学校に生徒を集められると思うんだけど・・・」

「そんなあの生徒会長には関係ないでしょ？私らのこと目の敵にしてるんだから。」

と、にこが吐き捨てる。

「どうして私たちばかり・・・。」

花陽も絵里のμsに対する態度に困惑していた。

「それは・・・。あ！もしかして、学校内の人気を私に奪われるのが怖くて!!」

と、にこは絵里の目的を推測するが、

「それはない(ねえ)わ。」

と、真姫と幸雄に突っ込まれた。

(もつとも、目の敵にしてるのが事実とはいえ、こいつらが思ってるほど単純な問題ではないんだろうがな。)

にこにツツコミながらも、幸雄は心中では真剣な考えを巡らせていた。

「もう、許可なんて取らずに勝手にエントリーしてしまえばいいんじゃない？」

と真姫が言うのと、

「ダメだよ！ エントリーの条件に学校の許可をとることって書いてあるもん！」
と花陽が真姫をたしなめる。

「だったら直接理事長に申請しちまえばいいんじゃないの？」

「え？ そんなことできるの？」

穂乃果は幸雄の提案に驚いた。

「部活の要望は原則的に生徒会を通じて伝えろ、と言われてるが……。」

志郎は幸雄の案に反論するが、

「そりゃあくまでも『原則的に』って話だろう？ 別に理事長に直接かけあっちゃいけないなんて誰も言っていないんだからな。あいつが生徒会長の権限を使ってくるならこっちはそれを上回る理事長の権利にすぎればいいってもものよ！」

幸雄は自信満々に答えた。

「なるほど、相手が正面から来るならこっちは奇策を用いればいいってわけか。」

「その通り。それに、俺たちは一応研究生なんだ。研究生からの意見具申とあれば理事長も無視できまい……。」

と、幸雄と志郎は不敵に笑った。

そして、穂乃果たちは理事長室に向かった。

「うう、生徒会室よりさらに入りにくい緊張感が……。」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ。」

「まあまあ、そう言ってるやんなよ真姫。校長室とか理事長室とかは学生からすれば普通は入らないところなんだから緊張はするだろ。」

理事長室の前で穂乃果は緊張していた。

「分かってるし大丈夫だよ！」

そう言つて穂乃果は覚悟を決めてノックをしようすると、

「おお、お揃いでどうしたん？」

なんと理事長室から希と絵里が出てきた。

「うわっ、生徒会長！」

「タイミング悪っ。」

と穂乃果はびっくりしながら、にこは顔をしかめながら小声でつぶやく。

「なんの用ですか？」

絵里がまるで詰問するかのようには穂乃果たちに用件を聞いた。すると真姫が穂乃果の前に出て、

「理事長にお話があつてきました。」

と絵里に言ったが、絵里は真姫の前に立ち塞がり、

「各部の理事長への申請は生徒会を通す決まりよ。」

「申請とは言っていないわ！ただ話があるの！」

絵里に対して、真姫の言葉が荒くなってくるのを感じた志郎は、
「やめろ真姫。上級生だぞ。」

と、制止した。その時の志郎の声音は誰にも口答えや反論を許さない強者としての風格が漂っていた。これには気の強い真姫も、志郎の制止に従わざるを得なかった。

幸雄は、

（早くも詰みか？）

と思ったが、

「どうしたの？」

理事長室の中から理事長が出てきた。

そして、なんとか理事長室に入れた穂乃果たち（一年生は外で聞き耳を立てている）は、理事長にラブライブが開催されることを教えた。

「へえ、ラブライブねえ……。」

理事長は、ラブライブの公式サイトを見て、興味を示していた。

「はい、ネットで全国的に中継されることになっています。」

「もし出場できれば学校の名前をもっとみんなに知ってもらえると思うの。」

海未とことりが、ラブライブに出場するメリットを理事長にアピールするが、

「私は反対です。理事長は学校のために学校生活を犠牲にするようなことはすべきではないとおっしゃいました。であれば・・・、」

絵里は当然反対してきた。だが、

「異議ありですな、生徒会長。学校のために学校生活を犠牲にするような行動はするべきではない、とおっしゃってますが、部活が大会に出るのを学校生活を犠牲にする行為と取るのは全ての部活動を否定することになってしまいますなあ。些か早急すぎるかと。」

「それに、音ノ木坂学院の名を知ってもらおうようにするのも目標の一つですが、彼女たちはあくまでも1つのスクールアイドルグループとして、おのれの実力を試すためにスクールアイドルの甲子園たるラブライブに出場しようとしているのです。彼女たちのエントリーに反対するのは運動部が大会に出るのを反対することになります。」

「それこそ学校生活を犠牲にするようなことになるかと存じますが、反論はありますか？生徒会長。」

幸雄と志郎が絵里の意見に、真正面から堂々と反論して見せた。絵里は自分の意見を正面から覆されて顔をしかめた。

(幸雄、あまり綾瀬先輩を煽るなよ。)

(ははは、すまん。昔からの癖だ。)

と志郎と幸雄は反論し終わつた後、誰にも聞こえないような小声で話した。理事長は三人の意見を聞いていたが、

「いいんじゃないかしら？ エントリーするぐらいなら。」

と口を開いた。

「本当ですか!？」

と穂乃果が確認すると、

「ええ。」

と理事長が答えた。

「どうして彼女たちの肩を持つんですか!？」

と納得がいかない絵里は理事長に抗議した。

「別に、そんなつもりじゃないけど。」

「だったら、生徒会も学校を存続させるために活動をさせてください!？」

と絵里は生徒会が廃校阻止に向けた行動に出ることの許可を求めた。

「うーん、それはダメ。」

理事長は少し考えてから、彼女の案を取り下げた。

「……意味が分かりません!？」

「そう？簡単な事よ？」

そう言われた絵里は黙ってお辞儀をして理事長室から出て行った。

（やれやれ、どうやら感情的になりすぎてて理事長が言わんとすることが見えてないみたいだな。）

（似ている……。あの頃の、意固地になつていた俺に……。あいつもまた俺と同じように縛られた存在なのだな……。）

そんな絵里の背を、幸雄は客観的な目線、そして志郎は勝頼だった頃の自分と姿を重ねるといふ、互いに違った目線で見ていた。

「ふん、ざまあみろつてのよ。」

にこが絵里に悪態をつくつと、

「ただし、条件があります。」

と言つた。

「条件とはいつたい？」

志郎が聞くと、

「勉強が疎かになつてはいけません。今度の期末試験で一人でも赤点をとるようなことがあつたら、ラブライブへのエントリーは認めませんよ。いいですね？」

と理事長は釘を刺すように言つた。

「ええ!？」

と穂乃果は、理事長の出した条件に驚いた。

「まあ、流石に赤点をとる奴なんてそうそういねえよな？」

「と、言いたいところだが幸雄。後ろを見る。」

と、幸雄が後ろを振り向いてみると、穂乃果、凜、そしてにこの三人がこの世の終わりであるかのように俯いていた。

「う、嘘だろ?」

幸雄が震えながら言うと、

「嘘だと思うだろ。これ、現実なんだぜ……。」

と志郎は虚ろな目をしながら幸雄の肩を叩いた。

どうやら、ラブライブ出場への道は実力面だけでなく、別の方面でもまだまだ厳しいものであったようだ。

17話 ラブライブへの道 期末試験編

ラブライブへのエントリーが認められた穂乃果たち。しかしそれは『期末テストで誰も赤点をとらない』という条件付きであった。

「大変申し訳ありません！」

「ません！」

穂乃果と凜は、海未、ことり、真姫、花陽に手をつけて謝っていた。

「小学校のころから知ってはいましたが穂乃果……。」

「数学だけだよ！ほら、小学校のころから算数苦手だったでしょ!？」

穂乃果は呆れてる海未に抗議した。花陽は何かを思いつき、穂乃果に

「しちし?」

と言ってみると、

「……26?」

「重症ですね。」

と自信なさげに穂乃果は答え、その様子に4人は何とも言えない顔をしていた。

「こいつどうやって今まで生活してきたんだ?重症ってレベルじゃないだろ……。」

「こういうアホが突破できちまうのも義務教育のデメリットだよなあ……。」

志郎と幸雄は頭を抱えていた。

「凜ちゃんは？」

微妙になつていた周りの雰囲気を変えるために、花陽が凜の苦手教科を聞いた。

「英語！ 凜は英語だけはどうしても肌に合わなくつて……。」

「確かに難しいよね……。」

凜は全国の学生が抱えていそうな英語に対する苦手意識を花陽にぶつけ、花陽もそれに同意していた。

「そうだよ！ 大体凜たちは日本人なのにどうして外国の言葉を勉強しなくちゃいけないの!？」

と凜は英語に対する不満をさらにまくし立てた。

「まあ、凜の言い分も分からないわけではないが……。」

「この時代、そういうわけにもいかんしな。あ、でも日本に来る外人連中は日本語を勉強してから来るべきだよな。あいつら自分が話してるのが通じてるって前提で話しかけてきやがるからな。」

と志郎と幸雄が凜の言葉にうなずいていると、真姫がドン！と机をたたいて立ち上がり、

「屁理屈はいいの!! 志郎先輩も幸雄先輩も凜を調子づかせないで!」
と凜に迫った。

「真姫ちゃんこわいにや〜・・・。」

と凜が弱々しく言うのと、さらに顔を近づけて、

「これでテストが悪くてエントリーできなかつたら恥ずかしすぎるわよ!!」
と凜に念押しした。

「そうだよね・・・。」

「まあ、それはそれで有名になるからいいんじゃないかね?」

と笑いながら幸雄が言うのと、

「そんなの嫌だにや!!」

「そんな有名人は嫌だよ!!」

と穂乃果と凜が幸雄に抗議した。

「だったら赤点とらなきゃいい話だろ。」

幸雄が穂乃果と凜にドがつくほどの正論で言い返した。

「だいたい幸雄くんだってそんな勉強できる風には見えないし・・・!」

「そうにやそうにや!」

穂乃果と凜が幸雄になおも抗議を続けると、

「じゃあ俺の中間の成績、見てみるよ。」

と、幸雄は鞆の中から五教科分の解答用紙を取り出して見せた。

「(、これは……!」

「ぜ、全教科90点以上!」

なんと、すべての答案が90点以上という好成绩だったのだ。

「まさか幸雄先輩が成績優秀だったなんて意外ね。」

1年生の中でもトップクラスの成績を誇る真姫も目を丸くしていた。

「幸雄はああ見えてかなり頭はいいからな。頭が回るのは策略と悪知恵だけじゃないってことだ。」

「生憎だが俺は音ノ木坂よりも一段も二段も上手の偏差値を持つ進学校に通ってたんだ。少なくともてめえらの脳みそよりも2倍か3倍は回転が早えんだよ!」

と幸雄は穂乃果と凜に言い放った。そんな幸雄を見て志郎は

(ありや、いつぞやに勉強ができないって思われてたことに対する意趣返しでもあるんだらうな……)。

と苦笑しながら思っていた。

「そういえば志郎の方はどうなんですか?」

海未が志郎に話を振ると、

「俺か？俺は可もなく不可もなくつてところだな。幸雄に比べたらお粗末だがまあ悪くはないだろ。（それに俺だつてかつては一国の主だったんだ。勉強の一つぐらいできて当然だ。）」

と言つて中間の解答用紙を見せた。

「どれもだいたい70点くらいですか。確かに幸雄に比べると低いですが実力は悪くないですね。」

「志郎くんの裏切り者〜！仲間だつて思つてたのに〜!!」

「俺はお前ら二人のおバカ仲間になつた覚えは全然ない。」

志郎は穂乃果の抗議をあつさり切り捨てた。

「やつと生徒会長を突破したつていうのに〜!」

真姫が不機嫌そうに言うと、

「全くその通りよねー!あ、赤点なんか絶対取つちやダメよー!」

と、若干上ずつた声でここが答えた。数学の教科書を読んてるようだが・・・、

「先輩……。教科書、逆さだぜ……。 」

「ここ先輩……。成績は?」

幸雄に教科書が逆さになつてのを指摘され、さらにことりに成績を聞かれるが、その声はもう答えを分かり切つてしまつてるような雰囲気だった。

「にににこお!? ににに、にっこにっこにーが赤点なんて取るわけないでしょ!」
と誤魔化してみるが、

「動揺しすぎです。」

「声震えすぎですよ。」

海未と志郎にあっさり動揺しているのを見破られた。

「とにかく、私とことりは穂乃果の、そして花陽と真姫は凜の勉強を見て、弱点教科を何とか底上げしていくことにします!」

と海未が役割を決めた。

「あの一、俺たちは何をすりゃいいんすかね?」

「俺はともかく成績優秀な幸雄を役目なしで放置するわけにはいかないんじゃないか?」

と、志郎と幸雄が海未に質問すると、

「志郎と幸雄はそれぞれの進み具合を見て各自サポートに入ってください。」

と、海未は二人に二組に分かれたグループのアシスタントに任命した。

「うーす。」

「了解した。最善は尽くそう。」

「まあ、それはともかくとしてにこ先輩はどうするの?」

大まかなグループ分けが決まったところで一人だけ3年生であるにこの担当を誰にするかを真姫が切り出すと、

「それはうちが担当するわ。」

と、希が部室に入ってきた。

「い、言ってるでしょ!?!にこは赤点の心配なんて……。」

とにこが強がっていると希は両手を広げて、ものすごい速さでにこの後ろに駆け寄り、彼女の胸をわしづかみにした。

「ひっ!?!」

「それ以上嘘をつくどわしわしするよ〜?」

希が不敵に笑い、にこの胸を掴みながら脅すと、

「分かりました、教えてください……。」

「はい、よろしい。」

と、いつもの気の強さはどこかに消え去ったかのように素直に希に従った。

(すげえ、希先輩あのプライドの高いにこ先輩をあつさり従えたぞ……。)

(こりや、副会長だけは敵に回せねえわ。)

と志郎と幸雄は改めて希の実力を実感した。

「よし!これで準備はできたね!明日からがんばろー!!」

「おー！」

と穂乃果と凜が言うのと、

「今日からです！」

と海未がドスの効いた声で二人を叱咤した。

そして放課後、凜と穂乃果、そしてにこの成績を上げるための勉強会が始まった。

「うー、これが毎日続くのかにやー。」

始まってからしばらく経つと、案の定凜がダレ始めてきた。

「当たり前でしょ。」

「そうだぞ。お前らのためにやってるんだからもう少し頑張れ。」

そんな凜を真姫と志郎が激励するが、

「あー白いご飯にや!!」

「え!?!どことどこ!!?」

凜が窓の方を指さし、そう言ったが、常識的に引つかかる人は普通いない。だが花陽はご飯のことになると人が変わったように単純になつてしまうようだ。

「引つかかるわけじゃないでしょ。」

当たり前のことだが引つかからなかった真姫に凜はチョップされていた。

一方で穂乃果たちのグループでは、

「ことりちゃん。」

「なに？あと1問だよ。頑張つて！」

「お休み。」

「ああ！穂乃果ちゃん起きてー!!」

限界になった穂乃果が眠りだしてそれをことりが起こそうとしているという若干力オスな状態になっていた。ちなみに海未は弓道部に顔を出していて不在である。

「あー、いいのかなー。この問題が終わったらパンをくれてやろうと思ったがその様子じゃダメみたいだし食っちゃまおうかなー。」

「パンくれるの!?!だったら頑張る!!」

幸雄が穂乃果をパンで釣ると、ガバリと起き上がって問題を解き始めた。

そして、にこと希ペアは、

「はい、次の問題の答えは？」

「えーつと、に、にっこにっこにー・・・。」

にこがいつもの持ちネタで誤魔化そうとすると、希は両手を構えて、

「次にふざけたらわしわしMAXやよ〜！」

とにこの胸をわしわしするためになじり寄っていた。もちろんどうなったかはいうまでもない。

「これで大丈夫なのかねえ、志郎……。」

「どう見ても駄目だろう……。」

志郎と幸雄はため息をついてこの部室の惨状を憂いていた。

「あ、すまん幸雄、今日は先生に頼まれごとをされてたんだった。すまんが幸雄、ここを頼めるか？」

「親友の頼みなら断れねえな。ま、とりあえず行つてきな。」

「すまん。恩に着る。」

そう言つて志郎は部室を後にした。

（幸雄でも大丈夫なのか、あれ？）

と、一抹の不安を抱きながら。

そして、

「やれやれ、思いのほか時間がかかったな。いくら男手が足りないからつてあそこまで

こき使うかね普通。」

志郎は先生に頼まれた用事を済ませ、帰り道を歩いていた。仕事が終わった頃には幸雄から、既に今日の勉強会は解散したという旨のメールが届いていたからだ。

「ほんと、前々から思っていたことだが最初っから今日まで厄介ごとの連続だな……。まあ、武田家を継いでから天目山で死ぬまでの苦労に比べれば羽のように軽いかな……。」

と、ぼやきながら歩いていると、

「あなたに私達のことをそんな風に言われたくありません!!」

というどこかで聞いたことのある声で怒鳴る声が聞こえた。

「なんだ!?!」

と、志郎が辺りを見回してみると公園の入り口に海末と、絵里とその妹と思わしき中学生が立っていた。絵里はそのまま何も言わずに去って行ったが、中学生の娘の方は何かを海末に渡して、

「あの、亜里沙、μ s が・・・、海末さんたちが大好きです!」

という姉の元へ走って行った。そして志郎は海末のもとに歩み寄り、

「よお。」

と声をかけた。

そして志郎は海末から公園で絵里と話していた事を聞いた。ファーストライブの映像をネットに上げたのが絵里だったという事、その理由が好意的なものでなく彼女たちの無力さを知らしめるはずが狙いとは真逆に人気が出ていて戸惑っていた事、そして彼女にとっては何のスクールアイドルたちも、彼女たちの頂点に立つA—R—I—S—Eでさえも素人にしか見えないと言いつつた事を……。

「なるほど。生徒会長はそんな事を言つてたのか……。」

「確かに私達はまだ未熟ですが、私達や他のスクールアイドルの努力を貶されるのは我慢ならなくて……。」

「まあ、お前の気持ちは分からなくてもないが生徒会長にはそう言えるほどの何かがあるんじゃないか?」

「そう言えるほどの何か、ですか?」

海末は志郎の言葉に首を傾げる。

「ああ、生徒会長がお前らを目の敵にしてるのは確かだが、これまでの俺たちに対する発言に全く理がないわけじゃない。恐らくそれを裏付ける何かがあるんだろう。皆目見当はつかないがな。」

「それでもさっきの言葉は……。」

海末の言葉尻に怒りが滲んでいた。志郎は彼女を宥めるように、

「落ち着け海未。とにかくそれをこれから探しに行こうじゃないか。」

と言った。

「探しについてどこにあるというんですか？」

「綾瀬先輩の事を最も知ってるであろう人がいるだろ？」

と志郎が言うと、海未は首を傾げたがすぐに気づいたのかハツとした。

そして2人はファストフード店にやってきた。幸雄に電話して希の所在を聞いたなら、ファストフード店で一緒に勉強してると言っていたからだ。その本人たちはという
と・・・。

「にこ分かんないよー☆」

「お仕置きやねえ！うひひひひひ！」

「いや、いやあああああ!!」

さつきと変わらずにこは希のお仕置きを受けていた。

志郎はそれを見てため息をつきながら、

「あの。」

と声をかけた。

「ん?」

と希がこつちに気付くと、

「聞きたいことがあるのですが。」

と海未が話を持ちかけた。希はにことの勉強会延長戦を切り上げて場所を変えようと志郎たちと一緒に神田明神へ向かった。

「ふうん。絵里ちにそんなことを言われたんや。」

「はい。A—R—I—S—Eの踊りまで素人呼びわりするのはいくら何でも・・・。」

「生徒会長にはそこまで言わしめるほどの何かを持っていると俺は考えています。もしご存知でしたら教えていただきたいのですが。」

と志郎は希にお辞儀をした。

「志郎くんは結構感がいいんやね。その通り。絵里ちにはそこまで言えるほどの実力があるんよ。」

と希は答えた。

「やはりそうだったんですか。生徒会長は昔はダンスをされてたんですか?」

「ううん。絵里ちは小さいころにバレエをやってたんよ。これがその時の映像や。」

と言つて希はスマホに移っている動画を志郎と海未に見せた。

「これは・・・!」

それを見た瞬間、海未は目を見開き、言葉を失った。それほど幼少時代の綾瀬絵里のバレエは見事なものだったのだ。

「なるほど、確かにこれは凄い。他の奴らを素人呼ばわりするのも納得がいくが、生徒会長は今はやってないんですよね？」

と志郎は希に再び質問した。

「うちも後で調べて知ったんやけどロシアのバレエはものすごい競争が激しくってね、結果を出せる人はほんの一握りしかいないらしいんよね。絵里ちも実力は十分あったのに惜しいところでその一握りに入れなかったんよ。」

「なるほど、そういうことだったんですか……。」

そういう志郎の顔はどこか寂しげだった。志郎もまた、武将としては十分な力量は持っていたものの、環境や相手、そして天運に恵まれずに戦国乱世の生き残りサバイバルから脱落してしまっただけに、他の武将だったら「絵里には鍛錬が足りなかったのだ」と責めるだろうが、志郎は生きた時代が違うとはいえ同じように挫折を味わった同朋である絵里を責める気にはなれなかった。

海未は、そんな寂しげな顔をした志郎と絵里が踊っている動画を見つめることしかできなかつた……。

そして希との話は終わり、二人は神田明神から家に帰るため、夕暮れの道を歩いていった。二人は無言で歩いてきたが志郎が話を切り出した。

「なあ海未。お前あれを見てシヨックを受けただろ。」

「はい。情けない話ですが、自分たちが今までやってきたものは何だったんだらうって思いました。」

「そうだな。それは俺もそう思った。」

「悔しいですけど生徒会長がああ言いたくなるのも納得がいきました。」

「だから生徒会長に謝ろう・・・なんて思ったか？」

そう言った志郎の目は鋭く厳しいものだった。海未はそれに怖気づくことなく堂々と、

「いいえ、ダンスを教わりたいたいと思いました。もし今のみんなが先輩の半分でも踊れるようになれば、本当の意味で人を惹きつけられるのって思ったんです。」

と言った。

「ふふふ、ははははー！」

志郎は海未の言葉を聞いていきなり笑い出した。

「な、何かおかしいことを言いましたか？」

海未は突然志郎が笑いだしたことに戸惑った。

「いや、お前ならきつとそうするだろうなと思つてたよ。たとえ対立する相手のものであるが、良いと思つたものを自分のものにしようとする、彼の織田信長のような心構えは実にお前達らしい考えだつてな。」

「織田信長、ですか?」

「ああ。だが、それならば先にやるべきことがあるだろう? まずはそれを終わらせてからでも遅くはないだろう。」

「はい、そうですね。穂乃果たちの事ですからやることは山積みでしょうね。」

「だが今日はいったん休め。今日はさっきの事で強い刺激を受けただろうから、流石のお前でも集中力が削がれてるだろう。だから今日はゆっくり休んで、明日からまた頑張ろう。」

と志郎は海未に柔らかい声色でそう言った。

「そうですね。では今日は勉強は休んで、明日に備えてゆっくり休もうと思います。」

と海未は笑いながら志郎に言った。

「では、私はこつちなので今日はこの辺で……。」

「ああ、じゃあまた明日な。」

二人はそれぞれの家に通じる別々の道に分かれた。

「あのー！」

海未が志郎を大きな声で呼んだ。志郎が振り向くと、

「あの、今日は話を聞いてくれてありがとうがとうございました！」

と海未が笑顔で手を振っていた。

「ああ、ここにこそお役に立てたようでは何よりだよ。」

と志郎も手を振り返し、家に向かって歩いていった。

そんな二人を見守るように夕日の沈んだ空に浮かんだ月が輝いていた。

18話 一難去つてまた一難

「……というわけなんだ幸雄。」

「なるほど、俺たちが帰ったあとにそんな事があつたのか。急に副会長を探してるなんて電話が来た時はびっくりしたがね。」

希から絵里の話を聞いて帰ったあと、志郎は幸雄に電話をかけて希から聞いた話をすべて話した。期末試験が終わつた後の4sをラブライブ本戦に出場させるためにどうするかや、彼女たちと対立する絵里の動きを予測して、彼女の矛先を如何に穩便に躲すかを考えるためである。

「それで、海未はどんな反応だつた？副会長の話を聞いたときのよ。」

幸雄は希の話を聞いた海未がどのような反応を示したのかをたずねた。いつもは海未をからかつてる幸雄だったが、この時ばかりはいつもとは違つて真面目な雰囲気だつた。

「あいつなら生徒会長にダンスを教わりたいつて言つてたよ。」

「なに？マジでか。」

「ああ、あいつ言つてたよ。『もし今のみんなが先輩の半分でも踊れるようになれば本

当の意味でみんなを惹きつけられるのにつて思った。』つてよ。本当に強いよあいつらは。」

志郎の言葉を通じて海末の意思を聞いた幸雄は、

「ははは、あいつらしいな。実に結構！面白くなりそうじゃねえか。だが、そいつはそう簡単に事は運ばないぞ？なんせあの生徒会長なんだからな。」

と海末の意思を賞賛する一方で、それが難しい事である事を志郎に告げる。

「それならきつとあいつらなら乗り越えていけるだろう。それに生徒会長も恐らく心のどこかであいつらを意識してるはずだ。」

「ふふふ、やけに生徒会長を買っているな志郎。」

「そうか？」

「伊達に付き合いが古いわけじゃないからな。お前はともこの時代に生まれてからはあの時の自分に似た部分を少しでも持つてる奴を目にかけるようにしてるじゃないか。」

「悪い事ではないだろう。過去の自分と同じ過ちを犯す前にそれとなく歩む道を導こうと思ってるだけだ。…あの時の破滅をこの時代に生まれ変わってもう一度その目で見るなんてゴメンだからな。」

志郎は過去の自分の、武田勝頼の最期を思い出しながら忌々しげに呟く。

「何も悪いとは言つちやいないさ。ただ、そういう傾向が見えるからお前の真意を聞き
たかつただけさ。」

「ふん。まあ、ダンスを教わるだけでなく彼女をμsに加える事が出来ればさらに戦
力が増強すると思うが、流石にそれは難しすぎるよな。そうさせるにはお互いに和解さ
せなきゃいけないだろうし。」

「なんなら俺が生徒会長をそれとなく煽つて奴らに仲間入りするように差し向けてやろ
うか?」

幸雄が笑いながら言うつと、

「それはやめろ。お前の策は必ず上手くいくし、お前の知謀も買っているが女子高生で
あるあいつらには毒と刺激が強すぎる。下手すりやどこかで拗れてそれこそ空中分解
待つた無しだ。」

と志郎は幸雄の提案をにべもなく却下した。

「流石に冗談だよ。それにしてもそこまで考えてるとは本当に生徒会長を買つてるし、
μsの事も本当に大事に思つてるんだな。」

「ああ。」

「俺が思うに志郎からすれば一番似てると思つてるのは生徒会長だろ。あの意地つ張
りっぷりは長篠までのお前さんにそっくりだからな。」

「長篠までの俺に触れるのはやめてくれ。あれは軽く黒歴史なんだ。いろんな意味でな……。似てると思うのは事実だけど。」

「やつぱりな。お前は挫折するのが遅すぎて、生徒会長は挫折するのが早すぎた、違いはそれだけであとはほとんどそっくりさんと言つても過言じゃないからな。」

「返す言葉もないな。ろくな挫折を知らずに進んだ末路がああザマだからな。生徒会長も早すぎた挫折から立ち直れてないように見える。あのまま進んで行つてしまつては間違いなく俺の二の舞を踏む羽目になる。だからそうなる前に……。」

「そうなる前にあいつらと和解させる、だろ?」

「ああ。なんとしてもだ。もちろん真つ当な手段でな。」

志郎の言葉には強い意志が滲んでいた。

「それよりも穂乃果達の方はどうだ?」

と志郎は話がひと段落ついたところで穂乃果たちの勉強がどうなつてゐるかについて話を変えた。

「ああ、思つた以上に難物だよありやあ。まだ時間は残つてゐるからいいんだがこのままじゃマズいかもな。」

幸雄の言葉を聞く限り、万事上手くいってるとは言えないようだった。

「お前がそこまで言うほどか。」

「ああ。」

「よし、だったら徹底的にやってくれ、手段は問わない。何としてでもあいつらの赤点を阻止しろ。」

「いいのか？ さつきは俺の手段はマズいみたいなこと言つてたけど。」

「あくまでもそれは平時での話だ。非常事態にそんな甘つたれたことは言つてられないぞ。とにかく何としてでもあいつらの実力を底上げしろ！」

志郎は勝頼だった頃の口調で幸雄に指示を出した。幸雄は志郎の言葉を聞いてニヤリと笑い、

「了解した、我が知略を以てあいつらの赤点を阻止してご覧にいきましょう……！」

と昌幸だった頃の口調で志郎の指示に応えた。

「期待してるぞ。また明日な。」

「ああ、また明日。」

志郎は電話を切つてベッドに寝そべった。

（さて、これからやる事が大幅に増えたな。だが何としてでもあいつらを支えてみせるぞ……。）

志郎はそう心に誓い、部屋の電気を消して眠りについた。

そしてその次の日の昼休み、音ノ木坂学院の屋上に穂乃果、凜、にこの三人が立っていた。

「凄い太陽だねえ。」

「夏、かあ・・・。」

「よし、限界まで行くわよ!!」

どうやら気分転換をしようとしているのか、三人が大きく息を吸ったが、

「よお、お嬢さん方。こんなところで何やってるんだい?」

その直後にいつの間に現れたのか、屋上の入り口に立っていた幸雄が三人に声をかけた。

「うわあああ!?! ってなんだ幸雄くんかあ・・・。」

「びっくりしたにやあ・・・。」

「希が来たかと思つて損したじゃない。」

と三人は希じゃないと分かつて安堵の声を漏らす。

「確か昼休みは部室で勉強するって取り決めじゃなかったか?」

「そ、それは分かっているんだけどね・・・。」

「勉強ばかりだと気が滅入っちゃうし・・・。」

「そうよ！だから体を動かして気分転換をしようと思ったわけで・・・！」

三人は幸雄に対して言い訳をするが、

「確かにお前らにしちや真つ当な意見だな。詰め込みすぎるのは非効率的でもあるから俺的には別に構わないんだが・・・。」

「じゃ、じゃあこのことは希先輩には内緒で・・・！」

穂乃果は幸雄が自分たちの言い訳を肯定してくれたと思つて、見逃してもらえように懇願するが、

「それはあくまでも一定の水準を超えていることが前提の話だ馬鹿ども。それにお前らの言い分はよ～～～～く分かった。あとは『先生』に何とかしてもらおうか。」

と幸雄はにんまりと笑いながら言った。

「先生？」

「なーんか嫌な予感しかしないんですけど・・・。」

「ほんじゃ『先生』、よろしくお願いしまーす!!」

幸雄がそう呼びかけると、

「はいー！みんな大好き希先生参上～～!!」

その呼びかけに応じて希が屋上に出てきたのだ。

「「うわあああああああああ!?!?!」」

希が出てきたことで三人は驚きのあまりにすっ転んでしまった。

「さつきから後ろで聞いてたけど、成績が危ないのにみんな余裕やんわ．．．。」
と希は両手をワキワキさせながら怯える三人に迫る。

「い、いやあ、まさか希先輩がいるとは思わなくて．．．。」

凜は怯えながらも希に弁明の言葉を語り、

「幸雄くんの鬼ー！卑怯者ー!!」

「あなたには人としての情ってのは無いの!？」

穂乃果とにこは幸雄に対して恨みつらみをぶつけた。

「ん？人間としての情ならあるし、鬼だの卑怯者だつてのは俺にとつちや最高のほめ言葉だぜ☆」

そう穂乃果とにこに言葉を返す幸雄の顔はこれ以上ないほどの笑顔に満ちていた。

「三人とも言い残すことはそれだけやね？」

「「ひい！」」

「おサボリした罰に、三人まとめて特大わしわしMAXの刑や〜!!」

「「いやああああああああ!!」」

希の処刑宣告と同時に三人の悲鳴が屋上に響き渡った。

「流石にこいつはきつすぎたかねえ．．．。」

幸雄は三人がわしわしする光景をスマホで録画しながら苦笑いで呟いた。

そして放課後……。

「今日のノルマはこれね!!」

希はそう言つて机に大量の参考書を置いた。

「「鬼……。」」

三人は希を恨めし気な目で見ながら呟くが、

「あれ?まだわしわしが足りてない子がおるん?」

と言つて希が指を動かすと、

「「まっさかー♪」」

と三人は一転素直になつて勉強を始めた。

「手段は問わないと言つたが……マジで何したんだ?」

と三人の様子を見た志郎が幸雄に何をしたのかを聞いた。

「とりあえずあいつらの名譽のために黙秘させてもらうわ。」

「うちはちよーつとあの子たちに刺激を与えてあげただけやで?」

と苦笑いで答える幸雄と満足げな顔の希を見て、

(あつ……。これマジでろくなことやってないパターンだ。)

と察した。

「そういえば海未先輩がまだ来てないけどどうしたんですか?」

と真姫は海未が来てないのに気付いてことりに彼女がどこにいるかを聞くが、

「さあ……。」

としかことりは答えられなかった。事実、海未は今日一日心ここにあらずといった状態だったからだ。海未が思い悩んでいるであろう理由を知っている志郎は、

「まあ、あいつにも何か色々考え事があるんだろ。なあに、直にやってくるさ。」

とことりと真姫に言った。そしてその直後に、

「穂乃果!!」

と海未が駆け込んできた。その顔はどこか晴れやかな様子だった。

「海未ちゃん……。」

と勉強地獄でよれよれになっている穂乃果を見た海未は、

「今日から穂乃果の家に泊まり込みます!勉強です!!」

と、穂乃果からすれば追い打ちともとれる宣言を穂乃果に宣告した。

「どうやら吹っ切れたみたいだな海未。」

と志郎が海未に言うのと、

「はい、昨日志郎の言う通りにゆっくり休んだおかげでじっくり考えることが出来ました！ありがとうございます！」

と笑顔で志郎にお礼を言った。

「あー、海未さんや。イチヤイチヤしているとこ悪いんですがちよいといいですか？」

と二人の間に幸雄が割り込んできた。

「い、イチヤイチヤなんてしてないです!!で、何か用ですか？」

と顔を赤くしながら海未は幸雄に用件を聞いた。

「勉強合宿するならよ、こいつを使ってくれや。」

と言うって幸雄は四つ折りにした小さなメモ用紙を渡した。海未がそれを開いてみると、そこにはおびただしい量の数学の勉強方法が書かれていた。

「これは……!!」

「そいつは俺が昨日徹夜で考えた対穂乃果専用の真田式……じゃなくて武藤式の勉強プログラムだ。お前の指導とそいつを組み合わせれば付け焼刃だがあいつの成績を伸ばすことは出来るだろう。」

と幸雄はドヤ顔で説明した。

「だから今日いつもより居眠りが多かったんだ……。」

そして時は流れ、期末試験の答案返却最終日……。穂乃果がやり切った顔で部室に入ると、志郎たち二人と、μsのメンバー全員が既に集合して穂乃果を待っていた。

「どうだった？」

「今日で全教科返ってきましたよね？」

「……！」

「穂乃果ちゃん！」

「せっかく徹夜してまで勉強方法を考えてやったんだぜ？赤点で全部おじやんとか勘弁してくれよ？」

「大丈夫なのか……!？」

と、にこと凜以外のメンバーは穂乃果に結果を聞く。

「凜はセーフだったよ！」

と言つて凜はピースサインをした。

「あんた、私たちの努力を水の泡にするんじゃないでしょうねえ!!」

「……!？」

「……!？」

と最後に8人で穂乃果に詰め寄った。

「うん、もう少しいい点が取ればよかつただけど……。」

穂乃果はそう言つて鞆をまさぐり、

「ジャーン!!」

とみんなに答案を見せた。点数は53点で何とか無事に赤点を回避してみせた。

「よし、今日から練習だー!!!」

と穂乃果がそう言つて部室を飛び出したのを皮切りに、他のメンバーも晴れやかな顔で部室を飛び出していった。

「やれやれ、まだラブライブ本戦に出れるわけじゃないってのにはしゃいじゃってまあ……」

と幸雄が言うが、

「まあいいじゃないか。まずは最初の壁を乗り越えられたんだから良しとしようじゃないか。」

志郎はそう言つて穂乃果たちに着いて行つた。

「そうだな。」

と幸雄もそう呟いてから部室のドアを閉めて穂乃果たちの後を追つた。

そして穂乃果は無事全員が赤点を回避できたことを理事長に報告するために、理事長

室の前にやって来てノックをするも、中から反応は無かった。

「おかしいな。留守か？」

「ううん、そんなはずはないんだけど……。」

とことりが幸雄に応えると理事長室の中から、

「そんな!!説明してください!!」

という絵里の声が聞こえてきた。穂乃果がドアを少しだけ開けてみんなで聞き耳を立ててみると、予想だにしなかった言葉が聞こえてきた。

「ごめんなさい、でもこれは決定事項なの。」

「っ……!」

「音ノ木坂学院は来年より生徒募集をやめて廃校とします。」

その理事長の言葉に穂乃果は衝撃を隠すことは出来なかった。

19話 それぞれの行く道

「今の話、本当なんですか!？」

穂乃果は、理事長の言葉を聞いていても経つてもいられなくなり、理事長室に入つていった。

「あなた・・・!」

「本当に廃校になつちゃうんですか!？」

穂乃果は制止しようとする絵里にはわき目も振らずに理事長の前に駆け寄つた。

「本当よ。」

理事長はそんな穂乃果に対して、淡々と現実を突きつけた。

「お母さん、そんな話全然聞いてないよ!!」

「お願いします!もうちよつとだけ待つてください!!あと一週間、いえ、あと二日で何とかしてみせますから!!」

穂乃果はよほど動揺しているのか、絶対できないであろう約束を条件に、理事長に廃校を待つように嘆願した。理事長はそんな穂乃果を見て少し驚いたような顔をして、「いいえ、あのね。廃校にするというのはオーブンキャンパスの結果が悪かったら、とい

う話よ。」

と困ったように笑いながら穂乃果たちに告げた。それを聞いた穂乃果はポカンとした表情で、

「お、オープンキャンパス？」

と呟いた。

「一般の人たちに見学に来てもらうってことですか。」

と幸雄が理事長にたずねた。

「ええ、見学に来た中学生にアンケートを取って結果が芳しくなかったら廃校にする。そう綾瀬さんに言っていたの。」

と理事長は答えた。それを聞いた穂乃果は安堵したように、

「なんだあ。」

と言ったが、

「お前の早とちりってわけか。」

と志郎にツッコまれ、

「安心してる場合じゃないわよ。オープンキャンパスは二週間後の日曜日、そこで結果が悪かったら本決まりってことよ。」

と絵里にくぎを刺された。

「どうしよう……。」

穂乃果たちは現状がいかに厳しいかを知らされ動揺していた。

「理事長。」

意を決したように絵里はそう言つて穂乃果たちの前に立ち、

「オープンキャンパスのイベント内容は生徒会で提案させていただきます。」

と理事長を真つ直ぐに見据えながら、生徒会が活動することに対する許可を求めた。

「……止めても聞きそうにないわね。」

そう言つて理事長は絵里に生徒会の活動を許可した。

(ようやく生徒会長が本格的に動き出す、か……。面白くなつてきたねえ。)

それを見て幸雄は誰にも気づかれない程度にだが、ニヤリと笑つた。

「失礼します。」

そう言つて絵里は足早に理事長室から去つていった。

「なんとかしなくっちゃ!」

絵里が出て行つたあと、穂乃果は誰に言うでもなく力強く呟いた。

一方で、絵里が理事長室から出ると、目の前には彼女の親友にして、片腕でもある『副会長』の希が立っていた。

「どうするつもり?」

「そう言つて希が絵里にタロットカードを見せる。カードが示しているのは星の逆位置、それは未来が悲観的であることを暗示していた。

「決まつてるでしょ。」

絵里は迷うことなく答えた。

穂乃果たちは理事長室から部室に戻つたあと、他のメンバーに理事長室で聞いたことをすべて話した。

「そんなあー!」

「じゃあ、凜たちはやつぱり下級生がいない高校生活!？」

花陽と凜は当然というべきか、これから下級生のいない高校生活になってしまうかもしれない可能性があることを知つて、不安を隠せない様子であつた。

「そうなるわね。」

「まあ、私はそつちの方が気楽でいいんだけど。」

その一方でお世辞にも人づきあいがいい方とは言えないにこと真姫は凜と花陽に比べると冷静だつた。

「おいおいお二人さんよ、簡単に言つてくれてるがこつちは死活問題なんだぜ?この音

ノ木坂での高校生活自体が懸かってるんだからな。」

幸雄は普段ならこのような切迫した事態になってもへらへらしていたが、今回ばかりはそうはいかないようだった。

「それってどういうことなの？」

穂乃果が質問した。

「お前らは俺たちがどういう名目でこの学校に転入したのか忘れたのか？」

志郎は穂乃果に自分たちがどんな理由で転入してきたのかを問いかけた。

「えっと・・・なんだっけ？」

「確か音ノ木坂学院はいつか合併するかもしれないということ、その時に備えた試験生のようなものでしたよね？」

海未が穂乃果の代わりに二人にそう返した。

「そう、俺たちは『研究生』であって、一応正式な生徒として扱われちゃいるが、それはあくまでも『研究生』という肩書があつての話なんだがな。」

「そ、つまり廃校が決まってしまえば研究生はお払い箱行きつてわけなんだわさ。」

志郎と幸雄が自分たちの置かれてる現状を解説するが、

「でも、流石にここを出ていくことにはならないんじゃ・・・。」

とことりは反論する。しかし二人はため息をついて、

「いや、出ていく理由はないわけじゃあない。」

「そもそもここは伝統ある女子高だぜ？いくら研究生とはいえ男がいること自体おかしいんだ。その場しのぎの共学化だって相当反対されただろうし、その第一歩となる研究生を入れることもまた然り。俺たちにや関係ないが、俺らの事が気に食わない奴らがいるだろうぜ？例えば教育委員会とかによ。」

「幸雄の言う通りだ。つまり廃校が決まっつてしまえば俺たちがここにいる大義名分は無くなり、遅かれ早かれこの学校から追われて別の学校に転校する可能性が出てくるってわけだ。」

と幸雄が理由を語り、志郎が結論を述べた。

「そんな!!二人がどっかに行っちゃうなんて嫌だよ!!」

「そうだよ!せつかく仲良くなれたのに!!」

志郎たちの言葉を聞いて焦った穂乃果たちが志郎たちに詰め寄るが、

「お、落ち着けお前ら。あくまでも可能性だ!」

と志郎が穂乃果たちを宥めようとする。

「可能性?」

「そ、そうだ。大体一度転入させた以上、そんな横暴が許されるはずがない。それに俺たちがいい結果を出して廃校を阻止すればそれで済む話じゃないか!」

と志郎はそう言う一方で、

(まあ、俺はそういう横暴でこっちに來たわけなんだがな……)

と心の中で呟いた。

「確かにそうだよね……。私たちが頑張ればそんなことにならずに済むよね！」

と穂乃果が言うのと、

「ああ、そういうことだ！」

と同意した。

「とにかく、オープンキャンパスでライブをやろう！それで入学希望者を少しでも増やすしかないよ!!」

と穂乃果が言うのと、

「「「「うん!!」」」」」

と他のメンバーもそれに応えた。

「よし、それじゃあ早速練習……って幸雄くんどこ行くの?」

と穂乃果は一人どこかに歩いていく幸雄に声をかけた。

「どこって生徒会室だよ。これから会議で招集をかけられたんだ。すまんが今日に行けそうにないわ。じゃあな！」

と言って幸雄はそのまま歩いていった。その後ろ姿を見て真姫は、

「ねえ、前から思ってたんだけど幸雄先輩って生徒会とμs、どっちの味方なのかしら。」

と前から抱いていた疑問を口に出した。

「確かに、あいつの動きってどうも読めないのよね。練習も生徒会だって言ってる出ないことが多いし。ひよつとしたらあいつあの生徒会長に色々入れ知恵してんじゃないの?」

「い、入れ知恵え!?!」

花陽はにこが何気なく出したその単語に驚きを隠せなかった。

「いや、あいつに限ってそれはない。」

と志郎が断言した。

「根拠はあるわけ?」

と真姫が聞くと、

「あいつは基本的に何事にも中立的に臨む癖があるんだ。ありとあらゆる方面に立ち、様々な視点で物事を見聞きしながら最良の選択をとる……。それが武藤幸雄という男だ。」

と志郎は幸雄がどういう理念を持って動いているのかをみんなに教えた。

「でも、それって童話に出てくる蝙蝠みたいじゃない。」

「確かに合理的ではありませんが、あまりに節操がなさすぎるとも言えるのでは……。」「真面目な海未と、はつきりしないことを嫌うにこがそれを聞いて顔をしかめたが、確かに蝙蝠に見えるかもしれない。だが、あいつは一度胸に刻んだ信念を捨てるような真似は絶対にしない。普段はあまり人には見せないがあれで義理堅いところもあるからな。」

と、志郎は在りし日を思い出しながら言った。

「これより生徒会は独自に動きまます。なんとしてでも廃校を食い止めましょう！」

一方で生徒会室でも、廃校を阻止するためにオーブンキャンパスで何をやるかに関しての会議が始まっていた。

（さて、今まで生徒会長の普段の仕事での手腕は飽きるほど見てきたが、こういう一大イベントでの仕切りは初めて見るな……。廃校というプレッシャーが掛かっている中でどれだけ冷静に、柔軟に対応できるか、お手並み拝見と行こうか。）

会議が始まるギリギリ前に生徒会室に着いた幸雄は席に着き、絵里の方を見た。

「……」

幸雄以外の二年生の生徒会役員の女子生徒たちは、絵里の顔を見た後、お互いに顔を

合わせた。それを見た絵里は、

「何か？」

と聞くが、女子生徒の一人はただ、

「あ、いえ……。」

としか答えることが出来なかった。

「言いたいことがあつたら何でも言ったほうがいいよ？」

それを見て希は助け舟を出した。

「えつと、これってどうやって入学希望者を増やすかって話ですよね。」

「ええ。」

「だったら、楽しいことをいっぱい紹介しませんか？学校の歴史や、先生がいいっていうのも大事ですけど、今までの生徒会はちよつと堅苦しい気がして……。」

と、女子生徒の一人が提案するのを聞いて、

（まあ、真つ当な意見だな。事実、中学生が高校を選ぶのは大体その手の話題が決め手になるからなあ……。）

と幸雄は頭の中でその意見を分析しつつ、絵里の表情が少し険しくなったのを見逃さなかつた。

「例えば……この制服って、かわいいって言ってくれる人多いんですよ。」

ともう一人の女子生徒が制服のリボンを絵里に見せながら制服の良さをアピールした。

「それいい！そういうのアピールしていきましようよ！」

「だったら、スクールアイドルとかも人気あるよね！μ sだっけ？」

「そう言えば武藤さんってμ sのマネージャーやってるんだよね？その子たちにライブをやってもらえるように頼めないかな？」

と、幸雄に話が振られた。

「いや、厳密にはマネージャーじゃねえんだが、こつちも一応そのつもりだから別に構わない」

「他には!？」

と、絵里が幸雄の話を遮った。絵里による遮断で、女子生徒たちは軽く意気消沈してしまった。

「他には……。」

そして彼女たちが考え抜いた末に生徒会のメンバーが向かったのはアルパカ小屋だった。

「これ、ですか・・・?」

絵里は怪訝そうな顔で白いアルパカを見ながら女子生徒たちに質問する。

「はい!他校の生徒にも意外と人気があるんですよ!!」

女子生徒の一人が今回の案は自信作なのか、自信満々気に説明した。

「ちよつと、これでは・・・。」

と絵里が不安げに呟くと、茶色いアルパカが絵里の前に顔を突き出し、絵里に向かって思い切り唾を吹きかけた。

凜と花陽が、餌と水を持ってアルパカ小屋に向かっていると、

「「うわわわわわわわ・・・!」」

と何人ががすごく動揺しているような声が聞こえたので小屋の前に行くくと、

「ぶはははははは!!生徒会長、唾吹きかけられますよ・・・!ひーひーw」

ハンカチを手にとって立ち尽くす絵里と、慌てて絵里を拭く生徒会役員の女子生徒たちに、それを見ている希と、その近くで爆笑している幸雄がいた。

「生徒会長さん?」

と花陽が呼びかけると、

「あなた達・・・。」

「お、凜に花陽か。お疲れさん!」

と絵里と幸雄が反応した。

「あ、スクールアイドルの!!」

と女子生徒の一人が反応し、

「ちようどよかった!今度オープンキャンパスがあるんだけど、良かったらライブとか……!」

と花陽たちにライブのオフア―を持ち掛けるが、

「待ちなさい!まだ何も決まってるじゃないでしょう!」

と絵里が女子生徒の言葉を遮った。それを見て凛は不満げな目で絵里を見ていたが、

「ちよいと待った生徒会長。」

と、ここに来るまで自主的に発言をしなかった幸雄が遂に口を開いた。

「何かしら武藤君。」

と絵里は幸雄の方に振り向きながら答えた。

「何かしらつてずいぶんとまあのおんきな返事ですなあ、生徒会長。あんた、人を引っ張る立場の人間としてはずいぶんとまあダメダメですな!」

と、開口一番に絵里に対する批判をぶちまけたのだ。

「ちよつとゆつきーくん……!」

と希が幸雄を止めようとするが幸雄は逆に希に対して手をかざすことで彼女を制止

しながら話を続ける。

「第一せつかくの提案を気に入らないからって握りつぶそうとしている時点で論外じゃ！ 民主主義が流行ってるこの時代でそんな独裁者の真似事なんぞ時代遅れにもほどがあるわい！ 全く、今までずいぶんあいつらに対してダンスが上手いからとかで上から目線で見えたようだがこつちの方面じゃからつきしじゃねえか!! だいたい、廃校が掛かっているつちゆうのに好き嫌いなんでしてる暇なんてないじやろうがい！ あんまり下品なことは言いたくないが俺たちや、ケツに火がつきかかっているんだよ。いや、研究生である俺と志郎のケツにはもうすでに火がついてるんだよ、崖つぶちなんだよ!!」

と、普段はあまり感情的に声を張り上げることのない幸雄が顔を怒りで歪めながら怒鳴り散らした。口調も所々が真田昌幸だった頃のものに戻っている。

「あなたならもつと上手くできるといふの?」

絵里は今まで見たことない幸雄の怒声に少し怯むも、毅然として幸雄に反論してみせた。

「ああ、1000点満点の出来とは言わないが少なくともあんたよりはうまく立ち回るこ
とが出来るね!! まず俺ならさっきのそいつらの提案は全て採用してだな・・・。」

と幸雄が言うのと、

「ちよつと待ちなさい。これはお遊びじゃないのよ、廃校が掛かっている一大事なのよ

「！」

と絵里が口を挟む。

「お遊びだ？生憎だな、こつちは常に真剣なんだよ。あんたはどうやらこの学校が如何に伝統があつて素晴らしい学校であることを前面に押し出したらしいようだが、そんなもんは今どき通用するとは思えないね！」

「どういふことかしら・・・！」

「さつきそつちの娘が言つてた通りだよ。それじゃあ堅苦しすぎるのよ。今どきの中学生からしたら伝統なんぞかび臭い飾り物だと思つてない奴らが大半だよ!!そりや進学に有利だとか伝統だとかを重視する奴が全くいないて言うわけじゃあないが、そんなもんは二の次だ。だいたい進学先をどこにするかの基準なんて『どこの学校に行つたら面白くて楽しい高校生活を送れるか。』つて思つてるやつが多いだろうな。疑うならアンケートでも取つてみな？8割以上が俺と似たような意見を出すと思うぜ？」

「・・・！」

幸雄の凄まじい理詰めの話術を前に絵里はただ黙つていることしかできなかつた。

「それに何よりあんたからは活気を感じない。さつきの制服の紹介やμ、sにライブをしてもらおうと提案していたあいつらみたいな生き生きとした活気をおんたからは感じられないんだ。どんな崇高な紹介をしようが、音ノ木坂学院がどれだけ素晴らしい学

校であるかをアピールしてもな、心がなきやあ人を惹きつけることなんぞ死んでもできんぞ。あんたはそれでいいのか？そんな堅苦しいことしてて息苦しくないのか、辛くないのか!？」

幸雄は、垂れ目の三白眼をギラリと光らせながら絵里に詰め寄るが、絵里は氷のように冷めた目で幸雄を見据えながら、

「・・・私はどうあつても考えを変える気は無いわ。今日の会議は一旦ここで終わりにします。」

ただそう言ってその場から去っていった。気まづくなつた他の女子生徒たちもそのまま返つていった。

希が絵里を追つていこうとして走り出し、幸雄とすれ違つたとき、幸雄はすれ違いざまに、

「すまん副会長、ちと今回はやりすぎちまった。あまりに見てらんなくなつてな。」

と希に小声で俯きながら言った。

「ううん。絵里ちのためを思つて言つてくれたことは分かつてるんよ？だから気にせんといてね。」

希は幸雄にそう言ってそのまま絵里を追いかけていった。

「幸雄先輩・・・。」

うつむいている幸雄に凜と花陽は心配げな面持ちで声をかけた。

「ふはあー！ー！ー！！流石の俺でもダメだったかあー！ー！！」

とききなり幸雄が叫んだので二人はビクツとした。

「幸雄先輩、大丈夫なんですか？」

と花陽が聞くと、

「ああ、今のでだいいぶ吹っ切れた。やっぱり気分を変えるには叫ぶのが一番だなあ。」

と幸雄が伸びをしながら言うのと、凜と花陽の頭をわしやわしやと撫でた。

「な、なにするにやー！ー」

「髪がぼさぼさになっちゃいますよお！」

二人が幸雄に抗議するが、幸雄はそれに構わず、

「二人とも心配してくれてありがとう。それと見苦しいところを見せてすまんかった

な。さあ、練習に行くぞ！」

と笑いながら言うのと、

「はい！」

二人も笑顔で返事して、幸雄に着いて行つた。

（焦りすぎてたせいが大ドジ踏んじまったが今ので確信した。どうやら俺ではあいつの心を動かすのは無理だ。あいつの心を動かすにはやはり真っ直ぐに切り込むことが出

来る志郎でなくてはな・・・。）

幸雄は凜と花陽と一緒に練習に向かいながら、この先どう動くかを考えていた・・・。

「1、2、3、4、5、6、7、8・・・！1、2、3、4、5、6、7、8・・・！」

そして屋上では、オープンキャンパスに向けての新曲の練習が行われていた。しかし、リズムをとる海未の表情は沈んでいた。

（やっぱりこの前の動画が原因だろうな。確かにあの動画を見てからだと何度やってもあいつらの動きが物足りなく見えてしまうのも無理は無いよな・・・。）

海未の表情と穂乃果たちの動きを交互に見つめながら、志郎はそう考えていた。

「カーンペキ!!」

「そうね。」

「やっとにこのレベルに皆追いついたわね！」

と、幾度となく繰り返し続けた練習を一通り終えて穂乃果とにこと真姫は満足げに言つて、他のメンバーも頷いていた。海未を除いて。

「まだ駄目です。」

「「「「えっ?」」」」」

海末の言葉にみんなは意外そうな声を上げ、

「うう・・・、もうこれ以上上手くなりようがないにや・・・。」

と凜は力のない声を上げるも、

「それではダメです、それでは全然・・・。」

と海末は無機質な声で応える。この海末の態度に業を煮やした真姫は、

「何が気に入らないのよ! はつきり言つて!!」

と真姫が詰め寄るが、

「感動できないんです・・・。今のままでは・・・。」

と海末はそう答えることしかできなかつた。

「海末、とりあえずあのことをみんなに話すべきじゃないか?」

と志郎は海末に諭すように提案した。

「「「「あの?」」」」」

「「ええ!?生徒会長に!」」

「うん、海末ちゃんと志郎くんがダンスを教わろうって。」

予想だにしなかった内容に一年生三人は驚いていた。

「はい、あの人のバレエを見て思ったんです。私たちはまだまだだって。」

「話があるっていうのはそんなこと?」

海末の話を聞いて、ここは納得したように呟く。

「でも生徒会長、私たちの事……。」

「嫌ってるよね、絶対!」

「つうか嫉妬してるのよ嫉妬!」

凜、花陽、ここは絵里に対して不信感をあらわにしていた。

（まあ、そう思うのは無理もないか。）

（もつとも、そんな単純な話じゃないんだけどねえ……。）

三人の反応を見て、志郎と幸雄は心の中で今までの生徒会長との会話を思い出していた。

「私も最初はそう思っていました。でもあんなに踊れる人が私たちを見たら、素人みたいなものだという気持ちも分かるのです。」

「そんなにすごいんだ……。」

海未の言葉を聞いたことりは絵里の踊りに関心を示したが、

「私は反対。潰されかねないわ。」

「そうね、三年生はにこがいれば十分だし。」

と絵里を前から強く警戒していた真姫とにこが反対意見を出した。

「生徒会長、ちよつと怖い．．．。」

「凜は楽しいのがいいなあ。」

と、凜と花陽も二人に賛同した。だが、

「私はいいと思うけどな。」

と穂乃果が突然言い出し、

「「「ええええええ!」「」」」

反対派の四人は驚きの声を上げた。

「何言ってるのよ!!」

「だってダンスが上手い人が近くにいて、もつと上手くなりたいから教わりたいてこ

とでしょ?」

と穂乃果が話をまとめた。

「穂乃果の言う通りだな。だがそれは．．．。」

と志郎が穂乃果に忠告しようとするも、

「だったら私は賛成!!頼むだけ頼んでみようよ!!」

と志郎の言葉にかぶせるようにみんなに提案した。

「ちよつと待ちなさいよ!!」

とにこが囁みつくも、

「でも・・・、絵里先輩のダンスはちよつと見てみたいかも。」

とことりが絵里のダンスに興味を示し、

「あーそれは私も・・・!」

と花陽もこどりの意見に賛同した。

「よしー!じゃあ明日さっそく聞いてみよう!!」

二人の言葉を聞いて穂乃果はさっそく行動に移ろうとした。

「どうなっても知らないわよ。」

とにこは捨て台詞を吐く。

「やれやれ、本当にあいつは凄いな。」

「ああ、ついしばらくまで対立していた相手であろうが自分よりもすごいって分かった

ら教えを乞うために頭を下げられる、並大抵の人間じゃ出来ないぜありや。」

「かの織田信長が、散々苦しめられた雑賀衆の鉄砲技術を応用していたのとそっくりだ。」

「そしてお前さんが自分よりも穂乃果の方が人を率いるための力量に優れてるって早いうちに認められたのとも同じじゃな。」

と志郎と幸雄はそう話しながら帰り道を歩いていた。

「それは過去の俺に対する当てつけか？」

と皮肉な笑いを浮かべながら幸雄に言うが、

「いや。単純にかつての主がさらに成長したことを喜んだだけさ。」

と幸雄がさらりと返す。

「あいつの決断がいい方向に動くといいな。」

「ああ。」

そう言つて二人は分かれ道を別れていった。

志郎たちの運命が決まる、音ノ木坂学院オープンキャンパスまであと二週間。

20話 絢瀬絵里のやりたいこと

穂乃果たちが絵里にダンスを教わるか否かを話し合っているとき、絵里は家で妹の亜里沙と、その友人である雪穂を相手にオープンキャンパスでやる予定である音ノ木坂学院を紹介するスピーチの練習をしていた。

「……このように音ノ木坂学院の歴史は古く、この地域の発展にずっと関わってきました。さらに当時の学院は音楽学校という側面もあり、学院にはアーティストを目指す生徒に溢れ、非常にクリエイティブな雰囲気にも包まれていたと言います。そんな音ノ木坂ならではの……。」

スピーチを聞いている亜里沙の表情は少し退屈そうで、雪穂に至ってはこっくりこっくりと居眠りをしているという有様であった。そして雪穂の体勢は次第に後ろの方へ傾いていき、

「うわあっ！体重増えたっ!!!」

と叫んで目を覚まし、

「あ、すいません……。」

と顔を赤くして消え入りそうな声で絵里に謝った

「ごめんね、退屈だった？」

絵里はそんな雪穂を見て申し訳なきように言った。

「いい、いいえ！面白かったです！後半すごい引き込まれました！」

と雪穂は絵里に氣遣つてそう言った。

「オーブンキャンパスまでに直すから遠慮なく言つて。」

と絵里が言うのと亜里沙が立ち上がつて、

「亜里沙はあまり面白くなかつたわ。」

と言つた。

「ちよつと!？」

と雪穂が小声で止めようとするも、

「なんでお姉ちゃんこんな話をしてるの?」

と絵里に問いかける。

「学校を廃校にしたくないからよ。」

「私も音ノ木坂は無くなつてほしくないけど、でも……。これがお姉ちゃんのやりたい

ことなの?」

亜里沙からそう言われた絵里は何も言い返すことは出来ず、先ほどに幸雄が絵里に向かつて言い放つた言葉が彼女の頭の中をよぎつた。

「嫌でしょ？自分の学校が廃校になったら。」

その次の日、絵里はその時のことを希に話した。

「それはそうやけど、廃校を阻止しなきゃって無理しすぎてるんやない？」

と話を聞いた希はタロットカードを片付けながら言った。

「そんな、無理なんて・・・。」

そう言つて顔をしかめながら絵里は椅子に腰を下ろした。

「絵里ちも頑固やね。」

「私はただ、学校を存続させたいだけ。」

絵里がそう呟いたあと、生徒会室のドアを誰かがノックした。ドアを開けると、穂乃

果とことりと海未の3人が立っていた。

「どうか私たちにダンスを教えてください、お願いします!!」

と穂乃果が言つてから3人は頭を下げた。

「私にダンスを？」

「はい！教えていただけませんか？私たち、上手くなりたいんです!!」

絵里は穂乃果の言葉を何も言わずに聞き、そして海未の目を見た。その時、絵里の脳

裏には前に公園で海未に言われた、

『あなたに私たちの事をそんな風に言われたくありません!』

という言葉がふとよぎり、

「わかったわ。」

と穂乃果たちの頼みを受けた。

「本当ですか!？」

「あなた達の活動は理解できないけど、人気があるのは間違いないようだし、引き受けましょう。」

と言つて海未を見た。海未は笑顔になっていた。

「でも、やるからには私が許せる水準になるまで頑張ってもらおうわよ! いい?」

と、絵里が厳しい口調で言う。と穂乃果は目を輝かせ、

「はい! ありがとうございます!!」

と絵里に礼を言った。それを曲がり角の陰からにこ、真姫、凜、花陽、志郎、幸雄の6人が見守っていた。

「嫌な予感しかない……。」

とにこは苦々しく呟き、

「さて、これが吉と出るか凶となるか……。」

と幸雄はニヤリと笑いながら言った。

そして希も絵里を見ながら、

「『星』が動き出したみたいや。」

と言った。

そして放課後の屋上で、いよいよ絵里を加えての練習が始まったが……。

「どわわわ〜!!いった〜い!」

と凧が転んで尻もちをついた。

「全然だめじゃない!よくこれでここまで来られたわね!!」

それを見た絵里が穂乃果たちを叱責する。

「昨日まではばっちりだったのに〜!!」

と凧が言うと、

「基礎が出来てないからムラが出るのよ、足を開いて。」

と言って凧に座った状態で足を開かせた。

「(ハ)っ。」

と凧が足を開くと絵里はその背中を強く押した。

「うぎつ！痛いにやあああああ!!」

と凧が悲鳴を上げた。

「うはあ、痛そ〜。」

「意外だな。凧は体は柔らかいと思つてたんだが・・・。」

と、それを見て幸雄はうへーと言わんばかりに、志郎はなるほど、と言うように呟いた。

「これで？少なくとも足を開いた状態でお腹が床に着くようにならないと。」

と絵里が言うのと、

「ええええええ!!」

とさらに凧が悲鳴を上げる。体が硬い人間からすればそれはもはや人間離れた技であるから悲鳴を上げるのは無理もない話である。

「柔軟性を上げることは全てに繋がるわ！まずはこれを全員出来るようにして。このままだと本番は一か八かの勝負になるわよ!!」

と絵里がみんなに言うのと、

「嫌な予感の中・・・。」

とにこが苦い顔で呟いた。

「ふっー！」

ことりが試しにやってみると、お腹どころか上半身全体がぺたりと床に着いた。それを見て、

「うわ！ことりちゃんすごい！」

と穂乃果たちが感心していると、

「感心している場合じゃないわ！みんな出来るの!？」

と絵里が凛の背中を押しながら穂乃果たちに檄を飛ばす。

「ダンスで人を魅了したいんでしょ！このくらいできて当たり前!!」

「うはあ、流石はバレエ経験者なだけあってスパルタだねえ。」

「それだけ今までが緩かったんだろう。」

とそれを見て志郎たちが話していると、

「あなた達二人もよ!!」

と二人にも檄を飛ばした。

「え!!」

幸雄が驚くと、

「当たり前でしょ！彼女たちを支えるんなら彼女たちと同じ、いえ、それ以上のことが出来なくてはダメよ!!ほら、あなた達もやる!!」

と志郎たちにもトレーニングに参加するよう促した。

「志郎、お前あれ出来るか？」

幸雄が志郎に質問すると、

「出来るぞ、ほれ。」

そう言つてことりのように上半身を床につけてみせた。

「マジかよ……。」

と幸雄が言つと、

「生徒会長も言つてたろ、柔軟性は全てに通ずるつて。お前はどうか？」

と幸雄にできるかどうかを聞いた。

「いや、まったくできないわけじゃないんだけどな？」

と言つてやつて見せるが、あと少しの所で床に着かない状態だった。

「ほう、悪くないな。もう少しでつくから気張つてみせろ！」

「無茶言つてんじゃないよ！これでも少し無理してんだぞ!!」

と幸雄は志郎に向かつて叫ぶ。

「叫ぶ余力があれば行けるだろ。」

と言つて志郎は幸雄の背後に回つた。

「やめろ志郎絶対押すなよ！フリじゃねえからな、マジで押すなよ!!ほんと死んじやう

から!!!」

「大丈夫だ、そう簡単に骨は折れんから問題ない!!」

と、幸雄の懇願を無視して志郎は背中を押した。

「.....」

幸雄の体は床に着いたが、彼自身は動かなくなっていた。恐らく激痛のあまり気絶してしまっただろう。

「ん? やりすぎたかな?」

と志郎はどこぞの世紀末の病人になりすました男が言いそうなセリフを言っただけを傾げた。

「あと十分!!」

「「「「は、はい!!」」」」」

「筋力トレーニングもすっかりやり直した方がいいわ!!ラストもう1セット!!」

そして練習は15分に及ぶ片足立ちに、腕立て伏せ、腹筋、背筋の3つを含めて1セット、それをさらにもう1セットといういつもの練習以上に厳しいメニューだった。

「お前ら！あと一セットだ!!一セットで終わるから頑張れ！」

と志郎はみんなを鼓舞するが、

「だからあ……！運動神経がカンストしてるお前とあいつらを一緒にしてやんなよ……！」

と幸雄は涼しげな志郎にそう言つて穂乃果たちを指さした。

幸雄の言う通り、驚異的な身体能力を持つ志郎ならともかく、穂乃果たちの表情はかなり苦しげで、足もふらついていた。

「あ、うわ、わああ！」

限界が来たのか、花陽がバランスを崩して倒れてしまった。

「かよちゃん！かよちゃん大丈夫？」

「うん、大丈夫……。」

凛は花陽の側に駆け寄り花陽を労わる。

「もういいわ。今日はここまで。」

と絵里が練習をやめるように言うと、

「ちよつと、何よそれ！」

「そんな言い方ないんじゃない！」

と気に入らなかつたのかにこと真姫が絵里に噛みついた。

その日の夜、亜里沙はいつものようにμ sの曲を聞いていると、絵里が部屋に入ってきた。

「あ、お姉ちゃん。」

亜里沙がイヤホンを外して絵里に反応した。そして絵里は亜里沙の側に歩み寄ると、
「それ貸して。」

と空いているイヤホンを耳に着けて曲を聞いた。

「私ね、μ sのライブを見てると胸がかあつて熱くなるの。一生懸命で、目いっぱい楽しそうで！」

と亜里沙はどうしてμ sが好きなのかを絵里に語った。

「全然なつてないわ。」

と映像を見て絵里は一蹴するが、

「お姉ちゃんに比べればそうだけど……。でもすごく元気がもらえるんだ!!」

と笑顔で亜里沙は絵里に言った。

絵里はそんな妹の表情を見て、複雑な表情をすることしかできなかった。

そして次の日の朝……。

「おはよー!!」

「おはよう。」

「おはようございませす!」

真つ先に屋上に集まっていたのは穂乃果たち二年生組だった。

「さて、今日は生徒会長を入れての練習二日目だな。」

「まあ、無理しない程度に気張ろうぜ?」

穂乃果はそんな志郎と幸雄の言葉に

「うん! 頑張ろう!!」

とやる気満々に返した。するとその直後、

「ちよ、ちよつと!」

と言いながら凜に押されて絵里が出てきた。

「あ、おはようございませす!」

「まずは柔軟ですよね?」

と穂乃果が挨拶をし、ことりが絵里にメニューの確認をすると、

「辛くないの?」

と絵里が言った。

「「「「「え?」」」」」」

穂乃果たちが意外そうな声を上げると、

「昨日あんなにやって、今日も同じことをするのよ？第一、上手くなるかもわからないのに。」

絵里は穂乃果たちに練習をやめさせるつもりなのか、そう言ってみせるが、

「やりたいからです！」

穂乃果は毅然と絵里に言い返した。

「確かに練習は凄くきついです。体中すごく痛いですが！でも、廃校を何とかしたいと思う気持ちは生徒会長にも負けません!!」

とさらに堂々と言い放った。

「だから今日もよろしくお願いします！」

「「「「「お願いします!!」」」」」」

穂乃果たちがそう言って頭を下げると、絵里は何を思ったのか、そのまま何も言わずに屋上から去ってしまった。

「生徒会長!!」

穂乃果が呼び止めるも絵里は戻らず、みんなはどうしたらいいのか顔を合わせるが、

「海未、練習を頼む。」

と志郎が突然言い出し、

「どこに行くんですか？」

と海未が志郎に何をするつもりなのかを聞くと、

「生徒会長の所だよ。」

「まあ、ちよつとした野暮用さ。」

志郎と幸雄は、ただそれだけ言い残すと一緒に屋上から去っていった。

穂乃果たちから逃げるように屋上から降りてきた絵里は廊下を歩いていた。

『これがお姉ちゃんやりたいことなの？』

『やりたいからです！』

『あんたはそれでいいのか？そんな堅苦しいこととして息苦しくないのか、辛くないのか！』

『これだけは覚えておいてください。この世には価値の無いものこそあれど、意味を持たぬものなどない・・・と。』

絵里の脳裏には亜里沙や穂乃果、幸雄に志郎に言われた言葉が次々とよぎっていて、それを一つ一つ思い出すたびに、その表情は悲痛に歪んでいった。

「うちな、絵里ちと友達になつて、生徒会をやつててずつと思つてたことがあるんよ。」

ふと後ろから声を掛けられたので振り向いてみると、希が立っていた。

「絵里ちは本当は何をしたんやろつて。」

「え?」

「一緒にいると分かるんよ。絵里ちが頑張るのはいつも誰かのためばかりで、だからいつも何かを我慢しているようで、いつも自分の事は全然考えてなくつて……!」

絵里は希の言葉を振り切るようにその場から逃げようとするが、

「学校を存続させようつていうのも生徒会長としての義務感やろ!? だから理事長は絵里ちの事を認めなかつたんと違う!」

希の口調はいつもの飄々とした雰囲気ではなく、次第に感情的で強いものになつていき、

「絵里ちの……、絵里ちの本当にやりたいたいことは?」

希が絵里にそう問いかけ、しばらく二人の間に沈黙が流れ、しばらくすると絵里の口が開いた。

「何よ……。何とかしなくちゃいけないんだからしょうがないじゃない!!」

絵里は怒りを込めてそう言い、希は親友が初めて見せた激しい怒りの言葉に驚きの表情を見せる。

「私だって好きな事だけやって、それだけで何とかなるんだつたらそうしたいわよ!!」
続けて絵里から吐き出された言葉には怒りだけでなく、悲痛さも籠っていた。そして希は絵里の顔を見て驚いた。

涙だ。絵里は初めて親友の前で泣いたのだ。

「自分が不器用なのは分かっている、でも!!」

悲痛な叫びをあげると、

「いまさらアイドルを始めようなんて、私が言えると思う・・・?」

そう弱々しく希に自分の感情を吐き出すと、そのまま逃げるように走り去っていつてしまった。

「なるほど、そういうことだったんだな。」

急に廊下の曲がり角から声が聞こえたから振り返ってみると、幸雄が出てきたのだ。

「今の話、聞いてたん?」

希が少し恨めし気な声で幸雄にたずねると、

「ああ、覗きは趣味じゃないが盗み聞きは得意だね。おかげさまで気になっていたことがゼーンぶスツキリしたよ。」

と幸雄は一人合点するように希に応えた。

「気になっていたこと・・・?」

「ああ。なんで生徒会長はあいつらを目の敵にしていたのか、そして理事長に何故認められなかったのかだな。もつとも後者の方は大体予想はついてたんだが、どうにも前者の方の答えにはうまくたどり着けなくなつてね・・・。」

と幸雄は希に自分が何を考えていたのかを明かした。

「うちはゆつきーくんの事やから全部わかり切つたうえでやつてたと思つてたんやけどね。一昨日の事とか、ファーストライブの後の事とか。」

「いくら頭が回るつつつても俺も完全無欠じゃないんでな。寧ろ世の中分らないことだらけで常に手探りで生きとるわい。その方が生きてて面白いだろ?」

と幸雄は笑いながら希に言つた。

「・・・絵里ちも幸雄くんみたいになれたらあそこまで溜め込まなかつたんやろな・・・。」
と希は悲しげにつぶやいた。

「まあ、あのお嬢さんは義務感と、そこから湧き出てくる意地が無駄に強いからなあ。そういう意味じゃ志郎にそっくりだわ。」

「え!?!絵里ちが志郎くん!?今まで志郎くんを見てきたけどそんな風には見えんかつたなあ。」

幸雄の言葉に希は驚いた。

「まあ、とはいっても『昔』の話っすからね、今じゃあだいぶ丸くなってますよ。そう言う意味ならある意味あのお嬢さんよりも大人だわなあ……。」

幸雄はどこか懐かしむように呟くと、

「さーて、知りたいことは全部知れたし、俺はこの辺で失礼しますわ!」

と幸雄が回れ右をして去ろうとすると、

「え?!?!?!はゆつきーくんが絵里ちを追いかけるパターンじゃないん?!」

と希がツツコミを入れた。

「ああ、一昨日の事で分かったんだけど俺じゃああいつの心は動かせんよ?寧ろ俺みたいな舌先三寸手八丁な奴がいけば余計に拗れるだけだぜ。」

と幸雄が淡々というのと、

「じゃあ誰が絵里ちの心を動かしてくれるん?!」

と希は幸雄のその態度に少し腹を立てたのかきつめの口調で言うと、

「それがあいつの、志郎の仕事さ。」

「志郎くんの……?」

「ああ、あいつは口先だけが達者な俺とは違って口下手だし不器用だし、上手く機転を利かせることも出来ないけどよ、人の心に踏み込むことが出来るのよ。」

「人の心に……。」

「そう、あいつの言葉は真つ直ぐで情が通つてる、まるで炎のようなもんだ。ファーストライブの時も、あいつの言葉が挫けそうになつてた穂乃果たちの心を篝火かがりびのように照らしたからこそあいつらは歌うことが出来たんだよ！だからここはあいつに任せよう。あいつならきつと生徒会長の冷え切つてしまった心を熱く溶かしてくれるだろうぜ。」

そう言つて幸雄は歩き出した。

「ゆつきーくんはどうするの？」

希が尋ねると、

「俺か？俺は少しばかりやることが出来たんで志郎に任せていったん失礼させてもらいますわ。」

と窓の向こう、屋上で練習してる穂乃果たちの方を親指で指さしながらそう言つて、希の前から去つていき、

「志郎くん、ゆつきーくん……。絵里ちの事、お願いね。」

希はそう言つてその場に立ち尽くしていた。

「さーてと、俺もあいつに任せたからにはしっかり仕事をこなさなくっちゃな。」

と希の声が聞こえていたのかそう呟きながら、屋上に向かつて歩いていった。

「あ、生徒会長が入った時のために今までに言いすぎちまった分の清算をどうするかも

考えとくか。」

一方志郎は、絵里を探して学校中を走り回っていた。果たして志郎は絵里の心を溶かせるのだろうか。

そして遂に炎の意志を持つ若き虎と、義務感と意地という氷で心を閉ざした少女が真正面から対峙する時が迫ろうとしていた。

21話 氷と炎はぶつかり、女神は天にはばたく

音ノ木坂学院の研究生、諏訪部志郎は今、生徒会長である綾瀬絵里を探すために廊下を歩いていた。普段なら彼は幸雄と組んで行動しているのだが、今回は二手に分かれた方が効率的だと幸雄に提案されたので志郎一人で絵里を探していたのだ。

「それにしても生徒会長はどこに行ったんだろう。」

志郎は目につく教室の扉をしらみつぶしに開けながら絵里が中にいないか教室の中を見ていた。

『ヴー！ヴー！』

突然ポケットに入っていた志郎のスマホが鳴った。

「ん？電話か。．．．幸雄からか。もしもし、幸雄か？」

幸雄からの電話と分かり出てみると、幸雄の声ではなく、

『学校を存続させようっていうのも生徒会長としての義務感やろ!?だから理事長は絵里の事を認めなかったんと違う!』

希の叫ぶように絵里に向けて放たれた言葉だった。だが、スマホの通話するマイクから離れているのかやけに音が小さい。

(なんで希先輩が? あ、幸雄の奴ひよつとして希先輩と生徒会長の会話を覗いてるだけじゃなくて電話を盗聴器代わりに使っているんだな・・・。)

志郎は幸雄が何をやっているのかは大体想像がついているようだ。そして志郎は希と絵里のやり取りや、その後の幸雄と希のやり取りを黙って聞いていた。そして希とのやり取りが終わったところで通話を切ろうとすると、

『よお志郎、話は全部聞いたな?』

と幸雄が話しかけてきたのだ。

「ああ、全部聞かせてもらったよ。だが一つ聞かせてくれ。何故お前は先輩の説得に行こうとしない? さっきお前が言った通り俺はお前に比べると口下手だ。だからこそお前の話術を頼りにしてるんだが・・・。」

と志郎がそう言うと、

『話を聞いてたなら分かるだろ、俺みたいな舌先三寸が出ても拗らせるだけだつて。』

「だが・・・。」

『だがもだつてもねえよ。いいか? 俺は確かに口は上手いが人をその気にさせることは出来ても人の心を動かすことは出来ないんだよ。』

「同じじゃないか? それつて。」

『いや、違うんだなこれが。人をその気にさせるのは口先だけでどうにかなるが、意固地

になつてゐる奴の心を動かすのには『心』つてもんがゐるんだよ。』
「心……?」

志郎は幸雄の言葉に首をかしげる。

『そうだ、さっきの話聞いてたよな。お前の言葉には情が通つてゐるんだよ、俺みたいに嘘や打算に塗れてゐる言葉とは違う。とにかく真つ直ぐなんだよ。そこには口下手とか話し上手だつてのは関係ない。』

「……。」

『それにこの前話したよな。昔のお前と生徒会長はどこか似てゐるつてさ。似た者同士だからこそお互いに分かり合えるつてもんよ。』

「似た者同士か……。」

『そういうこと。と言うわけで『勝頼さま』、生徒会長の事は任せましたぞ。俺は最後の仕上げの仕込みがあるのでこれにて。』

幸雄のその言葉を最後に電話が切れた。

「似た者同士だからこそ分かり合える、か……。」

志郎は幸雄の言つていた言葉を呟いた。そして両手で頬をパチンと叩いて、
「任されたのであれば全力で臨むのみだ。『武田勝頼』改め諏訪部志郎、推して参る!!」

志郎は自分を鼓舞して再び歩き出した。

一方、先ほどの希とのやり取りで高校生になってから初めて感情をむき出しにし、逃げるように彼女のもとから去ってしまつた絵里は、一人教室で窓の外を眺めていた。

「私のやりたいこと……。そんなもの……。！」

絵里が吐き捨てるようにそう呟くと、

『ガラッ』

突然教室の扉が開かれた。

「ふう、やっと見つけた。」

扉を開けたのは志郎だった。

「何か用かしら。」

絵里は泣いたことで目元が少し腫れたのを隠すように顔を背けながら志郎に何をしに来たのかをたずねる。

「特にこれといった用はありませんが……。！」

「なら出てつてくれるかしら？ 私は今一人になりたいの。」

志郎がしゃべり終わる前に絵里が志郎を追い返そうとするが、

「ただ少しの間だけ、話をしましょうよ。」

と構わず志郎は続けた。

「……。」

絵里は志郎の方をちらりと見た。志郎は絵里を真つ直ぐに見つめており、目を逸らす気配は微塵も感じられず、志郎はどうあつても退く気は毛頭ないと感じた絵里は諦めたようにため息をついて、

「いいわ。」

と言った。そして志郎は絵里に向かって歩いていき、

「隣、失礼します。」

と言って絵里の隣の席に座った。二人の間に少しばかりの沈黙が流れたが、

「生徒会長……。いや絵里先輩、先ほど希先輩と話していたことなんですが、全部聞かせてもらいました。」

と志郎が口を開いた。

「あなた、さっきの話を聞いていたの？」

「聞いていたというよりは幸雄が聞いていたのを又聞きしただけなんですが……。」

志郎は絵里の言葉に苦笑しながら応えた。

「そう……。嗤いに来たのね。あの子たちを認めないとか言いながら今さらアイドルを始めようだなんて言う私を。」

と絵里は自嘲気味に言う。

「嗤いませんよ。俺は人がやりたいと思ってることを嗤うほど根性は腐ってませんか。それに、やりたいと思うならやってみればいいんじゃないですか？踏み出すのは難しいですけど、いざやってみると楽しいとお……。」

と志郎が言い終わらないうちに、

「あなたに何が分かるっていうのよ!!さっきの話聞いてたんなら分かるでしょ!?好きな事だけやってそれで何とかなるならとつくにやってるわよ!!」

と絵里は志郎に向かって叫んだ。

「……。」

志郎は何も言わない。いや、言い返せなかったのだ。彼女の言い分は最もだと志郎は思っている。好きな事だけやっつてどうにかなるほどこの世は甘くないというのも既に分かってるし、何よりも現実の厳しさは既に経験済みだ。そして何より、悲痛な叫びをあげる絵里の姿に過去の自分が見えたのだ。

（ああ、やっぱりこの人は『昔の俺』そっくりだ……。しがらみの中でもがきながら生きていくあの頃の俺に……。）

志郎は『武田勝頼』として生きていた頃を思い出した。常に偉大な父と比較され、それを超えることを強いられ、お世辞にも恵まれてるとは言えない環境で失敗しながらもがき続け、最終的には国も家臣も家族も、そして自分の命までも……。自分が背負っていた全てを彼は失った。

客観的に見れば、本当なら武田家の一家臣として生きていくはずだったのが、運命のいたずらにより一国の君主として人一人が背負うには大きすぎる物を背負ってきた志郎と、長き伝統を持つとはいえたかだか一つの学校でしかない音ノ木坂学院の廃校を阻止するために自らその身を投じて戦っている絵里とでは、背負っているものの大きさや環境の過酷さにおいては比べ物にならないほどの差があると、ほとんどの人間が断ずるだろう。

だが、志郎はそのような考えは持ち合わせていなかった。彼は彼女、綾瀬絵里に対して『敬意』を払っているのである。

志郎はわずか17、18歳と言うまだ大人になりきれないうちから、廃校という個人の力では絶対に打ち払うことのできない、一人の少女が背負うにはあまりにも大きすぎる問題をどうにかしようと、一人で試行錯誤しながらも戦っている絵里に対して敬意を抱くようになっていたのだ。

そう、志郎にとっては背負うものの大きさや、その重さなどは関係なかった。ただ、自

分と同じように大きすぎる脅威や難関を前に怯むことなく、自らの力を信じ、万死に一生を掴まんと戦い続けている絵里は、志郎にとつては志を共にした同志のように思える存在となっていた。

その一方で、志郎は彼女の限界も見えていた。本当ならば部活や恋愛、そして友達と共に過ごして思い出を紡いでいく高校生であるはずの絵里が、廃校という大きすぎる問題に一人で抗っていること自体が異常なのだ。大人でさえも一人で戦いきれる問題ではないのに、まだまだ子供である女子高生が戦いきれるかと問われれば答えは明白だ。もしこのまま彼女が一人で戦い続ける道を進んでいくならどこかで必ず、今まで溜めしてきた心労や、本当に阻止できるのだろうかと言う不安が破裂してしまい、彼女は壊れてしまうだろう……。

志郎はそこまでは考えていた。だが彼女の心をほぐし、呪縛を取り払う方法は考えつかなかった。だがいつまでも迷っている暇はなかった。オーブンキャンパスまであと2週間を切っており、これ以上時間を無駄に使うことは出来ない。自分は幸雄のように利口ではないから合理的な策を出せないことも分かっている。ならどうするか？志郎はほんのわずかの時間を使い、自らの思考をフル回転させた。

そして志郎は思いついた。意地という氷で心を閉ざした彼女の心を溶かし、温める炎^{方法}を。

(思いついてみればあまりにも単純明快すぎるが、これが初めて最後の賭けだ!)

志郎は自らを奮い立たせ覚悟を決めた。勝負は一度、チャンスは万に一つ。これですべてが決まる。

「私は一体どうすればよかったっていうのよ……!」

絵里が志郎に向かってもう一度叫ぶと、

「物事には正解なんてありませんよ。」

志郎はそう静かに答えた。

「なっ……!?!」

絵里は志郎の答えに言葉を失った。

「何が正解か間違いかなんていうのは、物事が全部終わった後に出てくる結果論でしかありません。先輩の場合は、廃校するかどうかが決まってるからでないと論じることが出来ない。俺は考えています。故にあなたが今まで取ってきた行動は正しかったとも言えますし間違っているとも言えます。」

志郎は続けて自分の考えを絵里に伝えた。

「何よそれ……。そんなのただの屁理屈じゃない!! 廃校が決まったら全部無意味って言うてるようなものでしょ!!」

絵里が志郎の考えに反論する。

「確かに俺の出した考えは屁理屈かもしれない。ですが……」

志郎が更に続けようとすると、

「だいたい、さつきからなんで全部分かったような風に喋ってるのよ!!あなたに、私の気持ちなんて分かるはずがないじゃない!!」

絵里が志郎の言葉を遮って叫んだ。彼女の声は途中から少し震えていた。

「確かに俺はあなたの気持ちそのものはまだあなたの口から聞いてないので全部は分かりません。それでも分かることもあるんですよ。」

志郎は絵里をなだめるようにそう言つて、さらに続ける。

「俺も今の先輩みたいだった頃があるんですよ。」

「あなたが?とてもそんな風には見えないけど……。」

絵里は志郎の言葉を聞いて目を丸くした。

「俺も今の先輩のように、人を引つ張る立場に立っていた時期がありました。でも周りからは認められなくて、だから周りから認められたい一心でがむしやりに突っ走つてたんです。でもある時、ものすごい大きな問題に直面するんですが結果は大失敗。それからその失敗を埋め合わせ、そしてその大きな問題を解決するために戦つていたんですが、周りから次々と人が離れていって、最終的には誰もいなくなつて問題も解決できずに全部おじゃんになつてしまいました。」

絵里は志郎が自分の過去を語るのを黙って聞いていた。そして志郎の目を見て、
(なんだろう、とても寂しそうな目をしてる……。)

と感じていた。

「・・・そんな経験をしてるからこそ、先輩の気持ちを感じることが出来るんです。先輩を見てると不思議なことにその頃の自分が重なつて見えるんですよ。」

と志郎は苦笑いした。

「そんな俺だから、先輩がこれから直面してしまうであろう悲しい現実の一つを経験してきた俺だからこそ、先輩がみんなに隠して一人で抱える不安が見えるんです。だからこそ先輩に言える言葉があります。」

志郎はそう言った後に目を閉じて深く深呼吸をし、目を開き、彼女を真正面から見据えてその言葉を放った。

「綾瀬絵里先輩。皆のために、そしてこの音ノ木坂学院のために戦ってくれてありがとう(ぎ)ございます。」

志郎はそう笑顔で言ってお辞儀をした。

「ふふ、なにそれ。あなたまだこの学校に入ってからまだ半年も経っていないっていうのに……。」

絵里はいきなり感謝の言葉をぶつけてきた志郎に悪態をつこうとするが、

「まだ半年も経って無い編入生のくせに……なのに……なんで……。なんで涙が止まらないの……？」

絵里の声は震え、彼女の目からは大粒の涙がこぼれ始めた。

「その涙は先輩が一人で抱えてきた不安や葛藤ですよ。人間って不思議ですよね、『見返りなんていらぬ』と言って自分の身を粉にして働いている人でも、誰かに感謝されると心が震えるんですよ。そうやって自分は見返りを求めないなんて言葉で言っても、心は正直なもので、何かしらの見返りを求めているもんなんですよ。」

「これが……、私の心のほんとの気持ち……？」

「ええ。そしてその涙で俺は、先輩が今までこの学校を守るためにどれだけ自分を削って戦ってきたのかを確信しました。先輩はもう十分戦いきりました。もう、『独り』で抱え込まなくて大丈夫ですよ。」

志郎は絵里に対して、優しくそう告げた。

「私は……、うう。うわあああ……！」

志郎の言葉で彼女の心の堰が切れたのか、子供のように泣き始めた。絵里の心を閉ざしていた氷を、志郎の同じ苦悩を味わって来た者としての『労わりの言葉』という優しい炎が溶かして、その溶けてできた水が涙となったのだろうか。

志郎はそんな絵里を胸に抱き、何も言わずにただ彼女の震える背中を優しく撫でてい

た。

「ぐすつ。ごめんなさいね、見苦しい姿を見せちゃつて。」

散々泣き明かして心が落ち着いた絵里は、志郎に謝るが、

「いえいえ。弱いところがある方が人間らしさがあつていいもんですよ。」

志郎は笑いながらそう言った。

「ねえ、諏訪部くん。一つ聞きたいことがあるんだけど。」

「なんですか先輩。」

「あなたの胸の中で泣いていた時、まるでお父さんの胸に抱かれてたような雰囲気でしたんだけど、あなたは何者なの……？きっきの言葉も、高校生とは言えないほど大人びて聞こえたし……。」

「!!」

志郎は絵里の何気ない問いかけに内心でかなり動揺していたが、それを表に出さず、「さあ？『今の俺』はただの高校生ですよ。それ以上でも以下でも、それ以外の何者でもない、ね。」

と答えをはぐらかした。そして話を逸らすために、

「それで、先輩はどうするんですか？」

と絵里に質問した。

「え？」

「やりたいことですよ！先輩にもあるんでしょう？やりたいことが！」

志郎は絵里の『やりたいこと』をたずねる。

「私のやりたいこと……？」

「はい！さつき幸雄が聞いていた話だと穂乃果たちと一緒にスクールアイドルを始めたそうにしてみたのですが……。」

「そこまで聞かれてたのね……。でもそれは無理よ。今さら始めたいって言っても……。」

「あいつらに受け入れてもらえるか……ですか？」

「ええ、私はあの子たちに冷たく当たりすぎた。だから受け入れてもらえるわけないわ。」

絵里が穂乃果たちに対する不安を口にするると志郎は、

「あいつらとつるんできた俺から言わせてもらえば、あいつらはそんな理由で先輩を拒むほど、器の小さい連中じゃないと思いますかね。」

と言った。それでも絵里は、

「でも・・・!!」

と不安を拭いきれない様子であったが、

「まあ、言葉で聞くよりは実際に試した方が早いし効果的か。」

と志郎は笑いながらため息をつき、

「そういうわけだ。あとはお前らに任せろぞ!」

志郎が教室の扉の方を見てそう言う・・・。

なんと穂乃果たち、μ sのメンバーと希が立っていたのだ。

「ありがとう志郎くん。」

穂乃果はただ一言そう言って、他のメンバーと一緒に絵里のもとに歩み寄り、彼女に手を差し伸べ、

「生徒会長。いいえ、絵里先輩、お願いがあります。μ sに入ってください!」
と言った。

「え?」

絵里が驚いた表情をみると、穂乃果は続けて、

「一緒にμ sで歌ってほしいです!スクールアイドルとして!!」

太陽のような笑顔で絵里に誘いの言葉を投稿かけた。

絵里は、目の前の状況がまだ信じられないのか、

「何を言ってるの？ 私がそんなことをするわけないでしょ。」

と穂乃果から目を背けるようにして言った。

(流石にまだ穂乃果たちに対してはまだ素直な気持ちを出せないか……)

と志郎は内心焦っていたが、

「さつき希先輩と幸雄から聞きました。」

「やりたいなら、素直に言いなさいよ。」

「にこ先輩には言われたくないけど。」

「お前さんら二人はどっちもどっちだったじゃねーか。」

「幸雄先輩は茶化さないでよ！」

と、海未たちも絵里の後押しをする。反対派であったにこと真姫が後押しに加わっているところを見ると、希と幸雄の説得が上手く行ったのだろうと志郎は確信した。

「ちよつと待って！ 私は別にやりたいなんて……！ 第一、私がアイドルなんておかしいでしょ！」

絵里は穂乃果たちにもう一度反論するが、

「やってみたらいいやん？」

と希が間に入った。

「特に理由なんて必要ない、やりたいからやる……。本当にやりたいことなんて、そんな感じで始まるんやない？」

希は笑顔でそう付け加えた。

絵里が穂乃果たちを見回してみると、みんな笑っていた。嘲笑などではなく、心の底から彼女に対して歓迎の意を示している、輝かんばかりの笑顔だった。志郎と幸雄もまた、彼女たちと同じように心から笑顔を浮かべながら頷いていた。続いて海未が絵里の背を押すかのように、彼女の肩に手を置いた。

そして穂乃果が再び絵里に手を差し伸べた。絵里は少し戸惑いながら、それでもゆっくりと手を伸ばし、穂乃果の手を強く握り立ち上がった。その顔は心の底から笑えている、と誰もがはつきりわかるようなさわやかな笑顔だった。

「絵里さん……！」

穂乃果は歓喜の声を漏らし、

「これで、sは8人になったわけか。」

と志郎が感慨深げに呟くと、

「いんや、μ sは9人だ。そこにいる副会長どのをに入れてな。」

と幸雄が1枚の紙を手に持ってそう言った。

「なに？」

「え、希先輩も？ どういうこと？」

穂乃果と志郎は希にたずねた。

「せつかくうちが言おうとしたのに、それを盗つちやうなんてゆつきーくんもイケズやんなあ。」

と二人に詰め寄られた希はいたずらっぽく笑いながら言った。

「最初っから気になってたんだよな。このグループに『μ s』という歌の女神の名前を授けてくれた奴の正体がよ。この紙に書かれた文字を見てどっかで見たことあるな。くつてずつと悩んでたんだが、つい最近になってその字の主が分かったのさ。な、希先輩。この名前は最初っからこうなることを見越したうえで付けたんだろ？」

と幸雄が答え合わせをするかのように希に確認した。

「ゆつきーくんの言う通りや。でも見越してたんじゃなくて、占いで『このグループは9人になった時に未来が開ける。』って出てたから、9人の歌の女神の名前である『μ s』の名前を付けたんや。」

と希が言うど、

「「「「「ええええ!?」」」」」」

幸雄を除いたその場にいるメンバー全員が驚きの声を上げた。

「まさか希先輩が名付け親だったなんてな……。」

「さしずめ、女神たちの生みの親にして慈母星とでも言うべきかねえ。」

と志郎と幸雄が言うのと、

「ふふ。」

と希は微笑んだ。そんな希を見て呆れたように笑って、

「希……。全く、呆れるわ。」

と言つて廊下に向かって歩き出した。

「どいへ?」

と海未は絵里に問いかけると、

「決まつてるでしょ、練習よ!!」

と皆を鼓舞するように言い放った。それを聞いた穂乃果たちは、

「「「「「やったあ!!!」」」」」」

と歓喜の声を上げた。

そしていよいよオープンキャンパス当日、音ノ木坂学院のグラウンドに作られたステージに見学に来た雪穂や亜里沙を含めた中学生と、その保護者達が集まっていた。

「うわあ……。いざ本番となると緊張するなあ……。！」

穂乃果はステージの裏側からステージに来てくれた人たちを見ながら呟いた。

「おいおい、今さら緊張してどうすんだよ大将さんよ！」

と幸雄が穂乃果の緊張をほぐすためか、おどけながらそう言ってみせた。

「幸雄の言う通りだ。お前らはこの2週間散々練習してきたんだ。恐れる物なんて何もない！」

と志郎は幸雄に続いて穂乃果たちを鼓舞するが、

「でも、これに廃校するかどうかがかかってるんですよ？」

と花陽が不安げに呟くと、

「大丈夫よ！それに、今回は私たちが9人になってから初めてのライブなのよ？そういう難しいのは全部忘れてこのライブを楽しみましょう！」

と絵里が励ました。それを見て志郎は、

（本当に変わったものだな。いや、彼女を縛っていたものが消えて彼女の本来の性格が露わになったというべきか……。）

と、感慨深げに思ってから、

「その通り！お前らはこのライブを目いっぱい楽しんで来い！！」

と穂乃果たちに言うのと、

「！！！！！！うん（ええ）！！！！！！！！」

と応えてステージに出て行った。志郎と幸雄は彼女たちを見送った後、

「じゃあ、俺たちもあいつらの楽しんでる姿を拝みに行くとするか。」

「そうだな。」

と言って観客のいるステージ前へと足を運んだ。

「しかし、よくあの生徒会長をおとすことが出来ましたな。俺は生徒会長の心は動かせませんでした。やはり勝頼さまに任せ俺の目に狂いは無かったようですね。」

「なんだ突然。」

「いや、あの勝頼さまが人の心を動かして活路を開いたという事実が嬉しいだけですよ。いったいどのようにして彼女の心を動かしたんですか？」

幸雄は志郎にどのようにして絵里の心を開かせたのかをたずねた。

「褒められてるのか貶されてるのか分からんな……。俺もお前に任された時はお前のようにどのようにして彼女を説き伏せればいいのかと考えていた。だがしかし、彼女の心からの叫びを聞いてそのようなものでは彼女の心は開けないと悟ったんだ。」

「……」

「そして俺は彼女の顔を見て、今一度昔を、『武田勝頼』として生きていた頃を思い出したのだ。すると今まで燃えそうなくらいに頭をフル回転させていたのが馬鹿らしくなる程あっさりと思いついたんだ。」

「それは一体、何なのでしようか？」

「それは、親身になって相手の心に寄り添うことだ。お前の言っていた、『似た者同士だからこそ分かり合える。』という言葉がカギだった。だから俺は彼女が今まで誰かを頼ることなく戦ってきたことを労った、ただそれだけだ……」

志郎の言葉を聞いた幸雄は、

「本当に、あの頃から成長しましたな勝頼さま。それでこそ虎の遺志を継ぐ者です。きつとあの世でお屋形様や……」

と志郎に賛辞を贈ろうとすると、

「よせよ昌幸。まだ俺たちの戦いはこれから始まったばかりなのだ。あいつらが全てを成し遂げる時までその言葉は取っておけ。」

と志郎が幸雄を制止した。

「はっ、これは失礼。」

「まあとにかく、今はあいつらを見てやろうじゃないか、『幸雄』！」

「そうだな、『志郎』」

そう言つて二人はステージの方に目を向けた。校庭のど真ん中にμsが立っており、さらにその中心に穂乃果はいた。

「皆さんこんにちは！私たちは音ノ木坂学院のスクールアイドル、μsです！私たちはこの音ノ木坂学院が大好きです！！この学校だからこのメンバーと出会い、この9人が揃ったんだと思います。これからやる曲は、私たちが9人になって初めてできた曲です！」

穂乃果は観客にそう言つと、さらに一歩前に出た。

「私たちの、スタートの曲です!!」

「「「「「「「 聴いてください！『僕らのL I V E 君とのL I F E』!! 「「「「「「」

ライブは終わった。曲が終わると自然と観客たちから拍手が沸き起こつた。

ライブを終えた穂乃果たちは汗をかき、肩で息をしていたが、その顔に疲れは無く、むしろ充実感とやり切ったという達成感が見えた。

志郎と幸雄も、観客と一緒に拍手をしていた。

「見事なものだな幸雄！」

「ああ、今のあいつらの踊りは過去最高に輝いてたな!!」

「踊りもそうだがあいつらの顔、特に絵里先輩の顔を見てみるよ。」

志郎にそう言われた幸雄が穂乃果たちの顔を見回すと、

「ああ、確かにいい顔してやがるな。俺の『炯眼』にも何一つ混じり気が映らないほどの良い笑顔だ!!」

とにつかり笑って答えた。

一方、観客が拍手しているのを見て

「やったあ……!!」

「……ええ！」

穂乃果と絵里は自分たちがやり切ったことを実感していた。

（ありがとう、諏訪部くん。あなたが寄り添ってくれたから、一步を踏み出す勇気をくれたから私はここに立って、全力で踊って、心から笑うことができた……。本当にあり

がとう・・・！)

絵里は心の中で志郎に対する感謝の気持ちを呟いた。

『みんな笑顔が眩しかったけど、中でも綾瀬絵里さんの笑顔はそれ以上に眩しく輝いていた。』

このライブを見て、音ノ木坂学院に入学したとある生徒は、のちにそう語ったという。

最初はバラバラだった9人の女神が今この時を以て一つの翼となり、二人の若虎と共に天空へと勇躍した。

のちに伝説のスクールアイドルとして語り継がれる、『μ's』の躍進はここから始まったのだ。

22話 出会いはいつも突然に

「全く、せっかくの休日にお前が突然呼び出すもんだから来てみれば……！」

オープンキャンパスが終わってからしばらく経ったある日のこと、志郎と幸雄は今アキバの象徴の一つとも言えるところある場所に来ていた。それは……。

「お帰りなさいませ♡ご主人様♡」

そう、メイド喫茶であった。

「まさか一人じゃ入れないっていうアキバを満喫してるお前らしからぬ情けない理由で読んだんじゃないだろうな……！」

「まさか！入ろうと思えば入れなくも無いんだがほら、俺みたいな田舎もんが入って何か失礼なことがあっちゃいかんだろ？だから現地民と言える志郎に来てもらったってわけさ。」

幸雄は志郎に読んだ理由を説明するが、

「結局恥ずかしいんじゃないかねえか！だいたいメイド喫茶なんてそんな三ツ星レストランみたいな格式高いレストランと一緒にするようなものでも無いし、それに現地民の奴らが全員メイド喫茶経験者なわけねえだろ……!!」

と納得いかない様子であった。

「ふむ、志郎も初めてなのか。なら呼んだ甲斐があるつてもんだな。」

「何？それはどういうことだ？」

「ああ、言つてなかつたな。ここは伝説のカリスマメイドのミナリンスキーさんが働いてるつて噂のあるメイド喫茶なのよ！」

「伝説のカリスマメイド？なんだそれは。」

志郎が首をかしげると、

「ミナリンスキーさんつてのはメイド喫茶業界に現れてから2、3ヶ月もしないうちに数多くのオタクの心を虜にしたというまさにメイド喫茶業界のカリスマとも呼べるお方のことさ！ほら、アイドル研究部の部室にもサインが置いてあつたろ？」

と幸雄はミナリンスキーについて教えた。

「ああ、面白いやあつたな。で、そのカリスマメイドとやらがここで働いてるといふのか。よくもまあ見つけたものだな。」

「ああ、何せ彼女の写真は原則的に撮影禁止、その他情報もファンの間では口外厳禁されてるらしく、頼りになる情報は基本的には噂話だけだからな。探すのはマジで大変だったんだぜ？無数に散らばる噂話を掻き集めてその中でも信憑性が高いと思われるものを吟味してだな……。」

「とりあえずお前が苦勞して探し当てたのはよく分かった。とりあえず何か頼もう。……うわつ、何だこれ高いなほったくりじゃないか。」

「それを言っちゃあおしまいだぜ志郎、メイド喫茶はあくまでもメイドさんによる接待を樂しむところなんだからさ。」

「キャバクラみたいなものか。」

「志郎おおお!!それ以上はいけない!それ以上は言っちゃあいけない!!」

「お、おう。とりあえず注文しよう。」

「そうだな、すみませーん。」

幸雄が注文を取るためにメイドを呼ぶと、

「はい、お待たせしました。ご注文は何になさいますか?」

志郎たちのもとにやってきたのは美しくも凛とした顔つきで、髪は混じり気の無い黒で流れるようなロングヘアの、まさに大和撫子の模範解答とも言えるようなメイドだった。

「あ、この日替わりランチつてのを二つと、飲み物はアイスウーロンティーを二つお願いします。」

幸雄が注文を取ると、

「はい、かしこまりました。少々お待ちくださいね、ご主人様。」

そう言つて彼女はスカートをつまんでから、厨房の方へ去つていった。

「はええ。ミナリンスキーさんじゃなかったのは残念だったがものすごいべっぴんさんだったなええ……！」

幸雄は去つていく黒髪のメイドの後姿を見ながらため息をついた。

「今日はシフトじゃなかったんじゃないか？」

「いや、毎週この曜日のこの時間帯に目撃情報があつたんだよ！だから間違ひはないはずなんだが……！」

「まあ、シフトは合つていてもカリスマメイドと呼ばれるくらいなら他の客の接待で忙しいんだろう。いるのが分かつてるんなら毎週根気よく通つてみたらどうだ？運が良ければ次行つた時には出会えるかもしれんぞ？」

志郎が皮肉るように笑つて言うと、

「財布が持たねえよそんなの……。そんな事よりさっきのメイドさんめちやくちや美人だったよなええ！大和撫子はまだ絶滅してなかったんだな!!」

げんなりした顔で志郎に返した後、話題を先ほど志郎たちの所に来たメイドの話に変えた。

「海末も十分大和撫子だとは思ふが、確かにきれいなのは同意できるな。なんというか桂の事を思い出すな。」

志郎は武田勝頼だった頃に運命を共にした妻の桂のことを思い出しながら置いてあつたお冷を飲んだ。

「お前さあ、いい加減に昔の奥さんを思い出すのはやめろよな。いや確かに桂林院さまは凄く美人だったけどよ。」

「別に俺の勝手だろう。お前だつて山の手殿のことは思い出さんのか？昌幸だった頃はあんなにイチャイチャしてたくせに。」

「あ!?!それをほじくり返すかてめー!お前なんて桂林院さまを娶ったばかりの時や、『18も年下の女子の女心が分からない……』つつつて俺とか勝資どのかか釣閑齋どのに愚痴つてただろーが!!」

などと周りの迷惑にならない程度の音量で昔の恥ずかしい思いで暴露合戦をしていた二人だったが……、

「お、お客様!写真の撮影は禁止ですよ、撮らないでくださいー!」

「せっかくお金を払ってるんだし、写真を撮るくらいいいじゃんよ。」

と、何やらただならぬ様子の会話が聞こえてきた。

「やれやれ、どこの店でもマナーのなつてないクソみたいな客つてのはいるもんなんだなあ……。」

「しかしあの絡まれてるメイドさんの声……どこかで聞いたような……?」

「どうするよ志郎？またあん時みたいに突っ込むか？」

「流石にあの時みたいなのはしないが、悪質ならば止める必要があるだろう。」

そう言つて志郎が立ち上がるうとした時、

「いくら撮るだけつて言つてもどこかに流出しちゃう可能性があるのでダメなんです
！」

「大丈夫だつて！あくまでも個人で見える用に撮るだけだから大目に見てよミネリンス
キーさん。」

「何ツ!?ミネリンスキーさんだど!!おのれミネリンスキーさんに迷惑行為をはたらい
て困らせるとは不届き千万!なんてふてえ野郎だ!!」

ミネリンスキーという名前が聞こえた瞬間、幸雄が志郎よりも早く立ち上がった。

「ちよつ、幸雄!」

普段は面倒ごとを嫌う幸雄の変わりように志郎は困惑するが、騒ぎの渦中に向かおう
とする幸雄を見て、

「ストップストップ!いつもの冷静なお前はどこに行つた!」

と志郎は幸雄を羽交い締めにして止める。

「止めるな志郎!俺にはミネリンスキーさんを低俗な輩の魔手からお救いするという使

命があるんだ!!」

「いやねえからそんなの!! だいたい転入したばかりの頃に考えなしに突っ込むなって俺に言ったのはどこのどいつだ!」

「それとこれとは話が別だ! それに俺には話術がある! 俺の乱世と現代で磨き上げた知略と話術があれば……!」

「いやいやいや、お前のそれは確実に場を拗らせるヤツだから! お前絶対煽るだろ!」

などと二人で言い合っていたら、誰かが志郎の肩を叩いた。

「お客様、店内ではあまり騒がないでいただけると助かります。」

肩を叩いたのはさっきの大和撫子なメイドだった。

「あ、すいません。」

「しかし、俺たちはあの迷惑な客を止めに行こうとしたんですが……!」

幸雄が彼女に反論すると、

「心遣いは嬉しいですが、当店の問題は私たちでどうにかしますので。」

彼女はそう言つて騒ぎが起きている席に向かつていった。

「申し訳ありませんがお客様、当店では個人的な撮影は禁止となっておりますのでやめていただけると幸いなのですが……。」

「ええ？別にいいじゃないですか一回ぐらい。」

「そうそう、減るもんじゃないし。」

ミナリンスキーに絡んでいた二人の男が反論した。

「ですが規則は規則ですので、それに彼女が嫌がつてます。やめないというのであれば恐喝という事で警察に通報し、然るべき処分を受けてもらうことになります。」

男たちの反論に臆することなく、彼女は毅然と男たちに言葉を投げかける。

「うるせえな！こっちは店に来てやって金を払ってるんだぞ!!別に一回ぐらい写真の一つぐらい撮らせてくれてもいいだろうが!!」

「そうだそうだ！店に金を落としてやってるお客様は神様なんだからお客様の要望に応えるのがお前らの仕事だろ!!」

男たちの反論は次第にエスカレートしていき、いまにも手を出しそうな勢いで食って掛かっていた。

「おい、あのメイドさんは店の問題は店で解決するって言ってたけどよ、あんなクレマーを相手にしてるのを見てもほっとけつてつもりなのかねえ。」

幸雄は不快感で顔をしかめながら言った。

「ああ、流石にこれ以上は見てられんな。多少手荒ではあるが、暴れたりしないうちに制圧する必要があるそうさ。同じ客としてあのような輩は見過ごせん。」

そう言つて志郎と幸雄が加勢に行こうとすると、二人は突然殺気を感じて歩みを止めた。

「今、お客様は神様・・・と仰いましたか？」

とメイドが男たちに言うのと、

「お、おう。言つたぜ？」

と男の一人はそう答えたが、その顔はどこか引き攣つており声も少しばかり震えていた。

「本来その言葉はとある歌手がステージに立つ際に客席にいる観客を神と見立て、神主が神前でお祈りをするように心から雑念を払い、混じり気の無い心でお客様に全力のパフォーマンスを見せるという心構えを分かりやすく言つたものです。残念ながら現在はその言葉を文字通り額面通りにしか受け取れてないあなた方のような方が蔓延つているのが事実です。それに、文字通りの意味だつたとしても、あなた方が店に対して迷惑行為を行つていられるというのは事実です。ちなみに人々に災いを振りまく神は『崇り神』と言うそうですよ？つまりあなた方は『崇り神』と同じという事になりますので、私たちは手荒な手段を用いてもその『崇り神』を鎮めなくてはならなくなりますか：、いかがいたしますか？『お客様』？」

黒髪のメイドは一言一句途切れることなく、男たちの目を真っ直ぐに見据えながらゆつくりとその言葉を論すように、そして次第に脅すような雰囲気醸し出しながら男たちに詰め寄る。

そのメイドの姿を見た志郎と幸雄はただならぬ殺気を感じて迂闊に動けず、ミナリンスキーに絡んでいた二人の男に至っては体が恐怖で震えていた。

「す、すいませんでしたー!!」

男たちは彼女が殺気を放ちながら詰め寄るのに耐えられなかったのか一目散に店から出ていった。そして少し間が空いたあとに、

「「うおおおおお!!お鶴さんすげええええ!!」」

と、店内にいた客たちは男を追い払ったメイド、『お鶴さん』に対して喝采を贈った。『凄いな、あのメイド……。お鶴さんと言ったか、武道を習ってるのか凄まじい殺気だったな。』

「殺気どころじゃねえぞ志郎。あのメイドはかなり口が立つぞ……。殺気による脅しと、巧みな話術を絶妙に織り交ぜて相手に反論を許さず真綿で首を締め上げるように奴らを追い詰めて物事が大事にならないうちに追い出しゃがった……。相当できるぞ。」

幸雄がお鶴が用いていた戦術を志郎に解説した。

「幸雄にそこまで言わしめるとは……。お前もあれと同じような事は出来るのか?」

幸雄の解説を聞いて志郎は幸雄にたずねた。

「出来ないわけが無いだろう、俺を誰だと思つてやがる。人を煽つたり、口先だけで相手を自分の都合のいいように誘導する事なんざ朝飯前な真田昌幸だぞ。驚いてるのは、人々が腑抜けてるこの時代にあれだけのテクニクを用いることができる奴がいるつて事に関してだぞ！」

幸雄曰く、彼女のように凄まじい気迫と巧みな話術を織り交ぜて自分の都合のいいように相手を誘導するという手法を用いることができる現代人は珍しいようだ。

「そうなのか……。あの人、見たところ俺たちと大して年は変わらないだろうにずいぶん気丈な人だな。」

「まあ、あれだけの殺気はマジギレした海未も放てるが、あいつの場合はあのお鶴さんみたいに制御して放つてるわけじゃないし、話術に優れてるわけでもないからそこまで怖くはねえわな。」

「マジギレさせたことあるのか……。」

志郎が幸雄の言葉を聞いて苦笑いしていると、

「お待たせいたしました。日替わりランチをお二つと、アイスウーロンティーをお二つお持ちしました。」

と話をしていたら注文していた品が志郎たちのところに届いた。先ほど注文を取つ

ていたお鶴とは違って甘くとろけるような声をしていた。

「お、やつと来たか。」

「おほ、美味そ〜。ありがとうございま〜す!」

と志郎と幸雄が日替わりランチを受け取ろうと持つてきたメイドの方を見たら、

「あ……?」

「へ……?」

志郎たちは間の抜けた声をあげ、動きを止めた。何故なら目の前にいたのは、

「あれ……? 志郎くんに、幸雄くん……?」

そう、南ことりだったのだ。

「ことり……? お前こんなところで何やってんだ?」

「こ、ことり? 誰のことでしょうか?」

ことりは誤魔化すつもりでいるらしい。

「いきなり質問してすまないが、好きな食べ物と苦手な食べ物はなんですか……?」

志郎が質問すると、

「チーズケーキが好きでニンニクが苦手です♡ってああ……!」

うっかり自分の好きな食べ物をそのまま答えてしまい、お盆で顔を覆った。

「やっぱりことりだな。ん?」

「マジかよ……ってどうしたんだ志郎？」

「おい、ことりの胸についてる名札見てみる。」

「んん……？」

幸雄が志郎に促されてことりの名札を見てみると、

「なっ……！み、『ミナリンスキー』だと……ッ!？」

名札には『ミナリンスキー』と可愛らしい文字で書かれていた。

「び、びいー！」

ことりは一目散に厨房へと去って行った。

「……なあどうするよ志郎。」

「とりあえず食おうぜ。あと周りからの視線がやばいことになりそうだから食ったらさっさと出よう。」

「おう、そうだな……。」

二人が日替わりランチを食べようとすると、二人のスマホが同時にバイブを鳴らした。

「なんだ？」

二人が不思議に思っただけで見てみると、

『あと一時間でシフトが終わるから店の外で待っててください！』

というメツセージが来ていた。

志郎たちは日替わりランチを食べ終わった後、会計を済ませてことりのメツセージ通りに店の外で彼女を待っていた。

「まさかことりがミナリンスキーさんだったとは……。」

「あー、そのなんだ……。今の心境はどんな感じだ幸雄？」

「いやー何とも言えませんわ。あれだ、一言で言うところ『憧れだった変身ヒロインの正体がまさかのクラスメートだった』みたいなやつだな……。」

「ああ、なんというか分かりやすいのか、分かりにくいのかはつきりしない意見ありがとう。」

「でも今になってよくよく考えてみると最近ことりが練習から抜ける時間とミナリンスキーさんのシフトが微妙に被ってたし、名前だつてほら、南ことり、みなみことり、ミナミことり……ミナミ、ミナリ……ミナリンスキーってな。」

「なるほど。それに写真撮影厳禁とかあからさまに正体を隠しているところなんかも辻褄が合ってくるな。」

「しかしいつ頃からやってるんだろうな。」

「確かにそこは気になるな。お金に困ってるわけにも見えんしな。」

「ことりが来るまでの間、志郎と幸雄はことりとミナリンスキーに関して話していた。お疲れ様でした〜！」

「しばらくするとことりが店の裏側から出てきた。」

「お、噂をすれば。」

「ごめんね、待たせちゃって。」

「いやいや、気にはしていないさ。」

「それよりも、話を聞こうじゃないか。」

志郎と幸雄、そしてこ通りの3人はファーストフード店に移動して、そこで話をすることにした。

「さて、伝説のカリスマメイドのミナリンスキーさんが、sの南ことりさんと同一人物だった件について、何か言い分はあるかな？」

「なんで刑事ドラマの尋問みたいになってんだよ幸雄……。」

「それに関しては本当に周りには漏らしたくないからあまり大きな声で言わないで。」

「ことりが目を潤ませて幸雄にそう言う」と、

「おつと、すまんすまん。じゃあ、手短かに二つ質問させてもらおうか。まず最初に、いつからメイド喫茶でバイトしてたんだ？」

幸雄は軽く咳払いをしてからことり質問を投げかけた。

「えつとね、*μs*が結成してからこつとりに質問を投げかけた。それで制服が可愛かったからそれで始めたんだ。」

「なるほど、始まりとしてはありきたりだな。」

こつとりの言葉を聞いて志郎はうなずいた。

「それで二つ目なんだが、始めた理由は？」

「私ね、穂乃果ちゃんみたいに人を引っ張っていけるような性格じゃないし、海未ちゃんみたいにしっかりしてないし、あと人前に入るのが苦手でもできないから、それを變えるために始めたんだ。」

「なるほど、自分に自信をつけるために始めたというわけか。」

「でもそこまで気にする必要はなかったんじゃないかねえの？もうあの時点ですでに裁縫上手だったんだし。」

「そういう問題じゃないんじゃないか？この手の劣等感というかコンプレックスってのはそう簡単に克服できる物じゃないからな。」

志郎の言葉を聞いて幸雄は、

（なるほど、凜が女の子らしい恰好をしたがらないのと形こそ違えど本質は近いってわけかい、こつちも根深そうだね．．．）

と凜の顔を思い浮かべた。

「ほんとは少しの間だけやるつもりだったんだけど、お店のイベントで歌ったりしてるうちに有名になっちゃって．．．」

「今に至るわけだ。」

志郎が言うところりは小さくうなずいた。

「なるほど、じゃあセンター決定戦のチラシ配りの時にやけに早くチラシを配り終えたのも、そこで培ったテクニクと『ミナリンスキー』としてのカリスマがあったからこそ成し遂げられたってわけだな。」

「ふむ、なるほどねえ。」

志郎と幸雄が納得がいった様子でいると、

「あ！でもこのことはみんなやママには内緒にしてるから学校では絶対に喋らないでね！！」

こことは必死に二人にくぎを刺した。

「心配するな。俺はそうやすやすと人の秘密を話す趣味は無いからな。」

「ここまで必死に頼み込まれて反故にするような真似は出来んわな。」

「幸雄くんは特に気を付けてね!!」

「ことりは幸雄にさらに念を押しした。」

「ちよつと待て!なんで俺だけ2回も!?!」

幸雄は納得いかない様子で抗議するも、

「普段の行いのせいだろ。」

と真つ先に志郎に論破された。

「しつかし今日は驚きの連続だったぜ。」

「ああ、そうだな。」

ことりと別れた後、二人は一緒に帰り道を歩いていた。

「せつかくミナリンスキーさんに癒してもらおうと思つたらまさかことりだったし!」

「それにやたら強そうな大和撫子なメイドもいたしな。」

「それな。あゝこんどあそこに行くときはお鶴さん目当てで行こうかな。」

「また行くのか?」

「いやまさか。時間と金に余裕があつたららの話さ。」

二人はいつものように他愛のない話をしていた。

「しかしこじこりにあんな悩み事があったとはな。」

「まあ、人の悩みを聞いた後にこんな事言うのは不謹慎かもしれんが、あいつの新たな一面を拝めたのはいいい収穫だったかもな。」

「ああ。」

仲間であることりの新たな一面を知った志郎と幸雄は夕陽をその背に浴びながら歩いていると、一人の黒髪の少女とすれ違った。志郎と幸雄は話に夢中だったため気づかなかつたが、少女はすれ違ったあとに二人を見て、

「あの二人は確かミナリンスキーを助けようとした人たち……。この近くの人だったのね。」

と呟いて再び歩き出した。

志郎と幸雄、そしてこの黒髪の少女がまた再び会いまみえることになることはまだ誰も知らない。

23話 μ's のアキバ訪問記

志郎と幸雄がメイド喫茶に行つてミナリンスキーの正体を知つた次の日の事、

「あー志郎くん、幸雄くん!!すごいよービッグニュースだよ!!」

二人が部室に入るなり、穂乃果がものすごいテンションで飛びかかつてきた。

「な、なんだいきなり!？」

穂乃果に飛びかかれて志郎は狼狽するが、穂乃果の口調とその様子から悪い話ではないことを察した。

「実はオーブンキャンパスのアンケートの結果、廃校の決定はもう少し様子を見てからとなつたそうなんです!」

花陽がオーブンキャンパスの成果を喜々として語り、先に部室に来ていた海未やことり、凜も嬉しそうな表情をしていた。

「おおーすごいじゃねーか!!」

「ああ、メンバーが増えてなんとか目の前にあつた壁を乗り越えることが出来たのは重畳至極だな!」

志郎も幸雄も花陽からもたらされた吉報に喜んだ。

「しかもそれだけじゃないんだよ？」

「c。」

穂乃果の言葉に志郎たちは首を傾げた。穂乃果はそんな二人の顔を見てから部室の奥にある扉まで走つていき、その扉を開け放した。

「ジャーン!!部室が広くなりました!!」

なんと部室につながっていた空き教室をアイドル研究部の部室にしてもいいという許可が下りたというのだ。

「おお〜!!」

二人は歓喜の声を上げたとはいきや急に体を震えさせた。

「どうしたんですか二人とも？」

海未が二人にどうしたのか聞いてみると、

「俺達はお前らが着替え始めるたびに部室から締め出されてきたが……、ようやく当然のことながら部室の外に追いやられる日々が終わるんだな……!」

「ああ、あのお前らの着替えが終わるまでの間に部室の外を通る女子という女子に憐れむような目線で見られたり、ヒフミトリオに『セクハラで締め出されたの?』って冗談交じりに聞かれる日々が終わると思うと……!」

「後者は幸雄の自業自得な気がしないでもないが、ともかく廊下で寂しく待ちぼうけす

る日々が終わると思うと涙が……!」

なんと二人は男泣きしていたのだ。

「そ、そうなんですか。」

海未が若干引き攣った笑顔で志郎たちに相槌を打つと、

「安心してる場合じゃないわよ、生徒がたくさん入ってこない限り廃校の可能性はまだあるんだから頑張らないと……。」

と言いながら絵里が部屋に入ってきた。

「確かに、まだ廃校を完全に阻止できたわけじゃないんだから油断はできないな。」

志郎がそう言つて気を引き締めてると、近くからすすり泣くような声が聞こえてきたので声をする方を見てみると今度は海未が泣いていた。これにはさすがの絵里も少し驚いた様子だった。

「う、嬉しいです! やつと志郎以外にまともな事を言ってくれる人が入ってくれました!!」

「えっ!?!」

海未はそう言つて絵里の手を掴んだ。

「ちよつと待て! 志郎はともかく俺は!?!」

幸雄が海未に抗議するが、

「幸雄はまともじゃないので……。」

と返された。

「ひでえ！海未さん俺の扱いひどくね!？」

「まあ、自業自得だろ……。」

志郎にも論破されて幸雄は項垂れた。

「ええ……。それじゃあ凜たちまともじゃないみたいだけど。」

凜も納得いかないうような様子だった。

「ほな、練習始めよか。」

いつの間にか現れた希がそう言うのと、

「あ、ごめんなさい……。私ちよつと……。今日はこれで!」

とことりは申し訳なさそうに言つて部屋から去つていった。志郎たちはその理由を

察していたが彼女との約束を重んじ何も言わなかった。

「どうしたんだらう?ことりちゃん、最近早く帰るよね。」

そう言った穂乃果をはじめ、ことりとすれ違つて部屋にやつて来たにこと真姫やその

他のメンバーは不思議そうにことりの背中を見送っていた。

「うわあ50位!?何これ何これすごい!!」

「夢みたいです!!」

「ところがどっこい・・・、夢じゃありません・・・!現実です・・・。これが現実・・・!」

「幸雄・・・。どこぞのカジノ店長の真似はやめろ・・・w」

屋上での練習の休憩時間にスクールアイドルランキングの様子を見てみると、なんと
μ⁴ sは50位に急上昇していたのだ。

「20位にだいぶ近づきました!」

「すごいわね!」

「絵里先輩が加わったことで女性ファンもついたみたいです。」

海未がそう言うのと、みんなの視線が絵里に集まった。

「確かに背も高いし、足も長いし、美人だし・・・!何より大人っぽい!流石三年生!!」
穂乃果は絵里の全身を下から上へと見上げながら羨望の眼差しとともに彼女を賛美する。

「やめてよ・・・。」

絵里はそれに対して顔を赤くして照れ臭そうにそう言った。

(一方でにこ先輩は……)

志郎と幸雄が絵里と見比べるように、にこの方へ視線を移すと「なに？」

二人の心を読んでいるのか不機嫌そうな声で聞き返すと、

「いや!! 何でもないっす!!」

二人は声をそろえて慌てて首を横に振った。

「でもおつちよこちよいなとこもあるんよ。おもちゃのチョコを本物と思つて食べそうになつたり。」

「希いー!」

希が絵里の意外な一面をみんなに話すと絵里は恥ずかしそうにそれを止めた。

「あ、そのチョコ仕掛けたの俺ですわ。まさかチョコが好きだからつておもちゃを食べようとするとは思いませんでしたわw」

「あれ武藤くんのせいだったのね!」

「幸雄……。そんなことしてるからまともだと思われないんだぞ……。?」

絵里は幸雄に突っかかり、志郎は苦笑いした。

「でもここからが大変よ。」

和やかな雰囲気になっていたところに真姫が一つ釘を刺した。

「「「「「ん？」「」」」」」

真姫以外の女子が首を傾げた。

「上に行けば行くほどファンはたくさんいるわ。」

「確かに。奪い合うというわけではないが、上位はまさに群雄割拠の戦国乱世のようなもの。実力の高さがファンの数や順位に直結してくるだろうからな。」

真姫の言葉に志郎が頷く。

「今から短期間で順位を上げようとするってなるとどこかしらで大博打に出る必要があるな。」

幸雄が先ほどのおふざけモードから一転して真剣な表情で言った。

「その前にしなきゃいけないことがあるんじゃない？」

突然にこが何かを提案してきた。

「しなきゃいけないこと？」

穂乃果たちはまたまた首を傾げた。

そして場所は変わって秋葉原・・・。

「・・・あの、すごく暑いんですが。」

「我慢しなさい！これがアイドルに生きる者の道よ！有名人なら有名人らしく街で紛れる格好つてもものがあるの。」

なんと穂乃果たちは顔にはサングラスとマスク、首にはマフラー、そしてコートという夏に着的物とは思えない格好をしていた。

「でもこれは・・・。」

「逆に目立っているかと・・・。」

「馬鹿馬鹿しい！」

海未と絵里はこの言葉に難色を示しており、真姫に至っては呆れて装備を脱ぎだしていた。

「つーか変装するにしても季節つてもんを考えろよ。これじゃ逆に不審者だぜ？」

幸雄も苦笑いしていた。

「たとえプライベートでも常に人に見られていることを意識する、トップアイドルを指すなら当たり前よ!!」

「はあ。」

「お、おう・・・。」

穂乃果と志郎はにこが自信満々に自らの矜持を力説している様子を見て、ただ頷くこ

としかできなかつた。

「すごいにああ〜!!」

「うわあああ〜!!」

どこからか凜と花陽の叫び声が聞こえてきたので声が聞こえた方に行ってみると、スクールアイドルのグッズが並んだ店でグッズを手に取り喜びの声を上げながらうっとりとしていた花陽と、それに付き合っている凜の姿があつた。

「ここは……」

「近くに住んでるのに知らないの？最近オープンしたスクールアイドルの専門ショップよ。」

店内を見回す穂乃果にここが説明した。

「こんな店があつたとはな。」

「知らなかつたわ……」

「まあ、ラブライブが開催されるくらいだしこんな店があつてもおかしくはないわな。俺もこの前少し覗いていったぜ。」

志郎と絵里は看板を見上げながら呟いた。

「とはいってもまだアキバに数件あるくらいだけだね。」

「ねえねえ、この缶バッジの子すごく可愛いよ！まるでかよちゃんそっくりだにやあ！」
凜はそう言つてどこから持つてきたのか缶バッジを穂乃果とにこに見せた。

「てゆうかそれ……。」

「花陽ちゃんだよ！」

「えええ!!」

穂乃果とにこに言われて気づいたのか凜は驚きの声を上げた。それを聞いた志郎たちは店の奥に進んでいくと、μ'sのグッズが置かれている棚を発見した。

「嘘お!? ううう海未ちゃん、これ私たちだよ!? みみみμ's 書いてあるよ!? 石鹸売ってるのかな!!」

「おおお落ち着きなさい！ ななななんでアイドルショップでせ、石鹸なんて売ってるんですか!!」

穂乃果と海未は目の前に自分たちのグッズが置いてあることに衝撃を受けてかなり動揺していた。

「お前ら気持ち分かるが動揺しすぎだぞ……つてうお?」

「うおおおお!! どきなさああああい!!! あれ!? 私のグッズが無い!! なんでえ!? どういう事お!!」

みんながグッズを見ている中、メンバーの中でも一際背の低いにこはなんとしても見

ようとジャンプしていたが見ることが出来ず、業を煮やして志郎たちを押しつけて棚に食いつくも、自分のグッズが見つからず、必死に漁っていた。

「あー!! あったー!! すごい・・・ううっ・・・!」

にこが自分のグッズを見つけて歓喜に浸っている中、穂乃果は棚に貼られていた一枚の写真を見つけた。

「あれ? ことりちゃん・・・?」

そこにはメイド服を着たことりの姿があった。

「こごやって注目されているのが分かると勇気づけられますよね!」

「ええ。」

「うう・・・、嬉しいね。」

「かよちんまた泣いてるく、泣き虫だにやあ・・・。」

海未たちは自分たちが注目されていることを実感し、花陽は嬉しさのあまり涙ぐんでいた。

「こごやって自分たちの努力が目に見えて報われているのが分かるってのはいいもんだなあ。」

「そうだな。ひよつとしてこういうスクールアイドルの店は日々精進してる彼女たちに勇気を与える役目もになってるのかもしれないな。」

志郎と幸雄も喜んでゐるメンバーを見てそう呟いた。

「すみません！」

『ん?』

聞き覚えのある声が店の外から聞こえてきたので穂乃果たちは店の外に視線を移した。

「あの、ここに私の生写真があると聞いて……。あれはダメなんです！今すぐ無くしてください!!」

穂乃果たちが店の外に向かってみると、そこには店員に写真を無くすようお願いをしていることりの姿があった。しかも制服ではなく、メイド服の姿で……。

「ことりちゃん?」

「きやあ!」

穂乃果が声をかけるとことりは悲鳴を上げて後ろを向いた。

「ことり、何をしているのですか……?」

海末がことりに問いかけるも彼女は答えず、数秒の沈黙がその場に流れた。

「ことり!?!ホワッツ!?!ドーナタデースカ!」

ことりは苦し紛れの策なのか、ガチャガチャのカプセルの蓋を眼鏡のようにしてカタコト言葉で海未の言葉に応えた。

「ふっ……ふっ……w」

幸雄はあまりにもおかしくて思わず吹き出しそうになるが、なんとかギリギリ堪えていた。

「え!?!外国人……!?!」

凜はことりのあまりにも稚拙な演技を真に受けていたが、クォーターであり外国人の血を引く絵里は呆れた様な表情で見っていた。

「ことりちゃんだよn」

「チガイマース!」

穂乃果がもう一度問いかけるも、ことりは穂乃果の言葉にかぶせて否定する。

(そこまで必死だと逆にバレバレだよな……。)

志郎も呆れながらことりを見守っていた。

「ソレデハ、ゴキゲンヨウウ……。ヨキニハカラエ皆の衆……。さらばっ!!」

ことりは少しずつ穂乃果たちから身を引き、ある程度距離を取った瞬間、ダッシュで逃げ出した。

「あ……ことりちゃん!!」

穂乃果と海未はことりを追って走っていった。

「追わなくていいの？あなた達の、特に諏訪部くんの身体能力ならことりさんに追いつくでしょうに。」

絵里は立ち尽くしていた志郎たちにそう言ったが、

「絵里先輩、よく考えてください。男子高生二人がメイドを追い回してたらそれは誰がどう見ても事件ですよ……。」

志郎は苦笑いしながら答えた。

「そうそう、それにああいうのはあらかじめ逃げ道を確保してるだろうからそれを特定した方が簡単なんすよね。あ、希先輩、とりあえずあいつが通りそうなルートはいくつか割り出せたので先輩の勘でどれかに向かってください。」

と言って幸雄はスマホの画面を希に見せた。

「はいよ。」

「というか今ので割り出せたの!？」

絵里は幸雄の頭の回転の速さに舌を巻いた。

「逃げる奴の思考はパターン分けが出来ますからね。この前にこ先輩が俺達から逃げ出した時と同じ手口で割り出したんすよ。」

「それってストーリーカーなんじゃ……。」

真姫が呆れたように言うと、

「お黙り!!」

と必死に言い返した。すると幸雄のスマホが鳴ったので出てみると、

『ことりちゃん確保したで〜。』

と希から報告が来た。

「ハラショー……!」

絵里はまたしても幸雄の力に舌を巻いた。

『ええええええ〜!!?』

「こ、ことり先輩がああ伝説のカリスマメイドのミナリンスキーさんだったんですか!」

「そうです……。」

花陽の言葉に、ことりは消え入りそうな声で答えた。

「ひどいよことりちゃん! そういう事なら教えてよ!!」

「おい穂乃果! ことりにも事情があつてだな……!」

ことりに詰め寄ろうとする穂乃果を志郎が諫めるが、

「言ってくれば遊びに来てジューズとかごちそうになったのに!!」

「そん!?!」

(そういえばこいつ割と食い意地張ってたっけか……。真剣に諫めようとしてた俺がバカみたいだった……。)

穂乃果のがめつさと花陽のツツコミで志郎は気が抜けると同時に呆れかえった。

「じゃあこの写真は?」

「それは店内のイベントで歌わされて、撮影禁止だったのに……。」

絵里の写真についての質問を申し訳なきようにことりは答えた。

「そう言えばこの前来た時も撮影禁止の件でトラブってたな。」

幸雄は前にここに来た時のことを思い出した。

「幸雄はここに來ていたのですか?」

「ああ、志郎を誘ってな。ミナリンスキーさんの正体を見に來たらまさかことりだったとは……。本気でびっくりしたぜ。」

「でもよかった!そういう事ならアイドルじゃないんだよね?」

「うん!それはもちろん!」

穂乃果の言葉を聞いてことりは少し安心したのかいつもの調子に戻っていた。

「でもなぜです?」

海未が改めてことりにはバイトしている理由を聞いた。

「それは……。」

ことりは志郎と幸雄に話したように理由を穂乃果たちにも話し出した。

「……穂乃果ちゃんみたいにみんなを引つ張って行くことも出来ないし、海未ちゃんみたいにしつかりもしてないし……。」

「そんな事ないよ！ことりちゃん歌もダンスも上手だよ！」

「衣装だつてことりが作つてるじゃないですか。」

穂乃果と海未が彼女を励まし、

「少なくとも二年の中では志郎先輩に並んでまともよね。」

真姫もフォローするがことりは首を横に振り、

「私はただ二人に着いて行つてただだよ……。」

と言つた。

(やつぱはこの手の劣等感とかは如何ともし難いよなあ……。)

幸雄はことりの顔を見て真面目な顔をして考え込む。

そして志郎たちはことりと別れ、穂乃果、絵里、海未と幸雄の五人で帰っていた。

「でも意外だな、ことりちゃんがそんなこと悩んでたなんて。」

穂乃果がふと呟いた。

「意外とみんな、そうなのかもしれないわね。」

「え?」

「自分のことを優れてるなんて思ってる人間なんてほとんどいないって事。だから努力するのよ、みんな。」

「そっかあ。」

穂乃果と絵里の会話を聞きながら志郎と幸雄はそれぞれ、乱世において場所や状況は違えど自分たちが歩むべき道が見えない中で精一杯もがいていたのを思い出していた。

「確かにそうかもしれないけどね。」

「そうやって少しづつ成長して、成長した周りの人を見てまた頑張って……。ライバルみたいな関係なのかもね、友達って。」

絵里の言葉を聞いた海未は、

「絵里先輩に μ 'sに入ってもらえて本当に良かったです!」

とお礼を言った。絵里はそれを聞いて

「え?何よ急に。明日から練習メニュー軽くしてとか言わないですよ?じゃあまた明日。」

照れ臭そうに笑いながら去っていった。

「また明日です！」

「さようなら！」

挨拶をした後、

「ねえ、海未ちゃんは私を見て頑張らなきゃって思ったことある？」

と穂乃果は海未に質問した。

「数え切れないほどに。」

と海未が答えると穂乃果は意外そうな顔をして、

「ええ!?海未ちゃん何をやっても私より上手じゃない!私のどこでそう思うの?」

と聞き返した。

「悔しいから秘密にしておきます」

と海未が笑って言うのと、

「ええ!」

穂乃果はそう言って頬を膨らませた。

「ことりと穂乃果は私の最高のライバルですから!」

「海未ちゃん……。そうだね!」

「おいおい、俺だって穂乃果のことを最高のライバルだと思ってるぞ。」

志郎も穂乃果と海未の間に加わった。

「志郎くんも?」

「ああ、お前は俺がどれだけ努力しても手に入れられなかった物を持っている。だからこそ俺はお前の背を追い、 μ' sを支えようと思ったんだぜ。」

志郎は空に手をかざし、虚空を掴んで爽やかに笑いながら言った。

「そういう意味じゃあ俺も穂乃果たちには負けてられねえな。」

幸雄もキヒヒ、と笑いながら穂乃果たちに言った。

そして次の日……。

「アキバでライブよ!」

「それって路上ライブですか!?!」

「しかもアキバってA—R—I—S—Eのお膝元よ!?!」

突然絵里が出した提案に穂乃果たちは驚いていた。それもそのはず、トップアイドルの本拠地の側で踊るといふのだから無理もない。

「それだけに面白い!」

「確かに敵の懐に潜り込むというのは名案だな!」

希と志郎が不敵に笑いながら言うど、

「でもずいぶん大胆ねえ。」

と真姫が意外そうな顔をして言った。今までの絵里を見れば、慎重な戦略を出すだろうと誰もが思っていたからなおさらであった。

「アキバはアイドルフアンの聖地、あそこで認められるようなパフォーマンスが出来れば大きなアピールになる！」

「確かにチマチマやるよりもそつちの方がレベルも確かめられるし、大きな経験値にもなる。まさに一石二鳥だな！」

幸雄は深々と頷き、

「いいと思います！」

「楽しそう!!」

穂乃果とことりも絵里に賛同する。

「しかし、すごい人では……。」

「人がいかなかったらやる意味ないでしょ?」

「それはそうですが……。」

まだ人前に立つのに慣れてない海未は少し乗り気ではなさそうだったが、

「凜も賛成！」

「じゃ、じゃあ私も……。」

「決まりね。」

なんとかみんなが賛成した。

「じゃあ早速日程を……。」

「とその前に、今回の作詞はいつもとは違ってアキバの事をよく知ってる人に書いてもらうべきだと思うの。ことりさん、どう？」

絵里は穂乃果の言葉を遮り、ことりの方を見てそう言った。

「え!? 私?」

「ええ、あの町でずっとアルバイトしていたんでしょ? きつとあそこで歌うのに相応しい歌詞を考えてくれると思うの。」

絵里はことりに作詞用のノートを渡しながら言った。

「なるほど、アキバの歌ならアキバを知る者に……というわけか! いい采配だ!」

「それいい! すごくいいよ!!」

「穂乃果ちゃん、志郎くん……。」

志郎と穂乃果は真っ先に賛成し、

「やった方がいいです! ことりならアキバに相応しい良い歌詞が書けますよ!」

「凜もことり先輩の甘々な歌詞で歌いたいにゃー!」

「ちゃんといいい歌詞書きなさいよ？」

「期待してるわ。」

「頑張ってね！」

と海未たちも思い思いにことりにエールを送った。

「うん！」

とことりは答えるも、少し困ったような表情をしていたのを幸雄は見逃さなかった。

（確かに絵里先輩の采配は見事なものだが、作詞の経験がないことりにいきなり任せて大丈夫か？無理だとは思ってないが、あいつらのことりへのエールがプレッシャーになつたりしないかとか、色々と不安材料があるが……。なんとかなればいいんだが。）
幸雄はみんなから離れた場所からことりを見て、懸念を抱いていた。

24話 ワンダーゾーン

絵里の提案でアキバで路上ライブをすることになり、そこで歌う曲の作詞をことりに任せることが決まった。そんなわけでことりはその日のうちから作詞を始めることになったのだが……。

「おい、あいつかれこれ30分ほど動いてないんだが大丈夫か?」

「まあ、目は開いてるし穂乃果と違って居眠りするような性格じゃないから大丈夫だろう。」

「ちよつと志郎くんそれひどくない!」

「3人とも静かにしてください!ことりの気が散ってしまいますよ!」

「はーい。」

志郎たち4人は教室の外からことりを見守っていた。小声で他愛もない話をしていく途中に、ことりの様子に変化が出てきた。

「チヨコレートパフェ……美味しい……!」

しばらく無言不動の体勢を貫いていたことりが口を開いたのだ。

「なんだ？ お腹でもすいたのか？」

そう言つて志郎は首をかしげるが、

「違えよ、曲に使うフリーズに決まつてんだろ。」

と幸雄が冷静にツツコミを入れる。

「生地がパリパリのクレープ……食べたい。はちわれの猫、かわいい……。五本指ソックス、気持ちいい……。」

ことりは次々とフリーズを出していくが、

「うわくくくん！ 思いつかないよおくく!!」

と言つて机に突つ伏した。

(そりやこうもなるよな……。)

こうなることを予想していた幸雄は他の三人に気付かれないようにため息をついた。

それからというものの、ことりは作詞のことで頭がいつぱいになつてしまつているのか授業にも身が入らず、先生に呼び出されるようになってしまつていた。

「これは少しまずいんじゃないか？」

「ああ、だが一度決まつた以上あいつにはこれを成し遂げてもらわないとな。どうした

もんかねえ。」

志郎と幸雄もそんな最近の不調気味なことを見て心配していた。

「ふっわふっわしたものかわいいな、ハイ！あとはマカロンたつくさん並べたら〜カラフルでしくあ〜わ〜せ〜♪」

（いかん、あいつの精神状態少しまずいことになってんじやねーか・・・!?!）

志郎たちはそれからもことりを見守っていたが事態が好転することは無く、寧ろ迷走しているのではないかとさえも思うようになっていた。

「ううっ、やっぱり無理だよお〜!!」

またことりの悲鳴が無人の教室に響き渡った。

「なかなか苦戦してるようですね・・・。」

「うん・・・。」

「こういうのは気が滅入りがちになるからなあ・・・。」

そう言つて海未、穂乃果、志郎がことりのことを案じていると、

「なあ、俺に考えがあるんだけどよ。少し耳を貸してくれないか?」

幸雄はそう言つて志郎たちにひそひそと自分のアイデアを教えた。

「いいねそれ!〜ことりちゃんに言つてくる!〜」

穂乃果はそのアイデアをことりに教えるために立ち上がり、教室のドアを開けた。

「ことりちゃん！こうなったら一緒に考えよう！！とっておきの方法で！！」

「穂乃果ちゃん……。」

「お帰りなさいませ、ご主人様♡」

「お帰りなさいませ！ご主人様！！」

「お帰りなさいませ……ご主人様……。」

「おお、三人とも似合ってるな……！！」

「やはり俺の見立てに狂いは無かったな……！！」

志郎たちはことりがアルバイトしているメイド喫茶に来ており、穂乃果たち女子組はメイド服を着ていた。

「うわあ、かわいいい！！二人ともばっちりだよ！」

穂乃果と海未を褒めることりの表情は先ほどまでの鬱屈とした様子は見る影もなく、晴れやかになっていた。

「にゃー！遊びに来たよ！」

「えへへ．．．」

「アキバで歌う曲だからアキバで考えるってことね。」

と、sのメンバーが次々と入ってきた。

「ではでは、さっそく取材を。」

「やめてください！なぜみんないるのですか！」

希がビデオカメラを向けてくるのを止めながら海未がそういうと、

「俺が呼んだのさ。賑やかな方がいいと思ってるね。」

幸雄が「テヘペロ♡」な表情で答えた。

「そんな事よりも早く接客してちょうだい！」

「ここはさっそく席について海未たちに接客するように促した。

「うう．．．」

恥かしがり屋な海未が戸惑っていると、

「いらつしやいませ。お客様、2名様でよろしいでしょうか？それではご案内しますよ♪」

と、ことりが接客を始めた。ことりの動きは慣れていて、非常にテキパキとして
いるだけでなく、本物のメイドと見紛うような雰囲気漂わせていた。

「これが伝説のメイド．．．」

「ミナリンスキー……！」

「これが伝説のカリスマメイドの接客術か……！トレツビアアアアアアアアン！！！」

「幸雄、色々ぶつ壊れてるぞ……。」

ことりのメイドとして働く姿にうっとりで見惚れている花陽と凜に混じって奇妙なテンションになっている幸雄に志郎はツツコミを入れた。

一方、厨房では……。

「海未ちゃん！さつきからずっと洗い物ばかり!!海未ちゃんもお客さんとお話ししなよー！」

「し、仕事はしてますよ！そもそも本来メイドというものはこういう仕事がメインのはずですよー！」

穂乃果がなかなか表に出ようとしない海未に表に出るように促すも、海未はそう言い張って洗いごとに戻っていった。

「幸雄くんみたいな屁理屈言ってる。」

「海未ちゃん。これもお願い。」

「あ、はい。」

海未がことりから食器を受け取ろうとすると、

「あ、だめだよ海未ちゃん。ここにいる時は笑顔を忘れちゃダメ♪」

ことりが表情が少し険しくなってる海未に注意した。

「しかし、ここは……。」

「お客さんの前じゃなくてもそう言う心構えが大事なの♪」

ことりはそう言つて微笑んだ。

そして接客が粗方終わつて店が落ち着いてきた頃……。

「ことりちゃん、やっぱここにいる時は少し違うね。」

穂乃果がコップを拭きながら話を切り出した。

「え？ そうかな。」

「別人みたい！ いつも以上に生き生きしてるよー！」

「うん、なんかね、この服を着ていると出来るつていうか、この街に来ると不思議と勇気がもらえるの。もし思い切つて自分を変えようとしてもこの街ならきつと受け入れてくれる……。そんな気持ちにさせてくれるんだ！ だから好き！」

ことりは晴れやかな顔で穂乃果に自分の気持ちを語り、穂乃果もそれを微笑みながら聞いていたが、

「あー！」

と突然何かを思いついたように言った。

「ことりちゃん！今のだよ！」

「え？」

「今ことりちゃんが言ったことをそのまま歌にすればいいんだよ！この街を見て、友達を見て、いろんなものを見て……。ことりちゃんが思ったこと、感じたこと……。ただそれをそのまま歌に乗せればいいんだよ！」

穂乃果はことりに自らが見て聞いて感じたありのままのことを、そのまま歌にすればいいと教えた。

「どうやら、答えは見つかったようだな。」

「ああ、俺も知恵を絞った甲斐があるってもんよ。」

志郎と幸雄は帰り際の会計後に、答えを見つけたことりの笑顔をカウンター越しに見かけ、満足そうに呟いて帰っていった。

そしてライブの前日の最後の打ち合わせを行うという事で志郎たちは屋上に呼び出された。

「打ち合わせなら部室でもいいんじゃないか？」

「さあねえ。あいつらにも考えがあるんだろ。」

そう言つて二人が屋上のドアを開けると、なんと穂乃果たち9人がメイド服を着て待つていたのだ。

「な!?!お、お前らなんでそんな恰好をしてるんだ!?!」

志郎が穂乃果たちの恰好に驚いて聞いてみると、

「今度の路上ライブはみんなでこれを着てやることにしたんだ!」

と穂乃果がスカートの裾を掴みながら答えた。

「なるほどねえ、しかしそれつてことりのバイト先のヤツだよな?よく貸してくれたもんだな。」

「店長に聞いたら快くオツケーしてくれたの♪」

と答えながらくるりと回った。すると幸雄は

「ああーっつと!!ことりストップ!!」

とことりを制止した。

「どうしたの幸雄くん?」

「もう一回!もう一回回つてくれ!!俺、アキバに来たらメイドさんの『スカートをふわりとさせながらくるりん』と回る奴を生で拝むのが夢だったんだ!!どうかこの哀れな田舎者の夢を叶えてくれ!!」

幸雄がそう言つて頭を碎かんばかりの勢いで土下座をすると、

「はい、わかりましたご主人様♡」

と言つて志郎と幸雄の前でぐるりと回つて見せた。

「おお．．．！」

堅物な志郎でさえもその優雅に回るここの姿を見て感嘆の声を漏らした。

「うおおおお！ブラボー！ブー！！実に素晴らしい！実に最高だ！！ミニスカも悪くないがメイドはやはりロングスカートに限る！！これこそ男が求める夢ッ！！その一つを叶えられるなんて俺はなんといい果報者なんだあああああ！！！」

幸雄に至つてはスマホカメラを連写しながらもう叫んでいるのか喘いでるのか分からないような声で悶えていた。

「幸雄先輩、なんか怖いです．．．。」

「なんか普段とはまるで別人にや〜。」

「許してやってくれ。あいつは都会に対するあらゆる希望を抱いてこの街にやってきたんだ．．．。それを叶えられて喜んでるだけだから許してやってくれ．．．。」

幸雄に対してドン引きしてる凜と花陽に対して志郎がフォローを入れた。

「確かに私も好きなアイドルを見たらきつとすぐ興奮しちゃうだろうからなんか分かるかも．．．？」

ら・・・。

絵里はそんな疑問を抱きながら苦笑いしていた。

「なんでにこと反応がそんなに違うのよおお!!」

「まあ、にこ先輩のは少しあざとすぎますし・・・。」

幸雄の反応に納得のいかないにこを見て、志郎がそう言うのと、

「あん!?なんか言った!」

とにこが睨んだので、

「いや、何でもありません!」

と志郎は目を逸らした。

「嗚呼・・・。この街にやって来てよかった・・・!この学校に転入してよかった・・・

!!ありがとう音ノ木坂学院、ありがとうs・・・!俺の人生、全てをやり遂げた気がするよ・・・!源三郎、源次郎・・・今そつちに逝くぞ・・・。」

「あ!!幸雄くんが倒れちゃった!」

「幸雄先輩、大丈夫ですか!」

「しつかりするにゃー!!ていうか源三郎と源次郎つて誰にゃー!!」

穂乃果、凜、花陽の三人に介抱されてる幸雄の顔はとても安らかだったという。

そしてライブ当日。ライブを行う時間は夕方であったが、アキバには元から人が多くいる上に事前にライブの宣伝をしておいたので、観客はたくさん集まっていた。

「いやあ、ずいぶんな人だからですなあ。」

「ああ、これだけいれば成功すればアピール力は間違いだな。」

「うう……。やっぱり人がたくさんいると緊張しちゃいます……。。」

どうやら海未はまだたくさんの人には慣れてない様子であった。

「お、やっぱり緊張してます？海未さんや。」

「当たり前ですよ。こんな格好で人前で歌うなんて言われて緊張しないはずがありません……。」

そう言っただけで海未はため息を吐いた。

「じゃあ少しばかり荒治療になるかもだが効果的な方法を試してやろうか？」

「こうなったら自棄です！荒治療でも何でもいいのでお願いします!!」

「オツケー！言質は取ったぜ!!それじゃあ……。。」

幸雄はそう言うと、海未の両わき腹にツツと指を走らせたのだ。

「ヒイツ……。。」

海未は悲鳴を上げ、次の瞬間には幸雄に華麗な一本背負いを決めていた。

「ななな何をしてるんですか幸雄!!」

「い、いやあ・・・、さつきも言つたる荒治療になるって・・・。こうすれば少しは緊張も紛れるかなって・・・。」

「ただのセクハラじゃないですか! 破廉恥です! 色々最低です!!」

「で、でも緊張は紛れたでしょ? ね?」

幸雄が土下座して手を合わせて言うど、

「確かに今ので少し緊張は紛れましたが、次同じことをしたら打ち首獄門に相当する罰を与えますからね!!」

と海未は顔を赤くしながらそう言ってステージの方へと走っていった。

「どうよ俺の実力は。」

「はつきり言つて最低だぞ。」

「勝頼さま手厳しい!」

「当たり前だ。だが、海未の緊張を紛れさせた点に関しては褒めざるを得ないな。次は手段を選べよ?」

「はっ。」

志郎と幸雄の会話が終わった直後にステージの方から歓声が聞こえてきた。

「始まるみたいだな。」

「では俺たちも見に行きますか!」

志郎たちもまた、*μ's*のことりをセンターとしたパフォーマンスを見るために歩みを進めた。

『それでは聞いてください! Wonder zone!』

こどりのソロから始まったライブはいつも海未が作詞する曲とは違う魅力を観客たちに与え、曲が終わってもアキバの一角には歓声が響き渡っていた。

そしてライブが終わった後には陽が沈みそうになっていた。

「思いのほかライブは上手く行ったな!」

「ああ!このままいけばラブライブ出場も夢物語じゃあないぞ!」

そんな話をしながら志郎と幸雄は帰っていたが、神田明神の近くを通りがかった時、階段の上に穂乃果とことりと海未がいたので、

「お、あいつらあんなとこで何話してんだろ。おーいつてむぐ!?!」

「邪魔するな幸雄。」

幸雄は三人に声をかけようとしたが志郎が口を塞ぎ、物陰に連れ込んだ。

「何すんだよ！」

「どう見ても気軽に話しかけられるような様子ではなかっただろ。」

志郎に言われて階段の上にいる三人の顔を見たら、ことりがどこか寂し気な表情をしていた。

「私たちっていつまで一緒にいられるのかな……。」

「どうしたの急に？」

「だって、あと2年で高校も終わっちゃうでしょ？」

「……それはしょうがないことです。」

海未はことりの言葉にさみしげに答える。

「大丈夫だよ！ずっと一緒!!」

と穂乃果はことりに抱き着いた。

「だって私、この先ずっとずっとことりちゃんと海未ちゃんと一緒にいたいって思ってるよ！大好きだもん!!」

「穂乃果ちゃん……。うん！私も大好き!!」

穂乃果の言葉を聞いて笑顔になったことりも穂乃果に『大好き』という言葉を返した。

「ずっと一緒にいようね！」

「うん！」

「ええ！」

そう言つて三人は互いに手を握つて自分たちの友情を噛みしめた。

「なるほどな。」

「ずっと一緒……ねえ。」

穂乃果たちの会話を聞いた志郎たちは感傷的な気分浸っていた。

「なんだ昌幸、ずいぶんと含みのある言い方ではないか。」

「そりやあまあ、俺たちはそんな言葉とは無縁の時代に生きてきましたからなあ。」

「だが、今は違う。あの乱世のように理不尽に互いを引き裂かれることはあるまい。」

「確かにそうかもしれないませんが、どうもずっと一緒つて言葉を聞くと本当にそんなことがあるのか、と思つてしまいましたね。」

「……。」

「人間っていうのは出会いと別れを繰り返して生きる生き物だ。そして何よりこの世に永遠というものは存在しない。そう、ずっと一緒なんて聞こえの言い言葉で飾つてもいずれ別れる時が来るもんですよ。それは友人という他人同士の関係ならなおさらだし、親子や兄弟だつて寿命という形で切り離されるんだからな。」

「犬伏の事か？」

「あれは俺達三人が最善だと判断して決めたことですから後悔なんてありませんよ。ですが、そうせざるを得ない『運命』さえなければ俺達三人が分かれることもなかったかもしれないと思うんですよ。」

「昌幸……。」

「俺が問題だと思つてるのはあいつらが発した『ずっと一緒』という言葉です。あれは一種の呪いですよ。一度あの言葉を発してしまえば、文字通り一生その言葉に縛られかねなくなり、別れざるを得ない運命に直面した時、互いに離れられずに共に不幸な結末を……。」

「それ以上言うな昌幸。」

志郎が幸雄の言葉を制した。

「勝頼さま……。」

「とにかく、その話はやめにしよう。たとえ仮にその時が来るとしても、俺たちにできる

「ことは『少なくとも今訪れることがありませんように』と祈ることしかない。」

「確かにそうですな……。」

二人の間に沈黙が流れた。

「さて、黄昏時にこんな話をするもんじゃないな！ さっさと帰ってゆつくりしよう！」

「お、おう……！ そうだな！」

志郎と幸雄はそう言つてそそくさと帰つていった。

（あいつらの友情と、sの結末が崩れるような運命がいずれやつてくるとしてもそんなことは絶対に防いでみせる……それが武田家の崩壊を止められなかった俺の……この時代に生まれ変わった俺の天命だ！）

（さーて、あいつらはあんなことを言つておつたが……。人間いずれかは別れを告げねばならない時が来る。果たしてあいつらはその時が来たらどうするんかねえ。まあ、そんなもの来ないに越した方がいいんだがね……。）

互いに違う道を帰るように志郎と幸雄の心境も違つていた。

そしてこの時、まだ誰も気づく者はいなかった。いや、志郎と幸雄ならばわかっていたのだろうが、無意識のうちに『それ』を忘却の淵に置き去りにしていた。

『別れとは唐突に訪れる』という事を。

25話 覇者との邂逅

μ s によるアキバでのゲリラ路上ライブが成功して幾日か経ち、いよいよ学校が夏休みになった。

志郎と幸雄は特に変わった様子もなく、いつもの様にアキバをふらついていた。

「はあく、もう夏休みか。音ノ木坂学院に入ってからというものの息つく暇もなく季節が過ぎ去っていくねえ……。」

幸雄は大きなあくびをしながら感慨深げに呟いた。

「それだけ俺たちは充実してるといふことだろう。」

「そうだな、俺たちがこの時代に生まれ変わってから初めてつてほどに胸が高鳴る毎日だよな！」

「そうだな……。しかしあまりこの街中で生まれ変わったとかそういう単語は使わない方がいいぞ。いつ誰に聞かれてるか分かったものではないからな。」

「おう、そうだったな。」

そんな他愛もない話をしながら志郎と幸雄は街を歩いていった。

背後から何者かが付いてきているという事も知らずに……。

「確か今日はししのあなで薄い本を買いに行くんだよな。」

「そうそう、そろそろこの時期の新刊が開始めるころだからなあ……。」

志郎と幸雄は今日の目的を話していたが、

「……！」

「どうした志郎？」

「幸雄、後ろに何かいるのに気づいたか。」

「ああ、さっきから誰かは知らんがうろろうろ引つ付いて来てやがるな。」

志郎と幸雄は歩きながら尾行している人物に悟られないように小声で話している。

「どうする？」

「まあ俺達ならば襲われても負けはしないが、このまま振り向いて逃げられるのもすつきりしないな。」

「だったら俺にいい案がある。」

「なんだ？」

「このまま人通りが比較的少ないところに歩いていこう。ほんである程度おびき寄せたら俺たちは二手に分かれる。そうしたら相手はどっちかを追いかけるだろうからそれ

を挟み撃ちにするって手筈だ。」

「なるほど、それでいいこう。」

志郎も幸雄の策に乗り、二人は無言になつてそのまま足を速めて歩き出した。そして二人を尾行する何者かも二人を追うように歩き出す。

（ふふふ、奴らめこれがこの真田昌幸改め武藤幸雄の領域に引きずり込まれてるとも知らずについて来てやがるな。）

（幸雄、そろそろ人通りが無くなつてきたぞ。）

（よし、志郎はそのまますすんでくれ。俺はあの路地裏に入つて奴をおびき寄せろ。そしたら……。）

（おう！）

志郎と幸雄は小声で打ち合わせをして、志郎はそのまま歩みを止めずに前進し、幸雄は路地裏に入り込んだ。志郎たちを追つていた人物はそれを見て一瞬迷つた素振りを見せたが、幸雄の方に着いて行くために路地裏に入つていった。

「よく来たな、わが領域へ。さあ、どういう見で俺たちのことを尾行していたのかゆつくり話してもらおうか。言つておくがお前らに拒否権は……ってアイエエエエ!!?」

幸雄はターゲツトが自分の方についてきたと分かつた瞬間に後ろを振り向き啖呵を

切ったが、相手の顔を見た瞬間一転して悲鳴を上げた。

「どうした幸雄！大丈夫か!？」

幸雄の作戦通りに志郎は相手を挟み撃ちにするために幸雄のもとにやって来たが、彼の悲鳴を聞いて動揺しながら幸雄に安否を問うた。

「お、俺は大丈夫なんだが……。あ、あ……。」

「あ……。? いったいどうしたんだ? というかそいつは何者なんだ!」

「A—RISEの綺羅ツバサがなんでこんなとこにいやるんだあああああ!!!」

「はあ!?! 綺羅ツバサだと!?! 馬鹿な、そんな大物がこんなとこにいるわけ……。」

志郎が恐る恐る幸雄の前に立ちはだかっている人物に近づいてみると、

「あら、私がこんなところにいちやいけなにかしら?」

そう言つて、額が見えるほどの短い前髪と、短い髪、翡翠色の瞳に大胆な笑みを顔に浮かべ、身長もにこと同じくらい小柄であるはずなのにもう少し大きく見えそうなほどの風格を纏つた少女がいたずらっぽくウインクをしながら志郎に言った。

「な……。! 本物の……。綺羅ツバサ……。だと!？」

志郎は少女の姿を見て本物と確信した。μsが活動を始めてからダンスの参考にするため穂乃果たちと一緒にA—RISEのPVを見てきた志郎が、その姿を見紛うことなどあるはずがなかった。

「あら、二人ともそんなまるで超常現象を見た様な顔をして驚くことないのに。驚かせすぎちゃったかしら？」

ツバサがそう言うと、

「全く、ツバサのそういう所には困ったものだな。」

「まあ、慣れっこなんだけどね。ごめんなさいね、うちのツバサがどうしてもあなた達と話がしたいっていうものだから。」

なんと志郎の後ろから長身で紫がかった黒髪の少女と、身長は三人の中でも中間ほどの茶髪のウェーブがかかっているロングヘアの少女が出てきた。

「アイエエエエエ!!? 統堂英玲奈に優木あんじゅも!？」

「馬鹿な!!なんでこんな所にA—R I S Eが全員集合してるんだ!!?」

これには幸雄はともかく志郎も動揺を隠しきれなかった。スクールアイドル界におけるトップオブトップ、それこそまさにスクールアイドル界の天下人と呼ばれてもおかしくないグループ、『A—R I S E』のメンバーがこんな下町の路地裏に集結しているのだから驚くのも当然であった。

「し、しっかしなんだって俺達のことをつけまわしてたんだ?俺らとあんた達に接点なんて無いはずなんだが……。」

「幸雄の言う通りだ。というかなんで俺たちのことを知っているんだ?」

ようやく落ち着きを取り戻した幸雄と志郎がツバサたちに疑問をぶつける。

「そうね、そのところからちやんと話すべきよね。」

「そうだな。だが、場所を変えたほうがいいんじゃないか？」

「そうね、こんなところで話してたら通りがかった人たちに勘違いされちゃうかもしれないものね。」

「というわけで場所を変えるからついて来てくれるかしら。」

「あ、ああ……。」

「そうだな。」

志郎と幸雄はツバサたちの提案に乗り、そのまま彼女たちに着いて行った。

「しっかしUTX学園って中身もすげえんだな……。」

「ああ、これが高校とは思えんな……。」

志郎たちがツバサたちに連れてこられたのは彼女たちの通うUTX学園の中にあるA—RISEの部屋であった。

「でも俺たちが入ってもよかったのか？ A—RISEの皆様方よお。後で不法侵入でつち上げて御用なんてのは勘弁してくれよ？」

「別にそんなことはしないわ。それに今は夏休みだし、私たちが呼んだんだからそんなことを心配する必要はないわよ。」

ツバサが不敵に笑いながら答える。

「そいつはどうも。」

幸雄はそう言つて紅茶を飲んだ。

「して、俺たちと話したいことがあると言つていたがそろそろその用件を聞きたい。」

話を切り出したのは志郎だった。

「そうね。呼んだからにはちゃんと言をしないで失礼だからね。」

「本題に入る前に一つ質問したい。あんた達はどこで俺たちの存在を知ったんだ？俺達はある方の方に留まるような目立ったことは何一つしてないただの高校生なんだが。」

幸雄は三人の目をそれぞれまっすぐ見据えながらツバサたちに質問した。

「それに関してはこの写真を見てもらえば分かると思うわ。」

そう言つてあんじゅは一枚の写真を志郎たちに見せた。

「これは……！」

「おいおい、こんなもんいつの間撮つてやがったんだ!？」

志郎たちは写真を見て驚いた。何故ならそこにはゲーセンで絵里と希を除いた、

sのメンバーとゲーセンにいたる志郎たちの姿が写っていたからだ。

「センター決定戦の時に撮られたのか……。」

「うは……」。灯台下暗しだなこりや。で、こいつは誰からのタレコミだ?」

「写真を撮ったのはあんじゅよ。」

「たまたまみんなでゲーセンに遊びに行ったら、sのみんなと、男子なのに音ノ木坂の制服を着たあなた達がいだから撮っておいたのよ」

「それで私たちが個人のルートで色々調べた結果、諏訪部志郎と武藤幸雄という君たち二人の名前が出てきたというわけだ。」

「合点がいったがツツコミどころが満載だな……。」

「ああ、あのA―R―I―S―Eがゲーセンに遊びに行ってる事とか、『個人』の情報ルートで顔しか知らない男の名前を二人も特定するとかあんたら何者だよ……。」

志郎と幸雄はA―R―I―S―Eの情報収集力の凄まじさに舌を巻いた。

「質問はそれだけかしら。」

「ああ、これだけだ。」

「そう。じゃあようやく本題に入れるわね。」

そう言つてツバサは紅茶を一口飲み、ティーカップを置いた。

「諏訪部志郎さんに武藤幸雄さん。あなたたちはどんな立場の人で、*ム* sにとつてど

ういう存在なのかしら?」

「俺たちが何者で……。」

「あいつらにとつてどういう存在……か?」

「ええ、私たちは、sのことは結成した時から興味を持つてるの。で、さっきの写真を見る限りあなた達は彼女達と親しげだけど、どういう関係か気になったの。」

「ひよつとして、誰かと『これ』だつたりするのかしら?」

「やめないかあんじゅ。」

ツバサは真剣な表情で志郎たちに質問をぶつけ、あんじゅはいたずらっぽく笑いながら小指を立ててみせ、英玲奈はそんなあんじゅを諷める。

「俺たちは音ノ木坂学院が廃校対策で近い将来、男女共学にすることを検討しているからその実験として転入した研究生だ。」

「あいつらとの関係に関しては、俺たちはあいつらのサポートをしてるだけさ。」

志郎と幸雄は淡々と自分たちの身の上を答えた。

「なるほど。音ノ木坂学院が廃校しそうになってるのは知っていたが、共学化をも視野に入れているとは知らなかったな。」

「でも女子高ににいるのにそういう話がないのは少くしまらないわね。」

志郎たちの答えを聞き、英玲奈は深く頷き、あんじゅはため息をついた。

「さしずめ『*M* s の両腕』と言ったところね。とりあえずあなた達がどういう立場の間かは分かったわ。でも、私達が求めていた答えとは少し違うかしら。」

「違う……とはどういうことだ？」

ツバサが発した意味深な言葉に志郎は疑問を感じた。

「そうね、たずね方が悪かったのかしら。質問するならそう……、あなた達は『何者』なのかしら？」

そうたずねたツバサの目を見て志郎たちはまるで自分たちの全てを見透かされているような錯覚に陥った。

「何者って言われてもねえ。俺は音ノ木坂学院の二年生、7月13日生まれの17歳で群馬県生まれのただの男子高生としか……。」

幸雄はいつもの様におどけた様子で自己紹介をするが、

「下手な誤魔化しは効かないと思っただほうがいいぞ。」

と英玲奈が幸雄の言葉を遮った。

「なに？」

幸雄が一転して素に戻って英玲奈に反応すると、

「ツバサはかなり勘がいいから誤魔化しは効かないということだ。」

「そうそう、正直に言ったほうがいいわよ？」

と英玲奈とあんじゅが忠告する。

「正直も何も今言ったのが俺の全てなんだがなあ。」

幸雄はなんとか3人の攻勢を凌ごうとするが、

「あなた達二人と話をしているなんとなく感じたんだけど、あなた達って何となく高校生って感じがしないのよね。」

「なるほど、確かに俺はよく同年代の奴らに比べると老けて見えるとはよく言われるな。」

ツバサの言葉に志郎は動じることなく返したが、

「うーん、確かにそれもあるのだけど正確にはあなた達を見てると違和感を感じるのよね。」

「違和感、だと?」

「ええ、ほとんどの人からすれば感じることはないみたいだね。なんと言うか、あなた達の言動はまるで『高校生じゃない何者か』が『高校生を』演じてるように見えるのよ。」

「・・・!!」

志郎と幸雄はその発言に言葉を発することが出来なかった。この現世に生まれて17年間生きてきたがこの時代における両親にさえも自らの正体を隠し通すことができ

ていただけに、今日初めて出会った少女に正体を見抜かれそうになるなんて予想がつか
なかつた。

「その様子だと、私の推測はあながち間違っていないようね。」
ツバサはいつも見せている不敵な笑顔で呟いた。

（おい！どうすんだよ志郎……。こいつはやべえぞ……。！どうやって切り抜けるよ？）
（いや、ここで切り抜けてもその場のぎにしかならんだろう。寧ろ下手な事をすれば
余計に強い疑いを持たれる。）

（しかしなんつう女だよ、綺羅ツバサ……。！あいつの目は『炯眼』なんてもんじゃねえ、
森羅万象のすべてを見通す『天眼』と言っても過言じゃねえぞ……。！）

（お前の『炯眼』は優れた観察力の賜物だが、『天眼』なんてそんなオカルト染みしたもの
あるわけないだろ！）

（そんな事言ったら俺たちの存在自体がオカルトだろうが！）

（とにかく、ここは俺たちの正体をいつその事明かしてしまった方がいいかもしれん
な……。）

（そうだな。あいつらより先に知られるのが癪だが、是非もねえしな。）

志郎と幸雄は小声でこれからどうするかを話し合った。

「分かった、俺たちの正体を話そう。ただし条件がある。」

「ええ、私たちにできることなら何でも言つて。」

「これから話すことは他言無用。ここだけの秘密にしてもらいたい。」

「分かったわ。もちろん私たちも別に人に話す気はさらさら無いから構わないわ。」

ツバサの了承を得た志郎は一呼吸を置いてから語りだした。

「俺たちの正体は……。」

「……これが俺たちの全てだ。」

志郎が語り始めてから10分近く経ち、話は終わった。

「なるほど、諏訪部くんが武田勝頼がこの時代に生まれ変わった姿で武藤くんが真田昌幸が生まれ変わった姿なのね。」

「偶然とはすごいものだな。かつて主従関係だった二人が同じ年代に生まれ変わり、同じ学校で親友同士だなんて、奇跡の産物と思えないな。」

「事実は小説より奇なりってよく言ったものよねえ。」

A—RISEの三人はそれぞれ三者三様の感想を口にした。

「普通ならこんな話をしたら『こいつ頭大丈夫か?』ってリアクションされるのが普通だと思つたが、まさかこうもあつさり信じてもらえるとは思わなかつたわ。もしかしてあなたも俺たちと『同類』なんじゃねえの?」

幸雄が皮肉るように言うのと、

「そうね、確かに普通なら私たちもそういうリアクションをとつていたと思うけど、何せ前例があるからね。それと私はただの女子高生よ。」

とツバサが言つた。

「前例だ?!俺たち以外にも『同類』がいるのか!」

志郎はツバサに食いかかつた。

「ええ、その人のプライバシーがあるからこの場では言えないけど、少なくとも私たちは一人だけそういう人がいるのを知ってるわ。」

「そいつの正体を探つた時もツバサは君たち二人に言つたことと同じことをその人に感じたそうだ。」

「ほんとツバサの勘つて凄いわよね。」

そんなA—RISEの言葉を聞いた志郎は、

「この世というものは広いもので案外狭いものなのだな……。」

と感慨深げに呟いた。

「それで話は変わるけど、あなた達はあの子たちとこれからどうするつもりなのかしら？」

ツバサは志郎に問いかけた。

「無論、ラブライブを目指す。あいつらをラブライブ出場に相応しいスクールアイドルとなるように支え、押し上げてみせるさ。」

「でもあなたは人心をまとめきれずに家を滅ぼした敗軍の将よね？そんなあなたが彼女たちを導けるのかしら？」

ツバサは志郎を挑発してみせる。

「ああ、確かに俺は敗軍の将だ。お前の言う通りの人を導く器量を持たぬ男だ。だが、導くのは俺ではない。俺の役目はあくまでもあいつらが自分たちの信じた道を歩むのを支えることに過ぎん。あいつらの道を切り開くのはあいつらだ！俺達はそれを見守り、時としてあいつらが壁にぶつかった時に手を貸してやる協力者だ！」

「志郎の言う通りだ。そして志郎はあいつらを表から支える心の支柱となり、俺は陰から乱世と現世で鍛え上げた智慧を駆使してあいつらを支える頭脳となる!!」

志郎と幸雄はツバサの挑発に物怖じせず自分たちの考えをぶつけた。

「今は高みからあいつらを眺めているがいい。だが、いつかあいつらはお前たちを下し

スクールアイドルの天下人となるだろう！必ずやお前たちの立つ高みまで登ってみせる!!」

「その時に備えて首を洗って待つてることな!!」

さらに志郎たちはツバサたちに向けて啖呵を切った。事実上の宣戦布告といったところであろう。

「ええ、素晴らしい宣戦布告をありがとう！私たちもあなた達二人と、彼女たちと戦える時を首を長くして待つてるから！」

「ふっ、ラブライブの決勝が楽しみだな。」

「予選落ちなんてことにならないのを祈つてるわ。」

ツバサたちも志郎たちの宣戦布告を快く受けた。

「話してみるとほんとに楽しい人たちだったわね。」

「ああ、武田勝頼の生まれ変わりである諏訪部志郎はともかく『表裏比興のもの』と言われた真田昌幸の生まれ変わりである武藤幸雄があそこまでまっすぐな言葉をぶつけてくるとは思わなかったな。」

「表裏比興ってどういう意味なのかしら？」

「表裏比興というのは食わせ者という意味だ。あの男、単なる食わせ者というわけではないみたいだったな。」

志郎たちが帰った後、ツバサたちは部屋に残って志郎たちについて話していた。

「確かに武藤くんも見どころがあつたけど、私的には諏訪部くんの方が見どころがあるわね。」

「ほう？」

「彼は私たちが思つてる以上に大物よ。歴史の教科書では信長に敗れた男としか書かれていないけど、武田信玄の血を引いてるだけあつて風格は圧倒的だったわ。」

「確かに、私たちに啖呵を切っていた時の彼が放っていた威圧感は凄まじかったな。」

「ええ、あんな風格を出せる人なんてそうそういないわよね。」

ツバサたちは先ほどの啖呵を切っていた志郎の姿を思い出した。

「さて！ラブライブに向けての楽しみが増えたことだし、今日は休みだったけど少し練習していきましょー！」

「そうだな。」

「ええ、行きましょー！」

ツバサたちは練習するためにレスナールームに向けて歩き出した。

(ここ最近急速に力をつけ始めてる9人の女神たちにそれを支えんとする二人の若虎・・・。今はまだどちらも未熟だけどこれからの成長が楽しみね・・・！)

心の中でそう呟くツバサの脳裏には、まるで合戦に向かうような気迫を纏いながら去っていった志郎と幸雄の後ろ姿が映っていた。

26話 将星、秋葉原に結集す 前編

志郎と幸雄がA—RISEと接触してからしばらく経ったある日……。

「オフ会しようぜ!!」

「は?」

2人は秋葉原駅の前にいた。

「急に『アキバ駅に来てくれ!』ってメッセージが来たから来てみたが……。なんだ唐突に?」

「いやだからオフ会しようぜって言ってんだが?」

「それは分かるんだが何故俺を誘ったんだ? オフ会ってのはそもそもネットとかSNSとかのネット上でのグループとかのメンバーと集まるものだろうに、そう言う集まりに全く所属してもいない俺を誘った理由は何なんだ?」

志郎は幸雄が自分を呼び出した理由をたずねる。

「それに関しては今から説明するつもりだったんだが……。その前に志郎には一つ謝らななきゃならん事があるのだ。」

「謝らななきゃならないこと?なんだそれは。」

志郎が首を傾げると、

「すまん志郎！」

そう言つて幸雄は凄まじい勢いで志郎に頭を下げた。

「ええ!? な、なんだよどうしたんだ急に頭なんか下げて！」

幸雄の突然の謝罪に志郎は困惑した。

「ほら、綺羅ツバサがあの時言つたこと覚えてるか？」

「ああ。俺たち以外にも過去の時代に生き、そしてその魂を保つたままこの時代に別の人間として生を享けた者がいる……つてな。」

「そう、俺たち以外にも『同類』が存在する……。」

「だいぶ話が見えてきたな……。まさか幸雄……お前、他の『同類』と接触したことがあるのか……!?」

「ご明察、と言いたいところだが少し違うな。細かいことを言わせてもらうと、『直接的』な接触はとつてないのだがね。」

「直接的じゃない接触……? いったいどういう事なんだ!？」

「だからこそオフ会なんじゃねえか。」

そう言つて幸雄は自分のスマホを突き出した。

「直接的じゃない接触……、オフ会……。SNSか!？」

「ご名答！そう、俺たちはネット上で接触して互いに連絡を取り合うことに成功してるのよ。」

「なら何でそれを早く言ってくれなかったんだ！」

志郎は幸雄が自分に重大な秘密を教えてくれなかったことに抗議するが、

「何故言わなかったかって？ぶつちやけ志郎にはあまり必要ないかなって思ったからさ。」

幸雄はそれをあつさりと躲した。

「俺には必要ない？どういふことだ？」

「志郎はさ、音ノ木坂学院に入って俺と出会うまで他に自分と同じ奴がいるかも、とかどうして自分はこの時代に生まれ変わったんだらうって思ったことあるか？」

「え？そりゃあ一度はあるが、いたとしても生きてる間に会える確率なんてないだろうし、どうして生まれ変わったのかも考えたが堂々巡りになりそうだからあまり……。」
「だろうな。それが俺との違いさ。俺はどうして生まれ変わったのか、他に仲間はあるのかを死に物狂いで探したもんさ。」

「探す……ってどうやって？」

「おいおい、この時代には俺たちの時代にはないものがあるじゃねえか……。『インターネット』って文明の利器がよお!!」

「いやいやいや！ ネットで探すにしても限界があるだろう！ それに第一ネットに『自分は昔の時代の人間の生まれ変わりなんです』って書き込むやつらがいるのか？」

志郎は幸雄に疑いの視線を向けるが、

「いるんだな、それが。」

幸雄はニヤリと笑って言った。

「な!？」

志郎はそれに驚いた。

「まあ、いるつつつても T w o o o e r とか 2 ち o o o r とか そんな人の集まるところに書くわけねえじゃん！俺たちがいるのはもともともとずくつと奥さ。」

幸雄はそう言いながらスマホを操作してそのサイトにアクセスし、志郎に画面を見せた。

「これは・・・?」

画面には『転生者の夢幻郷』と書かれていた。

『転生者の夢幻郷』、その名の通り転生者のみが入ることのできるサイトさ。一昔前に流行ってた個人サイトの形をとってるが、基本的には 2 ち o o o r みたいな匿名掲示板さ。」

「転生者のみって・・・。どうやって入るんだ?」

「パスワードを入れるのさ。ほれ、お前も試しに入れてみなよ。」

幸雄はそう言って志郎にスマホを渡した。

「入れてみるって……俺は会員じゃないからパスワードなんて知らないぞ!!」

「まあまあ、お前なら絶対分かるって。」

「俺なら分かるって……。」

志郎が画面を見てみると、パスワードの入力欄の上に『桶狭間の合戦が起きたのは何年?』と書かれていた。

「これがパスワードか?」

「そ、それにあたるものを入力すればいいのさ。」

志郎は幸雄にそう言われると『1560』と入力したが、『パスワードが違います!』と表示された。

「オイどういう事だ! 入れんぞ!!」

「まさか西暦で入力したんじゃねえだろうな?」

「普通あんな風に聞かれたら誰だって1560年って答えるだろ!」

「はあー! 志郎も随分この時代に染まっちゃまったもんだねえ……!」

幸雄はそう言ってため息をついた。

「そりゃそうだろ。というかお前にだけは言われとうないわ!」

「俺たちには俺たちが使ってた暦があるじゃねえか。」

「俺たちが使ってた暦・・・？旧暦、太陰暦か!!」

幸雄の出したヒントをもとに一つの結論を志郎は導き出した。

「そうそう、やつと分かって来たじゃねえか！後はそれを工夫して入力するだけさ。」

「工夫して入力・・・？桶狭間の合戦が起きたのは永禄3年だから・・・。そうか！」

志郎は何かを思いつき入力欄に『a603』と入力した。

「おお！入れた!!」

志郎はサイトに入ることが出来たようだ。

「おお、入れたか。お前さんも無事にここの会員になれそうだな。」

「会員？そんなものに登録してないし、何よりこれは幸雄のスマホじゃないか。」

「ああ、会員つてのはあくまでも建前だけの話でこのサイトに入りにできる奴は基本的

にみんな会員なのさ。」

「そんないい加減な・・・。それにあのパスワードだつてよくよく考えたらめちやくちや

簡単じゃねえか！もし転生者以外の奴が入ったら・・・。」

「あー、その心配は無用だ。そもそもこのサイトは直接サイト名を検索しても出てこないようになつてるし、このサイトに辿り着くには俺たちのように必死こいて転生について奥深く奥深くものすごく奥の方まで調べてようやく初めてこのサイトに着ける

ようになってるんだ。いくらこのパスワードを簡単に見破れる歴史好きでもここは探し当てられない。」

「でももうすっかり迷い込んだら・・・。」

「それこそ心配無用さ。うっかり迷い込むような奴がここに書き込んでるのが本当にこの時代に生まれ変わった奴だなんて信じるまい。よくてもその歴史上の人物になりきって遊んでる奴らとしか思わんさ。」

「だが・・・！」

志郎はそれでも納得いかない様子だったが、

「あーもー、心配性だな志郎！そもそも転生なんて馬鹿げたこと信じる奴なんて当事者である俺たちとそれを俺たち転生者から聞いた連中だけだつっうの!!」

と幸雄は志郎に言つて聞かせた。

「確かに冷静に考えるとそうだな。しかし一つ気になったんだが、さっきから言ってる『転生者』ってなんだ？」

「ああ、俺たちは自分たちのことを生まれ変わった者つてことで『転生者』って名乗ってるのさ。」

「なるほど、つまり俺も転生者つてわけか。」

「そういう事。あ、そうだ。このサイトのURL送つてやるからそこからアクセスして

ブックマークしてくれ。あとURL書いたメールはすぐに消せよ?」
「はいはい。」

そう言つて志郎は幸雄から送られたURLからサイトにアクセスしてパスワードを入力してサイトに入った。

「これでいいのか?」

「おう、そうそう。自己紹介は簡潔に、そしてHハンドルネームNは自分の正体がギリギリバレないようにすると同時にぼんやりと察せられるようにな。」

そう言つて幸雄は志郎の書き込みを見ると、

「ふむ、『四郎』か。少しばかりドストレートな気がしなくもないが、まあ四郎と名乗つてた武将はそれなりにいたから問題は無いな。」

と満足げにうなずいた。

「なあ幸雄、今の発言で少し気になったんだがこのサイトにいる転生者は皆俺たちと同じ戦国乱世に生きた者たちなのか?」

志郎が幸雄にたずねると、

「そうだな。どういうわけかは知らないが転生者は基本的に戦国武将が前世だった者た

ちなんだよな。」

「確証はあるのか？」

「確実にあるってわけじゃないけど、他の転生者とリアルで知り合ってる奴は俺以外にも何人かいるし、そいつらが言うにはその知り合いも戦国武将の生まれ変わりだったんだと。」

「そうなのか……。」

「このサイトの管理人……。つまりこのサイトを作った奴も恐らくは転生者だが基本的に掲示板にも姿を現さないもんだから誰なのかは分らんがね。」

「ますます不思議だな……。」

志郎は幸雄の言葉を聞いて考え込む。

「まあ、とりあえず難しい話は一旦終わりにしようや！そろそろ集合時間になるしな。」

「確か12時にここに集合と言ってたが……。今のところは俺たちしかいないぞ？」

志郎は辺りを見回すが待ち合わせしてる人を探してる人物は見当たらない。

「そりゃ俺がこのオフ会の主催者だからな。」

「そうなのか!? あ、だからお前やたら自己主張の強いバッジを付けてたのか!」

志郎はそう言っただけで幸雄の胸についている、真田家の家紋である六文銭が描かれてるバッジを指差した。

「その通り！やっぱ主催者だから来てくれるメンバーに分かりやすい目印を付けなくちゃと思つてな！」

「そういえば、来るメンバーつてどれくらいいるんだ？」

「俺と志郎を含めて7人だな。」

幸雄は指折り数えながら答える。

「という事は5人も来るのか。よく集まつたな。」

「まあ、1人は遅刻だけだな。一度は顔を合わせて話がしたいと言つたらホイホイ来てくれたよ。」

「それで、誰が来るんだ?！」

志郎が食い気味に聞くと、

「それは志郎でも教えられないな。まあ来てからのお楽しみだ。」

と幸雄はさらつと返した。

「さうて、最初は誰が来るかねえ。」

幸雄がそう言つて背伸びをすると、

「あゝ、すみません。もしかしてその六文銭のバッジ……、『比興者安房守』さんですか?！」

と、女性の声が聞こえてきたので

「あ、はいそうですね！俺が主催者の『比興者安房守』です……って、んんん！」

と言って振り向くと、幸雄の動きが止まった。

「なんだよ幸雄、振り向くなり固まって……って、んんん！」

志郎も幸雄を茶化しながらその女性の方を見ると、驚きのあまり動きが止まった。

「あの、お二人ともどうなさったんですか？私の顔に何か付いてるでしょうか？」

そう言つて困惑する、志郎たちとほぼ同世代と思われる凛とした顔つきの混じり気の無い黒の流れるようなロングヘアの少女を見て、志郎たちは記憶の片隅から湧き出てきた言葉をほぼ同時に口にした。

『お、お鶴……さん？』

そう、幸雄たちが伝説のカリスマメイド『ミナリンスキー』を一目見ようとやつて来たメイド喫茶で働いていた『お鶴さん』と他の客から呼ばれていたメイドと瓜二つ……というかそのまんま本人だったのだ。

「……な、なんでその名前を……!?!いや、よく見るとあなた達、この前ミナリンスキーさんが絡まれていた時にあの娘を助けようとしていた……!」

少女の方も志郎たちのことを覚えていたらしく、彼女もまた驚きを隠せない様子であつた。

「いやー、まさかお鶴さんとこんなところでもう一度会うことになるとは思つてもみな

かつて」

幸雄が何とも言えない空気を変えようと話を始めた瞬間、

「その名前で呼ばないで!!」

と彼女は凄まじい速さで幸雄との距離を詰めて彼の口を押さえた。

「な、何故にそこまで……。」

幸雄が理由を聞くと、

「私は周りの人たちにはないしよであの店に働いてるんです……!だからそれがバレるのが恥ずかしくて……。」

彼女は顔を赤らめて理由を語った。

「とは言っても名前が分からなくてはどうか呼ばいいのか……。」

志郎がそう反論すると、

「あ、そうですね。自己紹介が遅れてしまいましたね。私は鶴崎つるさき 渚なぎさと言います。サイトの方では『瀬戸内の鶴』って名乗らせてもらっています。」

彼女……渚は自己紹介をして頭を下げた。

「俺はさつき名乗ったが『比興者安房守』ってもんだ。名前は武藤 幸雄、かつては真田 昌幸だったものだ。」

「俺はついさつきサイトに入ったばかりで幸雄の友人の『四郎』だ。名前は諏訪部 志

郎、かつては武田勝頼だった。」

志郎と幸雄も渚に対して自己紹介をした。

「幸雄さんに志郎さんね、よろしく!」

「それにしても鶴崎さんの正体ってなんなんだ?」

「いやいや志郎、そこは流石に察せられるだろ。お前歴史音痴じゃないだろ?」

「『瀬戸内の鶴』だから……。まさか!」

志郎は少し考えてみると結論がすぐに浮かび、驚いた。

「そう、私の前世での名は『大祝おほほり鶴つる』。鶴姫って言った方が通りがいいかしら。」

「鶴姫って、あの瀬戸内海の大三島の鶴姫なのか!?でも鶴姫って架空の人物じゃ……!」

志郎は渚の正体を知って動揺した。何せ彼女の正体である大祝 鶴姫は架空の人物だという説が根強く、戦国時代についていろいろ調べてる志郎もまた、そう考えていたのだから動揺するのも当然である。

「いやあ、俺も初めて聞いたときはおったまげたもんさね。なんせ伝説上の人物だと思つてた奴がこの世に実際に存在するんだからな。」

「ふふ、『事実』は小説より奇なり』って言うからね。それに私たちの存在そのものが奇妙だしね。」

「はは、確かにその通りだ。」

そう志郎が言うのと三人は揃って笑いだした。

「そういえば主催は幸雄さんなのよね？ どうしていきなり集まろうなんて言い出したのかしら？」

「ああ、それなんだが実はな……。」

志郎と幸雄は自分たちが音ノ木坂学院で、sのサポートをしていること、そしてA—R I S Eと接触し、その際に自分たちが普通の人間でないことを見破られたこと、そしてA—R I S Eは志郎たち以外にも『転生者』が存在することを知っていると、そのありのままに話した。

「……とまあ、これが俺たちの知ってる全てだ。」

「流石に三人も転生者の存在を自分から明かすのではなく同じ人物に『見破られた』のは流石にヤバイと思っただな。そんなわけで他の転生者たちにも見破られうる可能性を教えて……ってどうしたんだ渚さんよ、少し顔色が悪いぜ？」

志郎たちの話を聞いていた渚の表情は若干引き攣っており、少し青ざめてるようにも見えた。

「べ、別に具合が悪いわけじゃないんだけど……。実は、そのA—R I S Eが知ってる

転生者って私のことなの……。」

『な、なんだってえええええ!!』

渚が告げた衝撃の真実に、志郎たちは思わず叫んでしまった。

「マジか！マジなのか!?!」

「ええ、マジなのよね……。」

「とういか渚さんはどういう経緯で綺羅ツバサに正体を見抜かれたんだ!?!」

「うう……。実は私、UTX高校の三年生なのよ。ツバサや英玲奈、あんじゅとは一年の頃からクラスメートだったの。」

「まさかのA—R—I—S—Eと同級生……!」

「しかも呼び捨てだぜおい……。」

「彼女たちとはそれなりに仲は良いのよ。でも去年彼女たちに問い詰められたの、あなた達と同じようにね。私はツバサの勤の強さは知ってたから隠すことは出来ないし、ツバサたちになら話してもいいかかって思ってた話したのよ。」

「なるほど。話したのは脅迫ではなく渚さんの同意があつての上だったのか。」

「確かにこの前はプライバシーの都合でことであんたの事は存在を示唆しても詳しいことは全く話さなかったな。」

志郎たちは渚の話を聞いてこの前のA—RISEとの邂逅の時に話したことを思い出した。

「はじめは正体がバレて変な風に思われたらどうしようって思ってたんだだけ、その時のツバサたちは真面目に話を聞いてくれたし、ちゃんと信じてくれた。だから私は今でもあの3人とは仲良くさせてもらってるわ。」

「・・・あの日以来あの3人を警戒していたが、あんたの話を聞いたところA—RISEの奴らが俺たちに悪意があるわけでは無いことはよく分かったぜ。」

「ああ、そうだな。」

渚の話を聞いた志郎と幸雄は胸をなでおろした。

「どうやらこれでこのオフ会の目的は達成しちゃったみたいだけどどうするの?」

「いや、まだ終わってないぜ渚さんよ。俺たちが集まる理由はもう一つあるんだ。」

「もう一つの理由?」

「そう、それは・・・。」

『それは・・・!?!』

幸雄の言葉に志郎と渚は息を呑んだ。

「それは・・・、実は他の転生者たちとじかに会って色々話がしたかっただけなんだよな

!!」

『ズコー!!』

志郎と渚は幸雄の言葉に、昭和風なズッコケをしてしまった。

「それだけにあんな勿体付けるか普通!」

「まあまあ、俺もリアルで会う転生者が志郎だけじゃ少しつまらんからなあ。」

「確かに交流を広げるのも悪くはないわよね。」

そうやって三人で和気あいあいと話していると、

「失礼、その六文銭のバッジを付けているのは『比興者安房守』さんで間違いはないな?」

と、一人の少年が幸雄に声を掛けた。見たところはこれまた志郎や幸雄とほぼ同世代で、体つきは少しばかり筋肉質な志郎と志郎より華奢な幸雄の中間といったところで、柔和な目つきはどこか鷹のような鋭さを感じさせる、幸雄とは少し違う形で掴み所のない様子だった。

「おう、いかにもそうだが。」

「次は一体だれが来た・・・って、な!?!」

「どうしたよ志郎、そんな驚いて。」

幸雄は飄々と返事をして振り向くが志郎の反応を見て、何かあるかと察した。

「ほお、まさかこんなところで諏訪部と会えるとは思ってなかったな。」

幸雄に声を掛けた少年は志郎を見て少し感傷的な声を出した。

「ああ、俺も驚いてるよ北村……。まさかお前も転生者だったなんてな。」

「世の中何があるか分かったもんじゃないな。」

北村と呼ばれた少年は笑いながら志郎に応える。

「なあ志郎、あいつと知り合いなのか？」

幸雄が志郎にたずねる。

「ああ、音ノ木坂学院に来る前に通ってた学校のな。クラス自体は別々だったけど。」

「なるほど。まあ感動の再会の中悪いんだが、一応誰なのか名乗ってもらえると嬉しい

んだが……。」

幸雄が北村という少年に名を聞くと、

「俺はあのサイトでは『獅子の息子』と名乗っている、北村きたむら 政康まさやすだ。その諏訪部志郎

とは少しばかり仲良くさせてもらってたものだ。」

彼は堂々と名乗った。

「北村、それでお前の前世はなんだ？」

志郎がたずねると、

「ふん、相変わらず察しが悪いな諏訪部。俺……いや、我こそは関東王たる相模の獅子

の血を受け継ぐ東国の覇者……。北条氏政よ!!で、お前の方こそ何者だったんだ?」

政康はさらに意気揚々と名乗りをあげ、志郎に正体をたずねた。

「氏政だと……!?俺は……。武田勝頼だ!!」

志郎は政康の正体に驚きつつも、負けじと堂々と名乗る。

「まさか……!」

「こんなところで……!」

『再び会いまみえるとはな……。!』

二人の間に尋常じゃない空気が流れ出した。

「ね、ねえ。あの2人、なんだかすごい雰囲気になつてるんだけど……。!」

「あー、そうだよなー。そりやかつての宿敵だったから鉢合わせりやこうなるよなー。」

2人の様子を見て心配する渚をよそに、幸雄はのんきな様子だった。

まさかの前世における宿敵同士の遭遇で一気に空気が張り詰める転生者のオフ会。果たして無事に終わることは出来るのか、そして残り3人の参加者はいったい何者なのだろうか……。!?

27話 将星、秋葉原に結集す 中編

「北条……、氏政ア……！」

「武田……、勝頼イ……！」

幸雄が催した転生者のオフ会にて志郎は音ノ木坂学院に来る前に通っていた高校で面識があつたという北村政康と再会した。しかし、互いの正体がかつての宿敵であるを知つてから二人の間にはまさに一触即発な空気が流れていた。

「ねえ、あの2人を止めなくていいの？」

その様子を見て渚は幸雄に仲裁させようと話しかけるが、

「いやー、俺も勝頼さまに属して氏政に散々苦汁を舐めさせてきたし、天正壬午の乱で裏切つたり、あと叔父上……矢沢頼綱があいつの軍勢ボコボコにしたりとかしてたから多分俺が行つたところで火に油を注ぐ様なもんだと思うぜ？」

幸雄はそう言つて取り合おうとしなかつた。

「ええ……。」

渚は幸雄の言動にドン引きしつつも彼の言葉も正論だと思つて成り行きを見守ることにした。

「氏政アああああ!! 貴様ア! なくにぬけぬけとこの時代に蘇つとるんじゃああああ!!」

先制攻撃を仕掛けたのは志郎だった。志郎は怨嗟の言葉を投げかけながら大振りの右ストレートを政康の顔面に叩き込もうとするが、なんと政康はその一撃を受け止めてみせた。

「ふん! んなもん不可抗力だからどうにもならんわボケ!! それよりも言いたいことがあるのはこつちの方だ!! 大体貴様、そつちから同盟強化してくれて持ち掛けてくるもんだから妹の桂を嫁にくれてやったのに、『御館の乱』で金と領地で買収されるとかどういう事だオラアアアアア!!」

政康は志郎の拳を受け止めつつそれを弾き、これまた怨嗟の言葉を投げかけながら反撃に出た。

「うるせえ! こつちは火の車だつてのに援軍要請する方がおかしいんだよ!! そりゃ謙信公の遺産である金や信濃の上杉領をただで接収することが出来るなら応じるに決まってるだろ!!」

志郎は政康の反撃をいなし、さらに拳のラッシュを叩き込む。

「そのせいで三郎が雪深い越後で死ぬ羽目になったんだぞ!!」

政康は恨み言を吐きながらそのラツシユを弾き、捌き、受け流す。

「そんなに弟が大事ならお前が越後に行け!!」

「だ〜か〜ら!!それが出来たら援軍なんか頼まねえよ!!こつちは佐竹ら北関東の連中がうるさくて動けなかったんだよ!だから氏照と氏邦を送ったんじゃねえか!!あと桂が決めたこととはいえ自害に巻き込んだのも許してねえからな!!」

「お前桂からの手紙読んだのかマジで!?俺だつて桂を死なさぬよう使者に桂の事を頼もうとしたが頑としてあいつは首を縦に振らなかつたんだ!!しかも最期まで側にいさせて欲しいだなんて言われたらどうすることも出来んだろ!!」

2人は互いに言いたいことを言い合いながら拳の応酬を繰り返して続けた。

「すごいわねあの2人……。ほぼ互角じゃない。」

「志郎の身体能力がイカれてるのは知ってるが、氏政……。じゃなくて北村があそこまでやるとは……。しかも志郎の攻撃をあそこまで凌ぐとは、まるで小田原城のような鉄壁ぶりだな……。」

幸雄は2人の戦闘を見て政康の戦闘能力を冷静に分析してみせる。

「くそ……。氏照や氏邦ならともかく何故氏政にこのような戦闘センスが……。!?この俺が攻めきれないなんて……。」

「ふん、俺とてこの時代で色々鍛え上げたからな。貴様のような攻撃力こそ持たんが、守りに入りさえすればざつとこの程度なら余裕で捌けるくらいには成長したのよ。」

「どうやら志郎が攻撃に特化してするように政康は防御に特化している戦闘スタイルを持つているようだ。」

「で、どうする勝頼？このままやり続けると目立つし、それに俺たちは同じ転生者だ。あまり面倒ごとを起こさない方が後々楽になると思うが・・・。」

「そうだな。俺もあまり面倒ごと・・・特に暴力関連は起こしたくない。その停戦、受けようじゃないか。」

志郎は思ったよりあつさりと政康の停戦要請を受けた。

「あら？意外とあつさりと終わったわね。」

渚はその様子を見て目を丸くした。

「まあ、勝頼さまと氏政は盟友にして宿敵つつう間柄だからなあ。それにこの時代でも互いの正体を知らなかったとはいえそれなりの関係があつたのを見る限り、互いに意図は分かつてんだろ。」

「幸雄もかつて真田昌幸として、志郎もとい勝頼と同じく氏政とはそれなりに関係があつたのでこういう展開になるであろうことは予想の範疇だった。」

「停戦ついでに一つ聞かせてくれ。桂は・・・我が妹は、俺を恨んでいたか？俺を呪つて

死んでいったのか？ただそれが聞きたい。」

政康は志郎に、勝頼の妻であり、自身の妹であった桂（北条夫人）が自分に対してどのような想いを抱いて死んでいったのかをたずねた。

「・・・少なくともお前のことを憎んではいなかったよ。帰ろうと思えば帰れたけど武家の女として夫と運命を共にしたいと言っていた。お前と敵対することになった時も、それが乱世の定めだと言っていたよ・・・。」

志郎は政康に、妻が抱いていた気持ちをそのまま伝えた。

「そうか・・・。それが聞ければ満足よ。すまんな『志郎』。」

「いいってことよ、『政康』。」

政康は志郎に簡潔に感謝の気持ちを伝えた。互いの呼び方が出会った時は苗字呼びだったのが名前呼びに変わったのは、この一連のやり取りの中で、改めて二人の間に強い絆が芽生えたのかもしれないが、それを知るのは志郎と政康の二人だけである。

「よう、終わったか戦バカども。」

「ふん、貴様には言われたくないな。それに貴様にも言いたいことが山ほどあるぞ真田。」

「俺も政康に同意だが、言いたいことは後にしよう。それで幸雄、他の連中は？」

志郎が政康を諫めつつ、他の参加者が来てるかどうかを幸雄にたずねる。

「いんや、まだ来てねえな。残り3人のうち1人は遅れてくるのは確認済みなんだがあの2人は……。」

幸雄が頭を掻きながらそう言うのと、

「いいや、ハッパにいるよ。」

と、幸雄の後ろから何者かの声が聞こえたのでその場にいた4人がハツとして声のした方を向くと、そこには小、中学生らしき少年が立っていた。

「嘘、いつの間に私たちの後ろに!?!」

「まさか歴戦の兵つわものだった幸雄と渚の背後を取るなんて……。この少年……。一体どれほどの名将の転生者なんだ……!?!」

志郎は誰にも気づかれずに幸雄と渚の背後に立っていた少年に対し、畏怖を抱いていた。

「……とりあえず聞くがよ、お前さんは何者だ?俺はこのオフ会の主催者である『比興者安房守』こと武藤幸雄つてもんなんだが。」

幸雄が少年に名を聞くと、

「その六文銭の家紋にそのHNを聞いたところ、君はあの『表裏比興のもの』、真田安房

守昌幸のようだね。僕は君とは世代も国も違うから直接出会うことはなかったけど、愉しそうな人で安心したよ。」

少年は名を答えず、逆に幸雄の正体を見抜き楽しそうに笑っていた。

「おい、俺はお前さんの名を聞いてるんだがよ。」

「ああ、ごめん。僕はこのオフ会の参加者の『越前の遊興王』、本名は『あさくらよしかげ』だよ。」

「おいおい、俺が聞いたのはこの時代での名前だけ？あんたの正体はHNから大体察しがついていたから別に言わんでも……。」

「何言ってるの。『あさくらよしかげ』はれっきとした僕の本名だよ。……ああ、口で名乗るだけじゃ誤解されるね。漢字で書くとこうなるんだ。」

少年はそう言うと、1枚のメモを出して幸雄たち4人に見せた。その紙には

『浅倉良景』

と、書かれていた。

「え、これマジ？」

と、幸雄が聞くと、

「うん、マジだよ。いや〜びっくりしちゃうよね。まさか自分のかつての名前とこの時代に生まれ変わった時につけられた名前が漢字が違うとはいえ同じものになっちゃう

なんてね。」

と、良景と名乗る少年はケラケラと笑い、

「というわけで改めて自己紹介するよ。僕は浅倉良景、あのサイトでは『越前の遊興王』って名乗ってて、前世はあの朝倉義景だよ。ちなみに年齢は12歳で小学6年生だよ。」

と淡々と自己紹介をした。

「まあ予想はしていたがやはりほぼ同じ時代に生きた者であってもこの時代に転生した時期は違うものなんだな。」

政康がそう言うのと、

「そうみたいだね。見たところ僕が一番若いみたいだし。」

と良景は相槌を打った。

「まさかあの朝倉義景だったとは……。それを恐れた俺は一体……。」「ん、そつちの君はどうしたんだい?」

良景が志郎に話しかけると、

「俺は義景どのにはいろいろ言いたいことがあるぞ!!」

と志郎がいきなり叫んだ。

「お、こんどはどうしたんだ志郎?」

幸雄がそれに乗っかり始めた。

「忘れたとは言わせんぞ義景どの！あれは元龜3年（1572年）の父上の西上作戦の時、父上からの要請を無視して積雪だの部下の疲労だのを理由に勝手に越前に退いたこと・・・あれのせいで織田への勝ち筋を失くしたことは明白だ!!」

志郎が良景を責めているのは武田信玄が信長と戦うために西に向けて軍を進めた西上作戦の際に、信玄、浅井長政、そして義景の3人の軍勢で織田軍を包囲して攻める寸法だったのだが、その最中に義景が先ほど志郎が言ったように独断で一足先に撤退してしまっただのだ。信玄はこれに怒って同盟相手である本願寺顕如を通して義景に出撃を要請するも義景は動かず、そのままグダグダになって、信玄はそのうちに病死してしまっただのである。もしここで義景が帰らなければ信長を討てたかもしれないというのは今でもよく言われている話だ。

「お、それは俺からも物申させてもらいたいもんだな！」

幸雄もまた武田家の家臣であり、信玄のお気に入りでもあったので志郎と共に抗議したくなるのも不思議な話ではなかった。

「ああそれね。それに關してならこつちも言い分があるから弁解させてもらおうかな。」

良景はそんな2人の様子を気にかけることなく弁解を始める。

「まず越前に帰った理由なんだけど、そもそも越前が雪国だったのは知ってるよね？」

「ああ。」

「そりや俺たちもそれぐらいは知つとるわい。」

「うん。でもね、越前の雪つて凄いんだよ。建物とかが埋まりそうになるくらいヤバいの。もう近江との間の道が通れなくなるレベルでさ、兵糧とかいろんな物資が運べないんだよ。それで冬を越せつてのは無理な話じゃない？兵士だつて絶対納得しないよそんな事。」

「だ、だが上杉軍は秋になるたびに関東にやつて来て冬を関東で何回も越してきたぞ?!」「あれすごい迷惑だつただけだな。」

志郎は越前と同じ雪国である越後の上杉謙信の軍勢を例に出し、その一番の被害者ともいえる政康は当時を思い出して何度も頷いた。

「はあ……。そもそも越前と越後の豊かさの違いを考えてから言っておくれよ。」

良景は志郎の言い分を聞いてため息をついた。

「そもそも上杉の連中が関東に遠征してるのは農業が出来ない冬の間に兵士たちを食わせるための戦いだろう？それに比べて越前は僕や父上、お爺様が豊かにしてたおかげでそんな面倒なことを毎年しなくていくらいには余裕があつただよ。」

「なるほど、確かに越前は『北陸の京』つて言われるくらいには反映してると言つてたな……。そりや足利義昭が頼るわけだわ。」

「うぐぐ．．．。確かに甲斐や信濃に比べれば越前は国力があるからな．．．。」

義景の言い分を聞いた幸雄や志郎はそれに納得していた。

「さて、じゃあここからは僕が言いたいことを言わせてもらうね。信玄は僕の撤退を怒ったって聞くけど怒りたいのはこっちの方だったんだよね。」

『なに!』

その言葉に志郎と幸雄は意外そうな表情をした。

「そもそもこっちは後ろに一向一揆がいる中で長政と一緒に、君ら武田軍が動くまでの2年間の間はずっとほとんど休みなしって言ってもおかしくないくらい信長と戦い続けてたんだよね。金ヶ崎、姉川、本願寺への救援に行った宇佐山城攻め、延暦寺に籠った志賀の陣．．．。武田が動き出すまでに大きな戦で4回、そして小規模な戦いも含めると10回や20回は余裕で超えるだろうね。」

良景は指折りしながら同時に信長と戦った回数を思い返していた。

「冷静に聞いてみると凄いな朝倉家。」

「正直ここまでは聞いてると信長包囲網のMVPって浅井長政さんと朝倉義景さんのコンビな気がしてきたわ。」

「まあ実際あの2人が死んでから包囲網も割とグダグダっぽかったしな。」

話を外側で聞いている政康と渚は他人事のようにそんな話をしていった。

「まあそんなわけでごっちは信長と真劍に何回もやりあつてたわけなんだよね、しかも毎度毎度遠征してさ。近場の長政はともかくごっちは遠征するためにいろいろ金とか掛かつてるんだよね。僕たちが必死こいて戦つてる間にごっちは何してたのさ？」

『・・・駿河を取るのに尽力してたり小田原とか攻めてました。』

志郎と幸雄は良景に問われると、目を逸らしながら答えた。

「あれ？ごっちは天下無敵の武田軍なんだよね？それなのに駿河を完全に制圧できたのつていつだったけ？」

「だいたい永禄13年（1570年）頃だ。我が父氏康が病に倒れたあたりだな。」

政康が良景に入れ知恵をする。

「ごっちが死ぬ気で織田とやりあつてたのにごっちは駿河一国の平定に勤しんでたんだねえ。んでしかも動き出したのはごっちが財政的にも兵士たちそのものも疲弊してきた頃だつてのにごっちの都合を考えもしないでぼつと出の信玄に戦えつて言われてもねえ・・・。」

「なんか色々父上が・・・じゃなくて武田家がホント色々すいませんでした。」

「流石の俺もこれはぐうの音も出ねえわ・・・。」

良景のあまりにも整合性のある言い分に志郎も幸雄も土下座するしかなかった。

「義景どのつて父上の話やこの時代での評価を見るに結構無能な者かと思つたら実は俺

より有能なんじゃないか・・・？」

「いやあ、それほどでもないよ勝頼どの。ただ僕は乱世というおもちゃ箱で遊んでたに過ぎない愚者さ。まあ内政に関しては真面目にやってたけど戦の方は景健や景鏡にほとんど任せつきりだったしね。」

「二つ聞きたい、義景どのにとつて信長との戦はどのようなものだったんだ？」

「うーん、難しいね。僕は昔やこの時代を通していろんな遊びをして過ごしてきたけど、信長との戦いもまたなかなか面白いものだったと思ってるよ。ただあの頃の僕はまだまだ怠け者だったから戦に関しては信長に追い詰められるまでは手抜きばかりして真面目に鍛錬もしてなかったけど、やっぱり信長と直接戦えたら最高に面白くて愉しかったんじゃないかって思うよ。金ヶ崎の時なんかもそうだったし。」

「遊び・・・だと？」

「うん、人間いつかは死ぬんだからどうせ生きるなら愉しく生きたいでしょ？だからどんなめんどくさい事も『遊び』だって思えばなかなか面白おかしく、そして愉しく生きられるよ。実際越前の内政も面倒だったけど、『どうせ楽しむなら一乗谷や越前に住む皆で愉しめればいいや』って思ったらなかなか愉しいものになったよ。」

「(一)いつ・・・。この炯眼を以てしてもなかなか真意が読めん。朝倉義景・・・、無能なのか有能なのか分からん男だ。戦では確かにほとんど出陣することもなかったが、比叡

山を要塞として利用したことや、浅井が攻められた際に浅井との連絡が絶たれた時に素早く撤退を決意したのを名将揃いの信長の家臣たちのほとんどが予測できなかったのを考えると、ひよつとしてそれなりに有能なのではないかとも思うが・・・。

幸雄は志郎と良景のやり取りを見ながら良景の人物像の分析を行っていた。だが、彼の炯眼を以てしても良景の真意を暴くことは出来なかったようだ。

志郎と幸雄の武田主従コンビと良景による論戦が終わって少し経ち・・・。

「あ、すんませ〜ん！その六文銭のバッジ、『比興者安房守』さんつすよね!!」

今度は活発そうな少年が幸雄に声を掛けた。

「ああ、いかにもそうだがお前さんが『RTO』か?」

幸雄がたずねると、

「ああ、俺は『RTO』って名乗ってる大岩 夢路ゆめじって言うもんだ!ちなみにこの時代に生まれ変わる前は長宗我部 盛親として生きてました!!15歳の中3でつす!!」

と『RTO』と呼ばれた少年もとい夢路は快活に自己紹介をした。

『RTO』って何なのかしら・・・。

「ああ、それは『浪人ティーチャー大岩』の略つすよお姉さん!俺は土佐を取り上げられた後、大坂の陣が始まるまで14年もの間京で子供たちに『大岩 祐夢』って名前で手

習いを教えてましたからね！」

「やはり源次郎の知り合いだったか。」

「あ、そう言えば『比興者安房守』さんって左衛門佐の親父さんつすよね！大坂の戦じゃああいつには色々世話になったもんですよ！それにしてもあの左衛門佐の親父さんに会えるなんて、夢にも思わなかったぜ!!」

夢路は嬉しそうな様子で幸雄の手を握った。

「いやーこういうのは悪い気がせんなあ!!」

幸雄も満更でもない様子だった。

「さて、これで参加者は大方揃ったな。」

「おい、あと一人いないぞ真田。」

「さつきも言ったが残りの一人は遅れてくることになってる。とりあえず俺たちは先に会場に向かうことになっている。」

幸雄は主催者としてこの場を仕切り始めた。

「なあ幸雄、最後の一人って誰なんだ？せめてHNぐらいは教えてくれないんじゃない？」

「ああそつか、他のみんなは参加する奴を知ってるがお前はまだあそこに入りたてで知らなかったな。最後の参加者のHNは『ボンボン中納言』だ。」

「ボンボン中納言?」

「ああ、中納言を名乗ってるだけあってなかなかの大物だぜ。」

幸雄はそう言つてニヤリと笑つた。

「そんじやみんな、手近なファミレスで予約を取つてあるからそこで会食とする。行くぞー!」

『おお!!』

幸雄が音頭をとると、他のメンバーはそれに応えてか幸雄と共に歩き出した。

(大祝鶴姫に北条氏政、朝倉義景に長宗我部盛親……。時代も生まれもバラバラな連中が集まつたが、果たして『ボンボン中納言』とは何者なんだ……。?)

志郎はまだ見ぬ参加者の正体に思いを馳せながら幸雄たちの後に続いて歩きだした。

遂に始まる現代に生まれ変わった戦国武将の転生者たちの宴……。果たしてこの会合がどのような結果を生むのだろうか。それはまだ誰も知らない……。

28話 将星、秋葉原に結集す 後編

なんだかんだで集合場所に集まった志郎たちは、幸雄が予約を取っていたファミレスに移動し、そこで会食をすることになった。

「はい、そんな訳で互いに自己紹介も済んだことだし本来なら出会うはずもなかった俺たちが一堂に会するのは類を見ない奇跡だつてことでそれを祝して乾杯したいと思いまーす。」

「いよ！待ってました!!源次郎のオヤジ殿！」

「御託はいいからさつさと乾杯しろ真田。」

「うるせーなー、今からするんだつてば。んじやあ色々急かされてるし、1人遅刻してる奴がいるけど気にしないで乾杯するぞ！では勝頼さま…じゃなくて志郎！音頭は任せた!!」

「はあ!?何で俺が!?!」

いきなり乾杯の音頭を任された志郎は動揺した。

「いやーだつていくら俺が主催者だからつてなあ。やっぱここは主である志郎に華を持たせるのが筋かと思つたんだが。」

「ええ……」

「確かに音頭をとるのに相応しい大名と言えば消去法で俺か志郎になるが、主催者たる真田の主である志郎に任せるのが妥当だな。」

政康が幸雄に同意する。

「あ、そこは良景くんと夢路くんスルーしちゃうんだ……」

渚が苦笑いしながら言うと、

「いや、僕はそういう面倒くさいの苦手だから別にいいよ。」

「俺はそもそも大名つつつても一年ちよいしかやってなかったから微妙だから、勝頼どの……じゃなくて志郎さんでいいですよ！」

良景も夢路も志郎が音頭をとるのに賛成のようだ。

「あまりこういうのはやった事ないから不格好かもしれないが……。よし、では400と数年の時を経てこの時代に相見えた事を祝して、乾杯！」

『かんぱー……。』

志郎の音頭でみんなが乾杯をしようとした瞬間、

「すいません遅れました〜！その乾杯待ってください〜い!!」

と言つて一人の青年が志郎たちが座つてる席に駆け込んできた。青年は眼鏡を掛けており、少し気弱そうな雰囲気だが顔立ちは整つており、一言で言うとうと優男といった印

象であつた。

「随分とタイミングのいい登場だな、無論悪い意味でだが。何者だ貴様？」

興を削がれたからか政康は不機嫌そうにその青年に声をかけた。

「おお、なんだ思つたより早い到着じゃないか中納言どの。」

「ええ…、遅れるとは言いましたがなるべく皆さんを待たせないようにしようと思つたので…。その六文銭、『比興者安房守』さんですすよね？」

青年は肩で息をしながら幸雄に問いかけた。

『おうとも。俺が『比興者安房守』こと主催者の武藤幸雄だ。まあ俺の正体はわかるだらう。』

「なあ幸雄、この人が最後の参加者の『ボンボン中納言』さんなのか？」

「ああそうだ。どれ中納言どの、せつかくだからさっさと自己紹介してくれ。みんな早く乾杯したがつてるからよ。」

幸雄は青年に自己紹介をするように促した。

「私は『転生者の夢幻郷』で『ボンボン中納言』と名乗っている吉田てるひさ輝久という者です。前世は安芸毛利家の当主にして長州藩の藩祖の毛利輝元でした。」

青年こと輝久は自己紹介をすると丁寧ていねいに頭を下げた。

「中納言と聞いて何者かと思つたがまさかあの元就公の孫だつたとはな…。。」

志郎は意外そうな表情をしていた。

「志郎は誰だと思つてたん？」

「うむ、中納言でボンボンつて言うのと徳川秀忠あたりかと思つてた。」

「あく、なるほどね。確かにそう思うわな。」

幸雄は志郎の解答を聞いて頷いた。

「でもすごいわね、まさか東の大国である北条家の当主と西の大国である毛利家の当主が一堂に会するなんて。」

渚が政康と輝久を交互に見ながら言うと、

「えつと、そちらの方が前世では北条家の当主だった方ですか？」

「ああそうだ。俺の前世は北条氏政である。弟が世話になつたな輝元どの。」

政康はニヤリと笑いながら輝久に語りかけた。

「なんだ政康、お前の弟と輝元どのに何か所縁があるのか？」

志郎が政康にたずねると、

「もちろん、所縁があるのは氏規さ。なあ輝元どの？」

政康が輝久にそう言うのと、輝久の顔がみるみる青くなつていく。

「え、ええ……。そうですね……。」

返事をする輝久の目は泳ぎまわつていた。

「何があったし。」

「ふん、氏規が上洛した際にこやつが『田舎者と食事するなんて片腹痛いわ』なんぞのたまつて氏規を笑つたと本人から聞いてな……。」

幸雄が理由を聞くと政康はそう答えた。志郎は政康から軽く殺気が漏れてるのを察した。兄弟仲が良かったとされる北条氏政からしたら弟が侮辱されたのはブチ切れ待つたなしの案件だったのでだろう。

「その節はホントすいませんでした!!でもあの時はホントに腹が痛かつたんです!!」
輝久が土下座せんばかりの勢いで謝りだす。

「ごめんで済んだら惣無事令なんぞ要らんわ!!腹イタはしようがないとして笑つたのは事実なんだろう!?!」

「うっ、事実です……。ですがあの後隆景叔父上に盛大にシメられたのでほんとに反省してるんですつてばく!!」

毛利輝元は、叔父であり教育係でもあった小早川隆景に度々折檻されながら育つたことが記録に残っており、どうやら本人の弁ではその後も隆景に折檻されたようであった。

「まあまあ政康、本人もこう言つてることだし許してあげてもいいんじゃないか?」

「ふん、流石に俺もそこまで鬼ではないわ。まあその後に報いを受けたのならばこちら

としても溜飲が下がるからな。」

政康は志郎の仲介や輝久の当時のその後の話を聞いて怒りを収めた。

「んじやあとりあえず気を取り直して乾杯しますか！」

「そうだな。じゃあ乾杯！」

『かんぱーい!!』

「だからあ！あそこで秀元どのと広家どのが動いてくれたら俺ら長宗我部隊も暴れられたんですよ!!」

「しようがないじゃないですか！こつちもまさか広家が内府どの（徳川家康）に内通してゐるなんて思いもしないですよ！」

「まったく少しは統制ぐらいまともに取れねえのかよ！せつかくこつちは上田で秀忠の隊を足止めしてたつつうのによ！」

「うう、それは・・・。」

乾杯してからしばらく経った頃、幸雄と輝久と夢路が激論を交わしていた。

「なんか疎外感を感じるな。」

「しょうがないわよ、私たちはとつくに死んでたんだから。」

「俺の甥っ子の氏盛とか旧臣達が参加してたのはみんな知らんよな。」

「うちなんかだいたい朝倉滅亡と越前の一向一揆のゴタゴタで一族と旧臣の大半が死に絶えたから生き残りがいるだけ御の字だよ政康さん。」

関ヶ原以前に死んでいた志郎、政康、渚、良景は、西軍の三人組をよそにのんびりと話していた。

「それにしてもよくよく見ると俺たち、ろくな勝ち組がいなくないか・・・？」

ふと志郎がそう言うのと、

「確かに負け犬揃いだのお。」

議論が終わったのか幸雄がメンバーの顔を見回しながらそう言った。

『あ、!?!』

これには志郎を含めた幸雄以外のメンバーが怒気を孕んだ声を出すのも無理のない話である。

「ちよつと待て真田。貴様なに他人事のように言ってるんだ。」

政康が抗議すると、

「いやいや、事実だろ。だってほら・・・。」

武田勝頼：織田信長に攻められ滅亡（甲州征伐）

北条氏政：豊臣秀吉に攻められ滅亡（小田原征伐）

朝倉義景：勝頼と同じ（一乗谷炎上）

鶴姫：陶隆房（晴賢）率いる大内水軍を撃退するも、兄と恋人の死を嘆き入水自殺

毛利輝元：長州藩を築くも、領地はほとんど没収される。おかげで後世に暗愚、凡将の評価を残してしまう。

長宗我部盛親：関ヶ原の戦いの戦後に改易。大坂の陣で豊臣方に参戦しお家再興を志すも敗北。落ち延びるも捕まり斬首。

幸雄はメンバーの末路を列挙した。

「確かに事実だがお前も大概だろうが!!」

「真田家はちゃんと残ったし俺自身も徳川軍撃退したから負け組じゃねーし!」

幸雄は政康に反論するが、

「でもお前最終的には九度山に追放されてそのまんまそこで寂しく死んでいったよな。」

「うぐっ!」

志郎に痛いところを突かれ、ぐうの音が出せなくなっていた。

「確かによくよく考えてみると負け組というかあまりいいとはいえない末路を辿ってる

者が多いな。」

「そう言えば俺はまだあの掲示板に入ったばかりで分からないんだが他にはどんな奴がいるんだ？」

「うーん、とりあえず呼んだけど来れなかったメンツだと三好長慶とか山中鹿之助とかがいるな……。」

「鹿之助どのはともかく日本の副王とまで呼ばれた長慶公もいるのか……。」

「まああの人は弟と息子を失ってるからね。」

志郎たちは他の転生者たちの事を語り始めた。

「ねえ、私それに関して思う所があるんだけど言つて良いかな。」

「ん？何かあるのか鶴崎さん。」

「ええ、これはあくまでも私の想像でしかないんだけどさ。私たちがこの時代に蘇つたのつて神様がチャンスくれたからなんじゃないかなつて思つてるの。」

「神様のチャンス？」

幸雄は首を傾げた。

「うん。ほら、私たちつて自分で言うのもアレなんだけどあまりロクな人生とは言えないから、神様が前の人生でロクな目に合わなかつた分の清算をさせてくれてるんじゃないかなつて思つてるの。」

渚がそう語ると、

「なるほど、清算ねえ。」

「まあ僕は前世も今も楽しんでるから関係ないけどね。」

「お家再興はもう叔父上の末裔がやってくれたからいいけど確かに楽しめなかったからな！」

「まあ、面白い考え方ではあるな。」

「清算か……。確かに渚さんの言う通りだな。」

志郎たちはこぞつて渚の考えに賛同した。

「あはは……。これはあくまでも私の考えだから……。そう言えば負け組じゃない転生者っているのかしら？」

渚は照れ臭そうに笑い、別の話題を切り出した。

「あ、それなら私に任せてください！」

そう言つて話に乗り出したのは輝久だった。

「そう言えば中納言どのも俺や志郎のように直接他の転生者と接触したことがあるんだつたな。」

「はい、多分今の時間なら通話を繋げられると思うので繋げてみますね！」

輝久は幸雄の言葉に応えながら、スマホの通話アプリを起動させる。

「その転生者って誰なんですか？」

志郎が輝久に彼と接触したという転生者が何者なのかをたずねた。

「私が出会った転生者の名前は熊田 広樹と言って、その正体は私の従弟の吉川広家だったんですよ。」

輝久が志郎の問いにあっけらかんとして答えると、

「血の繋がった親族が転生するんですか!？」

志郎は驚いた。

「まああくまでも親族だったのは前世の話で今は生まれた場所も育った環境も全然違う他人なんですがね。最初あった時は親族だった頃の名残なのかすぐに彼だと分かりましたよ。」

「流石は毛利家、三本の矢の教えの家なだけに親族の絆は時代が変わっても変わらないのね。」

「まあ、両川がいなくなった瞬間ガバガバになったがな。その点では我ら北条に劣るな。」

「もう、政康くんだったら空気読もうよそこは。」

「あつ、繋がりました! さっそく話してみましよう。おい広家……。」

輝久がスマホに向かって呼びかけると、

『おいコラ輝う!!てめえ仕事中に通話するんじゃあねえつて前にも言っただろうが!!』
と怒鳴り声が聞こえてきた。

「あ!すいません、そつちも休みかと思つたので……。ほら今日曜日じゃないですか。」
『あ!こつちは日曜だろうが休みなんざねえよ!こちとらやりたくもねえ子守で忙しいんだ。』

「子守?広家……。じゃなくて広樹、また職を変えたんですか?」

『変えてねえよ。一応こつちに雇われてからこの仕事一筋なんでね。』

「そう言えば広樹、実は今他の転生者たちと一緒にいるんですが……。」

『なに?俺たちの同類がそこにいるのか。』

「ええ、よかつたら何か一言……。」

『ふん。おい、そこにいるあんたら。顔は見えねえし名前も知らんがうちのボンクラ主君が世話になつてるな。俺は熊田広樹つてもんだ。俺の前世が何者だったかはそのボンクラから聞いてるだろ。』

「ボンクラつて凄いや言いだな……。」

志郎たちは広樹の輝久に対する態度に呆気に取られていた。

「言葉は乱暴ですが悪い奴ではないんですよ。この前まではヤクザに下つ端として所属していましたが……。」

『おい輝、余計な事言ってるじゃねえよ。』

「広樹さんってヤーさんだったんすか……。」

幸雄がそう言うのと、

『あくまでも昔の話さ。今は足洗ってるし、今の職場に雇われて転職する前にそこは潰しておいた。』

と広樹は返答した。

「ヤクザを壊滅させたって何をしたんですか……。」

志郎が引き気味に言うのと、

『潰したつつつても内部情報を洗いざらいに警察に匿名でリークしただけさ。』

「で、今はどこで働いてるんですか？」

『今はちよつとした縁で小原ってホテルチェーンの会長に雇われててな。今はそのお嬢の子守をさせられてんのよ。』

「小原……。ホテル……。マジか、調べてみたら海外にも進出してる大型のリゾートホテルチェーンじゃねえか！しかもその会長の子守って勝ち組確定コースじゃ……！」

政康は広樹の働いてる場所を調べて一人衝撃を受けていた。

『まあ、給料はいいがお嬢はお転婆だし、休みはないしで高給取りも楽じゃねえってこつ

たな。休みはヤクザだった頃の3分の1にも満たねえ。』

広樹はそう言つて乾いた笑いを浮かべた。

「というか広家どのは歳いくつなんすか？結構職歴凄いことになってるっすけど。」

『俺か？俺はそこにいるボンクラと同じ二十歳さ。大学に通つてる輝とは違つて高校中退してから即アウトロー入りよ。』

夢路の問いに広樹はどこか感傷的に答える。

「広樹、せつかく手に入った職なんだから途中でやめたらだめですよ。」

『うるせえな……。別にやめるつもりはねえよ……。つておつと、お嬢が帰つて来たな。そんじやあ切らせてもらうぜ。』

「はい、仕事頑張つてくださいね！」

『はいはい。ああ、あと輝は次会つた時は一発シバかせてもらうからな。』

「なんで!？」

『決まつてんだろ。大事な休憩時間を世間話で費やしちまつたからだよ！じゃあな!!』

その言葉を最後に通話は途切れた。

「なんつーか、けつこう破天荒な人だったな。」

「ああ、かつての徒弟だったとはいえ元主君に対してあの態度だからな。」

「二十歳とはとても思えない経歴の持ち主だったわね……。』

志郎と幸雄と渚は半ば呆然としていた。

「そうかな。僕の場合は景鏡なんか露骨に『朝倉の当主に相応しいのはこの私だ！』なんて言つてたから親族が素直に従つてくれるだけありがたいと思うけどね。」

今までほぼ我関せずな状態だった良景が口を開いた。

「そう言えば広家どのは今じゃ『毛利を改易間近に追い込んだ裏切り者』か『毛利を救つた忠義者』かで評価が分かれてるけど輝元どのからしたらどうなんすか？」

関ヶ原で成り行きであるとはいえ毛利家と共に西軍についた夢路は輝元にたずねた。「そうですね……。はじめは彼の行動を恨みはしましたが長州に入ってから時間が経つほどに彼の行為が毛利のためにどれだけ大きかったのが骨身にしてみえてきましたね……。それに彼のおかげで幕末には私たちの子孫が200年越しに徳川を破ることができましたからね。」

夢路の問いに輝久は何とも言えない面持ちで答えた。その表情には様々な感情が入り乱れていた。

(毛利輝元……。暗愚な君主とこき下ろされてはいるものの、あの怒りに感謝、そして野心が見え隠れする表情はどう見てもそんじよそこらの凡人にできるもんじやねえ……。環境が環境だっただけに自らの才を磨くことが出来ず、祖父のような謀略の才も、父のようなやるときはやる決断力こそ受け継がれはしなかったが、やはり彼も毛

利の当主に相応しい策士だったんじゃないかねえかな。生まれが違えば恐らく底の見えない策士になっていただろうな……。良景とはまた違った意味で掴み所がねえ奴だ。」

幸雄は彼の表情から輝久の掴み所の無さを感じ取り、

（自分で言うのもなんだが、少なくとも俺は輝元どのよりは武将としての才は間違いないく優れていた。だが将としての才が劣っていた輝元どのがなぜ大名として俺より優れていた理由がなんとなく分かった。あれは父上や穂乃果のような強烈なカリスマではなく、『ほつ』といっておけない』と人に思わせることができる『徳』があるのだ。だから毛利が没落した後も益田元祥や毛利秀元、清水景治といった能臣が献身的に毛利を支え続けたのだらうな。広家どのもあんな態度をとってはいるが彼もまた輝元どの『徳』に惹かれたからこそ、のちに裏切り者と誹りを受けることを分かったうえで毛利を守るためにあの行動に出たのだらうな。）

志郎の方は、輝久からにじみ出る『人の上に立つ者の才』を感じ取っていた。

「そう言えば輝久さんって二十歳ってことは大学生なんですよ？ 将来はどんな仕事をしようと思ってるんですか？」

渚は輝久に将来のことをたずねた。実に高校生らしい質問である。

「一応教師を目指してますね。」

『え!?!』

「・・・そんなに驚かなくてもいいんじゃないですか?」

志郎たちのリアクションに輝久は苦笑いする。

「いやだつて、ねえ・・・。」

「ああ・・・。」

輝久以外のメンバーは言葉が濁してはいたが輝久が教師に向いてない、と言いたいは表情から見て明らかだった。

「何故輝久さんは教師を目指そうと?」

志郎がたずねると、

「塾の講師のアルバイトを高校生の頃にやっていたんですが、その時に教えていた生徒の子から『先生の教え方すごく分かりやすい!』って言ってもらえたことがあるんですよ。その時思ったんです、『こんな私でもできることがあるんだ!』ってね。それから教師になるために猛勉強してるんです!」

輝久は今までの弱気そうな雰囲気ではなく、自信満々な様子で語った。

「なるほど、確かに輝久さんの人柄なら皆から好かれる教師になれると思いますよ。」

志郎は輝久にそう言った。それは自分よりも人を惹きつける才に長けた者に向けた

敬意の言葉でもあった。

会食は夕方になるまで続き、気が付けば17時になっていた。

「じゃあ、参加者の中に小学生がいるってことでとりあえず今日はこの辺で解散だ！」

幸雄は主催者として再びメンバーを仕切った。

「実に面白くて楽しい会合だったよ。またやれるといいね。」

「いやーなかなか面白い組み合わせだったな！このメンバーで戦場を駆けられたら楽しかっただろうなあ。じゃあなあ！」

「またどこかで会えるといいですね。」

「いや、輝久さんと僕はいずれどこかでまた会うと思うよ。」

「え？それってどういうことですか？」

「さあね。」

良景と夢路、そして輝久はそう言って駅に向かっていった。

「じゃあね、志郎くん、幸雄くん。またどこかで会いましょう。」

「ああ、またメイド喫茶で・・・あべし！」

幸雄は渚にひっぱたかれていた。

「志郎、このあと空いてるか？」

「どうしたんだ政康、藪から棒に。」

「お前に話したいことがあるのだ。俺たちの学校のことだな。」

「……。」

志郎は政康の言葉に息を呑んだ。

「分かった。行こう。」

志郎は覚悟を決めた表情で政康に応えた。

「じゃあ志郎！俺はしばらくアキバを散策して帰るわ！」

「ああ、また明日な幸雄。」

幸雄は志郎と別れると秋葉原の喧騒の中に消えていった。

「なあ志郎。今は楽しいか？」

「なんだよこんなところでいきなり。」

オフ会が終わって解散した後、志郎と政康はある公園に来ていた。

「お前のことを気にかけてる奴がいるんでな、それで聞いてみただけさ。」

「・・・秋山か。あいつはどうだ？元気にしてるか？また誰かにいじめのターゲットにされてないか？」

志郎は脳裏に浮かんだ旧友の現状を政康にたずねた。

「質問に質問で返すんじゃない。まあ、あいつもお前がいなくなったことで自分の身は自分で守るべきだと考え研鑽を積んでいる。少なくともお前がいた頃よりはたくましくなってるさ。」

「そうか・・・。ならよかった。」

政康から旧友の近況を聞いた志郎は安堵のため息を漏らした。

「で、結局どうなんだ？」

「ああ、楽しんでるとも。向こうが少しばかり退屈だったせいかこっちは刺激的な事ばかりさ。」

「そうか。しかし羨ましいぞ志郎!!」

「な、なんだよいきなり叫んで。」

「お前はあの μ s がいる学校に通ってるんだぞ！しかもあそこは生徒数が少ないからメンバーの誰かと同じクラスになってる可能性も高いし、羨ましいことこの上ないぞ!!」

「なあもしかして政康・・・。お前まさかあいつらのファンだったりするの？」

志郎が恐る恐る政康に質問すると、

「如何にも！俺はμ sのファンだ!!それより貴様！μ sに対してあいつらとは何様だ!!」

政康は堂々と答えてさらに志郎に詰めよる。

「いやだって、俺と幸雄はあいつらの・・・μ sのサポートをしてるんだからそうなるだろ。」

「な、な、ななな・・・。なにいいいいいい!!? μ sのサポート役だど!!?」

志郎の言葉を聞いた政康は今までの態度からは想像できないような素っ頓狂な叫び声をあげた。

「羨ましい！羨ましすぎるぞ貴様あああ!!」

「落ち着けよ政康。ちなみに推してるメンバーは誰だ?」

「推しメンは園田海未さんだ！余談だが俺はμ sが3人だった頃から応援してるぞ！」

「3人だった頃って、最初の頃からじゃねえか!!しかしお前にそんな趣味があったとはな・・・。」

志郎は政康がμ sのほぼ最古参と言って良いほどのファンだったと知って驚きを隠せない様子だった。

「まあ俺とて元々スクールアイドルに興味があつたわけではないが、真田の奴に掲示板で勧められてな。」

「あいつネットで布教活動してたのか……。海未を推してると言つたよな。サイン頼んでやろうか？」

「いや！それはいい。俺は貴様の施しは受けん！彼女のサインを受け取るならばこの俺が自ら『サインをください』と礼を尽くして頼むべきだからな!!」

政康はそう言つてドヤ顔でふんぞり返る。

「ははは……。ファンの鑑だなお前は。それより、こんな世間話をするためにわざわざ二人つきりになつたわけじゃあないんだろう？本当の用件はなんだ。」

志郎はひとしきり笑うと、武田勝頼だつた頃の険しい表情で政康を睨んだ。

「……。お前に忠告しておきたいことがあつてな。」

「忠告だと？」

「ああ。お前、退学の原因となつた騒動で殴つた奴らのこと覚えてるか？」

「ああ、確か7人ほどだつたか。今でも忘れられないくらい不快な連中だつた。」

「お前が追放されたも同然の形で転校していった後の奴らがどうなつたか教えてやろうか？」

「……。頼む。」

「お前がボコボコにしたスクールカーストの上位だった連中の大半はお前に対してトラウマができたらしくお前の名前の一部を聞いただけで慌てふためくようになっていた。だがお前が転校してからはその症状も収まり、校長から釘を刺されたのにも関わらず連中は以前と変わらずカーストの下位に位置する奴を虐めて楽しんでた。もちろん、今まで以上に教師から隠れてな。」

「クズめ……。」

志郎は不快感に顔を歪める。

「まあ本題はここからよ。そこで秋山と俺が手を組んでいろいろ調べあげた結果、いじめ以外にもまあ色々やつてる証拠が出てきてな。校長にそれを突き出してやったら見事に全員退学になりおったわ。」

政康はニヤリと笑いながら話した。

「あの秋山があいつらを追い詰めただど!？」

「さつきも言ったがあ的事件をきっかけに秋山はかなり成長した。あいつはなかなかの大物になるぞ。」

「それで、忠告ってなんだ？」

志郎は政康の言っていた『忠告』が何なのかをたずねる。

「うむ。貴様に恨みを抱いてる奴がいる、思い当たりはあるはずだ。」

「俺に恨み……。神崎か……。!」

志郎の頭に浮かんだのは、秋山を虐めていたカースト上位組のリーダーとも言える、『神崎』という男の顔だった。

「察しがいいな、その通りだ。神崎は他の連中が貴様に対するトラウマが植え付けられたのにもかかわらず全く平気だったし、何より問題なのは退学させられてからだだった。」

「退学させられてから?何かあったのか。」

「ああ、神崎は退学させられた後もそれを認めずに学校に押し入ってきてな。『何もかも全部、諏訪部が悪いんだ!!あいつのせいで俺はこんな目にあっただぞ!!』って喚き散らすのだ。」

政康はその状況を思い出しながらため息をついて言った。

「逆恨みもいところだな。自分が蒔いた種であろうに。」

志郎もまた呆れながらそう言う。

「それだけならいいんだが、実は秋山が神崎に闇討ちされてるんだ。」

「なんだと!?!秋山は大丈夫なのか!!」

「心配には及ばん。秋山の奴は2度といじめられぬように体も鍛えていたからなんとか抵抗し、人が通りかかったので大事に至ることは無かった。」

「そうか、秋山は無事だったか。」

「ヤツは去り際に『いつか諏訪部とてめえを血祭りにあげてやる!!』って言っていたそう
だ。」

「俺と秋山を血祭りにか・・・。」

「ああ。」

「なあ、政康。神崎と秋山は転生者なのか?」

志郎は神崎と旧友の秋山も自分と同じ転生者なのかをたずねた。

「転生者の見分け方は俺はお前が去った後に知ったんだが、どうやら気配が違うらしい。」

「気配だと?」

「ああ。この時代の人間に比べると俺たちの気配はかなり研ぎ澄まされてるらしい。まるで刃物のようだとのことだ。」

政康が言うには、転生者と普通の人間とで気配が違うらしい。

「どこで聞いたんだよそんな話。」

「あの掲示板に杉谷善住坊の転生者がいてな、そいつがそう言っていたのだ。」

「杉谷ってあの信長を暗殺しようとした甲賀の忍びの?」

「ああ。忍びが言うのだから間違いはあるまい。それで俺も二人の気配を探ってみたが二人ともこの時代の人間と同じ気配をしていた。」

「そうなのか。」

「だがヤツを侮らないほうがいいぞ。」

「分かつてる。神崎はあの時唯一俺に頑強に抵抗していたからな。傷こそつかなかつたがなかなか危うい場面もあつたし、何より頭も切れるらしいからな。」

「とにかく神崎は動き出している。気を付けたほうがいい。」

「分かつてる。奴との因縁は俺の手でケリをつけなければならぬからな。」

「それだけじゃない、神崎の目的はお前への復讐だ。ひよつとしたら、sが狙われる可能性も……。」

「それ以上言うな。」

志郎は威圧感を孕んだ声で政康の言葉を遮った。

「……忠告はしたぞ。」

「ああ。」

「まあ、何かあつたら連絡しろ。知恵の一つくらいは貸してやる。」

「すまない、恩に着る。」

志郎はそう言つて公園から去つていった。

（あの学校から追放されてなお、過去と向き合わねばならぬとは……。もしヤツが、

Sを狙うとならば、俺はそれを断じて阻止してみせる！)

志郎はいつの間にか日が沈み、月の出ていた空を見上げながら心の中で決意した。

新たな仲間との出会いの影に、志郎のこの時代における最大の危機の種火が迫りつつあつた。

29話 合宿へ行こう!

志郎と幸雄が他の転生者たちと出会ったオフ会があつた日からまたしばらく経つた8月の中頃、今日も、sの練習が始まる…はずだったのだが…。

「あつついゝゝ…。」

「そうだねゝ…。」

学校の屋上に激しく照り付ける日光を浴びたにこと穂乃果が今にも干上がりそうな声でぼやいていた。

「ていうか馬鹿じゃないの!?!この暑さの中で練習とか!」

「そんな事言つてないで早くレッスンするわよ!」

「は、はい…。」

暑さに耐えかねてにこが文句を言い出したが、絵里はそれに構わず練習を始めるように促す。すると花陽は絵里の厳しい口調に驚いてしまったのか凜の後ろに隠れてしまった。

「あ…。花陽、これからは先輩も後輩もないんだから。ね?」

「…はい。」

それを見た絵里が花陽に優しく語り掛けると、花陽は安心したのか凜の後ろから顔を出して返事をした。

(やはりどうにも学年の壁があるっぽいな志郎。)

(ああ、これからスムーズにやってくにはもう少しフランクな関係になって円滑なコミュニケーションを取れるようになっておきたいんだが、希先輩はともかく絵里先輩は今までの印象がまだ残ってるせいかな一年生組、特に花陽がまだ慣れてないようだな。どうしたものか……。)

志郎と幸雄はその様子を見て二人で対策を練るために話していた。

「そうだ！合宿行こうよ!! あく、何でこんないい事早く思いつかなかったんだろ〜!」

「はあ? 何を急に言い出すのよ。」

いきなり穂乃果が合宿に行こうという提案を出したが、にこはその突拍子の無い提案に呆れた様子だった。

「合宿かあ……。面白そうにや!」

「そうやね! こう連日炎天下で練習だと体もきついし。」

「でもどうして?」

凜と希は乗り気な様子だった。そして花陽がどこに行くのかをたずねると、

「海だよ!!夏だもの!」

と穂乃果は答えるが、

「費用はどうするのですか?」

「海未の言う通りだ。合宿に行くとなればまず宿泊費を確保しなければいかんだろ。」

と海未と志郎に予算はどこから出すのかを聞かれると、

「それは・・・。」

と言つて考え込んだが、何かを思いついたのかことりの腕を引つ張つて皆から離れ、

小声でことりにたずねた。

「ことりちゃん、バイト代いつ入るの?」

「ええ〜!」

そんな二人の様子を見た海未が呆れたように

「ことりをあてにするつもりだったんですか?」

と言つたが、

「違うよ!ちよつと借りるだけだよ!」

と穂乃果は反論した。

「それちよつとだけじゃ済まさない奴じゃないか・・・。人としてどうなんだそれ。」

「どつからどう見てもろくでなしの発想なんだよなあ・・・。」

それを聞いた志郎と幸雄はドン引きしていた。

「そうだ！真姫ちゃんなら別荘とかあるんじゃない!?」

穂乃果はまたアイデアを思いついたのか真姫に別荘があるかを聞いた。

「あるけど……。」

と真姫がそつげなく答えると、

「ほんと!?真姫ちゃんお願〜い!!」

と穂乃果は目にも止まらぬ速さで真姫に飛びつき、自分の頬を真姫の頬に擦り付けほおずりしながらおねだりしだした。

「ちよつと待って!どうしてそうなるのよ!!」

「そうよ。いきなり押し掛けるわけにもいかないわ。」

真姫と絵里の反対にあつた穂乃果は、

「そう、だよね……。ははは……。」

と涙目で残念そうに笑った。そして真姫が周りを見渡してみると他のメンバーも少し期待している表情だったのでため息をついて、

「仕方ないわねえ。聞いてみるわ。」

と言った。

「ほんと!?やったあ!!」

すると穂乃果は全身で喜びを表現するかのようになり、両手を挙げてくるくると回った。

(真姫って実はちよろい?)

(そりや今さらだぜ志郎。ろくでもない男に引つかからなきやいいんだがな……)

志郎と幸雄がその様子を見て、また2人でひそひそと話していた。

「そうだ、これを機にやってみようと思った方がいいかもね。」

絵里は何かを思い出したかのようにそう言った。

『?』

凜と花陽がそれを聞いて不思議そうな顔を見ると、絵里は2人の顔を見て何も言わずに微笑んだ。

(さく、生徒会長どのは何をやる気なのかねえ……)

幸雄もまた、絵里が何かしようとしているのを察して口元をニヤリとさせた。

そして合宿当日、μ'sのメンバーと志郎と幸雄は集合場所の東京駅にやって来た。「さて。みんな揃ったことだし、合宿に行く前にみんなにやって欲しいことがあるんだけどいいかしら。」

メンバーが全員集合すると、絵里がそれを確認してからそう言った。
「？」

それに対して穂乃果たちは頭に？マークを浮かべたような表情をしている。
「やって欲しい事ってなんですか？」

志郎がみんなを代表するように絵里にたずねると絵里は、

「ええ、実は『先輩禁止』をしようと思ってるの。」

と言った。すると穂乃果は

「ええええ!!先輩・・・禁止!!」

と驚いた。普通の高校生ならば、先輩からいきなりそう言われて驚くのも無理のない話である。

「先輩禁止か・・・。しかし突然だな。」

「ああ。絵里先輩、それは一体どういう事なんですか？」

志郎が絵里に理由をたずねると、

「前からちよつと気になってたの。先輩後輩はもちろん大事だけど、踊ってる時にそう言うの気にしちゃだめだからね。」

と絵里は説明した。

「確かにそうですね。私も3年生に合わせてしまう所がありますし・・・。」

海未が絵里の言葉に同意すると、

「そんな気遣い全く感じないんだけど。」

とにこが不満げな顔で海未の言葉にかみつく。

「それはにこ先輩が上級生って感じがしないからにや。」

「上級生じゃなきや何なのよ!」

にこが凜の言葉に反発すると、凜は少し考え込んでから、

「うゝん、後輩?」

と言うと、

「ていうか子ども?」

「マスコットかと思ってたけど。」

「くそっ!先に全部言われちゃった!」

穂乃果と希はそれに便乗し、幸雄は悔しそうに指を鳴らした。

「どういう扱いよ!というか幸雄も悪ノリしてんじやないわよ!!」

とそれに対してにこはキレのあるツッコミを入れる。

「じゃあ早速今から始めるわよ、穂乃果。」

「あ、はい!いいと思います!え・・・え・・・絵里ちゃん!!」

始まると同時に指名された穂乃果は少し戸惑った様子を見せたが、思い切って呼んで

みて絵里の反応を伺ったが、

「うん！」

と絵里がにこやかに返事をする、安堵のため息をついた。

「はあく、なんか緊張〜！」

「じゃあ凜も〜!!」

次は凜が名乗り出た。

「ことり・・・ちゃん？」

凜は緊張をほぐすために深呼吸してからことりを呼んだ。

「はい、よろしくね凜ちゃん。真姫ちゃんも！」

ことりは凜に対していつものように笑顔で応え、こんどは真姫を指名した。

「え？」

まさかここで指名を受けるとは思ってたなかった真姫が周りを見回すとこの前のように、

『じ〜〜〜』

とみんなから期待の眼差しを受けてることに気付いた。

「へいへい、早く早くう。」

しかも志郎と幸雄も加わっており、幸雄に至ってはニヤニヤ笑いながら急かす有り様

であった。

「べ、別にわざわざ呼んだりするもんじゃないでしょ!？」

真姫は少し顔を赤くしてそう言った。

「それと諏訪部くんと武藤くんにも協力してもらいたいんだけどいいかしら。」

絵里が志郎と幸雄にそう言うのと、

「まあ俺たちもアイドル研究部の部員だしな。これに乗らない手は無いよな、絵里。」

「そんじゃあ絵里たちも俺らの事はフレンドリーに呼んでくれよな!」

と2人は快諾した。

「ええ、よろしくね。志郎に幸雄!」

絵里もまた2人に応えて呼び捨てで呼ぶ。

「志郎くんと幸雄くんすごい! 私緊張したのによくあつさり呼べたね!」

穂乃果は志郎と幸雄の『先輩禁止』に対する適応の早さに舌を巻いた。

「そうか?」

「それほどでもねえさ。」

志郎と幸雄は軽く返事をするが、

(「そりゃあ俺たちは少なくともお前らの三倍は長く生きてるからなあ・・・」)

と内心では苦笑いしながらそう思っていた。

「では改めて、これから合宿に出発します。部長の矢澤さんから一言。」

「え、え!?!にこ・・・??」

にこはまさか自分に矛先が向くとは思っていなかったのか素つ頓狂な声を出して驚いた。

『じ～～～～。。』

全員からの期待がこもった眼差しを受けたにこは覚悟を決めたのか、みんなで作っていた円の中に入る。

「しゅ・・・しゅ・・・しゅっば～～～～っ!!」

「・・・それだけ?」

「考えてなかったのよ!!」

あまりにも捻りの無い言葉だったので穂乃果が唾然としながら言うも、にこは抗議した。

「まあ、何はともあれ出発しよう!」

『おおく!!』

それを仕切り直すかのように、にこに代わって志郎が音頭を取った。

「ちよつと!あたしの役取らないでよく!!」

——そして真姫の別荘にて。

『おおおおお・・・!』

「すごいよ真姫ちゃん!!」

「さつすがお金持ちにゃ〜!!」

真姫の別荘を見た志郎たちはその威容に度肝を抜かれ、穂乃果と凜は真姫に賞賛の言葉を贈る。

「そう? 普通でしょ?」

真姫がさも当然であるかのように答えると、

「ぐぬぬぬぬぬ・・・!」

と、にこが悔しそうに唸っていた。

「なんでにこは唸ってるんだ?」

「さあな。まあ、大方嫉妬の類だろ。」

志郎と幸雄は、別荘に入っていく穂乃果たちに着いて行きながら、後ろで唸っているにこの方を向きながら話していた。

『おおおおく!!』

「こことくつた!」

穂乃果と海未、凜、そして志郎の4人は別荘の2階の寝室に来ており、穂乃果は我先にとベッドに飛び込み、その柔らかさを堪能するかのよう転がりまわる。

「おお!ふつかふかく!!それに広ーい!!」

そして穂乃果に続くように凜もベッドに陣取った。

「凜はこつちく!海未先輩と志郎先輩も、すぐく気持ちいいよ!・・・あ。」

「やり直しですね。」

「だな。まあ、ゆつくり慣らしていけばいいさ。」

凜が思わず海未と志郎を先輩呼びしたが、2人は優しく微笑みながら言うと、

「うん!海未ちゃん、志郎くん、穂乃果ちゃん。」

と穂乃果を含めた3人を先輩無しで呼んだ。

「・・・ぐ。」

それに呼応するかのようには穂乃果はいびきをかいた。

「寝てる!」

「そんなあやとりと射撃だけが取り柄の落ちこぼれじゃあるまいし・・・。まあしばらくほっとけ。」

海未は穂乃果の寝るまでの早さに驚き、志郎は苦笑いしながら呆れていた。

一方1階では……。

「料理人!」

「そんなに驚くこと?」

にこが驚きの声を上げると、真姫はそれに対して首を傾げていた。

「驚くよお。そんな人が家にいるなんて、すごいよね?」

ことりがその場にいた幸雄とにこに同意を求めた。

「まあ少なくとも世間一般の家庭にやあ、料理人なんていねえわな。」

(金持ちって奴あ、どうも感覚がズレてんだなあ……。)

と幸雄は心の奥で乾いた笑いを浮かべながら皮肉つぽく、こどりの言葉に答える。

「ぐつ。へ、へえ、真姫ちゃんちもそうだったんだあ。にこんちも専属の料理人がいるのよね〜!だからにこお、全然料理なんかやったことなくてえ……。」

にこは真姫に対抗するかのようになんぞり返り、ドヤ顔で答えていたが、

(嘘乙。声と顔でバレバレだつちゆうに……。)

声が若干震えてると、少し目が泳いでるのを見て、幸雄はそれを一発で嘘だと見破ったがあえて黙っていた。

「へく！にこ先輩もそうだったなんて・・・！」

ことりにはこの言葉を本当だと思ってるのかそう言うが、

「にこにーでしょ。にこ先輩じゃなくてにこにー。」

にこはこたりの言葉を遮るように彼女をたしなめた。

「了解、にこにー（笑）。」

こたりの代わりに幸雄が返事をする、

「ちよつとあんたはなんで語尾に（笑）付けてるみたいに言うのよ!!」

とにこは幸雄に抗議してみた。

「にこなら練習も出来そうね。」

絵里が広いリビングを見回しながらそう言う、

「そうやね。でもせっつかくなんやし、外の方がええんやない？」

と希は絵里の言葉に答えながら、ふと疑問に思ったことを絵里にたずねた。

「海に来たとはいえ、あまり大きな音を出すのも迷惑でしょ？」

「もしかして歌の練習もするつもりなのか？」

2階から降りてきた志郎が、話を聞いていたのか絵里の言葉に反応した。

「もちろん、ラブライブの出場枠が決まるまであと1ヶ月無いんだもの。」

絵里は不敵に笑いながら志郎に対してそう返した。

「ほう、やる気だな。」

「えりち、気合入つとるねえ。ところで花陽ちゃんはどうしてそんな端にいるん？」

希は絵里の様子を見て嬉しそうに笑うと、後ろを向いて、階段の側にある観葉植物の陰に隠れている花陽に声を掛けた。

「なんか広いと落ち着かなくて……。」

花陽は希にそう言うと、恥ずかしそうに身を潜めた。

「ははは……。花陽らしいな。」

志郎はそんな花陽の様子を微笑ましそうに見て言った。

そして、荷物の片づけを済ませて練習着に着替えた後……。

「これが合宿での練習メニューになります！」

海未はそう言つて窓に貼り付けた練習メニューが書かれた紙を指さした。

「おお。」

「すごい……。こんなにびっしり……。」

希とことりは圧倒されるように声を出した。それもそのはず、一日目は遠泳10km、

ランニング10 km、腕立て腹筋20セット、精神統一、発声、ダンスレッツスン。2日目は遠泳15 km、ランニング15 km、腕立て腹筋20セット、発声、ダンスレッツスン、精神統一・・・と円グラフ状に書かれていたからだ。

「なあ、志郎的にはこれってどうなのさ・・・。」

幸雄は顔を引きつらせながら志郎にたずねた。

「うーん。まあ俺なら出来ないことは無いが、他のメンバーはなあ・・・。」

と志郎は海未以外のメンバーの顔を見回して言った。

「・・・って海は?！」

穂乃果が不満げな声で海未にたずねた。

「私ですが?！」

海未はそれに対してきよとんとしながらかえした。

「いやこの場合お前さんの事じゃないだろ。」

と幸雄がツツコミを入れると同時に、

「そうじゃなくて『海』だよ!海水浴だよお!!」

と穂乃果が海を指さしながら言った。

「ああ!それなら。」

海未は合点があったのか手を打ち合わせると、笑顔で『遠泳10 km』の部分の指さし

た。

「遠泳10km・・・!?」

「そのあとランニング10kmお・・・!?」

それを見た穂乃果とにはドン引きしていた。

「最近、基礎体力をつける練習が減っています。せつかくの合宿ですし、ここでみっちりやっておいた方がいいかと!」

海未がそう力説すると、

「いやいや、お前さんトライアスロンでもやる気か?」

「それは重要だけど、みんな保つかしら・・・。」

幸雄はドン引きしながら、絵里は苦笑いしながら海未にそう言うが、

「大丈夫です! 熱いハートがあれば!!」

海未は目を爛々と輝かせながら、どこぞの日本一熱い元テニス選手のような事を言っている。海で遊ぶ気満々だったのか水着を既に着ていた穂乃果、にこ、凛の三バカトリオはげんなりしていた。

「やる気スイッチがイタい方向に入ってるわよ。何とかしなさいよ!」

「にこ、あれはイタい方向に入ってるんじゃないかね。根元からへし折れてやがるんだ・・・。」
幸雄はにこに対して死んだ魚のような目をしながら言った。にこは幸雄の幼馴染に

対する辛口評価に苦笑いしていた穂乃果も覚悟を決めたのか、
「う、うん。よし、凜ちゃん！」

と凜に合図を送った。

「分かったにゃー！」

凜は穂乃果に対して敬礼をすると、いきなり海末の手を取って明後日の方角に向かって走り出し、

「あー！海末ちゃんあそこー！！」

と、何かを見たかのように何も無い空の方を指さした。

「え？！なんですか？！」

海末はそれを真に受けたのか真剣にいるはずのない何かを探しだした。すると、

「今だー！！」

「行っけー！！」

と、穂乃果とにこが海に向かって走り出した。さらにそれに続くように凜が花陽の手を引きながら、そしてそれに便乗するようにことりも海へと走っていった。

「あ、あなた達ちよつとー！！」

海末が大声で呼びかけるも、走っていった5人はそのまま走って行ってしまった。

「まあ、仕方ないわね。」

「え? いいんですか絵里先輩? あ。」

「禁止、つて言ったでしょ?」

絵里がいたずらっぽく笑いながら海未の先輩呼びを指摘すると、

「すみません。」

と海未は申し訳なさそうに口を押さえた。

「μ s はこれまで部活の側面も強かったから、こんな風に遊んで先輩後輩の垣根を取るのも重要なことよ。」

と絵里は海未に対して優しく諭すように言った。

「そうそう、絵里の言う通りだぞ海未!!」

「ああ、厳しいだけでは人は付いてこないからな!」

と横から志郎と幸雄の声がするので、

「それはそうですが・・・。」

と海未が二人の方に振り向きながら言うと、

「!!???」

海未は目の前に映っていた光景に声が出ないほどの衝撃を受けていた。何故なら・・・。

「ん？海未は何を驚いてるんだ？」

「あ？そりゃあ決まってるんだろ。俺たちの肉体美に酔いしれてるんだろ。」

なんといつの間に着替えたのか志郎と幸雄は海パン一丁になっており、ボディビルダーのようなポージングをとっていた。ちなみに志郎はゴーグルを装備しており、片手には木刀、足元にはスイカといういでたちで、幸雄はシュノーケリング用のマスクとシュノーケル（口に着ける筒）、そして足ひれを装備していた。

「ふ、2人とも何やってるんですか!!」

海未が全力で目を逸らしながら突っ込むと、

「決まってるだろ！俺たちもこれから海で遊ぶんだよ!!」

「雲一つない晴天！照り付ける灼熱の太陽！白い砂浜！そして青々とサファイヤのように輝く海!!これだけ素晴らしい条件が整ってるといふのに、海で遊ばないなんてもったいなさすぎるぞ!!」

志郎と幸雄はかつて見たことないようなドヤ顔で答えた。

「そ、それは見ればわかります!!ですが何故ポージングなんて取ってるんですか！幸雄

のはともかく志郎のはなんか生々しすぎます!!」

海未は目をつぶって首を横に全力で振りながら言い返す。

「ちよつと海未さん!?!志郎に比べて俺の筋肉がシヨボいのは分かんんでもないけど傷つくよ俺さま!!」

「ははは、幸雄ももう少し鍛えることだな。」

志郎が腹筋をクネクネ動かしながら笑うと、

「いやああああ!!なんか破廉恥です!!」

と海未は頭を抱えながらそっぽを向いてしゃがみ込んでしまった。

「ハラシヨ．．．．志郎ってけっこう筋肉凄いのね．．．。」

絵里は志郎をまじまじと見ながら、

「志郎くんってけっこう着痩せする方なんやね。」

そして希は興味津々な様子で言うと、

「そうだな。着痩せしてるかどうかは分からないが、俺は小学生の頃からかなり鍛えてるからな。」

志郎は立派な力こぶを作りながら答えた。

「服を着てりゃあ、ただ体格が少しがっしりしてるように見えるだけだが、脱げば見えての通りの細マッチョとゴリマッチョの中間地点の?セゴリラだからな。」

と、幸雄が付け加える。

「幸雄は志郎と比べると身体能力じゃ一歩も二歩も譲るけど、筋肉はそれなりにあるのね。」

「俺は志郎と比べたら格落ちもいいとこだが、身体能力自体は平均的な男子高校生よりも若干高いからな。スポーツテストだと総合評価はだいたいBだったぜ。」

「それにしても、海に来ただけなのに2人ともはしやぎすぎじゃない？」

真姫が2人の話に割って入ると、

「そりゃあ俺は海に来たことが無いからな。」

と、幸雄は当然のように言った。

「確か幸雄は群馬から来たんですよね。」

ようやく目が慣れてきたのか海未が戻って来てそう言った。

「おうともよ。」

「じゃあ志郎くんはどうしてそんなにテンションが高いん？たしか地元は神田だよね。」

今度は希が志郎にたずねた。

「ああ。俺は幸雄とは違って海に行ったこと自体はあるんだが、ここの海みたいな綺麗などころは初めてでさ。つい舞い上がってしまったわけさ!!」

ともう一度ポージングを取りながら答えた。

(まあ、俺たちは中身は内陸育ちだから海を見るとテンションが上がっちゃうんだよね……。)

と志郎と幸雄は内心では苦笑いしながらそう思っていた。そうやって話していると、

「お〜い!」

「絵里ちゃ〜ん!海未ちゃ〜ん!!」

穂乃果と花陽が絵里たちを呼んでいた。花陽はまだ先輩無しで呼ぶのに慣れてないのか、若干声が上がっているが、精一杯慣れようとしている様子が分かる。

「は〜い!!」

と言って絵里は手を振ると、

「さあ海未、行きましょ!」

と海未に手を差し伸べながら言った。

「はい!」

海未はそう言って差し伸べられた手を取る。

こうして、μ'sと、志郎と幸雄ら11人によるアイドル研究部の合宿が幕を開けた。

30話 夏色バケーション

「おーい！早く早くー!!」

にこが呼びかけると水着に着替えた後、Sのメンバーが海へと走っていく。

「お。真姫はいかんのか?」

幸雄は穂乃果たちに混ざらず、ビーチチェアに座って本を読んでいる真姫に声を掛けた。

「私は別にいいわ。あなたこそ行かないの?」

「ああ、俺はPV撮影のカメラマンも兼ねてるからなあ。だから少しの間は海で遊ぶのもお預けつてわけよ。」

幸雄はビデオカメラで海で遊んでいる穂乃果たちを撮影しながら真姫の質問に答えた。

「でも志郎も向こうにいるわよ?」

真姫がそう言うって指をさした先では……。

「それー!!」

「やったな〜!」

そこでは穂乃果や凜、花陽にここが海で水をかけ合って遊んでいた。

「志郎くんも喰らうにや〜!」

「うわっぷ!!」

志郎が凜の攻撃を顔に思いつき喰らう。

「ふふふ、この俺を敵に回すとは……。なかなか度胸がある……。な!!」

志郎は顔を腕で拭うとその剛腕を海に突っ込み、力任せに大波を巻き上げて穂乃果たち4人にまとめて水をかけた。

「うわあ〜!」

「志郎さん、強いです〜!」

「す、すごいにや〜!」

「つーかなんであたしまで巻き込むのよぶぶっ!!」

ここに志郎に反撃しようとするも、

「えへへ……。」

と笑うことりの餌食になっていた。

「やれやれ、ことりも参戦か。戦いに男女は関係ないからな、手加減無用でいkおぼぼぼ!!」

さつきと同じようにことりにも水を巻き上げてかけようとするも、にこと同じように顔に水鉄砲の射撃を撃ち込まれた。

「志郎くんが怯んだ!」

「一斉攻撃よ! 凜と花陽も力を貸しなさい!」

「お返しにや〜!!」

「志郎さんすいません!」

水鉄砲を顔に喰らって怯んだところを、穂乃果たちによって集中砲火を叩き込まれる羽目になった志郎は、

「うおお! 5対1は流石にきつすぎる!! こうなったらいったん退いて態勢を・・・!」

志郎はそう言うとなんとかゴーグルを目に着けてそのまま海に潜って泳いで逃げた。

「あ! 逃げた!!」

「まで〜!」

もちろん穂乃果たちはそれを追いかける。志郎は穂乃果たちの方を見て泳ぎながら、(ふふふ、水を掻きわけながら歩いたり走るなんて泳ぐのに比べたら鈍足にもほどがあるわ! さて、そろそろ立って奴らを待ち受け・・・う!?)

とほくそ笑んでいると、何かにぶつかり志郎は驚いて立ち上がった。

「い、今俺は何にぶつかったんだ!? なんか柔らかいというか人肌のような感触がした

が……」

とゴーグルを外しながら周りを見渡してみると、

「……」

と顔を赤くしながら胸を押さえて志郎を睨んでる海末と、それを面白そうに眺めてる希、そして苦笑いしてる絵里がいた。

「すまん。どういう状況なのかを教えてくださいただけると幸いなんだが……」

既に水浸しながら冷や汗をかいている志郎は絵里と希に何が起きたのかをたずねた。

「希が海末のことを集中的にビデオに撮るもんだから海末は恥ずかしがってしゃがみ込んでたのよ。」

「そんでそのしゃがみ込んでるところに志郎くんが突っ込んできたわけやんなあ。」

絵里と希は笑いをこらえながら志郎に状況を教えた。

「なるほど……。して、俺は海末の背中にぶつかつたのか？それとも前……？まあ、海末の顔を見れば聞くまでもないんだろうが……」

と志郎が恐る恐るたずねる。

「……志郎さん？」

「は……!!?」

海末の今までに聞いたことのないようなドスの効いた声に志郎は思わず後ずさりし、

海未はそれに合わせて殺気を放ちながら迫ってくる。

「いくら私たちしかいないとはいえ海で泳ぐときは周りに気を付けるべきだと思うんです……。」

「お、おう。そうだな……。」

「それと、いくら志郎がわざとではないとはいえ乙女の柔肌に……しかもむ、胸に触れるなどと……！」

「ま、待て海未！これは事故だったんだ！話せばわかる!!絵里先輩！希先輩!!助けてくれ！」

志郎は絵里と希に助けを求めるが、

「あれ？先輩って付けるのは禁止って言ったやん？」

「ふふ、先輩禁止を守らない悪い子に助け舟を出すのは認められないわね♪」

あつさりと拒否されてしまった。そしてこの2人、恐ろしいことにこの修羅場を楽しんでる節があるようだ。

「よっ！ナイスラツキースケベ!!まあ海未の制裁はその代償だと思つて諦めなく！」

さらに砂浜にいる幸雄からは完全に茶化してるとしか言えない言葉が飛んできた。

「ふざけんてめええええ!!あとで覚えてろ!!」

志郎は幸雄に向かって怨嗟の言葉を叫び返した。

「さあ、もう言い残す言葉はありませんね．．．?」

海末が今にも志郎を仕留めんと両手を構えながら近づいてきた。

「ひっ!？」

「あなたは．．．。破廉恥ですツツツツ!!!」

「ぐほおおあ!!」

どうやったか志郎には、というか周りで見てた絵里たちも理解できなかったが志郎の顔に海水が砲弾のように撃ち込まれた。

「あ、海末ちゃんも志郎くんを攻撃してる!」

「混ざるにゃ〜!」

「なんかちよつと違うような．．．。」

穂乃果たちもそれに便乗して加わり、

「うちらも混ざろっか。」

「そうね、志郎には悪いけど面白そうだし。」

と希と絵里まで加わり、総勢8人によって志郎は強烈な水攻めを喰らうことになった。

——そして数分後。

「……う、うう。」

志郎はまるで荒波でもみくちやにされた藻屑のように砂浜に打ち上げられていた。

「お疲れさん志郎。」

幸雄は志郎に劳いの言葉をかけるが、

「マジで覚えてろよ昌幸イ……！」

と志郎はものすごく低い声で返す。それはまるで非業の死を遂げた怨霊の呪いの声のようだった。

「しっかしまあ、微笑ましいとは思わんかね。」

「何がだ？」

突然話題を変えた幸雄に対して志郎は首を傾げた。

「ああやつて女子高生が水着姿でキャツキャウふふと海で遊んでる姿だよ！志郎もそう思わないか!？」

「何を言い出すかと思えば……。」

志郎は幸雄の言葉に苦笑する。

「なんだよ、お前は見てて心が洗われないのか？あれを見てよお。」

「まさか、俺とてそれくらいは思うさ。だが俺が言いたいのは、お前が本当に何の下心も抱かずに見ているのかって事だよ。」

「あら？バレてらっしやる？」

「バレバレだよ。で、お前はその自慢の炯眼をどのように悪用してるんだ？」

志郎は笑いながら幸雄にたずねた。

「悪用ってお前なあ、自分の欲望を叶えるために自分の力を最大限に活用することは悪い事じゃないだろ！もちろん人に迷惑をかけなければの話だがな。」

「いや、確実に人に迷惑をかけそうなアレじゃないのか？」

「まさか！ただ個人で楽しむだけさ。お前も男だ、気になるだろ？」

「う……。気にならないと言えば嘘になるな……。」

志郎は顔を逸らしながら幸雄の問いに答える。

「よっしゃ。でもあまり具体的には言えないからヒントをやるよ。そこから俺が何を考えてるか当ててみな！」

「受けて立とうじゃないか。」

「よし。んじや、あそこで遊んでる奴らを並べるとだな……。希、絵里、花陽、ことり、穂乃果、海未、凜、にこ……。となる。さて、これは何順だ？」

「んん？何か規則性があるとは思えんが……。」

志郎は考え込むが、ふとあることに気がついた。

(炯眼……。有効活用……。希と絵里と花陽が先頭……。まさか!)

「幸雄、貴様それはバスト順ではないのか……。!?」

志郎は真姫に聞かれぬように幸雄に小声で答えを伝えた。

「お、ご名答! さすがは志郎、勘が冴えてるな! さっきのラッキースケベで覚醒したな?」

それに対して幸雄が茶々を入れると、

「やかましい! それにしてもビデオを撮る振りして何やってんだか……。」

それに対して志郎は呆れかえった。

「うるせえ! ちゃんと仕事はしてるし、こんなに美少女がたくさんいるんだからいいだろ別に!」

「いやよくねえから!」

「ちなみに聞いて驚くなよ? 俺の炯眼を以てすればバストサイズまで正確に見抜くことが出来るのだ! まず希から90、88、82、80、78、76、75、74……。じゃなくて71だな。」

と幸雄は海で遊んでるメンバーのバストサイズを言ってみせた。

「す、すげえ。本当かは知らんが見ただけでそこまで……。!」

これには流石の志郎も呆れを通り越して感心せざるを得なかった。

「まあ、水着という限りなく裸に近い状態だからこそできる芸当だけあってだんつてあべし!?! 何しやがる真姫!」

幸雄がドヤ顔で解説してるところに真姫が呼んでた本の背表紙を幸雄の頭に叩きつけた。

「何しやがるじゃないわよ全く。そつちこそ何変な事考えてるのよ。」

真姫はため息をつきながら言った。

「変な事とはなんだ! 俺はあくまでも健全な男子高校生として当たり前前の願望を叶えるだけであつてだな……。」

「そ、じゃあ当たり前前の事なら警察署でも弁明できるわよね。」

幸雄が力説すると真姫はどこからかスマホを取り出して110番通報をしようとしていた。

「お願いします真姫さん110番だけは勘弁してくださいお願いしますお願いします願います!」

それを見た幸雄は慌てて土下座して真姫に許しを乞いた。

(このプライドを捨てる早さがこいつが生き残った理由なんだろうな。)

志郎は土下座する幸雄を見ながら心の中で呟いた。

「まあ、別に私は物の数には入ってなかったから別にいいけど許しを乞う相手が違うんじゃない?」

と言いながら真姫は幸雄の後ろを指さした。

「え?」

と幸雄が振り向くと、

「へえ、そう言う事だったのね・・・。」

と不自然なくらいニコニコしてる絵里が立っていた。

「だからゆつきーくんもカメラ役を志願したわけなんやね。」

普段からニコニコしてる希の笑顔も若干不気味さが漂っていた。

「幸雄くん。そういうのはよくないと思うよ?」

ことりに至っては黒いオーラに『ゴゴゴゴ』の効果音が見えそうなくらいであった。

もちろんそれ以外のメンバーも三人に負けないほどの威圧感を放っていた。

「いや確かに俺がそういう考えを持ってたのは確かだが志郎も共犯・・・ってあら!? 志郎の奴どこ消えた!?!」

幸雄が弁明しながら志郎の方を見るといつの間にか志郎の姿は消えていた。

「志郎ならスイカ割り用のスイカと木刀を持ってくるって言っていなくなつたわよ?」

「ファツ!? あいつ逃げ足速すぎだろ!?!」

「さて、幸雄にもお仕置が必要ですね。」

と海未はそう言うと同時に幸雄の肩を掴んだ。

「ひっ!? やめろ! は、離せえ!」

幸雄はもがくも海未の手は離れない。

「海未ちゃん握力強いからね。志郎くんなら逃げられたと思うけど、幸雄くんは逃が

さないよ?」

「ちよ、穂乃果お前目が怖いって!」

「さして、このセクハラ野郎をどうしてくれようかしら?」

「やっぱ海だし海らしいお仕置がいいにゃ!」

あれよあれよという間に、幸雄は8人の少女たちに担ぎ上げられた。

「うわあああやめろおお! は、花陽! お前は助けてくれるよな、な?」

幸雄は花陽に助けを求めた。

「えつと……。ごめんなさい! 流石に擁護できません!」

と頭を下げられてしまった。

「よし、これで幸雄くんのお仕置きは決定だね!」

穂乃果がそう言うのと、

『わっしよい! わっしよい!』

と幸雄を祭りの神輿のように運び出した。

「志郎〜〜！助けてくれ〜！！」

幸雄が叫ぶと、

「悪いな幸雄〜〜！！それがお前の代償だ！！諦めてくれ〜〜！！」

と、遠くから志郎の叫び声が聞こえてきた。嗚呼悲しきかな、因果は思ったよりも早く巡って来てしまったようだ。

「やめろおおおお！死にたくなあああ！死にたくなあああああ！いいいいいい！！」
幸雄の断末魔が夏の砂浜に響き渡った。

——そしてまた数分後。

「むうう・・・。」

花陽は目隠しをしながら木刀を構えてゆっくり歩いていった。

「かよちゃん頑張れ〜！」

「いいよいいよ〜！」

凜と穂乃果はそんな花陽を応援し、希は花陽に念を送っているのか不思議なポーズを

とつていた。

「花陽！もう少し右だ！左じゃないぞ右だからな!!」

幸雄も花陽を応援しているがそれもそのはず、何故なら幸雄はスイカの真横に頭だけが見えるように埋められているからだ。下手をすれば木刀の一閃が脳天に直撃しかねないので必死に応援せざるを得ないのだ。

「ふふ〜ん。」

にこが何かを思いついたのか悪そうな笑顔を浮かべると、スイカのそばまで走り、「えいつ!」

と花陽が木刀を振り下ろすと同時にスイカを取り上げてしまった。手ごたえが無いのを不思議に思った花陽は目隠しを取つてにこの手にあるスイカを見て、

「ああ!」

と残念そうな声を出した。

「2人ともかわい〜!」

「流石はにこね!」

ビデオを撮っていたことりと絵里は満足げにそう言った。

「ベタなお約束ではあるが、やっぱこういう女子たちがやると映えるねえ。」

幸雄は地面から頭だけが出てる状態でうんうんと頷いているが、実にシユールな光景

であつた。

「さて、次は俺もやらせてもらおうかな。」

志郎は花陽から木刀を受け取りながら名乗りをあげた。

「おお、志郎くん木刀を構えた姿が様になつてる！」

「まるでお侍さんみたいやね。」

穂乃果や希が志郎を褒めそやす。

「でも志郎くんは運動神経がいいからだ目隠ししても意味ないし…、そうだ！そこからさらに15回回つてもらうにや！」

と凜が志郎に制約を加えた。

「ふふ、望むところだ。うおおおおお!!」

志郎はそれを受け入れると目隠しをしてから高速で回り始めた。

「あんなに回つて酔わないんですか？」

海末が心配そうに言うが、

「多分、志郎なら目が回つても多少は平気なんじゃないかしら。」

と絵里は言った。

絵里の予想は当たり、志郎は多少ふらつきながらも確実にスイカの方へと歩みを進め

ていた。するとここはさつきと同じくスイカを取り上げるべくスイカの隣で待ち伏せるが、

「ここ、志郎にそれは通用しないぜ。」

と幸雄がここに忠告した。

「は？ 見えないんだから分らないに決まってるじゃない。」

ここは幸雄の忠告に小声で反論した。

「あいつが何を習つてたかは聞いたことは無いが間違いなく武術の心得がある。多分スイカを取り上げても気配を感じて確実にスイカを割りに行くぞ。頭をスイカもろとも割られたくないきややめておいた方がいいぜ……。」

「気配ですって？ そんなの分かるわけ無いじゃない。」

ここは幸雄の忠告を無視してスイカを取り上げた。

（あくあ、やつちまったか。『諏訪部志郎』として武術を習つてたかは知らんが、志郎には『武田勝頼』だった頃に培つた武術の心得がある。恐らく目をつぶつてスイカを割ることなんざ造作もないだろう。）

幸雄は志郎が絶対にスイカを割るだろうという事を確信した。

そして志郎はスイカが置いてあつた場所に迫り着き、確実にスイカを叩き割るために足元のバランスを整えてから、木刀を上段に構えた。

(ふふん、志郎も馬鹿ねえ。スイカはそこじゃなくてにこの手にあるんだから割れるわけ無いじゃない・・・w)

にこはそう内心で呟きほくそ笑んでいた。しかし、

「・・・。」

志郎はひとたび息を吐くと上段の構えから八相の構えへと木刀の構え方を変えた。八相の構えとは野球のバツティングフォームのような構え方で、袈裟懸けという相手の左肩から右わき腹へ刀を振り下ろす斬り方につながるフォームである。さらに志郎は向きを真正面から少し左の方へと体をずらした。にこが自分の左に立っているのを感じているかのような動きであった。

「え、ちよ、志郎?嘘でしょ!」

志郎の構えが変わったのを見て、幸雄の言葉が嘘でなかったことを確信したにこは動揺した。

「ふうふう・・・!」

志郎が刀を振り上げ気合を入れ始めた。

「にこースイカをもう少し持ち上げろ!!顔の前ぐらいにだ!!」

「ハ、ハ、ハ?」

にこが幸雄の言う通りにスイカを顔の目の前まで持ち上げた瞬間、

「おおおおお!!」

という叫び声と共に――

――ブオオン!!

にこの目の前にあるスイカめがけて木刀が凄まじい速さで振り下ろされ、スイカが叩き割られた。否、スイカは刃物で切ったもののように綺麗に切れたわけではないが、それでも棒で叩き割ったにしてはやたら綺麗に割られていたので『斬り割られた』とも言うべきか。ちなみに割られたスイカの上の部分は下へ落ちたが、幸い皮が下になってたので実が砂まみれになることは無かった。

「にこちゃん大丈夫!」

その瞬間を目の当たりにした穂乃果たちは驚いてにこの元へ駆け寄った。

「は、ははは・・・。わ、私は大丈夫に決まってるじゃない・・・!」

にこはそう答えるが声は震え、足はがくがくと震えており、どこからどう見ても大丈夫じゃなさそうだった。

「そんな事より志郎! あんたなんてことしてくれんのよ!! あと少しであたしのこのプリ

ティーフェイスまでスイカと一緒にカチ割られるとこだったわよ!!」

と、顔にかかったスイカの赤い汁を拭かないまま志郎に文句を言った。

「ふう、すまんすまん。こう見えても俺はなかなか負けん気が強くてな。スイカを取り上げられ何も無い地面を叩いて恥を晒すよりは取り上げた奴の手の中にあるスイカを叩き割ってさらに場を盛り上げようと思っただんだがなあ……。少し刺激が強すぎたか？」

志郎は目隠しを取るとそう言っでにこに詫びを入れた。

「刺激どころか死を覚悟したわよ!!」

にこがそう言っで顔にかかったスイカの汁をまき散らしながら志郎に詰め寄ったが、「だから言っただじゃねえか、志郎には通じねえつて。まあこれに懲りたら下手な方法で志郎をからかうのはやめとくんだな。」

と、幸雄は顔以外が地面に埋まった状態でケラケラと笑った。

「まあまあ、とにかく志郎が割ってくれたスイカを食べましょ。」

絵里は地面に落ちたスイカの片割れを拾っでそう言っだ。

「お〜い! 真姫ちゃんもスイカ食べな〜い!」

穂乃果はそう言っでみんなから離れた場所にいる真姫を誘うが、

「え? 私は何に……。」

真姫はそう言つて誘いを拒んだ。

「なるほどね。」

「真姫はなかなか大変そうね。」

「ふふふ……。」

そんな真姫の様子を見ていた希と絵里が話していたが、希は絵里の方を見て少し笑つた。

「何かおかしい事言つた?」

絵里はきよとんとした顔で希にたずねたが、

「別に。」

と笑顔ではぐらかされた。

そして、海で遊び終わった志郎たちは別荘に戻り、リビングでくつろいでいた。

「買い出し?」

「なんか、けつこうスーパーが遠いらしくって。」

「じゃあ行く行く!!」

これから夕食の準備をしようといふところだったが、別荘には食料が備蓄されていたわけではなかったらしく、買い出しに行くことりが言い出すと、穂乃果がそれに同行しようとする。

「別に私が一人で行つてくるからいいわよ。」

「え？真姫ちゃんか？」

「私以外、お店の場所分らないでしょ？」

真姫はそう言つて一人で行くこととするが、

「だったら志郎を連れて行きな。この人数だから仕入れる食料もバカにならねえだろ？
だったら男手があった方が楽だと思ふぜ？それに用心棒代わりにもなるしな。」

幸雄はそう言つて志郎を連れて行くように促した。

「男手があつた方が楽と言ふならお前も同行してもらおうか。」

志郎がそう言つて幸雄の服を掴んで引きずると、

「イヤ〜ン、俺さまお前さんとは違つて力仕事そんな好きじゃないし〜。」

幸雄はオカマ口調でごねた。しかし志郎が、

（真姫はどうにも他の連中と上手く打ち解けられてない。目ざといお前なら分からんはずが無かろう？ここはサポーターたる俺たちの出番だ。）

と小声で幸雄に言ふと、

「あくはいいい、それなら俺も出ざるを得ねえな。くひひ。」

幸雄は笑いながら志郎の誘いに乗った。すると2人のやり取りを聞いていたのか希も、

「じゃあうちもお供する。」

と手を挙げながら言った。

「え？」

それに対して真姫は意外そうな反応を見せるが、

「たまにはええやろ？ こういう組み合わせも。」

と希が言う。と真姫は一瞬納得いかないような顔をしたが、4人で行くことに応じた。

「おおく！ 綺麗な夕陽やねえ！」

「ああ、なかなかいいものだな。」

「山に沈む夕陽もいいが、海に沈む夕陽も格別だな!!」

夕食の買い出しでスーパーに向かう途中、希や志郎と幸雄は夕陽を見て楽しそうに話していた。

「3人ともどういうつもり？」

すると真姫は3人に向かって何故付いて来たのかたずねた。

「別に。真姫ちゃんには面倒なタイプやなあつて。」

希ははぐらかすように真姫の問いに答える。真姫はそれを聞くと少し顔を俯かせるよ

「本当はみんなと仲良くしたいのに素直になれない。」

「私は普通になっているだけで……!」

真姫は希の言葉に反論しようとしたが、

「そーそー、そういうとこなんだよなあ。そうやって素直になれないとこ、俺さまの『炯眼』はお見通しだぜ?」

と幸雄が2人の間に割り込み、右手の人差し指と親指を丸くして右手の前にかざして言った。

「ていうかどうして私に絡むの!?!」

真姫が2人の言葉に業を煮やしたようにたずねた。それに対して希は少し考えるよ
うなそぶりを見せたあと、

「……ほつとけないのよ。よく知ってるから、あなたに似たタイプ。」

と、真姫に理由を語った。

(いつものどこかおかしい関西弁が消えた……。ということはこの希の何一つ偽りのない本心と言うわけか。確かに絵里もしばらく前まではそうだったもん……。)

志郎は希の態度を見て彼女の言わんとしることを察した。志郎の脳裏には、
s に入る前の絵里の表情が浮かんでいた。

「希の言う通りだわな。まあ俺も希とは少し違うかもだが、お前さんに似た意地っ張り
のほっとけない奴を知っている。なあ志郎？」

幸雄もまた、志郎の方を流し目で見ながらそう言った。

(こやつめ……。昔の俺に対する当てつけか。)

志郎は幸雄の言う『ほっとけない奴』がかつての自分であることを察して心の中で苦
笑しながら眩き、

「ああ、そうだな。俺も真姫に似た奴を知っている。」

と、優しく微笑みながら言った。

「……なにそれ。」

真姫は素っ気なく言うが、その表情はどこか安堵してるような雰囲気。志郎にも見え
た気がした。

「ま、たまには無茶をしてみるのもいいと思うよ？合宿やし！」

希は先ほどの真面目そうな口調から一転して元のおどけたエセ関西弁混じりの口調
でそう言う。また歩き出した。

「そぞ、のぞみんの言う通り！合宿は普段とは違う『非日常』なんだから少しぐらいはっ

ちやけても罰は当たらないぜ!」

幸雄もまたおどけた口調でそう言う。希の後を追いかける。

「まああいつらの言う事はともかくとして、少しづつゆつくりでもいいから皆に歩み寄ればいいと思うぞ。」

志郎は優しく諭すように真姫にそう言うと、2人を追って歩き始めた。

「ゆつくり……か。」

真姫はそう呟くと、3人の後を追うように小走りした。

「しっかし、希と幸雄は妙に仲がいいな。」

『そりやあ俺たち（うちら）は音ノ木坂一の食わせ者コンビだからな（やからね）!』
「なにそれ意味わかんない。」

買い出しに行く道すがら、4人は他愛もない話をしながら歩いていった。

その時の真姫は相変わらず素っ気ない様子だったが幸雄が言うには、彼女は少し楽しそうに頬をほころばせていたという——

31話 非日常は人を狂わせる

「もう、しょうがないわね〜！」

『おお〜。』

穂乃果、ことり、真姫の3人は満更でもない様子で11人分の料理を作るにこそ意外
そうな表情で見ている。

「ごめんね〜、私が料理当番だったのにもたもたしてたから……。」

「あたたたたたたた〜!!」

にこはことりの言葉には意も介さず、凄まじい包丁さばきでキャベツをみじん切りに
し、手際よくカレーを煮込んでいた。

「しっかし意外なもんだな。にこの奴、あんなに手際よく料理を作れるとは。」

幸雄もまた目を丸くしながら、敏腕シェフと化したにこを見て言った。

「はあああ……!」

「な、なあ花陽。」

「はい、なんででしょうか志郎さん？」

「その、なんで花陽の分だけご飯とカレーが別々になつてゐるんだ？しかもどんぶりに山盛りだし。」

志郎はどんぶりに山盛りにされているご飯を見て目を輝かせていた花陽に何故彼女に分だけそうなつてゐるのかをたずねた。

「あ、これは私がにこちゃんに頼んでやつてもらつたものなので気にしないでください
！」

「お、おう。」

自信満々で応える花陽に志郎はただ頷くことしかできなかった。

「それにしてもにこちゃん料理上手だよねえ。」

「ふふん！」

穂乃果に料理の腕を褒められたにこは誇らしげな様子だった。

「あれ？でも昼に料理なんてしたことないって言つてなかつた？」

「言つてたわよ。いつも料理人が作つてくれるつて。」

「づつ。」

だがこつと真姫に昼に言つていたことと矛盾していることを突かれると一転して

気まずそうな表情になったが、

「いや〜ん！にこ、こんな重い物持てな〜い!!」

とスプーンを持ちながら得意技であるキャラ作りで誤魔化そうとした。

「いや〜、流石にきついっすわ。」

「そ、それはいくら何でも無理がありすぎるんじゃ・・・。」

もつともそれはほとんど効果がないと言つても過言ではなく、幸雄と穂乃果に突っ込まれる羽目になった。

「う、うるさいわね!!これからのアイドルは料理の一つや二つぐらい作れなきゃ生き残れないのよ!!」

完全に退路を塞がれたにこは突然立ち上がって、逆ギレするように持論を語った。

「開き直った!」

「俺、あんたのそーゆー潔いところ嫌いじゃないぜ。」

穂乃果はそんなにこの開き直りに驚き、幸雄はにこの態度を褒めていた。そうして、他愛もない会話をしながら志郎たちは食事を楽しんだ。

「はく食べた食べたあ!!」

みんなが夕食を食べ終わると、穂乃果はソファーに寝そべった。

「いきなり横になると牛になりますよ。」

「もう、お母さんみたいな事言わないでよ。」

「幸雄を見習ってください。普段はあんな感じですがどういわけか穂乃果よりも礼儀

正しいですよ!」

海末はそんな穂乃果を諷めながら幸雄を指さすと、

「なあ海末さんよ、あんたの恨みを買った覚えはないんだが少し辛辣じゃね?」

幸雄は不服そうに言うがそれに割り込む形で、

「よーし!じゃあ花火をするにや〜!!」

と凧が言った事で幸雄の言葉は海末には届かなかつた。

「その前にご飯の後片付けをしなくちゃだめだよ!」

花陽は幼馴染らしく凧を諷めるが、

「あ、それなら私がやっておくから行ってきていいよ。」

「え、でも……。」

「そうよ、そういう不公平はよくないわ。」

絵里はことりの言葉に異議を唱え、

「絵里の言う通りだ。自分の食器は自分で片付けるべきだと思うぞ。」

と志郎は自分の食器を流しに持っていきながらみんなに言い聞かせるように言った。「それに、花火よりも練習です。」

今度は海未が練習をするべきだと主張し始め、

「え？これから・・・？」

には軽く引いてる様子で海未に聞き返す。

「当たり前です。昼間あんなに遊んでしまったんですから。」

海未が当然と言わんばかりに反論するも、

「でも、そんな空気じゃないってどうか、穂乃果ちゃんはもう・・・。」

ことりは海未を宥めるように言いながらソファの方目線に移した。他のメンバーもソファーを見てみると、

「雪穂おく、お茶まだく？」

「家ですか！」

と穂乃果はまるで自宅にいるかの様子で、その場にいないはずの雪穂にお茶を頼んでいた。もちろんそれに対して海未は間髪入れずにツッコんだ。

「いやここ穂乃果のうちじゃないからな？」

「若年性アルツハイマーじゃねえんだから・・・。」

そんな穂乃果の様子に志郎と幸雄は呆れかえっていた。

「じゃあこれ片付いたら私は寝るわね。」

真姫が食器を持ち上げながらそう言うのと、

「え!? 真姫ちゃんも一緒にやろうよ、花火。」

と凧が言い出すと、

「いえ、練習があります。」

と海未がそれに反対し、

「本気・・・?」

「そうにや! 今日みんなで花火やる?」

とにこの言葉に便乗するように凧はさらに自分の意見を押し出す。

「いいえ、そういうわけにはいきません!」

海未もそれに対して一歩も譲る気は無い様子だった。

「かよちゃんはどう思う!?!」

「わ、私は・・・お風呂に。」

凧に意見を求められた花陽は、なんと『お風呂に入る』という新しい意見を出してし

まった。

「第三の意見出してどうすんのよ!」

にこは呆れながらツツコミを入れる。

「雪穂くお茶く〜!」

穂乃果はそんなことはお構いなしと言った様子であった。

「なあ志郎、俺こういうのなんていうか知ってるぜ。小田原評定っていうんだけだな……。」

「政康の奴がこれを見たらなんて思うだろうな……。」

「さあ? あいつは、sファン最古参にして割とガチ勢だからな。泣いて喜ぶんじゃないの?」

「ええ……。」

志郎たちは泥沼状態に陥った食卓を眺めながら進まない会議という意味を持つ『小田原評定』の故事の作り主ともいえる北条氏政もとい政康の顔を思い浮かべながら他人事のように話していた。

そして会議はこのままさらにもつれ込むかと思われたその矢先に一筋の光明が差した。

「じゃあ今日はもうみんな寝ようか。みんな疲れてるでしょ? 練習は明日の早朝、それで花火は明日の夜にすることにしよう。」

希が凜と海未の意見をうまく平等にまとめてみせた。

「そっか、それでもいいにや。」

「確かに、練習もそちらの方が効率がいいかもしれないね。」

希の出した折衷案に凜も海未も納得していた。

「じゃあ決定やね！みんなでお風呂入ろつか。」

希は笑顔でそう言った。

「じゃあ俺たちは食器でも洗うか！」

「そうだな。みんなは明日に備えてゆっくり入って疲れを癒してくれ。」

『はーい!!』

『ふうく・・・。』

穂乃果たち女性陣は露天風呂に入ると気持ちよさそうに息を吐いた。

「気持ちいいねえ。」

「うん。」

「明日はちゃんど練習ですよ?」

海未は露天風呂を満喫している穂乃果とことりにくぎを刺すように言った。

「分かってるって〜。」

「でもこうやって一緒にお風呂に入るのって初めてにや〜!」

「すごく楽しいです!」

「花陽、先輩禁止。」

「あ、すいま、ごめん……。 」

「うふふ、そうよ。」

絵里に指摘されて慌てる花陽を見て、絵里は微笑ましそうに笑っていた。こうして女性陣がお風呂を楽しんでる一方で志郎たちはというと——

「なあ、勝頼さまよお。」

「なんだ昌幸。」

「俺たちの正体、あいつらにいつ晒すよ?」

「なんだ唐突に。」

穂乃果たちが風呂に行つたあと、2人は皿洗いをしながらある話題に興じていた。自分たちの正体を彼女たちに教えるか否かについてだ。

「いやほら、俺たちが普通の人間じゃないってことはもうA—R—I—S—Eにバレちまつただろ？ それなのに穂乃果たちには教えないってのも少し不公平なもんだと思ひましたな。」

「確かにそうだな。」

志郎は幸雄の言い分を聞いて頷く。

「そこでだ、この時代では対等な親友同士ではあるが一応俺の主君である勝頼さまの意見を聞きたい。」

「俺の意見か……。今となつては成立することはあり得ないが、俺個人としては別に正体を明かす必要はないとは思つていた。」

「思つて『いた』？ 何故に過去形なんだ？」

志郎の意味深な言い方に幸雄は首を傾げた。

「確かに俺たちはあの時代に生き、そして命を終えると同時に、あの時代の記憶を持ち越してこの時代に生を享けた。あの時代の記憶を持ち、幸雄の知略や『炯眼』のように、そして俺の武勇のように生前から持ち越された力を振るえる以上、お前は真田昌幸であり、俺は武田勝頼なのだろう。だが、俺たちはこの時代に命を授かった時点で真田昌幸

でも武田勝頼でもなく、ただの一般市民である武藤幸雄と諏訪部志郎となったのだ。」

「……つまり?」

「ふふ、流石に伝わりにくかったか。簡単に言ってしまうれば俺たちはこの時代に生まれた時点で武田勝頼や真田昌幸とは全く関係のない人間に生まれ変わったという事だ。だから俺は正直なところ、誰かに請われでもない限り自らの正体は明かさず、ただの『諏訪部志郎』として生きていくつもりだった。もつともお前と出会い、A—R—I—S—Eに普通の人間でないと見破られ、そして政康ら他の転生者と出会ったことでその目論見は瓦解したようなものなんだがな。」

「なるほど、それで思つて『いた』という過去形を用いたというわけか。」

「ああ、既に瓦解し、成立することのない目論見を考えていてもしょうがないと思つたらな。」

「それで? 正体はいつ明かす?」

幸雄は志郎に判断をゆだねるように問いかける。

「そうだな……。流石に今明かすのは早すぎるな。なんせ今はラブライブ本選に向けての大事な期間だ、あいつらの集中を削ぐような真似はしたくない。」

「二理あるな。ではラブライブで優勝した暁に……。というのは如何かな? まさにサプライズな感じがいいと思うのだが。」

「おお、なかなか面白いな。だがそのサプライズを成功させるためにはあいつらを何とかしてでもラブライブ本選に出場できるように支えてやらねばいかな。」

志郎は幸雄の意見を聞いて闘志を燃やす。

「あ、でもあいつらが俺たちの『正体』を知ろうとするようになった時は話が変わってくるがね。」

幸雄はニヤリと笑ってそう言った。

「どういうことだ？」

「気づかなんだか？もう既にメンバーのうち2、3人ほどではあるが、俺たちが尋常ではないと勘ぐり始めている。」

「それはお前の目で見たのか？」

「ああ、俺の目に狂いは無い。それにそのうちの1人は多分勝頼さまにも心当たりがあるはずだ。」

幸雄にそう言われた志郎の脳裏には、音ノ木坂に初めて登校した過ぎ去りし日に言われた言葉がよぎった。

———志郎くんってなんか他の人とは違う雰囲気があるんよね。どうしてだろう？

「その顔を見るとマジみたいだな。さて、皿洗いも終わった事だしシリアスな話はここまでにするか。」

幸雄は手を拭きながら話を終わらせた。

「でも穂乃果たちが入ってからそこまで経って無いぞ？何するよ。」

「そうだな……。あ、やっぱこんな時だからこそやれることをしようじゃないか。」

そう言つて幸雄はポケットの中からスマホを取り出した。

「スマホで何をするんだ？」

「ふふふ、ビデオ通話するのさ。」

「誰と？」

「北村とさ。あいつに、sと同じ屋根の下で同じ釜の飯を食つてることを自慢してやるのさー。」

「お前なかなか悪趣味だな……。」

「褒めても何も出ねえよ。さて、繋がるかな？」

幸雄は笑いながら政康のスマホへとビデオ通話をつなげた。1分ほど経つと、

『なんだ武藤、こんな時間にビデオ通話なんぞ繋げおつて。冷やかしならすぐに切るぞ。』

と政康が出てきた。

「よう北村！ オフ会以来だな。元気してる？」

『まさかそんなことを言うためだけに掛けてきたわけじゃないだろうな？』

「とんでもない！ 色々話したいことがあつてさ、実は志郎もいるんだぜ。」

『なに？ 何故貴様の家に志郎が？』

「ほら志郎、挨拶したらどうだ。」

「や、やあ政康。」

幸雄に促された志郎は気まずそうに話しかけた。

『本当にいるとはな……。で、貴様らは何をしてるんだ？』

「何って、合宿に決まつてるだろ。」

『合宿だと？』

「アイドル研究部でな。だからμ s も一緒なのさ！」

幸雄がそう言うと、

「な、な、何いいいいい!!? μ s と合宿だとおお!!?」

政康はものすごい声を上げて驚いた。

「声でけえよ馬鹿、近所迷惑じゃねえのか？」

『おっと済まん。だが今は両親は旅行中でうちのマンションは割と防音設備が整ってる

から平気だ。とはいえ声の音量には気を付けねばだな。だがそれより、μ s と合宿とはどういうことだ!』

政康は一言謝ると、合宿について追及し始めた。

「いや、そのままの意味だ。穂乃果の発案で、真姫の家の別荘を借りてやってるんだ。」

「しかも海の目の前でリゾート気分満喫し放題だぜ?」

『おのれ貴様らクソ羨ましいぞ!!』

「しかもみんなの水着姿を拝めたんだぜ? どうだ羨ましいだらろ w」

『おのれえええええ!!』

「おい幸雄、あまり煽ってやるなよ。」

志郎は政康を煽る幸雄をたしなめるが、

「なんだよ志郎、お前こそラッキースケベで海未の胸触ったんだろ? 俺の事言えた義理かよ w」

と海未を推している政康にとって核爆弾クラスの威力になり得る爆弾が幸雄によって投下されてしまった。

『・・・おい武藤、貴様今なんて言った。』

「だから志郎がラッキースケベで海未の胸を触ったんだって。」

「お、おい! 幸雄だって P V 撮影するのに乗じてみんなの胸見て楽しんでた上にご丁寧

にバスト測定までしてたじゃないか!!」

負けじと志郎も幸雄が昼にやらかした事を暴露した。

『す。』

「「え?」」

『貴様らああああああああ!!!ぶつ殺してやるううううううううああああ!!!』

「お、落ち着け政康!あれは事故だったんだって!!話せばわかる!!」

志郎は弁明を計るが、

『黙れ!結局触ったことに変わりはないんだろが!!』

政康の怒りが静まることは無かった。

『よりもよつて神聖不可侵領域ともいえるあの清純な海未さんの小振りな胸を、しかも海未さんの名前の一部でもある母なる海の中で触るなど。筆舌にし難い冒涇だ!』

「うわー。、布教した俺が言うのもアレだけど流石にガチ勢すぎて引くわ。、。」

政康に、sを教えた幸雄は軽く引いていた。

『全く貴様らは音ノ木坂学院の研究生であるのを笠に着て、sにセクハラをするとは何たる狼藉か!このような連中に一時的にも追い詰められた俺が恥ずかしいわ!!。、触

り心地は如何であつたか？」

「え？」

『だからどのような感触だったのかと聞いているのだ!!』

「えー……。小さかつたけどりあえず柔らかかつたです……。』

志郎は政康の質問に引きつつ、海未の胸を触つた時の感想を教えた。

「人のこと責めてるけどお前も大概じゃねえか氏政ア!!」

『ふん、貴様のような浅ましい魂胆で聞いたわけではないわ！本当に触つたかどうかをたずねるために聞いたのだ!!つまり具体的に感想が言えたという事は……。志郎！貴様はクロだ!!』

政康は画面の中から志郎に向けて指を指して言った。

「しまった!!」

志郎はまんまと政康の術中にはまつたことに気付いて頭を抱えた。

「志郎、お前それだから『信〇の野望』とかで知略低めに設定されるんだよ……。』

基本的に志郎を弁護する幸雄でさえも今回は呆れざるを得なかつた。

『そこで他人事のように呆れてる貴様もだ馬鹿め!!貴様ら、合宿が終わつて東京に戻つたら背後に気を付けるんだな……。いつ貴様らの背後から奇襲をかけてもおかしくは無いから……。』

「頼む！俺たちが悪かった!!合宿で撮った海未の写真全部くれてやるから許してくれ!!」

幸雄が土下座せんばかりの勢いで政康に許しを請う。

『・・・いいだろう。だが写真を受け取ったらその場で一発殴らせてもらうからな。』

「すまん恩に着る!!」

(それでいいのかお前・・・。)

政康から帰ってきた返事はまさかの減刑であった。これには幸雄は手を合わせて感謝し志郎は感謝しつつも内心呆れていた。

「さて、話は変わるがこれから合宿だからこそこできることをしようと思うんだが北村もどうかね?」

「合宿だからできること?あれか、修学旅行とかの夜にやるぶつちやけトークか?」

『なるほど、2人だけでは流石に話題が偏ってしまうから俺も呼んだわけか。』

「おいおい、お前ら流石に発想が貧困すぎるぜ。これだから童貞は・・・。」

幸雄が志郎と政康に対して呆れ顔で言った。

「あ?!そういう幸雄も人の事言えた義理じゃないだろ!!」

『そうだそうだとするか貴様にだけはそうやって馬鹿にされたくはないぞ!!』

「はあ・・・。お前らよく考えてみるよ?今は夜、そして穂乃果たちは今バスタイムなん

「だぜ?・となるとやることは言わずともわかるだろ?」

「幸雄、お前まさか・・・!」

『ふざけるな貴様! みゆ、μ、sの入浴現場を覗こうなどと言語道断に過ぎるぞ!!』

「まあまあ落ち着けて2人とも。確かに覗きはまずいかも考えられないがよく考えてみると、俺たちは今最高のチャンスを目前にしてるんだぜ? 女神たちがあられもない姿で湯を満喫しているところを盗み見ることができるといってビッグチャンスだよ!」

抗議する志郎と政康に対して、幸雄は芝居がかった様子で2人を説得し始めた。

「俺も男だからお前の言い分は分らんでもないが、俺たちはあくまでもあいつらのサポーターで、あいつらはスクールアイドルなんだ。ましてや異性同士なんだから節度を持って交流することが肝要であってだな、そういう不純な事はよくないと思うぞ!」

『俺も志郎に同感だ。それに俺はフアンの1人として推しているアイドル達のそういうプライベートなところに踏み込みすぎてはいかんと思うのだ・・・!』

志郎と政康はあくまでも秩序や節度を前面に押し出して誘惑をはねのけようと試みる。

「やれやれ・・・。お前さんらは少しばかり枠に囚われすぎてる、そんなんだから滅亡するんだよ。もう少し自分の欲に正直になった方がいいぜ?」

『「いやいやいや!」ここで正直になったらいろいろ終わるから!!』

「北村よお、海未の裸体を拝むチャンスは今しかないぜ？後悔はやらないですよりやってからした方が精神的にもいいと思うんだがなあ……。」

『し、しかし海未さんのあられもない姿を見るわけには……！』

「でも見たいんじゃない？」

『うっ、それは……、見たいです……！』

政康は唇をかむように言葉を絞り出した。関東の覇者と言えども今は健全な男子高校生、やはり欲には逆らえない。

ましてや中身こそは成熟していても思春期の真ただ中なのだから、憧れである女性の胸を触った志郎に対して嫉妬もするし、裸を見たいという欲求も湧き出てくるのは当然の摂理であった。

「くっ！政康が堕ちたか！」

「志郎はどうなのさ？」

幸雄が志郎にも矛先を向ける。

「俺は……。俺は……。」

志郎は幸雄の言葉に、心を激しく揺さぶられた。

——実のところ、幸雄と女子の話題をすると桂の事を引き合いに出して誤魔化してはいるが全く興味が無いわけではないのだ。正直に言わせてもらおうと今日見た穂乃果たちの水着姿はどれも可愛かったし綺麗だった。

普段は制服や練習着、ごくたまに私服姿を見る程度でさほど彼女たちの身体を意識したことは無かったが、今日彼女たちの水着姿を見た瞬間に物凄く意識するようになってしまった。そして事故とはいえ海未の胸を触った時の感触を今でも鮮明に覚えてしまつてゐるくらいだ。

何せ元からスタイルが良い絵里や希、そして女子力の塊ともいえることりはともかく、スレンダーな体つきの海未や凜、そしてにこもそれが見事に強調されてるし、控えめな花陽なんかはその性格とは裏腹に胸の自己主張が激しい。

極めつけは、普段は長篠以前の俺のように前しか見てない無鉄砲で色々は無頓着な穂乃果でさえ1人の女性として美しく見えてしまったくらいなのだから、裸を見てみたいかと尋ねられたら答えは決まつてゐる——

「——み、見たい……です。」

遂に墮ちた。音ノ木坂学院アイドル研究部男子部員（2人しかいないが）の良心であ

る諏訪部志郎が遂に欲望に屈した。

「おお志郎、まさかお前からその答えを聞けるとは思わなかったぞ！」

幸雄は予想外の結果に頬を紅潮させた。

『剛健なる若虎は失墜し、世界は落陽に至る……。氣に病むな盟友よ、人間一度は欲望に屈する時もあるさ。』

「すまない……。欲望に勝てない男で本当にすまない……。」

政康は葛藤の末に欲望に屈した同朋である志郎を慰めた。志郎はどこぞの竜殺しの大英雄のように自虐的な言葉を漏らすことしかできなかつた。

「さて、堅物2人の承認も得られたことだし早速作戦に移ろうじゃないか！」

「こうなつたら野となれ山となれだ！しかし政康はどうするんだ？」

『そうだ、俺はこれだから何もできん。言っておくが野郎の実況だけを聞いて我慢しろと言うオチはごめん被るからな！』

ビデオ通話中の政康はそう言つて幸雄に釘を刺した。

「心配すんなつて！お前さんの目の前にある薄い板があるだろ？」

「なるほど、ビデオ通話のカメラを使うのか！」

『確かにそれならば隙間から覗くことができるな！』

「まあ、細かいカメラの調整は政康のガイドに従えば問題ないな。」

「よし！これで準備は整った！さあ行こう、禁断の楽園へ！！」

『おお！！』

幸雄が声高らかに志郎たちを鼓舞し、志郎と政康もそれに鬨の声で応えた。

「ふうん、ずいぶん面白そうな話をしとるんやねえ。」

「そうそう、俺たちはこれから禁断の楽園に……え？」

「……あ。」

志郎たちは後ろから聞こえた声に答えて振り向くとそこには、

『……』

——地獄があった。

32話 非日常は人を狂わせる 制裁編

「ずいぶん楽しそうな話をしてみたいね……。」

「ほんと男つてどうしてこうもアホな事ばっか考えるのかしらねえ。」

「そんな……。幸雄さんはともかく志郎さんまで……!」

「あー! かよちんを泣かせるなんて許せないにや!」

「はあ、ほんとイミワカンナイ……。」

「真姫ちゃん、なんか縄とかお仕置き用の道具とかってないかな?」

「うふふ、志郎くんも幸雄くんもお仕置きしなくちゃだね。ね、海未ちゃん?」

「なんて破廉恥な……! 2人とも、覚悟はいいですね?」

μ sのメンバーが志郎たちを囲むように立つており、それぞれ顔を引きつらせていたり、呆れたり、泣きそうになったり、怒りを露わにしたり、黒い笑顔を浮かべていたり、十人十色ならぬ九人九色なりアクションを浮かべていた。

「……。三十六計逃げるに如かず!!」

幸雄はそう言うのと飛び跳ねるように立ち上がり、脱兎のような速さでその場から逃走を図る。

「あ！幸雄くん逃げた!!」

「凜ちゃん、確保や!」

「任せるにや〜!」

穂乃果が声を上げると、希は想定通りと言わんばかりに口元に笑みを浮かべながら凜に幸雄の確保を命じた。

「なにつ!?ぐわっ!」

「幸雄くんも観念するにや!」

幸雄は何とか逃げ切ろうと全力ダッシュしたものの、運動神経のよさでは自分を軽く上回る凜では相手が悪かったのかすぐに追いつかれて組み伏せられてしまった。

「くそっ……!志郎、お前だけでも何とか逃げ延びるんだ!!」

幸雄は志郎にも逃げることを促したが、

「……これでどう逃げろと?」

志郎は既に凜以外の8人に周りを包围されて逃げようにも逃げられない状態だった。もちろん実力行使が使えれば逃げられるのだが、志郎は女子に手を上げることが良しとしない性格であったため、降参することにした。

「諦める幸雄、俺たちはもう詰んでいる。」

志郎は胡坐を組み、両手を挙げながらそう言った。

「志郎、お前何でそんなに諦めが早すぎるんだよ．．．。」

「幸雄はそれを見て頂垂れながら言った。「そんなんだから天目山で自害するんだよ」と漏らしそうになったが、何とか堪えた。」

『おい！どうしたんだ武藤！志郎！！急に画面が暗くなつたぞ！どうした！！』

「あれ？なんか声が聞こえる．．．？」

「ちよつと花陽、変な事言わないでよ．．．。」

「ひよつとしてお化けだったりして？」

「希い！」

政康の声に花陽、真姫、希、絵里は不安そうな様子だったが、

「いや、これはお化けじゃなくて俺のスマホだ。さっきまで通話してたんだよ。」

と縄で縛られた幸雄が名乗り出た。

「なーんだ！幸雄くんのスマホかあ、びっくりしちやつたよ！」

穂乃果は幸雄の言葉を聞いて胸を撫でおろし、幸雄のスマホを拾いに行った。

（なぜ正直に言ったんだ？）

志郎は穂乃果たちに聞こえないように幸雄に質問した。

(発案者として計画が頓挫したことを教える義務があるからな。それにこうなった以上、共犯者である北村にも道連れになってもらう必要があるからな。)

幸雄はそう答えると悪そうな顔で笑った。

(うわあ・・・、ゲスいな。)

志郎はドン引きしていた。

「これどうしよつか？そのまま通話切っちゃおう？」

「それでは失礼ですよ穂乃果。一応志郎と幸雄のご友人みたいですし、事情を話してから斬るべきだと思います。」

穂乃果は海未の言葉を聞いてからスマホを拾い上げた。

『おお、画面が明るくなった。いったい何があつたんだ？』

「あ、すいませーん。志郎さんと幸雄くんの友達の高坂穂乃果です。通話の邪魔しちゃつてごめんね？」

そう言つて穂乃果が通話先の政康に話しかけると、

『・・・』

政康は先ほどまで話していた志郎と幸雄ではなく穂乃果が出てきたので、目を丸くして口を顎が外れそうなくらいに開けて呆然としていた。

「あのもしもし？」

穂乃果がそれを見て心配そうに声を掛けると、

『みゆ、みゆ、μ、sの穂乃果さんだああああああ!!?お、お、俺は北村政康と言います!!3人だった頃からμ、sのファンでございませうううう!!』

と政康は驚きのあまり叫びながら自己紹介をしていた。

「な、なんかすごく熱心なファンなのね・・・。」

絵里が軽く引いていると、

「そりゃあ、どつかの誰かさんがファーストライブの動画を上げた後に俺が布教した古参のファンだからな。」

幸雄は誇らしげにそう言った。

「そうなんだ!あ、政康くんは誰が一番好きなの?」

『なななななな!!?どこの馬の骨かも知れない俺のような男を苗字ではなく下の名前で呼んでくださるなんて、あまりに恐れ多いですが恐悦至極に存じ奉ります!!一番推してる人ですか?そ、園田海未さんです・・・!』

政康が穂乃果の質問に答えると、

「そつか!じゃあ海未ちゃんに変わるね?」

『ファツ!!』

「海未ちゃん!そういうわけだからハイ!」

穂乃果が海未に幸雄のスマホを渡そうとすると、

「そ、そんな！いくら志郎たちの友人とはいえ知らない殿方と話をするなんて……！」
と海未は顔を赤くして拒んだ。

「ええー！大丈夫だよ！すごく紳士的そうな人だったもん！それに海未ちゃんのパフアンなんだよ！きつとすごく楽しみにしてるの！ここで期待を裏切っちゃかわいそうだよ！」

「うう……。わかりました、ちよつとだけですよ……。？」

穂乃果の説得の甲斐あつてようやく海未はスマホを受け取った。

「は、初めまして……。そ、園田海未と申します……。」

海未が恐る恐る自己紹介をすると、

『あ、ああ……。！本物の園田海未さんだ……。！本物の園田海未さんが俺に話しかけてくれてる……。！！うう……。！』

政康はなんと喜びすぎて男泣きしてしまっていた。

「す、すいません！大丈夫ですか!?!」

政康の様子を心配した海未は少し慌てた様子だったが、

『大丈夫ですとも!!ただ海未さんと直接お話しできることがあまりにも嬉しすぎてつい……。』

「そうなんですか、なんだかそう言われると恥ずかしいですね。」

少しすると海未も慣れたのか、2人の微笑ましい会話が続いた。

「おいどういことだ政康と海未がなんかいい雰囲気だぞ。」

「ふふふ案ずるな志郎、奴が俺たちと共犯であつたことがバレれば全ておじゃんよ。」

「どうか海未、今はお喋りしてる暇じゃないでしょ？この覗き未遂コンビを尋問するんだから早く切りなさいよ。」

「お、自分のファンですつて言われなくてにこにこキレてるうー！」

「うっさい！はっ倒すわよ！」

「手え出てる!!もう手え出てるつて!!」

少しイライラしている様子のにこを煽つた幸雄がにこにげんこつを頭に叩きこまれている。

「そ、そうでしたね。すいません、名残惜しいのですがちよつと志郎と幸雄に少しばかりお説教しなくてははいけませんのでこの辺で失礼させていただきますね。」

『おお、それは大変ですな……。して、その馬鹿2人は一体何をしたのですかな?』

「オイ政康お前何しらばつてんだ!!」

「そうだテーマー共犯者だろうが!!」

しらばつてくれた様子の子の政康に対して志郎と幸雄が暴れもがきながら講義するが、

『はあく？共犯者だと？馬鹿め、このような状態の俺がどのようにして貴様らの犯行の片棒を担げるのだというのだ？』

と反論された上に、

『俺はμ sのファンとして断じて海未さんたちの不利益となるような行為はしませんとも!!』

と声高々に宣言されてしまった。

「海未―信じるな!!そいつは俺たちと同類の、いやそれ以上の獣やぞ!!」

「政康!お前俺たちを裏切る気か!」

『裏切る?ハツ!俺と貴様はそもそも盟友であると同時に宿敵でもあるのだ。これくらい日常茶飯事であろう?あ、もちろん武藤貴様は論外だからな。それでは海未さん、μ sの皆さん、おやすみなさい!』

「はい、おやすみなさい北村さん。」

『はい!良い夜を!!』

政康がそう言うのと通話が切れた。そして海未は幸雄のスマホを置くと、黒いオーラを纏っていきそうな笑顔をしながら志郎たちに詰め寄った。

「さて、2人ともこれで2回目となるわけですが、何か言い残すことはありますか?」

海未が笑顔でそう言うのと、他のメンバーたちもそれに合わせて構え始めた。

「ちよ、ちよつと待つてくれ海未、これは幸雄が企てたことなんだ!!」

「あ、志郎テメー!」

「ですが志郎も加わった事も事実、ですよね?」

「うぐつ! た、確かに欲に負けて加担しそうになったのは事実だが最初は止めた方がいいって・・・あ。」

「ごとりちゃん、今の録音できた?」

「はい、志郎くんの言質貰っちゃいました♡」

志郎は何とか逃れようと反論するも、逆に自分が欲望に負けて幸雄に加担していたことを自白してしまった。しかも穂乃果とごとりによってご丁寧に録音までされてしまったので言い逃れが効かなくなってしまった。

「さつきも言ったがそれだからお前は脳筋だつて言われんだよ志郎・・・。」

これには幸雄も苦笑いを通り越してもはや悟ったような表情であった。

「で、幸雄はどうなんです?」

「・・・ねえ。」

「はい?」

「俺は悪くねえ!!」

『は?』

あまりにも予想の斜め上を行く幸雄の言葉に、思わずその場にいた幸雄以外の10人の言葉が重なった。

「だってそうだろ！俺はあくまでも高校生男子ならば誰もが抱く純然たる願いを實現させようとしただけだ!!その証拠に最初は反対した志郎だつて結局は参戦した！これはつまり志郎のような質実剛健な男だろうと生理的な欲求には勝てないという事だ！志郎が勝てないなら世の中の男にこれを持ち越えられることは出来ない！つまり女の裸体を見ることを悪と断ずる社会こそが悪そのものなのではないか!?!そういうわけで俺たちがやろうとしたことは逆説的に正しいという事になる!!はい証明完了、Q・E・D！勝った！第三部完ツ!!どうよ、俺のこの優れた理論は……。」

幸雄は開き直り、即興で考えついた理論を穂乃果たちに披露したが、

「ごめん、ちよつと理解できないや。」

「幸雄くん、それって屁理屈って言うんじゃないかなあ?。」

「イミワカンナイ。」

「何が何だか全然分かんないにや。」

「凜ちゃんは分からなくていいと思うよ……。」

「論外に決まつてんじゃないそんなもの!。」

「一見理論的に見えるけどだいたい破綻してるわね……。」

「これでうちらを論破は無理があるんやないかな。」

と、こんな感じに見事に全否定され、

「幸雄……。」

「は、はいなんですしょう海未さん？」

「この期に及んで屁理屈とは……。あなたは最低です！」

「ぶべら!？」

海未に至っては怒りのビンタを幸雄に浴びせるほどだった。

「まあここまできけしやあしやあと言い訳を言えるって事はクロってことでいいわよね……。？」

にこが悪そうな顔で言うと、

「そうだね、今回は2人とも2回目だからさつきより重い罰を与えなきゃだね♡」

とことりが言葉とは裏腹にいい笑顔でにこの言葉に賛同した。

「そんな!どうかお慈悲をことり様!!」

幸雄がことりに縋りつくが、

「ダメだよ幸雄くん、エッチな事をしようとしたんだからあ、ちゃくくと罰を受けなくっちゃね!」

返ってきたのは甘い声で囁かれた死の宣告であった。

「さくて、どんなお仕置きをしちやおつかなく？」

穂乃果の言葉に続くように9人が縛り上げられた幸雄たちに迫る。

「どうやらここまでのようだな・・・。」

「諦めんなよ志郎！何とか脱出するんだ・・・って、来るなあ、来るなああ!!」

志郎は諦め、幸雄は何とか逃げようと身をよじって後ずさりしようとするが、もちろんそんなことで逃げられるわけがなかった。

「——— さあ、覚悟はいいですね？」

『ぎゃあああああああああああああああああああ!!!』

満天の星空が見える夏の夜、西木野家の別荘には2人の男の恐怖の叫びが響き渡った
という———

「ふう、ひどい目に合つたぜ……。」

「ああ、主に幸雄のせいだな。」

それからしばらく経つた後、西木野家別荘の露天風呂に志郎と幸雄が漬かっていた。どうやら穂乃果たちによる制裁から解放されたようである。

「まさか俺たちが、この時代で石抱きをさせられるとはな……。」

石抱きというのは江戸時代に実在した刑罰で、三角形の木を並べた台の上に正座させられ、足の上に重りをどんどんおかれるという拷問のようなものであった。

「まあ、足つぼを刺激するマットだったただけ本場よりはマシじゃね？」

「それプラス鞭打ちだからな。」

「うん、ありや拷問つてレベルじゃねーわ。寧ろ自白すれば助かる拷問の方がまだマシつてどういう事よ。」

2人は死んだ魚のような目で穂乃果たちから受けた制裁を思い出していた。

「鞭つて言つても濡れタオルだけだな。」

「いやいや濡れタオルだけ？ことりとか花陽とか非力な奴がやったらマシでも、穂乃果や凜みたいに加減を知らない奴や海未みたいと比較的に腕力のある奴にやられたらスゲー痛いからな。」

「分かる。穂乃果と凜はマジでヤバかった。加減を知らないってマジで怖いと思ったわ。」

「だろ？俺的には海未のが一番きつかったね。あいつ確実に殺意込めてたもん。」

「それは幸雄が悪いだろ・・・。」

「鞭打ちの刑のおかげで背中にお湯が染みるぜ・・・。」

「はたかれた場所が見事に真っ赤だからな。」

「俺もだ。これぞホントの赤備えってな・・・。」

「それ今言っても笑えんヤツだからな・・・。」

「それにしてもアレだな。多分あいつらにセクハラしたら次は確実に死ぬな。」

「ああ。」

「それにしても、やっぱ見てみたかったよな。」

「まだ言うか幸雄・・・。」

「だってあんなハイレヴェルな女子たちが9人もいたら見たくなるのは普通だって！」

「まあ分からんでもないが・・・。てかなんで妙に活舌がいいんだお前。」

「はあ、惜しかったなあ・・・。」

「これ以上はやめとけ。聞かれてたら間違いない消されるぞ。」

「志郎的には結局どうだったんだよ。」

「どうだったって、何がだ？」

「穂乃果たちの裸が見たかったかどうか。」

「それは……まあ、見たかった。」

「だよな……。」

『はあ……。』

夜の露天風呂に2人の男の虚しいため息の音色が流れていた。彼らはまだ知らない、合宿の夜はまだ序の口でしかないという事に――

33話 西木野家別荘 枕投げの乱

「え〜つと、これは一体どういう事かね？」

「少し説明していただけると助かるんだが・・・。」

風呂から上がり、パジャマに着替えてリビングに出てきた志郎と幸雄は目の前に広がる景色を見て困惑せざるを得なかった。

「え？〜どういう事って、布団だよ？〜ここで寝るから敷いてるだけだよ。」

穂乃果はきよとんとした様子で現状を説明する。

「いやそれは見れば分かるんだがな・・・。」

「そうじゃなくてなんで布団が1枚敷かれてんだよ？」

幸雄の言う通り、布団はリビングに1枚敷かれていた。

「普通こういう時って男女は分かれて寝るべきではないのか？」

「え？志郎くんたちも一緒に寝るんじゃないの？」

「いやいやいやいや、さっきの展開からその発言が飛び出てくるってなかなかすげー思考回路してると思うぞお前！」

「じゃあこうしよつか！〜こちらと一緒に寝るって罰を追加すれば文句なしやん？」

志郎たち男性組と穂乃果が問答をしているところに希が仲介に入る。

『それ折衷案になつて無くね?!』

志郎たちが同時にツツコミを入れるが希はどこ吹く風といった様子だったし、最終的には『妙な事したら海未に制裁してもらおう』という条件で志郎たちは、sのみんなと同じ部屋で寝ることになった。

「じゃあ電気消すわよ。」

『はい。』

にこがそう言つて部屋の電気を消すと、みんなそのまま寝静まった。

(ふう……。何とか無事に一日目が終わったな。)

志郎が布団の中で安堵していると、

「……ねえ。」

と、誰かの声が聞こえた。

(誰だ……?)

小声だからか、誰かの声は判別できなかつたが、次の日の練習は早朝に行われるため早く起きないといけないのでその声に答えて話に興じてしまつて睡眠時間を減らすの

は下策だと思った志郎は気にしないことにした。

「ねえ、ことりちゃん……。」

「うん？ どうしたの、穂乃果ちゃん……。」

「なんだか眠れなくて……えへへ。」

「はあ、そうやって話してたらもつと眠くなるぞ？」

「あ、ごめん！」

志郎にたしなめられた穂乃果は志郎に謝った。

「志郎の言う通りよ。海未を見なさい、もう眠ってるわよ。」

「おお。」

穂乃果は海未の眠りに入る早さに感心している。

「穂乃果ちゃんってよく眠れる方だよね？」

「というか授業中によく寝たり寝坊したりしてるよな。」

「うん、だけどなんかもつたいたいって言うか……。せつかくみなでお泊りなんだし。」

「何度も言うけど遊びに来てるわけじゃないのよ。明日はしっかり練習するんだから、

早く寝なさい。」

「はい。」

絵里の言葉に返事した穂乃果はそのまま自分の布団に潜り込んだ。

「真姫ちゃん、寝ちゃった？」

すると今度は希が真姫に話しかけた。

「何よっ？」

「本当にそっくりやな。」

「なんなの？さつきから。」

真姫は希の言葉の真意が読めずにそう言うが、希は何も言わずに微笑んでから目を瞑った。

(やれやれ、今度こそ眠れそうだな・・・。)

志郎はそう心の中で呟くも、そうは問屋が卸さなかった。

バリツ！

暗闇の中、何かを砕くような音がいきなり鳴りだした。

「ちよ、何の音？」

慌てた様子の絵里が何の音なのかをたずねた。

「私じゃないです！」

「凜でもないよー！」

「だ、誰か明り付けて！」

絵里がそう言ったと同時に部屋の明かりが付けられ、みんなが周りを見回すと、

『あ〜！』

なんと怪音の正体は布団の中でせんべいを食べていた穂乃果だった。

「むぐっ!?ゴホッゴホッ！」

皆の驚いた声にびっくりしたのか穂乃果も喉を詰まらせて咳をしていた。

「なにやってるの穂乃果ちゃん？」

「えっと、何か食べたなら眠れるかなって……。」

「全く、いつの間にそんなものを仕込んでたとは……。」

志郎が穂乃果の言い訳に呆れていると、

「もく、いい加減にしてよねえ！」

と言いながらにこが起き上がった。

『うわっ!?!』

顔中にパツクを塗り、キュウリを付けているにこの顔を見て、その場で起きているみんなが驚いた。

「な、なによそれは?！」

「美容法だけど。」

「は、ハラショー……。」

にこに何をしてるのかをたずねた絵里は、ただ苦笑いするしかなかった。

「つたく、せつかく人が気持ちよく寝てるのに騒がしいぞ。」

今度は幸雄がそう言つて起き上がった。

「……ツツコんだら負けな気がするが、なんだそのアイマスクは。」

志郎は幸雄の顔を指差しながらたずねた。幸雄の顔には『炯眼』と書かれたアイマスクが付いていた。

「何が可笑しい!!!」

「いやキレるなよ。」

「いやそつちこそマジに受け取るなよ、る○剣ネタなんだから。」

「知つてはいるが、他の奴らがびっくりするだろ。」

急に声を荒げた幸雄を志郎は宥めたが、幸雄もまた真面目に受け取る志郎を宥めるというシユールな掛け合いが行われた。

「こ、怖い……。」

「うん……。」

にこの顔を見た花陽と凜が怖がつてるのを聞いて、

「なんだ、オバケでも出たのか？」

と幸雄がアイマスクを外してにこの顔を見ると、

「うわああああ怪物だああああああああ!!！」

と、大げさな演技なのか本当に怖がってるのか区別が付かない叫びをあげた。

「誰が怪物よ! いいからさっさと寝るわ・・・ぐふっ!？」

にこが幸雄に抗議しながらリモコンを手にとって電気を消そうとしたらいきなり彼女の顔に枕が飛んできてど真ん中にクリーンヒットした。

「真姫ちゃん何すんの〜!」

「え? ちよつと何言ってるの!？」

すると希はわざとらしい棒読みで真姫が枕を投げたかのように言い放った。場所的に志郎と幸雄は希が投げたのを分かってたが、他のメンバーは本当に真姫が投げたのかと思っっている。

「あんたね〜!!」

「いくらうるさいからってそんなことしちやダメやん!」

希はそう言うのと今度は真姫の使ってる枕を掴んで凜に向かって投げつけた。

「にゃ! 何する・・・にゃ!!」

凜はその枕を顔の前でキャッチすると希に投げると見せかけて穂乃果に投げつけた。

「よろしっ!」

そして穂乃果は真姫に枕を投げつけた。

「投げ返さないの?」

希が真姫を挑発すると、根が真面目な真姫は見事にこれに引っかけ、

「あなたねえ……!わっ!」

と希に向かって枕を投げようとする、今度は絵里が真姫の顔に枕をぶつけた。

「もう!!いいいわよ!やってやろうじゃない!!」

真姫が怒って枕を思いっきり投げたのを皮切りに枕投げが始まった。

「あーあー、明日早いのにいいのかこれ?」

「まあ、一度こうなったら場の空気を変えるのが如何に難しいかはお前さんなら分かってるはずだぜ?」

「はあ。触らぬ神に祟りなしだ、俺は寝……うお?」

布団に潜り込もうとした志郎の顔に枕がぶつかった。

「志郎くんつてば隙だらけにやー!」

ぶつけた犯人は凜だった。

「やれやれ、そんなに俺と戦いたいか……。ならば受けて立とうじゃない……。か!!」

志郎は顔にぶつかった枕を掴むと枕を思いっきり幸雄に向かって投げつけた。

「どわっ!?なんで俺に!？」

「流石に俺の全力を凜にぶつけたらまずいかと思つたけど今さら加減できなかつたからとりあえずぶつけさせてもらった。」

「んの野郎・・・おつと!」

「わぶっ!」

今度は幸雄がどこから飛んできた枕を躲して志郎の顔にぶつけた。

「あ、ごめんごめん!」

今度は穂乃果の投げた物だつたらしい。

「こつなつたら全力で戦に加わるしかないな。」

「ああ、投げる阿呆に受ける阿呆。同じ阿呆なら楽しまなきや損損つてな!」

そう言うのと志郎と幸雄も枕投げに本格参戦した。

ある時はことりが自分の枕で飛んできた枕を弾き、またある時は希と絵里に挟み撃ちされそうになつた真姫が2人による同時攻撃をギリギリで躲したりと、部屋中（といっても布団のあるエリアだけだ）を戦場とした敵も味方もない枕投げのバトルロワイヤルが繰り広げられ、縦横無尽に枕が乱れ飛んでいた。

だが、惨劇は唐突に訪れた――

『あつー!』

なんと誰かが投げた枕が、熟睡していた海未の顔にぶつかってしまったのだ。海未は腕をわなわなと震えさせながら枕を両手で鷲掴みにすると、ふらりと立ち上がった。

「……何事ですか?」

海未の声は普段からは想像できないほどドスの効いた低い声だった。

「あわわわわわ……。」

「え、えーつと……。」

穂乃果とことりは、殺気を放つ幼馴染みの姿を見て戦慄していた。

「これ、もしかしなくてもヤバい奴だよな……。」

「ああ、これはマジギレですわ……。一学期の中頃に穂乃果に海未のポエムノートを見せてもらったのが見つかった時の声と同じトーンだわ……。」

「お前そんな事してたのか!？」

幸雄が一度海未を本気で怒らせた事があるという出来事の真相を聞いた志郎は思わず頭を抱えた。

「……どういうことですか?」

「ち、違うのよ! 狙って当てたわけじゃ……。」

「そ、そうだよ！そんなつもりは全然なくって！」

真姫と穂乃果は海未にわざとじゃないと弁明したが、海未の怒りが収まる気配は微塵も無かった。

「明日、早朝から練習すると言いましたよね……？それをこんな夜中に……。」
「お、おう。そうだな……。」

歴戦の強者である志郎でさえも冷や汗をかきながら海未の言葉に頷くことしかできないようだった。

「お、落ち着きなさい海未……！」

絵里は何とかなだめようとするが、

「マズいよこれ……。」

「海未ちゃん、寝てるところを起こされると凄く機嫌が悪くなって……。」

「それなのになんで枕投げなんて始めたんだよ……。詰んでるじゃねーか！」

ことりの説明を聞く限り、宥めても無駄な事が明らかになった。すると次の瞬間、

「……！」

海未は枕を強く握りしめ、

「ぬんっ!!」

『ひっ!』

志郎の全力投擲すら凌ぐほどの速さで投げられた枕が、穂乃果とことりと花陽の間を一瞬ですり抜けて、

「ぬわっ!!」

枕はこの顔面に直撃し、ここはその衝撃で後ろに倒れた。

「にこちゃん!・・・だめにや、もう手遅れにや!!」

凜はにこを抱き起してみるが、強烈な一撃を喰らった彼女は気絶してしまっていた。

「超音速枕・・・!」

「ハラシヨ・・・。」

花陽はそんな海未の必殺の一撃に名前を付け、絵里もその破壊力に戦慄していた。

「うふふふふふ・・・覚悟はいいですね?」

スクールアイドルとはとても言えないような恐ろしい笑顔で笑う海未が呟いた言葉は、この場にいる者たちを皆殺しにすると宣言しているようにさえ感じられる。

「ど、どうしよう穂乃果ちゃん!」

「生き残るには戦うしか・・・うざ!」

「びっ!」

海未を止めるには徹底抗戦しかない・・・そう断じて先陣を切ろうとした穂乃果は真っ先に海未の凶弾に倒れた。

「ごめん海m．．．うっ！」

絵里も意を決して海未に攻撃を仕掛けようとするがこれまた瞬殺されてしまい、犠牲者は3人に増えた。

「なんてこった．．．。幸雄！何か策は．．．ってあいつどこに消えた!？」

志郎は海未を倒すための策を幸雄から聞き出そうとするが、いつの間にか彼の姿は消えていた。

「ふふふ、三十六計逃げるに如かず。あんな化け物相手に正面切って戦うなんて殺してくれて言ってるようなもんさね。」

幸雄はソファアの裏に潜みながらそう言った。

「おのれ幸雄！分が悪くなった時の離脱能力だけはホントに達者な奴．．．がふっ。」

幸雄に対する恨み言を言ってるうちに唯一海未に対抗できそうだった志郎も撃破されてしまった。

「凜ちゃん．．．。」

「かよちゃん．．．。」

凜と花陽は目の前で繰り広げられていた海未による一方的な殺戮を目の当たりにして、ただ隅っこで震えることしかできなかった。

「次はあなた達ですね．．．。」

もはや慈悲という言葉すら忘れた修羅となり果てた海未の矛先は、震えてる2人にも向けられた。

『た、助けてー!!』

2人の悲鳴が上がると同時に超音速枕が2人に向けて投げつけられ、2人そろつてもうダメかと諦めたその時、

「ふう……。怯えてる奴を相手に、少しおイタが過ぎるんじゃないか？」

なんと、海未の攻撃で倒れたはずの志郎が凜と花陽の盾となり、腹で超音速枕を受け止めていたのだ。

『志郎くん（さん）!!』

救世主の復活に2人は歓喜の声を上げた。

「邪魔をするなら容赦しませんよ……。」

海未はそう言うや否や枕を志郎に投げつけるが、

「ぬぐつ！」

なんと志郎は海未の放つ超音速枕を右手で止めてみせた。

「すごいにゃ！海未ちゃんの超音速枕を片手で止めたにゃ!!」

「片手と言つても右腕を左手で支えなければ右手が変な方向に曲がりかねないんだがな……。くつ！」

凜の言葉に苦笑いで答えながらも、海未の第二撃を防ぐ。

「ふん！ぬっ！」

「うぐっ！うっ!!」

海未が枕を投げ、志郎がそれを防御するという激しい攻防の応酬が繰り返られていたが、何回も超音速枕を受けていた志郎の防御にも限界が訪れようとしていた。

「志郎さん、大丈夫ですか!？」

「大丈夫だと言いたいところだが・・・、あと一発が限界みたいだ。」

「そんな・・・！」

志郎が限界であることを知った花陽は驚きと落胆の声を上げる。

「だから次の海未の攻撃を防いだあとに勝負に出る！」

志郎はそう言うのと左腕で顔をガードしつつ右手に枕を掴んで、攻防一体の構えをとった。

海未と志郎、2人は互いに構えをとったまま動くことなく睨み合った。

『・・・・・・・・くり。』

そんな緊迫した状況を前に、凜と花陽が息を呑んだ。その瞬間、

「ふっ!!」

「はあっ!!」

海未と志郎が同時に枕を投げた。志郎の計算では、速さで勝る海未の攻撃がまず先に志郎の顔（正確にはガードしている左腕）に命中し、その攻撃とすれ違うように志郎が投げた枕が海未の顔に命中する・・・という予定になっていたのだが――

ばふっ!!

なんと空中で2人の投げた枕同士がぶつかり合い、相殺された。

（しまった！海未は初めから俺の右腕を狙っていたのか・・・!!）

志郎は海未の狙いが自分の撃破ではなく、攻撃の無力化だと知って内心で舌打ちをした。右腕は枕の投擲に、左腕は顔のガードに使っているため、どちらも次の枕を拾って投擲するには時間がかかり過ぎる。

志郎は自分が出せる一番の速さで右腕を動かし枕を拾うが、海未は既に次弾の投擲態勢に入っていた。

「くそっ、間に合わん・・・!」

志郎が諦めかけたその時、

「づっ！うう・・・。」

と呻き声をあげて海未が倒れた。

「真姫ちゃんー！」

「希ちゃん!!」

海未を倒したのは希と真姫だったようだ。海未が起き上がってこないのを確認したことは指で丸を作って、「もう大丈夫」という合図を送った。ジェスチャーで表したのは海未を起こさないようにするための彼女なりの配慮だろう。

「いやー、ナイス奇襲だったぜお二人さん！すべては俺の策の内だったわけだ！」

幸雄は鼻高々と言った様子でソファアの裏から出てきた。

「人が一番大変だったときに隠れてた奴がよく言うぜ……。」

志郎はため息をつきながら幸雄に悪態をつく。

「あんな一撃で人を気絶させるような攻撃手段持つてる相手に挑むなんて自殺行為もいとこだろ。そういう意味じゃ俺の判断は間違つてないがな。」

「それにゆつきー君から『海未ちゃんの死角に潜め』って言われたのは本当の話やしね。」

希が幸雄からあらかじめ策を授けられていたことを明かした。

「俺は囹かよ……。」

「でも志郎くん凄いにやー！にこちゃんも絵里ちゃんも穂乃果ちゃんも一発で倒しちゃう超音速枕でも倒れないなんて！」

「どうして志郎さんは平気だったんですか？」

花陽が首を傾げながらたずねると、

「特にこれといった仕掛けはないぞ。ただ俺は生まれつき体はかなり丈夫で、小学生の頃から体を鍛えてたら更に丈夫になっただけさ。まあそれでもあと一発喰らってたらあそこで転がってる奴らの二の舞だったわけだから、まだまだ修行不足だな。」

志郎は苦笑いしながら、海未の攻撃を耐えきった防御力の秘訣を話した。

「あれで修行不足ってお前ホント身体能力が色々おかしいぜ……。」

志郎の話を聞いた幸雄は顔を引きつらせながら呟いた。

「まったく、とんだ目にあつたもんよね……。」

真姫がそう言つたため息をつくと、

「でも元はと言えば真姫ちゃんが始めたにや。」

と凜が反論した。

「ち、違うわよ！あれは希が……。」

「うちは何にも知らないけどね。」

真姫は希が始めたと言おうとしたが、その希は笑いながらしらを切っていた。

「あんたねえ！」

「えい！」

「つて何するのよ希い！」

「自然に呼べるようになったやん、名前。」

「え。」

希にそう言われた真姫は一瞬戸惑った様子だったが、ことりや凜、花陽、そして志郎と幸雄たちはやっと、素直に名前と呼べるようになった真姫を微笑ましそうに見ていた。

「本当に面倒な子やな。」

希が笑顔でそう言うのと、

「べ、別にそんなこと頼んでなんかないわよ！」

と、顔を赤くした真姫は照れ隠しをするように希に枕を投げつけた。

「はいはい、イチヤイチヤするのはそこまでにしろー。」

「イチヤイチヤなんかしてないわよ！」

真姫は幸雄に反論するが、

「とりあえず戦後処理をしてからさっさと寝ようぜ？」

と、真姫の言葉を軽く流した幸雄は死体のように転がっている穂乃果たちを指差して言った。

「そうだな。せめてタオルケットをかけ直すくらいはしてやらんとだな。」

志郎がそう言うのと、起きているメンバーで倒れてるメンバーを元の位置に戻してタオ

ルケットをかけ直してから、改めて眠りについた。

この時の出来事がきっかけで、*μ* sの間とある暗黙のルールが生まれた。それは……。

「寝ている（あるいは眠そうな状態の）海未を無理やり起こしてはいけない。」

それを破ることは、あの惨劇を再び巻き起こす事となることを意味するので、その日以降誰もそのルールを破るものはいなかったという……。

34話 朝日に誓う結束

——もしこれから先、困ってる人がいたらその知恵で助けてあげてください。

少女の声でした。

その声は穂乃果のもので、海未のもので、ことりのもので、花陽のもので、凜のものでも、真姫のもので、にこのもので、希のもので、絵里のもでも無かった。

μ sの誰でもない少女の声が誰かに語りかけていた。

——おいおい、俺の正体は知ってるだろ？困ってる奴がいたとしても俺が力を貸してやる保証なんざどこにもないぜ？

少女の声に反論する少年の声でした。

その口調からは捻くれてはいるが、どこか一本気な性格が見え隠れしている。その証拠に、少女の真っ直ぐな眼差しから目を背けることなく垂れ目の三白眼で少女の目を

真つ直ぐ少年は見据えながら反論していた。

——確かにそうだとしても、……くんはとても優しい人だからきつと大丈夫です。

少女はそう言つて少年に微笑みかけた。その笑顔は、眩しくて可憐だったがひとたび触れると消えてしまいそうなほどに儚く見え——

「……!!」

夢が覚めた。汗だくで飛び起きたのは幸雄だった。

「はあ、はあ……。ふう。」

幸雄はしばらく肩で息をしていたが、一度深く息を吸つて呼吸を整えた。

「あの時の夢か……。ちくしょう、あれからもう1年は経つてゐるのに……。未練がましいにもほどがあるだろうよ武藤幸雄……。」

幸雄は右手で自分の顔を覆いながら自分に言い聞かせるように呟き、時間を確認する

ために壁にかかっている時計を見た。

「ふああ、5時ちよつと前か。ちつと早い起きるとしよう……。」

幸雄はそう言つて立ち上がり、背伸びをして部屋を見回した。他のメンバーはまだ夢の中にいるようだったが、

「あれ、真姫と希と志郎がいねえな。」

そう、この3人は先に起きていたのか部屋にいなかった。幸雄は顔を洗いにいきがてら3人を探しに行ったが、3人とも別荘内にはいなかった。

「志郎が日課のランニングに行つてるのは確実だとして、希と真姫はどこに行つたんかね？」

幸雄は顔を洗つてから、玄関に向かい彼女たちが外出しているかを確認した。

「希と真姫の靴がねえ。やつぱ外に出てたか。」

幸雄はそう呟くと、靴を履いて外に出た。

「さて、どこにいるのかねえ。あのお二人さんは。」

外に出たはいいものの、どこに行ったかあてがないので幸雄は門を出たところで考え込んでいると、

「おはよう幸雄、お前も起きたか。」

と志郎が走り寄つて来た。

「おはようさん。日課のランニングかい？」

「まあな。俺は今終わったところだがお前もやってみるか？」

「遠慮しとくわ。それより希と真姫を知らねえか？ 起きたらいなくなつてたんだが……。」

「ああ、2人ならさつき砂浜で見かけたぞ。」

志郎は砂浜の方を指差しながらそう言った。

「そうか、ありがとよ。」

「2人に何か用事でもあるのか？」

志郎は首を傾げながらたずねたが、

「いやなにも。朝起きていきなりいなくなつたら誰だつて心配するだろうよ。」

「ははは、幸雄らしくないことを言うな。」

「うるせー。これだけ長く関わつてりや情も移るだろうよ。」

幸雄はそう言うのと砂浜の方へ走つていき、志郎もその後を追つた。

時は少し遡って、幸雄が起きる少し前……。希は日が昇り始めている海を見ていると、そこに真姫がやって来た。その気配に気づいた希は振り向くと、

「お、早起きは三文の徳。お日様からたーっぶりパワーをもらおうか。」

と真姫に微笑みながら話しかけた。

「どういっつもり?」

真姫はそれに対して、怪訝な表情で返した。この合宿の一連での希の真姫に対する行動の真意を聞き出そうとしているのだろう。

「別に真姫ちゃんのをやらないよ。」

希はただ一言そう言ったが、真姫はその言葉に隠れた希の真意が読み取れず、表情は怪訝なままだった。

「海はいいよね。見ていると大きいと思っていた悩み事が小さく思えて来たりする……。」

希は海を見ながら淡々と語った。

「ねえ真姫ちゃん。」

「ん?」

「うちな、μ sのメンバーの事が大好きなん。うちはμ sの誰にも欠けて欲しくな

いの。」

希は、真姫に自分の想いを打ち明け始めた。

「確かに、*s*を作ったのは穂乃果ちゃんたちだけど、うちもずっと見てきた。何かあるごとにアドバイスもしてきたつもり。それだけ思い入れがある。」

そう語る希の表情も口調も穏やかなものであった。だが、その言葉を通して希の、*s*に対する想いの強さを真姫は確かに感じていた。

「ちよつと話すぎちゃったかも。みんなには秘密ね？」

希はいたずらっぽく笑って人差し指を口の前に立てながらそう言った。真姫はそんな希の様子を見て、顔をほころばせると、

「めんどくさい人ね、希。」

と言った。

「あ、言われちゃった？」

希も一本取られたのかそう言い返すと、

「どつちもお互い様だったの。」

「ああ、まさに似た者同士だな。」

と別荘の方から声が聞こえた。2人が声のした方に振り向くと、そこには志郎と幸雄が立っていた。

「あれ、2人ともいつの間にか起きてたん？」

希が2人にたずねると、

「俺はさつき起きたばっかさ。志郎はランニングしてる途中でお前らが砂浜にいるのを見かけたらしい。」

幸雄はにひひと笑いながらそう答えた。

「志郎も幸雄も、盗み聞きなんてなかなかいい趣味してるわね。」

真姫は志郎と幸雄にそう言うが、真姫の顔が笑顔なのと口調が明るいのを合わせるのと、咎めるというよりは友達に対する皮肉交じりの軽口に近いものだ。志郎と幸雄は感じた。

「盗み聞きは趣味じゃないが、生憎俺さまは目が利くだけじゃなくて耳も達者でね。」

真姫の軽口に対して、幸雄もいつものようにへらへら笑いながら軽口を返した。

「真姫もだいたいぶ打ち解けてきたみたいだな！」

「そ、そうかしら。」

志郎の言葉に真姫は少し戸惑うが、

「・・・そうかもね。」

と笑顔で言った。

「3人ともええ感じじゃん。」

希は3人のやり取りを見ながらそう呟くと、

「なくに他人事のように言つてんだよ！」

と幸雄は希の肩を軽くたたき、

「希だつて、その仲間の1人じゃないか。」

と志郎がはにかみながらそう言うのと、

「ふふ、そうやね。」

と希もそう言つて笑つた。

「真姫ちゃーん！希ちゃーん！志郎くーん！幸雄くーん！！」

4人が戯れていると、穂乃果が4人を呼びながら走つて来た。もちろん、その後ろには海未やことり、凜に花陽、そしてにこと絵里も一緒に走つて来ていた。

「おせーぞお前ら〜!!」

幸雄は穂乃果たちに向かってそう叫び、

「やつと全員集合だな。」

志郎は真姫と希に向かって笑顔で言った。志郎の言葉に、真姫と希は笑顔で頷いた。

そして穂乃果たちμ、sと、そのサポート役である志郎と幸雄、合わせて11人の仲間たちは、波打ち際で手を繋ぎながら朝日が昇るのを眺めていた。

「ねえ、絵里……。ありがとう。」

真姫が絵里に照れくさそうな笑顔でお礼を言うと、

「ハラショー！」

絵里はウインクをしてその言葉に応えた。

(この合宿は大成功みたいだな……。)

絵里と真姫のやり取りを横目で見ていた幸雄は心の中で感慨深そうに呟いた。

(みんな実に清々しい笑顔をしているな。俺たちもこの笑顔を絶やさないように、全力で支えなくてはいけないな。)

志郎はμ、sのみんなの顔を見回しながら考えていた。

(そして高坂穂乃果……。人を惹きつける力においては俺に比べると天地の差があるほどに優れているが、長篠以前の俺と同じような危うさも感じ取れる……。故に何があつても俺と同じ轍を踏ませるわけには——)

「どうしたの志郎くん、穂乃果の顔そんなにじつと見て？」

「え？あ！な、何でもない！何でもないぞ……。！」

志郎は穂乃果の顔を見つめていたのをよりもよつて本人に指摘されたことに顔を赤くしながらひどく動揺した。

「……。？変な志郎くん。」

穂乃果はそんな志郎の様子を見て言うと、太陽が水平線から完全に顔を出した。

「よーっしーライブライブ出場に向けて、頑張るぞー!!」

『おおう!!』

穂乃果が昇る朝日に向かって宣言すると、11人で繋いだ手を振り上げながら皆で海と太陽に叫んだ。こうして合宿を機に、μ'sはさらに団結を深めてさらなる高みへと飛び立つのだった。

——だが、その過程でμ'sにはもちろんのこと、志郎の身にも大きく険しい試練が立ち塞がることになるという事は、ここにいる誰もが知る由も無い。

35話 若獅子の夏休み

μ s の合宿も無事に終わってから数日が過ぎて夏休みも終わりに差し掛かって来たある日の早朝、音ノ木坂学院の近辺の町中をランニングしている少年の姿があった。その少年は片手に持った手帳と睨めっこして、何か考え事をしながら走っていた。

(7月の下旬までに我が校に蔓延る数多のスクールカースト悪しき秩序のほぼ全てを崩したはいいが、このままではカーストの上位に居座っていた連中が復権してしまうのは時間の問題だ。もしこのまま奴らの影響力と支配力が戻ってしまったてはイタチごっこになるどころか、俺たちに対する対策を立てられて崩すことはおろか抵抗することすらままならなくなってしまうだろうな・・・)。

この考え事をしながら走っている少年の名は北村政康。志郎が音ノ木学院にやってくる前に通っていた音ノ木坂学院からさほど遠く離れていない場所にある神峰橋かみねばし高校の2年生である。

志郎が在籍していた頃には、今のようにな積極的な交流を持つていたわけではなく、互いに相手が転生者であったことを知らず、また自分の正体を明かすことは当然しなかつ

た。だがそれでも時々学校のどこかで一緒に昼食を食べる位には関係は良好であった。ようだ。

だがしかし、志郎が親友である秋山を救うために彼を虐めていた神崎を筆頭としたクラスのスクールカースト上位の生徒たちを叩きのめし、それを咎められて退学処分を下されるといふ噂が流れた時に彼の運命が変わる。

「諏訪部くんは理不尽に人を傷つける人じゃないんです!! 今回の事件は僕が暴力を振るわれているところを見て、それを助けるために諏訪部くんは暴力を振るってしまっただけです! 彼が退学にされるような理由はありません!! だからどうか諏訪部くんの退学を阻止するために署名をください!!」

志郎に救われた秋山は、こんどは自分が志郎を救う番だと言うかのように志郎の退学処分を反対するための署名を集める運動を始めたのだ。

(諏訪部にその身を救われたのであれば、この場合は大人しくして今後いじめられないように爪と牙を研ぐべきであろうに、この男は必ず処罰されるであろう友人を救うために自ら火中に飛び込む気か。義を守りての滅亡、我が祖父が掲げた高潔な理想はこの時代にも息づいていたというわけか。ならば・・・)

秋山の心意気を感じ入った政康は、いの一に署名をして、

「お前だけではどうにもならんだろう。俺も協力しよう。」

と自ら協力を買つて出た。署名自体はそれなりに集まりなんとか志郎の退学処分は撤回されたものの、志郎は音ノ木坂学院へと転校する事となった。

志郎が去つて暫くすると、志郎に叩きのめされた神崎率いるグループは復帰後に校長から釘を刺されたにも関わらず、今までと変わらずカースト下層の生徒たちを虐めていた。しかも今までとは違い、表向きは改心して善良な生徒に戻つた振りをして自分たちの本性を巧妙に隠すなどと更に陰湿さが増してタチが悪くなつた。

もちろん秋山はこの現状を深く嘆いていたが、

「ただ嘆くだけなら誰にでも出来る。お前はこの程度で腐る凡俗な器では無いはずだ。諏訪部を救う為に行動した時の高潔な志を思い出せ！お前なら必ずここに蔓延る悪辣な輩を駆逐し、影で怯えていたか弱き者たちを救えるはずだ!!」

と政康は秋山に檄を飛ばし、

「俺と手を組もう。共に力を付け、スクールカーストなどという腐つた秩序を崩そうではないか……!」

政康と秋山は同志となつた。

それからは秋山がいじめられている生徒たちの相談に乗つたり、どのような対策をすればいいのかを教える事で心を救い、政康はいじめの現場に直接乗り込んで武力介入を

行なったり、点在する数多のコーストを内側から切り崩したりと知略と実力行使を用いて直接的に救っていた。

そして反スクールカーソト活動を始めてから2カ月ほど経った6月に、事態は急展開を見せた。

「何?! 神崎たちの悪行の証拠を押しえただど?!」

実は秋山が相談に乗った生徒の1人が、ボイスレコーダーで神崎たちがいじめを行なっている様子の録音に成功させたという知らせが入った。

「これを教師たちに聞かせれば奴らは終わりよ!」

政康は秋山と共に職員室に駆け込み、教頭をはじめとした教師たちにその録音を聞かせたが、誰もそれを

「ははは、神崎くん達がそのような事をするわけがないじゃないか。」

と言つて信じようとしなかった。神崎たちは元々、部活や勉強などで優秀な成績を残している評判のいい生徒だったというのもあり、それほど彼らの表向きの姿が教師たちにとって好印象だったのだ。

「どうしたものか、これでは奴らを崩せない・・・!」

政康は打つ手が無くなったと頭を抱えていたが、

「あまり使いたくなくなった手だけど策がある・・・!」

「秋山は神崎たちにターゲットにされていたことのある生徒に接触し、どこで彼らから暴力を受けていたのかを聞き出した。そして神崎と同じクラスであった秋山は常と彼のグループの動向に目を光らせ、ある言葉を発するのを待っていた。

「放課後、あの場所に来いよ。」

クラスの地味な生徒に神崎が声を掛けたのを聞き逃さなかった秋山は、すぐさま政康と連絡を取ってから行動を開始した。

「うぐっ、ひい！」

「おいおい、こいつ豚みてえな声出してるぜ！」

『ぎやはははは！』

教室のドアの側で政康が来るのを待っていた秋山は、すぐにでも中でいじめられているクラスメートを助けたい気持ちでいっぱいだったが、策を成功させるために唇を噛みながら政康を待ち続けた。

「ここの空き教室かね？」

「そうなんです！ドアの立て付けが悪かったのか友達が閉じ込められてしまつて……。」

政康が教師を連れて戻つて来た。

「ここのはあまり使われてなかったからね。開けるのに力があるんだよね。よいしょ!!」

そう言つて教師がドアを開けると、

「な、何事だこれは!」

閉じ込められた生徒ではなく、1人の生徒をいたぶって楽しんでる神崎たちがいた事に教師は驚きを隠せなかった。これこそが秋山の策であった。神崎たちがいじめを行なっている現場を教師に直接見せれば絶対に信用するという物で、秋山がこの策を使うのを躊躇っていたのは誰か1人の善良な生徒を利用することになるからだだった。

当然、そのことは問題になった。さらにこの事件がきっかけで神崎たちに今までいじめられた生徒たちが次々とその被害を訴え、神崎たちの悪行のほとんどが明るみに出た。それだけでなく今まで神崎たちにおべっかを使っていたカーストの2層目や3層目の生徒たちが飲酒や喫煙をしていたという密告や自首をしたことで、さらに事態は大きくなっていき、教育委員会にもこの話題が持ち込まれるほどだった。

神崎らの保護者達は校長に息子や娘たちの処罰の軽減を嘆願したが

「私は4ヶ月前の事件で恥ずかしながら本来罰するべき生徒たちを見逃し、暴力を振るったとはいえ友人を救うために戦った義侠心溢れる誠実な生徒を追い出してしまった。故に『二度とこのような事が無いように』と見逃した生徒たちに対して戒めの言葉を送ったが、それも無駄となってしまった。残念ながらこうなってしまう以上は彼らを見逃すことはもうできないし、厳しく処罰することが私の責任であり、けじめでもあります。」

と、校長は保護者達の言葉を取り上げることなく、神崎たちを退学処分にした。神崎橋高校において最も強い影響力を持つていたスクールカーストの最上位であった神崎とその仲間たちが退学になったことと、その一件に深くかかわっていた秋山と政康によつてそれなりの影響力を持つていたカーストが複数潰されたことが重なつて、その他の微小なカーストも自然消滅することになり、神崎橋高校からスクールカーストは事実上完全に根絶やしにされたことになる――

(とにかく今の神崎橋は無秩序状態と言つても過言ではない。新たなカーストが形成され、影響力が出てくる前に秋山が掲げる『いじめの無い、みんなが平等に安全に過ごせる学校生活』という志を生徒たちに普及させたいところだが、俺たちに恨みを持つ者もそれなりにいるからなあ……)

政康の考えている通り、彼らに恨みを持つ生徒は複数存在している。その多くは秋山と政康に潰されたカーストの上位に位置してカーストの下層に位置する生徒たちに圧力をかけていた一握りの生徒たちであった。

(秋山の志を学校中に布くために俺たちに足りてないのは『正当性』だ。どうすれば正当性を得られるのだろうか……)

政康は唸りながら曲がり角を曲がり、そのまま真っすぐ道を走った。そしてしばらく走ると大きな和風の家の門に差し掛かった。

「うーん、どうしたものか．．．冷たア!!?」

唸っているといきなり足に冷たい感触がしたので、政康は普段の冷静沈着な姿からは想像できないくらい間の抜けた悲鳴を上げた。

「な、なんだ!?!．．．み、水か?なぜ水が足に．．．。」

足を見てみると、足と足元が水浸しになっていた。

「あ、すいません!!打ち水をしていたらつい．．．!」

と、黒髪の少女が政康に頭を下げた。

(ん?どこかで聞いたような声だ．．．。)

少女の声を聞いた政康はそう思ったが、ふと我に返り、

「い、いやいやこちらこそ考え事をしてたもので不注意でした!どうか頭を上げてくださー!」

と謝る少女を慌てて宥めた。

「本当にすいません、何か拭くものを持ってきますので少しお待ちください!」

と言つて少女が顔を上げた瞬間、

「あ、え．．．?いきなりですいませんが．．．もしかして園田海未さん、ですか?」

と政康はその少女の顔を見ると、少女の顔があまりにも彼が推しているスクールアイドル、μ'sのメンバーの中でも一番の推しメンである海未にそっくりだと思い、狼狽えながらたずねた。

「え、はい。園田海未は私ですが・・・？」

海未がきよとんとした顔で答えると、

「あああああああああ!!!本物の海未さんだああああ!!!申し訳ございません!とんだ!!」無礼をおおおおお!!!」

と、地面が濡れているにも関わらず土下座を始めたのだ。

「な!?!どうしたんですかいきなり!?!濡れてしまますよ!」

海未はどこからどう見ても変人にしか見えない政康を律儀に宥めようとす。

「ただでさえスマホ越しとはいえお話しできたという身に余る恩寵を受けたというのに、この俺の不注意のせいで海未さんの頭を下げさせてしまうだなんて俺はなんて不遜で不敬な男なんだああ・・・!!」

政康が頭を抱えながら自分の行動の罪深さ(?)を嘆いていると、

「スマホ越しで話・・・?もしかして、あなたは合宿の時に志郎たちが通話をしていて、

穂乃果や私とも話をした、志郎の友人の・・・、確か北村さん、でしたっけ？」

と海未は合宿の夜の出来事を思い浮かべながら政康の名を思い出した。すると、

「まさか・・・まさか海未さんに名前を憶えてもらえてたなんて・・・!!」

と政康は涙ぐみ始めた。

「いえそんな、そこまで喜んでいただけるとは・・・。」

海未は政康の喜びっぷりに少し困惑していたが、

「いいいえ！自分が推しているアイドルに名前を憶えてもらえるというのはファンからすれば一生ものの栄誉なのですから！」

と政康は笑顔でそう言うと、

「それと、この前も言わせてもらいましたが、海未さんの事本気で応援してますので!!」

と言つて走り出した。海未も、

「こちらこそ、いつも応援してくださってありがとうございます。次にライブを行う時は是非とも来てくださいいね！」

と手を振りながら政康を見送った。

「はい!!その時は是非とも伺わせていただきます!!」

政康はそう答えると全力疾走で走っていった。

「なんと言うか、少し変わってはいますが悪い人ではないみたいです。」

海未は走り去る政康の背を見送りながらクスツと笑つて呟いた。

そしてその日の昼頃――

「まさか本物の海未さんと朝から話せただなんて……。この幸福感だけで何でもできそうな錯覚に陥つてしまいそうだ。」

政康は朝の出来事を思い返しながら、日差しが照りつける街中を歩いていた。

「いやー、今日の学校の講習会大変だった〜！」

「雪穂の苦手な科目だったもんね〜。」

（見たところ中学生か？そうか、もう夏休みとなると受験勉強に本格的に身を入れ始める時期だもんね。実に勤勉な娘たちだ、感心感心。）

すれ違った中学生の少女たちを横目で見ながら微笑ましそうな顔でうんうんと頷きながら歩いていると、

——ちやりん

という音が政康の後ろの方から聞こえた。政康が音がした方を見ると、地面にキーホルダーが落ちていた。

「はて、先ほどの娘たちが落としかたか？」

引き返して拾ってみると、それはスクールアイドルシヨップで売られていた海未の写真が描かれていたキーホルダーだった。

「おーい！その中学生のお嬢さん方々！！キーホルダー落としてるぞー！」

政康は多分落とし主だと思われる少女たちを追いかけながら声を掛けた。

「え、私たちですか？」

政康の声に答えたのは、赤みがかかった茶髪の少女だった。

「ああ、君たちとすれ違った後にこれが落ちた音が聞こえてね。」

政康がキーホルダーを差し出しながらそう言うのと、

「あれ、これ亜里沙のじゃない？」

「あ！ほんとだ！！ハラシヨー、ありがとうございますお兄さん！」

と、金髪の少女が自分の鞆にキーホルダーが付いていなかったことに気付いて、拾い

主である政康にお礼を言った。

「いやあ、例には及ばないよ。君もμsの……園田海未さんのファンなのかね？」
「はい!!」

「へえ、お兄さんもファンなんですか？」

金髪の少女、亜里沙は無邪気に返事をして、茶髪の少女が政康にたずねると、

「ああ、俺もファンなんだ。俺は北村政康、神峰橋高校の2年生だ。」

と、政康は自己紹介をした。

「神峰橋ってあの進学校ですか？」

「雪穂、知ってるの？」

「うん、音ノ木坂に受験するって決める前の志望校の候補だったからね。」

亜里沙にたずねられた雪穂がそう言うのと、

「ほう、君たちは音ノ木坂学院が志望校なのか。」

と政康がたずねた。

「音ノ木坂は私のおばあちゃんやお母さん、そしてお姉ちゃんが通ってる学校なんです
が、私はちよつと迷ってるんです。」

茶髪の少女、雪穂は政康の言葉に少し苦笑いをして応えた。

「亜里沙のお姉ちゃんも通ってるんだ！だから私も通いたくって!!」

金髪の少女がそう言うと、政康は微笑ましそうに、

「ははは、君はお姉さんのことが好きなんだな。」

と言った。

「はい、自慢のお姉ちゃんです！」

「そう言えば、君たちの名前聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

政康が思い出したように2人の名前をたずねた。

「あ、そうですね。お兄さんが名乗ったのに私たちも名乗らないと失礼ですよね！私は高坂雪穂って言います！」

「

私は絢瀬亜里沙！お姉ちゃんは絵里って言うの！」

「ん!?絵里・・・絢瀬・・・。もしかして、君はあの絢瀬絵里さんの妹さん!？」

政康が驚いた様子で尋ねると亜里沙は、

「うん！あと雪穂は穂乃果さんの妹なんですよ！」

と返事をした後に、雪穂が穂乃果の妹であることを紹介した。

「これは驚いた。まさか、sのメンバーの御姉妹だったとは！確かによく見ると面影はあるな・・・。」

政康は穂乃果と絵里の写真と雪穂と亜里沙の顔を見比べながら言った。

「そんな驚かれるようなものじゃないですよ。」

雪穂は大きな振る舞いを見せる政康にそう言うが、満更でもないようだった。

「いやあ、まさか今日は海未さんと偶然であつたとはいえ直にお話しできたうえに、穂乃果さんや絵里さんの妹御とも知り合うことになるとは色々運に恵まれすぎている気がするな！」

政康はまさに有頂天といった様子であつた。

「あの、政康さん！」

「ん？何か用かな亜里沙さん。」

「あ、私たちは年下なので呼び捨てでいいですよ！それよりももしよろしかったら連絡先を交換していただけませんか!?!」

亜里沙は意を決したかのように政康に連絡先の交換を申し出た。

「え、!?!亜里沙つてばもしかして政康さんのこと……!?!」

それを聞いた雪穂は驚きのあまりに目を丸くしながらそう言うのと、

「違うよ雪穂！政康さんも海未さんのファンだって言うから、もっとお話ししたいな〜って思っただけだよ！」

と亜里沙は頬を膨らませながら説明した。

これに対して政康は、

（オイオイ、これは大丈夫なのか!?別に連絡先を交換するだけなら法律上は何の問題も無いはずだが、現代では家族や顔見知り以外の年下の女性に声を掛けただけで罪人扱いされかねんという話を聞いたがこれは大丈夫なのか・・・?いやしかし、雪穂や亜里沙とは今この時を以て顔見知りにはなつたわけだし、恐らく彼女たちも穂乃果さんや絵里さんの親族であるからして海末さんとも知り合いだろうからいざという時は弁護してもらえるか?いや、それにしても絵面的に大丈夫かこれ・・・）

と、内心では凄まじく葛藤していたが、同じく海末のファンである同志を得た喜びが勝り、

「ああ、分かった。ただし受験勉強は怠らないようにな?憧れの姉と同じ高校に入れなくて本末転倒であろう?」

と、受験も頑張ることを条件に亜里沙の申し出を聞き入れた。

「はい、頑張ります!あ、もし勉強で分からないことがあつたら聞いてもいいですか?」
亜里沙が笑顔で返事をした後にそうたずねると、

「あー!亜里沙ずるい!!絵里さんもいるのに勉強教えてくれる人もう一人増やすなんて!うちなんかお姉ちゃんが頼りにならないってのに!」

と雪穂が亜里沙に抗議した。政康はそれを見ると笑つて、

「ははは、なれば2人そろつて勉強のサポートをしてやらねば不平等になってしまう

な。」

と言つて、雪穂とも連絡先を交換した。

「では長く引き留めてしまつて済まなかつたな。2人とも、音ノ木坂に入れるように励めよ!!」

『はい!!』

こうして政康は雪穂と亜里沙と別れを告げた。そして2人の後ろ姿が見えなくなつたのを見届けると、

「コソコソと覗き見とは感心せんな。姿を見せたらどうだ『下郎』。」

と、さつきまでの和やかで紳士的な雰囲気とは打つて変わつて威圧感と殺気が入り混じつた表情で言うと、政康の後ろの曲がり角から、政康と同じ年と思われる男子と女子が1人ずつ出てきた。

「いつからそこにいたかは知らんが、俺を相手に盗み聞き盗み見の類を働こうとはい

度胸だな。」

政康は身体を2人組の方には向かせず、顔を少しだけ動かし横目で見ながら語り掛ける。

「あの子たち音ノ木中の子たちよね？中学生相手にデレデレするなんて、あんたロリコンだったのね。」

「散々偉そうなことを俺たちに言いたいだけ言ってやがったくせにロリコンとか冗談でも笑えねーよな。まるで生徒に手を出す教師みてーだな！」

2人組の男女が政康を嘲笑すると、

「ふん。貴様らのような自らの行いを悔い改めず、その結果自分たちの行いの報いで退学となった下衆どもに嘲笑されるような謂いわれは無いのだがな。なあ、木下に三沢よ？」

と逆に2人を嘲笑った。人生を一度経験しているだけあって、普通の高校生ならば怒って掴みかかろうとしかねないが、政康にとってはこの2人の発した悪口は子供の戯言にしか感じられなかった。

『……！』

政康を嘲笑うはずが逆にしてやられた木下と三沢は怒りに顔を歪めるが反論することは出来なかった。

「して、今さら何の用だ？まさかただ俺に嘲笑われに来たなどというドMのような真似

をしに来たわけじゃないだろう?」

政康が海未や後輩である雪穂や亜里沙の前では決して見せないような意地の悪い笑いを浮かべながら2人に問いかけた。

「なんですって……!」

2人組の片割れである女子、三沢は政康の言葉に不快感を露わにする。

「まさかとは思うが退学になったことで俺を逆恨みして復讐に来たなどという戯言でも言いに来たか? 冗談も大概にしてくれ! 志郎に直接復讐する気概も持たない貴様らが俺に勝てるだけでも? フハハハハハ! こいつは傑作だな、そんじよそこらの売れない芸人の漫才よりは面白いな!!」

政康はそう言つて1人で爆笑し始めた。

「この野郎……! ふざけんじゃねえ!!」

2人組の片割れの男子の木下は、そう言うや否や政康のもとに走り寄つて思い切り彼のわき腹を蹴り飛ばした。

「……!?!」

政康は木下の行動が予想外だったのか蹴りを受け止めきれずによるめき、近くにあつた電柱にぶつかつてそのまま倒れた。

「だいたいなあ! お前や秋山が余計な事をしてくれたせいで俺たちの人生が滅茶苦茶に

なつたんだ!!陸上部でインターハイに出られるはずだったのにお前らの……いや、元はと言えば諏訪部の奴のせいで!!」

木下は倒れ伏した政康を何度も蹴りつけながら、憎悪のこもった罵声を浴びせた。

政康と秋山の手で退学に追い込まれた神崎らカースト上位グループは、勉強や部活と言った何かしらの分野で優秀な成績を修めており、今まで犯してきた悪行が暴かれ、退学処分を下され学校を去ることになったことでそれらの功績がほとんど無駄になった。

そんなわけで彼らは自分たちの栄光への道を台無しにした政康や秋山、そして自分たちが没落するきっかけを作った志郎に対して憎悪を抱いていたが、彼らが退学になった理由は自業自得と言っても過言ではないので同情する価値は皆無と言って良いほどである。

「はあ、はあ……!この程度で終わると思うなよ。てめーはもつといたぶってやらなきや気が済まねえんだ!!」

木下はそう言つてもう一度足を振り上げた——が、

「なんだ、この程度か。」

今までただされるがままだった政康はそう言うのと、今まで蹴られていたのがどうって

事ないと言わんばかりにすくりと立ち上がった。

「な!？」

木下は政康がピンピンしているのに驚きを隠せず、口をポカンと開けていた。

「流石は陸上部のエースの一人なだけあつて蹴りは見事だったが、これじゃあ拍子抜けだな。」

政康は体中をはたきながらそう言った。

「ふざけんな……。ふざけんじゃねええええええ!!」

木下はそんな政康の様子を見て馬鹿にされたと思ひ込み、政康の顔面に殴りかかり拳を左頬に打ち込んだが、

「やはり、志郎に直接復讐を挑む気概の無い輩の力などこの程度か。」

それも通用しなかった。

「ひっ……!!」

木下は拳を引こうとするが政康に右腕を掴まれた。勿論抵抗しても彼の拘束を抜ける気配は全くなかった。

「ふふふ。志郎のものには劣るが……この俺が本物の、魂のこもった拳を教えてやろう。」
政康はそう言い放つと、木下の鳩尾みぞおちに拳を叩き込んだ。

「うっ!!」

政康の渾身の一撃を受けた木下はその場で腹を押さえて蹲った。

「さて、木下は無事返り討ちにされたわけだが貴様はどうする?」

政康は三沢の方に視線を移し、余裕綽々な様子で語り掛ける。

「……れ。」

「は?」

「黙れええええええええ!!」

三沢は激高したかと思えば、ナイフを構えて政康に突っ込んできた。

「……!」

志郎と互角に戦える政康ならばそれを避けるのは容易い。だが政康は避けなかった。

敢えて避けることなく三沢の怒りのこもった刺突をそのまま腹に受けた。

「はっ!ぎまあないわね!!こうなったのも全部あんた達が」

「俺たちのせい、というわけか?」

「!!」

なんと政康は腹にナイフを突き立てられているというのに、何事もないかのように三沢の言葉に答えた。

「な、なんでよ……!!?なんで腹を刺されたのにあんた、平然としてんのよ!!」

三沢はひどく狼狽えながら平然としている理由を尋ねる。

「生憎だが、俺は実力行使を好まない秋山に代わってスクールカーストを潰して回っていたおかげで貴様ら以外のスクールカースト上位に位置している連中……総じて2、30人ほどの生徒からも恨みを買っていてね。だからいつでも刺されるか分かったものではないからな……。」

政康がそう言いながら服をたくし上げると、

「ああ!？」

三沢は政康が平気だった、あまりにも単純過ぎる理由に驚いた。

「だからこうして雑誌を腹と背中に仕込んでおいたのだよ!もつとも、ジャ○プやマ○ジンのような週刊誌では分厚すぎて色々不便だし不自然だから手頃な厚さのヤン○○ガジンを使っているがな。しかしお前が女で助かったよ。お前が男だったらもう3センチほど食い込んで腹に刺さるところだった。」

政康はナイフで真ん中に穴を開けられたヤン○マ○ジンをひらひらさせながらそう言った。

「……っ!!」

打つ手が無くなった三沢はそのまま逃げようとしたが、政康は難なく彼女に追いつき立ち塞がった。

「お前にしろ木下にしろ、貴様らはいつもそうだ。自分が今まで積み重ねてきた行いを

省みることなく全て他人のせいだとのたまう……！先月に下校中の秋山を襲ったが失敗した村本や、この前俺を闇討ちしようとして返り討ちにされた遠藤、金田、大島……。あの件で退学となった連中は揃いも揃って馬鹿の一つ覚えのような恨み言しか言えんのか!! だいたい貴様ら、そんなに自分の功績が大事だったなら最初っからいじめなどなくだらない事をせず、部活や勉強に励んでいたらよかつただけの話だろうが!!」

政康は三沢の言い分に対して一喝し、

「……だが解せん事が一つだけある。どうして貴様らは退学させられてからしばらく経った頃から俺と秋山を狙いだした？ それに何故あれほど憎んでいる志郎に手を出さない？」

と、自分たちを狙う理由をたずねた。

「……そんなの私たちの勝手ですよ。」

三沢はそっぽを向き、政康の質問に対して答えようとしなかった。

「答えないか、まあこっちはもう予想が付いてるから別に構わん。恐らく神崎の差し金だろうからな。」

政康が自分の推測を口にするると三沢は何故知つていると言いたそうな表情で政康を見た。

「ふん、やはりか。だが奴の事だ、貴様らは捨て駒に過ぎんだろ。」

「神崎くんがそんなことするわけ無いじゃない!! 神崎くんは私たちと一緒にあんだや秋山、そして諏訪部に復讐するために計画を立ててるのよ!」

「ほう?」

「精々余裕ぶっこいてなさい、後で痛い目に合つて惨めに泣く羽目にあうのはあんだ達なんだから!!」

三沢は勝ち誇つたようにそう言つて笑つていたが、

「盛り上がつてるところを悪いが、神崎が何やらきな臭い動きを見せていることぐらいつつに予想できてるんだよ。」

政康はそう言つて三沢の顔にアイアンクロ―をかました。

「な……がつ、何するのよ……! 女の顔に手を出すなんてあんだ正気!!」

三沢は政康に抗議するが、

「くだらん。俺は関東の王、関東に住まう万民を平等に愛し慈しむ事こそ我が使命だ。しかしだからと言つて甘やかすと言うわけではない。罪を犯した者がいればたとえそれが男であろうが女であろうが平等に裁くことも王たる俺の責務なのだ。今時の歪み切つたフェミニズムがその崇高な使命を揺るがせられると思うな!」

政康は堂々と自分の持論を語りあげる。

「は……ああ!?! 王? 何言つてんの、頭イかれてんじゃないの!?!」

三沢は政康が唐突に言い放った言葉に困惑する。

「ともかく、奴がどの様な下劣でくだらない策を弄するかまでは知らんがこれだけは言っておいてやる。関係のない者を巻き込むような真似をしてみろ。その時は貴様らを全員八つ裂きにして血祭りにあげてやるからな!!」

そう言い放つと、政康は手を離して獅子のような眼光で三沢を睨み付けた。

「女の顔に手上げるなんてあんたの方がよっぽど下劣よバーカ! 覚えてなさい!!」
「ぐぐ……、この借りはいつか返してやるからな……!」

三沢と木下は捨て台詞を吐いて逃げるように走り去っていった。

「やれやれ、下郎は失せたか。」

2人が立ち去ったことで、政康はため息をついた。

「しかし、神崎のグループのメンバーであるあの2人がああ言っているという事は神崎のあの噂は本当なのだろうな。であるならば俺も少し早いが『あの計画』を実現させ、戦力を早いうちに整えておかねばならんな。」

政康は深刻な表情でそう呟き、更に戦略を練る必要性を感じながら歩き出した。

神峰橋高校に安寧をもたらさんとする、志郎がかつて救った秋山とその同志であり志

郎の盟友でもある政康。そして志郎たちを恨み、復讐を果たすために裏で暗躍する神崎一派。

志郎と幸雄、そして穂乃果たち μ 、sの知らないところで、2つの影が水面下で動き始めた。

そして、本来ならば無関係であるはずの幸雄や μ 、sまでもがそれに巻き込まれることになろうとは、この時はまだ誰も予想していなかった。

36話 さらなる躍進と小さな歪み

夏休みが終わり、2学期が始まって少し経った頃のとある朝――

「まだまだ暑いなあ。早く秋になってくれたら嬉しいんだが……。」

「おーーーーーい!!志郎ーーーーー!!!」

志郎が9月になっても8月譲りの暑さが続いていることに対して愚痴をこぼしながら歩いていると、後ろから幸雄が大声で志郎を呼びながら全力疾走してきた。

「なんだよ幸雄、珍しい慌てっぷりじゃないか。」

「むしろ俺はお前の冷静さにびっくりしてよ……。『アレ』を見てどうしてそんないつも通りでいられるんだつつうの!」

「『アレ』ってなんだ?」

「はあああああ!?!お前まさかまだ見てないのか!?!」

「ニユースはいつも見てるがそんな驚くようなものは……。。」

「ち、が、う!!ラブライブの予選のランキングだ!!お前、μ'sの補佐役でありながらチェックを怠るってどういう了見だ全く!!」

幸雄は志郎に対して文句を言いながらポケットからスマホを取り出してその画面を

志郎の目の前に突き付けた。

「なになに……。なっ?!19位だと?!」

志郎は画面に映っていた数字に驚いた。予選ランキング19位、ライブの本戦に出られるのは20位までだから、sも本戦への出場権に手が届いたという事になる。

「幸雄……。これ……。これ……。!」

「すげえだろ志郎……。言葉も出ねえだろ……。!」

「ああ!!あの寂しいファーストライブからだいたい4、5か月……。どん底からのスタートだったというのによくぞここまで……。!!」

志郎と幸雄は互いに肩を組みながら、喜びを噛みしめた。

「いやあしかし感慨深いもんだ!!」

「そうだな。だが、ここで喜んでばかりはいられんぞ幸雄。」

志郎は先ほどまで喜んでいたが打って変わっていつも通りのテンションに戻った。

「やれやれ、もう少しぐらい喜んでてもバチは当たらんだろうに。」

幸雄は志郎の変わり身の早さに苦笑いしながら言った。

「こうやって何事も上手く行っている時が一番危ないんだ。慢心していれば足元を掬われる……。あいつらに俺と同じ轍を踏ませてはならんのだ……。!」

「気持ち分かるがね、もう少し気楽に行ったらどうよ?」

「・・・すまん。お前の気遣いは嬉しいが、こればかりはどうにもならんのだ。」

志郎は自分の肩に置かれた幸雄の手をゆっくりと離しながら言った。

「そうか・・・。だが、そんな辛気臭え態度はあいつらの前では取るなよ?」

「そうだな。いつもどおりが一番かもしれないな。」

志郎はそう言うのと、強張っていた表情をほぐすために笑ってみせた。

「それにしても、きつと穂乃果はすげえ舞い上がってんだろうな。」

「凜あたりもそうかもしれんな。あとにこも表面は隠しても案外・・・。」

志郎と幸雄は、話を切り替えて音ノ木坂学院へ続く道を歩いて行った。

そして志郎が教室に着くと、穂乃果の席の周りが少し賑やかになっていた。

「よお、どうしたんだ?」

「あ! 志郎くん!! 私たち19位に」

「それはさつき幸雄から聞いたぞ。」

「ちえー・・・。もうちよつと喜んでくれてもいいじゃん!」

「すまん、さつき幸雄と盛大に喜んでたんでな。それよりもミカはなんで色紙なんか持ってるんだ?」

志郎はミカが持っている色紙を指差してたずねた。

「ああこれ？実は穂乃果と園田さんにサインを書いてもらったんだ！」

と志郎に色紙を見せた。

「ほお……。でつか！穂乃果の字でかすぎだろ!?でかすぎて最後の『果』の部分だけ小さくなってるし！もう少しバランスを考えて書いたらどうなんだ全く……。」

志郎は色紙に大大と書かれた『高坂穂乃』と小さく書かれた『果』の字を見て呆れかえった。

「えへへ……。サインとか書いたことないし……。」

「まあこれも味があるとして、海末のサインはどこにあるんだ？」

志郎は海末のサインがどこにあるのか、色紙を隅から隅まで見ながら探していると、
「小せえ!!今度はよく見ないとわからんぐらい小せえ!!」

色紙の隅っこに丁寧な字で書かれた『園田海末』の字を見てまたツツコミを入れた。

「すいません、恥ずかしくって……。」

「いやいや、流石にサインくらいはもうちよつとでかく書いても平気だろうに……。」

顔を赤くしながら弁明する海末に対しても志郎は呆れていた。

「実はさつき矢澤先輩にも頼んだんだけど、『すいません、プライベートなんで。』って断られちゃって……。」

フミコはここにもサインを頼んだらしいが素っ気なく断られたらしい。

「なんて言うか、どんな感じで言つてたのかが目に浮かぶな……。」

「私たち、芸能人つてわけじゃないし……。」

志郎と穂乃果はこの様子に苦笑いしていた。

「まあ、とにかくにこのそれはアイドルとして意識の高さから来てるものだから許してやってくれ……。」

「あれ？ 諏訪部くんも先輩後輩やめてるの？」

「ああ、一応俺たちもアイドル研究部員つてことだな。」

「すごい、こっちはマネージャーみたい！」

志郎はヒデコに穂乃果と同じように先輩の名をフランクに呼んでいることを指摘され、それに対して答えた。

「あれ？ そう言えばことりちゃんは？」

穂乃果がそう言うのと、その場にいた5人が一斉にことりの席を見た。

「なんか用事でもあるんじゃないか？」

「幸雄もいませぬ。さっきの話を聞いたところ、一緒に来てたように聞こえたんですが……。」

「ほんとだ。幸雄め、いつの間に何処に消えたんだか。」

そんな話をしていた頃、穂乃果たちの教室がある階の階段にて……。

「……。」

ことりが手に何かを持って立っていた。その表情は明るいとはお世辞にも言えないものだった。

そしてことりが立っている壁のすぐ近くの曲がり角で……。

(なんかこつりの様子がおかしいと思つて付いて来てみたら、なんか不穏な臭いがしてきたぞ……。？しかも手に持っているのは……エアメールの封筒じゃねえか。)

幸雄は、志郎と一緒に教室に向かう時にこつりとすれちがい、彼女の様子がおかしいと感じたのでそのまま付いて来ていたのだ。

「……これは何か厄介なことになりそうだ。勝頼さまの耳にも入れておく必要があるな。」

幸雄は、乱世で培ってきた直感から一波乱ありそうな予感を感じ取り、無意識に昌幸時代の口調でこつりに聞こえないように呟くと、足音を出すことなくその場を後にした。

「・・・そうか。ことりの様子がおかしいとは思ってはいたが、そのような事があつたとはな。」

放課後の誰もいない空き教室で、幸雄は朝に見たことりの様子を志郎に報告した。

「ああ。だがことりが何を思い悩んでいるかまではこの俺の目を以てしても把握はできなかつた。」

「そりやお前は超能力者ではないから無理もないだろう。それにしてもエアメールか・・・。」

「そこが引つかかるんだよな。いつそことりに聞いてみるか？」

「いや、それはまだ時期尚早だ。もう少し様子を見てからでも遅くは無かろう。」

ことりに悩みの内容を聞いてみるという幸雄の提案を志郎は却下した。

「志郎、さつきも言ったがお前少しばかり慎重すぎやしないか？昔のようにとは言わんが、もう少し突き進むように動いてもいいと思うんだが・・・。」

幸雄は、頑なに慎重な行動をしようとする志郎を心配していた。

「お前の言いたいことは分かる。だが、今はあいつらにとつて大事な時期なんだ。俺たちが勝手な行動をとつて足を引つ張るようなことはあつてはならん。それに、sは9人で1つのグループなんだ、1人が動揺すればそれが瞬く間に全員に伝播して士気に

も影響が出かねん。それに何より……。」

「お前の二の舞を演じさせたくない……だろ？」

「そうだ。あいつらには俺と同じ過ちを犯させてはいけない。まして成功続きで勢いに乗っているこの時が一番怖いのだ。もしそんな時に長篠の戦に匹敵するような失敗を犯してしまうようなことがあつてみる、下手をすれば、s 自体が……。」

「おいおいおいちよつと待てよ志郎、そいつは考えすぎだぜ。確かにお前さんの経験から来るその危機感是从からんでもないが……。あいつらが、ましてやあの穂乃果がそんなことで折れるわけが……。」

幸雄は悲観的な考えに進む志郎をフォローするが、

「いや、何も俺は被害妄想でこんなことを言っているわけではないんだ。それに、考えすぎでもないし根拠もあるんだ。」

と志郎は首を横に振りながら断言した。

「根拠だと？」

「ああ。実はこの時代に生まれてから、何か悪い事が起きる前になると昔の夢を見るようになったんだ。」

「昔の夢……。」

「しかもそのほとんどが長篠での戦か俺が死ぬ前の甲州崩れの時の夢なんだ。大体この

夢を見ると悪い事が起きるんだ。その夢が鮮明であれば鮮明であるほど近いうちに悪い事が起きるようになっていくんだ。」

志郎が言うには、悪い事が起きる前触れとして長篠の合戦や、甲州征伐、天目山・田野の戦いの夢を見ることがあり、その夢が鮮明か曖昧かで凶事が起きる時期が変わってくるらしい。

「小学生の時もひどく鮮明な長篠の戦の夢を見て、その次の日に交通事故にあつたことがある。」

「マジかよ……。」

(もつとも、神峰橋高校にいた頃に秋山がいじめられてるところを見て神崎たちを叩きのめした時も、前日に天目山の夢を見たんだがな。だがあの事件は音ノ木坂で知り合った奴には黙っておこう。)

幸雄は、志郎の言う夢のジンクスがそれなりに根拠のある話だと知って驚きを隠せなかった。

「それで、志郎は今日その昔の夢を見たのか？」

幸雄は恐る恐る志郎にたずねた。

「ああ、見たとも。だが、今回見た夢は霧がかかってぼんやりとしていた。恐らく凶事が起こるのはまだ先の事だろう。」

「そうか……。まあ、時間があるってんならそれなりに対策が立てられそうだな。」

幸雄は志郎の言葉に安堵のため息をつきながら答えた。

「ああ。ゆえに出来るだけ慎重に、そしてわだかまり無く解決できるようにしなくてはならん。」

「やれやれ、今までで一番厳しい任務になりそうだ。」

「分かつてはいるだろうがここで話したことは誰にも漏らすなよ？ μ, sは繋がりが強い分、噂が広がるのも早い。この動揺をこれ以上広げてはならない。」

「分かつてるさ。お前さんがそう言うなら俺もその通りに動く。」

幸雄は志郎の言葉に同意した。

2学期が始まり、μ, sはさらなる躍進を遂げようとしていたが、その影で小さな綻びが生まれつつあった。

37話 憂う若虎

志郎と幸雄が空き教室での密談を終えて、穂乃果たちと合流するために部室へ向かっているところにこそ先頭にムサシが揃って歩いているのを見つけた。

「お前らこんなところで何してんだ？」

「まだ練習は始まってないのか？」

「ええ。でもその前に私たちには決めなくちゃならないことがあるのよ。」

志郎と幸雄の疑問に絵里が答える。

『決めなきやならないこと？』

2人はそれが何なのか思い当たらず、首を傾げた。

「見れば分かるわ。付いて来て！」

そうして絵里たちに付いて行つた先にあつたのは――

「やったやったー!!」

「部長ー!!」

「茶道部、午後3時からの1時間、講堂の使用を許可します!」

『やったー!!』

学園祭における講堂の使用権を決めるくじ引きの会場であった。会場と言っても、それは生徒会室を利用した小規模なものであった。

「・・・なんで講堂がくじ引きなわけ?」

「昔から伝統らしくて・・・。」

納得いかないような表情で呟くにこに対して、絵里は苦笑いで答えるしかなかった。

「いやいや、これは残しておくような伝統でもないだろ。」

「というかそもそも茶道部が講堂を1時間も使う必要つてあんのか・・・?」

志郎も幸雄も、本当にこのくじ引きが必要なのかどうか疑問を抱いていた。

「にこちゃん!」

「!!」

部長としてくじ引きを任されたにこは、覚悟を決めて抽選器に向かって歩き出した。

「では、続いてアイドル研究部・・・ひっ!」

「・・・見てなさい!!」

「が、頑張ってください・・・。」

にこのあまりにも険しい表情に抽選会の役員を務めている生徒も気圧され、ただ苦笑いで健闘を祈る言葉をいう事しかできない様子だった。

「にこちゃん、頼んだよ!!」

「講堂が使えるかどうかでライブのアピール度は大きく変わるわ!!」

「これでこの後の戦略に大きく影響が出るぞ!!」

穂乃果や絵里に続いて、志郎もここへ期待の言葉をかける。ここはメンバーの期待を一身に背負い、抽選器のハンドルに手をかけ、抽選器を回した。

穂乃果は結果が気になるのかにこの側に付き、ことりと海未と絵里は緊迫した表情でそれを見守り、一年生たちは生徒会室の隅っこで不安そうな表情で成り行きを見守り、希はどこから取り出したのか、数珠を持って手を合わせてにこに念を送っていた。

一方で志郎たちは、

「南無八幡大菩薩に諏訪大明神よ、どうか我らにご加護を・・・!」

「白山大権現よ、どうかにこにお力を・・・!」

と、自分たちがかつて信奉していた神仏に祈りを捧げていた。それほど大事な局面だという事が伺える。

「・・・!!」

そして遂に抽選器から、穂乃果たちの運命を決める玉が落ちてきた。その色は――

「……っだああああ!!」

白。それは福引においてハズレを象徴する色だった。

「残念！アイドル研究部、学園祭で講堂は使用できません!!」

そのあまりにも残酷すぎる現実を告げる言葉に、その場にいたμsのメンバーもみんな床に崩れ落ちた。

「……うそ。」

ここはその現実を目の当たりにして呆然とするしかできず、

「ファツキンジーザス!!!」

幸雄は頭を抱えながら怨嗟の言葉を叫び、

「くそっ！分かっていた……。天運が如何に人に対して残酷なものか分かっていたのに……。!!」

志郎も拳を床に打ち付けて、天運が如何に残酷であるかを改めて実感させられた。

「どおとおおしよおとおお!!」

穂乃果の悲痛な叫びが屋上に響き渡る。

「だつてしようがないじゃない!!くじ引きで決まるなんて知らなかったんだから!!」

「あー!開き直つたにゃ!!」

「うるさーい!!」

「ひいー!」

凜がにこを責めるが逆に一喝を受ける羽目になっていた。

「うう・・・、なんで外れちゃつたのおく・・・?」

花陽に至つては本気で泣き出す始末であつた。

「ま、予想されたオチね。」

「ああ、これぞ約束された勝利のオチつてヤツだな・・・ハハッ。」

真姫は随分とドライな様子で割り切つていたが、似たようなセリフを言つた幸雄は目が死んでいるうえに乾いた笑いを浮かべていた。

「にこつち・・・。うち、信じてたんよ・・・?」

「うるさいうるさいうるさーい!!悪かつたわよおく!!」

希の言葉を受け、散々責められ続けていても耐えていた流石のにも参つたのか、地団太を踏みながらみんなに謝る。

「まあ、こればかりは本当に天運次第だから仕方ないさ……。」

志郎はこの肩を叩いてフオローした。

「志郎の言うとおりね。とりあえず気持ちを切り替えましょ。講堂が使えない以上他のところでやるしかないわ。」

絵里はみんなに気持ちを切り替えるように促す。

「とは言つてもだ。ライブで使えそうな体育館やグラウンドは当然のことだが運動部に占拠されてるぜ?」

「ではどこ?」

幸雄が体育館やグラウンドが使えないことを示唆すると、海未をはじめとして他のメンバーは他に仕える場所がないか考え始めた。

「……部室とか?」

「狭いよ!!」

ここは部室を挙げたが、穂乃果の指摘であっさり却下となった。部室も普通の教室並みの広さなのでライブをやるのが難しいから無理もない話である。

「あ、じゃあ廊下は?」

「馬鹿丸出しね。」

「にこちゃんがくじ外したから必死で考えてるのにー!!」

「まあ、廊下は出し物の宣伝をする奴らや客が通るし……。」

今度は穂乃果が提案するが今度はにこにあつきり却下された。穂乃果は納得いかない様子だったが志郎がそれを宥めた。

「他には……。」

絵里が周りを見回しながら使えそうな場所を考えていると、

「じゃあ……!!屋上でやろうよ!!」

『えっ?』

穂乃果が突然出した提案に彼女以外のメンバーは驚きの声を出した。

「ここに簡易ステージを作ればいいんじゃない?ここならお客さんもたくさん入るだろうし!」

「屋外ステージ?」

「確かに、たくさん人は入るけど……。」

希とことりも穂乃果の案は悪くないとは思っているようだが、まだ決定に踏み切れそうな様子でもなかった。

「何よりここは私たちにとってすごく大事な場所!ライブをやるのに相応しいと思うんだ!」

穂乃果は屋上が、sにとって大事な場所であり自分たちのライブに相応しい場所

でもあることをみんなに語り掛ける。

「野外ライブ、かつこいいにや〜!!」

凜は穂乃果のアイディアに乗り気であった。

「でも、それなら屋上にどうやってお客さんを呼ぶの？」

「確かに、ここだとたまたま通りかかる事もないですし・・・。」

絵里と海未はどのようなように観客を呼ぶのかを穂乃果に聞いた。屋上は目立ちにくいので海未の言う事ももつともである。

「下手したら一人も来なかったりして。」

「ええ!?それはちよつと・・・。」

「じゃあ、おっきな声で歌おうよ!!」

「はあ、そんな簡単な事で解決できるわけが・・・。」

「校舎の中や外を歩いているお客さんにも聞こえるような声で歌おう!そしたらきつと、みんな興味をもって見に来てくれるよ!!」

穂乃果の突拍子もない思いつきに呆れるにこの言葉を遮り、穂乃果は自分たちの歌声で観客を呼ぼうとみんなに提案した。

「ふふ、穂乃果らしいわ。」

「・・・だめ?」

「いつもそうやってここまで来たんだもんね、μ s ってグループは。」
「えへへ……。」

穂乃果の提案を聞いた絵里はそう言つて穂乃果に微笑んだ。それは、敵というわけではなかったがμ s の前に立ちはだかり穂乃果たちの事をよく見てきた彼女だからこそ言える言葉であつた。

穂乃果もそんな絵里の言葉を聞いて顔をほころばせた。

「決まりよ！ライブはこの屋上にステージを作つて行います！」

「確かに、それが一番μ sらしいライブかもね。」

「よし！凛も大声で歌うにや〜!!」

「大声で歌うつてのも悪くはねえが、学園祭で喉を哽らしちゃあシャレにならねえから、俺たちはチラシとか作つて客引きしてやるよ。」

絵里の決定に反対する者は無く、満場一致で屋上でライブを行うことが決まつた。

「じゃあ各自、歌いたい曲の候補を出してくること！じゃあ練習始めるわよ!!」

そして練習が終わつた後、穂乃果とことりが校舎の前を歩いてた。

「ああ〜！ライブ楽しみなあ!!ね、ことりちゃ……ん？」

「……」

穂乃果は、来たる学園祭でのライブが待ち遠しくてしょうがないといった様子であったが、ことりはそんな穂乃果とは対照的に、どこか気分がすぐれてないような表情だった。

「あのね、穂乃果ちゃん……」

「ん？」

「あのね……」

「？」

「……ライブ、頑張ろうね！」

ことりは、穂乃果に何かを伝えようとしたがそれを言葉にすることができず、無理に笑顔を作つて誤魔化していた。

「うん！行こう！」

穂乃果は、そんなことりの心中を知つてか知らずか陽気に返事をして、そのまま歩きだした。ことりがその後ろで再び憂鬱そうな表情に戻つていたことを知らずに……。

「盗み見なんて気が進まんだがな……」

「しょうがねえだろ！ことりの様子がおかしいからそれを探るにはこれしかねえんだっ

てば！」

穂乃果たちが通り過ぎた後、校舎前の並木道にある木の後ろから先ほどの会話を覗いていた志郎と幸雄が出てきた。

「確かに大つぴらに聞くこともできんしな。それにしても結局ことりの悩みが何なのか、分からずじまいだったな。」

「ああ。だが状況はさらに厄介だつて事は把握できたぜ。」

「何？それはどういう事だ!？」

幸雄の不吉な言葉を聞いた志郎は、食い気味にその意味をたずねる。

「見たまんまだよ。穂乃果の奴、ことりの様子がおかしいのに微塵も気づいちゃいなかった。」

「そうだな。確かにどう見てもことりが何か思い悩んでるのに気づいてる様子が見られなかった。」

「それが厄介なのさ。μ s の実質的なリーダーである穂乃果がメンバーの異常に気づいちゃいねえつてのはかなり致命的だ。お前ならこれが如何にヤバいつて事が分かると思うがな。」

「ああ、リーダーたる者は常にメンバーの事を満遍なく気に掛けなくてはいかんのだが今の穂乃果はライブに気が向きすぎていてそれが出来ていない。確かにこれは色々致

命的だ……」

「あいつは一度物事を決めたらそれに向かって一心不乱に突き進む行動力が持ち味なんだが、それが最大の欠点でもある。」

「つまり、それを如何に欠点としての効果を及ぼさないようにコントロールするのが俺たちの役目……というわけか。」

志郎は不安そうな表情で自分たちの役目を認識した。

（まあ、その欠点が決定的な壊滅を呼ばなきやいいんだが……。こればかりは天運に任せるしかないのかねえ。）

幸雄はそんな志郎を横目に、険しい表情でいずれ来るかもしれない最悪の展開が来ないことを望んでいた。

次の日、部室にて――

「ええ？曲を!？」

「うん！昨日真姫ちゃんの新曲を聞いたらやつぱり良くつて、これを一番最初にやつたら盛り上がるんじゃないかって！」

穂乃果はどうやら学園祭のライブに新曲を入れるつもりのようなのだ。

「まあね、でも歌も振り付けもこれからよ。間に合うかしら……。」

「絵里の言う通りだ。曲以外何も出来ない物を仕上げるのはかなり時間がかかるぞ。それを知らんというわけでもあるまい。」

「頑張ればなんとかなると思う!」

穂乃果は絵里と志郎の反論に対して、いつも通りの「頑張ればどうにかなる」という論調をぶつけた。絵里もそれに納得した様子を見せるが、

「でも、他の曲のおさらいもありますし……。」

「わ、私、自信ないなあ……。」

今度は海未や花陽も穂乃果の提案に難色を示し始めた。

「μ'sの集大成のライブにしなきゃ!ライブの出場が懸かってるんだよ!」

「まあ確かに、それは一理あるね。」

希は海未と花陽に対する穂乃果の反論に同調する。

「でしょ?ライブは今の私たちの目標だよ!そのためにここまで来たんだもん!!このまま順位を落とさなければ、本当に出場できるんだよ!たくさんのお客さんの前で歌えるんだよ!」

穂乃果は話しているうちに熱くなってきたのか興が乗って来たのか、立ち上がった。

「私、頑張りたいたい！そのためにやれることは全部やりたいたい！！ダメかな？！」

穂乃果はそう言ってみんなに賛成か反対かをたずねた。

「・・・反対の人は？」

絵里がそう言うが、μ'sのメンバーは誰一人も言葉を出さなかった。つまり、穂乃果の意見に賛成という事になる。

このまま穂乃果の提案が通るかど誰もが思っていたが、ここで思わぬ伏兵が現れた。

「すまないが、俺は反対だ。」

そう言つて手を上げたのは志郎だった。

「志郎・・・？」

穂乃果たちがスクールアイドルを始めた時からサポート役として彼女たちを支えて来た志郎が真つ向から穂乃果の意見に反対した事に、海未は驚いて思わず彼の方を見た。

「どうして!?!志郎くんだって、ラブライブを目指すのは賛成だったはず・・・!」

穂乃果は食い入るように志郎に反対する理由をたずねる。

「ああ、確かにラブライブを目指すことに関しては俺も賛成だ。お前のそれに関する主

張もその通りだと思つてゐる。」

「じゃあなんで……!」

「だが、俺が反対する理由があるのはそこではない。」

「どういうこと?」

絵里は志郎の意図が読めず、彼にそれをたずねる事しかできなかった。

「俺が穂乃果の意見に反対する理由、それはお前のその突つ走りすぎている姿勢そのものにあるのだ。」

「私の……?」

「そうだ。お前の何か目標ややるべき事を見つけたらそれに向かつて全力で突つ走るその性格は、何事にも勝る長所ではあるが、一方で最大の短所にもなり得る。それこそが俺が反対する理由だ。」

志郎はオブラートに包むことなく穂乃果の欠点を指摘した。

「でもそれと何が関係あるつて言うのよ。」

真姫はいつもの癖で髪をいじりながら、志郎が指摘した穂乃果の短所と反対意見に係があるのかどうかを聞いた。

「気負いすぎている……否、急ぎすぎているとは思わないか?」

『え?』

「確かに穂乃果の言う事はもつともだ。それにメンバーが次々と結集し、オープンキャンパスのライブが成功して廃校に待ったをかけ、アキバのゲリラライブのおかげで知名度が上がり、合宿では団結力をさらに深め、遂にラブライブ出場も現実的になった……。ここ最近で、s がとんとん拍子で力を付けている以上、その勢いに乗るのも戦略的には間違つてもいい……。」

「それなら何が気に食わないつてのよ。」

真姫は志郎のはつきりとしらない物言いにため息をついた。

「志郎が言いてえのは、勢いに乗りすぎるのが危ないつて事だろ。」

今まで沈黙を貫いていた幸雄が口を開き、志郎の言いたいことを代弁した。

「ああ、俺の意見が及び腰で消極的だというのは重々承知している。だがそれでも俺はその勢いに乗りすぎるのは危ないと考えている。」

「どうして志郎はそう思うのかしら。」

「……知っているんだ。」

「え？」

「俺は知っているんだ。今の穂乃果のようにただでさえ普段から猪突猛進だというのに、絶好調続きでさらに勢いに乗ろうとして無茶をして……。それで取り返しのつかない失敗をした男を俺は知っている。その男と穂乃果は似ている。似ているだけでは

なく状況もあまりに整いすぎている。それゆえにあの時の再現が、同じように取り返しのつかないような失敗を招いてしまうのではないかと思つて怖いのだ……。」

（ファーストライブの時には挫折そうになつた穂乃果たちを鼓舞していたつていう志郎がここまで及び腰になるなんて……。一体何があつたというの？）

志郎の言葉を聞いた絵里は、普段の彼からは想像できないほどの怯え方に疑問を抱いた。

「そんなの、そいつはそいつで、穂乃果は穂乃果なんだから似たような事が起きるとは限らないじゃない！」

ここは志郎の態度に業を煮やして強気に反論する。

「分かっている！ 同じことが起こるとは限らないことも分かっているし、そうならないためにサポートするのが俺たちの仕事だというのも分かっている!! だが、もしもという事があるではないか！」

そんなにこの反論に対して、志郎も声を荒げながら言い返した。感情が高ぶっているためか、勝頼だつた頃の口調が少し漏れ出していた。

「現に、今の穂乃果はことりnむぐ?!」

「おつとそこまでだ志郎！」

穂乃果がこつりの様子が変であることに気付いていないことを指摘しようとした瞬間

間、幸雄が志郎の口を押さえた。

「むぐむぐぐ!! (何をする!!)」

(バツカ野郎、お前この場でこどりの事を話す奴があるか!)

幸雄は他のメンバーに聞こえないように志郎の耳元で小声で諫め始めた。

「むぐむぐむ……。(いやしかし……)」

「分かつてるさ。お前の気持ちは俺が一番わかっている。穂乃果にこどりの事を気にかけて欲しいって思ってることもな。」

「……。」

「しかしな。お前さんも大概熱くなりすぎて周りの事が見えなくなっちゃまいがちなのも事実、今のがそれだ。今この場でこどりの事を言ってみろ? 間違ひなくあいつらの間に動揺が広がってそれこそ士気に影響が出て足並みがバラバラになっちゃまう、お前としてもそれだけは避けたいだろ? 辛いだろうが、ここは耐えて足並みを揃えておくのが一番さ。あいつらが脱線しないようにフオローするのが俺たちの仕事だし、あいつらに欠けるものは俺たちが補ってやればいい。そうだろ?」

「……むぐぐ。(わかった。)」

幸雄は志郎が自分の説得を聞き入れてくれたのを感じて拘束を解いた。

「わかった。反対意見は取り下げ、俺も賛成しよう。」

「志郎くん……。ありがとう！」

志郎が反対を取り下げたことで、他のメンバーはほっとした様子を見せ、穂乃果は志郎に頭を下げて礼を言った。

「だが穂乃果よ。俺が今言った言葉は完全に覚えなくてもいいし、頭の隅にでもいいから留めて、後々に活かしてくれ。」

「う、うん。」

志郎は穂乃果にそう忠告をし、穂乃果もそれに頷いた。

「すまん、色々熱くなりすぎたから頭を冷やしてくる。」

穂乃果が頷いたのを見た志郎は、そう言っただけで席を外した。事態がなんとか収束したことを確認した絵里は話をライブのものに戻した。

「話を戻すけど、練習は厳しくなるわよ！特に穂乃果。」

「！」

「あなたはセンターボーカルなんだから、みんなの倍はきついわよ！分かってる？」

「うん！全力で頑張る!!」

絵里に練習がきつくなると釘を刺された穂乃果は、表情を引き締めてその言葉に応えた。

「……。」

そんな穂乃果を見て、ことりの表情がまた少し暗いものになっていたが、それに気付いたのは幸雄だけだった。

（ふむ……。話の腰を折ってみんなの気を悪くしないようにと志郎を抑えたが、果たしてこの選択は正しかったのか？）

幸雄はことりの表情を見て、自分の採った選択は果たして間違っていないなかったのかと、自らの行いを心の中で省みていた。

その一方で志郎は、（物理的な意味で）頭を冷やすために水道で顔を洗っていた。

「確かに幸雄の言う通り、俺はあの時の失敗が再現されてしまう事を恐れるあまりに、自分が恐れていたグループの足並みを崩してしまうという愚行に走ってしまう所だった……。」

志郎はさっきの会議での自分の行いを振り返り、反省していた。

「だがこれしきの事で挫けるわけにはいかん……。俺は誓ったのだ。あいつらに俺と同じ道を歩ませないと、武田家衰亡の二の轍は踏ませないと!!だから、何としてでもあいつらを支えてやらねば……。」

志郎は悲壮的な決意を胸に抱き、歩き出す。

だが、そんな彼の想いとは裏腹に運命は悲劇に向かって回りだしていた。

38話 最高のライブのために

学園祭のライブに関する会議がまとまり、いよいよ学園祭に向けての練習が本格的に始まった。だが、屋上にはいつもいるはずの志郎と幸雄の姿がなかった。

「いやーほんと悪かったてば志郎。」

「……。」

とある空き教室で幸雄は志郎に謝り倒していた。

「俺もお前とみんなの事を考えて良かれと思つてやつたんだよお！」

「……それは重々承知してる。」

「正直俺もこうなることが分かつてたらお前の事は止めてなかったさ。」

頭を掻きながら志郎に言い訳を言う幸雄の前には、たくさんの資材が転がっていた。

「過ぎたことは気にするな幸雄。俺もまさか屋上でのライブステージを造るといふ事は予想外だったんだからな。」

「そうそう、ほんとと完全に頭から抜けてた。この俺ともあろうがとんだ誤算をやらか

「したぜ……。」

「こうなるとあいつらの練習に顔を出せなくなるな。」

「そうだな……。」

2人はそう言うため息をついたが、

「いやいや、弱音を吐いてはおれんぞ！あいつらのライブを成功させるためにも俺たちがあいつらに相応しい最高のステージを作らなければならんのだからな！」

と、志郎は自分の頬を両手で叩いて気合を入れた。

「そうだよな！俺たちがやらなきゃあいつらのライブは始まらねえ！泣き言はもうやめにして作業に取り掛かるか!!」

幸雄がそう言つて用意されていた工具を持って作業に取り掛かろうとすると、

「ちよつと待った！」

「私たちを忘れてもらつちや困るね!!」

「私たちも手伝うよー!!」

と、扉の方から声が聞こえた。

「そ、その声は!!」

「ヒフミ!!」

志郎たちが声のした方に振り向くと、そこにはヒデコとフミコ、そしてミカの3人組

が立っていた。

「せっかく穂乃果たちのライブのためのステージを作るんだからさ、初めてのライブからずつとあの子たちを陰からサポートしてきた私たちも呼んでくれなきゃ!」

「しかしヒデコ、これはかなりの力仕事になるぞ。それでも手伝つてくれるのか?」

「平気平気! PV作る時だつて一緒に校舎中に飾りを付けたりライブのカメラワークとかで鍛えられたし、それに私たちはずつと一緒に穂乃果たちを支えて来た仲間じゃない!」

彼女が言うように、にこが加入した後に作ったPVでの校舎の飾りはヒフミトリオと、志郎と幸雄の2人がそれぞれ担当を分担して共同作業で作つて飾つたのだ。今まで語られることこそは無かつたが、彼女たちはこの仕事だけでなくファーストライブからずつと、sを陰から支えて来た戦友ともいえる関係だつたのだ。

「ああ・・・、そうだつたな。じゃあ今回も、sのためにひと働きするぞ!!」
『おぉー!!』

志郎が号令をかけると、他の4人もそれに盛大に応えた。

「さて、ステージは屋上に作ることにしたわけだが・・・。」

「屋上!?! それだつたら屋上で作業した方が早くない?」

「いや、屋上はあいつらの練習スペースだ。邪魔になりかねん。」

「じゃあどうするの?」

「俺にいい考えがある。」

「なになに武藤くん? またいつものいいアイデア?」

ミカが身を乗り出して幸雄の考えがどんなものなのかたずねる。

「ああ。今回は『墨俣一夜城形式』で造るのが得策だと思うんだ。」

「墨俣一夜城?」

「簡単に説明するとだな、まずここでステージを小分けにした状態で作っちゃうんだ。」

「それで前日か前々日に屋上に運んで組み立てる寸法よ。」

「なるほど、確かに小分けにされているから屋上に運ぶ負担が軽くなるな!」

幸雄の提案に志郎は賛成した。

「もちろん何往復かする羽目になるが、志郎もヒフミも大丈夫だよな?」

『もちろん!!』

「よし! じゃあそう決まったら作業の分担だな。効率的に進めるには・・・。」

「こうして志郎と幸雄、そしてヒフミトリオの5人によるステージ作りが進められていくことになった。」

そしてそれぞれが自分たちのやるべき事に時間を費やし、力を注ぎ、気が付けば学園

祭まであと1日に迫っていた。

「ふわああ……。」

「ちゃんと寝ているのですか?」

部室で着替えながらあくびをする穂乃果を見た海未は心配するように言ったが、

「えへへ、つい朝までライブの事を考えちゃうんだよね。今からワクワクして眠れないよ!」

と穂乃果は平気な様子だった。

「子供ねえ……。」

「にこちゃんには言われたくないよ!」

「どういう意味!」

「あ、そうだ!」

穂乃果はそう言うのと突然、ステージ作りに行つててその場にはいない志郎と幸雄以外のメンバーの前で突然踊り始めた。

「どう!?!昨日徹夜で考えたんだ!」

なんとそれは新しい振り付けだった。

「ちよつと、振り付け変えるつもり!?!」

「それはちよつと……。」

「絶対こっちの方が盛り上がるよ！昨日思いついたとき、これだ！って思ったんだ!!」
穂乃果の提案に驚くことに花陽の言葉を押しつけるように穂乃果は新しい振り付けをみんなに勧める。

「ことり、これは流石に……。」

穂乃果の様子を見て流石に諫めなくてはいけないのでは、と思った海未はことりにも穂乃果を諫めるべきかをたずねるがことりは、

「い、いいんじゃないかな……。」

と苦笑いで曖昧な返事をするだけだった。

「だよね！だよね!!」

穂乃果はことりの言葉を聞いて目を輝かせた。結局その場で反対する者は誰も出てこなかったので、穂乃果の提案通りに振り付けを変えることが決まった。そして練習では、本番に向けてのおさらいに加えて新しい振り付けの練習も行う事となった。

「はあ……！もう足が動かないよお〜!!」

練習が一通り終わると、ここは屋上のフェンスの側に座り込んでそう叫んだ。本来ならば学園祭本番に向けてのおさらいをするだけのはずが、それに加えて新しい振り付け

の練習も加わったことで運動量も段違いに増えたのだから、身体能力が特別高いわけでも無いにこが弱音を吐くのは無理もない話である。

「まだダメだよ！さっもう一回!!」

「ええ！またく!?」

「いいからやるの!!まだまだできるよ!!」

「いや〜!!」

穂乃果はフェンスに掴まるにこを引つ張るが、にこも盛大に抵抗していた。

「私たちはともかく、穂乃果は少し休むべきです。」

そんな2人の様子を見かねた海未が穂乃果に休憩するように促した。

「大丈夫！私燃えてるから!!」

「夜も遅くまで練習してるんでしよう?」

「だって、もうすぐライブだよ!!」

穂乃果は海未のいう事を聞くような様子は微塵もなかった。

「・・・ことり。」

「え、私?」

「ことりからも何か言っちゃってください!」

自分だけでは穂乃果を抑えられそうにないと思った海未はさつきと同じようにこと

りにも穂乃果を止めるように頼むが、

「私は……穂乃果ちゃんがりやりたいようにやるのが一番いいと思うよ……。」

ことりはさつきと同じように穂乃果を肯定するような言葉を口にした。

「ほら……ことりちゃんもそう言ってるよ!!」

「……。」

2対1となつては流石の海未も分が悪いのか何も言い返せなかった。しかし、なんとか絵里や希たちが暴走する穂乃果を宥めたことで、本番前日の練習は何とか終わった。

(穂乃果はいつも以上に暴走しているような気がするし、ことりの様子もおかしい……。普段冷静な志郎があそこまで感情的になつて恐れていた事がここまで起きているのは少しまずいかもしれませんね……。)

みんなが屋上から部屋に戻る時、海未は部屋へと足を進めながら数日前の志郎の様子を思い浮かべながらどうするべきか考えていた。

そして、μ'sの練習が終わってからしばらく経ち……。

「ふう、これで後は明日の本番まで待つだけだな幸雄!」

「そうだな……。ぜえ、ぜえ……。ここ最近で一番体力使ったぜ……。」

志郎たちは穂乃果たちが練習を終えると、それと入れ替わるように今まで作っていたステージの部品をヒデオ達と屋上に運び込み、それを組み上げて機材をセットしていたのだ。

「結局あいつらの練習に顔を出すことは出来なかったが……」

「まあ、あいつにはストッパー役である海未が付いてるんだ。平気だろ。」

穂乃果たちの事を案ずる志郎に対して幸雄は汗を拭きながら樂觀的に答えたが、

「いや、それでもないらしい……」

そう答えた志郎は険しい表情で屋上の入り口を見ていた。幸雄が入口の方を見てみると、そこには海未が立っていた。彼女もまた、志郎ほどではなかったが険しい表情をしていた。

「よお海未！練習の方はどうだったよ？」

幸雄は何とか空気を変えようといつものおどけた口調で海未に話しかけるが、彼女の表情が緩むことはなかった。

「……穂乃果の事だな？」

志郎は海未の表情から、彼女が何を言いたいのかを察して問いかける。

「はい、穂乃果の事なんです……」

海未は今日あったことを全て2人に話した。志郎の憂いが着実に現実になろうとし

ている今の状態を、包み隠すことなく全て――

「そうか……。」

海未から事情を聞いた志郎はただ静かにそう言うだけだった。

「おいおい、やけに落ち着いてるじゃねえか。もしかして諦めちまったのか?」

幸雄はそんな志郎の様子を意外に思っていた。

「いや、諦めたわけじゃあない。ただ、俺たちが何をしようとするのだから改めて実感させられただけさ。とはいえ俺は座して滅びを待つほど諦めのいい男ではないからな。」

幸雄の言葉に応える志郎の目がいつもよりも鋭く光つたのを海未は感じた。

「ところで海未、穂乃果は最近夜遅くまで練習していると云つてたがどこでやっているかは知らないのか?」

「はい……。ですが多分穂乃果なら神田明神の男坂に行くと思います。」

「そうか。なら今夜は張り込んでみるか。」

『なっ!?!』

志郎の言葉に2人は驚きを隠せなかった。

「志郎！流石のあいつも今夜練習に出るとは限らねえだろ!?もしあいつが出てこなかったらどうすんだよ！」

「来なかったら来なかったで済む話じゃないか。別に俺はあいつらのように体力は使わんのだからな。それと海末、もしよかったら寝る前にあいつに釘を刺しておいてくれると助かる。」

「分かりました。私も穂乃果に話しておきたいことがあるので……。」

「ここの事か？」

志郎は抱えていたもう一つの懸念を思い出すように海末にたずねた。

「はい。ここのところここの様子がおかしいので……。志郎たちは何か心当たりはありませんか？」

「ここの様子がおかしいのに気付いてはいたが、理由までは……。。」

「俺も志郎と同じく理由は知らん。俺の目は超能力じゃねえから流石に人の心の内にあるものまでは見透かせませんわ。」

志郎と幸雄は首を横に振りながら答えた。

「心配だけでも気が滅入るだけだし、何も始まらねえよ！とにかく明日のライブを成功させるって事だけ考えようぜ？な？」

「そうだな。」

「ええ、幸雄の言う通りです。」

幸雄の励ましの言葉に志郎と海未は頷いた。

「じゃあ海未。明日のライブ楽しみにしてるぞ。」

「最っ高のパフォーマンスを期待してっからな！」

「はい、期待しててくださいね。」

3人はそう言つて屋上を後にした。

そしてその夜・・・、海未は穂乃果に電話をかけてみた。

「くしゅんっ！え、ことりちゃん？別にいつもと変わらないと思うけど・・・。」

『そうでしょうか・・・。』

「海未ちゃんは何か聞いたの？」

『いえ、私は弓道の練習もあつたので最近はまだ話せてないのです。』

「大丈夫じゃないかなあ？きつとライブに向けて気持ちが高ぶつてるだけだよ！」

『・・・ならいいのですが。』

「くしゅん！」

『ほら、明日は本番。体調を崩しては元も子ありません、今日は休みなさい。』

穂乃果がくしゅんをするのを聞いた海未は、話を切り上げて穂乃果に寝るように言つ

た。

「はーい。」

そう言つて穂乃果が電話を切ると、ラブライブの公式ホームページから通知が来た。開いてみると、21位だったグループが20位に上がっていた。それを見た穂乃果の表情は険しくなっていた・・・。

「また行くの!?!」

「うん、ちよつとだけ。」

「もう時間遅いし、お母さんに怒られるよ?」

雪穂はまた自主練に行こうとする穂乃果を引き留めようとした。

「ごめん、すぐ戻るから。」

とだけいつて穂乃果は家を出るが、外は雨が降っていた。

「うわあ、雨え?」

穂乃果は一瞬今日は練習をやめるかどうか迷ったが、意を決してフードを被つて走り出した。

「・・・。」

穂乃果との電話を終えた後、海未は縁側で不安げに雨の降る夜空を眺めていた。

ピリリリリリ!

すると携帯が鳴りだしたので画面を見てみると、かけてきたのはことりだった。

「ことり?」

『海未ちゃん……。私……。』

ことりの声は何か思いつめているような雰囲気だった。

『あのね、実は――』

ことりは躊躇いながらも、海未に胸中に秘めていたことを話し始めた。

一方その頃、穂乃果は雨が降りしきる中で神田明神の階段を走っていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……。」

「思った通りだ。やはり張り込んで正解だったな。」

階段の一番上まで登り切ると、そこには傘も差さずに仁王立ちしている志郎がいた。

「志郎くん!? こんなところで何やってるの傘も差してないし……。風邪ひいちゃうよ!!」

「それはお互い様だろう。それに俺はお前とは違って、明日踊るわけでも無ければ最近無理をしているわけでも無い。」

穂乃果の言葉に応える志郎の声は、普段よりも少し冷ややかに感じられる。

「でも志郎くんが……!」

「でももだつてもない!!お前は自分の立場を分かっているのか!!」

志郎は近所迷惑になるのも顧みずに穂乃果に向かって激高しだした。

「明日は学園祭本番なんだぞ!明日のライブでラブライブに出られるか否かが懸かっていると言ったのは貴様ではないか!!勢いに乗りすぎるのは危ないとは前から思っていたのを幸雄は『考えすぎだ』と言ったが結局はその通りではないか!!ただでさえ最近夜遅くまで練習していて睡眠時間さえロクに取れていないというのにこの雨の中でランニングをするというのは正気の沙汰ではないぞ!!それでもし体調を崩してライブが失敗したらどうするつもりなのだ!!」

「志郎くん……。」

穂乃果たちの前ではめつたに感情的にならない(ライブの曲を決める時に一度なつてはいるが)志郎の剣幕に穂乃果は反論さえできなかった。ただ感情的に怒鳴っているだけではなく語っている言葉もちぐはぐではあるが、どれも正論であったのも理由の一つだろう。

「でも……。」

「でもなんだ？」

「でも仕方ないじゃん!!私だつて不安だつたんだもん!!ラブライブの予選のランキングで下にいる他のグループが追いつけてるのを見たら『私も頑張らなくっちゃ!』って思えてきちゃうんだもん!!ここで頑張らなかつたら出れなくなっちゃうかもって思えてきちゃうんだもん!!」

穂乃果も自分の感状を吐き出して志郎に言い返した。雨に濡れているし暗いので分りにくいけど、その顔が泣いているようにも志郎には見えた。

「穂乃果……。」

志郎は穂乃果の反論に言葉が出なかつた。いや、出なかつたのではなくて何も言う事ができなかつたのだ。その感情を吐き出す姿が、見えざる不安と向き合つて健気に自分なりの方法で戦う彼女の姿が、かつての自分に見えたからだ。

その姿は本来武田家を継ぐことはなかつたはずが、運命のいたずらによつて武田の後継者となり、何をするにも偉大すぎる父親と比べられ、家中をまとめ重臣たちの信頼を得るために、ただひたすらに戦う事しかできなかつたかつての自分、武田四郎勝頼の姿をそのまま写したように志郎には見えた。

「……とにかく、今日はもう帰るぞ。それで体をしっかり拭いて温めてから寝ろ。」

志郎は感情が溢れてきて涙が出そうになるのを抑え、穂乃果の手を無理やり引いて階段を降り始めた。

「で、でも志郎くん……!」

穂乃果は抵抗しようとするが、

「さっきも言ったが異論は認めん!!とにかく今日はホントに帰れ!!嫌だというなら殴り飛ばしてでも帰す!!」

「ご、ごめんなさい……。」

志郎の『殴つてでも穂乃果を家に帰す』という強すぎる意志の前には流石に恐れ知らずな穂乃果でも大人しく言う事を聞かざるを得なかった。そしてなんとか穂乃果を家まで送り、自分もまた雨の中を走って家に帰った。

「ふう。あまりにも乱暴なやり方ではあったがこれで明日への憂いは取り除けたはずだ……。俺もさっさと寝るとするか。」

志郎は体を拭いて着替えてからベッドに入ると、明日に備えて眠りについた。

「先陣はこの山県昌景が承った!!武田の精鋭たちよ、我が赤備えに続け!!」

全身を深紅の鎧に身を包んだ将、武田四天王の1人である山県昌景が吼え、彼と同じように赤い鎧に身を包んだ将兵たちが前へと進み、その後ろから数多くの強者たちが続いて走り出した。

「このような柵などで我らを阻めると思わない!!打ち倒せえ!!」

「鳶ヶ巣山の砦が落ちた以上我らには退路はない、突き進め!!」

六文銭の旗を掲げて奮戦する真田信綱、昌輝の真田兄弟率いる真田隊や土屋昌統率いる土屋隊といった武田の誇る猛将たちが次々と織田軍の仕掛けた馬防柵を打ち倒していき、三段ある防衛線があと一段だけとなっていた。

数こそは30000の大軍を率いる織田軍の半分以下である12000人の兵を率いる武田軍は圧倒的に不利であったが、最強の名をほしのままにした武田軍の中核を率いた猛将、勇将たちとそれに率いられる甲信の強兵たちによる猛攻のおかげで、織田軍の防備は残りわずかとなっていた。

——いける!こちらでも疲弊し損害も甚大ではあるが、このまま突き進めば信長の本陣はすぐそこにある・・・!父上でも成し遂げられなかった織田信長の打倒がすぐ

「兄上！何としても織田軍を．．．うつし！」

「あと一段．．．。越えられなかったか．．．!!」

真田兄弟、土屋昌統ら深入りした将たちも次々と織田軍の一斉掃射に倒れていく。

『三段撃ちはなかった。』最近の研究ではそう言われているが、それでも織田軍は少なくとも1000挺以上の鉄砲を配備して、武田軍を自陣深くまでに引き寄せてから一斉掃射したので。それだけでも破壊力は凄まじいものだった。

「くっ、赤備えがこうもあつげなく．．．。だが！この昌景をそう簡単に仕留められると思ふな!!!」

自慢の赤備えの精銳が次々と倒れ行く中、昌景は采配を口に啞えながら敵陣に突撃し玉砕した。

「真田信綱さま及び昌輝さま、御討ち死に!!」

「土屋昌統さま！御討ち死に!!」

「赤備え山県昌景さま、奮闘の末御討ち死に!!」

本陣の勝頼のもとに次々と凶報が届いた。

「なんとということだ．．．！父上が築いた武田軍がこうも容易く．．．！このままでは死

んでいった者たちも浮かばれん！こうなれば俺も突撃し、武田の意地を見せて．．．」
呆然自失の勝頼が敵地に特攻をかけようとしたその時、

「馬鹿な事をなされるな勝頼さま!!ここで死ねば犬死に、それこそ死んでいった方々が報われぬではありませんか!!」

そう言つて勝頼を止めたのは彼と共に本陣にいた武藤喜兵衛、今でいう真田昌幸であつた。

「喜兵衛．．．。」

「よくぞ言つた喜兵衛。勝頼さま、ここはお逃げなされ。亡き信玄公も砥石崩れや上田原といった負け戦を経て名将となられた．．．。」

「勝頼さまは信玄公をも超え得る器をお持ちだ。この負け戦を糧となされませ。さすればあなたは真なる名将となるだろう。」

昌景と同じく武田四天王である、馬場信春と内藤昌豊はそう言つて勝頼を逃がし、自らは殿しんがりとなつて織田軍の追撃部隊に立ち向かつた。

「甘利信康さま、御討ち死に!!」

——なぜだ。なぜこゝも裏目に出る？

「小幡信貞さま、御討ち死に!!」

——俺は、みんなに信頼されたかっただけだったんだ。

「原昌胤さま、御討ち死に!!」

——かつての敵国の血が流れていても武田の、父上の後継者に相応しい将であることを……。

「内藤昌豊さま、御討ち死に!!」

——皆に証明し、共に天下に向かつて戦いたかっただけなのに……!!何故だ、何故だ、何故だ、何故だ何故だなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだなぜだ!?

「馬場信春さま、御討ち死に……。」

——やめろ、やめろ、やめろ。やめろ。やめろ!やめろやめろやめろやめろやめろ!!もう聞きたくない!!こんな俺のために次々と皆が死んでいくのはもう聞きたくない!!

すべてが間違っていたのだ。勢いに乗って織田や徳川の城を次々と落としたことも、父上の後を継いだことも、父上のもとで当主となるための経験を積むために戦ったことも、義信兄上の代わりに嫡男となったことも、父上の子として生まれたことも!!

——俺の全てが……何もかもが過ちだったのだ!!!

ジリリリリリリリリリリリリリリリリ!!!

「はっ!!!」

志郎は飛び起き、周りを見回すとそこは間違はなく、設楽ヶ原から落ち延びる道ではなく諏訪部志郎の部屋だった。

「夢……か。」

志郎は目覚ましを止めて胸を撫でおろしながら呟くが、

（いや待て！今のは夢にしてはあまりにも鮮明過ぎた!!ことりが何か悩んでいるのを知った日にも長篠での戦の夢を見たが、あれは霧がかかっていたし何よりもあまりにも俯瞰的で曖昧だった。だが今見た夢はなんだ!?!あまりにも鮮明過ぎる……。まるであの時の事をもう一度体験しているかのような……。あの日の光景をもう一度自分の目で見て、肌で感じているような有り様だった!!）

志郎は今見た夢が今まで見てきた夢の中でも一番と言えるほどに鮮明だった事実

戦慄した。

（今思い返してもあの夢の事をはっきり覚えていて！今までならばどれほど鮮明に見ても『ああ、やけにはつきりしてるな。』と思う程度だったのに、今回はその夢の内容が今でも脳裏をよぎる!!）

志郎はこのことから、ある事をただ一つだけ直感した。

——今日は間違いなく、諏訪部志郎として生きてきた中で最も経験したくなかったであろう凶事が起こる。

志郎は頭に浮かんだ直感を振り払うように首を振り、部屋を出て行った。もちろんこの時の志郎には、この後の学園祭で起きる出来事は全く知る由もなかった。

39話 決壊

「穂乃果！」

そう呼ぶ声を聞いた穂乃果は目を開けた。

——あれ、いつもより瞼が重い？

「今日文化祭でしょ？早起きするんじゃないの？」

穂乃果の母はそう言つて部屋を出た。

「んん．．．。へつくし！」

穂乃果はその言葉を聞くと、くしやみをしながら起き上がり、顔を洗いに洗面所へと向かうために歩き出した。

——それにしても変な夢だったな。昔の、歴史の教科書で習つたような戦争の夢だなんて．．．。あれ？体が重い．．．。それに、なんかフラフラする．．．？

穂乃果はおぼつかない足取りで歩くもそのままよろけて転んでしまった。

「痛たた．．．。」

そう声を出すはずだったが、

「．．．!!」

声が出なかった。

「．．．!．．．あ。」

何度声を出そうとしても喉が噎れてしまっているのか、ほんの僅かばかりの音しか出せなかった。

学園祭が始まる2、3時間ほど前、志郎と幸雄はステージの最終調整をするために誰よりも早く学校に来ていた。

「いやー、まさかこんな雨になるとは思わなんだな。こんなこともあろうとステージをブルーシートで覆っておいて正解だったわ。」

誰もいない屋上で、幸雄がステージを見上げながら独り言を呟いていると、志郎がやって来た。

「……」

志郎の表情はとても険しく、幸雄はそれを見てかつての憂いを帯びていた勝頼の表情を思い出した。

「どうした志郎、随分と悩ましい顔をしてるな。そういえば昨晚はどうだったよ？」

幸雄は昨日の夜の志郎による張り込みの成果をたずねた。

「……案の定、あいつはやって来たよ。」

「なんだと!?!昨日はかなり雨が降ってたじゃねえか!」

「ああ、あいつはそういう奴だからな。」

「で、どうした？」

「ちゃんと連れて帰ったよ。ごねるもんだから軽く脅しておいた。多少力ずくだった感
は否めないが、これもあいつの為だ。」

「そっか、それを聞いて安心したぜ。」

幸雄は志郎の報告を聞いて胸を撫でおろした。

「いや、安心するのはまだ早いぞ。」

「え？」

「実は昨晚に夢を見た。」

「まさか……例の吉兆ならぬ凶兆の夢か？」

「ああ……。」

志郎が頷くのを見た幸雄の額に冷や汗が浮かんだ。

「で、その夢はどうだったんだ……!?!」

幸雄はそのまま志郎に夢が鮮明であったか曖昧であったかを聞いた。志郎の表情を見れば答えは明白であったが、それでも幸雄はわずかな可能性を信じてたずねる事しかできなかった。

「……恐ろしいほどに鮮明だった。正直に言うとなんか今までにないほどはつきりしていた。まるであの戦をもう一度体験しているような気分だった……。」

幸雄にそう語る志郎の表情は、今まで『諏訪部志郎』として17年間生きてきた中で最も緊迫していたものだったのだろうな——志郎は語りながら心の中でそう実感していた。

「えらいことになったな……。どうする?」

幸雄も精一杯動揺を隠そうとするがそれでも隠しきれない何とも言えない表情で志郎の判断を仰ぐ。

「……とにかくそれを決めるのはあいつらが来てからだ。」

志郎はそう言うと、屋上の出入り口に向かって歩いて行った。

「何も起こらずに済めばいいんだがなあ……。」

幸雄は雨が降る空を仰いで眩くと、志郎に付いて行つた。

そして学園祭が始まり、ライブが始まるまであと1時間を切つた。

「あー!!すごい雨!」

「お客さん全然いない・・・。」

「この雨だもの、しょうがないわ。」

屋上の出入り口から外を覗いて嘆く凜と花陽に対して、真姫がフォローを入れる。

「志郎と幸雄も宣伝で頑張ってくれてるみたいだけど、私たちの歌声でお客さんを集めるしかないわね。」

「うーうー!そう言われると燃えるわね!!につこにつこにー!!」

一年生たちを前に自分たちに言い聞かせるように絵里とにこが喝を入れていた。

「本当にいいんですか?」

その一方で、海未はことりと階段で話をしていた。話の内容は、昨夜にことりが海未

に打ち明けた悩みについてであった。

「うん、本番直前にこんな話したら穂乃果ちゃんにも、みんなにも悪いよ……。」

「ことは遠慮がちに海未の言葉に応える。

「でも今日がリミットなのでしよう!?!」

「うん、だからライブが終わったら私から話す。みんなにも、穂乃果ちゃんにも……。」

「なるほど、そういうわけだったのか。」

『!!』

「ことりが階段から降りようとすると、志郎と幸雄が下から上がって来た。

「志郎くん、幸雄くん……。」

「宣伝で学校中を回っていたのではないのですか!?!」

「ああ、そうだったんだが一通り終わってな。」

「それでヒフミたちと交代して、そろそろ着替えの時間だとお前らに知らせに来たんだが……。えらい話を聞いたなこりゃ。」

「……。」

頭を掻きながらバツが悪そうに苦笑いする幸雄を見て、ことりと海未は何とも言えな

い表情をしていたが、

「案ずるな、俺たちは何も聞いていなかった。そうだろう幸雄？」

志郎がそう言うと、

「・・・？あ、ああ！そうだな！！おーいみんな！！そろそろ着替えの時間だぞ！！」

幸雄は一瞬ポカンとした表情をしたが、すぐに志郎の意思を汲んで上にいる絵里たちに部屋へ戻るように大声で声を掛けた。

「あら、もうそんな時間なのね。」

「いよいよね！！」

「うう、緊張してきた・・・。」

「テンション上げてくにゃー！！」

「全力を尽くしましょう！」

絵里たちは幸雄の言葉を聞いて次々と部屋へ向かって行った。

「・・・ごめんね、ありがとう志郎くん。」

ことりは去り際に志郎に礼を言った。

「俺はただ自分になすべき最善の行動をとっただけだ。さつ、ことりも着替えてこい！今はライブに集中しろよ。」

志郎は明るい声でことりにそう返した。

「・・・2人ともありがたいでございます。」

海末も2人にお辞儀をしてことりの後に続いて去っていった。

「いやー・・・ことりがエアメールを持っていたのを見た時には大体察しはついていたが、まさか本当に留学だったとはな・・・。」

海末とことりも去って二人つきりになると幸雄が階段に座り込んでそう言った。

「予想以上に厄介な事になったな。下手をすれば、sの存続も・・・。」
「どうするよ。止めるか？」

志郎が言葉の最後を言いきる前に幸雄が志郎にたずねる。

「こればかりは俺たちがどうこう足掻いてどうにかなるものでもないからな・・・。とにかく今はライブを成功させることを考えよう。」

志郎はそう言うことりたちを追って階段を下りて行った。

（ライブを成功させる・・・か。穂乃果がまだ来てないのが引つかかるが、まあそうするしかないんだろうな。）

幸雄は穂乃果がまだ学校に来ていない事を不安に感じつつも、それを振り切つて階段を下りた。

そしてみんなが着替え終わった時……。

「おはよう。」

と穂乃果が控え室に入って来た。

「穂乃果！」

「遅いわよ。」

「ごめんごめ〜ん。当日に寝坊しちゃうなんて、おろろろ……。」

メンバーたちに軽く謝りながら歩くも、またよろけて倒れそうになるがこどりに支えてもらって、なんとか転ばずに済んだ。

「穂乃果ちゃん？大丈夫!？」

「ごめんごめん。う……。。」

「穂乃果？声がちよつと変じゃない？」

「え!？そ、そうかな!のど飴舐めとくよ、えへへ……。。」

喉の様子が少しおかしい事を絵里に指摘された穂乃果はなんとかいつもの様子を取り繕って誤魔化した。

「……。。」

「志郎?。」

「今日はライブを中止にした方がいいんじゃないか……?」

穂乃果たちのやり取りを見ていた志郎はそう呟いた。

「気は確かか志郎!?!」

それを聞いた幸雄は他のメンバーに聞こえないように小声で志郎に詰め寄った。

「お前なら分かるだろ、穂乃果の様子がおかしいことぐらい……!」

「そりゃあそうだがよ……。」

志郎の言う通り、卓越した観察眼を持つ幸雄は部屋に入って来た時の穂乃果の様子をただだけで彼女が無理をしているのを見破っていた。

「天気はこんなだし、穂乃果も本調子とは言えない……。幸い学園祭は明日もあるんだから今日の所は中止にして、明日に今日の分も挽回するのが最善策だと俺は思っている……。」

「常識を考えたならそれが一番だろうよ。だが、それを本番直前に言い出して聞く奴がいると思うか?」

「それは……。」

幸雄の言い分に志郎は何も言い返すことは出来なかった。実際にそれを言うべきタイミングがあるとすれば、屋上の出入り口の階段でみんなに着替えるように呼び掛けた時しかなかったのだから。

「とにかく、ここまで来ちまったからにはもう天に身を任せる事しかできねえ。お前も腹くくれよ、あとはあいつらのライブが成功するように少しでもお膳立てしてやろうぜ?」

「ああ、そうだな・・・。」

幸雄の言葉に志郎は何とか頷いた。

「じゃあ、俺たちはそろそろステージの準備に行つてくるぜ。」

話を終えた幸雄は穂乃果たちにそう言い残して志郎と共に控え室から出て行つた。

「うん、よろしくね!」

穂乃果はそう言つて志郎たちを見送つた。

「なんでお前がここにいるんだ。」

屋上でステージの準備と屋上にやつて来た観客たちの入場案内をしていた志郎たちの前に現れたのは、

「ふははは!!遂に来たぞμ, sの生ライブ!!」

傘を差しながら高笑いをしている政康だった。μ, sのライブが楽しみで仕方ない

のかテンションがやたら高く感じられる。

「いやマジでお前何しに来たんだよ。」

「というか音ノ木坂の学園祭って男子も入れるんだな。」

「正直に言うとな俺も伝統に厳しい女子高であるここに入れたことに驚いてはいる。だが
!! μ sがライブを行うと言えばたとえ火の中水の中、どこへでも馳せ参じるつもりだ
!!ふはははは!!」

「お、おう……。」

「ほんとお前はフアンの鑑だよな……。」

μ s に対する並大抵ではない熱意をアピールする政康に志郎は苦笑し、幸雄は呆れ
を通り越して賞賛していた。

「して、ライブが始まるのはいつ頃なのだ？」

「いや、それくらいチラシ読めよ……。あと20分後だな。」

政康に開始時間をたずねられた志郎は腕時計を見ながら答えた。

「そろそろあいつらも準備終わってるだろうからそろそろ呼びに行こうぜ。」

「そうだな。じゃあ政康、俺たちもう行くわ。」

志郎は政康にそう言つて屋上から降りようとすると、

「待て志郎。」

と、政康が志郎を呼び止めた。

「なんだ？急いでるんだが。」

志郎は立ち止まってそれに応える。

「何か不安な事でもあるのか？」

「何言ってるんだ、そんなことは……。」

「ふふふ、そんなものは顔を見れば分かるものよ。」

「……。」

「案ずることはない。貴様は、Sのサポート役なのであろう？サポートする者がそのような不安そうな顔をするな。そんな事では支えられる物も支えられんぞ？」

「ああ、そうだな。」

政康からの檄を受け取った志郎は笑って返事をする、そのまま駆け下りて行った。

そしてライブ開始15分前……。

「あー……。」

穂乃果は着替えを終えると少しだけ発声練習をした。

(よし、声もなんとか戻った……。これならいける……。!)
声の調子が戻ったのを確信した穂乃果の顔は希望に満ちていた。

「全然弱くならないわね……。。」

「ていうかさつきより強くなってない!?」

「これじゃあたとえお客さんが来てくれたとしても……。。」

弱まるどころか強くなる様子さえ見せる雨を見て、絵里とにこと真姫が心配そうにしていたが、

「やろう!!」

「穂乃果……。。」

「ファーストライブの時もそうだった……。あそこで諦めずにやって来たから今の μ sがあると思うの。だからみんな……。行こう!!」

穂乃果はいつものようにみんなを励ました。

「そうだよね……。そのためにずっと頑張つて来たんだもん!」

「後悔だけはしたくないにや!!」

「泣いても笑つても、このライブが終わった後に結果が出る!」

「なら思いっきりやるしかないやん♪」

「進化した私たちを見せるわよ!!」

「やってやるわ!!」

穂乃果の鼓舞を受けてメンバーの士気はみるみると高まっていく。

「……」

「ことり。」

「あ、ごめん。」

相変わらず不安げな様子だったことりだが、海未に呼ばれてふと我に返った。

「とにかく今はライブに集中しましょう、せつかくここまで来たんですから。」

「うん……」

ことりも海未の言葉を受けて、せめてこの時だけでも迷いを打ち消そうと思い、頷いた。

「……あの頃と同じだな。」

控え室のドアの前で中のやり取りを聞いていた志郎は感慨深そうに呟いた。

「だな。」

志郎の呟きに、普段なら何か軽口や皮肉を言う幸雄もこの時はただ素直に彼の言葉に

頷いていた。

「にしても皮肉だな、あの戦から7年と17年経つてようやくあの時の軍議での信春と昌豊、そして昌景らの苦勞を知ることになるのだからな。」

志郎は、かつて長篠で決戦に踏み切ろうとした際に撤退を進言した宿老たちの顔を思い浮かべながら現在の自分の状況を皮肉って笑った。

「・・・もう、止まらないのだな。」

「ああ。あいつらがあんなつたら最後まで止まらないのはお前も知ってるだろ？ それにその諦めない強さをあいつらに与えたのはお前だ。」

幸雄はファーストライブでくじけそうになった穂乃果たちに激励を送った志郎の言葉を思い返しながら志郎の言葉に応える。

「あの時、あんな事を言わなければあいつらも少しは諦めと聞き分けが良くなつてたのかな・・・。」

「おいおい！ それだけは言っちゃいけないぜ志郎!! あの時のお前の言葉があつたからこそあいつらは今ここにいるんだ！ お前がその事を後悔して否定しちまつたら、あいつらを否定することにもなるんだぞ！」

「・・・!! そうだったな、すまん。」

「いいつてことよ。迷った主君、もとい親友のケツはたい目え覚まさせてやるのも俺

の務めさ。」

謝る志郎に対して、幸雄はそう言つてにかつと笑つてみせた。

「すまん。そうだ、俺があいつらを信じてやらなくてどうする……！サポート役ならばそれこそあいつらを信じてやらなくてはいかな！」

「おうとも！確かに天候、穂乃果の様子、そしてことりの迷いと心配すべき要素は山積みだが……、それでもあの時とは違つて織田軍のように絶対的な脅威はなにも無い！それだけは胸を張つて言える！」

「……とにかく穂乃果がぶつ倒れずに済むのを祈るしかないつて事か？」

「ははは……、情けねえがそうなるな。でもライブが終わるまで持ち堪えてくれればそれで万事解決よ！」

幸雄は志郎に自分が言いたかつたことを指摘され、苦笑いした。

「お前、実はけつこう樂觀的なんだな。策士つてのはどこまでも慎重で疑り深い性格だと思つてたが。」

「まあな。だが策士つーのは結局のところ樂觀的な生き物なのさ。どれだけ慎重に用心深く緻密な策を巡らそうと、最終的にはおのれの策を信用する……。安芸の謀神こと毛利元就も、備前の風雲児こと宇喜多直家も、出雲の謀聖こと尼子経久も、松永久秀も、天下の三英傑も、お屋形様も、我が父幸綱も、そして俺もそうさ……。みんなみ

んな、樂觀的なのよ。」

「そうなのか……。」

志郎は幸雄が普段見せないような表情で語るのを見て、ただそれに頷くだけだった。

「さっ！しみつたれた話はここまでだ!!あとの事は天と、俺らの μ _{女神たち}sに任せようぜ。」

「ああ!!」

2人はそう言って覚悟を決めると控え室のドアを開けて呼びかけた。

『さあみんな！ライブの時間だ!!』

『うん（ええ）!!』

「えー皆さん、雨の降る中大変お待たせいたしました!」

「まもなくこの音ノ木坂学院屋上特設ステージにて、 μ _sのライブが始まります!!」

志郎と幸雄はそれぞれ左右に分かれてステージの下の脇の部分に立ち、ライブ開催のアナウンスをしていた。

「亜里沙く！よかった、間に合った？」

雪穂は、ステージ前でライブが始まるのを待っていた雪穂のもとに駆け寄った。

「うん、今始まるころ！」

「やれやれ、せっかくの姉の晴れ舞台に遅れては本末転倒だぞ？」

「あはは・・・、間に合ったからいいじゃん！」

雪穂は政康の苦笑を軽く流し、ステージに立つ穂乃果に目を向けた。そして彼女と同じように、屋上に集まった観客たちの視線はステージ上に立っている μ sに注がれていた。

そんな数多の視線を浴びる彼女たちの目には迷いや緊張といった感情は微塵もなかった。

——大丈夫。

穂乃果は心の中でそう唱えながら拳をきゅつと握る。

——いける。できる。今までもそうやって頑張つて来た！

穂乃果はさらに念じると同時にその眼をカツと見開く。

——出来ると思えばなんだってやってこられた！！

穂乃果は今までの事を思い出しながらさらに自分を鼓舞し、息を深く吸い込む。

——大丈夫!!

穂乃果が完全に覚悟を決めたと同時にロックな雰囲気の入ントロが鳴りだし、ライブは始まった。

曲名は『No brand girls』、穂乃果が一番最初に使おうと提案したこの曲はまさにライブの始まりにもってこいな、盛り上がる曲だった。それと同時に『No brand』、すなわち『無名』という言葉を冠するこの曲は全くの無名な状態からライブへの挑戦者に成長した自分たちの存在を高らかに歌い、人々に知らしめる宣言の意を込めたさらなる決意と挑戦の歌でもあった。

(すごいな、この雨の中でステージもべらぼうに滑りやすくなってるのにあいつらそんな気配を全く感じさせないほどに踊りが上達してる……。俺たちがステージの準備で見てない間にもぐんぐん成長しやがった!)

幸雄は客席から見てステージの右下から穂乃果たちのパフォーマンスを見て、彼女たちの成長に驚き歓喜していた。

(すごい……。俺たちがいない間にこんなに上達していたとは……。だからこそ最後まで何事もなく踊り切って欲しいものだ……。)

幸雄の反対側からパフォーマンスを見ていた志郎も、幸雄と同じく彼女たちの成長に驚くも、『何事もなく無事に終わって欲しい』という切実な願いが評定に浮かんでいた。Aメロ、Bメロ、そしてサビと、穂乃果たちは全力で踊り、志郎はそれを見守っていた。

(よし、そろそろ1曲目が終わる！この調子でこのまま・・・！)

1曲目が終わりに近づき、志郎は最初の曲が無事に終わることを安堵しつつ次もこのまま、と心の中で祈ったが、

———なんとということだ・・・！

突然志郎の脳裏に、昨夜に見た夢の一部分が閃光のようによぎった。

(・・・なんだこれは!?)

志郎はいきなり起きた不思議な現象に片手で頭を押さえながらステージを見た。曲はラストスパートで、穂乃果たちはまだ踊っていた。

(ただの杞憂か・・・。)

それを見て志郎は自分の考えすぎだと思い直し胸を撫でおろした。そうしてるうち

に1曲目が終わり、音楽が止まったその時

ばたん

志郎の願いを無残に打ち砕く音が屋上に無慈悲に響いた。

「なっ・・・!?」

志郎はステージの上を見上げると、

「穂乃果!!」

「穂乃果ちゃん!」

そこには、ステージの中央に倒れこんだ穂乃果とそんな彼女に駆け寄るメンバーの姿があった。

「なんてこった、えらいことになったぞこりゃあ!」

幸雄も事態が事態なのでステージにひらりと上がって彼女たちに駆け寄る。

「穂乃果!大丈夫!?!・・・すごい熱!!」

絵里は穂乃果の首筋に手を当ててみると凄い熱さを帯びていた。

「お姉ちゃん!」

姉の緊急事態に雪穂も思わず傘を捨ててステージに向かって走っていった。

「すみません！ただいまメンバーにアクシデントが発生しました!!申し訳ありませんが少々お待ちください!!」

観客たちが予想外の事態にざわめき始めると、幸雄が一言アナウンスを入れた。

「……………!!……………かつ、はっ……………!」

(俺が……………こんな時こそ動かねばならないのに……………!体が……………!声も……………!)

その一方で志郎は、自分の意思とは裏腹に体がいう事を聞かず、全く動けないという状況に陥っていた。

「穂乃果!!」

「穂乃果ちゃん!!」

海末とことりが必死に穂乃果に呼びかけると、

「成功……………させな、きや……………。せつかく、ここまで……………来たんだから……………」

穂乃果は朦朧とした意識でそう呟いた。それを目にしたメンバーたちは何も言う事ができなかった。

「こりゃヤバいな、とりあえず保健室に……………。志郎!!おい、志郎……………!」

幸雄は穂乃果を自分の傘に入れさせると、志郎に穂乃果を保健室に運ぶように呼び掛けたが返事が聞こえず、ステージに上がってくる気配さえしなかった。

「おい志郎どうした！聞こえねえのか!!」

幸雄はそう言つて志郎のいる場所の近くまで駆け寄り、下にいる志郎を見ると、

「はあ、はあ、はあ、はあ……!」

志郎は頭を抱え、肩で荒く息をしていた。心なしか呼吸のペースが異様に速く感じられる。

(なんてことだ、なんてことだ、なんてことだなんてことだ!!まさかこんな、よりにもよつてこんな形で、あの夢の……否、あの長篠の戦、あの悲劇の再来が訪れるなんて……!!あの時、いや、止める機会は何度もあつたはずだ!それなのに俺は熱に浮かされ、あまりにもリスクが大きすぎるのにも関わらずわずかな可能性に縋つて止めるのを放棄した!!その結果が……)。

志郎は夢で見た長篠の戦の回想が脳内で何度もフラッシュバックし、立っていながら金縛りのような状態と、過呼吸に陥ってしまったていた。

「おい、おい志郎!!」

幸雄はなんとか志郎を正気に呼び戻そうとしたがどうにもならず、

「この野郎、気持ち分かるがこんな時に……!」

殴って起こそうと拳を握って振りかぶった瞬間、

「諏訪部志郎！なんだそのザマは！！貴様それでも、sのサポート役かあ！！何があったかは知らんが穂乃果さんたちが一大事だというのに寝ぼけるのも大概にしろこのたわけがああああああ！！」

なんと政康がいきなり志郎に向かって大声で叫んだ。

「……はっ！穂乃果！！」

志郎は政康の叫びで我に返ると、傘を放り捨ててステージに飛び上がり、一駆けで穂乃果たちの元へ走り寄った。

「う、うう……。」

志郎は苦しそうに呻く穂乃果を負ぶってそのままステージの端に向かって走り出し、なるべく揺らさないように下りてから保健室に向かって走り去っていた。

それを見て観客はさらにざわめき出すが、

「大変申し訳ありませんがメンバーで協議した結果、本日のライブは中止とさせていただくことになりました。誠にすいませんでした！！」

と幸雄が観客たちの前で頭を下げると、観客たちは事態を察して次々と屋上から降り

始めて行った。

「そんな！せっかくのライブだったのに……！」

ここは納得のいかない様子だったが、

「にこつち、気持ちは分かるけどこうなつた以上もう今日は無理や……。」

そう言つて希が彼女を宥めた。

「幸雄、辛い役目をさせてごめんなさいね。」

絵里が、ライブ中止のアナウンスをした幸雄に謝るが、

「構いやしねえよ。こんな役目も俺たちの仕事なんだからさ。」

幸雄は彼女の気持ちを慮つて、笑みを浮かべながら静かに答えた。

「穂乃果……、志郎……。」

幸雄は傘を差さずに雨に濡れながら空を見て2人の名を呟いた。

「……。」

最後まで屋上に残っていた政康も、そんな幸雄の表情を見て何も言わずに屋上から降りて行った。

「はあ、はあ……。ちくしょう、俺が、俺がちゃんと止めていれば……！」

その頃、志郎は校舎内で人の波を掻い潜りながら保健室へと向かっていた。無意識に自分を責める言葉を呟いていたが、そんなことをしてもどうにもならないと考えなおし、唇を噛みしめながらその足をさらに速めた。

歴史とは繰り返されるもの。

家中の結束が盤石でないまま連戦連勝の勢いに乗り織田徳川との決戦に踏み切った結果、戦国時代有数の敗戦を招いた武田勝頼。

始まりこそは大敗からのスタートであったが、そこからは幾度かにわたって壁にぶつかるもそれを乗り越えとんとん拍子で成長を重ねラブライブ出場に王手をかけ、それを確実にせんがために挑んだライブで無理が祟って倒れた高坂穂乃果。

勢いに乗ってさらなる成功を追い求めたがために無茶をして失敗する。時代や細かな形こそ違えどほとんど似たような形での失敗が、志郎がなんとしても防ぎたかった過ちがここに再現されてしまった。

志郎は穂乃果を保健室に運ぶ道中で、

(これ以上事態を悪化させてはならない、そのためにもさらに強く穂乃果たちを支えね

ば・・・。）

と決意を新たにするが——

一難去つてまた一難。さらなる凋落の足音が迫ってきていることに、志郎はまだ気づいていなかった。

40話 雨上がり

穂乃果は学園祭のライブで倒れ、志郎によって保健室に運び込まれた後に早退し、それからしばらく風邪という事で学校を休んだ。そして学園祭から数日経ったある日、志郎たちは穂乃果の家にお見舞いに行った。

『申し訳ありませんでした!!』

穂むらに入ると、絵里と志郎がそう言っ頭を下げた。

「あなた達……。なくに言ってるの! どうせあの子が全部できるって背負い込んでんでしょ? 昔っからずつとそうだったんだから!」

『……』

志郎たちの予想に反し、穂乃果の母はあつけらかなとした様子でそう言った。彼女の言葉には「気にすることはない」と言外に志郎たちに伝えられたように感じられたが、実際にその通りだったので志郎たちは言葉を返せなかった。

「それより、退屈してるみたいだったから上がってて!」

「え、それは……!」

「ずっと穂乃果ちゃん、熱が出たままだつて……。」

穂乃果の母が志郎たちに上がつていくように誘つたのに対し、絵里とことりは困惑していたが、

「二昨日辺りから下がつてきて、今朝にはもうすっかり元気よ！」

と、穂乃果の母は明るく答えた。

そんなわけで志郎たちは家へ上がり、穂乃果の部屋に行った。

「穂乃果。」

「あ、海未ちゃんことりちゃん！」

海未が穂乃果を呼びながら部屋の戸を引くと、穂乃果はベッドでプリンを食べていた。穂乃果の母の言つていたように熱が下がっているのか、顔色も良くなっている。

「よかつたあ、起きられるようになったんだ！」

「うん、風邪だからプリン3個食べていいって！」

「心配して損した。」

そんな穂乃果を見てにこは呆れていたが、内心嬉しそうにも見えなくなかつた。

「お母さんの言う通りやつたね。」

「それで、足の方はどうなの？」

「そうだ、あの時お前足くじいてたよな。大丈夫か？」

にこと志郎は穂乃果にライブで倒れた時にくじいた足の容態を聞いた。

「あ、うん。軽くくじいただけだから腫れが引いたら大丈夫だって。」

穂乃果はにこと志郎にテーピングを巻いた足を見せながら答えた。

「本当に今回はごめんね、せっかく最高のライブになりそうだったのに……。」

「穂乃果のせいじゃないわ、私たちのせい……。」

「ステージ作りにかまけていてみんなの様子を見れなかった結果こうなったのだから俺たちにも責任はあるさ。」

穂乃果がみんなに自分のせいでライブが失敗してしまったのを謝ると、絵里と志郎もまた自分たちにも責任があつたと謝った。

「でも……。」

「はい、真姫がピアノでリラックスできる曲を弾いてくれたわ。これを聞いてゆっくり休んで。」

絵里はそう言って穂乃果にCDを渡した。すると穂乃果は窓を開け、

「真姫ちゃんありがとう〜！」

と、下にいる真姫に手を振りながら大声で礼を言った。

「何やってんの!」

「あんた風邪ひいてんのよ!」

もちろんすぐに絵里とにこにベッドに引き戻されたが。

「なぐにやっつてんだか、あの病人。」

「大きな声出すから……。」

それに対して幸雄と真姫が呆れた様子で呟いていたが、

「嬉しいんだよ。」

「ふふっ。」

凜は2人にそう言つて、花陽は穂乃果の元気そうな様子を見て嬉しそうに笑つた。

「ほら、病み上がりなんだから無理しないで。」

「ありがとう。でも明日には学校に行けると思うんだ！」

「本当？」

「うん！だからね、短いのもいいからもう一度ライブ出来ないかなって！」

穂乃果がそう言つと、みんなの表情が曇つた。

「ほら、ラブライブの出場グループが決まるまであと少しあるでしょ？なんて言うか埋め合わせっていうか、なんかできないかなって！」

そんな穂乃果の提案を部屋にいた1年生と幸雄以外のメンバーが聞いている中、絵里は意を決して穂乃果には伝えにくい現実を伝える。

「穂乃果……。」

「ん？」

「ラブライブには、出場しません。」

「……え？」

「理事長にも言われたんだ、無理しすぎたんじゃないかって。こう言う結果を招くためにアイドル活動をしていたのかって……。だからみんなで相談し合ってエントリーを取り止めることにしたんだ……。だからもうランキングに μ 、sの名はもう……。ないんだ。」

あのライブの後、絵里と共に理事長室に呼び出された志郎が穂乃果に μ 、sがラブライブのエントリーを辞退したという事実を申し訳なさそうな表情で淡々と伝えた。

「そんな……。」

「私たちがいけなかつたんです。穂乃果に無理をさせたから……。」

「ううん、違う……。私が調子に乗って……。」

「穂乃果ちゃん……。」

それを聞いて落ち込む穂乃果を海未がフォローしようとしたが、それでも穂乃果は自分のせいだと自分を責めるのをやめなかった。

「誰が悪いなんて話してもしょうがないでしょ、あれは全員の責任よ。体調管理を怠って無理をした穂乃果も悪いけど、それに気づかなかった私たちも悪い……。」

「絵里ちの言う通りやね。」

そんなお通夜ムードがみんなの周りに漂っていたが、それを見かねた絵里は誰かに責任を求めるのはお門違いであるとして、全員がそれぞれ悪かったという事で話を終わらせた。

「で、結局穂乃果にあの事を話したってわけか。」

「ああ……。」

穂乃果の見舞いが終わったあと、志郎と幸雄は近くの公園でジュースを飲みながら穂乃果にラブライブのエントリーを取り止めたのを伝えたことについて話し合っていた。

「でも下手に隠すよりはスパツと後腐れなく伝えることができてよかつたんじゃねーの？」

「そうなんだがな……。」

幸雄の言葉に重々しく頷く志郎の脳裏には穂乃果の落ち込んだ顔がまだ鮮明に残っていた。

「理事長に言われたことが引つかかってんのか？」

「そうだな。やはりあの手の言葉はどうにも耳が痛いし、心にズシリと来るもんだ。」

「他人事じゃあねえもんな。」

「ああ……。」

穂乃果やみんなが落ち込んでいた様子ももちろんだが、ライブの後に理事長に言われた『こんな結果を招くためにアイドル活動をしてきたのか。』という言葉も、志郎の心に暗い影を落としていた。

『こんな結果を招くために』、それは長篠の合戦で武田家に大打撃を与え、そのまま滅亡の一途を歩ませたという武田勝頼としての人生で残した結果を持ち、そして諏訪部志郎としての今回の人生では勝頼だった頃の二の舞を防ぐために悪戦苦闘している彼にとってはもつとも厳しく辛い言葉であった。

「落ち込む気持ちも分かるけどよ、前向きに行こうぜ！雨降って地固まるって言葉もあるくらいだ、きつといいことあるって！今回の事を教訓にすりゃ絶対次は上手く行くさ。」

「二重の意味で落ち込む志郎を幸雄はいつもの調子のいい物言い励ますが、

「その次は来年になるんだぞ。」

「あ、そっか……。」

二回目のラブライブの開催が来年になるであろうという事を臭わせる志郎の言葉に幸雄は『やつちまつた』と言いそうな表情になった。

「だが確かに前向きになることは大切だよな、ありがとう幸雄。」

それでも志郎は幸雄の自分を励ましてくれようとした気持ちを汲んで彼に礼を言った。

「……いいつてことよ！俺たちや親友だろ？」

「ああ、そうだな。」

2人はそう言うのとゴミ箱にジューズの缶を投げ捨てて公園を後にした。

その夜……。

「お姉ちゃん、ご飯できたつて〜！今日は下で食べるの〜？」

雪穂が部屋にいる穂乃果を呼ぶが、返事が返つてこなかった。

「お姉ちゃん？もう寝てんの〜？あつ。」

戸を開けると、穂乃果はベッドの上でパソコンを見ながら泣いていた。

パソコンの画面にはラブライブのランキングが映っていたが、そこには夕方に志郎が告げたように、sの名は無かった。穂乃果は悔しさと、自分のせいでこうなつてし

まったという後悔と罪悪感に打ちひしがれていたのだ。

雪穂はそんな姉に対して欠ける言葉が見つからず、ただ見ていることしかできなかつた。

一方その頃、ことりは自分の部屋で留学のための荷造りをしていた。

「……」

ことりは荷造りを進めながら、壁に掛けてあるファーストライブの衣装を眺めていた。

「はい。」

ドアをノックする音に応えると、理事長が入って来た。

「穂乃果ちゃんには話したの？」

「どうやら理事長は、ことりが留学の事を穂乃果に話したのかを確認しに来たようだった。」

「うん、明日話す……」

「ちゃんと話しなさいよ、大切な友達でしょ。」

「うん……」

ことりは理事長の言葉に弱々しく頷いた。

そして穂乃果が復帰してから2、3日が過ぎた頃、ラブライブの予選は終わりA―R I S Eが1位で本戦に進出したことで話題が持ちきりであり、街中や通学路などに彼女たちが描かれたポスターが何枚も張り出されていた。

「……じゃあ辞退しちゃったんだ。」

「学園祭の時にトラブルがあつたみたいでさー。」

「順位上がつてたのにもつたないね〜。」

「ほんとだよお。」

音ノ木坂学院の生徒たちの中には、μ sのエントリー取りやめを惜しむ声が広まっていた。

「気にしないで。」

「……うん。」

校門前の階段でラブライブのポスターを眺めていた穂乃果をことりが慰めたものの、穂乃果は心ここにあらずといった様子だった。

「ほ、穂乃果ちゃん。あのね……。」

「……。」

ことりはなんとか留学の事を穂乃果に言いだそうとしたが、穂乃果はそれに気づくそ

ぶりすら見せず、ことりはそんな穂乃果の様子を見て、また言い出せずに穂乃果の哀愁漂う背中を見ながらその場に立ち尽くしていた。

その様子を背後から三年生たちが見ていた。

「相変わらずやね。」

穂乃果の様子を見て、希が心配そうに呟き、

「学校復帰してからずっとあんな感じじゃない、希！」

それを見かねたにこが希の名を呼ぶと、

「任せといて！」

にこの言いたいことを察した希は両手を構えて穂乃果がいるところまで一気に駆け上り、

「わしっ!!」

と、穂乃果の胸を強かに揉み、

「うわああああ!!の、希ちゃん!!」

穂乃果はそれに驚いて大きな悲鳴を上げた。

「ぼんやりしてたら次はアグレッシブなのいくよ〜!」

「い、いえ・・・結構です!」

「あんたも諦めが悪いわねえ！いつまでそのポスターを見てるつもりよ。」

2人の掛け合いにこが割って入って来た。

「うん、わかつてはいるんだけど……。」

「けど？」

「けど……。」

「希！」

「ひっひっひっひっ！」

「け、結構です〜！」

穂乃果の煮え切らない態度に、こはもう一度希を穂乃果にけしかけようとした。

「そややって元気にしてればみんな気にしないわよ。それともみんなに気を遣って欲し

いっ！」

絵里は笑いながら穂乃果にそう問いかけた。

「そういうわけじゃ……。」

「今日から練習に復帰するんでしょ？そんなテンションで来られたら迷惑なんだけど

！」

「そうだね。いつまでも気にしちゃしょうがないよね！」

「そうだ、その意気だぞ穂乃果。」

「あ、志郎くん！」

穂乃果がにこの言葉に明るく応えると、下から志郎がやって来た。

「いいか穂乃果、『名将とは一度大きな敗北を経験し、それを乗り越えた者を言う。』という言葉を知ってるか？」

「へ？ううん、聞いたことないや。」

「これは戦国時代の伝説的な名将、朝倉宗滴が遺した名言だな。大きな失敗をしてもそれを乗り越えることができれば必ず大きな成功を収めることができるようになるという意味があるんだ。だから穂乃果も、今回の事を糧に前向きに進むことが大事だと俺はおもっぞ！」

志郎は、かつて自分が生きた戦国乱世の大英雄ともいえる朝倉宗滴の名言を引用して穂乃果を励ます。

「志郎の言うとおりね。それに私たちの目的は、この学校を存続させること・・・でしょ？」

「うん！」

絵里が音ノ木坂学院の校舎を見上げながらそう言って、穂乃果もそれに頷いた。

「穂乃果〜！昨日メールしたノートは〜?!」

そうしていると、階段の上からヒデコが手を振りながら穂乃果に声を掛けた。「あ！今渡すく！じゃあちよつと行つてくるね！」

穂乃果はそう言うのと、階段を駆けあがつていった。

「大丈夫そやね。」

希が穂乃果の背を見てそう言うのと、にこと絵里は微笑ましそうに頷いた。

(穂乃果の方は何とかなつたが・・・ことりの方はどうすべきか。)

その一方で志郎は沈んだ表情をしていることりを見て一人考え込んでいた。

なんとか穂乃果を立ち直らせることはできたものの、ことりの留学の件を如何にして穏便に対処するか、志郎の悩みは未だ尽きることはなかつた。

4 1 話 奇跡の影に潜む火種

朝練が始まる前の屋上にて……。

「それで、理事長は何か言ってた？」

「別に禁止にしたつもりは無いって。続けていいそうよ。」

絵里が活動を続けてもいいという理事長の言葉を穂乃果に伝えると、

「ほんと!？」

「じゃあライブも!？」

「ええ。」

「よかったあ!いつにしよういつにしよう!？」

と、穂乃果は海未と互いの手をとって喜んだ。

「そうね、入学願書の受付までに何度かやりたいけどあまり連続でやってもね……。」

「あ、みんなの体調とか疲れすぎちゃうのもよくないもんね。」

「穂乃果!？」

「やっぱりに気にしてるのね……。」

「え?あ、まあ……。」

「なんかちよつと穂乃果らしくありませんね。」

「こりや何か天変地異が起きるかもしれないねえな。」

「いくらなんでもひどいよ幸雄くん！私だつてちゃんと考えるんだから！」

幸雄の皮肉交じりの軽口に、穂乃果は頬を膨らませて抗議した。

「でも、少しは周りが見えるようになったつて事かしら。」

「そうだな、それだけでも十分な成長だといえるな。」

志郎は絵里の言葉に頷きながら言った。

「周りが……。あれ？こりちゃんは？」

絵里が言った『周里』という言葉でこりがいないことを思い出した穂乃果は周りを見回す。

「ちよつと電話をしてくるつて、下に行きましたよ。」

「ふーん。」

こりがどこに行つたのかを教えた海未の表情は浮かないものであつた。彼女はこりから直に留学することを打ち明けられていただけに、こりがその件で席を外しているという事が分かつていた。そしてそれを穂乃果に言い出せない事に、海未もまた罪悪感を覚えていた。

「……。」

幸雄がそんな海未の表情を見て考えを巡らせていると、

『うわああああ!!』

と、いきなり真姫と凜と花陽の3人が屋上の扉を思い切り開けて飛び込んできて、

「どわあああ!?!」

さらにドアのすぐ前に立っていた幸雄は彼女たちが思い切りドアを開けたと同時に開いたドアにふつ飛びされ、思いつきりすつ転んだ。

「ど、どうしたの!?!」

「そんな慌てて何があった!?!」

1年生たちの尋常じやない様子に穂乃果と志郎は驚いた様子で彼女たちに何があったのかをたずねた。

「た……。」

「た……。」

「助けて……。」

息も絶え絶えな様子で凜と真姫に代わって花陽がそう言った。

「はあ?」

花陽が言った言葉にこは首を傾げた。

「花陽、また『助けて』になってるぞ。『大変』じゃないのか?」

「はっ！そんなんです!!大変です!!みんなちよつと来てください!!」

志郎が助け舟を出すと、花陽は我に返ったようにそう言ってみんなに着いて来るように言った。

花陽たちに導かれてやってきたのはお知らせなどが貼り出されている掲示板だった。
「来年度入学者受付のお知らせ・・・。」

穂乃果が声に出して貼り出されたプリントを読むと、

『なに!?!』

『これって!?!』

志郎、幸雄、穂乃果、海未、絵里、希、にこの7人は驚きの声を上げた。

「中学生の希望校アンケートの結果が出ただけど・・・!」

「去年より志願する人たちがずっと多いらしくて!!」

花陽と真姫が志郎たちに状況を説明するが、真姫は興奮しているのか若干声が上ずっていた。

「・・・ってことは!」

「学校は……!」

「存続するって事やん!!」

『マジか!!』

希たちの出した結論に志郎と幸雄はさらに驚いた。

「さ、再来年は分かんないけどね!」

それに対して真姫はいつも通りの皮肉を言うが、その表情と声のトーンで嬉しそうな様子は隠せてないことがわかる。

「後輩が出来るの!?!」

「うん!!」

「やったあー!!」

「よかつたなあお前ら! 誰にも見送られない卒業式なんて無かつたんだ!!」

後輩が出来ることに花陽と凜は喜び、幸雄も2人と一緒に喜んでいた。

「すごい……! こんなことが本当に、一生徒たちの手によって学校が救われるなんて事が本当に起きるとは……!」

「ああ、夢みたいだけど夢じゃないんだぜ!? 俺たち……いや、穂乃果たちはこんな夢みたいな事を本当にやってのけたんだ!!」

「そうか……、そうか……!」

志郎は今この場で起きた出来事を夢のように感じていたが、幸雄の言葉で本当に実現したことを確信し目に涙を浮かべながらそれに対する喜びを噛みしめた。

そして、皆が喜びに沸いているところにことりが歩いて来た。

「こつとりちや〜くん!!」

「わっ! え? え!!」

穂乃果はこつりの姿を見るなり彼女に駆け寄って抱き着き、こつりはいきなり穂乃果に抱き着かれたことに戸惑っていた。

「こつとり、これ!」

海未は戸惑っているこつりに入学希望者の受付を知らせる紙を見せた。

「えっ、えっ!」

「やった……。やったよ! 学校続くんだった! 私たち、やったんだよ!!」

あまりにも突然な出来事に立て続けに見舞われて戸惑いが収まらないこつりに、穂乃果は自分たちのおかげで学校が救われたことを教えた。

「嘘……。じゃないんだ!」

「うん!!」

こつりの言葉に穂乃果は今にも涙が零れ出しそうで、それでいて晴れやかな笑顔で頷く。

「……ハラショー。」

その様子を見た絵里は感動したのか涙ぐんでいた。

（これが……、これが物事を成し遂げる喜びというものか……。ここまでの道のりは決して平坦なものではなく、数多の壁や試練が立ち塞がってきたが、それでも彼女たちは乗り越えてみせた……。諦めと絶望を踏破して、仲間と共に艱難辛苦を乗り越えた者たちにのみ与えられる、大名の子という彼女たちより恵まれた地位に、後世に名を残すほどの武勇を持つて生を享けた俺でさえも手に入れられなかった、奇跡という名の至福が……！今間違はなく、穂乃果たちの手の中に確実に存在し、眩しく輝いている……！）

手を取り、体を抱き寄せ合つて喜びを分かち合う穂乃果たち、sの姿を後ろから眺めていた志郎は眩しそうに目を細めて微笑んでいた。

「珍しいな志郎。いつもはお堅い表情をしているお前さんがそんなニヤニヤしてるなんてよ。」

それを見た幸雄は茶化すように志郎に声を掛ける。

「うるさい、俺だつて笑うことくらいするさ。ただ、あいつらの喜ぶ姿があまりにも眩しくつてな……。」

「眩しい……か。」

志郎が口にした単語を噛みしめるように呟いた幸雄はもう一度穂乃果たちの方を見た。

「ああ、そうだな。ほんとに眩しいや。」

そして『眩しい』という言葉の意味を察した幸雄はそう言つて頷いた。

(今ここに『音ノ木坂学院の存続』という1つの目的は達成された。これから穂乃果たちが如何なる道を歩むのかは俺にはまだ分からないが、もう一度この輝きを見れるように彼女たちを守り、支え、盛り立てて行かねばな。)

志郎は心の中で新たな決意を刻み、

(確かに俺たちは目標の1つを完遂した。だがそれで今この時、水面下に潜んでいる問題が解決したわけじゃあない……。本当ならば俺たちは今予断を許されない立場に立つてるんだが、まあそれを知ってるのは当の本人であることりと、あいつがそれを打ち明けた相手の海未、そしてその内容をうっかり聞いてしまった俺と志郎だけ……。浮かれてる場合じゃあ無いんだが、まあおかげで俺たちもここから叩きだされる可能性は万に一つも無くなったわけだから素直に喜ぼうかね。)

幸雄は表に出ることなく燻っている問題を憂いつつも、場の雰囲気壊さずに穂乃果たちや志郎と共に喜びに身を委ねたのだった……。

「本当に!？」

「ええ!」

「嬉しい! やったやったあ!!」

放課後、校門で絵里を待っていた妹の亜里沙に廃校が阻止されたことを絵里が亜里沙に伝えると、彼女は姉と同じ学校に通えることを無邪気に喜んだ。

「よかったね!」

「うん! 来年からよろしくお願いします!!」

絵里と一緒にいた穂乃果に声を掛けられた亜里沙はそう言つてペコリとお辞儀をした。

「それには、まず入試で合格しないとダメね。」

絵里は亜里沙の頭に優しく手を置きながら亜里沙を優しくたしなめる。

「うん! 政康さんも勉強教えてくれてるし頑張る!!」

「ん? 政康!?! まさかそいつ、北村政康つて名前じゃないだろうな!？」

亜里沙の口から出てきた『政康』という名前に志郎は驚いて亜里沙にたずねた。

「うん、そうだよ?」

「あら、志郎の知り合い?」

亜里沙はきよとんとした様子で答え、絵里は志郎に知り合いなのかとたずねた。

「ああ。いやまあ、前の学校の知り合いさ。宿敵というか、盟友というか……、腐れ縁みたいなやつさ!まさかあいつが家庭教師の真似事とはな……。」

志郎はバツが悪そうに顔を引きつらせながらそう言った。

「政康さんは近くの図書館で週に一度勉強を教えてくれてるの!」

「それにしても志郎ってここに来る前はどこに通ってたのかしら?」

絵里が今まで抱いていた疑問を口にする、

「えくつと確か……。」

「神峰橋高校だよ、穂乃果ちゃん。」

穂乃果とことりが答えた。

「ハラシヨ……!確か神峰橋ってここら辺じゃ結構頭のいい進学校よね?」

絵里は驚いた様子で志郎にそう言うも、

「いや、俺はその中でも中間層をフラフラしてたに過ぎない凡人だ。成績上位をキープしている政康の足元にも及ばんさ。」

と志郎は苦笑いした。

「あくあ！うちの雪穂も受験するって言わないかなあく。」

絵里と亜里沙の様子を見た穂乃果はため息をついた。

「あ、この前話したらちよつと迷ってました。」

「ほんと!？」

亜里沙の言葉に穂乃果が目を輝かせた。

「話に水を差すようで悪いが次のライブはどうするんだ？」

「そうね、大急ぎでやる必要は無くなってしまったわね・・・。」

「そうだね・・・。」

志郎が持ち出した次のライブの予定について、絵里と穂乃果はそう答えた。

(ひよつとして、廃校が取りやめになったことで躍起になって生徒を集める必要が無くなったことで少し活力が抜けたか・・・?)

志郎は2人の様子を見て少しばかり違和感を感じた。

「あの・・・、私ちよつと買い物があるからここで・・・。」

そんな中ことりがそう言い出した。

「え？何買いに行くの？」

「ちよつと・・・。」

「付き合おうか？」

穂乃果は自分も付き添うかことにたずねるが、

「ううん、大丈夫!・・・じゃあ!」

ことりはそんな穂乃果の事を半ば振り切る形でそのまま走り去っていった。

「なんか元氣ないね、ことりちゃん。」

「希も気にしていたわ。学園祭の前だったかしら、何か悩んでるんじゃないかって・・・」

ことりの様子が気になる絵里と穂乃果が彼女の様子がしばらく前からおかしかったことを話していた。

「そんなに前から・・・。志郎くんは何か知らない?」

「な、お、俺か!?俺は・・・。」

穂乃果にことりについてたずねられた志郎はここで話すべきか否か、少し葛藤していたが、

「すまん、俺も何を悩んでるかまでは知らんだ・・・。」

そう言ってしまった。

「そっか。」

そう言つて穂乃果たちは歩き出した。

(果たしてこれでよかつたのだろうか・・・。)

志郎は自分の採った選択が正しかったかどうかしばらく考え込んでいたが、彼がのちにこの自分が採った選択を悔いることになる事をこの時の志郎はまだ知る由もなかった。

そして、それからしばらく経った夕方。ことりは沈み切った表情で並木道を歩いていくと、目の前に海未と幸雄が立っていた。

「で、結局どうするんだね?」

「遅らせば遅らせるだけ、辛くなるだけですよ……。」

公園のベンチに海未とことりが座り、幸雄はその後ろに背を向けて寄りかかっている状態で海未と幸雄はことりにどうするかをたずねる。

「うん……。」

「もう決めたのでしょうか?」

力なく返事をするこどりに海未はそう言うが、

「うん、でも決める前に穂乃果ちゃんに相談できてたらなんて言ってくれたのかなって……。それを思うと上手く言えなくて……。」

と、穂乃果に言い出せなかったことに対する後悔とこれから伝えなくてはいけないことに対する罪悪感を口にした。

「なるほどな。海未の言う事は正論だし、ことりの言い分にも一理ある。だがなことりよお、過ぎたことのタラレバを口にしてももう時間は戻らねえんだ。辛いかもしれねえが覚悟を決めるんだな。」

幸雄は海未とことりの言葉に理解を示しつつも、ことりに冷たく決断を促す。

「でも……。」

「気が引けるのは俺だつて痛いくらい分かるさ。だがな、そうも言つてられねえ事態に状況が傾きつつあるんだ。」

「それはどういう事なんですか？幸雄。」

「さつき志郎からメールで連絡が来たんだが、どうやら穂乃果も今さらながらことりが思い悩んでることによく気付き始めてるみたいだ。」

「穂乃果ちゃんが……。」

「ことりはそれを聞いて表情をさらに曇らせる。」

「いいか、言葉つてのはただでさえ重みがあるもんだ。しかもその重みは黙ってれば

黙っていた分だけ重みを増す上に少しづつ真実が漏れ出す……。もしお前さんが更にあいつに打ち明けるのを遅れちまえば、穂乃果は予想もしない所からお前の話を聞きつけ大きなショックを受けることになる。だが、ここから早いうちにあいつに打ち明けちまえば多少の混乱は起きるだろうがショックは大きくなりすぎずに済むんだぜ……。どっちがいいかは馬鹿じゃねえお前さんなら分かるだろ？」

幸雄は予測し得る結果を出してことりに決断を促すも、

「うん……。」

それでもことりは煮え切らない様子であった。

「まあ、それを決めるのはお前さんだ。今日中に考えとくんだな。」

「うん、ごめんね……。」

幸雄はそう言つて公園から出て行き、ことりは申し訳なさそうにそう言つて彼を見送った。

（ちっ……。ことりの奴め、他人の事には人一倍敏感なくせに自分の事となると一気に鈍重になる。行動原理を全部全部『人のため』にしたがりやがる、俺が一番嫌いなタイプだ。自分の事を決められない奴が人様の事を想うなんざ50年早いっつうの。）

幸雄は夕陽に照らされた帰り道を歩きながら、なかなか煮え切らないことりに対する嫌悪感を心の中で吐き出した。

「それにしても、これが一気に爆発しなきゃいいんだがねえ……。」
誰に言い聞かせるわけでも無くそう呟いた幸雄は、茜色に染まる空にため息を吐いた。

—— 9人の女神たちと2人の若き虎は、一つに団結して様々な試練を乗り越え、音ノ木坂学院の廃校を阻止するという偉業を成し遂げた。

—— しかし、その奇跡の影には学園祭前より不穏な火種が燻っていた。そしてその火種は幸雄の懸念通りに思わぬ形で、一気に燃えだすことになる。

4 2話 すれ違う想い

「ではとりあえず〜！につこにつこにー!!みんな〜グラスは持ったかな〜?!」

音ノ木坂学院の存続が決まった翌日、*μ s*が所属するアイドル研究部の部室では学校が存続したことを祝うパーティーが開かれていた。黒板には色とりどりに『学校存続』と大きく書かれ、部室は華やかに飾り付けられ、それぞれお菓子やジュース、サンドイッチやからあげといったみんなでつまめる軽いごちそうまで持ち寄るほど本格的なものであった。

そして部長のこはジュースを片手にみんなの前に立って語り始める。

「学校の存続が決まったって事で部長のこにーから一言、あいさつさせていだきたいと思いまーす!!」

『おおー!!』

「やれやれ。ずいぶんと盛り上がってらっしやるなあ、部長殿は。」

「まあいいじゃないか、学校の存続がめでたいのは事実なんだからな。」

「まあ、それもそうなんだがねえ・・・。」

盛り上がるにこ、穂乃果、凜、花陽の4人を尻目に幸雄が皮肉るように笑っているの

を志郎がたしなめた。幸雄も彼の言葉に頷きはしたものの、窓際に沈んだ表情で座っている海未とことりを横目でちらりと見た。

「思えばこのμsが結成され、私が部長に選ばれた時からどれくらいの日日が流れたのであろうか・・・！ たった一人のアイドル研究部で耐えに耐えぬき、今こうしてメンバーの前で思いを語ることが」

『かんぱーい!!』

「ちよつと待ちなさい!! 人の挨拶ぐらいちゃんと言きなさいよ!!」

挨拶を途中で打ち切られたにこがみんなに抗議するも、

「そりゃあんたの挨拶が長すぎっからだよ、おっさんじゃあるまいし。」

「うっさいわね!! 合宿の時みたいなことにならないようにしっかり考えたんだからね!!」

「まあまあ、そう怒るなにこ。にこの万感の思いはちゃんと理解してるから・・・。」

「ふんっ!」

といった具合に幸雄と志郎に慰められていた。

「うわあ〜! お腹すいた〜!!」

小さなテーブルに広げられたお菓子やご馳走を前に穂乃果は目を輝かせ、

「にこちゃん、早くしないと無くなるよ!」

とサンドイッチを頬張りながら言うも、

「卑しいわねえ。」

とにこに呆れられていた。

「みんな〜! ご飯炊けたよー!!」

今度はいつの間にも持ち込んできたのか炊飯ジャーで炊かれていたたつぷりの炊き立てご飯を花陽がみんなに勧めた。

「何故に米!? てかいつの間にも持ってきた!? ちくしょうツツコミが追い付かねえ!!」

「はっはっは! 花陽らしいな。どれ、ひとつ山盛りによそつてくれ。」

幸雄は花陽へのツツコミが追い付かずに頭を抱え、それを尻目に志郎は笑いながら花陽に山盛りご飯を頼み、

「はい! どんどん食べてくださいね!」

と、花陽も志郎の申し出ににこやかに応えてお椀にご飯を山盛りによそつて志郎に渡した。

「ほっとした様子ね、えりちも。」

みんなが盛り上がっている一方で、希が絵里に語り掛けた。

「まあね。肩の荷が下りたつて言うか……。」

「μ、s、やつてよかつたでしょ?」

「どうかしらね。正直私が入らなくても結果は同じだった気もするけど……。」

絵里は希の問いにはぐらかすように答え、はしやいである穂乃果たちの方を見ながらそう言った。

「いや、そんな事はないと思うぞ。ここにいる9人は集うべくして集つたんだ、誰か1人でも欠けてたらこの結果には至らなかつただろうよ。」

喧騒から抜けて来た志郎が絵里にそう言った。

「そうそう、志郎の言う通りだぜ。一部のメンバー勧誘に関して裏で暗躍したもんだが俺の目に狂いは無かつたぜ?」

幸雄も自分の目を指差しながら誇らしげに語った。

「ゆつきーくんの目は確かやからね。それにμ、sは9人、それ以上でも以下でもダメやつてカードも言うてるよ。」

希は幸雄の目敏さに加え、9人であるのはいつも愛用しているカードの導きでもあることを絵里に教えた。

「そうかな?」

「こうやって廃校も無くなったんだ．．．！気を取り直して頑張ろう！」

「おお、その意気だ穂乃果！俺たちの夢と野望はまだまだこれからなんだからな！」

「ん？」

志郎と共に決意を新たにすする穂乃果だったが．．．。

「ことり．．．。」

「でも、今は．．．。」

穂乃果たちが盛り上がっている一方で、海末はことり留学の事を話すべきだと言外に促していたが、今の雰囲気壊したくないことりはまだ踏ん切りがつかない様子であつた。

「．．．。」

海末は、これ以上引き延ばすのはみんなの為にならないと意を決して立ち上がった。

「ごめんなさい。みんなにちよつと話があるんです。」

『ん？』

今まで輪に加わっていなかった海末が遂に口を開いたことで穂乃果たちメンバーの

視線は一斉に海未の元に集まった。

「聞いている?」

「ううん。」

絵里と希も何のことか分からない様子だった。

(言うのか……。さて、どうなる……。!?)

(しびれを切らしたな海未め。ここで言うのは悪手な気もするが、全員が集まってるって意味じゃある意味ここが最大のチャンスだって踏むのも無理はねえか……)

事情を知っている志郎と幸雄は表情を強張らせ、成り行きを見守ろうとしている。

「実は……。突然ことりが留学することになりました。」

海未の口からことりの留学が告げられた時、部室は時が止まったかのように数秒ばかり沈黙した。

「2週間後に日本を発ちます。」

「……。」

海未が努めて平静に事実を告げる中、ことりは俯くことしかできなかつた。

「なに?」

「嘘……。」

「ちよつと、どう言う事？」

志郎と幸雄に海未と、当事者であることり以外のメンバーは突然の事に戸惑いを隠せない様子だった。

「前から服飾の勉強がしたいって思ってた、そしたらお母さんの知り合いの学校の人が来てみないかって……。」

そんな中、ことりはぼつぼつとどうして留学することになったのかをみんなに説明した。

「ごめんね、もっと早く話そうと思ってたんだけど……。」

「学園祭のライブでまとまっている時にいうのはよくないと、ことりは気を遣っていたのです。」

「それで最近……。」

ことりと海未の話を聞いて、事情を知らないメンバーの中で最も早くことりの異変に気付いていた希は合点がいったように呟いた。

「行つたきり、戻ってこないのね？」

「高校を卒業するまでは多分……。」

ことりは絵里の問いに無言で頷くと、そう弱々しく答えた。

「・・・どうして、言ってくれなかったの？」

穂乃果はゆっくり立ち上がると、ことりのもとに歩み寄りながら彼女に詰問するように語り掛ける。

「だから、学園祭があつたから・・・。」

「海未ちゃんは知つてたんだ。」

ことりの弁解をする海未に対して、穂乃果は今まで聞いたことのないような冷たい声でそう言った。

「それは・・・。」

海未はそんな穂乃果に対して反論することができず、俯いてしまった。

「穂乃果・・・。」

「やめとけ志郎、こいつは俺たちが思つてる以上はかなりデリケートな問題だ。下手にしゃしゃり出れば余計に拗れるぞ。」

志郎が仲裁に入ろうとするも、幸雄に色々な意味で部外者である自分たちが口を出すべきではないと諫められた。そして志郎もそれを分かっていたので、悔しげな表情でその場に座り込んだ。

「どうして言ってくれなかったの？ライブがあつたからって言うのは分かるよ!?でも私と海未ちゃんのことりちゃんはずっと・・・!」

しゃがみ込んでこどりの手を握り、穂乃果は何故留学の事を自分に教えてくれなかったのかをこどりに問い詰めた。

「穂乃果。」

「こどりちゃんの気持ちも分かってあげないと……。」

「分かんないよ!!だっていなくなっちゃうんだよ!!ずつと一緒だったのに、離れ離れになっちゃうんだよ!!?なのにな……!」

こどりの気持ちを汲むように絵里と希が穂乃果に促すも、それは逆効果でしかなく、穂乃果は激昂するように自分の気持ちをさらけ出した。

「……何度も言おうとしたよ?」

「えっ……!?!」

「でも、穂乃果ちゃんライブやるのに夢中で、ラブライブに夢中で、だからライブが終わったらすぐに言おうと思ってた……!相談に乗ってもらおうと思ってた……!」

こどりも穂乃果のように激しいものではなかったが、自分の想いをさらけ出した。

「でも、あんなことになって……。聞いてほしかったよ穂乃果ちゃんには!一番に相談したかった!だって穂乃果ちゃんは、初めてできた友達だよ!!ずつとそばにいた友達だよ!!?」

こどりの口から出る言葉が感情的になっていくにつれて彼女の目からはぼろぼろと

涙が零れ落ちていった。そんなことりの強い悲しみと、わずかばかりの穂乃果にその気持ちに気付いてもらえなかったことに対する憤りのこもった表情を見た穂乃果は言葉を失っていた。

「そんなの・・・。そんなの、当たり前だよ!!」

ことりは叫ぶようにそう言うと、穂乃果を押しつけて部室から出て行ってしまった。

「あつーことりちゃん!!」

穂乃果はことりを追おうとするも、走り出すことができなかった。

「ずっと、行くか迷ってたみたいです。いえ、寧ろ行きたがって無かったようにも見えました。ずっと穂乃果を気にしてて、穂乃果に相談したらなんて言うかそればかり・・・。黙っているつもりはなかったんです、本当にライブが終わったらすぐ相談するつもりでいたんです。分かってあげてくださいい・・・。」

海未は穂乃果に対してことりが今日までどれだけ想いを抱え込んでいたことを伝えるが、穂乃果はただ茫然とそれを聞くことしかできなかった。

「くそっ……!! どうしてこんな事に……。」

「落ち着けて志郎、今さらどうの言つてもどうにもならねえつてば。それに、さつきも言つたが俺たちが出しゃばつても意味がねえつて……。」

結局その後、気まずい状況になってパーティーをお開きにして解散したあとに、志郎と幸雄は公園でベンチに座りながらいつものように反省会のようなことをしていた。

「それは分かっている!! これは不幸に不幸が重なつた上での穂乃果とことりのすれ違いだつて事はな……。だが、あの時俺が血気に逸る穂乃果を諫めることが出来さえすればこんな事にはならなかつたはずだ!!」

志郎はやりきれない感情を地面を殴ることで発散していた。

「そうなんだがなあ……。でも遅かれ早かれこの事態は避けられなかつたと思うぜ? さつきのあいつらの言い分を聞くにはよ。」

「確かに、多少時期を早めたところで結局は穂乃果に黙っていたことは事実だからな……。」

「問題はこの後よ。この後どうするかがカギだぜ? やる事は山積みだ。」

幸雄は志郎にこれから直面する新たな問題を提起する。

「ああ。どうやってあの2人を和解させるか、そしてことりがいなくなつた後のμ、sはどう動くべきなのか……。他にもまだまだあるだろうな。」

志郎は飲み終わったジュースの空き缶のごみ箱に投げ捨てながら、これから自分たちが何をすべきかについて思いを馳せた。

（それにしても、穂乃果の落ち込みようは尋常じゃなかったな……。俺には幼馴染がいなかったから分らないが、大きすぎる悲しみであることには変わりあるまい。）

それと同時に志郎は深く落ち込んでいた穂乃果の顔を思い浮かべていた。

「なんとか昨日のように立ち直れたらいいな。」

「そうだねえ……。」

志郎と幸雄は、穂乃果が早く立ち直れることを願いながら夕暮れ空を見上げた。

「……。」

その夜、穂乃果は暗い部屋の中、A—R—I—S—Eの動画を再生しっぱなしな状態で床に座り込みながらこたりに送ったメールを見ていた。そこには、

『私、全然気付いてなかった……。私が夢中すぎてみんなの気持ちとか全然みえなくて、だからことりちゃん、ごめんね。』

と書かれていた。

「謝ったって、もう……。」

そう呟いた穂乃果はケータイを置いて、A—R I S Eの動画に目を向けた。動画には今まで自分が参考にし、いつかはこんな風になりたいと憧れさえも抱いたA—R I S Eのパフォーマンスが流れていた。

(すごいなあ……。追いつけないよ、こんな……。)

穂乃果は今までに何回も見ていたA—R I S Eの動画を見て自分の力量不足を実感していた。

(そういえば、学園祭の前に見た夢の中にいたお侍さんと私、よく考えてみたらすごくそっくりだ……。確か、名前は武田勝頼って言ったっけ……。)

穂乃果は学園祭前夜に見た夢の事を思い出した。勉強が不得意な穂乃果が勝頼の名前を出せたのは、学校を休んでいた時に、ふと夢の中に出てきた人物たちの口から出た名前を片っ端から調べていたからだ。

(勝頼さんは家来の人たちが止めるのを聞かずに無理やり戦いを挑んだせいでたくさんの家来を失くして、私は学園祭のライブとラブライブに夢中になりすぎて、目の前しか見えなくなつて、ことりちゃんの気持ちに気付けなかったせいでこんなことになつちやつた……。なんだろう、変に親近感がわいてきちゃうな……。)

長篠の戦いで失策を犯した勝頼と、ライブで失敗しラブライブへの出場を辞退する羽

目になつたうえ、大事な幼馴染みであることりと仲違いしてしまった自分を重ねてみると、妙に親近感が湧いてきてしまったのかため息をついた。

（私、何やってたんだろう・・・。）

そう呟くと共に、穂乃果の中には彼女の明るい性格からは程遠い薄暗い感情が次々と芽生え始めていた。

そんなゆつくりと湧き上がってくる穂乃果の暗い感情のように、さらなる騒動の影が少しづつ、また少しづつ足音も立てずに11人に迫っている事はまだ誰も知らなかった・・・。

43話 崩れゆく翼

それは一つの報せから始まった——

「大変です勝頼さま!!木曾義昌さまが織田軍に寝返りました!!」

その報せからなんとか衰え行く武田家を支えていた武田勝頼の凋落が始まった。

「何だ?!妹の真理を娶り、一門衆の地位を父上から賜ったというのにその恩を忘れたというのか!!」

激怒した勝頼は義昌を討伐しようとするも、深い雪に閉ざされた木曾谷に攻め込むのは容易ではなく、さらに兵たちも徳川との度重なる戦で疲弊しきっていたために義昌討伐を諦めざるを得なかった。しかし……。

「織田信忠率いる織田の軍勢が木曾義昌を先陣に、信濃へ攻め入ってきました!!」

「それに続き、遠江の徳川家康も駿河に攻め入ってきました!!」

義昌の謀反を契機にここぞとばかりに織田と徳川が西と南の二方面から攻めてきたという知らせに勝頼は怒りと焦りを抱いた。

「飯田城と田中城が落城しました!!」

「さらに伊豆から北条が進軍!戸倉城と三枚橋城が落とされました!!」

「上野の諸城も次々と北条軍に寝返っている模様！真田どのの岩櫃と沼田が何とかまだ残っているそうです!!」

「くそ．．．!」

3方向からの同時侵攻の対処に追われる勝頼のもとに、彼をさらに絶望させる知らせが届いた。

「仁科盛信さまがお守りしている高遠城が．．．落ちました．．．!盛信さまは城と運命を共にし、ご立派な最期を遂げられたそうです．．．!!」

伝令が涙ながらに勝頼の弟の仁科盛信が守る高遠城の陥落と彼の戦死を伝えた。

「馬鹿な．．．。あの盛信の守る城が、たった1日で．．．!?!」

高遠城は南信濃の要衝の地であると同時に堅城であり、そこを守る盛信は武勇の誉れ高い猛将だったので少なくとも3日は耐えられると思っていたがその目論見は大きく外れ、たった1日で高遠城は落城した。

「くっ、新府城に退くぞ!!」

弟の最期に涙を流す暇も無く、勝頼は戦力を整えるために兵を本拠地である新府城へ退却した。

「駿府の穴山梅雪さまが徳川軍に寝返りました!!」

「武田信豊さま、小諸城にて下曾根浄喜に背かれご自害!!」

「一条信龍さま、上野城にてお討ち死に!!」

新府城に戻り、新府城を焼き払ってわずかに残った家臣たちや妻や侍女たちと共に、小山田信茂が守る岩殿城に落ち延びる途中でも、止むことなく勝頼のもとに悲報が押し寄せて来た。

「何故だ……。父上が築いた武田家が何故こうも容易く崩れていくんだ……。」

かつては戦国最強とまで言われた武田家が将棋倒しのように崩れていく様をまじまじと見せつけられた勝頼はやつれた表情で力なく呟いた。

そして、やつとの思いで勝頼たちは小山田の領地にたどり着いたが……。

「大変です!!お……、小山田信茂さま謀反!!小山田信茂さまが織田軍に寝返りました!!」
勝頼の耳に入ったのは最後の頼みの綱にして、最後の譜代家臣であった小山田信茂の寝返りの報せであった。その知らせを耳にした勝頼はもう自分に道は残されてない事を悟った。

「おのれ小山田め、この土壇場で勝頼さまを裏切るとは……!!」

「もうよい……。」

「し、しかし……!!」

「もう我らの命運は決した。これより天目山へ向かうぞ。」

信茂の裏切りに憤る側近、長坂釣閑斎をたしなめた勝頼は穏やかな声色で指示を出

し、馬首を返した。

——ああ。武田はもう滅んでしまっていたのか……。しよせん諏訪の子にも、武田の子にもなれなかった俺には武田を統べる資格も無ければ力も無かったわけだ。そう、全てが無意味だったのだ……。

「っ!!!」

ガバッと飛び起きた志郎は慌てて周りを見回した。もちろん周りにはいつもと変わらない自分の部屋の風景が広がっているだけだったが、それだけでも志郎の心にはわずかな安堵が芽生えた。

「はあ……。はあ……。今の夢は……。!」

志郎は肩で息をしながら額に浮かぶ汗を拭い、さつきまで見ていた夢に思いを馳せた。

「間違いない甲州崩れだ……。忘れもしないし、忘れることもできない俺の最期の記

憶……！」

確信を持つと同時に、志郎の心にはさらなる不安が芽生える。

「……何も起こらなければいいのだが。」

志郎はそう呟くと、逃げるように自分の部屋を出た。

「おはよう、幸雄。」

「おお、志郎か。俺より遅いなんて珍しいな。」

「ああ、少し寝入りが悪かったようで少し寝坊した。」

志郎は自分の見た悪夢が凶兆になる事を知っている幸雄に、かつての自分の凋落を夢に見たことは敢えて教えなかった。昨日の一件でたださえ気まずい状況になっているところにさらに畳みかけるように凶兆があると口に出すことは、志郎にはできなかつたからだ。

「そうかい。」

幸雄は志郎の言葉に何かを察したような表情で頷き、何もたずねなかつた。

「穂乃果は？」

「あいつなら……。ほれ。」

穂乃果についてたずねられた幸雄が彼女の席の方を指差した。

「……。」

志郎の視線の先には机に突っ伏している穂乃果がいた。

「寝ているわけじゃあねえんだがな。さつきもヒフミトリオと話してたしな。」

「そうか。やはり昨日の一件で相当落ち込んでいるようだな……。」

「この前の一件もそうだがあれだけ大きなマイナスになる出来事が起こりや、誰でもあれぐらい落ち込むわな……。」

穂乃果の様子を見て志郎と幸雄がそう話していると、

「穂乃果——！志郎、幸雄！」

「……ん？」

机に突っ伏していた穂乃果は顔を上げて自分を呼ぶ声のする方に顔を向けた。そこにはいつの間にか教室の外に絵里が立っていた。

「ちよつと屋上に来てくれないかしら。」

『屋上？！』

絵里は軽く手招きをすると3人に屋上へ来るように言った。

「・・・ライブ？」

「そう！みんなで話したの。ことりがいなくなる前に全員でライブをやるうって。」

「来たらことりちゃんにも言うつもりよ。」

絵里は先に屋上に来ていた穂乃果とことり以外のメンバーと一緒に、穂乃果と志郎たちにとりの留学前にライブを行う事を説明した。

「思いつきりにぎやかにして門出を祝うにゃ！」

「はしやぎすぎないの！」

「にやつ！にこちゃん何するのー!!」

「ふん、手加減してやったわよ。」

「シャー!!」

凜とにこはいつものようにはしやいでいた。

「・・・。」

「まだ落ち込んでるのですか？」

絵里たちの話を聞く穂乃果の表情はあまり良いものとはいえず、海未も穂乃果の事を心配してそう声を掛けた。

「明るくいきましょう！これが9人の最後のライブになるんだから。」

絵里は暗くなりそうな雰囲気を変えるために努めて明るく言ったが、穂乃果の表情は一層険しくなっていた。

「・・・私がもう少し周りを見ていけば、こんな事にはならなかった。」

「そ、そんなに自分を責めなくても・・・！」

「自分が何もしなければこんな事にはならなかった!!」

花陽は自分を責める穂乃果をフオローしようとしたが、それは全く効果が無かったどころか火に油を注いでしまっていた。

「あんたねえ!!」

「そうやって全部自分のせいにするのは傲慢よ。」

「でも!!」

そんな穂乃果に対してにこは声を荒げ、絵里はあくまでも冷静に穂乃果をたしなめるも、穂乃果はそれでも納得できなかつた。

「それをここで言つて何になるの？何も始まらないし、誰もいい思いをしない。」

「絵里の言う通りだぜ。世の中つてのはな、心を鬼にしなきゃならねえ時つてもんがあるんだよ。」

絵里に続いて幸雄が冷静にそう言い放つ。幸雄はかつての人生が人生だったので、そ

の言葉から漂う説得力は尋常ではなかった。

「ラブライブだって、まだ次があるわ。」

「そう！今度こそ出場してやるんだから、落ち込んでる暇なんかないわよ！」

真姫はまだ次があると云って穂乃果を励まし、にこも心を落ち着かせていつものように不敵に笑って穂乃果を鼓舞しようとするが、

「出場してどうするの？」

「え……？」

「なに……!？」

穂乃果の口から出て来た、おおよそ彼女の口から出てくるものとは思えない言葉に、こは驚き、今まで静観していた志郎も愕然とした。

「もう学校は存続できたんだから、出たってしょうがないよ。」

「おい、冗談でも云って良い事と悪い事つてもんがあるだろ。」

穂乃果の言葉を聞いて、幸雄はドスの効いた低い声で穂乃果に忠告する。いつもは垂れている彼の目は吊り上がりつつあった。激昂こそしないものの、幸雄も彼女の発言は見過ごせなかった。

「それに無理だよ。A—RISEみたいになんて、どんなに練習したってなれっこない。」

「・・・あんたそれ、本気で言ってる？」

「こは拳を震わせながら穂乃果を問い詰めたが、穂乃果は何も答えなかった。

「本気だったら許さないわよ。」

「こはもう一度問いかけるも、穂乃果は黙りこくったままだった。

「許さないって言ってるでしょ!？」

「だめ!!！」

「こは激昂し穂乃果に掴みかかろうとするも、真姫が彼女を押さえた。もしここでこが穂乃果を殴ってしまったら、sはもう取り返しのつかない所まで行ってしまふ・・・そう本能で感じた真姫はこの前に飛び出して力いっぱい彼女を押さえたのだ。」「離しなさいよ!!」こはね!あんたが本気だっと思ったから、あんたが本気でアイドルをやりたいんだっと思ったから、sに入ったのよ!!ここに賭けようっと思ったのよ!!それをこんな事くらいで諦めるの!?!こんな事くらいでやる気をなくすの!!！」

「こは真姫に押さえられながらも彼女を振りほどかんと暴れながら心中を曝け出した。μ、sに、そして穂乃果に託した夢と願いをありのままに、感情的にぶちまけ続けた。」

「他のメンバーはそれを黙って見守る事しかできなかった。幸雄も、志郎さえも・・・。」「どうした志郎。」

幸雄はふと、隣にいた志郎の様子がおかしい事に気付き、周りに聞こえないような小声で声を掛けた。

「やめろ……。やめてくれ……。崩れる、崩れてしまう……。!!」

志郎は頭を抱え、肩で息をしながらうわ言のようにそれだけを何度もつぶやいていた。

「あれを……。あの悲劇を繰り返しては……。だが俺は、俺には……。!!」

「志郎、お前……。」

幸雄は悲痛な表情で呻く志郎にかけられる言葉を見つけられなかった。志郎はこの状況に甲州征伐での武田家が脆くも崩れ去っていく様を重ねていた。細かな状況こそ違えど、『人は城、人は石垣』の言葉のように団結していた武田と、廃校を阻止するという目標のもとにメンバーが結束していた⁴ s、その固い結束が崩れていく様はどちらも志郎にとって自分の身が引き裂かれるように辛いものだった。

その光景は志郎に昔のトラウマを呼び覚ませ、思考や判断力を鈍らせ、彼の心を大いに乱すにはあまりにも効果的すぎた。

「じゃあ穂乃果はどうすればいいと思う?どうしたい?」

「……。」

絵里は穂乃果にどうするかを優しく論ずようにたずねた。

「答えて。」

「……。」

(これが9人の最後のライブになるんだから。)

絵里の言葉を聞く穂乃果の脳裏にはさつき絵里が言った言葉が流れた。そして数秒あまりの沈黙の中、穂乃果は決意し――

「やめます。」

――ただ一言、穂乃果は全てを諦めたような表情で淡白に、無感情にメンバーに告げた。

『えっ!?!』

穂乃果の言葉に絵里たちは愕然とした。

「私、スクールアイドルやめます。」

穂乃果は何の躊躇いも無くみんなにそう告げると、そのままその場を去るために歩き出した。

絵里たちはただ茫然と穂乃果の背を見て、黙って彼女の背を見送ることしかできなかった。

「穂乃果ちゃん……。」

希も、ただ悲しげにそう呟くことしかできなかつた。

「……。」

だが志郎は違つた。みんながただ穂乃果の背を見て黙っていた中、志郎だけは違う反応を見せた。

「貴様……！」

志郎はそう呟くと、腕に血管が浮き出るほどに力強く右拳を握り締め穂乃果を追おうとするが、

「よせ志郎。」

志郎の殺気を察知した幸雄が志郎の右腕を握つて彼の動きを止めた。

「勝頼さま、あなたはさつき真姫がにこを押さえた理由が分からないほど愚かな男ではないはずだ。それに、あなたが本気で彼女を殴つてしまえば骨折どころの騒ぎでは済みませんぞ。」

幸雄は周りに聞こえない声で志郎を諭し、暴拳に出ようとする親友を諫めた。幸雄にとつてこの行動は志郎がそのまま聞き分けるか、彼の心を逆なでて激高させてしまうかどうかなるか分からない博打のような行為だつた。

「お前の言い分は分かる。だが……。」

志郎が幸雄の言葉に苦虫を噛み潰したような表情で反論していたその瞬間、志郎の隣を海未が走り抜けた。そして海未はそのまま穂乃果の腕を掴んで無理やり自分の方に振り向かせた。そして――

パシン……。

――そんな乾いた音が静かな屋上に響いた。海未が穂乃果の頬を打ったのだ。

「海未……。」

メンバーが愕然とする中、志郎は彼女の名を呟いた。

「あなたがそんな人だとは思いませんでした……!」

海未は穂乃果の目を真っ直ぐ睨みながら口を開き、

「最低です……!あなたは……、あなたは最低ですっ!!」

目に涙を浮かべながら、叫ぶように穂乃果へ言い放った。

だがそれでも穂乃果は何も言わず、海未に打たれた頬を押しさえて屋上を下りて行つた。

そしてその日の放課後、穂乃果は部室や屋上に顔を出すことなくそのまま家に帰ることにしたのか、校舎前の道を歩いていった。

「待て穂乃果。」

その言葉に穂乃果が顔を上げると、目の前には志郎が立っていた。彼は険しい表情で穂乃果と校門の間に立っており、ここは通さないと言わんばかりに仁王立ちをしていたのだ。

「今ならまだ間に合う、引き返せ。」

志郎は再び穂乃果に声を掛ける。しかし、穂乃果は志郎の言葉を無視して彼の隣を素通りしてそのまま帰ろうとした。

「待て……。本当にこのまま帰るつもりなのか。」

志郎は校門を通り抜けようとする穂乃果の方へ振り向き、もう一度声を掛けた。二度目までは冷静だったが、三度目の声にはわずかながら怒りがこもっていた。

「スクールアイドルをやめるって言ったんだから、私の勝手ですよ。」

穂乃果は志郎の顔を見ることなくそう淡々と言うと、そのままもう一度歩き出した。しかし、志郎は穂乃果の腕を掴み、

「ふざけるな！これはお前だけの問題じゃない、アイドル研究部に所属している人間全

員の問題なんだ!!」

と穂乃果に怒鳴った。

「お前が自分だけの夢を自分で侮辱し捨てるのであれば勝手にすればいい。だが貴様はみんなの夢を侮辱したのだ!! あいつらがどんな想いを抱いてμ sに入ったのか知らないわけではないだろう! 貴様とて、このμ sの為にどれだけの汗と涙を流してきた!! 貴様のさっきの言葉は、他の8人のメンバーの夢や願いを踏みにじり、彼女たちの心を裏切ったも同然なのだ!!」

志郎は穂乃果に自分の感情を思いつきりぶつけた。感情をありのままにさらけ出すあまり、口調が勝頼だった頃のものに戻りつつあったが、志郎にそんな細事を気にする余裕はなかった。

「とにかく、今すぐ引き返して海未たちの元へ戻り、皆の前で先の言葉を詫びて取り消せ!! 今ならまだ間に合う!! さあ、戻れ!!」

志郎の怒りが込められていた叫びはいつしか懇願に変わっていた。志郎にとってはここが正念場だったからだ。ここで穂乃果を翻意させることが出来なければ取り返しがつかなくなる。志郎はもはや志郎は直感に近い間隔でそれを感じ取り、幸雄の制止を振り切ってここに来ていたのだ。

「前から思ってたんだけどさ。なんで志郎くんたちは私たちの事を手伝ってるの?」

「なに・・・!!」

志郎は、予想しなかった穂乃果の質問に戸惑い、たじろいだ。

「だってさ、志郎くんたちはこの学校の共学化に向けての実験生って事でこの学校に入ったけど元はと言えばこの音ノ木坂学院とはまったく関係ない赤の他人だよ。ね。だつたら手伝う理由なんてないじゃん。」

穂乃果はさつきと同じような諦観の境地に立ったような表情で志郎に語りかける。

「それに、学校の廃校だつて阻止されたんだからもう志郎くんたちが手伝う必要なんてないでしょ。志郎くんたちはなんのために私たちを手伝つてくれているの?」

「そ、それは・・・!」

『かつての自分と同じ道を歩ませないため』とは口が滑つても言えない志郎は口ごもる。「答えられないなら理由なんてないんでしょ? だつたらもう志郎くんたちには関係ないじゃん。」

「なに・・・!!」

穂乃果の口から放たれた冷たい言葉が志郎の虎の尾を踏んだ。

「俺の事をどれほど悪しざまに罵ろうが侮辱しようが構わん。だが屋上で貴様が放った言葉は今この時に夢を追い求めて努力しているすべての夢追い人に対する侮辱だ!! いや・・・、志半ばに倒れた者や、何らかの事情で夢を諦めざるを得なかった者、そして

夢を追うというステージに立つことすらできなかつた者たちさえも冒瀆していることが分からののか!!」

志郎は穂乃果の胸ぐらを掴まんばかりの勢いで穂乃果に詰め寄る。

「貴様は全てにおいて恵まれていた。天の時、地の利、そして人の和……！人が大業を成し遂げるために必要だとされている天地人の要素に恵まれ天運にも愛されていながら、貴様は夢を捨てると言ったのだぞ……!!」

志郎は、感情が高ぶるままに穂乃果に怒鳴り散らした。志郎は——人を引つ張ることのできるカリスマを持ち、どんな突拍子のない事を言い出しても信じて付いて来てくれる仲間がいて——夢を追う事ができる穂乃果に心の奥底で嫉妬していた。彼女の力に嫉妬し、憧れ、彼女の夢を支えようと心に誓った志郎だったからこそ屋上での穂乃果の言い分を許すことが出来なかつたのだ。

「お前はあまりにもわがままな女だ……。幼馴染が外国に行くというだけの細事に囚われ、共に同じ夢に向かって歩む同志たちの心を裏切るなどあまりにも無体な仕打ちだと思わんのか!!」

そして志郎の怒りがさらにエスカレートしたその瞬間……。

「うるさい!!」

穂乃果が志郎の声を遮るほどの大声で怒鳴った。

「……!?!」

志郎は今まで聞いたの事の無い穂乃果の怒鳴り声に気圧されて言葉を止め、彼女の顔を見て驚いた。

「志郎くんには分かんないよ……。私にとってどれだけ幼馴染が……。ことりちゃんの方が大事なのかなんて……。!!」

穂乃果は泣いていた。穂乃果は透き通った瞳から大粒の涙をぼろぼろと流していた。

「穂乃果……。」

志郎は彼女の泣き顔を見て、自分が大きな過ちを犯してしまったことに気付いた。幼馴染であることりを大切に思っている穂乃果の前で、夢を重んずるばかりに幼馴染の事を『細事』だと言い捨ててしまったという過ちに……。

「ま、待ってくれ穂乃果!!」

志郎は自分の過ちを詫びるため縋るように彼女の手を掴むも、その手はにべも無く振り払われてしまった。

「ついて……。来ないで……。!」

穂乃果は志郎にそう告げるとそのまま走り去ってしまった。志郎は走り去っていく

いで高天神城を見殺しにせざるをえなかったりと、昔からやることなす事が全て裏目に
出ていた!!」

地面を何度も殴りながら志郎は自分の要領の悪さや、良かれと思つて下した判断が全
て過ちとなつていたことを思い返し、考えが甘い自分の無能さを呪つた。

「μ sに．．．、穂乃果たちに俺の二の足を踏ませないなどと大言壮語を吐いておきな
がら結局はいざという時に何もできなかった!!何もしてやれなかった!!指をくわえて
見ている事しかできなかった!!そんな男が無能でなくて何だと言うんだ!!!くそつ!く
そつ!!!くそおおおおお!!!」

「やれやれ．．．。だから俺はやめとけつて言つたんだがなあ．．．。」

志郎が地面を殴りながら無能な自分への怨嗟の言葉を吼えたとているところに現れ
たのは幸雄だった。

「俺は忠告したぜ志郎? 『今の穂乃果はいろんな出来事に押しつぶされてて冷静な判断
が出来てる状態じゃあない。お前みたいなタイプの方が奴が説得しようとしても言い争い
になつて最終的に拗らせるだけだ。』つてな。なのにお前さんはその忠告を聞かなかつ
た、まさにあの時と同じだな。俺が岩櫃城に來いと進言したのにそれを蹴つて小山田の
岩殿城に行つた結果お前は梯子を外されてそのまま死地へと向かわざるを得なかつ
た．．．。」

「うおおおおおおお．．．!!!」

幸雄は冷酷な眼差しで志郎に語りかけるも、返ってくるのは志郎の怒りと悲しみに満ちた叫びだけだった。

「．．．ふう、聞こえちゃあいねえか。」

幸雄はため息をつくとき、頭を掻きながらそう言つて志郎をそのままに校門に向かつて歩き始めた。

「あくあ、こういう時こそ志郎には頑張つてもらいたかつたんだが．．．。ありや心がポツキリと折れちまつてやがるから、当分精神的に再起不能だろうな。となると．．．。μ， sはもう、ダメかもしれないな。」

幸雄は、もしμ， sが進むべき道を見失つたり、大きな壁にぶつかつて挫折そうになつた時にはフアーストライブの時のように彼女たちを励まし、立ち直らせ、進むべき道を再び進めるように導く、太陽に代わる篝火のような役目を志郎に期待していた。

だが幸雄の目には、今の志郎にはその役目を果たすことはできないと映つた。『μ， sは9人だからこそ輝く』、『μ， sの原動力は穂乃果にある』、『いざという時は志郎が9人の道を照らす』、幸雄が思い浮かべていたμ， sが上手く立ち行くために必要だと考えている3つの条件が全て潰えたことで、μ， sはもう再起不能かもしれないという結論を幸雄は出したのだ。

かつての崩れ行く武田家を連想させる出来事に直面し、再びなす術も無く、sの分裂をただ見ている事しかできなかった志郎の嘆きと無力な自分を呪う自身への怨嗟がこもった咆哮が、朱色に染まる夕焼け空に虚しく響き渡った。

44話 虎の魂は死せず

穂乃果がμ、sをやめると言い、志郎が穂乃果を引き留めようとしたものの彼女を傷つけ、そして幸雄がμ、sに見切りを付けたあの日から数日が経った。

結局μ、sは絵里の発案で本格的に活動を休止した。今回の一件を機に自分たちを見つめ合うべきじゃないか・・・というのが彼女の言い分だった。もちろんこは反対したが、

「今のままで続けても意味があるとは言えないわ。μ、sは穂乃果がいなかったら解散したようなものでしょ。」

という真姫の言葉を聞いて渋々と承諾した。μ、sというグループが穂乃果のカリスマ性と、廃校を阻止するという目標に依存していたという事はみんな認識していたし、にこも例外ではなかった。

それからμ、sのメンバーはそれぞれバラバラになって動き出した。絵里と希は今まで通り生徒会の活動に尽力し、海未は弓道部、真姫は昼休みと放課後にピアノを弾く生活に戻った。そしてこは凜と花陽に呼びかけてスクールアイドルとしての活動を

続行していた。

彼女たちだけでなく、事実上アイドル研究部から離脱している志郎たちもそれぞれバラバラに動いていた。

幸雄は常に退屈そうにしているかと思えば、昼休みになると決まってどこかに姿を消す……という猫のような生活を送っていた。彼の姿をたまたま目撃した生徒が言うには、彼は誰に聞かせるわけでもなく、

「どうしたものか……。『あいつ』との約束、守るべきなのかねえ……。」
と呟いていたそうだ。

そして、志郎はと言うと……。

「……ごちそうさまでした。」

「志郎、最近ぜんぜんご飯食べてないじゃない……。それに顔色も少し悪いし大丈夫なの？」

「平気だよ母さん、別に具合が悪いわけじゃないし。」

「そう……。だといんだけど。」

「うん、行つてきます。」

あの日以来、すっかり志郎は意気消沈してしまったのか普段の堂々とした姿は見る影もなく、どこかやつれていいる雰囲気を漂わせていた。食事も喉を通らないのか普段の半分どころか3分の1程度しか口にしない上に夜も満足に眠れていないのか、顔色も良くなく母親に心配されるほどだった。

「……。」

学校でも穂乃果や海未、そして幸雄とも喋ることなく、いつも上の空な様子で過ごしていた。

そしてある日の放課後……。

「志郎……最近どうも変ですよ？顔色は悪いしいつも上の空で……。あの日からずっとそうです。あの日、何かあったんですか？」

志郎の事を案じていた海未が思い切って志郎に何があったのかをたずねた。彼女の言う『あの日』とは、もちろん穂乃果がスクールアイドルをやめると言い出した日の事である。

「……すまない。」

「え？」

「すまない。『あれ』は俺の問題なんだ……。心配してくれてるのは嬉しいが、今は俺を一人にしてくれ。」

志郎は申し訳なさそうな表情でそう言うと、そのまま一人で歩いて行ってしまった。

「志郎……。」

海未はそんな彼の哀愁漂う背中をただ見送ることしかできなかった。

「まったく、情けない男だな俺は……。」

志郎はため息をついてそう言って家のドアを開け、

「ただいま。」

と家に入りリビングに行く……。

「よお志郎! どうしたんだよそんなシケたツラしてよ!!」

「と、父さん!?!」

高いテンションで志郎に声を掛けたのは志郎の父、諏訪部晴彦だった。

「へへへ、なんで今家にいるんだって顔してるな志郎。」

「そりやそうだろ……。父さんが帰ってくるのって早くても9時ぐらいじゃないか。今まだ5時になったばかりだぞ?!」

志郎は壁にかかった時計を指差しながらそう言うのと、

「ああ言つてなかつたな。今日は有給貰つて休んでたのさ。」

とあくびをしながら晴彦は反論した。

「有給?! そんなものを取るような用事なんて無いはずじゃあ……。」「俺にはあるんだよなそれが。」

「……?」

父の意図が理解できない志郎は怪訝な表情で首を傾げた。

「志郎、お前最近母さんに心配かけてるだろ。」

「!!」

さつきまでのお茶らけた雰囲気から一転した真剣な表情で指摘された志郎は思わず息を呑んだ。

「……凶星みたいだな。母さん言つてたぜ? 最近お前が飯もロクに食わねえし、顔色も悪いのに平気だつて言つてて心配だつてよ。」

「それは……。」

「まあまあ、お前くらいの年頃の男にや親に……。しかも母親に言いたくない事の1つく

らいあるのは俺も分かるぜ？ だけどよ、そうやって抱え込んじゃまってるって周りにも見え
てくるわけだな。だから母さんだつて今朝お前の事を心配してたんだぜ？」

「……。」

「だからよ、何があつたか話してくれねえか？ 男同士、親子水入らずでき、そしたら気も
晴れると思うんだが……。どうだ？」

晴彦の言葉を聞いて志郎はしばらく考え込んでから、

「分かつた。話すよ、何があつたのか……。」

志郎が意を決してそう言うと、

「それでこそ俺の息子だ。」

と晴彦はにっこり笑つた。

そして志郎は、晴彦に今まで起きたことを全部話した。文化祭のライブでのこと、こ
とりの留学のこと、それらがきつかけで穂乃果がμ'sをやめると言い出したこと、そ
して穂乃果を引き留めようとして、彼女の心を傷つけてしまったことを……。全て包
み隠さず晴彦に話した。

「なるほど。……最近で色々あつたわけだ。」

「・・・ああ。」

「お前も大変だったろうに、よく頑張ったな。」

晴彦がそう言うのと、

「俺は何もしていないよ・・・。いや、何もできなかった。文化祭とライブに向けて前のめりになりがちだった穂乃果を諫めることもできなかったし、ことりが留学をみんなに打ち明けた時も・・・。そして何より、穂乃果を引き留めようとしたのにあいつを傷つけてしまった・・・。俺はここの一番ついでいう時に何もできない無能だ・・・！」

と志郎は再び自分を責めた。

「・・・志郎はよお、少し責任感が強すぎるよな。」

「え?」

「お前は昔っから何があっても人のせいにはしない奴だったよな。神峰橋から音ノ木坂に転校することになったって俺たちに言った時も『全部俺が蒔いた種だ』って言ってたしな。」

「そ、それは俺が暴れたからそうなったからで・・・!」

「責任感が強いってのはいい事だが、1人で抱え込みすぎるのは良くないって事!過ぎたるは猶及ばざるが如しって言葉があるだろ?つまりそう言う事だ、お前はそうやって自分で自分を押しつぶしちまってるんだ。」

晴彦は齒に衣着せることなく、自分の息子である志郎の長所であり短所である部分を指摘した。

「俺が・・・自分を？」

「そうだ。それにこの一連の出来事に関する答えなんてとつクに出てるじゃねえか。」

「とつクに？」

「ああ、結局のところみんな間違つてたのさ。穂乃果ちゃんも、ことりちゃんも、海未ちゃんも、他の μ sのメンバーも、幸雄くんも・・・。そして志郎、お前もだ。」

「・・・。」

晴彦の出した結論に志郎は何も反論できなかつた。いつの日か穂乃果のお見舞いに行つた時の絵里と同じ言葉だつたからだ。

「まあ結果だけみてそう言いきつちまえばそこでおしまいなんだが、志郎を含めてみんなが互いの為に良かれと思つてやつた事が不幸にもぶつかり合つちまつたのが何とも言えないな。お前だつて、穂乃果ちゃんに μ sをやめて欲しくなかつたし、 μ sにはバラバラになつて欲しくなかつたんだろ？ んで、その気持ちが逸つちまつたばかりにそんなことになつたんだろ？」

「ああ、自分の気持ちを優先しすぎてあいつの気持ちを考えてやれなかつたから・・・。」
「それで充分さ。」

「え？」

「お前はそうやって自分を省みることが出来る。人を傷つけちまつたつて反省できるつてだけで充分なんだよ。この世の中にやあそれが出来る奴はそうそういなええからな。その反省を次に活かしゃあいいじゃねえか！」

「でも、もうμ s は・・・。それに俺が出来る事なんて何も・・・。」

「別に解散したわけじゃないんだろ？それに1人で抱え込むなつて！志郎、お前やつと『友達らしい友達が出来た』つて言つてたじゃねえか！そいつに頼れ！一緒に知恵を出していけばいいじゃねえか!!」

晴彦は志郎の肩をバンバン叩きながら笑顔でそう言い聞かせた。

「それにな、俺はお前のことを凄い奴だつて思つてるんだぜ？これといった取り柄も無い平凡なサラリーマンの子だつてのに運動神経はハンパじゃねえし力持ち、しかもそれでいて乱暴な性格にもならず、自分の力に驕ることも無く、自分の過ちを心から反省することが出来るいい男に育つてくれた！だからこそ俺も母さんもお前のことを凄い奴だつて信じてるんだぜ？」

「父さん・・・！」

晴彦の言葉を聞いた志郎は男泣きに泣いた。自分のことを、『自分の子供だから』と、『立派に育つてくれた』と言つて信じてくれる、親と言う存在の有難さと偉大さを感じて

泣いた。

武田の子として扱ってはくれなかつたものの武将として尊敬し、その背中に憧れた信玄とは違う、本当の意味で父親らしい父親の優しい励ましの言葉を受けた勝頼の心には『父親に認めてもらえた』という子供としての純粋な喜びと、自分を無条件に信じて励ましてくれる親への感謝があつた。

「オイオイ泣くなよ志郎、いい歳してせつかくのいい男が台無しだぜ？」

晴彦は嬉しそうに笑つて志郎の背を優しくさすつた。

「ありがとう父さん。俺、やっと目が覚めた。」

「そっか、そいつは良かった。」

「父さんのおかげで前に進めそうだ！」

志郎がそう言つた瞬間、

ぐ~~~~~。．．．。

という音が部屋に鳴り響いた。

「ははは、その前に腹ごしらえしなきゃだな志郎。」

「そうだな。気が晴れたら腹が減つて来た．．．。ここ最近飯が喉を通らなかつたから

なあ。」

「そう言うと思つて母さんに頼んで今日はたつぷりと夕飯を作ってもらつたぞ!! さて、そろそろできる頃だな……。」

晴彦がそう舌なめずりをしながら言うと、

『あなた〜! 志郎〜! ご飯できたわよ!!』

と声が聞こえて来た。

「噂をすればなんとやらだな。」

「行くぞ志郎! 早くしないと冷めちまうぞ!!」

「ああ!」

志郎は晴彦と一緒に部屋を出て、リビングに向かった。

リビングの食卓には、所狭しと言わんばかりに料理が並んでおり、もちろんご飯も山盛りであつた。

「いただきます!!」

志郎は手を合わせてそう言うのと、ご飯やたくさんの料理を口の中にかき込んだ。

「凄い食べっぷりね志郎……。まるで掃除機みたい。」

「それだけ腹が減つてゐるって事さ。それにあいつはこれから忙しくなるから、その為には活力がいるのさ。」

志郎の母、美代子と晴彦は志郎の豪快な食べっぷりを見ながら微笑まし気に話していた。

「何を話してたの？」

「それは男と男の秘密さ。」

「そう。それにしても、志郎が元気になってくれてよかった……。」

「言つたろ？俺に任せとけて。さ、俺たちも食おうぜ。いただきます！」

「ええ、いただきます。」

（ありがとう父上……。おかげで俺は目が覚めた。父上の信頼に報いるためにも、そして俺の『夢』のためにも、必ずやμsの結束を取り戻して見せるぞ!!）

志郎は夕食を食べながら心の中で決意を固めた。

「ふう、ごちそうさまでした。」

「はい、お粗末さまでした。」

「それにしてもすげえなあ……。普段の3倍くらい食ってんじゃねえか？あんなにたくさんあったのにほとんど皿を空っぽにするなんて今までどんだけ食べてなかったんだか。」

「とりあえず皿洗うの手伝うよ母さん。」

「ありがとう志郎、でもその気持ちだけで充分よ。」

「え？」

「志郎にはやる事があるんでしょ？父さんが言ってたわ。」

「でも……。」

「志郎は自分のやりたいことの為に自分の力を振るいなさい。せつかく心から楽しいって思える事に巡り合えたんだから、今はそれに集中しなさいな。」

「そうそう、お前はもうちつと人に寄り掛かることも知るべきだ。後片付けとかは俺と母さんに任せとけて。」

美代子と晴彦がそう言うのと志郎は折れたのか、

「ありがとう、絶対成し遂げてみせるよ。」

と2人に礼を言ってから部屋に戻っていった。

「もしもし政康、今大丈夫か？」

夕食の後に風呂に入ってから志郎は政康に電話をかけていた。

『おお、志郎か！聞いたぞ貴様、μ s が活動休止とは一体どういう事だ!?!色々納得いく

ように説明してもらおうか!!』

電話が繋がるや否や、政康の怒声が志郎の耳に飛び込んできた。

「ああ、そこら辺の事情の説明も含めてお前に相談したいことがあるんだ。実は……。」
志郎は政康にも文化祭以降の一連の出来事を余すことなく話した。

『……なるほど、事情は概ね把握した。』

「意外と落ち着いてるな政康。てつきりものすごく怒鳴られるとばかり思ってたんだが……。」

『ふん、俺とて周りのことを配慮しておるわ。しかし貴様は幸運だぞ志郎?』

「え?」

『もし電話ではなく面と向かって話していたら貴様の首を全力で締め上げていたかもしれないのだからな……!』

「ひっ。」

政康の一見穏やかに聞こえるが殺気のコもってる死刑宣告に志郎は背筋に悪寒が走るのを感じた。

『それにしてもずいぶんとやらかしたものだな志郎よ。ことりさんの留学に関することや屋上での出来事で何もできなかったことに關しては俺に責める権利は無いが……、問題はその後だ!!穂乃果さんを泣かせるとは何たる狼藉か!これだけは、sの1ファ

ンとしては断じて許すことはできません!!もし俺が穂乃果さんを一番推していたら今すぐ貴様の家に行つて貴様の身体を塵芥ちりあくたにしてやるところだったぞ……!それほど貴様の罪が重い事を知れ!!」

「うっ、返す言葉も無い……。」

『それはひとまず置いておくとして1つ解せん事がある。何故俺を頼つた?貴様には武藤という優秀な知恵袋がいるではないか。』

「幸雄は……、あいつはもうμ、sを見限つてしまつてると思つてな。お前もあいつの性格を知つてゐるなら分かんなくてもないだろ?」

志郎はあの日から幸雄とは全く話してはいなかつたものの、幸雄が実質解散しているような状態であつたμ、sを見限つてゐるであろうことは、何となく認識していた。だからこそ政康に電話を掛けたのだ。

『確かに奴の性根を考えればそういう結論に辿り着くのも無理はあるまい。』

「だからお前に、これからの事を相談したくて電話を掛けたんだよ。」

『なんだ、そのような事であつたか馬鹿馬鹿しい。』

志郎の言葉を聞いた政康は吐き捨てるようにそう言った。

「なに……!?!」

『貴様はいつからそのような腑抜けになつた?貴様は今別の人間ではあるが中身は武

田勝頼であろう？かつて信玄の後を継ぐ若虎として部を振るい長篠で敗れた後も、北関東の連中と手を組み真田をけしかけ上野を奪つて伊豆を窺い、俺に北条家はこれまでかもしれないと恐怖させたあの武田勝頼はいつから腑抜けた!!」

「え．．．!?!」

政康がいきなりまくし立て始めたことに志郎は困惑した。

『俺は貴様の盟友ではあるが、同時に宿敵であることを忘れるなどという事だ！貴様にはわざわざ宿敵を頼らずとも何かを成し遂げられる力がある!!貴様は自分がやりたいようにすればいいだけのことでないか。そんな事も分かんのか間抜けが!』

「俺のやりたいように．．．。」

『左様。貴様の心の中には既に浮かんでいるのではないか?』

「ああ、俺は穂乃果に謝りたい．．．!そして、バラバラになりつつあるμ sの結束を取り戻したい!!」

志郎は、自分の胸の中に湧き上がって来た『やりたいこと』を政康に打ち明けた。

『ふつ、それでよいのだ。だが、μ sの結束を取り戻す．．．という事はことりさんの留学を止めることになるが、それについてはどうする気だ?』

「できる事なら止めたいが、俺にことりの決断を覆す権利は無い。俺はあくまでもμ sが武田家のようにみんながバラバラになって空中分解するのを防ぎたいだけだから

な。もしことりが留学に行つて、μ s が解散するという結果になつたとしても、喧嘩別れのような形にならないければその結果を甘んじて受け入れるつもりだ。」

『・・・そうか。ならば志郎、貴様は己の心を偽ることなく存分に力を振るえ！そしてμ s の結束を、絆を取り戻してみせよ!!』

「お前に命令される謂れなんて無いぞ政康！それにお前に言われずとも、必ず俺は成し遂げる・・・！」

『ふふふ・・・！では、どのような結末になるのか楽しみにしているぞ？』

「ああ、楽しみに待つてろ。」

志郎は不敵に笑いながら政康にそう返すと電話を切つた。

「・・・そうだ、政康に言われた通りに自分のやりたいことをやればいい。使命感やら責任感は全て投げ捨てろ、野を気ままに走る虎のように、自分のやり方で為すべき事を為せばいい・・・！」

志郎はベッドに寝転がり、天井を仰ぎ見てそう呟いた。その表情には今までのような迷いや躊躇い、そして自分の無力を責め呪つた、後ろ向きな自分はないなかつた。

「よし、そうと決まれば策を練らねばならん！μ s の結束を取り戻すために必要な事も、μ s を見限つてしまった幸雄を如何にして呼び戻すかも考えねば・・・。今夜

は徹夜になりそうだな。」

こうして志郎は机に向かって、μ s 再興のための策を練り始めた。

一度は無力感と諦観の底に沈んだ若き虎の魂・・。しかしその魂は、現世の父と奇妙な友情を持つ友人によって復活を果たした。

若き虎はかつての自分がぶつかり、今なお立ちほだかり続ける大きな壁を乗り越えるために再び走り始める。その顔は清々しく、希望に満ちていた。

45話 若虎、再始動

志郎が晴彦と政康の激励によって絶望、迷いや躊躇いを振り切った次の日の朝、志郎は誰もいない屋上で空を眺めながらある人物を待っていた。

「——来たか。」

後ろを向くことなくひとりごちるように志郎が呟くと、

「へへ、ずいぶん久しぶりの呼び出しだな。」

いつの間にか幸雄が後ろに立っていた。

「ああ、あの日以来だな。」

志郎は幸雄の方に振り替わりながらそう言った。

「で、何の用だ？もう μ s が実質解散状態になった今、俺たちがすることなんて何も無いはずだが？」

「ああ、そうだな。確かに常識的に考えればもう俺たちがすることは何も無い……。だが、お前に頼みがある！」

すつとぼけたような物言いだ。志郎に用件をたずねる幸雄の目をまっすぐ見据えながら志郎は幸雄に話を切り出した。

「俺はμ sを……。バラバラになってしまったあいつらの絆を元通りにしたいと思ってるんだ!!」

「あいつらを元通りにするだ!?!」

志郎のものとは思えない突拍子もない提案に幸雄は思わず目を丸くして驚いた。

「……数日、あの日の事で後悔したまま塞ぎ込んで気が触れたらしいな。そいつは無茶な話だぜ。決定的にすれ違っちゃまった穂乃果とことりを和解させるのが難しいのはお前だつて実感してるはずだ!それに、μ sを元に戻すなんざそれに輪をかけて無茶な話さ。当の穂乃果はスクールアイドルをやめるつて言ってるし、μ sは9人のうち誰か1人でも欠けたら立ち行かなくなる運命共同体だ!元に戻すつて言うんならことりの留学を無理やりにも阻止しなくちゃならねえ……。」

そして幸雄は志郎の提案が如何に無茶な事であるかを志郎に語る。

「……幸雄。お前は何か勘違いをしているようだが、俺は何もμ sを今まで通りの状態に再興しようと思つてはいない。」

「なに!?!」

「俺が取り戻したいのはあくまでもあの9人の結束、絆なのだ。」

「絆……。」

「確かに9人のμ sが無くなってしまふ事になるだろうというのは惜しい事だが、何

も俺は無理やりμ、sを元に戻そうというわけではないんだ。ただ、終わるにしてもこのまま喧嘩別れのような状態で終わらせたくない……。終わりを迎えるならせめて空中分解という形ではなく円満な形がいい、俺はそう考えている。」

「なあ志郎よ、お前は本気でそう思ってるのかよ?」

「ああ。俺もできる事ならμ、sを終わらせたくはないが、どうしようもないというのなら俺はこの運命を甘んじて受け入れるよ。」

（志郎め、何があつたか知らんがずいぶんとまあ澄んだ目をしてらっしやる……。奴の話を聞くだけじゃ一見諦めてるようには見えませんが、奴の目の底にある炎はまだ消えたくないと言わんばかりに燃え続けている……。）

幸雄は自分が出した答えとどうしたいかを語る志郎の目を見て、望みを完全に捨てていくわけではないことを感じた。

「志郎、お前いい目をするようになったな。」

「は?確かにしよぼくれてた時よりは目つきは良くなってるだろうが……。?」

「違えよ、もつと前と比べての話だ。お前は今まで『μ、sに自分の二の舞を演じさせてはいけない』という使命感で動いてただろう?だからお前さんの表情は勝頼さまだった頃ほど切迫したものではないが余裕がなかった。だが、今のお前は違う。色々と吹っ切れたおかげか、表情が今までよりも柔らかくなつて余裕が出てきている。」

「余裕……。」

幸雄に自分の表情について指摘され、顔を手でなぞりながら呟く。

「そうだ。そして何より、お前の行動原理が『くしくなくては』から『くしたい』に変わっている！これは大きな成長だ！ようやくお前は信玄公と同じステージに立ち上がったんだ!!」

「俺が、父上と同じステージに……!?!」

「そうだ、お前はようやく本当の意味で夢を追う男になったんだ……!!」

志郎は、自分が追い付くことのできなかつた信玄と同じ領域に立ち上がったという幸雄の言葉に困惑していたが、幸雄はそんな志郎の肩を叩き、笑顔でそれを祝福した。

「じゃあ幸雄、もうμ sを見限ったお前にこんな事を頼むのは勝手かもしれないがどうか俺と共にμ sのために力を尽くして欲しい!!」

志郎は幸雄にもう一度自分とμ sの支えになつて欲しいと頭を下げた。

「おいおい！そんなに頭を下げないでくれよ水臭いな。お前に……否、勝頼さまに頼まれたことをこの俺が断るわけないでしょう!!」

幸雄は慌てて志郎の頭を上げさせ、ニカツと笑つてそう言った。

「そうか、ありがとう……!?!ありがとう……!!」

志郎はそんな幸雄の心強い言葉に男泣きに泣いた。

「おいおい、今泣くのは早すぎだろう。それに男に泣かれても気持ち悪いだけだぜ！」
「それもそうだな。」

音ノ木坂学院の屋上にはしばらく男2人の笑い声が響いた。

「さて、じゃあこれからどうするか考えようか。」

ひとしきり笑った後、幸雄はそう言つて屋上にどかつと座り込んだ。

「これからどうするか・・・か。それなりに策は考えてきているが・・・。」

「そうじゃねえよ。今言つてるのは俺たちが目指すべき終着点の話だ。」

「最終目的だど?」

「そうだ。今回のこの騒動の決着をどう付けるかで俺たちのこれからは大きく変わる。場合によつちや廃校が阻止されたこの音ノ木坂学院には俺たちは用済みだつて事で行くことになるなんてことも起こりうるかもしれないからな。」

幸雄はこの方針の選択が自分たちの運命を左右するかもしれないという事を険しい表情で説明した。

「俺の方針は、sの絆を取り戻すこと、それ以外には何も無い。」
「本当か？」

「なっ……、俺が嘘をついてると言いたいのか!？」

志郎は幸雄の訝しむような物言いに慥然と言った様子で抗議した。

「別に俺はお前が嘘をついてるって言ってるわけじゃあねえよ。ただ、それがお前の本懐なのかって聞いただけさ。」

幸雄はそれに対して志郎を宥めるように答えた。

「少なくとも俺の目には、sを復活させることこそがお前の本懐のように見えるんだがな。」

「そう……なのか？」

「あ?もしかして自覚が無かったか？」

幸雄はむきになって反論するかと思つたら、きよんととしてたずねてきた志郎の反応が予想外だったのか、拍子抜けした。

「とにかく俺とお前は400年越しの空白期間があつたとはいえそれなりに長い付き合いだったんだ、大体お前のやりたい事は分かるさ。さつきお前の目を見た時にな、俺はお前の目に炎を見たのさ。」

「炎?」

「そうだ、大きな野望を抱いた者が燃やす野心の炎……信玄公の目にもそれがあつた。お前は心の奥底で、sを復活させたいという野心を燻らせてるんだよ。」

幸雄は志郎の目を指差しながら彼の本心を言い当てるように言った。

「……確かにそう考えはしたさ。でもそれは難しいと思つたし、お前だつてさつきは無理な話だつて言つてただろ?」

「ああ、確かに言つたな。だが俺はお前の野心の炎を宿したその目を見た瞬間にその意見を覆した!お前となら……、さらなる領域に立つたお前となら成し遂げられるつてな!!」

「幸雄……。」

「お前だつて、sを復活させること考えはしたんだろ?だつたらやつてやろうぜ!お前の野心と勇氣、そして俺の知略で!奇跡を起こしてやろうじゃねえか!!」

「ああ……そうだな!!」

志郎は一瞬躊躇つたが、奇跡を起こしたいという自分の心に従つて幸雄の想いに応えた。

「よし!じゃあ話を戻そう。お前さつき策はそれなりに考えたつて言つてたが、何かいいアイデアがあるのか!」

「ああ、実は昨日徹夜して考えたんだ。」

「おお！それで？いったいどんな策が！」

「それはな……。説得だ!!」

志郎が出した策は説得。ただそれ一つだった。

「……は？」

「だから説得だよ！9人全員を説得して回ってだな——」

呆然としている幸雄に志郎は策の内容を説明したが、

「いやいやいやいや、そう言う事を聞いてんじゃねえよ。お前、まさかそんな単純で捻りのねえ初歩中の初歩の策を考えつくのに徹夜したって言うのか!？」

と、幸雄は呆れた様子で志郎の言葉を遮った。

「いや、他にもいろいろ考えはしたんだがどうにも気の利いたものが浮かばなくてな……。これを思いついたときにはもう朝の6時になってたわ。ふああ……」

志郎は苦笑いしながら弁明するとあくびを一つ漏らした。

「はあ……。そういやお前は脳筋だったな。なんで俺に相談しなかった!!？」

幸雄はため息をつき、自分に意見を求めなかったのかをたずねた。

「だって昨日までお前の事だから見限ったㄥ、sの事を相談しても取り合ってくれないだろうって思ったんだよ!!」

「確かに見限ったのは事実だがそれはお前がしよぼくれててㄥ、s再起は無理だって

思ってたからだっつーの!!」

「そんなの知るか!!」

と、志郎と幸雄は互いに言い争っていたが……。

「ぜえ、ぜえ……。まあ確かに、志郎の言う通りここは地道に説得した方がいいかもな。変に気を回して妙な事をすれば地雷を踏みかねん。」

「はあ、はあ……。そうだろう?」

しばらく経つと、頭も冷えて来たのか息を切らしながら作戦会議を進めていた。

「だが、9人を相手に片っ端からつてのはあまりにも非効率だ。」

「じゃあどうすればいいんだ?」

「とりあえず俺たちが二手に分かれて説得すりゃいいのさ。」

幸雄は、9人の説得を2人で分担して行う事を志郎に提案した。

「それは名案だ!で、どのように分担を分けるんだ?」

「こんな事もあるうかと、あの日以降のメンバーの動きを3つにカテゴリーしておいたぜ!」

幸雄はどこからかメモ帳を取り出して得意げにそう言った。

「まあ、あいつらの動向を大まかに分けると帰巢派、残党派、そして不動派に分かれているんだ。」

「帰巢派に残党派、そして不動派か……。誰がどのグループに当てはまるんだ？」

志郎が首を傾げてたずねると、幸雄は待つてましたとばかりに話を始めた。

「まずは帰巢派だな。これは、sに所属する前からやつていたことに専念してるタイプだ。弓道部の海未と、生徒会のツートップである絵里と希、そして昼休みと放課後に音楽室に入り浸ってる真姫がそれにあたる。」

「なるほど。」

志郎は幸雄の的確な分析に舌を巻きながら頷く。

「次に残党派は、にこと凜と花陽だな。にこは、sが活動休止になった後も凜と花陽を誘ってスクールアイドルとしての活動を続けているんだ。だから解散してるわけじゃないが残党派で名付けた。恐らく今も神田明神の男坂でダッシュしてるところな。」

「それで残党派か……。」

「そして一番の難物にしてこの騒動の台風の目、不動派だ。ここまで来たら誰がこのグループにいるか分かるよな？」

「……穂乃果とことりか。」

「その通り。ことりは留学の準備で忙しいのか学校を休んで、穂乃果は昨日までのお前と同じように無為な毎日を送っている。」

「これといった動きを見せてない事から不動というわけか……。」

「そういうこつた。梃子でも動かせそうにねえって意味でもあるが……まあ一番の難物であることに変わりはないわな。」

志郎の言葉に幸雄はうんうんと頷きながら軽い冗談交じりに答えた。

「みんなの動向はそれなりに分かったが、これでどうするつもりなんだ？」

「これからメンバー全員を説得するんだろ？ だったらこれを活かさない手は無いつてことだ。1人1人しらみつぶしに当たるより複数人を相手にした方が効率的だろう？」

「なるほど、グループごとに説得していけばいいわけだ！ だが、誰がどこを担当するかが問題だな……。」

志郎は幸雄の言葉に合点がいったように指を鳴らすが、誰がどのグループを、そしてどのメンバーを説得すべきか考え込み始めた。

「それについてはもう答えは出てる。いや、今分析して割り出した。」

「おお！ それで、誰がどこを担当すればいい!？」

志郎は身を乗り出して幸雄にたずねる。

「とりあえず真姫とことりは俺が担当する。」

「2人だけ!」

「当つたり前だろ!俺の調略があいつらに通じにくいのは知ってるだろうが!」

幸雄は素つ頓狂な声を出した志郎に対してムキになつて抗議した。事実、真姫にはおべつかの類が通じないと見切り、オーブンキャンパス前に絵里にゆさぶりをかけた時も彼女には通じなかつたり、そもそも海未とは本質的に相性が悪い(仲が悪いわけではない)などと、様々な意味で幸雄が、sのメンバーと相性が良くないことが今までの出来事から伺う事ができる。

「確かに前々からそんな事言つてたな。それにしてもなぜその2人なんだ?」

志郎はそんな事もあつたかと今までの出来事を思い返して苦笑したあとに、どうして幸雄がことりと真姫の2人に狙いを絞つたのかをたずねた。

「まずは真姫だな。あいつはメンバーの中でも群を抜いて冷静かつ理性的な奴だところ数ヶ月で把握できている。そんなわけで9人の中で最もスムーズに交渉ができる相手だと考えてターゲットにした。」

「なるほど。確かに真姫は理詰めで話し合うと納得してくれる気がする。」

志郎は幸雄の説明に納得して頷く。

「だがこつりを選んだのは解せんな。あいつはお前にとつちやかなり分が悪い相手だろうに。」

「だと思っじやろ?」

志郎は幸雄がことりを選んだことに對して疑問と懸念を感じていると、幸雄は志郎の言葉に對して悪だくみをしているような表情をニヤリと浮かべる。

「・・・何かアテでもあるのか?」

「ふふふ……。確かにことりは俺にとつちや分が悪すぎる相手ではあるが、今回の一件ならむしろその相性をひっくり返して俺がマウントを取る事ができるのよ!」

訝しむようにたずねる志郎に對して幸雄はウキウキと楽しそうに語る。

「はあ……。お前がそうやって楽しそうにしてると大抵口クでもない事を考えてると予想はつくが、とりあえずことりにどんな手を使う気なのか教えてみる。」

志郎は呆れたようにため息をついて幸雄のことりに使う策を聞き出そうとする。もちろん内容次第では反対するつもりであった。

「いいぜ。今回ののは特上だからあまり人には漏らしたくないが、お前なら特別だ。それはな……。」

幸雄はわざとらしく勿体ぶるような仕草をしてから、志郎に對ことり用の策の全貌を耳打ちで教えた。

「正気か貴様?!」

幸雄の策を聞いて驚いた志郎は思わず勝頼だった頃の口調に戻っていた。

「耳元でそんな大声出すなって……。正気じゃなかったらこんな事考えつかんよ。」

幸雄は志郎の大声でキーンと耳鳴りする耳を押さえながら志郎にそう言った。幸雄自身は自分は正気であると言い張っている。

「お前の性分はそれなりに分かっているつもりだがそれは……。」

「何か不備でも？」

「いや、不備は無いしお前なら必ず遂行できると確信している……。だがこれはやり方があまりにもマズいし何より、失敗すればことりの心に大きな傷と誤解を植え付けた状態で旅立たせてしまうし、もし成功したとしてもお前とことりの仲は確実に決裂する事になるぞ!!」

志郎は幸雄が考えついた策のリスクがあまりにも大きすぎることを懸念していた。リスクの大きさが大ききなだけに志郎は荒い口調で幸雄に詰め寄る。志郎としては無二の友である幸雄に自分を犠牲にするような策を取って欲しくないという思いがあった。

「いやそんなリスクなんざこの策を考えついた時から承知の上に決まってるんじゃん。志郎こそ正気か？大業を為すにはそれなりにリスクを背負うのは当然だろうに、こんな時にそんな事でゴチャゴチャ言っちゃ、s復活は成し遂げられないぜ？」

幸雄は突き放すような目で志郎に、自分の背負うリスクは当然のものであることを説明した。

「確かにお前の言い分は分かるがしかし……。」

「まあ、お前はこんな俺でも氣遣つてくれるくらい優しい奴だからな。氣持ちは分かるがお前は穂乃果に次ぐ、sの第二の旗印でもあり、あいつら9人の道を照らす篝火でもあるんだ。そんな奴が汚れ仕事をする必要もねえし、俺みたいな悪だくみ大好き男に頼つてくれりゃそれでいいのよ。泥をひつ被るのは俺だけでいい。」

幸雄はさつきの冷徹な態度から一変して優しい表情と声で志郎を宥めた。

「……分かった、そこまで言うなら真姫とことりについてはお前に一任する。何としてももしくはじるなよ?」

幸雄の言葉に折れた志郎は念を押すように2人の説得を改めて幸雄に任せた。

「必ずや成し遂げてみせるぜ。」

幸雄はガッツポーズでそれに応える。

「じゃあ俺は残党派と、帰巢派の絵里、希、海未、そして穂乃果を説得すればいいんだな?」

「そうなるな。あ、それと一つアドバイスしてやるよ。」

「アドバイス?」

「ああ、実は残党派の連中は明後日に3人でライブを開くつもりだからこれに便乗すると良いと思うぜ。」

「なるほど、上手く行けば、sの復活ライブに持ち込めるわけだな!? ありがとう幸雄。」

志郎は耳よりの情報を教えてくれた幸雄に感謝した。

「いいって事よ。」

幸雄は照れ臭そうに笑った。

「それで、作戦決行はいつにする?」

志郎は次に、作戦決行日時をいつにするか幸雄にたずねた。

「ことりが日本を発つのは明後日だ。やるなら今日の放課後だ!」

「今日だと!? 急すぎないか?」

『疾きこと風の如し』って言うだろ!? こういうのは早いほうがいい。それにその方が不測の事態に対応しやすい。」

いきなりすぎる作戦決行に困惑する志郎に対して幸雄は風林火山の風の部分を引用して自信満々な様子でそう言った。

「た、確かにそうだな……。じゃあ今日の放課後に生徒会室に——」

「馬鹿野郎! 生徒会じゃなくて残党派のところに行け。」

「な!?生徒会室の方が近いだろ?」

「今日はいいつらは放課後の練習で神田明神に行くはずだ。」

「なんでそんな事が分かるんだ?」

「ちようど1週間前の練習メニューが神田明神の男坂でのダツシユだからな。」

「すごい……。」

志郎は幸雄の情報収集能力に舌を巻いた。

「とにかく、放課後になつたら神田明神で残党派を説得してから次は学校に戻って弓道場に行つて海未、そして最後に生徒会室つて順路にした方が効率がいい。」

「すごいな……。参考にさせてもらおう。」

「とりあえず俺はゆつくり真姫の説得に取り掛かせてもらうぜ。」

「そう言えばことりの説得は今日やるのか?あいつは最近休んでて学校に来てないが……。」

志郎は幸雄にことりの説得をいつやるかたずねるが、

「あいつの説得は出発前だ。」

とだけ答え、

「出発前だ?!?それじゃさすがに色々無理があるだろ!!」

という志郎の言葉には答えなかった。

「それにしても、一度は見放した俺に協力してくれてありがとうな幸雄。」

作戦会議も大方終わった頃、志郎は幸雄に対してもう一度礼を言った。

「なんだよいきなり改まって。」

「いや、お前には本当に感謝してもきれないと思つてな……。」

「いいんだよ。俺はお前のそのイキイキとした目を見てお前がもう一度協力するに値する男だつて思つて付き合つてるだけなんだからさ。……それにあいつとの約束もあるしな。」

幸雄は志郎に対して照れ臭そうに感謝の言葉を撥ね退けつつ、志郎に聞こえないくらの小声で何かを呟いた。

「ん？最後なんか言つたか？」

「いや、何でもねえよ！それよりも必ず成功させようぜ。」

「ああ、そうだな……。穂乃果に謝つて、みんなを説得して……。必ずμsを復活させてみせるぞ!!」

志郎は太陽を掴むように空に向かって手をかざして決意をさらに固めた。

「なあ志郎！せっかくだからアレをやろうぜ!!」

「アレ？」

志郎は幸雄の突然の提案に首を傾げた。

「俺たちは400と数十年の時を超えて名前も身体も、そして内側に流れる血もかつてとは全く違う人間に生まれ変わっちまったが、魂は昔と変わらず武田家の旗の元に集った時のままだ。となるとやる事は決まってるだろ？」

「・・・あ！アレか!! そうだな！俺たちは名前や身体、そして流れる血が変わろうとも武田家と共にある！だとしたら武田勝頼たる俺ならアレをやらねばな！」

志郎は幸雄の言葉に心を躍らせて彼の言葉に応えた。

今の2人は、『諏訪部志郎』と『武藤幸雄』という現代に生きているどこにでもいそうな男子高校生であったが、その魂は紛れもなく群雄割拠の戦国乱世を生きた戦国武将、『武田勝頼』と『真田昌幸』そのものであった。

「御旗楯無も御照覧あれ!!」

志郎が天に拳を掲げて叫んだその言葉は、戦国時代において甲斐の国を治めた武田家の当主が戦に出陣する際に大広間に飾ってある家宝の『楯無の鎧』たてなしに対してかけたという誓いの言葉だ。

このμ sの復活を懸けた作戦が志郎にとっては何戦時代で経験したいくつもの戦いと同列に並ぶほど重要かつ心を引き締めて臨むべき事であることが分かる。

「おお!!」

幸雄も志郎の誓いの言葉に続いて関の声を上げる。幸雄もかつては武田家臣だっただけにこの誓いの言葉を聞くだけで全身の血が熱く燃え滾っていた。

「よし、行くぞ幸雄!」

「ああ、武運を祈る。」

不転の決意を立てた志郎と幸雄は互いの拳を打ち合わせて互いの武運を祈って屋上から降りて行った。

いよいよ志郎と幸雄の、μ sの行く末を左右する2人だけの戦いが幕を開けようとしていた。

46話 志郎vsにこりんばな

「——頼む！この通りだ!!」

「お断りよ!!」

「にやー……」

「あわわ……」

志郎と幸雄が、s復活の為の作戦会議を開いた日の放課後、神田明神には険しい顔で仁王立ちすることに、そんなにこの目の前で土下座をしている志郎、そして凜と花陽がそんな2人を困惑しながら見守っているという何とも言えない光景が広がっていた。

「何度も言ってるでしょ!」sが活動中止になった以上、私たちは私たちだけで活動が続けるって!それに明後日のライブを使わせてくれってどういう了見よ!!」

「そこを曲げて頼む!!確かにお前が怒る気持ちも分かる……。だが、ここでみんなが結束しないと、sが復活するのはおろか、喧嘩別れも同然に終わってしまうかもしれないんだ!!」

ここは怒鳴って志郎の提案を拒否する姿勢を貫くが、それでも志郎は引くことなく頭を地に着けたまま必死ににこの説得を試みる。

「だいたいさつきから、sを復活させるなんて言ってるけどできるアテでもあるの？」

「そうだよ、ことりちゃんは明後日には留学に行っちゃうんでしょ？」

「うん。志郎さんの言う通りにできたらすごいと思うけど、すごく難しいと思う・・・。」
「ここは志郎の提案した計画に成功する可能性があるのか志郎にたずねる。ここよりは志郎の提案に対して好意的な態度を見せている凜と花陽も、それを実現させることが難しい事を分かっているので俯きがちな様子であった。」

「確かに難しいのは事実だ。ましてや留学することりを引き入れることなどほぼ不可能と言っても過言ではない・・・。だが、幸雄という切り札がいる。」

顔を上げてそう語る志郎は、にこの目を真っ直ぐ見据えていた。

「幸雄が切り札ですって？」

「そうだ、あいつは俺なんぞ足元にも及ばない策略家だ。あいつの策があれば必ずことりさえも引き入れる事ができる。」

「・・・」確認するけど、あいつが何をするのかあんだ知ってるの？」

「知らん。」

志郎はこの質問に対して一切の迷いもなく知らない^{と断言した}と断言した。

「何をするのかも知らないのにずいぶんあいつのことを信じてるのね？」

「あいつは俺の友だ。友であるが故に互いの力は知り尽くしているし、それを信じることは当然の事だ。」

志郎はにこに対して、きつぱりと言い放った。にこはそんな志郎の顔をしばらく見つめていたが、

「はあ、しようがないわねえ・・・。」

と軽くため息をついた。

「乗ってくれるのか!?!」

「馬鹿ね、誰もまだ協力してやるなんて一言も言ってないわよ。ただ、チャンス^{チャンス}をあげるだけよ。あんたたち、ついてきなさい。」

にこは期待に目を輝かせる志郎を制止し、その場にいた3人にそう言って階段を下りて行った。

「にこちゃん、ここって・・・。」

「ゲームセンター?」

ここに言われるがままに付いて来た3人は秋葉原のとあるゲームセンターに辿り着いた。

「ここは何をするんだ？」

「いいからついてきなさい。」

ゲームセンターで何をするのか・・・そうたずねる志郎を尻目に、ゲームセンターへと入っていった。

そしてにこの後を追うように志郎たちがゲームセンターの中を歩き回っていると、とある区画に辿り着いた。

「ここは・・・音ゲーのエリアか。音ゲーのエリアに来たのはセンター争いの時以来だな。」

志郎は、にこがμ sに入ってしまった時に行なったセンター争いの事を思い出しながら周りを見回していた。もちろん、その時に使われた音ゲーの筐体は今でも健在であった。

「これからあなたには私たちとこれで勝負をしてみようわ！」

ここはセンター争いの時に絵里と希を除くμ sのメンバーみんなで使ったゲームの筐体に手を掛けながら志郎に宣戦布告した。

「いいだろう。その勝負、受けて立つ。」

志郎はこの挑戦を迷うことなく受け筐体に足をかけようとしたが、

「ちよつと待ちなさい。まだルールの説明をしてないわ。」

とにこに制止されたので筐体に乗せかけていた足を下ろした。

「そうだな、勇み足が過ぎた。ルールを聞こうか。」

「ルールはいたって単純よ。あんたとあたしたちで1対3の勝負をするの。で、どうやって勝負するのかって言うと——」

にこが淡々とルールを説明し始めると、

「1対3!？」

「それってちよつとずるくないかにや？」

と、1対3という言葉に花陽と凜が突っかかって来た。

「確かに言葉だけ聞くとずるく聞こえるかもしれないけど冷静に考えなさい。あんた達はこいつの化け物じみた身体能力を知らないわけじゃないでしょ？そんな奴相手に一騎討ちだなんて、負けを志願してるようなものよ！だから対等に戦うにはこうするしかないのよ。」

「自分で言うのもなんだが、にこの言う通りだと俺も思う。いくらμ'sに入ってから身体能力が上がるとはいえお前たちが個人で俺に敵うことはできないだろう。故に数の利に頼るのは正しい判断だと思っぞ。」

そんな2人に対してにこはあくまでも冷静に志郎という男の脅威とそれに対抗するために必要不可欠な戦術であることを説明し、志郎もまたにこの語った戦術が理に適っていると云って、彼女の決めたルールに従う姿勢を見せた。

「なんかあんたにそうあつさり納得されると釈然としないわね……。」

「それはすまない。だが俺はそれ以上にお前の勝つためには如何なる戦術を取る事も厭わないその気概が好印象だったものでな。」

志郎が微笑んでそう言うのと、

「何よそれ……、話を戻すわ。あとどうやって戦うかというのと、スコアの合計値を競う形にするわ。」

にこはむつとした表情をしてから第2のルールを志郎たちに説明した。

「スコアの合計値?」

「あの……。こういうのって私たち3人が踊ったスコアの平均値と志郎さんが踊ったスコアで争うのが普通なんじゃないかなって思うんだけど……。」

花陽は、にこが提示したルールが普通でないことを指摘した。

「確かにそうね。そこを突いて来るのは流石花陽つてところね。確かに平均値を競わせただ方が楽に決着を付けられるけど、今回はそんなあつさり決着を付けていいような勝負じゃいけないの。それに平均だとさつきも言ったように身体能力が圧倒的な志郎が

勝つ確率が高くなるから無しよ。」

「なんかにこちゃんがいっつものにこちゃんじゃないみたいにな・・・!」

あまりにもルールの筋が通っている事に対して、凧は驚きを隠せなかった。確かにこは凧や穂乃果と一緒に三バカトリオと言われているだけに彼女が驚くのも無理はなかった。

「して、どんな曲で勝負するつもりなんだ?まさかセンター争いの時と同じ曲ではあるまい。」

志郎がにこにそうたずねると、

「ええ、その通りよ。実はこのゲーム、夏休み前に大型のアップデートが行われて新しい難易度が実装されたのよ。」

とにこは得意げな表情で語り始めた。

『新しい難易度?』

それに対して志郎と凧が首を傾げる。

「そう!あの時の難易度はEXPARTが最高だったけど、新たに『MASTER』と『HIGH RANDOM』が実装されたのよ!!」

『HIGH RANDOM』って言うのはRANDOMのマスター版なんですよ!要はRANDOMが難しくなったものだと思います!!」

花陽がにこの後に新難易度『HIGH RANDOM』について説明した。

「そして私たちがプレイするのはこの曲よ!!」

にここがそう言つて曲の選択をすると、その曲が流れ始めると同時に、

「えええ!!?ほんとにその曲やるのにこちゃん!!」

と花陽がかなり戸惑つた様子でにこに話しかけた。

「なんで花陽はそんなに動揺してるんだ?」

そんな彼女の様子に志郎は若干呆気にとられながら理由を聞くと、

「この曲はアツプデートと同時に実装されたんですけど、2つの新難易度でやると譜面がものすごく難しくなるんです!あまりにも難しすぎるものだからプレイヤーから公式に譜面を修正しろつて意見が殺到し、いまだにフルコンボできた人は1人もいないつて言うほどの曰くつきの曲なんです……!」

と花陽はアイドルオタクモードになって早口で志郎ににこが選んだ曲が如何に難しい曲であるかを教えた。

「にこたちはプレイしたことあるのか?」

「もちろんやったわよ?花陽も一緒にね。ま、花陽の言う通りフルコンは無理だけどここのゲーセンではベスト10に入れるくらいには上達してるわよ。ね、花陽?」

「う、うん……。それでもまだフルコンには程遠いんだけどね……。」

とにこは花陽の方を見ながら誇らしげな表情で語り、花陽は恥ずかしそうに彼女の言葉に頷いた。

「なるほど、『人の和』だけでなく『地の利』も得てるわけか・・・!」

「そう言うこと。言つとくけどあたしは最初つからあなたに負けるつもりは微塵もないわよ! チャンスを与えたのはあなたの心意気に嘘が無いのを理解したからつて言うのを忘れないでちょうだい!」

志郎が不敵に笑うと、にこもまた不敵に笑つて志郎に言い返した。

「最後に対戦方法なんだけど、ゲームのモードは2人対戦で3回プレイで、あたしたち3人が順番に踊つて志郎はあたしたちと一緒に3回踊つてもらおうわよ。」

『え!?!』

「……までくるともう露骨だな。俺の体力を削る気まんまんじゃないか。」

凜と花陽が驚くと同時に志郎がそう言うのと、

「ええそうよ、笑いたければ笑いなさい! さつきも言つたけどあたしはあなたに負ける気は微塵もないわ。確かにあたし達にはアイドルとしての技量があるけどそれだけであなたの化け物じみた身体能力を超えられるとは微塵も思つてない。だからあたしはそんなあなたに勝つためなら、アイドルとしての矜持を踏みにじらない程度の事ならどんな手を使う事も厭わないわ!!」

「ここは、自分よりもはるかに背の高い志郎の目を真っ直ぐ見上げながら言い放った。「もちろん俺もそのつもりだ。それに、あの時一番怒っていたお前が素直に協力しないと言いつくすのは想定外の範囲内だったが、こんな展開になるのは嬉しい誤算だよ。何せ勝てば解決の糸口が見えるんだからな。」

志郎はそんなにこの言葉に対して、ニヤリと口角を上げて心から嬉しそうな表情でそう言った。

「じゃあ、私たちの順番についてなんだけど凜、花陽、あたしの順番で行くわよ。」

「こたちは筐体の前で軽く準備体操している志郎から少し離れた休憩用兼順番待ち用のベンチの前で作戦会議をしていた。

「凜が!?!でも凜、センターを決める時にやった時から一度もやってないけど大丈夫かになや……。」

「一番手を任された凜は困惑していたが、

「大丈夫だよ凜ちゃん!凜ちゃんは、sのみんなの中でも一番って言うていいくらい運動神経がいいから大丈夫だよ!」

「花陽の言う通りよ。それに今回やる難易度は『HIGH RONDOM』で、プレイす

るたびに譜面が不規則的に変わるからむしろ元の譜面を知らない凜には好都合！身軽さなら志郎とも互角に張り合える上にダンスの実力がある凜なら志郎に勝つことも夢じゃないわ！初戦であんたが志郎を突き放してくれば次に行く花陽の気も少しは楽になるはずよ。」

と花陽とにこに励まされた凜は両手で自分の頬をぴしゃりと叩き、

「分かった！かよちんとにこちゃんがそう言ってくれるなら勝てる気がするにや！！じゃあ行ってくるね！」

と言つて筐体のそばに駆け寄つた。

「ほお、初戦は凜とか。」

筐体に乗つた志郎は画面の操作をしながら隣の凜に語り掛ける。

「ふっふっふ、あの時は志郎くんの運動神経に尻込みしちゃったけど、みんなと鍛えた凜のダンスの力で志郎くんに勝つてみせるにや！」

凜が志郎に向かってピースサインをしてそう言った。

「俺も成長したお前と手合わせできる時を待っていたぞ。」

志郎が凜に対してそう返すと同時に、画面にゲームの始まりを告げるカウントダウンが表示され、2人はそれ以降言葉を発することなく、画面と自分の身体に意識を集中させた。

『START!』

開始を告げる合図が画面に表示されてイントロが流れ始めた瞬間、ノート（音ゲーという音符のようなもの）がまるでスコールのように降り注いできた。

（な、なんだこれは!?!これじゃあまるで弾幕じゃないか!!それに最初から複雑すぎて足が付いてこない・・・!）

志郎はセンター争いで経験した時とは比べ物にならない難しさに驚きと焦りを覚えたが、

（だがいくら弾幕とは言え長篠の時のような鉛玉でなければ怖くないわ!!）

と、すぐに気持ちに余裕を取り戻して意識を研ぎ澄ませ、ステップを踏み始める。最初の方こそは上手くできなかつたが、持ち前の身体能力でその速さと複雑さに対応できるようになっていた。

（さっすが志郎くんだにや・・・!凜も負けてられないにや!!）

凜も、ステップを踏みながら隣で奮闘している志郎を見て闘志を燃やす。

「凜ちゃんも志郎さんもすごいよにこちゃん・・・!」

「ええ、流石にとんでもない運動神経を持つてるだけあつてハイレベルな戦いね……。にこと花陽は興奮で頬を紅潮させてこの戦いを見守っていた。

『FINISH!』

曲が始まっておよそ2分と言ったところで曲が終わり、画面に『FINISH!』の文字が出てきた。

「っ、疲れたにゃ……。!」

「はあ、はあ……。!」

凜は曲が終わると同時に筐体から転がり落ちて大の字に広がって寝転がり、志郎は膝に手をつき肩で荒く息をしていた。その2人の様子を見るだけで、どれほど壮絶な戦いだったかが見て取れる。

『PLAYER 1 WIN!!』

「にゃあ……。!凜の勝ちにゃあ……。!」

結果が画面に出てくると凜は拳を上に掲げて息も絶え絶えな様子で呟いた。その顔は達成感と充実感が入り混じっていた。

「よっし……。じゃなくなつて花陽、今のスコア書いておきなさい。」

「う、うん。コンボ数は？」

「コンボ数はいいわ。この勝負はあくまでもスコアが一番大切なんですもの。」

には凛が勝ったという事実にはガツポーズを決めそうになったがまだ完全に勝ったわけじゃないという事で気を取り直して花陽にスコアを記録するように指示を出した。

「凛ちゃんお疲れ様。すごいよ！凛ちゃんこの曲初めてだったのにクリアしたなんて！」

花陽はスコアを記録し終わると、凛の元に駆け寄って彼女を労った。

「・・・そうなの？」

「うん！みんな初めてこの曲をやるとクリアできないってことがほとんどだから、初プレイでクリアって言うのは凄い事なんだよ!!」

「そっか・・・。かちゃんが嬉しそうで凛も嬉しいにや・・・。」

凛は恥ずかしそうに笑ってそう言った。

「見事だったぞ凛・・・。」

志郎も息を整えながら凛を労う。

「志郎くんも凄かったにや・・・！志郎くんの態勢が整うのがもうちよつと早かったら凛の負けだったにや。」

凜も志郎の奮闘を称えた。

「うん、2人ともすごい接戦だったよ！スコアの差も5000以内切ってるんだから！」
花陽は食い気味に2人の戦いが接戦だったことをアピールした。

「そうなのか？」

「うん、このゲームはどの曲もフルコンボすれば100万点になるようになってるからね。ちなみに凜ちゃんも872593点で志郎さんは869742点だったよ！」

「なるほど、最初の動揺が敗因だったわけか。心の揺らぎが原因で負けるとは俺も未熟だな……。」

花陽からスコアを聞かされた志郎は天井を仰ぎながら自身の未熟さに歯噛みした。

「さっ、そろそろ次の勝負いくわよ。」

「ここは3人の会話を切り上げさせて次の勝負の準備をするように言った。」

「次の相手は花陽か。」

志郎は気持ちを切り替えて筐体の上に乗ると花陽の方を見て呟いた。

「は、はい！よろしくお願ひします!!」

と花陽は志郎にお辞儀をした。

「先に忠告しておくけど花陽を侮らないほうがいいわよ？運動神経は凜に比べたら低いけど、このゲームに関してはあたしと一緒に鍛えて店内5位にまでのし上がったの。い

つもの花陽だと思つてたら負けるわよ。」

「ああ、俺も花陽を舐める気は微塵もないさ。」

にこの忠告を聞いた志郎は彼女の方を向かずにそれに答えた。

『START!』

そして2回戦の火蓋が切つて落とされた。

(なるほど、確かに速すぎる故に普通なら殆ど気が付かないがさつきと譜面が所々変わっている……！譜面が変わつていなければ何とかなるがさつきと全く違うものだから速さで対応できても正確さで対応するのは難しいな……。)

志郎は持ち前の身体能力でなんとか対応できるようになってきたが、やはり譜面が不規則的なせいでいまいち対応しきれなかった。

(花陽はすごいな……。俺のような身体能力でゴリ押しではなく、ちゃんとしたテクニックで譜面を追っている……。いくら鍛えたとはいえず、sの中でも下の方に位置する身体能力をテクニクで補えるのは凄いものだ。)

志郎は踊りながら横目で花陽をちらりと見て、自分でも完全に対応しきれないものに

順応している様に畏敬の念を覚えた。

(志郎さんはやっぱり凄いなあ……！なかなかできない所見クリアをやってみせた上にもう上級プレイヤー並みに対応できてるなんて……！私も負けられない!!)

志郎が花陽に対して畏敬の念を覚えていた一方で、花陽もまた凜を超える身体能力を持つ志郎に対して畏敬の念を抱くと同時に闘志を燃やしていた。

その心優しく控えめな性格から、争い事や競争の類に対して苦手意識を持っていた花陽であったが、アイドルを愛する同志であるにこと共に店内トップランカーにのし上がって来た自負や誇りが芽生えたのだろうか、はたまたアイドルを愛することに關しては誰にも負けないという自負が変質したのであるだろうか、それとも志郎と戦う事で雰囲気呑まれている——いわゆるランナーズハイになっている——のか、花陽の心構えと面構えは1人の戦人いくさびとのそれになっていた。

にこは、そんな2人の戦いを後ろから仁王立ちで見守っていた。

(ここまでは大体想定内って言ってもいい状況だけど、それでもやっぱり落ち着かないわね。このゲームの技量なら圧倒的に上回っているはずの花陽に喰らいつこうと全力を尽くしている姿は凄まじいわ……。何事にも全力で挑もうとする姿は穂乃果にそつ

くり・・・いや、寧ろその背中から感じる気迫はあの子を遥かに超えている！少なくとも高校生が発しているもんじやないもんも出してんじやないの!?)

「・・・前々から思ってたけど、何者よあいつ。」

ここは一筋の冷や汗を額から頬に滴らせながら、少し引き攣った顔で呟いた。

『FINISH!』

そして再び2分ほど経過して、曲が終わった。

『PLAYER 2 WIN!!』

「・・・っし!!」

結果が画面に表示された瞬間、志郎はガッツポーズを決めた。

「し、志郎くん・・・凄い・・・。」

「か、かよちゃん！大丈夫？」

筐体の上へあたり込む花陽を心配して、さつきまでベンチに座って休んでいた凛が花

陽の元に駆け寄った。

「うん、平気だよ。ありがと凜ちゃん……。ごめんねにこちゃん、負けちゃった……。花陽は額の汗を拭いながら凜に礼を言い、にこに謝った。

「馬鹿ねえ、謝る必要はないわよ。中盤でミスしたのは痛かったけどそれでも十分いいスコア出せてるんだから、いつも言ってるけど自信を持ちなさいよ。」

にこはいつものようなぶつきらぼうな口調だったが、どこか優しい雰囲気の声色で花陽の健闘を称えた。

「ああ、確かに花陽のテクニクは見事だった。途中のミスが無かったら俺は確実に負けていた……。」

志郎も荒くなってる息を整えながら花陽の奮闘を褒める。

「ふん、まさかあんなたへの対策だったランダム譜面があんたの助けになるとはね。」

「どうやら俺にも悪運というものがあるらしい。」

にこの皮肉に対して志郎は自嘲するように笑いながら言い返した。

「・・・スコアは花陽が886423で志郎が890513よ。合計は・・・あたしたちが1759016で、志郎が1760255ね。志郎が少しリードしてるけど点差は1000点以内、次の勝負が終われば確実に決着はつくわ。」

にこはスマホで計算してスコアの合計値を出し、それを3人に発表した。

「最後の戦いは乾坤一擲の覚悟で臨む……か。そういうのは大好きだ。」

志郎はまるで遊園地に行くのを楽しみにしている子供のような無邪気な顔で笑いながらそう言った。

「さっ、いよいよ最後ね。やるわよ志郎。」

にこがそう言つて筐体に上がろうとすると、

「にこちゃん!? 流石に志郎さんを休憩させてあげないと……。」

「そうにや、いくら志郎くんでもぶっ続けはきついはずにや!」

と花陽と凜がにこに抗議をした。

「いや、大丈夫だ。次の試合で最後だろ? それなら休憩は必要ないさ。寧ろ休憩してしまふとせつかく身に付いた感覚を忘れてしまふそうだからな。」

志郎はそう言つて2人を制止した。

「あら、いいのよ? 別に5分くらい休憩しても。」

「お気遣いは嬉しいがここは遠慮させてもらおう。今は最後の戦いに向けて気持ちが高ぶつてるもんだからうまく休めそうにない。」

(あいつは最初に自分の手を明かしたうえで勝負を挑んできた。ならばその策を分かつた上で受けて戦う事が俺にチャンスをくれたにこに対する最大の敬意だ。ここで休憩し、少しでも体力を回復させてしまえば彼女の策がほんの少しだけとはいえ無駄になつ

てしまう……。俺に勝つために必死に策を練つたにこの想いと労力を無駄にしてはならぬのだ。」

志郎はさらりとにこの勧めを遠慮しつつも、彼女のこの戦いに対する覚悟と想いに報いようと決意していた。

「最後にもう一度おさらいするわよ。」

「おう。」

「あんたが勝てば私たちは3人揃つてあんた達の立てた計画に協力してあげる。でも、もし私たちが勝つたら私達にはあんた達には協力しない。分かつてるわね？」

「ああ、分かつてるとも。この戦いに全ての命運がかかっている、故に全力で行かせてもらうぞ。」

「誰に向かつてものを言つてるのよ。あたしは大銀河宇宙ナンバーワンのスーパーアイドル、矢澤にこよ？あんたに言われなくつてもいつだつて全力なんだから！」

互いに啖呵を切り合い決戦に臨む志郎とにこ。花陽と凜が後ろから2人を見守る中、静かに戦いの時が迫っていた。

μ, s 復活を志す志郎と、矢澤にこ率いるμ, s 残党派……。戦績は両陣共に1勝1敗、スコアは志郎がリードしているがその差は1000点以内。泣いても笑ってもこの戦いで決着がつく。

壮絶な戦いの果てに勝利を掴むのは、果たしてどちらなのだろうか——

47話 志郎vsにこりんばな 決着

μ, s復活の為の作戦ににこ、凜、花陽の3人を引き入れるために彼女たちと勝負することになった志郎。既に凜と花陽との勝負は終わり、いよいよ最後に控えるにことの勝負に志郎は臨んでいた。

「にこ、勝負が始まる前に一つ聞いてもいいか?」

「何よいきなり?」

勝負を始める直前にいきなり何かをたずねてきた志郎に、にこは訝しげな様子で応じる。

「これは幸雄の入れ知恵か?」

『!?!』

志郎の口から発せられた言葉に、にこたち3人は戸惑った。

「あんたさつきあいつの事を信じてるとか言っておきながらさらつと凄い事言いだすわね。」

にこが呆れた口調で言い返すと、

「いやいや、あいつを疑ってるわけじゃあない。これは『あいつならこうするだろうという予測』を立てれば行きつく結論の1つだ。あいつにとつちや二股膏藥は基本中の基本、対立する2つの陣営があればその両方に顔を出し、両方に知恵を授け、そして勝ち目のある方に付く……。これはあいつなりの身の振り方だからそれを責めるつもりは全くない。」

と、首を横に振って言った。

「あいつがコウモリみたいな男だってわかった上で信用してその在り方を認めるなんてどんだけお人好しなのよ？」

「それはともかくとして、ホントのところを言うと今回の勝負におけるにこの戦術戦略があまりにも用意周到過ぎたせいで幸雄が裏にいるんじゃないかって思っただけなんだがな。」

志郎が苦笑いしながらそう言うのと、

「いくらあたしが補修組だったからって舐めすぎじゃない……？あたしだって伊達に部長やってんじゃないのよ。それくらい1人で考えつくわよ。」

と不機嫌そうに顔を背けながら言った。どうやらこの勝負におけるにこの立ち回りは全て彼女の知恵によるものだったようだ。

「なるほど、戦略戦術面でここは俺の上を行っていたわけだ。俺はこういう駆け引きは

あまり得意じゃないからな。」

「煽っても手加減はしないわよ。」

「そうしてもらえるとありがたい。」

2人はそのやり取りを最後に口をつぐみ、真剣な表情で画面に目を向ける。そして――

『START!』

開始を告げる文字が画面に出て、志郎とにこの一騎討ちが幕を開ける。

曲が始まると同時にノーツが雨あられのように凄まじい速さで降り注いでくるが、2人は素早い足さばきでそれに対応していた。

「志郎くんも凄いいけどにこちゃんもすごいにやう……。」

にこのプレイを初めて見る凛は、彼女の足さばきに見惚れていた。

「そっか、凛ちゃんは見るの初めてだもんね。」

花陽は凛に向かってそう言うと言りと語り始めた。

「にこちゃんこのゲーム結構上手だね、あのセンター決めの後も何回かにこちゃんと遊んでただけど結構熱中しちゃって夏休みにこのお店で大会が開かれた時に2人で出

たら私が5位でにこちゃんが2位になったんだ。」

「かよちゃん、にこちゃんとかれやってたんだ。でも、2位って事はにこちゃんより上手い人がいたって事だよな？どんな人だったのか気になるにや。」

「にこちゃんを破つたのは『レオン』って名乗るプレイヤーさんなんだ。ダンスとかの経験はほとんどないらしいんだけどすごく上手だったなあ・・・。」

花陽はどこか遠くを見るような目で、このゲームの大会でにこを破つたという人物について凜に語った。

（にこの足さばき・・・、尋常ではないな。μ sに入ってから海未や絵里の厳しい練習のおかげで身体能力が上がったのもあるが、流石はこのゲームのプレイヤーというだけあって対処の仕方を把握しきっている・・・。凜や花陽とはまた違ったタイプの強敵になるが、こちらにもμ s復活の為の作戦の成否がこれに懸かっているのだ。負けることはできん・・・！）

（ほんつとこいつの身体能力どうなってるのよ・・・。少しでもまともに渡り合えるように凜と花陽を相手に連戦させて体力を消耗させたはずだつのに、なんでまだそんな余

裕綽々な表情で踊れるのよ・・・！あんた一体何者なのよ!?)

志郎とにこは踊りに神経を集中させながらチラリと互いを横目に見て相手の奮戦ぶり舌を巻きつつ闘志を燃やしていた。

(実のところ、にこがこの勝負で俺の体力を削るために3連戦という形で勝負を挑んできたが、それに関してはかなり効いている・・・。あの日から昨日までのまともに飯も食わず、眠れもしない生活のせいであらう。たださえ体力が落ちてきてるといふのにこの勝負・・・。いくら体力と身体能力が優れている俺でも、そんな状態でこのような激しすぎる運動をすればどうなるか分からん。だが、何としてでもこの勝負に負けるわけにはいかんだ。μ s のため、そして俺の夢のために!!)

(あたしだって、アイドルとしての意地があるのよ!あんたには悪いけどこの勝負、何が何でも勝たせてもらおうわよ!!)

志郎は二連戦で体力を消耗していたが、それでもことほぼ互角の勝負を繰り広げていた。

2人には口には出さないものの意地と覚悟をその胸に秘めており、まさに意地と意地のぶつかり合いと言える状態であつた。

(よし、この難所を抜ければあとは……!)

志郎がそう気を引き締めた次の瞬間――

「――っ!?!」

なんと、志郎の身体が右に大きく傾いた。

「志郎くん!!」

「志郎さん!!」

志郎が倒れるのを見て凜と花陽が悲鳴を上げるように志郎の名を叫んだ。

(ああ、何と言う事だ……。まさかこんな大事な時にこの俺ともあろう男が、こんな時に足がもつれて転んでしまうとはな……。)

志郎は倒れながら心の中で自嘲的に呟いた。そう、彼が転んだのは複雑な足さばきに身体が付いていけなくなり足がもつれたからだだった。普段の志郎であれば、よつぼどの事が無い限りこのようなアクシデントに見舞われないが、今は話が別だった。

今の志郎の体調は100%万全とはいえないのだ。2週間近くにわたる睡眠不足と前日の徹夜、そして前日に大量の食事を取ったものの、それだけで2週間近くにわたる過剰な小食による栄養不足を補えるわけがなく、現在の志郎は体力的にも、精神及び頭脳的にもかなり不安定な状態であった。

そんな中でこのような激しい運動を行なえば、普通の人間であれば確実にその場で体調を崩すだろう。だが、志郎は生まれ持っていた優れた身体能力と強い信念から来る精神力で力を底上げしていたおかげで足がもつれる程度で済んだと言える。

(ここ)で倒れればもう挽回はできんな…。俺の、μ s の夢はこんなに呆気なく終わってしまふのか……)

志郎は倒れながら心の中で諦めの言葉を漏らす。

(終わりか……)

志郎がそのまま諦めに身を委ねようとしたその一瞬、

——私、やっぱりやるよ！やるったらやる！！

——歌おう、全力で！！だって、その為に今日まで頑張つて来たんだから！！

（穂乃果・・・？）

志郎の脳裏に穂乃果の声が走馬灯のように響いて来た。

（そういえば、穂乃果はいつもそうだった・・・。たとえどんな壁が目の前に立ちほだかろうと、辛い現実を目の当たりにしても、諦めることをしなかった・・・。）

——このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない。応援なんて全然もらえないかもしれない。でも一生懸命頑張つて、とにかく私たちが頑張つて届けたい！今私たちがここにいる・・・、この思いを！！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

志郎は虎のような咆哮を上げると同時に、右手を筐体につき、そのまま4本の手足の

全てを用いて踊り始めた。

「志郎くん凄いにやー!!」

「手足を使ったプレイングをする人がいるっていうのは聞いたことあるけど、実際に見てみると凄い迫力だよ凜ちゃん!!」

凜と花陽は志郎の起死回生を賭けた両手両足の全てを使ったプレイングに目を輝かせた。

実際に足で踏むタイプの音ゲーで両手と両足を使うブレイクダンスのようなプレイングは存在する。だがそれはあくまでもパフォーマンズという形でのプレイングで、しかも筐体を2つ使う事が前提である。だが、志郎のプレイングは何もかもが違っていた。

志郎のプレイングは一言で言ってしまうえば『なりふり構わない』と言えるようなものであった。志郎はこの手のゲームは素人と言っていていいほどであり、そこにはテクニクスのテの字も存在しないほどに乱雑なものであったが――

(なんなのよコイツ・・・! すっ転んだってのに、もうここからさっきの失敗を取り戻すなんて100%不可能なのにまだ食いついて来るなんて・・・!!)

にはそんな志郎のなりふり構わない姿に焦りと共に、背筋が凍るような感覚を覚えていた。それはまるで、堅固な要塞から機銃掃射を浴びせられながらも止まる事のない

く、徐々に要塞との距離を縮めてくる『死兵』を相手取ってるかのような感覚であった。「志郎くん、まだ諦めないにや・・・!」

「この難易度は一度でもミスをしたら取り返しがきかないのに、志郎さんは諦めることなくにこちゃんを追いつけてる・・・。凄い執念だよ・・・!」

凜と花陽も、志郎の猛追を息を呑みながら見守っていた。

その時だった。

「あれ? あそこで踊ってるのって、μ'sの矢澤にこちゃんじゃない!」

「ほんとだ!」

「隣で踊ってるのは誰だ?」

「でもあのにこにー相手に喰らいついてるぜ!」

「それにしてもすごい踊り方だな・・・。」

「さつき足がもつれて倒れそうになってたよあの人。」

「だからあんな体勢なんだ・・・!すごい・・・!!」

いつの間にかにこたちが踊っている筐体の周りを囲むように人が集まっていた。

「いつの間になんかこんな人が・・・!!」

「すごいニヤク・・・!!」

凜と花陽は今まで2人の戦いを熱心に見守っていたせいか、自分たちの周りに人だけができつつあったことに気付いていなかった。そしてそれに気づいた時には驚きを隠せない様子だった。

「ここにー頑張れー!!」

「誰だか知らないけど相手の男子も負けるなー!!」

観衆の声援は激戦を繰り広げる2人に平等に降り注ぐ。

（この様な苦し紛れの策でここに追いつけるとは思っていない・・・。だが、だからと言つてあの場で負けを認めるのは俺の意地と誇りが許さなかった。そして何よりこの戦いに全霊を懸けて臨んでいるにこへの侮辱になる!だからこそ俺は俺の夢と誇りのため、そしてにこたちの意地のために最後まで戦い抜く!!）

曲もラストスパートに差し掛かり、にこは最後の最後にミスを犯さないように改めて気を引き締めてステップを刻み、志郎はタイミングを見計らって腕の力で飛び上がり完全に体勢を整え、観衆に歓声をあげさせた。

——この俺の誇りを、諏訪部志郎の意地を見よ!!

「はあ、はあ……!」

「ぜえ……ぜえ……。」

曲が終わると同時に、にこは膝に手をつき志郎は筐体から崩れ落ちながら倒れ、2人とも荒い息をしていた。

『PLAYER 1 WIN!!』

画面にはにこの勝利を告げる文字が映っていた。

「花陽、スコアを言いなさい……。」

「え?でも……。」

呼吸を整えながら花陽にスコアを発表するように告げたにこに対して、花陽は困惑した。3戦目が始まった時点で、志郎とにこ、凜、花陽の3人組のスコアの差は1000点いないであったため、よっぽどの事が無ければ買った方がこの戦いを制すると言って

も過言ではなかったし、実際のところ花陽が持つているノートに書かれていた二組のスコアの合計値は確実ににこたちの方が志郎のスコアを上回っていた。

花陽は、勝負が分かり切っているのにそれを改めて志郎に告げるのは彼に追い討ちをかけてしまうのではないかと危惧していた。しかし、

「花陽……。言ってくれ、お前が言ってくれないと決着が付かないんだ。」

葛藤する花陽に対して、志郎が優しい声でスコアを発表するように頼んだ。

「志郎さん……。」

花陽は涙が出そうになるのを堪えてゆっくりと声を絞り出すように、自分の手の中にあるノートに書かれたスコアを発表する。

「志郎さんのスコアの合計は2509793点。私たちのスコアの合計は2648377点……。」

「……。」

「よって、この勝負……。にこちゃんの、勝ちです……!!」

この戦いの勝者を宣言する時、花陽の声は震え、彼女の顔は涙に濡れていた。彼女は志郎とにこの両者の目的や意志に対して好意的であり、こんな仲間同士で互いの想いを潰し合うような戦いはしたくないと思っていた。できる事なら話し合って互いの意見の折衷案を立てて落としどころを作りたいと考えていた。

だが志郎は、s復活の為、そしてにこはスクールアイドルとしての彼女自身の意地の為、2人は互いに引くことはなく、この様な戦いに発展してしまった。

「・・・泣くな花陽。勝ったのはお前たちだ、喜んでバチは当たらないだろうに。」

志郎は疲れからか体を起こすことはなかったが、花陽の方に顔を向け、彼女を優しい声で励ました。

「だって・・・、だって志郎さんが・・・！」

「かよちゃん・・・。」

「勝敗は時の定め、今回ばかりは俺に天運が向かなかつただけの話よ・・・。」

「うう・・・。」

「それにしても、世の中なかなか思うようには行かないものだな。また俺の野望、夢、全てが無に帰した・・・か。」

志郎は自嘲するようにそう呟くと共に右手で目を覆った。

「くそ・・・。また俺は無力でしかなかったのか・・・！」

志郎は歯を食いしばり静かに肩を震わせながら二度にわたって自分の道を塞いだ自分の無力さを呪った。しがらみを断ち切っても乗り越えることができないのか、と――

「はあ……さつきから何言ってるのよあんだ。この勝負は、まぎれもなくあんだの勝ちよ」

『——え?』

「さつきからお通夜ムードなどところ悪いけど……。花陽、あんたは1つ大きな間違いをしてるわよ?」

「え?でも、志郎くんのスコアの合計と私たちのスコアの合計は間違ってるよ……。?」
花陽はこの言葉の意図が読めずに困惑していた。実際、彼女が記したスコアの合計値は間違っていないのだから困惑するなという方が無茶な話である。

「1から説明するのはこっ恥ずかしいけどいいわ。それは——」

「それについては私が教えよう。」

『え!』

にこが志郎たちに結果を覆した理由を教えようとしたその時、人だから人をかき分け1人の少年が4人の前に現れた。

48話 謎の少年と猛進の志郎

「それは私がお教えしよう。」

にこが志郎たちに結果を覆した理由を教えようとしたその時、人だかりから人をかき分け1人の少年が4人の前に現れた。

その男は非常に顔立ちが中性的で整っており、言うなれば町を歩けば誰もが振り返るといったところだろうか。その証拠に、今も周りにいる女子は黄色い歓声をあげ、男たちはそのイケメンぶりに恐れおののく者さえもいるほどだ。

また、体格も線は細いが痩せすぎずというわけではなく程よく肉が付いており、まさに古代ギリシヤやローマ、ルネサンス期の彫像のような美しさを感じるくらいだった。

「げっ、なんであんたがここにいんのよ……。」

周りの女子たちが少年に向けて歓声をあげる中、にこだけはげんなりした表情で彼に声を掛ける。

「にこちゃん、この人と知り合いかにや?」

「こんな奴と知り合いつて言われるのは背筋が凍りそうになるくらいムカつくけど事実

よ……。」

凜の問いに対してにこはため息交じりにそう応えた。

「凜ちゃん、この人がにこちゃんを破つてこのゲームの店内大会の1位を取った『レオン』さんだよ……!」

「この人が!!?」

花陽の言葉に凜は驚き、

「おや、久しぶりだね。君とはあの店内大会以来かな? μ s の小泉花陽さん。」

と『レオン』と呼ばれた少年が花陽に声を掛けると花陽と凜に向かつて歩み寄り、凜の前で立ち止まった。

「そして君は星空凜さんだね? ふふ、写真や動画で見るより可憐で美しいね……。」

「にゃ!?!り、凜が!?!」

少年が凜の顔と体を値踏みするようにじつくりと見回した後にかけて言葉に凜は顔を赤くして困惑した。凜もれつきとした女の子だ。ただでさえ凄まじい美少年に目の前に立たれた上に、間近で可愛いと言われれば、顔を赤くするのは当然の理である。

それに凜は男子の心無い言葉で女の子らしさに欠けるといふコンプレックスを抱えているから『かわいい』と男子に言われた事で更に混乱してしまった。

「う、うーん……。」

「凜ちゃん大丈夫!？」

花陽は顔を真つ赤にして倒れた凜を抱きかかえ、

「なに私の後輩を口説いてんのよ……!」

にこは彼の胸ぐらを掴んだ。

「ふふ、誤解しないでいただきたいものだ。私はあくまでも美しいと認めたものを愛でただけさ。君もスクールアイドルだろう? だからその腕を離してもらえると嬉しいんだが……。」

「その軽薄さ、微塵も変わって無いな松坂玲央まつざか くれお……。」

志郎はようやく身を起こすと呆れた様子で少年に声を掛ける。

「変わって無いのはお互い様だろう? 諏訪部志郎、君も相変わらず華の無いむさ苦しい男のままじゃないか。女子高に入って多少はそのむさ苦しさも無くなったかと思えば余計にむさ苦しくなってる気すらするぞ?」

少年改め松坂玲央も志郎の言葉に挑発的な言葉を返した。

「あの……、志郎さんはレオンさんとお知り合いなんですか?」

「レオン? ああ、ゲームで使ってる名前か。花陽の言う通りこの男、松坂玲央とは面識がある。何故ならこいつは俺が音ノ木坂にやってくる前に通っていた神峰橋高校で同学年だった男だからな。」

志郎は花陽とにこに自分と玲央の関係を教えた。

「あんたがこんな男と知り合いだなんて意外ね……。」

「そこまで交流があったわけではないがな。まあ、神峰橋の生徒であればこいつの名前と顔を知らない者はいないくらいの有名人だからな。それにしても、運動部に文化部に様々な部活の助っ人で大忙しのお前がこんなゲーセンに入り浸っているとは珍しいな。」

「部活の助っ人は2年になってからは飽きてやめてしまったよ。入り浸るといふ表現は癪に障るがまあ事実だな。にこさんと会うのは大体このゲームの筐体の前だからね。」

玲央は志郎の言葉に苦笑いで答えた。

「そ、こいつとはあの大会以来このゲームやつてる時に会う事が多いのよね……。」

「ここは厄介そうな表情で玲央の言葉を補足する。

「部活の助っ人は辞めてしまったけど、私は今ある目的のために動いてるのさ。」

「ある目的?」

「そう、私は今ある男の美しい志の実現のために力を貸しているのさ。」

玲央が誇らしげな表情でそう言うのと、

「お前がそんな動きをするとは意外だな。」

志郎は目を丸くしてそう言った。どうやら志郎からすれば玲央がその様な事をする

のは非常に珍しいらしい。

「ふふふ、勘違いしてもらつては困るな。目に見えないものでも美しいものは美しいという事に変わりは無いのだよ。」

「そうか。」

「さて、だいぶ話がそれてしまつたな。なぜにこさんがわざわざ自らの勝利を手放し、君に譲つたかを教えるのでしょうか。」

玲央は軽く咳払いするとようやく話の本題を切り出した。

「何故お前ににこの意思が分かる。」

志郎が訝し気に玲央に問いかけると、

「別に彼女の思考を読み取る必要も理解する必要もないよ。何故ならこれから話すのは今の君の戦いを見ていた者たちが必然的に抱いた感想を述べるだけなのだからね。」

と玲央は答えた。

「必然的に抱いた感想だと?」

「そうだとも。結論から言わせてもらつたと、にこさんは君の踊り……いや、戦う姿に魅せられたとだけ言つておこうか。」

「見せられただと?にこが俺に?」

「ふふ、君が疑問に思うのも無理は無い。何故ならさつき君の踊りは、はつきり言つて

しまえば華が無く、見苦しい、ただの悪あがきにしか見えないからね。」

「……。」

志郎はバツの悪そうな顔をしていた。

「あんた、いつから見てたのよ。」

「君たちの戦いは途中から見せてもらつてた。正直に言わせてもらおうと志郎が転んだ後の踊りには、美しさや技のキレといった具合のものは微塵も感じなかった。だがそれでも君の踊りには何か惹きつけられるものがあつた。多くのギャラリーを生むほどにね。」

「確かに、途中からたくさんの方が見に来てました……！」

花陽は玲央の言葉に頷きながらそう言った。

「さて、じゃあ志郎の踊りにはいったい何があつたのかを明かすでしょう。それは『気迫』だよ。」

『気迫?』

志郎と花陽、そしていつの間にか目を覚ましていた凛が玲央の言葉に首を傾げる。

「そう、君の踊りには華が無かつたけど見ている者たちの心に訴えかけてくるものがあつたんだよ。言うなれば鬼気迫るってヤツだね。まさに真剣、命を懸けんと言わんばかりの踊りっぷりに私をはじめとしたギャラリー、そして対戦者であるにこさんは魅せ

られてしまったというわけだよ。」

「そうだったのか、にこ？」

玲央の解説を聞いた志郎は目を丸くしながらにこに真意をたずねる。

「ええそうよ、ムカつくけどそいつの言う事は大体合ってるわ。でもそれだけじゃなくて他にも理由があるの。」

「理由……？」

「あたしはあんたと対等に戦って、そして勝つために策を練って万全の状態であんたに戦いを挑んだ。普通ならあんな条件に対して文句の一つぐらい言うと思ってたけどあんたは不満一つ漏らさないうあたしが出した条件をすべて受け入れてあたしたちと戦った……。」

「……。」

「正直あんたのそんな態度を見て最初は『そんなものはハンデにもなりやしない』って感じの余裕を見せられてるような気がしてムカついたけど、あんたの戦いぶりを見てたら『ああ、こいつは本当にあたしたちと真正面から向き合って戦ってるんだ。』って思ったの。」

「にこちゃん……。」

「それであんたが転ぶのを横目に見た時は勝ったと思ったのと同時に、こんな勝ち方で

いいのかつて想いが浮かんできた。そりやそうよ、あたしたちと真正面からぶつかつてくれている相手がこんな形で負けるなんて後味が悪すぎる。でもあんたは最後まで戦い抜いた。玲央の言う通り、見苦しくても悪あがきにしか見えなくても最後まで踊り抜いてくれた。」

「にこ．．．、そんな風に想いながら戦っていたのか．．．！」

「そういう意味じゃ玲央の言う通り、あたしはあんたに魅せられていたのかもしいわね。とにかくあたしはあんたの戦いぶりを見て、このまま勝ちを拾うのが恥ずかしくなっちゃったのよね。」

にこは苦笑いしながらそう言うと志郎の元に歩み寄り、

「あんたの覚悟は確かに見せてもらったわ。だからあたし達3人はあんたの、s復活作戦に協力する。いいえ、協力させてちょうだい！」

と、はにかみながら志郎に手を差し伸べた。

「にこちゃん．．．！」

花陽は、そんなにこの言葉に目に涙を浮かべながら喜んでいた。

「ホントは最初つからそうするつもりだったくせににこちゃんつてば素直じゃないにや。」

「うっさいわね！」

凜の軽口に対してにこは怒鳴ったものの、その顔は満更でもないといった様子であった。

「すまんにこ、かたじけない・・・!!」

志郎は感極まったのか男泣きしながら声を震わせてにこの手を握った。志郎にとつて、このにこの手はまさしく『救いの手』に見えたのは言うまでも無かった。

「まったく、あんたもいい歳した男なのにそんなメソメソすんじゃないわよ。泣くならやり遂げてから泣きなさいよ!」

「す、すまん。」

にこが笑いながら志郎の背中を叩くと志郎は慌てて涙を拭った。

「それにしてもあんた、かたじけないなんて時代劇じゃないんだから、普通にありがとうって言いなさいよ。」

「そう言えば志郎さんって時々言葉遣いが古風になりますよね。」

「でも志郎くんって大人っぽいから不思議と似合ってるにゃ!」

「ははは、そうかな・・・。」

にここと花陽と凜がそう言って談笑してるのを志郎は苦笑いしつつ見守っていた。

「・・・。」

「さつきからあんた生暖かい目でこっち見てるけど何なのよ。」

「いや、何でもないよ。ただこういう泥臭い友情というのも悪くないと思っただけさ。」
玲央は何か腹に一物抱えていそうな表情で4人のやり取りを見ていたところをにこに指摘されるとそれとなく流した。

「———そうか、君たちは彼の正体をまだ知らないんだね。」
玲央はこの背を見ながら小声で呟いた。

「さて、そろそろ行くか。」

「は？行くってどこに行くのよ？」

タイムリングを見計らったようにすくつと立ち上がった志郎ににこがたずねる。

「決まってるだろう、学校に戻るんだよ。海未と絵里と希を説得するためにな。」

志郎はそれに対し、ブレザーを着直しながら答える。

「もう少し休んでった方がいいと思いますよ……？」

「そうにや、まだ終わってから10分も経ってないよ？」

そんな志郎に対して花陽と凜が心配そうな表情で言った。

「ああ、確かにそうかもしれないが。お前たちには勝負という手に出る事ができたが絵里たちにはその手は使えない。それに俺は幸雄に比べて口下手だし機転も利かないから必然的に説得に時間もかかる。だから今の俺は1分であれ1秒であれ無駄にできない

いんだ。」

「でもこのこと学校は少し離れてるわよ。どうすんの？」

「決まってるだろう、最短ルートを全速力で走って戻るだけだ。」

「はあ!？」

志郎の言葉ににこは愕然とした。

「あんた正気!?! さつきまで体力使い果たしてへばつてた奴がここから学校まで全速力で走るなんて狂気の沙汰でしかないわよ! ぶつ倒れたいの!?!」

「そうにや! 流石に凜でもそんなのきついにや!」

「無理して倒れちゃったら元も子もないですよ!!」

にこたち3人は志郎を諫めようとするが、

「彼がそれを聞くと思ってるのかい? 少なくとも私はそう思えないがね。」

と、玲央が3人に口をはさんだ。

「それは……。」

にこたちは玲央の言葉に反論できず口をつぐんだ。3人とも志郎の一本気と頑固さを知っていたからこそ何も言えないのだ。

「ふふ、それにしても君はいつも自分の身を削るような道を進むんだね。あの事件を思い出——」

玲央が皮肉るように笑いながらそう言う——

「それ以上」でその事について喋るのは辞めてもらおうか。」

何と志郎はそう言い終わるよりも速く玲央の顔前に拳を突きつけた。

「やれやれ。君は相変わらず口で話すよりも、頭で考えるよりも先に手が出るのが早いね。少しは丸くなったと思っただが。」

と玲央は白々しくおどけてみせた。そんな飄々とした態度をとりつつも、玲央も志郎が自身の眼前に拳を突き出しているように玲央もまた志郎の首元に貫手を突き付けていた。

(あの事件? というかあんなにキレてる志郎初めて見たわ……)

ここは玲央の発言の中にある一つの言葉に何か引つかかるものを感じると共に、初めて見た志郎の怒りの表情に圧倒されていた。本当はこの場でそれについて追及しようと彼女は考えていたが、今はそのような事をやっている暇は無いと考え、言葉を飲み込んだ。

「ねえ志郎、学校に戻る前に一つ聞いてもいいかしら?」

その代わりににこは今まで口にする事のなかった疑問を志郎にたずねる。

「なんだ？」

志郎は拳を引くと、何事もなかったような表情でにこの方を向いた。

「あんたはなんでそこまでしてあたし達のために尽くすの？」

「……」

にこの問いを聞いた瞬間、志郎はびくりと動きを止めた。

『にこちゃん？』

「*μ*、*s*が活動を始めた頃からあんたが幸雄と一緒に穂乃果たちのサポートに力を尽くしてきたのは知ってるわ。ファーストライブの時も、挫折そうになった穂乃果たちに激励を送った事もね。あんた自身はそう思っていないかもしれないけど、私たちメンバーの間じゃあんたは穂乃果たちに並ぶ*μ*、*s*の最古参のメンバーだっと思ってる。だからあんたが*μ*、*s*に対して強いこだわりと執念を見せるのはよく分かるつもりよ。」

「……」

志郎はよどみなく語られるにこの言葉を黙って聞いていた。

「でも、今のあんたを見て思うの。あんたちよつと異常よ？」

「にこちゃん！」

「そんな言い方しなくても……」

にこのストレートな物言いを凜と花陽がたしなめるも、

「あんなたちもさつき頃の戦いぶりど、疲れ切つてぶつ倒れるかもしれないのに無茶な事を躊躇いもなくやろうとするのを見て何も感じないの？」

にこは逆に2人にそう問いかけた。

「そ、それは……。」

「確かに、上手く言えないけど志郎さんはなんかμ、sのためなら命を投げ出しちゃいそうなの……、そんな風に見えちゃいます……。」

「なるほど、そう見えるか……。」

花陽の志郎のμ、sへの強すぎる想いに対する印象を聞いた志郎はどこか穏やかに見える表情で彼女の言葉に頷いた。

「お前たちからすれば俺の想いというのは確かに強すぎるかもしれない。だが、俺にとつてμ、sとはそれほどの想いを懸けるに相応しいと感じるものなんだよ。だからこそ、μ、sの存亡がかかっている今この時こそが、俺の正念場……。俺が死力を尽くしてお前たちの未来を切り開くべきだと思っているんだ……。」

子供を諭すような優しい声と、穏やかな表情で志郎はにこたち3人に自分のμ、sに対する想いを語り、その目は音ノ木坂学院のある方角を見据えていた。

『志郎（くん）（さん）……。』

そして、彼女たちは志郎の瞳にその強すぎる意志が煌々と炎のように燃えているのが見えていた。

「……そこまで言うなら止めるだけ無駄って事ね。」

「すまん。」

「別に謝る必要ないでしょ？ あんたはあんたなりに、sを、あたしたちの事を思ってくれてるんだから。」

にこは謝る志郎に対して微笑みながらそう言った。

「ほら、時間が惜しいんでしょ！ さっさと学校に戻りなさい！」

「ああ。」

志郎はこの言葉に短く応えると全速力で学校に向かって走り出していき、その背中があつという間に小さくなっていった。

「行っちゃったにや……。」

「うん……。」

凜と花陽はそんな志郎の背中をただ見送る事しかできなかった。

「さてと。玲央、あんたにも一つ聞きたいことがあるのよね。あの事件って何のことかしら——」

志郎が走り去るのを見届けたにこは、玲央に先ほどの会話に出て来た『あの事件』と

という言葉について聞きだすために彼のいる方に振り返ってみると、

「——つてどこに消えたのよあいつは!!?」

いつの間にか玲央が姿を消していたのだ。

「多分志郎くんが学校に戻っていく時に帰っちゃったんだよ。」

「ぐぬぬぬ……。なんかモヤモヤするわね……。!」

「そう言えば、あんなに怖い顔をする志郎さん初めて見たなあ……。!」

「凜も志郎くんのあんな表情見たことないにや。」

3人は先ほどの玲央とのやり取りで見せた志郎の憤怒の形相について話していた。志郎は、sのメンバーの前ではほとんど怒った事が無かったので、彼女たちにとってはある意味新鮮な感覚であった。

「そんな事より、あたしたちも行くわよ!」

「え!?どこに?」

にこが突然言い出したことに花陽は困惑していた。

「どこつて、学校に決まってるじゃない!あたし達も志郎を追って学校に戻るのよ!!」

にこは凜と花陽にそう言うのと、学校のある方向に向かって走り出した。

「待つにやにこちゃん!」

「ピャ!?!にこちゃんも凜ちゃんも待つてえ〜!!」

凜と花陽もにこの後を追って走り出して行つた。

ことりの出立まで今日を含めてあと二日。志郎は散り散りになっているメンバーの協力を得るために奔走している。

果たして、志郎は海未、絵里、希の3人を引き入れる事ができるのだろうか——？

49話 真姫の疑念

志郎がにこたちの協力を無事に得て学校へ戻るために疾走している頃、音ノ木坂学院では様々な場所で生徒たちがそれぞれの営みに励んでいた。中庭や空き教室で友人たちと談笑する者や図書館で勉強や読書に打ち込む者、そして校庭や体育館などで部活の練習に身を入れる者……。

「」。

弓道場で弓を構え精神を集中させている海未もまた、そんな生徒の一人と言えるだろう。彼女は、アイドル研究部の活動が休止になってからは、スクールアイドルを始める前のように毎日弓道部に顔を出して練習に打ち込んでいた。

「——ッ!!」

精神を集中させ始めてから数秒が経ち、海未は矢を放った。放たれた矢はストンと音を立てて的に刺さる。だが、矢は的の中心から5センチほどずれた場所に刺さっている。

た。

(私たちはただスクールアイドルを始める前の状態に戻っただけのはずなのに、胸の底に何か引つかかっているような気がします。まるで、あの的の中心からずれた矢のように……。)

海未は的に刺さっている自分が放った矢を見ながら心の中でどこか煮え切らない自分の気持ちを呟っていた。

「私たちは、これでいいのでしょうか……。」

海未が軽いため息と共にそうひとりごちると、

「園田さん！今大丈夫!？」

と、1人の女子部員が慌てた様子で射場に駆け込んできた。

「はい、大丈夫ですが……。どうしたんですか？そんなに慌てて。」

海未は女子部員の慌てた様子に首を傾げながら用件をたずねた。

「それが諏訪部さんって男子生徒が凄い勢いで弓道場まで走って来て『園田さんはいるか?!』って凄い形相で言うもんだから……。園田さんは何か心当たりある?」

「いえ、特にそれほど重要な用件はありませんが……。志郎がそれほど言うのであれば何かあったのかもしれないね。」

海未はそう言つて弓を片付けて弓道場の入り口に向かおうとすると、

「園田さん！大變大變!!」

そこにもう一人の女子部員が駆け込んできた。こちらの方は心なしか顔が青ざめていた。

「どうしたんですか!?!」

海未はそんな彼女の顔を見てよほどの事があつたのかと思ひ、食ひ氣味に彼女に何があつたのかを聞いた。

「弓道場の入り口で待つていた諏訪部さんが・・・、倒れちやつたんです!!」

「そんな、志郎が!?!」

志郎の身体能力の高さや余りあるスタミナとガッツをよく知つてゐる海未は、志郎が倒れたという事、sのメンバーでは誰もが予想できない出来事に動揺し、志郎の元へ走つていった——。

——その一方で時は少し遡り、志郎がまだ学校に戻るために疾走してゐた頃、放課

後の音楽室で真姫がただ一人ピアノを演奏していた。

「ふう……。」

一曲弾き終わつた後、真姫は一つため息をついた。もちろんその表情は晴れやかなものとは言えない。

（変な気分ね。音楽室でひとりぼつちで演奏なんて、sに入る前なら何回もやつてたのに、なんかモヤモヤする……。）

真姫もまた、海未と同じようにどこか煮え切らない気持ちを持って余っていた。

「……考えていてもしょうがないわよね。」

そう言つて彼女がピアノの鍵盤の蓋を下ろそうとしたその時——

「んん、やつぱりいつ聞いても真姫のピアノはいいもんだねえ……。」

いつの間にか音楽室の扉の前で幸雄が軽く拍手をしながら立つていたのだ。

「いつの間に入つて来たのよ。」

真姫は顔をしかめながら幸雄にたずねる。

「ついさつきね。まあ気付かないのも無理はねえよ、ピアノを弾いてる時のお前さんは誰よりも真剣なんだからさ。」

「ヴェエ!?!と、当然でしょ。小さい頃からやつてたんだから!で、何しに来たのよ。」

真姫は幸雄のお世辞に動揺するがなんとか冷静に切り返し、幸雄がこの場所にやってきた理由を聞く。

「何しに来たって？ちよつと真姫と2人つきりで話がしたくってな。」

幸雄はそう言うのとピアノから一番近い場所にある机の上に腰かけた。

「なによ話って？」

「別に込み入ったものじゃねえよ。ただちよつとこれからの俺たちの運命を分ける話を・・・ね。」

「それってだいたい込み入った話だと思っただけど・・・。」

幸雄の言葉を聞いた真姫は面倒なことになったと言わんばかりに嫌そうな表情をしていたが、

「なあ、お前さんはμsを復活させたいか？」

という幸雄の言葉を聞いた瞬間、驚いたように目を見開いた。

「そ、それは私だつて出来るならもう一度・・・ううん、もつとあの9人で歌って踊りたいわよ。でも、ことりは留学で、穂乃果はスクールアイドルを辞めた・・・。それなのにμsを復活させるなんて本当にできるの？」

真姫は期待に胸をときめかせると同時に、それは叶う事のない夢物語であるとも分かっていたため、半信半疑な様子だったが、

「本当にできるかどうかなんて問題にもならねえよ。ただ俺たちはお前らがうじうじ悩んでる間にそれを成し遂げる事ができるようにコソコソ動き回ってるだけだからな！」

幸雄はそう言つて笑つていた。言葉ではどこか投げやりな雰囲気こそあつたが、その眼と表情には朝に語り合つた志郎と同じように諦めの感情はなく、ただそれを成し遂げてみせるという強い意志の炎が燃えていた。

「とにかく、志郎の持つ不撓不屈の意志と俺さまの知略が合わされば不可能ことはほとんどないと言つてもいいだろう。だが、この計画を成し遂げるためにはまず穂乃果とことり以外の7人の意志が必要なんだ。μ、sを復活させたいという意志がな……。それが無ければこの計画は成り立たねえんだ。」

幸雄はそう言つて拳を強く握ると、

「なあ真姫、俺たちに協力してくれるか？ いや、μ、sを復活させたいという意志はあるか!? あるなら是非とも協力してほしい……。！」

今まで彼女たちの前で見せたことのない真剣な表情で真姫に協力を頼んだ。

「ねえ、その前に1つ聞いてもいいかしら……。！」

「なんだ？」

「あんたの目的は一体なんなの？」

「!?」

幸雄は予想もしなかった真姫の問いに言葉のない驚きを見せた。

「何が目的かって？変な事を聞くんだな。俺の今の目的は志郎と同じく、sの復活、ただそれだけさ。」

幸雄はいつものように軽く笑いながらそう言ってみせるが、

「嘘。本当は何か別の目的があるんじゃないの？」

と真姫は意志を曲げる様子はなかった。流石の幸雄も今の彼女に対して誤魔化しは効かないと考えたのか、いつもの笑顔をやめて真顔で彼女の真意を問いただすことにした。

「なぜ今この時にそんな話をする？」

「正直に言わせてもらおうと、あんたの事を信用してないからよ。他のみんなは信用してみたいだけどね。」

「やれやれ。俺は人から疑われることには慣れてるはずだったが、流石にここまで打ち解け合った仲間にそう言われちゃあ少し傷つくね。」

幸雄は少しずつ余裕を取り戻しているのか表情を和らげ、芝居がかった様子で真姫に語り掛ける。

「そんな事を言うからには何かしらの根拠はあるんだろうな？」

幸雄は垂れ目の三白眼で真姫を鋭く睨みながら少しばかり低めの声で彼女にたずね

る。

「根拠ならあるわ。それはあんたのその目よ。」

真姫は幸雄の眼力に気圧されることなく、堂々と幸雄の目を指差しながら幸雄の問いに対する答えを言い放った。

「俺の目……か。どんな根拠があるか聞こうじゃねえか。」

幸雄は真姫の言葉に口元を綻ばせ、彼女に続けるように言った。

「私が病院の院長の娘だって事は知ってるわよね？」

「ああ。」

「私は病院を継ぐことになってるから小さい頃から父の仕事を見るために病院に行くことが多かったの。それに加えてたくさん大人のが集まる場所にも連れてって貰ったこともあるから、私はいろんな人を見る機会に恵まれていたのよね。」

「ほう。」

「そう、色々な人を見て来たわ。老若男女問わず誠実な人、傲慢な人、不器用だけど愛嬌のあった人、何か腹に一物を抱えた人、突出したもののない平凡な人……。本当に色々な人を見て来たわ。」

「へえ、お前さん人付き合いは上手くないくせに意外なところもあるもんだね。」

「別に人付き合いの上手さなんて関係ないわよ。」

途中で幸雄に茶々を入れられるも、真姫は気にする素振りも見せず語り続ける。

「気が付けば私は人の目を見るようになっていたの。目は口程に物を言うって言うでしょ？どんな言葉で取り繕っても目は嘘をつくことはできない。だから私はいつもまづ人の目を見るようにしてるの。」

「なるほど、確かにお前さんの言う通りだわ。俺も人の目を見てそいつの人間性を予測し、それと交流することで知った性格を合わせてそいつとどう接するべきかを判断している。うんうん、ほんの少しの乱れもない正論だわ。」

幸雄は彼女の言葉に合点がいったのか笑顔で何度もうなずいてみせた。だが・・・、「・・・じゃあ、お前は俺の目に何を見た？西木野真姫よ。」

一転、幸雄は冷徹な表情かつ、自慢の三白眼で睨み付けながらさらに問いかける。

「何を見たか、それは・・・。」

真姫はそんな幸雄の表情に一瞬だけ気圧されるも呼吸を整え、言葉を紡ぎ出す。

「無よ。何も見えなかった。」

真姫から出た言葉は『無』、ただそれだけであった。

「おいおい、そりやねえだろ真姫さんよ。無って、何も見えなかったってそりや何の根拠

にもなりやしねえだろうがよ。」

幸雄は拍子抜けしたかのように笑いながら真姫の答えを嘲った。

「そういう意味じゃないわ。あんたみたいに腹に一物抱えてて胡散臭い人は何人も見て来たけどどんな奴でもその目には感情があつた。でもあんたの目にはそんな感情さえも宿つてないような気さえするくらい淡泊な目をしてるのよね。透き通つていゝつて言うより白く澱んでいるような感じね……。なんて言うか、とても高校生がするような目じゃないつて思った。」

「……。」

真姫の言葉に幸雄の顔から再び表情が消え、口をつぐむ。

「そしてここ数ヶ月の間あんたと過ごして思つたけど、あんたは口振り、身振り、手振りの全てが胡散臭いのよね。胡散臭さで言えば希も大概だけど、あんたは希なんか比べ物にならないくらい胡散臭いのよ。」

「……。」

幸雄は真姫の自身に対するあまりにも辛辣な指摘を浴びせられながらも表情をピクリと変えることなく耳を傾け続けていた。寧ろその表情には余裕さえ見え隠れしていた。

真姫はそんな不気味な幸雄の様子に少し怖気づくも、さらに言葉を絞り出す。

「そして極めつけはあの一連の出来事でのあなたの言動ね。なんていうか、あの時のあなたは他人事だった。あの一件はあなたを含めたあたしたち11人全員の問題だったって言うのになんたはまるで自分が当事者じゃないみたいなの雰囲気をしてた……。」

真姫の言葉は途中から震えていた。それは本心を出さず仲間たちの心を欺いていた幸雄へのやるせない思いか、それともいくら胡散臭くとも仲間である幸雄に疑いを向けた自分自身への怒りか、幸雄の炯眼を以てしてもそれを知ることにはできない。

「志郎が私たちに真正面から全力で向き合っていた……。それに対してあなたは何事に対しても俯瞰的で、まるでジオラマを見下ろしているようにしか見えなかった。だから私にはあなたの心が分からない……。あなたが何をしたくて、何を目的にあたし達のためにそこまでしようとするのかが分からないのよ……。」

「……。」

真姫の目にはうつすらと涙が見えていた。それでも幸雄の表情は動かなかった。

「ま、あなたにはあたしの言葉さえ些末なものにしか聞こえないんでしょうけどね。ただ、私はあなたの事が知りたいだけ。ただそれを教えてくれればそれでいいわ。」

真姫はふう、と息を吐くと幸雄に背を向けながらそう言った。

すると――

「ふふっ、ふっふっふっふ……。はっはっはっはっはっはっはははははは……!!!」

突如幸雄が大声で笑い始めた。

「ヴェエ!!」

突然すぎる幸雄の行動に真姫は驚くあまり尻もちをついてしまった。

「いや〜ははは……。実に辛辣にして良い考察だったぜ西木野真姫。俺は正直お前さんを世間知らずで気難しいくせにチョロいボンボンなお嬢様だと思っていたが……。なかなかどうして賢^{さか}しい小娘よなあ。」

幸雄はそんな真姫を気に掛けることなく楽しげな雰囲気^{きふき}で語りだす。

「いやはや、まさかこの俺の炯眼を以てしてもお前さんの疑いの眼差しにも気づかずその上ここまで俺の核心に近いところを突かれるとは俺も衰えたものよ……。希にばかりを警戒しておったがとんだ計算違いだったわ。はははは……。!」

(小娘……。?衰えた……。?幸雄は何を言ってるの……。?)

突如豹変した幸雄の様子に困惑する真姫だったが、ふと喉元に登ってきた言葉をゆつくり口にする。

「ねえ、あんたって何者なの?」

その言葉が真姫の口から言い放たれた後、元々何の音も奏でられてない音楽室が更しんと静まり返った。

幸雄はその言葉を耳にした瞬間動きを止め、目をカツと見開いて真姫を凝視していたが、まるで「その言葉を待っていた」と言わんばかりに顔をほころばせた。

「ふふふ、何者かっって言われても俺は武藤幸雄以外の何者でもないんだが、その言葉を待ってたぜ真姫。」

「待ってたってどういう事よ。」

動揺するどころか、むしろ嬉しそうな様子の幸雄に真姫は戸惑いを隠せず、訝しみながら彼の真意を問い詰める。

「なあに。此度の俺たちの策はメンバー全員が心の奥底から協力し結束しなければ実らないものでな、だが今はこんな有り様だろ？それに志郎には言っておらんだがそろそろ音ノ木坂に何の所縁もない俺たち2人がここまでするのに疑念を持つ者も出るだろうと俺は考えていた。」

「それが私ってこと？」

「そう。お前さんのように俺たちに対する疑念を持つ者がいるとなると策を円滑に進めにくいし、団結にも綻びが出てしまう……。だから俺たちにはそれをどうにかしなく

てはならないという課題があつたのだが、俺たちには上手く行けばそれを覆すことのできる切り札があるわけよ！」

「はあ、つまり私はあんたが自分たちの秘密を明かしやすくするように誘導されてたつて事？なんか癪に障るわね。」

真姫は幸雄の狙いに気が付き、深くため息をつくと同時にどうあがいても幸雄を出し抜けそうにない事を実感した。

「流石は真姫、理解が早くて助かるぜ。まあもつとも俺とサシで話をしてる時点でお前さんはもう俺の術中にはまりこんでたわけなんだがな。」

「それで、その秘密って何よ？志郎も同じ秘密を持つてるみたいだけどあんたが勝手にバラしちゃつていいの？」

「志郎は時期尚早だと渋つてたが俺は今が潮時だと思つてるし、2人の間でいつかお前から9人にバラすことは既に取り決め済みだ。ま、あいつもそこまで頭が固いわけでもないから言い訳はいくらでも立つさ。」

幸雄はニヤリと笑いながら真姫にそう語つた。

「それに俺たちが語らずとも、希はもうなんとなく勘づいてると思うしな。」

「希？希はあんた達の秘密を知つてるの？」

「さあね。いくら希でも俺たち2人には何かがある程度の事しか氣づいてないだろ。も

し全貌がバレてたら合宿の段階でとつくに尋問されてるよ。」

「……。」

「さつてと！長々しい前置きはこれまでにして、いよいよカミングアウトと行きましようかね!!」

「……!」

幸雄はまるで演劇の役者のように大仰で芝居がかった振る舞いをしながら真姫の前に立つと、彼女は緊迫した表情で息を呑む。

「実は俺たちは——」

「大変よ真姫!!」

幸雄が語り始めようとしたその瞬間、絵里が慌てた様子で音楽室の扉を開けた。

「な?!どうしたんだお前ら?」

「どうしたのよ絵里も希もそんなに慌てて……。」

幸雄と真姫は思わぬ来客に驚きつつも何事もなかったかのような冷静さで絵里とその後ろにいる希に用件をたずねた。

「幸雄くんもいるんやね、よかった。」

「ええ、ちようどいいわ。探す手間が省けてよかった……」

「おいおい、探す手間が省けたってなんだよ。そんなに大事な話なのか？」

「志郎が……、倒れたのよ……！」

『何（ですって）!?!』

絵里の口から放たれたその衝撃の事実には幸雄と真姫は愕然とした。

「弓道場の入り口で倒れたみたいなのよね……」

「幸い海未ちゃんたちが保健室に運んでくれたみたいやけどね。」

絵里と希は何とか呼吸を整えると状況を2人に教えた。

「それで保健室に行く道すがらに私たちを探してたってわけね。」

「そういうことや。」

「あの志郎が倒れるなんてよっぱどの事かもしれないからね。本当は穂乃果も探してた

んだけどもうとつくに帰っちゃってたみたいなのよね……」

「……」

絵里たち3人の会話を幸雄は呆然としていた様子で聞いていた。

「じゃあとりあえず保健室に行くしかないわね。」

「ええ。希、2人とも行くわよ。」

真姫の言葉を受けて絵里は、希と真姫たちに付いて来るように促して保健室に向かっ

て行つた。真姫も希の後に続いて音楽室から出ようとしたが、立ち止まっている幸雄の方を見て、

「どうしたのよ幸雄、保健室に行かな——」

と話しかけようとしたが、幸雄の顔を見て言葉を失つた。

幸雄の表情が歪んでいた。不安、怒り、焦り、その他諸々の感情が入り混じつた顔をしていた。真姫は今まで幸雄のそんな表情を今まで見たことが無かつた。そもそもそんな表情を見せるような男だと彼女は思つていた。

圧倒的な運動神経と体力を持つ志郎が倒れるほどに何か無茶をしていたという事実を聞いたこともそうだが、大きな動揺を見せる事の無かつた幸雄が狼狽している事実、直面した真姫は、今がどれだけ切迫している状況なのかを否が応でも実感せざるを得なかつた。

「志郎め……！確かにお前の働きにこの計画の成否が懸かっているとは言つたが、ぶつ倒れるまで無茶しろとは言つてねえだろ……！！ここで穂乃果の二の舞演じてどうすんだ馬鹿、お前がここで脱落したら全部おじやんになるんだぞ、それを分かつてんのかあのクソ脳筋が……！！」

幸雄は小声で志郎が倒れるほどに無茶をしたことに対する怨嗟の言葉を呟いていた。

だが、志郎を口汚くののしるその言葉の陰には志郎を案ずる気持ちが見え隠れしていた。

「幸雄……。そんなに志郎が倒れたことが不安なの？」

「……！なんだ真姫、まだ行ってなかったのか。」

真姫に声を掛けられた幸雄は我に返り、務めて冷静に彼女の言葉に応える。

「不安じゃねえと言ったら嘘になるが、まああいつの猪突猛進ぶりには長年付き合わされて来たもんだが、流石に久しぶりにやられると結構ヒヤヒヤするもんなんだわこれが。」

幸雄は深呼吸を一つすると、いつも通りの笑顔で真姫に語った。

「……ちよつと待って、長年つて言わなかった？あんだ達、この学校で始めて知り合ったんじゃないの？」

真姫は今の幸雄の言葉に感じた違和感をそのまま幸雄にぶつけた。幸雄はその言葉を聞いてまたにやりと口角を上げる。

「そうだ。お前さんが今感じた違和感こそが俺の……、俺たちの正体に通じるカギだ。」

「あんだ達は一体何者なの？」

真姫は、幸雄に詰問する前に投げかけた言葉をもう一度彼に投げかける。

「まあそう焦りなさんな、話だけなら歩きながらでもできる。あいつらにバラす前にお前さんにだけちよこつとだけ教えてやるよ。」

幸雄は不敵に笑いながらそう言って、真姫に手を差し伸べた。

50話 志郎の真意、そして核心へ

そして、その頃保健室では――

「志郎、あなたという人が一体どうして……。一体どのような無茶をしたらこんな事に……。」

志郎がベッドで眠っている傍らには彼を保健室に連れて来た海未が座っていた。

「海未！」

その時、絵里が海未を呼びながら保健室の扉を開けた。

「絵里、希。」

「志郎の容態はどうかしら。」

「志郎くんはどうしていきなり倒れたん？」

保健室に入った絵里と希は志郎の容態と倒れた理由を海未にたずねた。

「保健室の先生が言うには志郎が倒れたのは急激な運動による貧血だそうです。」

「急激な運動による貧血ですって？」

「志郎くんにはそんな無縁やと思うんやけど……。」

倒れた原因を聞いた絵里と希は首を傾げた。それもそのはず、彼女たちは志郎の力強い姿しか知らなかったのだ。

「ええ、普段の志郎ならそうなんです。最近の志郎ならそうなくてもおかしくないと私は思っていました。」

「それってどういうことなのかしら？」

「志郎は、私たちが活動を休止してから、何があつたのか日に日にやつれていつていたのです。目の下には隈ができ、頬も少しばかり痩せこけて……。私の推測ですが、昨日までの2週間近くずっとロクに睡眠も食事もとつてなかつたのでしようね……。」

志郎のここ数日での衰えぶりをただ見ている事しかできなかった海未は俯きがちに絵里たちにその様子を話した。

「そうやつたんやね……。」

「確かにここ数日みんな顔合わせてないものね……。もっと早くに気付くべきだったわ、ごめんなさい。」

絵里は海未だけにそのような辛い思いをさせてしまった事に責任を感じ、頭を下げて謝った。

「頭を上げてください絵里。昨日まで志郎が落ち込んでいたのは事実なんです。どういうわけか今日になると顔色も元通りに良くなっていたんです。」

「昨日志郎くんの心境を変える何かがあったって事やね。」

「はい、何があったかは知りませんが志郎が元気になってよかったと思つた矢先に……。」

「志郎が倒れたのね。」

「どうして志郎くんは弓道場の入り口で倒れてたん？」

「それなんです、志郎が校門の方から凄まじい速さで弓道場に向かつて走っていくのを見たという生徒が何人かいるんです。」

「校門の方から？」

「志郎は学校の外にいたのかしら？」

「それに志郎は倒れる前に私と話がしたいと言つていたそうで……。」

「何かそれほどに大事な事があるようね。海未は心当たりはあるの？」

「いえ、特には……。」

絵里に志郎の用件に対する心当たりがないかをたずねられた海未は首を横に振つた。

『うくん……。』

海未でさえ分からないとなると3人とも志郎が何をしようとしていたのか、その考えが分からずただ唸つて考える事しか方法はなかった。だがその時、

「う、うう……。」

と低い呻き声が聞こえると同時に志郎の目が開いた。

「志郎!?!」

「志郎、大丈夫ですか!?!」

「海未ちゃん、志郎くんは病み上がりやで!」

志郎に取りすがろうとした海未を希が制止した。

「(ハハ)は……」

「保健室よ。海未たちがあなたをここへ運んだのよ。」

虚ろな声でたずねる志郎に絵里が優しい声で海未たちが運んできたという事実を教えた。

「海未たちが……。ああ、確か俺は弓道場の前で倒れたんだっか……」

志郎はゆっくりと身を起しながら自分の身に起こった出来事を思い返した。

「心配したんですよ!!昨日まであれほどやつれていたのに無茶をして……!」

海未は目に涙を浮かべながら志郎を怒鳴った。

「そればかりは本当に悪い事をしたと思っっている……。心配かけて本当に済まなかった……。」

志郎はそんな海未の顔を見て申し訳なきように頭を下げた。

「それより、志郎は一体どこから走って来たのよ?」

「秋葉原にあるゲーセンからだ・・・。」

「秋葉原のゲームセンターですって!？」

「嘘やん! あそこら辺からこの学校まで結構距離あるよ!？」

「それを走って来たって言うの!？」

志郎の言葉にメンバーの中でも比較的運動神経のいい海未と絵里さえも驚きの声を上げた。

「そうだ。」

「なんて無茶を・・・でもゲーセンで何をやっていたの?」

絵里は志郎に何故ゲームセンターにいたのかを問い詰めた。

「にこたちとの勝負だ。」

「にこたちと勝負・・・ですか?」

「一体何のために?」

「μ、sの復活のためにだ。」

『μ、sを復活させるため!?!』

海未たち3人はまたもや志郎の言葉に驚く。

「神田明神で練習しているにこたちにそのための協力を要請したんだが、にこに断られてな。何度も頼み込んだらようやく折れてくれて、ゲーセンのダンスゲームで勝負する

「ことになったのだ……。」

「ダンスゲームって、センターを決める時にやったあれですか?」

「そうだ。彼女たちと公平な勝負をするために俺はあいつら3人を1人ずつ相手取り3回連続で踊った。」

「それこそ無茶ですよ!ここしばらくで自分の体力が下がり切っていたのは分かっていたはず……。それなのになぜそのような無茶を!」

海未は志郎がにこたちと繰り広げた勝負の内容を聞いて志郎の無茶を咎めたが、

「これが俺やにこにとっての最良の方法だったのだ。あいつにも意地と誇りがある、この一件に一番腹を立てていた彼女を引き入れるためにも、そして俺と対等に戦うために策を張り巡らせた彼女の想いに報いるためにもな……。」

志郎はあくまでもにこの意地と誇りを重んずる態度を貫いた。

「でもその勝負の後に秋葉原からここまで走るなんてそれこそ無茶が過ぎるわ。どうしてそんな事をしたの?そんな事をしたら倒れてしまう事くらい志郎なら分かり切っていたと思うのだけど。」

今度は絵里が志郎にゲーセンから学校までを走破した理由をたずねた。

「それに関してもにこたち3人に止められたよ、でも俺はそれでも走った。ここで走らなければ、s復活は成らない、たとえこの身体が壊れても、お前たち9人の輝きを取

り戻したい……。俺はただその一念でここまで走って来た。海未を、そして絵里と希にも協力を頼むために……。」

志郎は遠くを見るような目で、今日犯した無茶の連続の中に宿らせていた意志を3人に語った。

「そう言う事だったのね……。」

「ああ、だから話を——」

「でも一つだけどうしてもわからない事があるわ。」

絵里はそう言つて志郎の言葉を遮った。

『絵里（ち）？』

絵里の突然の行動に海未と希は戸惑つた様子で彼女の顔を見る。

「志郎が、sを活動開始からずつとサポートして来てるのも、それだけに、sに対して強い想いを抱いてるのも知ってるわ。多分今回の一件で一番心を痛めたのはあなたなんでしょうね……。」

「……。」

志郎は絵里の言葉に頷くことなく、ただ彼女の目を真つ直ぐに見据えて話を聞いていた。

「ここの留学は確實、つまり、sはもう9人に戻る事はできない……。あなたはそ

れを分かっているはずなのに、どうしてそこまでするの？ μ s を復活させるなんて出来るはず無いのに、どうしてあなたは自分の身を削ってまで足掻くのよ……！」

絵里は唇を噛みしめるように言葉を絞り出す。その表情は無茶を働いた志郎への憤りの為か険しかった。

「俺が μ s に対して抱いてる思いの強さを理解しているのであれば、もう分ってるだろう。俺は諦めの悪い男だ。絶体絶命、何もかも打つ手の無い万策尽きた状況だからこそ俺は諦めたくないのだ。万死に一生を掴むために精一杯、力の限り、死力を尽くし、必要ならば命さえも燃やして足掻くのが俺という男なんだよ。」

3人に静かに、そして厳かに自らの持論を志郎は語る。

「そう言えば、ファーストライブの後にも言っていたわね。『俺は座して滅びを待つ主義じゃない』って。まさに言葉通りってわけね……。」

絵里は思い出した。かつて μ s のファーストライブの片づけを終えて帰ろうとした志郎が語った言葉を、それこそが諏訪部志郎という男を体現していたことを。

「まさか覚えてももらえていたとはな。そう言う事だ、無茶したことに關しては詫びるが俺は最後まであきらめるつもりはないと思ってくれ。」

志郎が頭を下げてからそう言うのと、

「では、私からも一つ聞いてもいいですか？」

と海未が口を開いた。

「なんだ？」

「実は今になつて気付いたんです。志郎がμ sのサポートを引き受けてくださった理由を……。」

「!!」

志郎はその海未の言葉に目を見開いた。

「そう言えば聞いたことないやんね……。」

「私もよ。まあ、最初からいる海未が聞いたことないって言うくらいだから当然なんだけど。」

希や絵里さえも海未の言葉にハツとして互いに目を合わせる。

「そう、志郎たちが当たり前のように側にいたことで私たちはそれについて全く気にも留めていませんでした。こう言つては心苦しいのですが、いくら廃校を防ぐための共学化に向けた研究生であるとはいえ、元々音ノ木坂学院にとは縁もゆかりもない学校に通つていた志郎たちにとって、転入したての学校の廃校騒ぎは正直他人事に思うのが当然のはず……。ですが、志郎はまるで元からこの学校にいた生徒のようにこの問題に真摯に向き合っていました。」

「確かに、ゆつきーくんはともかくとして志郎くんは結構熱心やったよね。」

希は海末の言葉に一理ありと言わんばかりに頷きながらそう言った。

「そうかしら？ 幸雄も私と言い争うくらいには熱心だったけど。」

「その熱心だった理由はえりちは知つとるん？」

「・・・あつ！」

そう、絵里も幸雄とはオープンキャンパスの準備の時に激論を交わしていたのだが、幸雄がなぜそこまで熱くなっていたかについては知らずじまいだったのだ。

「志郎はどうして私たちに協力しようと思つたのですか？ もし廃校を阻止するためであれば、もうその目的を果たした今私たちに協力する理由も無いはず・・・。何か他にも理由があるんですよね？ 自らの身体を壊す事さえも厭わないほどの理由が。」

「・・・。」

海末の問いに対して志郎は何も言わなかった。否、何も言えなかった。

（言えるわけが無かろう・・・。この学園に衰亡した武田家を、そしてお前たちにかつての俺の影を重ねていたことなど・・・。）

そう、音ノ木坂学院の廃校問題に真摯に向き合つたのも、穂乃果たちμ'sに対して協力を惜しまなかつたことも、武田勝頼として歩いた人生を振り返り、彼女たちに自分

の二の舞を演じさせたくない……ただその使命感に駆られての事だったなどという事は今の志郎には言えなかった。

(確かにいつか俺たちの正体を明かすと幸雄と約束はした。だが今はその時ではないのだ……。だが……。)

志郎はここで全てを明かすべきか否か葛藤していた。

それらしい理由をでっちあげればこの場は言い逃れられるかもしれないと考えたが、志郎はそもそも即興でそれらしい嘘を言えるほど機転が利かない事を思い出した。それに、今対峙している絵里、海未、希の3人のうち海未と希を相手に自分の意思を完全に隠し通せるわけがないという思いがあった。希はかつて初対面の時に自分が普通の人間でないことに気付いた節を見せており、海未に関してはそもそも彼女の前では嘘をつきにくいと感じさせる空気というか威圧感に近いものを感じているのがその理由である。

(どうすればいいんだ……。)

「ここらが潮時だと思っぜ志郎。」

『!?』

「幸雄……。」

志郎が途方に暮れていたその時、そう声を掛けたのはいつの間にか保健室の扉の前に立っていた幸雄だった。

「潮時とはどういうことだ？」

「言葉の通りよ。もうここで明かしちまったほうがいいって事さ。」

「だが、これは9人揃った時ではないと……。」

「今がそんな事言つてられる状況だと思うか？」

志郎は幸雄を押しとどめようとするがあっさり切り捨てられてしまった。

「いいか、今の俺たちにはこの計画を実行できるほどの信がない。だからここで俺たちの素性を明かしてしまった方が動きやすくなる。俺は考えてる。どうせいつかバラしちまうんだから有効活用しようぜ。」

幸雄は志郎の元に歩み寄って彼の肩をポンポン叩きながら自分の考えを志郎に述べた。

「それはそうだが……。」

「あ、ちなみにさつきここに来る道中で真姫に大まかな事を話しておいたぞ。」

「なに?! どうしてそんな大事な事を独断で!!」

さらつと真姫に秘密を明かしたことを幸雄から聞かされた志郎は思わず幸雄の胸ぐらを掴んだ。

「まあ落ち着けつて。俺は合宿の時に言つたはずだぜ? 『俺たちの正体を知ろうとする者が出た時はその限りじゃない』ってな。」

「真姫が・・・そうなのか?」

「ああ、半ば俺が誘導したようなもんだけどな。だがあいつはあいつでここ数ヶ月の間俺に対して疑いの目を向けてたらしい。それに、志郎も今まさに絵里たちに迫られてたじゃねえか。」

「うむ・・・。」

志郎は幸雄の言葉を聞いて唖る。ここに来て正体を明かすか否かで心が揺れているのだ。

「ねえ、さつきからあなた達は何の話をしてるの?」

「絵里の言う通りです。正体がどうか・・・。」

2人のやり取りを聞いていた絵里と海未が話に割り込んできた。

「ふふふ、そう慌てなさんなお二人さん。今からそうしたいのはやまやまなんだが、生憎ここいつがまだ迷つててねえ。」

幸雄はニヤリと笑いながらチラリと志郎の方を見て2人を宥める。

「……。」

「ねえ、それはどうしても私たちに言えない事なのかしら?」

絵里が志郎の顔を覗き込みながらそう語り掛ける。

「……!」

絵里の悲しそうに潤んだ目に、志郎の心のうちに罪悪感が沸き上がる。それもそのはず、絵里はかつての自分と同じ苦しみを背負った後輩のような存在であった。そんな彼女に悲しげな眼で見られては心が揺らぐのも無理のない話である。

「……俺たちは——」

志郎が意を決したように口を開いた瞬間、

「志郎さん無事ですかー!!?」

「志郎くんは生きてるかにやー!」

「ちよつと志郎の奴がぶつ倒れたって聞いたけど大丈夫なの!」

と、にこと凜と花陽の3人が息を切らしながら凄まじい勢いで保健室に飛び込んできた。

「お、お前ら!?まさか走って来たのか!」

志郎は驚きのあまりベッドから落ちそうになりながら3人にたずねた。

「はあ!? あんたじゃないんだしそんなことするわけないでしょ!? そんな事より、あんたホントにぶつ倒れてんじゃないわよ!!」

ここはそう怒鳴りながらずかずかと志郎の元にやって来て志郎の胸ぐらを両手で掴んで思いつき揺らしていた。

「おいおい、病み上がり相手によしてやれよ……。」

幸雄はドン引きしながらにこを諫めたが、

「人の忠告も守らない脳筋馬鹿にはこれくらいしなきゃダメなのよ!」

と幸雄に言い返した。

「にこちゃんはそのだけ志郎さんの事を心配してたんですよ。」

「そうにや! 志郎くんは無茶すぎにや!」

凜と花陽も志郎に対して少し怒っているような様子でそう言った。

「ああ、そうだな……。心配かけてすまなかった。」

志郎はにこに揺らされたことでフラフラになった頭を支えながら頭を下げて謝った。

「ふん、分かればいいのよ。」

「はいはい、そろそろ仕切り直しさせてもらうぜ。」

幸雄が手を鳴らして話題を変える。

「仕切り直して何よ?」

にこが首を傾げると、

「志郎くんとゆつきーくんがうちらに對して何か秘密を隠してみたいで、志郎くんが何かを言おうとしたときににこっち達が入って来たんよ。」

と、希がにこ達3人に説明した。

「さ、結局志郎はどうするんだね?ここで明かすか否か、はつきりしてもらってからじゃないと色々始まらんよ?」

幸雄が志郎に對して確認を取ると、

「ああ、どうやらにこまでみたいだな。こうなつてしまった以上話してしまつた方がいいのかもしれない。」

志郎は覚悟を決めたような面持ちでそう言った。

「そう言えば真姫ちゃんもさつきゆつきーくんから色々聞いたみたいやけど、どんな話やつたん?」

希が真姫にそうたずねると、

「ええ。確かに幸雄から聞いたけど、なんて言うかホントなんだらうけど色々常識外れで信じられない事ばかりだったわ。」

と言つた。

「常識外れ・・・ですか？」

「そう、これから話すことに關してはお前さんらが持ち得る常識の全てが当てはまらんと考えてもらつたほうがいいかもしれんね。」

幸雄は真姫の言葉に首を傾げる海未や、この場にいる志郎以外のメンバーに対してそう忠告した。

『・・・』

それを聞いた絵里たちは息を呑んだ。

「さて、ようやく舞台が整つたみたいだな。志郎、覚悟はいいな？」

幸雄はいつになく真剣な表情で志郎に心の準備ができているかをたずねる。

「・・・ああ、覚悟はできた。」

志郎はそう短く幸雄に返事をする。2、3回ほど深呼吸をして心を落ち着けてから絵里たち7人に身体を向ける。

「じゃあ、これから俺たちの正体についてお前たちに話そう。」

——遂に、志郎と幸雄の正体が、sに明かされる。

5 1 話 魂名開帳

「じゃあ、これから俺たちの正体についてお前たちに話そう。」

『志郎（くん）たちの正体……？』

志郎の口から出た言葉に幸雄から既に大まかな話を聞いている真姫以外のメンバーが息を呑む。今まで気を許せる仲間として行動していた海未たちにとって、驚くのは当然の反応であった。

「俺たちの正体、それは……。」

『それは……？』

志郎が勿体ぶつた様子でそう言うと海未たちは食い気味になって志郎の言葉に耳を傾ける。

「ちよつと待った志郎よ。」

「どうした？」

「ちよつと!!今ここで割り込むんじゃないわよ!」

そんな中幸雄が突然志郎を止め、水を差されたことにこが幸雄に向かって怒鳴った。

「ああ悪い悪い、水を差す気はなかった。ただ、俺たちの事を話す前に少しばかり基礎知識をレクチャーしたほうがいいと思つてな。」

『レクチャー?』

幸雄の言葉に当事者である志郎を含めた8人が首を傾げた。

「ああ。いきなりペラペラ話すだけつてなら話は楽なんだが、これはペラペラ話すだけじゃすまない複雑な話でな。前もつて知識を教えとかないと話に付いてこれない奴が出てきかねんと思つたのよ。」

「なんかすつごく馬鹿にされたような気がするわね……。」

「凜もなんか分かるにや……。」

幸雄が志郎の話に割り込んだ理由を説明すると、にこと凜が納得いかないと言わんばかりにそう呟いた。

「確かに、基礎知識は必要かもしれないわね。私も幸雄から先に少しだけ話を聞いたけどまだ理解が追い付いてないし。」

「真姫がそう言うのなら本当に複雑な話なんでしょうね。」

一方で真姫と海未は幸雄の話に同意していた。

「じゃあそんなわけで志郎、基礎知識については俺に任せてもらつていいかな?」

「ああ、俺じゃそこら辺は上手く説明できそうにないからな。頼む。」

「よっしや、じゃあ俺たちの正体に触れる前にちよつとした授業と洒落込もうか。」
志郎の許可を得た幸雄はパンと手を叩いて海未たちの注目を集めた。

「さて、突然だがお前ら前世って知ってるか？」

「前世ですか？知ってますが・・・。」

「私も一応知ってるわ。」

「愚問やね。」

「はい、知ってます。」

「流石に凜もそれは効いたことあるにや〜。」

「にこだつて知ってるわよそのくらい！」

「本当にあるとは思ってないけど知ってるわよ。」

どうやらこの場にいる4人のメンバーは全員前世という言葉の意味を知っていたようだ。

「なるほど、まあ高校生にもなれば一度は聞いたことあるわな。」

幸雄も教える手間が1つ省けたからか安心したような顔でそう言った。

「じゃあもう1つ質問。『転生』って知ってるか？こう書くんだけど。」

そう言つて幸雄は2つ目の質問を繰り返すと共に黒板に『転生』の2文字を書いた。

『?』

「これは流石に現代の女子高生には馴染みが薄い単語だから知らないのも無理はねえか。」

絵里、花陽、にこ、凜の4人が首を傾げるのを見て幸雄は少し苦笑いしていた。

「転生ってゆうのは生まれ変わりの事やね。仏教とかだと人間は死んでもまた別の形で生まれ変わってそれを繰り返すって考え方があるんやで。」

「いわゆる輪廻転生ですね。」

『へえ〜』

希と海未の解説に絵里たち4人は舌を巻いた。

「ま、あくまでも死生観の1つでしかないから本当かどうかわからないけどね。天国と地獄が本当にあるのかを議論するのと同じくらい考えるだけ時間を無駄にする内容よね。」

「あまりそういう言い方は良くありませんよ真姫。」

「そーやで、『現実』は小説より奇なり』って言うくらいなんやからね〜。」

「ヴェエ！わ、悪かったわよ……。」

いつものように皮肉を言う真姫に対して海未と希が忠告を入れる。特に希なんかは『わしわしMAX』の構えをとっていたため真姫は引き下がった。

「で、その転生ってゆーか生まれ変わってゆーのがあんた達の正体になんか関係があるわけ？全然話が見えてこないんだけど。」

「そうだな、関係はあるっちゃあるんだが今はいったん置いてもらおうか。」

幸雄は訝しげな様子のにこの言葉を軽く流して次の話題に移ろうとしていた。

「3つ目の質問で悪いがお前らは転生・・・、つまり生まれ変わりを信じるかね？」

『うーん・・・。』

幸雄の質問に海未たちは思わず唖ってしまった。

「いくら前振りで触れたとはいえそんな事言っても答えるのは難しいだろ・・・。」

「まあこれはあくまでも信じてるか信じてないかの話だからな。じゃあメンバーを代表して絵里はどう思ってるよ？」

「わ、私!? そうね・・・。 本当にあるかどうかは分からないけど、そういうのが本当にあつたら色々ロマンチックよねくなんて思ったり・・・しない？」

突然幸雄に指名された絵里が戸惑いつつも自分の意見を述べたが、

「・・・ぷっ、スイーツ乙(笑)」

「な、笑う事ないじゃない！生まれ変わりとか全然よく分かんないのに真剣に考えたのよ!？」

「どうどう、落ち着け絵里。幸雄もそう笑ってやるな。」

幸雄に鼻で笑われた絵里が眼尻に涙を浮かべながら彼の肩を揺らして抗議するも、志郎が仲裁に入った。

「ゆつきーくん、えりちをからかうのはほどほどにしてやってね。えりち結構ハート脆いところあるんやから。」

「ぐすつ、エリチカもうおうち帰る……。」

「あーすまんすまん、思いのほか乙女チックな回答が来たもんでついやつちまつたぜ。じゃあ気を取り直して次の話題に入ろうか。そんな訳で次はお前さんたちにこれを見て欲しい。」

幸雄はそう言うのとノートパソコンを開いて海未たちに見せた。そこには1つの動画が映っていた。

「これは……。前世の記憶、ですか？」

動画の内容は前世の記憶を持っている人についてのテレビ番組であった。

「そ、この世に起きる不思議な現象の一つとしてこういう事例が何件かあるのさ。ちなみにこれはついこの前やったのがネットにアップされたものだな。」

「どーせやらせか何かじゃないの？」

にこがそう言うのと、

「ううん、これはやらせじゃないよにこちゃん！ 凜、たまたまこの前この番組見てたけど

やらせとか作りものじゃないって言ってた！」

と凧が反論した。

「凧ちゃんの言う通りだよ。私もこれ見たけど、前世の記憶を持つてる人たちの言うてることを調べたら全部本当の事だったってやってたよ。」

そして凧と同じく番組を見ていたらしい花陽も凧の反論を補足するようにそう言っ
た。

「つまり前世とは本当にあるという事なんですか？」

海未は凧と花陽の言葉に首を傾げた。

「まあ間違いなくあると見て間違いはないだろうな。ただそれを科学的に証明する方法が無いんだけどな。」

「で、幸雄はなんでこんなものをあたしたちに見せたわけ？」

「もしかして、今の映像が志郎たちの正体と何か関係があるのかしら……。」

『え!?!』

絵里の何気ない発言に志郎と幸雄、そして真姫を除く6人が驚きの声を上げる。

「あく、けっこう惜しいところまで来たねえ。だがそれはちよつと違うな。」

それに対する幸雄の答えはノーだった。だが完全なノーというわけでもなかった。

「違うってどういう事？」

「ていうかそろそろ勿体ぶってないで教えて欲しいにや!」

「まあまあそう焦るなって。今からその答え合わせをするんだからよ。」

花陽と凜を宥めた幸雄はさらに話を進めだした。そしてその口ぶりから遂に2人の正体の核心に迫る事が仄めかされていたからか、海未たちの表情は緊張に包まれた。

「今の映像で前世というものがあるって事を知ったお前さんらは俺たちがその前世の記憶を持った人間かもしれないという結論に辿り着いたみたいなんだがそれはちよつと違うんだわ。」

「違うって言うのはどういう事かしら?」

「前世の記憶を持つてるのは幼い子供が大半なんだよ。それも成長していくごとに少しずつ記憶が薄れて大人になる頃には完全にその記憶が消えてどこにでもいる普通の人間になっちまうそうなんだ。」

「確かにさっきの動画の番組に映ってたのも子どもやんね。」

「じゃあ志郎と幸雄は前世の記憶を持つてる人ってわけじゃないって事?」

「それは違うなここ。俺たちには今でもはつきりと前世の……いや、生前の記憶が残っているんだ。」

『!?!』

幸雄と絵里の仲裁以外でほとんど口を開いてなかった志郎が出した言葉に7人は驚

きを隠せなかった。

「志郎、あなた今なんて．．．？」

「ああ、生前の記憶が残っていると聞いた。」

「ちよつと待つてください！生前って、それではまるで一度死んだかのような．．．。」

「志郎の言う通りさ、俺たちは一度死んでいる。」

志郎の言葉に戸惑う海未に対して幸雄はそうはつきり告げた。幸雄の表情はさつきまでのどこかおちやらけた雰囲気は鳴りを潜め、冷徹な雰囲気を纏ったものになった。

「一度死んでるですって．．．？」

「どういう事．．．!？」

絵里とにこの2人もかなり戸惑っていた。

「どういう事も何も、言葉の通りさ。ここで最初にお前らに質問した『転生』ってワードの出番よ。」

「転生．．．。つまり志郎くんたちは私たちよりも前の時代に生きていた人が生まれ変わったって言う事やね？」

希は転生という言葉から導き出した結論を2人に言い放った。

「流石は希、大当たりだぜ。」

「如何にもその通り。俺たちは過去の時代に生きていた人間がその当時の記憶を引き継いで生まれ変わった人間だ。そして俺たちはこれを転生者と呼んでいる。」

希の結論を受けて幸雄は彼女がその結論に至ったことを称賛し、志郎はそれに続く形で自分たちが何者であるかを海未たちに明かした。

「転生者……?」

「その転生者って言うのはさっきの前世の記憶を持つてる人と何が違うんですか?」

「お、良い質問だね花陽。さっきも言ったようにさっきの前世の記憶を持つてる人ってのは記憶しか持つてない上にその記憶が成長するごとに薄れてくただの普通の人ではないんだが、俺たち転生者は記憶だけじゃなくてこの時代に生まれ変わる前の前世と同じ人格をそのまま残して生まれ変わってるのさ。」

「えっと、つまり昔の時代に生きてた人がそのまま生まれ変わったって事ですか?」

「その通り!ま、そのまんまつつても流石に見た目は前世とは違うけどな。」

幸雄は花陽からの質問に答え、花陽が転生者とは如何なる存在であるのかを教えた。

「ちよつと待ちなさいよ。さっきの動画に映ってた人とあんた達がどう違うのかままだいまいち分かんないんだけど?」

「要するにデータだけを別のパソコンに移したのが前世の記憶を持つてる人で、データ

だけでなくそのパソコンが持つ機能も全てそのまま別の機体に移したのが俺たち転生者、というわけだ。」

いまいち合点の行かないにこに対して、志郎はパソコンを例に前世の記憶を持つ人間と転生者の違いを解説した。

「なるほど・・・、なんか分かったようなそうでもないような・・・。」

「じゃあ、あなた達が名乗っているその名前は偽名って事ですか!？」

「いやそれは違うな。俺たちが今名乗っているこの名前は紛れもなくこの時代に生きている俺たちのものだ。あくまでも生前での俺たちの名前は、今頃墓の下で眠ってる前世の俺たちのものであり、俺たちが誰の転生者であるかを識別するための記号でしかないのだ。」

海末の疑問に対して答えたのは志郎だった。

「志郎くん今『俺たちが誰の転生者であるかを識別するため』って言うってたけど他にもその転生者って人たちがいるって事にゃ？」

「それは・・・。」

「その通りだぜ凜、転生者は俺たち以外にもこの日本全国に存在している。現にこの町にも数人ほどいるし俺たちはそいつらと接触を果たしているんだ。」

志郎は凜の疑問に対して答えるのを躊躇ったが彼に代わって幸雄が疑問に答えた。

「おい、いいのかそれ話して。協定違反とかにはならんのか?」

「あ?別に俺たちは互いに他の転生者たちの正体を明かすのを禁じてはいるが、他にも転生者が存在することを明かすのまでは禁じちゃいねえんだよ。」

「協定違反っていうと何かしらの集まりがあるよね。」

絵里は志郎たちの会話から転生者が何らかのグループを組んでいる事を推測する。

「ああ、こればかりは詳しくは言えねえが俺たち転生者だけが集う集まりがあるのよ。集まりとはいっても特にこれといった決まりは無いしリーダーもない、ただ単にどこかの誰がこの時代にいるかを互いに把握してるだけの実体のないものだけだな。」

幸雄は転生者だけが集まるサイト『転生者の夢幻郷』についてをその名前を出すことなく海未たちに教えた。

「さつきからずつと話に出てきてる転生者って一体何なのよ。もう少しそれについて教えてくれないんじゃない?」

ここにきて『転生者』という存在がどのような存在であるかについて疑問を抱いたのは真姫であった。

「確かに『昔の時代に生きていた人がそのまま今の時代に生まれ変わった』という事と『何かしらの集まりを組んでいて互いにその正体を把握している』っていう事以外ほとんど謎ですからね。そここのところを含めて転生者についていろいろ教えてもらえると

幸いなのですが……。」

「どうする幸雄?」

志郎は幸雄に、海未たちに転生者についてどこまで話すべきかの判断を仰いだ。

「俺たちの事をこれからバラすんだ。この際話せるだけの事を話しちまうのも悪くはねえだろうな。」

幸雄は転生者についての情報を、知っている分だけ話すことを決意し、

「転生者について話す前に1つだけ約束してもらいたい。ここで聞いた話は誰にも漏らさないで欲しい。これを守ってくれるのであればここから先の話が続けよう。」

と志郎は海未たちに釘を刺した。

「分かりました。ですが穂乃果たちはどうするんですか?」

「穂乃果たちに対してはあとで俺たちの口から直接話す。それでいいな?」

「はい。」

海未が志郎の言葉に頷くと、幸雄に話を続けるように目配せをした。

「俺たちは自分たちのように過去の時代での生涯を終えてこの時代に生まれ変わった人間を『転生者』と呼んでいる。いつ誰が初めて転生を成し遂げたのかは分かって無いし、そもそも転生者については未だに謎だらけだ。」

「だが、そんな状況ではあるが転生者が複数人存在していることが把握できている現在では転生者について少しずつだが分かった事も出て来つつある。今からそれをリストアップしてやる。」

幸雄はそう言うのとチョークを手に取り、黒板にその内容を書き始めた。

転生者の特徴

- ・ 生前の記憶は全て覚えている上に、自我もそのまま引き継いでる。
- ・ だから生前持っていた技能や特技はそのまま使える。
- ・ 生前が如何なる人物だったかで個人の資質が変わってくる。
- ・ 戦闘能力は本人の鍛錬次第だが、少なくとも一般人よりは戦闘力がある。(個人差あり)
- ・ 一般人とはほとんど違いを持たないが、気配で見分けることができるらしい。

「・・・まあリストアップできるのはこんな所かねえ。」

幸雄はチョークを置いてふうと息をつきながら呟いた。

「つまり志郎くんたち転生者は『見た目は子供、頭脳は大人』をそのまんま経験してるって事でええんかな？」

「黒板に書かれた転生者の特徴を見た希は体が縮んだ某高校生探偵と似た様なものな
のかもかもしれないという結論を出した。」

「んんんんん。まあ間違つてないが色んな方面からお叱りを受けそうな例え方だな。」

希の言葉を聞いた志郎は思わず苦笑いしてしまった。

「あの、1つ気になった事があるんですが聞いてもいいですか?」

今度は花陽が何か気になる事があるのかおずおずと手を上げた。

「おう、どうした花陽。」

「あの、3つ目と4つ目に出てくる資質とか戦闘能力って一体何でしょうか?」

「確かにそこは非常に気になりますね。まるであなた達が戦いに携わっていたかのよう
に感じられるんですが……。」

花陽に続いて海未も疑問を志郎たちに向けて述べた。

「おっと、それに関しちゃ1つリストアップするのを忘れた項目があったな。」

「英雄はそう言うともう1つ黒板に転生者の特徴を書き足した。そこに記されていた
のは——」

・転生者の前世は基本的におよそ4000〜5000年前の人物に限られている。

——というものであった。

「400年から500年前ですって？いつの時代よ？」

「だいたい1500〜1600年頃ですから戦国時代になりますね・・・。」

「つまり志郎と幸雄は戦国時代の人がこの時代に生まれ変わったってこと!？」

「その通り！俺たちは秩序なき日本の戦国乱世を駆け抜けた群雄の一人なのさ!!」

絵里の言葉に対し、幸雄は自信満々な様子で答えた。

「転生者はどういう理由かは分からないが現在戦国時代と称されている時代に生きた武将たちがそのほとんどを占めているんだ。」

「じゃあ、志郎くんと幸雄くんも昔は戦国武将だったって事にや!？」

凜が戸惑いながら志郎にそうたずねると、志郎は無言でそう頷いた。

「なるほどね、だったら書かれてる特徴の中に戦闘能力とかいう文字が見えてもおかしくないわね。」

「その通り、俺たちの資質は前世によって大きく左右されている。例えば策謀に長けた者がこの時代に転生すれば頭の回転に優れた人物になる可能性が高く、武勇に長けた者であれば優れた運動神経を持つ人物になる可能性が高くなるというわけだ。」

「とはいっても俺たち転生者にもいろいろ個性があるからな。中には今さつき志郎が触れたもの以外の才能を持つ奴だっていることもある。あと例外的にそこまで武勇に長

けてない癖にこの時代に生まれ変わってから鍛錬しまくって志郎と互角の戦闘力を手に入れた野郎がいるのも確かな話さ。」

志郎と幸雄は3つ目と4つ目にある転生者の資質と戦闘能力について、政康の話を例に挙げて説明した。

「つまり志郎の身体能力が優れているのも、志郎の前世が武勇に長けた武将であったから、という事になるのでしょうか？」

「まあそうなるな。だがあくまでも志郎の身体能力が優れているのはこいつがこの時代で積んだ鍛錬と、『諏訪部志郎』という人間として生まれ持った肉体があるからこそだつていうのを忘れてやるなよ？」

幸雄が海末に説明した通り、志郎が高校生男子としてはあまりにも飛びぬけている身体能力を持つているのは転生者としての資質だけでなく、彼が生まれ持った肉体と、この時代で積んだ鍛錬の結晶である事は事実であった。幸雄はこの時代で彼と合流してからまだ半年程度しか経っていないにもかかわらずそれを見抜いていた。

「じゃあゆつきーくんはどんな特技を持つてるん？」

希が幸雄にたずねると、

「俺が備えてる資質といえば知略と、ありとあらゆるものを見通すこの炯眼くらいかね。」

と幸雄は左手で自分の頭を指差し、さらに右手の親指と人差し指で丸を作つて右目の前に掲げて自分の持つ資質をアピールした。

「確かに幸雄は結構頭の回転が早いものね。やっぱり前世でも相当な策士だったのかしら。」

「自分で言うのもアレだがそんな風に考えてくれれば十分よ。」

絵里の言葉に幸雄は満更でもなさそうなドヤ顔をしていた。

「さて、ここままで長々と前置きの説明をしてきたところはいよいよお前らが待ち望んでいたショータイムの始まりだ！」

「遂に俺たちの前世での名、つまり正体を明かす時が来たと言うわけだな。」

『!!』

幸雄と志郎の言葉に海未たちは息を呑む。

「正体をバラすと言つてもそれで何かが大きく変わるわけじゃないからそこまで緊張しなくても大丈夫だぞぞ？」

志郎は緊張した面持ちの海未たちに対してそう言うものの、

「確かに大きな変化はないかもしれないけど、それでもやっぱりここまで話を聞いたら色々緊張しちゃうのよね。」

「絵里ちゃんの言う通りだにや。」

「一緒に過ごしてきた仲間が実は教科書に出てくるような歴史上の人物本人だったなんて面白いやつたらびつくりするよね……。」

絵里と凜と花陽は志郎たちが転生者だったという事実はまだ慣れていない様子であった。

「いきなり慣れろって言うこと自体無理があんのよ。」

「そう言えば真姫は幸雄から先に話を聞いてんのよね。2人の正体はどんな奴なのよ？」

「どうって言われても……、さつき幸雄が他人を介して正体明かすのはナシって言うてたじゃない。」

「うっ……。」

「でもそうね……。幸雄に関しては歴史に詳しくないからよく分かんないってところかしら。志郎の正体は本人から聞いてのお楽しみですって。」

幸雄から先に正体を明かされていたという事で真姫はこれから志郎たちの正体がどんな人物であったかをたずねたが、曖昧な表現でごまかした。

「じゃあ、皆さんそろそろ雑談はストップしてくれ。これから俺たちの真名開帳タイムが始まるんだからな。」

幸雄は手を叩いてこの場にいたメンバーの注目を集める。

「これから明かすのは、俺たちが天命を果たしその命を全うした身でありながらこの時代に新たな命、新たな身体、そして新たな名を与えられ転生してなおこの魂に刻まれた名である。」

志郎が正体を明かす前の前置きを厳かに語ると、海未たちは当然のことながら、幸雄でさえも居住まいを正して傾聴していた。

「そしてそれこそが、諏訪部志郎という男がこの学校において廃校問題に真正面から向き合い、そして、そのサポートに尽力した理由の答えでもある。故に、心して聞いてほしい……。」

（何ですかこの厳かな気配は……!?まさか志郎はこれを17年間誰にも見せずに生きて来たというのですか……!?!）

（これが志郎くんの本来の姿ってわけやね……。）

（ハラシヨー、なんて厳かなの……。）

（志郎くんが話してるのをただ聞いてるだけなのに緊張するにや……!）

(さっきの幸雄の豹変っぷりもそうだけど、志郎の威圧感もとんでもないわね……。)
(ビビってんじゃないわよにこ……。！いくら元戦国武将つつつても相手は私より1つ年
下なのよ……。！)

(ピャアア……。！ちよつと怖いかも……。)

志郎から放たれる敵かな雰囲気を前に海未たちは額に冷や汗を浮かばせ、息を呑んだ。

「我が魂に刻まれた名は真田安房守昌幸！武田信玄公・勝頼公二代に仕えた武田二十四将が一将にして、信州真田家の当主である!!」

「我が魂に刻まれた名は勝頼……。甲斐源氏を祖とした甲斐武田家20代にして最後の当主にして諏訪大社大祝の血を受け継ぎし武田信玄が四男！武田四郎勝頼である!!」

遂にここに、2人の若き虎の真の名が明かされた。

52話 武田勝頼（すわべしろう）の想い

「武田勝頼と真田昌幸……。それが志郎と幸雄の正体なのですね。」

「ああ。」

「そーいうこつたな。」

海末が志郎と幸雄に確認するようにたずねると2人は迷う事なく頷いた。

『……』

保健室が重苦しい空気に満ちて沈黙した。今まで苦難を共にしてきた仲間たちが普通の人間ではない上に、過去の時代に生きた人間であると明かされては、流石のμ sのメンバーもどのような反応をとればいいのか当然分るはずないのだから。

「ねえ、少し聞いてもいいかな？」

「どうした凜？！」

「質問か？何でも聞いてくれや。」

沈黙を破ったのは凜だった。何か聞きたいことがあるそうで、志郎と幸雄が彼女に自分たちに向ける質問を問うように促すと凜はこう言った。

「武田勝頼と真田昌幸って、誰？」

『ぐはっ!!!』

「ちよっ！志郎、幸雄?!大丈夫?!」

凧が志郎と幸雄に向けてそう言い放つてからの数秒にわたる沈黙の後、志郎と幸雄が突然吐血をするような素振りでもへたり込むのを見て絵里が2人に駆け寄った。

「い、いやゝゝゝ。予想の範囲内とはいえ、実際に言われるとなかなかシヨツクなものだなゝゝゝ。」

「ああ、そういうものは気にしないと置いていたが意外と堪えるなこれはゝゝゝ。」

志郎と幸雄は乾いた笑いを浮かべながら震え声でそう言った。

「え?どういう事?凧なんか悪いことしちゃったかにや?」

凧は2人の様子を見て慌てるも、

「いやいや、凧は悪くねえよ。」

「むしろこの場合悪いのは俺たちだ。俺たちの名が後世に広く伝わって無いのは俺たち

の生き様や功績がその程度に過ぎなかったのだからな……。」

志郎と幸雄は自嘲的に笑いながら凜を慰めた。

「武田勝頼の方は教科書に載ってるじゃない。」

「誰だっけ？」

「織田信長に長篠の戦いで敗れた人よ。この前の日本史の授業で習ったじゃない。」

「ぐほあツツ!!」

今度は志郎が悶え始めた。

「ヴェエ!?ど、どうしたっていうのよ!」

これには真姫もどういふことなのか分からず動揺を隠せないようだ。

「うん……。確かにそれは真実なのだが……。それを言われるとまるで俺が『長篠で信長に負けたザコキャラか中ボス』みたいな感じがして……。うっ。」

「ちよつと西木野さくん!志郎の事泣かすのやめなさいよ!!それ志郎にとつちや地雷ワードなんだからな!」

「そ、そんな事言われたってどうすりゃいいのよ!!」

と、少しの間志郎と幸雄と真姫による茶番のようなものが繰り広げられていた。

「武田勝頼については教科書に載ってるから何となくわかったけど、真田昌幸は知らな

いわね……。」

「確かに教科書にも名前載つたらんしね。」

「真田昌幸というのは大坂夏の陣で徳川家康の本陣に突撃したことで名を遺し、戦国最後の英雄と謳われる真田幸村の父親の名前ですね。」

『へえ〜。』

昌幸が何者なのか分からずに首を傾げていた絵里たちに海未が解説すると、彼女以外のメンバーが海未の博識ぶりに驚いていた。

「流石は海未つてところだが、そいつは少し違うな。」

「え!? そうなんですか?」

幸雄が脇から補足を入れると海未は上ずった声を上げた。

「そもそも『真田幸村』なんて男は実在しないのさ。幸村つーのは後世に書かれた講談で付けられた名前がそのまま広まったものでな。俺の次男の本当の名は信繁だ。信玄公の弟君である信繁公のような立派な武士ものふになるよう願って名付けたのよ。」

「初めて知りました……。」

「まあ、源次郎の本当の名はここ数年で研究が進んでようやく明らかになったからな。歴史に詳しいわけでもない奴が知らんのも無理ねえ話さ。」

訂正こそすれど怒りも嘲りもせず。そこには普段の幸雄からは感じられない大人つ

ぼさを、海未たちは感じていた。

「なんか、大人っぽいですね……。」

「そりゃそーよ。俺はただでさえ64年も生きて上にさらに17年も上乘せしてるんだから大人っぽいのは当然のことよ！」

「老成してる、とも言えるぞ。俺たちは中身の年齢だけならじいさんと呼ばれても仕方がない年齢なんだよな。」

それに対し幸雄はドヤ顔で、志郎は苦笑しながらそう言った。

「そう言えば、さつき志郎さんが言っていた『自分の名前こそが、sのサポートに携わる理由の答え』って一体どういう事なんでしょうか？」

花陽が何気なく問いかけたその言葉を受けて志郎と幸雄の表情が張り詰めた。

「そうね、確かにそれが一番気になるわね。」

絵里もその言葉に同意して頷く。

「さて志郎、ここからはお前の時間だ。包み隠さずあいつらに話してやれ。」

幸雄は志郎にそう言うのと、彼の肩をまるで背中を押すように優しく叩いた。

「ああ、そうだな。これを語らねば、俺がどうしてここで、sの為に力を振るうのか、それを説明することができないからな。」

志郎はそう言うのとベッドから降り立った。

「志郎……!」

「大丈夫だ海未、もう十分休んだ。」

心配そうに声を上げる海未に対して志郎は笑って彼女を制止する。

「さて、さつきも言ったが俺が μ s のサポートに尽力する理由は俺の名にある。だが、それは文字通りの意味ではなく、『武田勝頼という存在であつた』という所に理由がある事を示している。」

「それつてつまり、『武田勝頼』として送つた生涯に理由があるつて事なのかしら?」

「いかにも。寧ろその生涯こそが俺を突き動かす原動力であつたと言つても過言ではない。だが、お前たちは俺がどのような生涯を送つたのかを知らない。」

「ええ、そうね。だから私たちはあなたが『諏訪部志郎』として生まれ変わるまでに、どんな道を歩んできたのかを知りたいの。」

志郎と絵里、かつてぶつかり合つた2人が問答を繰り返す。

「ああ。俺はそれを教えるために今ここに立っている。なぜ元々この学校に縁もゆかりもないのに廃校問題に真剣に向き合つたのか、スクールアイドル『 μ s』のサポートに尽力したのか、そして今や崩壊寸前となつた μ s になぜそこまで執着心を抱くのか。その全ては俺の……、武田勝頼の生涯にあるのだ。」

『……』

「だからこそこの場で全てを話そう。武田勝頼が如何なる人間であつたか、どのような生涯を送つて来たのかを……。」

志郎は一呼吸おいてから嚴かに、海未たちにそう言い放つた。

——俺は天文15年、西暦にして1546年にこの世に生を享けた。

その一節の言葉を始まりの言葉として、志郎は『武田勝頼』として歩んだ自らの生涯を語り始めた。

父である信玄と母の諏訪御料人の婚儀が周りから望まれたものではなく、山本勘助の知恵を借り重臣たちを言いくるめてようやく認められたもので、父と母の間に愛があつたのかどうかは分らなかつたこと、そして幼いうちに母に先立たれたこと。

17歳で元服するも、兄たちとは違って武田家の通字である『信』の字ではなく、母の実家の諏訪家の通字である『頼』の字を与えられ、『諏訪勝頼』と名乗るように命じられたこと。

しかも実際に継いだのは母の実家である諏訪大社の大祝を務めた諏訪本家ではなく、かつて高遠を支配していた分家の高遠諏訪家であったこと。

諏訪においては武田の子だと眉を顰められ、また武田においても諏訪家の血を引くが故に武田を滅ぼすために生まれ変わった諏訪大明神の化身だという噂を立てられ、肩身の狭い身の上であったこと。

それでも武田のために戦うと誓い、初陣からずっと手柄を立てるために無茶と言える突撃を繰り返した。勝頼はいつか武田の先陣として戦うことを夢見ていたこと。

長兄の義信が信玄への謀反の罪で幽閉され、そして非業の死を迎えたことで勝頼自身が家督を継ぐように言われたこと。

父の元で『武田勝頼』として帝王学を学ぶも、父が急逝したこと。

そしてその場で勝頼が言い渡されたのは『お前は陣代であり当主にあらず。息子の信勝の元服と共に隠居せよ』という非情な宣告を受け、父からは最後まで武田の子として認めてもらえなかったことを実感させられたこと。

父の死後は自分が武田の当主であることを家中に認めてもらうために信長や家康を相手に果敢に戦いを挑み、勝利を挙げ続けたこと。

それでも勝頼を認めていたのは側近や、四名臣といった僅かな者しかいなかったこと。

それに焦りを感じ、長篠で信長と家康に決戦を挑み大敗を喫して多くの家臣を失ったこと。

それからは武田の立て直しに尽力し、北条との同盟を強化して新しく妻を娶ったこと、そして彼女と過ごした日々が短くも温かいものであったこと。

上杉の跡目争いに北条氏政からの要請で介入するも、財政難だったために上杉景勝からの金銭工作を受けて兵を退き、そのせいで北条との同盟が破れたこと。

関東で氏政と死闘を繰り広げ、北条家を追い詰める一方で徳川との戦いが徐々に不利になり、遂に遠江における重要拠点である高天神城を見殺しにするような形で失つてしまったこと。

そして度重なる戦いで領内が消耗し、それを理由に一門や譜代の家臣が次々と離反してそれを突かれる形で織田、徳川、北条の総攻撃を喰らい、滅亡したこと——

志郎は37年に及ぶ自らの生涯を、まるで寝物語を子供に聞かせる親のように海未たちに言い聞かせた。いつもは騒がしいにこや凜も、この時ばかりは静かに、そして真剣な表情で聞き入っていた。

彼の生涯を見て来た幸雄は途中までは沈黙を貫いていたが、最後の方には周りから見えなように肩を揺らして小さく嗚咽を漏らしていたのが志郎には見えた。もちろん、話を聞いていたμ、sのメンバーの大半も彼と同じように肩を震わせていたのも。

「——そして俺は桂が自ら喉に突き立てた短刀を用いて自害し、俺の『武田勝頼』としての生涯は終わりを告げたのだ。」

『……』

志郎は自らの自害の様子を語り話の幕を閉じた。保健室の中には重苦しい沈黙が広がっている。

それもそのはず、何せ語られたのは普通の人が戦国武将と言われて連想するような心が躍るような英雄譚でも、予測できない展開にハラハラさせられる権謀術数の渦巻く政争や謀略劇でもなく、37年にわたってただ1人の将が血と土地の呪縛に囚われ、父の影を追い続け、報われることのない人生をひた走ったまさに悲劇そのものといえるものだったのだから……。

「……花陽。なぜ泣く？」

志郎は肩を震わせ、嗚咽する花陽に問いかける。

志郎には彼女が涙を流す理由が分からなかった。彼からしてみれば、『自分は生まれ

ながらにして大名たる資格が無かったのにもかかわらず、運命のいたずらでお鉢が回つて来たから頑張つてみたものの、全てが裏目に出て全てを失つた。自分の生涯は最後まで周りに翻弄された茶番のようなものであつた」という形で語つただけだつた。簡単に言えば『あの頃の俺はバカだつた』と若者に話す老人のような心境だつたのだ。

だがそれなのに花陽は、話し終わる頃には涙を流していた。

「何故だ。何故涙を流す？ 分からない、俺はただの道化だ。武田と諏訪という2つの血の呪われた宿業に囚われ、甲斐という閉塞した土地からも出る事ができず、追いつくことのできない父の影を追い続けた挙句の果てに武田家を滅ぼした男だぞ？ そんな男の生涯に呆れ、嘲笑う場面こそあれど涙を流すような要素があるとは到底思えん。それなのに何故……。」

志郎は困惑していた。彼女たちにとっては全く縁もゆかりもない話で涙を流す感性が理解できなかった。理解できない故に志郎はどの様な言葉をかければいいのか、全く分からず、ただ問いかけることしかできなかった。

「なんでつて……。だって、辛いじゃないですか……。！ 志郎さん……。いいえ、勝頼さんは勝頼さんなりに一生懸命戦つて、一生懸命生きたのに、それなのに、その頑張りか認められなかつたどころかその終わりが信頼していた人に裏切られて、奥さんと息子

さんも亡くして、すべて失うなんてやりきれないじゃないですか！悔しいじゃないですか……。」

「花陽、お前……。」

花陽が涙を流しながら勝頼の生涯の果てに対する心情を吐き出すさまを見て志郎は言葉が出なかった。

「お前は心の底から武田勝頼という男の生涯とその末路に対して真摯に向き合い、その上で涙を流しているのか。縁もゆかりもない他人、しかも自分より遙かかこの時代に生きた男に対して……。」

「志郎、お前が自分を無能だときき下ろす気持ちは分からなくもねえ。実際のところ、お前さんは信玄公の負債を背負っていたという擁護できる点があるとしてもカバーしきれないくらいの大ポカをやらかしまった事もそれなりにある。」

幸雄は志郎の肩に手を置きながら諭すように語り掛ける。

「だがな、それでもお前さんは最期まで諦めることなく自分にできる事をこなして戦い抜いた。確かに武田崩れ（甲州征伐の別称）じゃ一門や譜代の者たちはほとんどお前さんから離れていったが、それでも弟である盛信どのや、側近だった釣閑齋どのや勝資どの、遠ざけられながらも馳せ参じた小宮山内膳どのや鬼神の如き武勇を見せた土屋惣蔵

といった最期まで勝頼さまに尽くした面々がいるのもまた事実。何故彼らが滅びの道を歩むあなたに最期まで付き従ったのか、お分かりか？」

「……。」

幸雄の問いに対し、勝頼は何も答えなかった。

「それは勝頼さまが、如何なる苦境に立とうとも諦めることなく真正面からそれに向き合つて戦い抜き、その姿に心を打たれたからだ。志郎、お前は自分に人望が無いと言つていたがそれは間違いだ。確かにお前さんには信玄公や穂乃果のような数多の人間を惹きつけるような絶対的なカリスマは無いが、それでもお前さんには見ている人の心を揺さぶるひたむきさがあつたんだ。」

「確かに、幸雄の言う通り志郎は何事にも真剣でした。」

「ええ、ほとんど交流の無かつた私に対しても真摯に向き合つてくれたしね。」

「あたしが志郎に協力するつて言つたのもあந்தの死に物狂いで踊る姿に魅せられたからだつてさつきも言つたでしょ。」

穂乃果やことり、そして幸雄と共に、s 結成当時から彼が彼女達の為に奔走する姿を見て来た海未や、やらなければならぬ事とやりたい事の板挟みに苦しんでいたころを彼女に対する敬意に満ちた志郎の温かい言葉に心を救われた絵里、そして真つ向から志郎とぶつかり合うことでその想いと覚悟、そして夢に対する執念の強さを知つたに

この、志郎の強く頼もしい姿を間近で見た3人が幸雄の言葉に頷いた。

「そして今も変わらねえお前さんの真つ直ぐな姿に心を打たれている奴が既にここに集まっている。勝頼さまの37年の生涯は決して無為なものじゃなかったんだ。だからもうちつと胸を張れ！お前は誰よりも強くて優しい男なんだからよ。」

幸雄はそう言つて志郎の胸を軽く小突いた。

「幸雄、みんな……。ありがとう。」

志郎は幸雄や海未たちに頭を下げた。

「なあに、礼には及ばねえさ。なあみんな？」

『ええ（うん）！』

志郎の礼に対し、幸雄たちは笑顔でそれに応える。

「花陽もありがとうな。お前のおかげで色々心が楽になった気がするよ。」

志郎はそう言つて花陽の頭を撫でる。その顔はまるで子を慈しむ父親のような安らかな表情をしていた。

「は、はい！えへへ……。」

花陽もまた志郎に頭を撫でられると照れ臭そうに、そしてどこか嬉しそうに微笑みを浮かべていた。

「みんなでいい雰囲気になるところ悪いんだけど、結局志郎が私たちをサポートす

るようになった理由が分からないままじゃない。」

『あ。』

「あつて・・・。私が言うのもなんだけどみんな忘れてたの？」

「真姫ちゃんだつて人の事言えないにや。」

「うるさいわね。」

話を本題に戻そうとした真姫に対して凜がツツコミを入れると真姫はバツが悪そうな顔をしていた。

「確かにそうやね。志郎くん・・・ううん、勝頼さんの一生に答えがあるつて言つても結局よく分からんじまいやつたし。」

希も真姫の言葉に同意すると他のメンバーたちもそれに同意するように頷く。

「だつてよ志郎。お前さんの口からはつきりと伝えるべきだぜ。」

「ああ。」

志郎は幸雄の言葉に応えると、呼吸を整える。

「俺がお前たちのサポートに尽力した理由は、この学校やお前たちに対して武田家や、かつての俺である武田勝頼の姿を重ねていたからなんだ。」

「私たちに勝頼さんの姿を、ですか？」

「ああ。とは言つても全員つてわけじゃなくてあくまでも一部の、俺がかつての自分と

似ていると感じたものを持つているメンバーに対して重ねていただけなんだがな。」

「それっていったい誰なんですか？」

「ここ、真姫、絵里、そして穂乃果の4人だ。」

海末の問いに対して志郎は、今までの出来事を思い返ししながら4人の名前を挙げた。

「私たちのどこの勝頼さんと似ているところを見出したの？」

「……まずここには、孤立したり行く先に道が見えなくなっても諦めることなく意地を貫く姿に、そして真姫には生まれついで的身分とそこから着いて来る義務とやりたい事の狭間で心のうちで葛藤している姿にかつての俺の一側面を見出したのだ。」

絵里が問いかけると志郎はまずにこと真姫について語った。志郎は、にこの諦めの悪さと意地を貫き続ける心の強さにかつての自分の心意気を、そして真姫が誰にも見せなかつた葛藤に自分の出自を呪つたかつての自分の姿を重ねていたと言う。

「絵里は次第に状況が悪化している中、誰にも頼る事ができずに1人で全てを背負おうとしていたその姿にかつての自分の生き様を見た。正直な話、あのままでは絵里が俺と似たような末路に向かつてしまうのではないかと思つて凄くひやひやしたものだ。」

志郎が絵里に見たものは生き様であつた。

武田勝頼はその出自故に心の底から信頼し、頼る事ができる者が少なかつた。故に彼もまた状況が次第に悪化していく中でも誰にも救いを求める事ができずにほとんど1

人で斜陽の武田家を支えざるを得なかった。

そんな経験を持つ志郎だからこそ絵里の孤軍奮闘する様に敬意を感じ、彼女の想いに真摯に向き合う事ができたのだった。

「志郎があの時私に話してくれたのは他でもないあなた自身の、勝頼さんだった頃の話だったのね。」

「ああ、そうなるな……。」

絵里の言葉に志郎は顔を赤くしながら頷く。

（今になって思い出してみると、あの時すごく恥ずかしい事してたよな……。）

「そう言えば志郎さん、真姫ちゃんの家で真姫ちゃんと似ていた人の話をしてたけどそれってもしかして……。」

花陽が絵里の言葉を聞いてかつて々 s に入る前に真姫の生徒手帳を彼女の家に届けた時に志郎が真姫に語った話を思い出すと、

「……。」

志郎はそれに対しても顔を赤くして頷いた。

「志郎くんはどうして顔を後ろに向けてるにや？」

「言ってやるな凜。人には誰しも自分の行いを悔いる時があるのさ。」

志郎が何故顔を赤くしてるのか分からない凜に対して幸雄は軽く笑いをこらえなが

ら論すようにそう言った。

「とにかく！話を戻すぞ。最後に穂乃果についてだが、あいつに関しては若い頃の…、長篠に敗れるまでの俺の姿を重ねていたのだ。」

志郎はなんとか話しの軌道を戻し、穂乃果について語り始めた。

「若かった頃の勝頼さんの姿を…ですか？」

「そうだ、あいつは若かった頃の俺に似ている。猪突猛進で、これと決めたことに対して止まることなく突き進もうとするところなんかが特にそうだった…。」

「確かに、勝頼さまの若い頃も穂乃果みたいにガンガン前に出まくってたからねえ…。
仮にも大名の息子が初陣の城攻めで先陣に立って敵将と一騎討ちした挙句にそいつを討ち取るなんてよっぽどだぜ？」

志郎の言葉に対して幸雄が補足を入れる。実際史実においても武田勝頼は若い頃に、無茶だと言える戦績を数多く上げている。

初陣の箕輪城攻めをはじめ、滝山城攻めでの師岡山城守との一騎討ち、小田原攻めの殿、蒲原城の力攻めなど、様々な記録が現在も残っている。

昔の志郎くんって結構アグレッシブだったんやね…。」

「初陣で敵将の首を上げるなんて凄まじいですね…。」

「ちなみにそれをやったのは数え年で18歳の頃だったな。」

『18歳で?!?』

志郎のアグレッシブすぎる戦績に希と海未が驚愕しているところにさらにその当時の年齢を教えたらメンバー全員が大声で驚いた。

「ほ、穂乃果ちゃんと同じくらい……。というかそれよりもアグレッシブだよお……。」
「今の志郎からは考えられないわね。」

「まあ、志郎の今の性格は長篠に敗れて色んな意味で成長したことの証のようなものだからなあ。」

幸雄は若干引き気味の真姫に対して志郎の性格についてフォローを入れた。

「とにかく、俺はあいつの性格に危うさを感じていた。いずれ俺と同じように大きな挫折を味わうのではないかな。」

「それに志郎とは違ってあいつは普段は底抜けに明るくてポジティブだけに、色々溜め込んだり追い詰められたりした時に来る反動がヤバイ……。と志郎は見越していたわけだ。」

「幸雄の言う通りだ。一学期のうちにはそれほど危ういと感じることはなかったが、学園祭に向けての練習を始める頃にそれが顕著になっていったのだ。」

「確かに、あの頃の穂乃果はなんて言うか何かに駆り立てられてるような感じがあった

わね。」

「学園祭で使う曲を決める時も志郎が反対してたのはそーゆーことだったってわけね？」

「ああ、そうだ。」

真姫とにこの言葉に志郎は頷く。

「それに今だから言えるがあの時はこちらが留学について悩んでたみたいなんだが穂乃果はそれに気づいてなかったようだから、それを気づかせようとしたんだが・・・。」

「流石にその場でそれを指摘すると全員に動揺がうつって悪影響を及ぼしかねんと思つて志郎を止めたんだが、まさかそれが裏目に出るとは思わなんだわな。俺としたことが判断を誤るとは衰えたもんだ。」

幸雄はその時の事を思い出しながらバツが悪そうな顔をしていた。

「幸雄の判断は間違つてはいなかった。あの時俺が穂乃果を無理やり諫めていたらそれこそ状況が悪化していたのかもしれないからな。」

「とにかく、志郎たちが私たちの為に水面下でいろいろ頑張つてくれたたつてのはよく分かつたわ。」

「ええ、そして志郎が私たちに協力してくれている理由も分かりました。」

にこと海末の言葉に他のメンバーたちも頷いている。

「であれば、海未たちも俺たちに協力してくれるのか!？」

志郎は食い気味に海未に問いかける。

「ええ、志郎が私たちの事をそこまで強く想ってくださっているのならそれに報いるのが私たちにできる事ですからね。私も喜んで協力させていただきます!」

海未は志郎の手を握って力強くそう言った。

「そう言えば幸雄が、sに協力してるのかまだ聞いてなかったわね。」

「俺か?俺は志郎の親友として、そして臣下として乗らない手は無いと思ったからさ。ま、それは建前で、sについてけば色々面白い事が体験できそうだと思ったただけなんだがね。」

真姫の問いかけに対して幸雄は笑いながら答える。

「そう。それはともかくとして私も協力するわ志郎。私が、sに入る道を示してくれた恩はきっちり返さなくちゃね。」

「え、聞いておきながらそれはともかくってちょっと悲しいぜ真姫。」

幸雄は自分の発言を軽く流されたことに対して猫なで声でツッコんだがそれもまたスルーされていた。

「もちろんうちも協力させてもらうで。絵里ちはどうする?」

海未と真姫に続いて協力を申し出た希は絵里に対してどうするかたずねるが、

「……。」

絵里は何か思いつめたような表情で口をつぐんでいた。

「……えりち?」

そんな絵里の様子を見て希は心配するように声を掛ける。

「……私は反対よ。」

『え?』

思いもよらない絵里の言葉にその場にいた彼女以外の8人が驚いた。

「悪いけど、私は今の志郎に協力することはできないわ。」

「なに……!?!」

「おいおいマジか……。」

μ s 復活のために奔走する志郎と幸雄の前に最も意外な伏兵、絢瀬絵里が立ち塞がる。果たして志郎たちはμ s の復活を成し遂げられるのだろうか——

53話 あなたの想いが知りたくて

「協力することができないって、どういうことだ・・・!?!」

志郎は突然の事態に困惑していた。

「言った通りよ。私は今の志郎には協力できない・・・それだけよ。」

絵里は、sに入る前のような冷たい声で志郎にそう言い下す。

「分からん・・・。いったいどういう事なんだ!?!絵里はこのままでいいって言うのか!?!」

「そうやでえりち。理由があるなら言ってくれた方がええよ。」

志郎は納得できない様子で絵里に詰め寄り、希はそんな志郎を片手で遮って制しつつ絵里を諭すように彼女に理由を話すように言った。

「理由・・・。そうね、希の言う通り理由も言わずに一方的に言うだけじゃズルいものね。」

絵里は希の言葉にも一理あるといった様子で軽くため息をつく。

「いや、さすがの俺さまも絵里が反対するとはこれっぽっちも思ってたからびつくりしちまつたぜ。んで、志郎に協力できない理由とやらを出来るだけ簡潔に教えてくれるとこつちとしてもありがたいんだよね。」

幸雄がいつもの調子に戻って絵里に問いかける。常にいくつもの手を考えて策を練

る幸雄でも、今回の絵里の行動は予想外だったようで、絵里に投げかけた問いには言葉通りの意味だけでなく、どうして絵里がその考えに至ったのかに対する純粹な興味もあつた。

「ええ、この際だから包み隠さず言わせてもらうわ。それは……。」

『……!』

絵里の言葉に志郎たちが息を呑む。果たして彼女の口から何が語られるのか、その場にはいた誰もがそれに関心を示していた。

「まず一つ目は、志郎が無茶をしすぎてることね。」

「うっ。」

「志郎の何事にも一生懸命なところはとても素敵なところだと思つて。でも穂乃果が一つの事に熱中しすぎて周りが見えなくなるように、志郎はその想いが強くなりすぎるあまりに無茶をしすぎるのが良くないと思つて。ただでさえ今日それで倒れてるんだから、これ以上何かをやらせたら取り返しのつかないことになる時が来ると私は考えてるの。」

絵里は何事にも熱心に取り組む志郎の情熱を、長所にもなるし短所にもなると分析してみせた。そしてそれがいざれ志郎を破滅させてしまうのではないかという危惧を志郎たちに伝えた。

「思った以上に志郎の分析が正確すぎて結構ビビるわ……。で、反論はあるかね志郎？」
絵里の分析に驚嘆した幸雄は志郎に冗談交じりに反論を促してみるも、

「ここまでではつきりの確に言われると反論のはの字もできないな……。」

と志郎自身はお手上げな様子であった。

「それでもう一つは、これがあなたの『本当にやりたいこと』なのか確証が持てないってところかしらね。」

「志郎くんの……。」

「本当にやりたいこと？」

「……。」

絵里の言葉の意図が読めないのか希と海未は首を傾げた。朝に志郎の本音を聞いた幸雄は何も言わず黙っていた。

「何言ってるのよ？ 本当にやりたい事じゃなかったら志郎があそこまで本気出すわけないじゃない。」

志郎と激闘を繰り広げたにこが絵里の言葉に反論する。仲間がいなくなっても再びスクールアイドルとして羽ばたく時を志して2年間彼女以外誰もいないアイドル研究部を守り抜いて来たにこの言葉の重みは尋常でないほどの重みを帯びていた。

「それともあんたは志郎の想いが嘘だって言いたいわけ？」

「そうじゃないわ、私は志郎を否定したいわけじゃないの。ただこれが本当に志郎が望んでやっていることなのか知りたいだけなの。」

詰め寄るにこに対して彼女の目を真つ直ぐ見据えながら絵里は毅然と語る。

「なるほど、そういう事だったのか。」

絵里の意図を知った志郎はそう短く呟くと、絵里の側に歩み寄った。絵里もまた志郎の方を向き、志郎と絵里は真正面から対峙する形で互いの目を見つめ合う。

そこには言い知れぬ威圧感があった。何が始まるというわけではないにしても、まるで合戦が始まる前の睨み合いのような、静かな緊張感が保健室に満ちていた。

「ねえ志郎、私が s に入る前に話していたことって覚えてるかしら？」

「え？ああ、覚えてはいるがなぜ今その話が出てくるんだ？」

志郎は絵里が突然、かつて様々な気持ちに押しつぶされそうになった彼女を慰め、その固く閉ざした心を解きほぐした時のことを話題にあげてきたことに戸惑った。

「あの時あなたは私に『やりたいと思うならやってみればいい』って言ってくれたわよね。何も成し遂げられなかった私に志郎は『もう独りで抱え込まなくていい』言ってくれた……。あなたはそうやって私の心を救ってくれたの。」

「絵里と志郎の間にそのような事があったのですね。」

「だがよお、それは俺たちへの協力を拒む理由としちやああまり筋が通っていないように

「見えるぜ?」

「ええ、確かに根拠としちや弱いかもしれないわね……。」

絵里は幸雄の言葉に対してそう言っただけで、

「でもだからこそ私は今の志郎に協力できないの!ここで志郎を止めなかつたら、いつの日か志郎が頑張りすぎて壊れちゃう時が来るかもしれないって思っちゃうから……だから私は敢えてこうやって志郎の前に立つの。」

と、幸雄と志郎に対して自分の想いを吐露した。

「私の心を救ってくれたから、『やりたいことをやればいい』って背中を押してくれたから……。そんなあなたが使命感に駆られて、誰かのために無茶をして壊れそうになるのを見るのは嫌なのよ!!」

「絵里……。」

志郎は彼女の言葉で、自分の在り方が誰かに不安を抱かせているという事実を改めて思い知らされた。Msに心置きなく活動してもらおうべくサポートするべきはずの自分がメンバーに不安を抱かせているという矛盾に志郎は思わず戸惑った。

「二つだけ聞かせて志郎。これは本当にあなたが心の底からやりたいと思っっていることなの?それとも『やらなくてははいけない事』だからやってるの?」

「……。」

絵里は1つの質問を志郎に突き付けた。志郎はその質問の重さを理解しているが故に言葉を発することができなかった。

「もし、これが志郎の本当にやりたい事だつて分かれれば私はあなたを止めないわ。でも、そうじゃなければ私はどんな手を使つてでもあなたを止めるわ。」

絵里は志郎の目を真つ直ぐ見据えて志郎に宣告した。

——参つたな、あの目は本気だ。答え方次第じゃ完全に絵里とは決裂してしまう。

この計画は穂乃果とことり以外の7人全員の協力が無ければ2人の説得という次の段階に進めない……。

志郎は思い悩んでいた。まさか自分が絵里の心を開くために彼女にはなつた言葉が何十倍もの重みを伴つて帰つて来るとは思いもしていなかつたからだ。

——これも因果応報か。自分が発する言葉の重み、発した言葉がどれだけ人に影響を与えるかを考えもせず、軽率に人を救つてしまったが故に、その救つた人と対峙せねばならぬとは……。運命というものは実に悪趣味なのだな。

志郎は心の中で自嘲する。人の心を救った果てに得たものが自分に立ちはだかる壁とはあまりにも皮肉な話だと彼は心の中で苦笑する。

——否。だからこそ答えねばならない、彼女に誠意を見せねばならない。俺はただ使命感に、武田勝頼としての贖罪に引きずられているのではなく、諏訪部志郎として抱く思いがあるのだと。

志郎は覚悟を決めた。その表情に、迷いは微塵もなかった。

「正直なところ、俺が穂乃果たちを……μ s をサポートしようと思ったのはあいつらやこの学校に武田家や俺の影を重ねて『俺たちと同じ末路を辿らせてはいけない』と言う使命感を抱いたからだというのは否定しない。」

『……』

志郎が自らの想いを語るのを、絵里たちは静かに聞いていた。

「ぶっちゃけてしまえば二学期に入って、学園祭の準備を進めてる間も……。いや、む

しろ今もその使命感は消えることなく俺の心の中に根付いてると言ってもいいだろうな。」

「……。」

絵里の表情が次第に険しくなっていく。志郎の使命感から来る無茶な行動を止めようとしている彼女の心中を想えばそうなるのも当然だと言える。

「おい志郎……！」

幸雄は諫めるように志郎に声を掛ける。志郎のため、そして μ sのために策を練っていた幸雄はここで絵里の協力を得られなければ計画が頓挫することになる事を十二分に理解していたので、絵里の心証を害するようなことは言うなと言外にほのめかしていた。

「こればかりはどうしても誤魔化すことはできん。俺が μ sと共に歩んできた道はその使命感が無ければ紡ぐことはできなかつたものであると同時に、これから先にお前たちと共に行く道を紡ぐためにも必要なものなんだ。」

「なるほど。志郎くんにとつてうちらと一緒に進んできた道と、志郎くんの心の底にある使命感は表裏一体で切り分けて考えられるものじゃないって事なんやね？」

希が確認するようにたずねると志郎は無言で頷く。

「そう、なら話は終わりね。志郎が『やらなくてはならない』って言う想いで行動してる

以上、私はあなたに協力することはできないわ。」

絵里は冷淡にそう言つて保健室から去ろうとした。だが――

「だが、今の俺は使命感に引きずられているわけじゃあない。」

志郎が静かに言い放つたその言葉に絵里はびたりと足を止める。

「確かにきつかけも、原動力も俺も使命感から来てるものだというのは事実だし、否定する気もない。俺にとってこの使命感は、*g*、*s*のサポーターとしての俺と言う存在を証明するアイデンティティと言えるようなものだからな。」

「それは結局あなたが使命感に縛られているという事になるんじゃないのかしら。」

志郎はそう問いかける絵里の言葉に対し、静かに首を横に振ると再び口を開いた。

「確かにそうかもしれないな。でも、俺はお前たちと共に歩んでいくことで使命感ではない想いを、前に進むための原動力を手に入れたんだ。」

「その原動力って言うのは何かしら。」

「それは・・・夢だ。」

『夢?』

志郎が出した言葉に、その場にいた幸雄以外の7人が首を傾げた。

「俺は武田勝頼として生きた37年と、諏訪部志郎として生きて来た17年、合わせて54年にわたる年月の中で俺は夢らしい夢を抱いたことが無いのだ。」

「夢を抱いたことが無い……ですって？」

「おいおい、じゃあお前さんの信玄公を超えるっていうアレは一体何だったってんだよ？」

志郎の言葉に絵里と幸雄が驚く。しかも勝頼だった頃の志郎を知っている幸雄はかつて彼が抱いていた父を超えるという志が夢ではないことを今になって初めて知り、大いに戸惑っていた。

「あれは夢ではない。俺は父上が遺した武田家を……父上を神格化しているお前たちをまとめるためには父上を凌駕するほどの実力を持つ大将になる必要があった。そんな使命感から俺は父超えを目指していたのだ。」

「そう、だったのか……。俺は勝頼さまのお心さえ見通せてなかったというわけか……。」
「そう言うな幸雄、かつてのお前は父上と比べるのではなくありのままの俺を見て俺に仕えてくれた数少ない男だ。それだけで俺は十分嬉しく思っている。」

理解していたと思っていた勝頼の心情が実は全く違っていたという事実に対して項垂れる幸雄を、志郎はかつて自分を色眼鏡で見ることなく真摯に仕えてくれたことを挙

げて彼を慰めた。

「志郎……いや、勝頼さま……。有り難きお言葉、かたじけのうございます。」

幸雄はそんな志郎に対して声を震わせながら、真田昌幸として志郎に礼を言った。

「さて、話を戻そうか。54年にわたって夢を抱いたことのない俺だったが、穂乃果たちと出会い、μ、sのサポーターとして共に歩んでいくにつれて少しずつ俺の胸にある思いが募っていったんだ。」

志郎は穂乃果たちと出会い、彼女たちのサポートを買って出てμ、sと共に歩んできた日々を思い出しながら、言葉を紡いでいく。

「ああ、初めはこれが俺の抱いた夢だという自覚はなかった。だが、俺はこの学校を廃校から救うという偉業を成し遂げ喜びに満ちたお前たちの顔を見て、自分の願望……夢を初めて自覚できた。」

「それで、お前さんの夢とは一体何なんだ?」

幸雄が志郎に問いかけると、志郎は一瞬口をつぐみ息を整える。そのわずかな沈黙の後に彼は幸雄や絵里たちを真つ直ぐに見据えるように目を見開き、告げた――

「俺の夢……。それはこれからお前たちμ、sと共に歩み、お前たちがμ、sとして何を成し遂げるのか、その果てには何があるのか……。お前たちの夢の行く末をこの

目で確かめ、そして『夢を成し遂げる』とはどういうことなのかを、この身を以て識しことだ。」

志郎の夢、それはμ、sの軌跡を見守る事。そしてそこから夢を成し遂げるとは如何なることなのかをその目で確かめることだった。

かつて志郎は音ノ木坂学院の廃校が撤回され、歓喜に沸く穂乃果たちを見て眩しいと感じた。それは彼が志半ばで倒れたことと、54年にわたる二つの人生の中で彼女たちが語るような『夢』を一度も抱いたことが無かった事から来る衝撃を表したものだだった。

そして、夢の1つを成し遂げた彼女たちの姿を目に焼き付けた志郎の胸中には新たな願望、夢の種が芽吹いていた。

——もつと穂乃果たちμ、sの歩みをこの目に刻みたい。あいつらが歩んだ道の果てには一体何が待っているのだろうか？それを俺は何としてでも確かめたい。夢とは、それを成し遂げた先には何があるのかを!!

こどりの留学発覚、それに伴う穂乃果のμ、s脱退からの活動休止、そして穂乃果との仲違いといった心に影を落とす出来事が連続していたことで志郎はその夢を忘れか

けていた。だが、父晴彦や政康の激励により志郎は自分自身がやるべき事、そして自分の胸に芽生えた夢を思い出し、それを成し遂げるために再び動き出したのだ。

「それが、志郎の『やりたいこと』なの?」

「ああ。お前たちという存在に依存しなければならぬ情けないものではあるが、これがつきとした俺の『やりたいこと』だ。」

志郎は照れ臭そうに笑いながら絵里に語った。

「人というのは自分の夢のために全力を注ぐのだろうか? だからこそ俺はお前達の為だけではなく、自分自身の夢を叶えるためにこの命、この魂を燃やすのだ。それこそ俺がお前たちと共に歩むために必要な事であり、そしてお前たちの夢を追う事ができるといふ喜びの発露でもあるんだ。」

「志郎……。」

「情けない夢だと笑われてもいい、傲慢な夢だと誹^{そし}られてもいい。だが俺はこんな所で54年の歳月をかけて生まれた夢を終わらせたくない。μ^μ s が空中分解……、そんな形で俺の初めての夢の幕を引きたくないんだ! そのためにも絵里の、みんなの協力が必要なんだ!! 頼む、力を貸してくれ……!」

志郎はそう叫ぶように言うと、救いを求め神に縋るかのように絵里の手を握った。
「えつちよつ、志郎!」

絵里は突然志郎に手を握られたことで顔を赤らめながら戸惑うも、軽く咳払いして気分を落ち着かせ、

「あなたにも夢があるのは分かったわ。でも、ことりは留学するって自分の意思で決めたのよ。それを覆すのはとても難しいし、不可能かもしれない。もし私が協力してもそうでなくってもあなたの夢はここで終わってしまうかもしれないのよ?それでもあなたは前に進み続けるって言うの?」

と、諭すように志郎に問いかけた。志郎はその絵里の言葉に対して一瞬沈黙するも、
「ああ、確かに μ sの復活はできないかもしれん。だがそれでも俺は穂乃果とこりの絆を再び繋ぎ止めたい。俺の夢がかなわずともあいつらが喧嘩別れにさえならなければそれでもいいと思ってる。それに元はと言えば俺がこうして動き出した本来の目的がそれだったのだが、幸雄に焚きつけられて μ s復活などという大言壮語を掲げてしまったのだから。」

と、笑顔を浮かべながらそう答えた。

絵里は志郎が笑顔で語った言葉を聞いて子抜けしたような表情をしていたが、志郎の言葉が終わると軽くため息をついた。

「はあ、分かったわ。そこまで言うなら協力するわ。」

絵里がそう言うのと、

「本当か!? ありがとう、ありがとう・・・!」

と志郎は泣きながら絵里の手を握って礼を言った。

「もう、泣かないでよ子どもじゃないんだから。」

絵里は苦笑いしながら志郎の背中をさすった。

——あの時とは正反対ね。あの時は泣きじやくる私を志郎が優しく抱きしめてくれたけど、まさかその逆をやる時が来るとはね。

絵里は志郎の背中をさすりながら、sに入る前の出来事を思い返していた。

「まったく志郎ってば涙もろすぎじゃない? あたしとの時だって泣いてたんだからねこいつ。」

「それだけ志郎くんの情が深いってことやん。」

「希の言う通りですね。」

それを見てにこそ希と海未が微笑ましそうに話していた。

「とにかく、協力するのはいいけどその代わり2つ私たちと約束してちょうだい。」

「ん？分かった、何でも言ってくれ。」

「まず今日みたいな無茶は絶対しないでちょうだい。そして何事もとまではいわないけど、1人で抱え込まないでみんなに相談して欲しいの。」

絵里は指を2つ立てて真剣な面持ちで志郎に約束の内容を伝えた。それを受けて志郎は少し戸惑ったような表情を見せたが、

「分かった。できるだけ守れるように努力しよう。」

と頷いた。

「ふう、何とか一件落着だな。それで海未、希、真姫。お前たちはどうするんだ？」

『え？！』

志郎と絵里の話も無事に終わり和やかな雰囲気になつたところに、いきなり幸雄に話を振られた海未と希と真姫は驚きの声を上げる。

「どうするって何がよ？」

「決まつてんだろ？志郎に協力するかどうかさ。この計画は穂乃果とことりを除いた7人全員の同意が無けりや次に進まねえんだ。今のところどうするか決めてねえのはお前ら3人だけだ。もちろん強制する気はねえし、するもしないもお前たちの自由さ。」

「もしうちらがしないって言つたらどうするん？」

「そりやもう手詰まりだろ・・・と言いたいところだがそんな時はそんな時でまた別の策を練

るさ。もっともことりの出立は明後日だから悠長にしてる暇はねえんだがな。」

希の問いに対して幸雄はケラケラと笑いながら答え、

「で、どうする?」

そして垂れ目の三白眼で3人を見つめて問いかけた。その表情にはさっきのおどけた様子は微塵もなく、その眼光には策士・真田昌幸を思い起こさせるような気迫に満ちていた。

「もちろん、うちは最初っから協力するつもりやったで。カードもそう告げとつたしな
!」

希はタロットカードを幸雄に見せながらいたずらっぽく笑顔で言った。彼女が幸雄に差し出したカードはさかさまに向けられた死神であった。逆位置の死神のカードを示す暗示には『新しいスタート』、『起死回生』といったものがある。

「へえ、さかさまの死神か……。縁起がいいねえ。海未はどうだ?」

幸雄はそのカードを見て不敵に笑い、海未に問いかける。

「穂乃果とことりがこうなってしまったのには私の責任もあります。結果がどうなるかは分かりませんが、あの二人の幼馴染みとして、そしてμ'sのメンバーとして、私も協力させてください!!」

海未はバラバラになってしまった幼馴染みの絆を取り戻すという意志を掲げて幸雄

に宣言した。

「残るは真姫だけだな。で、どうする？」

「私は……。」

真姫は一瞬言葉に詰まるが、

「私はことりの留学を止める事ができるとは思つてないわ。でも……、でも！もし本当に9人で、*us*としてまた歌つて踊る事ができる、そんな可能性があったらほんのちつぽけなものでもいい！私はそれに縋りたい!!」

と、自分の想いを赤裸々に幸雄にぶちまけ、

「だから、何をするかは知らないけど、成功させなきゃ許さないわよ！」

と2人に向けていつもの勝ち気な表情でそう言った。

「みんな……。本当にありがとう!!」

志郎は再び声を震わせて幸雄たちに頭を下げる。

「頭を上げてください志郎、私たちは仲間なんですから。」

「そうそう海未の言う通り！こういう時こそ仲間つてのは大切なのよ！まさに『人は城、人は石垣』つてな!!」

「ああ、そうだな。」

海未と幸雄の言葉に頷き、志郎は顔を上げた。

「よし!! 7人の協力が得られたって事でようやく次の段階に進めるな!」

「そう言えばこれから志郎くんたちは何をするのかにや?」

幸雄がガッツポーズをしているのをよそに、凜が首を傾げていた。

「おお、それについて話さなきゃだったな。」

凜の言葉を聞いて幸雄はハツとしたような顔でそう言うてから、彼女たちに計画の大まかな筋を教え始めた。

「次のターゲットは穂乃果だ。今奴はスクールアイドルを辞めて凡人に戻っておる。それをどうにかしてスクールアイドルへの道に引き戻す必要があるのだ。」

「それって結構難しいんじゃないかしら?」

絵里が幸雄の策に難色を示すも、

「ふふふ、それに関しては既に調略を進めておるから安心せい。」

幸雄は不敵な笑みを浮かべてそう答えた。何か対策があるようだ。

「そして、俺はそれと並行する形で穂乃果に謝りに行く。いや、行かねばならないのだ。

俺はあの日穂乃果に心無い言葉を浴びせ傷つけてしまった。それがこの状況を引き起こした元凶でもある……。」

志郎は穂乃果がスクールアイドルを辞めるといったあの日、それを止めようとして彼女を傷つけてしまったことを、そしてその時の穂乃果の涙に濡れた怒りの顔を思い出

し、それを悔やみながら言葉を紡ぐ。

「だからこそ俺は穂乃果に謝りたい!!この状況を生んだだけじゃなく、1人の人間として、彼女の心に傷を付けてしまったことを詫びて、償いたいのだ・・・!」

そう語る志郎のは拳は血がにじむほど強く握られていた。

「熱くなつてるところに水を差すのは申し訳ないが今日は止めてくれよ志郎。」

「何故だ!？」

文字通り水を差すように幸雄にたしなめられた志郎は納得いかない様子で幸雄に詰め寄る。

「お前さつき絵里と『無茶はしない』って約束したばっかりだろ。お前さつきまでぶつ倒れてたこと忘れたのか?それと時間的にも今からあいつんちに長話しに行くのは褒められたもんじゃないだろ。」

「うっ。」

幸雄の非の打ち所のない反論に志郎はぐうの音も出なかった。事実、時計は17時に差し掛かっており、そろそろ下校の時間が迫っていた。

「だから志郎、穂乃果に謝りに行くのは明日の夕方にしとけ。明日の放課後には俺の調略も実を結んでるだろうしな。」

「ここのりの方はどうするのですか?」

次に声をあげたのは海未だった。確かにこの一見の中心人物であることりをどうするかでこの後の μ sの成り行きが決まるのだから彼女をどうするかという意見があるのは当然のことだった。

「ことりは当日俺がどうにかする。」

『当日!?!』

幸雄の言葉を聞いた志郎以外のメンバーは驚きの声をあげた。

「当日って、ことりちゃんが出発する前ですよね!?!」

「それでどうやって説得すんのよ!?!」

「この俺を誰だと思っておる。戦国の世に名を残した有数の智将、真田安房守昌幸ご本人だぞ?ことりを説得するための手札などどうに揃っておるわい!」

幸雄は自分に詰め寄るにこや花陽、そして表情に焦りの色を浮かべているメンバーに對してまるで『大船に乗ったような気分で任せてくれ』と言わんばかりに堂々と大見得を切ってみせた。

「そんなわけでお前さんらは明後日のライブの準備を進めてくれ。」

「ちよつと!!明後日にはこたちがライブする予定だったんですけれど!?!」

本来ことりの出発の日に凜と花陽との3人でライブをする予定だったにこが納得いかないといった様子で幸雄に詰めかかった。

「そのライブを『μ s 復活ライブ』にするんだよ!!にこそそつちのほうがいいだろ!」
「ま、まあそうなんだけどね……。分かったわよ!でも、もしことりの説得が失敗したらわかってんでしようね?」

にこそが幸雄を睨みながらそう言うのと、

「その時の責任は俺と幸雄が全て負う。だから頼む。」

と言つて志郎が幸雄と共に頭を下げた。

「ふん、やるからにはしつかりしなさいよね。」

にこそは突き放すような態度でそう言ったが、言葉尻にはまるで2人を激励するような態度がこもっていた。

「さて、じゃあそんなわけで明日はお前ら7人はライブに向けて動いてくれ!」

『うん(ええ)!!』

海未たち7人は志郎の言葉に揃って頷いた。

「じゃあ本日は解散!志郎はさっさと帰つて明日のためにゆっくり休めよ!」

保健室からぞろぞろと志郎たちが出て行く中、幸雄はそう言つて志郎を見送ると、

「ああ海未!絵里!!少し話がある。」

と海未と絵里を引き留めた。

「まず海未なんだがお前さんにちよいと策を授けたいんだがいいか?」

「え、ええ。倫理にもとるようなものでなければ構いませんが……」

「なに、そんなもんじゃねえよ。策って言うのはな……」

幸雄は海未の言葉に苦笑いした後、彼女に耳打ちで何かを伝えた。

「本当にそれだけでいいんですか？」

幸雄の策を聞いた海未は訝し気に幸雄にたずねる。

「ああ、その後の事はお前さんに任せる。お前さんは穂乃果の幼馴染みだから適任だと思うんだが……」

「まあ、断る気はありませんよ。ただ聞いてみたかったです。」

「おう、じゃあな。頼んだぜ。」

「はい。」

幸雄と海未が何らかの密約を交わし、幸雄が彼女を見送ると、絵里の方を向いて彼女に語りかけた。

「さて……」

「私には何の用があるのかしら？」

「……お前さんに話がある。出来れば二人つきりでしたい話かな。」

幸雄のいつもより低い声色と垂れ目の三白眼から発せられる鋭い眼光に、絵里は自分の表情が自然と引き締まっていくのを感じた。

夕陽が差し込む廊下に、幸雄と絵里は静かにたたずむ。

54話 いばらの道

保健室での話し合いが終わった後、幸雄は絵里に話したい事があると言つて2人は学校の屋上に登つて来た。

「それで、話つて言うのは何かしら？」

屋上に着くなり絵里は幸雄に話の内容をたずねる。

「私、これから亜里沙を迎えに行かなきゃいけないのよ。だからできるだけ手短かに済ませて欲しいわ。」

絵里は風に吹かれて乱れた髪を片手で少し整えながら幸雄にそう言う。

「そうだな、呼び出した俺が言うのもなんだが面倒な話はすぐに終わらせたほうがいいわな。」

幸雄は絵里の言葉に対して口元をニヤリと綻ばせながら答える。だが、その目は微塵も笑つていなかった。絵里はそんな幸雄の目を見て何を言われるのか身構えていた。

「じゃあ早速本題と行こうか。絵里、お前……。」

「……。」

絵里は息を呑む。

「それは友達や仲間としてかな？それとも……」

「もう、ここまで言わせといてそんな事を聞くのは失礼よ。私は志郎の事を一人の異性として好きだと思ってるわよ。」

幸雄がにやけ顔でたずねるのをたしなめながら絵里は観念したように自分の想いを明かした。

「……」

「なによ、ここまで言わせといてなんでそんな渋い顔してんのよ。」

絵里は渋い表情をしている幸雄に対して納得いかないような様子でたずねた。

「……お前さんもしかして枯れ専って奴なのか？」

「はあ!？」

「よく考えてみろよ俺たちや確かに今は17歳の高校生だが魂は50歳を余裕で超えてるおっさんだぞ？そんな奴を好きになるなんてどう考えても枯れ専としか——」

「それ以上言うとうぶつわよ。」

「ハイ嘘ですすいませんでした。」

絵里が拳を握った瞬間幸雄は体を90度折り曲げてお辞儀をした。

「まあ冗談はともかくとして、本気なのか？確かに俺たちの感性は17歳のそれにほと

んど近づいてるが本質はおっさんだぞ？それでもいいのか？お前さんなら他にもきつといい相手がいるはずだろ。」

幸雄は彼女を心配するように言ったが、

「私はあなた達転生者の事とか関係なしで、諏訪部志郎って言う一人の男の子を好きになったの。その想いに迷いも後悔もしていないわ。そりゃああなた達が戦国武将の生まれ変わりだって知った時は驚いたけどね。」

と絵里は笑顔でそう言い返した。

「その口ぶりから察するに、志郎を好きになったのは1学期くらいってところかね。」

「ええ。あの時・・・、私がμ sに入る前にあの子たちの想いの強さに触れて、自分のやりたい事とやらなくちゃいけない事の板挟みになって、どうしたらいいのか分からなくて泣いてた時、私を慰めてくれたのが彼だったの。その時志郎は私に『もう独りで抱え込まなくて大丈夫』って言ってくれて、私を抱きしめてくれたの・・・。」

絵里は愛おしいような表情で、オープンキャンパス1週間前の、彼女がμ sに入る前の出来事を語った。

「その時の志郎の胸が温かくて、志郎の優しい言葉が嬉しくて・・・。最初はそれだけだったのにみんなと一緒に彼と過ごすうちにいつの間にか・・・。」

「なーるほど、何があつたかは知らんがとりあえずあの時に志郎に墮とされてたわけ

か……」

頬を赤く染めながら志郎に惚れた理由を語る絵里を見て、幸雄は苦笑いしながら呟いていたが、

「なら猶更解せねえな。そんならあの時志郎の協力を断ろうとする必要が無かったと思
うんだが？」

とさらにたずねた。

「その人の事を愛してるからと言って全てを肯定するというのは違うと思うわ。私は志郎の事が好きだからこそあの時志郎を諫めたの。志郎が使命感だけで動いてたら私は本当にあそこで志郎に協力しないつもりでいたわ。」

絵里は一転して真面目な表情で幸雄に先ほどの一連での自分の本心を語る。

「……お前さんの目を見る限り狂言とか一芝居打ってたってわけじゃないのはマジだったみたいだな。」

「そういう愛の形もあるって私は考えてるの。それにしても流石は幸雄ってところかしらね。炯眼だったかしら？ほんとあなたの人を見る目は凄いわね。心とか読めるんじゃないの？」

「まさか、俺は相手がどういう振る舞いに出るかとか、こうしたら相手はどういう感情を見せるかとかを仕草や表情で先読みしてるだけだからそう言う超能力染みたことはで

きんよ。ありていに言えばただ観察力に優れてるってだけの話だからな。」

幸雄は自分の目を指差しながらそう語った。

「へえ、そうだったのね。」

「話を戻すが、本当にいいののか？」

「だから私は志郎が転生者だって事は気にしてなんか——」

「馬鹿野郎そうじゃねえよ。分かってんだろ？お前さんの恋は報われない可能性の方が大きいって事くらい。」

絵里はその話のもういいでしょと言いたげな様子だったが、幸雄の言葉にハツとしたように目を見開き口をつぐんだ。

「・・・その感じだと分かってはいるみたいだな。志郎の目があいつに、高坂穂乃果の方に釘付けだって事はよ。」

幸雄は悲しげな表情で驚愕の事実を語る。その表情には絵里への憐憫と同情が見え隠れしていた。

「分かつてはいたわ。志郎にとつては穂乃果の方が付き合いも少しだけ長いし、何よりファーストライブの後に彼にどうして穂乃果たちに力を貸すのかを聞いた時に志郎はすごくいい表情であの子たちを評価してたし、何よりここ最近ずっと志郎は穂乃果のことをいつも気に掛けてたもの。分からないわけがないじゃない。」

絵里は自嘲するように笑いながら語った。

「ま、当の本人は自覚がないご様子だがね。」

「それは志郎が穂乃果にそう言う感情を抱いてないってこと？」

「さあどうだか？今はそうかもしれないがしばらく経って恋に目覚める可能性だってあるし、今のまんま終わる可能性もあるんだ。流石の俺にもどうなるか全く予想が付かん。」
幸雄はそう言って首を軽く横に振った。

「そう……。」

「まあそれにあいつの事だから穂乃果に恋愛意識持つてなかったとしても『スクールアイドルがアマチュアとはいえアイドルなんだから恋愛はまずいと思う』なーんて言われる可能性も高いと俺は思うね。」

「そうかしら……。」

「うん、そうだって。あいつ勝頼さまだった頃は女心が分かんなくて妻である桂林院さまを怒らせたたりして俺や側近の釣閑斎どのや勝資どのとかに愚痴ってたりしてたぐらいだし。」

「そ、そうなのね。」

「だからそういう意味でも志郎攻略は難易度高いと思うぞ。」

「……。」

幸雄による志郎の恋愛適性の低き講座を受けて絵里は黙りこくってしまった。

「諦めんのか？」

「・・・え？」

「お前は、志郎が穂乃果に気があるかもしれないとか乙女心も分からないニブちゃん野郎で攻略できない可能性の方が高いからってお前は志郎への恋心を諦めてしまうのか？」

「幸雄・・・？」

絵里は幸雄がどう考えても言いそうにないストレートな激励のようなセリフを言い出したことに戸惑いを感じた。

「お前らは廃校からこの学校を救うという奇跡を成し遂げたんだろ？ だったら好きになつた男をもつにすることだつて出来るはずだ。」

そう言つて幸雄は絵里の手を取り、その目を真つ直ぐ見据えた。

「1ついい事を教えてやろう。『望みを捨てぬ者にだけ道は開かれる』・・・わしの、真田昌幸だつた頃の母上がよう言つておつた。」

幸雄は絵里に昌幸だつた頃の口調で何度も聞き、口にしてきた言葉を教えた。

「父の一徳斎は若い頃から苦難に満ちた人生を歩んでおつてな、だが父上も母上も望みだけは捨てなかつた。望みを捨てなかつたからこそ信玄公に拾われ、父祖伝来の地である真田の里を取り戻すことができた。わしも勝頼さまが信長に追い詰められていく時

に同じことを言った事もある。結果はお察しだったかな。」

「望みを……。」

「そうだ。穂乃果は、*μ* *s* がなぜ奇跡を起こせたか……。それはお前たちが望みを捨てなかったからだ。お前はその奇跡の体現者の1人だ。どんな事があっても望みだけは捨ててはならん。たとえそれがいばらの道を歩むような恋路であつてもだ。」

幸雄はかつて新府城で、迫りくる織田軍への対抗策が浮かばず、そして次々と一族や家臣たちが離反していく現状を嘆く勝頼を励ました時のように絵里を激励した。

普段はちやらんぼらんとして、何をするにしてもどつちつかずで、高みの見物を決め込むような態度をとり、口を開けば皮肉や軽口が多く、『人を煽ることはできても本当の意味で人の心を動かせない』と自分を評していた幸雄であつたが、この時は彼の言葉が確かに絵里の心を強く励ましていた。

「望みを捨てぬ者だけに……。か。分かった、私頑張るわ。いつか志郎を振り向かせてみせる！」

絵里は清々しい笑顔を浮かべて幸雄に宣言した。

「もう一度聞くが、いつか志郎が本気で穂乃果に惚れる可能性もあるし、その時は穂乃果とは恋敵になるかもしれないがそれでも……。それでもその道を進むのか？」

幸雄はそんな絵里に対し、励ます前に投げかけた質問を繰り返す。

「ええ、それでも私は進むわ。それに私は穂乃果を敵だと思わない、むしろ同じ相手を好きになった同志にして好敵手としてあの子と向き合おうと思ってるからね。」

絵里は不敵に笑いながら右目をウインクさせてそう言った。

「ふう、その意気よ。」

幸雄も絵里の答えを聞いて満足げな笑みを浮かべた。

「ふう……。」

話が終わった後、絵里は亜里沙を迎えに行くために足早に屋上から去っていったが、幸雄はそのまま屋上に残っていた。

「しっかし、改めて思うが絵里は本当に勝頼さま……志郎にそっくりだねえ……。」
校門に向かって走っていく絵里を屋上から見下ろしながら幸雄は感慨深げに呟いた。

——絵里は志郎にそっくりだ。冷静に見えて実は誰よりも意地っ張りで熱くなり

やすく、基本的なスペックが高いからひけらかす事は無いがプライドもそれなりに高い。だけどその分壁にぶつかったり劣勢になるとドツボにはまりやすい……。

幸雄は今までの絵里と志郎の言動を振り返り、かつて志郎に伝えた『志郎は絵里と似ている』という言葉について分析していた。

「そして何より、一番そっくりなのは報われることのねえ道だと分かってもほんのわずかな可能性を信じてずずんと前に進むその度し難さなんだよなあ……。」

幸雄が2人に見出した最大の共通点は、そのひたむきさであり、それが報われないことが多い不運なところであった。実際に志郎は武田勝頼の生涯と末路はまさにそれを表してると言え、絵里の方はμ sに入るまでは生徒会長として廃校を阻止するために奮闘していたがあらゆる行動が自分の想いの裏目に出るといふ有様であったから彼の分析はあながち間違つてはいないと言える。

「とか言う割には絵里ちにはそつちに進むように煽つてたみたいやん?」

「うーん、確かにこの件に関しては絵里の背中を押したんだが……え?」

幸雄が恐る恐る後ろを向くとそこには希が立っていた。

「えーつと……。いつからそこに?」

「ん? 実はあの後教室に忘れ物取りに行つたんやけど、教室から出た後廊下の窓から

ゆつきーくんと絵里ちが屋上に行くのを見かけて後をつけてたんよ。」

希はいつものようにいたずらっぽい笑顔で幸雄の質問に答えた。

「……じゃああれか、聞くまでも無いが話は——」

「最初っから聞いてたよ。」

幸雄が念を押すようにたずねると希はいつものエセ関西弁ではなく普通の言葉遣いで返した。

「やっぱりか……。」

「ねえ、ゆつきーくんに1つ聞いてもいいかな？」

「なんだ？まあ隠しても無駄だろうから質問なら何でも答えるぜ。」

幸雄は半ば諦めたかのように投げやりな態度で言った。

「いつものゆつきーくんなら絵里ちを止めたはずなのに、なんで今回は絵里ちの背中を押したの？それが報われないことだってゆつきーくんは分かってたんでしょ？」

希は真剣な表情で幸雄にたずねた。その声には僅かばかりか怒りがこもってるような雰囲気を感じていた。

「質問に質問で返すようで悪いが希的には止めてもらいたかったのか？」

「そうじゃないけど、うちは絵里ちが悲しむところは見たくないから……。」

「俺が言うのもなんだがそれは傲慢なんじゃないかね。」

「え？」

「だつてさ、絵里が志郎の事を好きなのはあいつがやらなきゃいけないと感じてるわけでも誰かから強要されてるわけでもない、他でもないあいつ自身の心から生まれた感情だろう？ あいつの幸せの為と言ってそいつを抑えるのはどうなのよ。」

「それは……。」

幸雄が正論を持ち出して反論したため、希は何も言い返せなかった。

「まあそりゃ俺も止めることは考えはしたさ。このままいけばあいつはその想いで身を焦がすことになると思つたしな。でも絵里はそうなると思つても志郎への想いを諦めなかった。だからこそ俺はあいつの背中を押したのさ。」

幸雄は夕日に染まる空を見上げながら希に絵里の後押しをした真意を語つた。

「ま、ホントの所はあいつに対するけじめでもあるんだがね。」

「けじめ？」

「ほら、俺が生徒会に仮所属してた時にあいつとぶつかったり、色々キツイ事言つちまつたもんだからさ。その埋め合わせにはなるかと思つてな。」

幸雄はそう言つて照れ臭そうに笑つた。

「ゆつきーくん……。」

——ま、あとはこうした方が色々と面白いもんが見れそうだって考えもあつたわけだが今はそれ言える雰囲気じゃねえわな。

幸雄は希に真意を語る一方で、内心では申し訳なさそうに笑っていた。

「とにかく、俺はこの件に関しては絵里を応援する方向で行くからまあその辺はよろしくな。」

幸雄はそう言うどひらひらと手を振って屋上から去っていった。

「あ、あところの件は内密に頼むぜ。」

「う、うん。」

希はそんな幸雄をただ茫然と見送るだけだった。

「ゆつきーくんがどんな風に動くかは分かんないけど、絵里ちの想いが叶うといいなあ……。」

希は誰に聞かせるわけでもなく呟いた。すると、まるでその言葉に応えるかのように一陣の風が暗くなり始めてる空に向かって吹いて行った。

絵里の恋路がどのような道になり、どのような結末を辿るのかはまだ誰も知らない。

5 5 話 泡沫の夢

——あれ、ここはどこだろう？

穂乃果は気が付くと、森の中にいた。森とは言っても平坦なものではなく、地面に凹凸や斜面のある山道のようなものだった。彼女がしばらく歩くとどこからか喧騒が聞こえてくる。

——あつちに誰かいるのかな？

穂乃果はその声ができる方向へ歩き出す。声ができる方へ近づけば近づくほど声はどんどん大きくなっていく。そしてさらに歩くとその声はさらに大きく、喧騒が激しくなっていくのを感じ、穂乃果は足を速める。

「ここちの方から声が・・・きやつ!？」

穂乃果は森から抜けたが、そこは大人の男2人分ほどの高さの崖になっていたので足

を踏み外しそうになったが、そこまで大きく踏み外したわけではなかったので、崖から落ちずに済んだ。

うおおおおおお!!

「痛てて・・・ん?」

崖の下から声が聞こえるので穂乃果は崖の下を見下ろした。そこでは――

「この先に武田勝頼がいるぞー!!」

「逃がすなー!!」

狭い崖路に我先に進まんとする足軽や鎧武者の大軍と、

「ここはこの土屋惣藏昌恒が通さん!! 貴様らが進むのはこの先ではなく、黄泉路が似合
いだろうがな! はははははははは!!」

左手には崖に垂れている蔓を巻き付け、右手には刀を握り締めて迫りくる大軍に不敵

に笑いながら啖呵を切る男がいた。

「敵は一人だ！潰してしまえ!!」

『うおおおお!!』

啖呵に乗せられた大軍が男へと迫る。だがここは狭い崖路、大軍で動くにはあまりにも手狭であつたが故に、一列か二列になつて進むことしかできない。

だがそれが啖呵を切つた男、土屋昌恒の狙いだった。

「こんな所に大軍で攻めてくるとは織田軍も存外間抜けなものだな！それぞらア!!」

「ぎゃあー！」

「ぐあつ!!」

昌恒は刀を振るつて迫る敵を斬り、または崖下に蹴り落とす。彼に対抗しようもの、数百人で崖路を渡っている織田軍は身動きができず、どんどん後ろから前にいる兵たちが押されて昌恒の刃の錆になるか蹴り落とされることしかできなかった。

これぞ後世に云う『土屋昌恒の片手千人斬り』である。

「すいい．．．」

普通なら命のやり取りを知らない現代人ならこの光景から目を背けてしまう所だが、穂乃果は目を背けることも、瞬きすることもせず、その戦いを見守っていた。

昌恒の決死の奮闘には映画やドラマのアクションスターのような華麗さは全くなかった。だが、それでもそのがむしやりに刃を振るうその姿に彼女は心が惹かれるのを感じた。

——なんだろう、まるで誰かを見てるような気がする……。

穂乃果は既視感を感じるものの、それが誰のものであるかは思い出せなかった。

「はは、もう何人斬ったか全然分からん……。だがこれだけ斬れば、勝頼さまの時間稼ぎにはなったであろうな。兄上、もうすぐそちらへ行きます……。そして勝頼さま、お先に失礼いたします……！」

それから数分後、昌恒は衆寡敵せず討ち取られた。織田軍の兵たちはその勢いに乗って崖路を進んでいく。

——あの人は凄いな……。あんなの絶対勝てるはずがないのに、最後まで諦めず

に戦い抜くなんて……。スクールアイドルを辞めた私なんかと大違いだ。

穂乃果はその死にざまを見て心の中で眩く。その言葉には最後まで戦い抜いた昌恒に対する憧憬や、自分の夢を捨てた自分への皮肉が入り混じっていた。

「やっぱりこれって、この前から時々見てる夢の続きなんだろうな……。」
穂乃果はそう独り言ちて空を見上げた。

穂乃果はここ数日、不思議な夢を見るようになった。

始まりは学園祭の前日、雨降る夜に練習をしようとしていたところを志郎に見つかり無理やり家に帰され、家で眠りについた時のことだった。

穂乃果は野原に立っていた。野原といってもただの野原ではなく、人馬の足音や鉄砲の音が轟き、あちこちで刃がぶつかり合う音が鳴り響き、血煙がはじけ飛ぶ殺伐とした戦場であった。

そして彼女は、この戦場の夢である人物の名を耳にした――

穂乃果は翌日の朝、熱で朦朧とした状態で起き上がったが、夢の中で耳にした名前だけははっきりと覚えていた。その名は『武田勝頼』だった。

その日の後、学園祭で倒れた後やことりがメンバーの前で留学することを明かす前日の夜、そして志郎と喧嘩別れした後の夜……。そしてスクールアイドルを辞めてから特に何もすることなく過ぎて行った10日余りの無為な日々の間にも、この『武田勝頼』という人物が出てくる夢を見続けた。

「もしかしたらこの森のどこかに勝頼さんがいるのかな。」

穂乃果はそう呟き再び森の中を彷徨う。

「では姫様、但馬どの、おたっしやで……!」

しばらく彷徨っていると、今度は茂みの向こうから男の声が聞こえて来た。その声からは何か悲痛なものを穂乃果は感じ取った。

「うわっ!？」

穂乃果が声のした方へ行ってみると茂みから3人の兵士が飛び出してきた。穂乃果はびっくりして尻もちをついたが、3人の兵士はそんな穂乃果に目もくれず、その場から逃げ落ちるように走り去っていった。

「そっか、私のことは覚えてないんだった。」

穂乃果はそう言つて苦笑した後、立ち上がつて尻についた土を払い、茂みをかき分けた。

「本当によろしいのですな、桂さま。」

「はい。ここまでついて来てくれてありがとうございます、但馬。」

茂みを抜けた先にいたのは、穂乃果と近い年ごろの少女と『但馬』と呼ばれていた白髪混じりの武者であった。少女は着物は汚れ、心なしかやつれているように見えた。だがしかし彼女は顔立ちが整っているだけでなく、目つきも凛として瞳も吸い込まれそうになるほどに透き通っており、見た目以上に堂々としているように見えた。

——あの子、きっと海未ちゃんみたいなしつかり者なんだろうな……。

穂乃果は少女を見て幼馴染みのうちの一人の事を思い出していたが、少女がとつた行動を見て目を見張った。

「え!? 嘘、あの子が持つてるのって・・・!」

少女が手に持つていたのは一本の小刀であった。穂乃果はそれを見て彼女が何をするかを察し、

「だめだよ!! 死んじやだめ!!」

と叫んで止めようとするも、穂乃果の言葉が少女に届くことはなかった。そう、これは夢なのだから――。

「勝頼さま、どこにおられますか? 私はもう自害いたします! どうかお急ぎください、私は三途の川のほとりであなただ様をお待ちしております!!」

少女は布をかぶった頭を上げてどこかで戦っている勝頼に向かって語り掛けるように声をあげた。

「では勝頼さま、お先に失礼します。子はなせませんでした、あなた様の妻になれてとても幸せでした。」

少女はそう呟くと目を静かに閉じて自らの喉に小刀の刃を突き立て、そのまま前のめ

りに倒れ込みそのまま静かに息絶えた。

「姫さま、それがしもお供させていただきますぞ……！共にお屋形さまをお迎えするために！！」

少女の側にいた白髪混じりの武者もまた小刀を自らの腹に突き立てて彼女の亡骸に縋りつくように倒れた。

「私たちと同じ年くらいの子なのに……。どうして……。」

穂乃果が悲痛な表情で少女たちの死を悼んでいると、

「桂！桂っ！！どこにいるのだ！！」

と、男の声が聞こえて来た。

「あつ、勝頼さん……。」

茂みから出てきた男の顔を見た瞬間に勝頼の名を呟いた。穂乃果はここ数日間見続けた夢の中で武田勝頼の顔を幾度にわたって見て来たので、すぐに分かった。だが、今この場にいる彼は今までの夢で見て来たような勇壮なものではなく、頬は痩せこけて身にまとった甲冑もボロボロと、まさに『みすぼらしい』という言葉がしつくりと来るような姿であった。

「桂……」

勝頼は倒れている妻の亡骸を見ると右手に持っていた刀を放り捨てておぼつかない足取りで彼女の元へ歩み寄った。そして彼女の側に座り込むと、その亡骸を優しく抱き上げた。すると少女が被っていた衣が落ちて顔が露わになった。

少女の死に顔は、悲惨な最期を迎えたものとは思えないほどに安らかなものであった。

「綺麗……」

穂乃果はその死に顔を見て驚嘆し、

「桂……、済まぬ。わしのような不出来な男に嫁いだことでこのような最期を迎えることになるとはな……。本当に済まぬ……！」

勝頼は妻の死に顔を見ると泣き始めた。涙を流しながら自分を責め、泣きじやくりながら自分に嫁いだけばかりに悲惨な最期を迎えた妻に謝っていた。

「だが、わしはお前を一人にはせん。せめて三途の川の渡しは共に手を取って渡ろうではないか。」

勝頼はそう言つて涙を拭くと少女の喉から短刀をそつと抜き取り、彼女が被っていた衣の端で彼女の地を拭った。

「父上……、私が不甲斐ないばかりに武田は滅びてしまいました。どうか、あの世で私

を叱ってくださいれ……。」

勝頼は鎧と着物を脱いで上半身を曝け出し、短刀の刃を自分の腹に向けると同時に、あの世にいる父、武田信玄に自分の不甲斐なさを詫びた。

「もし生まれ変わるのであれば、次は血や家といったしがらみのない時代に生まれたいものだな。」

勝頼は寂しげにそう言い放つと、自分の腹に刃を突き立てた。そして次の瞬間、彼の側にいた家臣と思われる武者が勝頼の首に刀を振り下ろした。

「……っ!!」

穂乃果は思わず目を背けた。

「……。」

しばらくして目を開いて勝頼がいた方に目を向けると、そこには死体が転がっているだけの静かな森が穂乃果の目に映っていた。

「こんなの、ひどすぎるよ……。」

あまりにも残酷で悲しい光景を見せつけられた穂乃果は誰に言うわけでもなく、その理不尽な出来事を責める言葉を吐いた。もちろんこれが夢であり、恨み言を言ってもどうにもならない事は穂乃果自身よく分かっていた。

だが、それでもそう言わずにはいられなかった。

「どうして、どうして私はこんな夢を……。」

穂乃果が空を見上げながらそう呟くと、

「それはお前の運命さだめにかかわりがあるからだ。」

何者かが背後から穂乃果に声を掛けた。

「誰っ!？」

穂乃果が驚いて後ろを向くと、彼女は目を？いた。

何故ならそこには先ほど自害したはずの武田勝頼が目の前に立っていたからだ。

「あなたは、勝頼さん……ですか？」

「如何にも。わしこそが武田家20代にして最後の当主、武田大膳大夫勝頼だ。」

「その勝頼さんがどうしてこんな所にいるんですか？あそこにいるのは……。」

穂乃果は状況が理解できず、勝頼に対してどういふことなのかをたずねた。

「お主は今日まで、わしが出てくる夢を数日にわたって見てきただろう？あれはわしの人生そのものよ。お主はわしが長篠に敗れてから天目山で自害するまでの人生をそのまま追っていたのだ。この時代で言う臨場感が半端じゃないドキユメンタリー映画のようなものだな。」

勝頼は分かりやすく穂乃果に質問の答えを教える。

「じゃあ、今ここにいるあなたは一体……。」

「わしか。わしは400と数十年前に自害した武田勝頼の魂そのものだ。」

「魂つてことは……、幽霊なんですか!？」

「そうであつてそうでない、と言ふべきかな。このわしの魂はどういうわけかこの時代に残つているようだな。」

「……それで取り付く相手を探しているんですか?」

「いやいや、それはない。わしの魂は既にある存在となつてこの世に住み着いている故、誰かに憑くような真似はしない。」

恐る恐る話しかけてくる穂乃果に対して勝頼は宥めるように自分の事を語つた。

「じゃあなんで私の夢にいるんですか?それにどうして私にこんな夢を?」

「お主たちが寝ている時間帯は『丑三つ時』と言つてわしのような存在が跋扈しておるのだ。そしてこのわしの魂もお主の夢を利用してその中でこうして具現しているのだ。」

「つまり勝頼さんが私とこうやって話せるのは夢の中だけつて事?」

「そうなるな。」

「じゃあ、この夢は一体何なんですか?勝頼さんが見せているんだつたら、どうして私に見せるんですか?」

穂乃果は続けざまに勝頼に疑問をぶつける。

「この夢はわしが見せているわけではない。わしはあくまでもお主の魂に引き寄せられただけだ。」

「私の魂に？」

「さよう。魂とは似た性質を持つ魂と引き合うものなのだ。お主とわしはどこか似た部分があるのであろう、故にわしはここにいるのだ。」

「なるほど……。」

穂乃果はポカンとした表情で勝頼の言葉に頷いた。

「まあ難しい話はこの辺までにして……、さて今度はお主の番だ。」

「へ？」

突然話を振られた穂乃果は素っ頓狂な声を漏らす。

「お主の話よ。お主はわしの後半生を見た。であればお主も何か話をするのが道理であろう？」

「で、でも私自分の人生の話なんてできないよ。」

「ふむ……。であれば何でも構わん。お主の心に残っている話をわしに聞かせてくれ。」

「あ！それなら出来るよ!!私、春からスクールアイドルをやったんだけどね!——」

穂乃果は意気揚々と自分のスクールアイドルとしての活動の日々を勝頼に話し始め

た。勝頼もまた興味津々な様子で、時々質問を挟みながら穂乃果の話に耳を傾けた。

「——で、私たちは学校を廃校から救う事ができたんだ！でも……」
「でも、どうしたというのだ？」

顔を曇らせた穂乃果を見て勝頼は何があつたのかたずねる。

「うん、実はね……」

穂乃果は勝頼に廃校を阻止した後起きた出来事を話した。ことりが留学することを知って取り乱して彼女にあたるような発言をしてしまったこと、その後ことりが本当は穂乃果に相談したがついていたのにラブライブと学園祭のライブに夢中になってそれに気づかなかつたこと、それをきっかけに、sをやめると言った事、そしてそれを止めようとした志郎を痛罵したこと……。それら全てを包み隠さずに話した。

勝頼はそんな穂乃果の話を何も言わず、ただ無言で頷きながら聞いていた。

「——それでお主は今ではスクールアイドルをやっていないというわけか。」

「うん……」

穂乃果は顔を俯かせながら頷く。

「なるほど、事情はよく分かった。その上で一つ聞こう、何故お主は自分の夢を捨てた？お主はあれほどまでにラブライブとやらに出ることを夢見ていたではないか。」

「だって、もう廃校を阻止したからラブライブに出る必要は無くなっちゃったし、それに出れたはずのラブライブだって私のせいで出れなくなつて、ことりちゃんのことだって私が周りの事を見てなかったからこんなことになつて・・・。」

勝頼の問いかけに穂乃果はぽつりぽつりと言葉を絞り出して答える。

「だからもう私がスクールアイドルを理由も、意味もないんだもん。私がスクールアイドルをやらなければこんなこんな事にはならなかった！だから・・・!!」

「だって、誰かに迷惑をかけて、誰かを悲しませる夢なんて——」

「驕るな小娘!!!」

「うわっ!?!」

穂乃果の言葉を遮るように放たれた勝頼の咆哮に驚き、穂乃果は思わず尻もちをついてしまった。

「高坂穂乃果よ。お主は2つ大きな過ちを犯している。」

夢の中だから痛まないはずの尻をさする穂乃果に勝頼は指を2本立てて語り掛けた。
「過ち?」

「まず1つ、それは今起きている事態の原因をすべてお主自身が背負っているという事だ。」

「だってそれは……。」

「いいから話を聞け。」

反論しようとする穂乃果をたしなめた勝頼はそのまま語り始めた。

「今お主が直面している困難はお主だけが原因ではない。もちろん周りを見ずに突っ走っていたお主も悪いが、それを諫めなかつた他の仲間たちも、異常を察していながらも現状を維持することを選び事態を変えるべく動こうとしなかつた志郎と幸雄とかいう少年たちも、そして『後で後で』とお主に大事な事を伝えるのを先送りしていたお主の幼馴染みも悪い。お主ら11人がみんな揃って間違えて来たからこそ今の事態が起きていると言つても過言ではなからう。」

「私たち全員が……。」

穂乃果は勝頼の客観的かつ正確な指摘に反論することができなかつた。

「そして2つ目は、お主の夢はもうお主だけのものではないという事だ。」

「私の夢なのに私だけのものじゃないってどういう事なんですか?」

勝頼の言葉の意味が理解できなかった穂乃果は首を傾げながら勝頼にどういう意味があるのかをたずねた。

「お主が作り上げたμ、sというグループのメンバーはお主の『学校を救いたい』という想いに惹かれて集めて来たのであろう？そうして集まり共に歩むことで他のメンバーもお主と同じ夢を志すようになっていった……。」

「私と同じ夢を……。」

「確かに学校を救うという夢は果たされた。だがお主はそれ以外にも夢を抱いていたはずだ。『ラブライブに出たい』という夢をな。」

「……。」

「お主がスクールアイドルを辞めるというのはお主自身の自由でわしがどうこう言う道理はないが、それはお主と同じ夢を志した同胞を裏切ることになる……という事をお主は知るべきだとわしは思うておる。」

「私が進んを……。」

穂乃果の脳裏には屋上でスクールアイドルを辞めると言った時のメンバーの顔が鮮明に映っていた。

「μ、sのメンバーもそうであるが、もう一人忘れていたのではないか？」

「え？もう一人……？」

穂乃果は思わず首を傾げた。

「お主が、sというグループを作り上げた時からずとお主たちを傍らから支え続けた男だ。」

「・・・志郎くん？」

勝頼の言葉でようやく穂乃果の口から志郎の名が出てきた。

「でも、志郎くんは・・・。志郎くんはことりちゃんやんが留学に行つちやうのをその程度だつて言つたんだよ！志郎くんだつて・・・私にとつてことりちゃんやんが、友達が大事だつてこと分かつてなかつたもん!!!」

そして穂乃果はあの時の志郎とのやり取りを思い出し、怒りを露わにした。

「確かに、その志郎とやらがお主の幼馴染みを想う心を蔑ろにする物言いは褒められたものではないな。だが、志郎とやらはそれ以外に何か言つてはおらんだったか？何もお主の幼馴染みへの想いを愚弄しただけでは無かろう。よく思い返してみよ。」

憤る穂乃果に対して勝頼は、彼女を宥めつつ志郎と交わした最後のやり取りを思い返すように促した。

「志郎くんが他に言つてたこと？それは・・・。」

穂乃果は考え込んだ。あの時志郎がなんて言つていたか、穂乃果は懸命に思い返そうと埋もれつつある記憶の山を掘り返す。

——何か、何か大切な事を忘れているような気がする．．．！
 「うゝん．．．！何だっけ．．．」

穂乃果は唸る。あと少しという所で志郎が語っていた言葉が浮かばないのだ。そんな中、

——何故お主は自分の夢を捨てた？

勝頼が穂乃果に向けて投げかけた疑問が穂乃果の脳裏によぎった。

「あつ。」

その時、穂乃果はハッと目を見開いた。

——お前が自分だけの夢を自分で侮辱し捨てるのであれば勝手にすればいい。だが貴様はみんなの夢を侮辱したのだ!! あいつらがどんな想いを抱いてμ、sに入っただのか知らないわけではないだろう! 貴様として、このμ、sの為にどれだけの汗と涙を流してきた!! 貴様のさっきの言葉は、他の8人のメンバーの夢や願いを踏みにじり、彼女たちの心を裏切ったも同然なのだ!!

穂乃果は思い出した、志郎の怒りを。

——貴様は全てにおいて恵まれていた。天の時、地の利、そして人の和……！人が大業を成し遂げるために必要だとされている天地人の要素に恵まれ天運にも愛されていながら、貴様は夢を捨てると言ったのだぞ……！！

「そう言えばあの時の志郎くん、悲しそうな顔してた……。」
穂乃果は思い出した。怒りの言葉を自分に向ける志郎が泣きそうな顔をしていたことを。

「ようやく思い出したようだな。」

勝頼はやれやれといった表情で穂乃果に語り掛ける。その表情にはまるで子を慈しむ父親のような温かさがあった。

「私、ひどい事言っちゃった……。志郎くんもだけど、私も志郎くんにひどいこといっぱい言っちゃった……。！志郎くんには関係ないとか、謝ろうとしてくれてたのに付いて来ないでとか……。」

志郎の言葉を思い出した穂乃果は、その時自分が志郎に向けて言い放った言葉を思い出して泣き出してしまった。

「どうしよう勝頼さん……！私、ことりちゃんだけじゃなくて、志郎くんも傷つけちゃったよ……!!どうしたらいいの勝頼さん……！」

取り乱した穂乃果は勝頼に縋りついてどうすればいいのか教えを請いた。

「どうすればいいのか、それを決めるのはお主自身の役目だ。」

「そんな……。だって私バカだからそんなの分かんないよ！」

「案ずることはない。お主は傷つく辛さと人を傷つける辛さを知った。その2つを知ったお主であれば二度と同じ過ちは犯さないだろう。」

不安げな穂乃果に対して勝頼は優しく頭を撫でながら彼女を諭す。

「少しは自分に自信を持って。お主は今まで奇跡を起こしてきたのだろうか？ならば2人と仲直りをする事だってできる。己の心を信じ、夢を信じ、もう一度前に進むのだ！」

勝頼は穂乃果の肩を掴み、優しく喝を入れた。

「私の心と、夢を……。ありがとう勝頼さん、私ことりちゃんや志郎くんと仲直りできそうな気がしてきたよ！」

そう勝頼に言う穂乃果の顔は今まで通りの笑顔が咲いていた。

「うむ、それでよい。女子というのは笑顔であってこそだ。」

「なに!?!何の音!?!」

「どうやら刻限が来たようだな。」

穂乃果が周りをキョロキョロと見回す一方、勝頼は落ち着き払った様子で上を見上げながらそう言った。

「刻限?」

「その通り、今お主の生きている時間で朝が来ているのだ。」

「朝が来てるって事は……。」

「さよう、夢が覚める時が来たのだ。」

「そんな!私、まだ勝頼さんに聞きたい事とかあるのに!」

「さつきも言ったであろう。自分の過ちに気づき、悔いて、省みて、そしてもう一度立ち上がったお主であれば問題ないさ。」

勝頼との別れを惜しむ穂乃果に、勝頼は笑いながら励ましの言葉をおくと、彼女に背を向けて歩き出した。

「待つて勝頼さん!」

「なんだ、まだ不安か?」

穂乃果に呼び止められた勝頼が振り向く。

「最後に一つだけ教えて!どうして勝頼さんは私の夢に来て、背中を押してくれたの?」

穂乃果は勝頼に対して最後の疑問を投げかけた。

「わしがここに居るのは先ほども言った様に、わしの魂がお主の魂に引かれたからだ。そしてお主の背を押ししたのは……。お主のことが羨ましかったからだ。」

「私の事が羨ましい？」

穂乃果は勝頼から帰って来た意外な答えに目をぱちくりさせる。

「お主は恵まれておる。動くべき時、夢を追うために必要な土台、そして夢を共に追い支えてくれる仲間……。その全てにな。わしとは大違いよ。」

勝頼は自嘲するように笑いながら語り始めた。

「わしは父上の子でありながらかつての敵国の血を引いていた。武田では諏訪の子だと、諏訪でも武田の子だと眉を顰められた。運命の悪戯でわしが父上の跡継ぎになった後もそうであった。誰もわしを武田の……。父上の継承者だとは認めようとしなかった。」

勝頼の母親はかつて武田に敵対していた諏訪家の娘で、信玄が彼女を側室にするのを家臣たちは盛大に反対していた。だが、彼女との間に生まれた子を諏訪家の跡継ぎにすれば諏訪の民たちを懐柔できるだろうと言って家臣たちを納得させたのだ。

そうして生まれたのが勝頼だった。だが、勝頼は武田の家臣からも、諏訪の民からも白眼視されながら育ってきたという。そんな彼に偏見なく接していたのは長坂釣閑齋

や跡部勝資といった側近や従兄弟の武田信豊、年の近い真田昌幸、そして勝頼が諏訪と名乗つてゐる時代から彼を武田の姓と呼んでいた長兄、義信くらいであった。

「だからわしは初陣の頃からずつと無茶ばかりしてきた。戦があれば常に先陣に立ち、槍を振るい、兵を鼓舞して、前に前に突つ走つて来たのだ。お主と同じようにな。」

「私と、同じ……。」

「だが、わしはお主のような強さには恵まれなかった。重臣たちは何かあるごとくわしと父上と比べ、一門衆はわしが何か言えば何かしら理由をつけて言う事を聞いてもくれなかった。だからわしはさらに躍起になつて無茶を重ね、その結果がさつき見た通りだ……。」

「……。」

穂乃果は何も言う事ができなかつた。自分もライブを目指すことに固執するあまりにこどりの悩みに気づかず、さらには無理を重ねて学園祭のライブで倒れ、それが原因でライブを棄権する羽目になつたという、ここ最近の失敗が走馬灯のように彼女の脳裏をよぎつた。

「私も同じだよ勝頼さん、私も無茶ばかりして周りを見てなくつて……。それで全部台無しにして友達も傷つけて……。勝頼さんが羨ましがるといふようなもんじゃないよ。」

穂乃果は今までの出来事を振り返つて自虐するが、勝頼は首を横に振る。

「確かにそうかも知れないが、さつきも言った様にお主はわしに無いものをたくさん持っている。さつき言ったものもそうだがもう一つ、わしとは決定的に違うものをな。それはお主を見捨てない仲間だ。」

「私を見捨てない仲間？」

「そうだ。」

勝頼はゆつくり頷く。

「それはないよ。海未ちゃんも他のみんなもきつと私に愛想尽かしてるから……。」

「いや、それは違う。お主たちの仲間たちは皆心の中ではお主の事を案じておる。」

落ち込む穂乃果を慰めるように勝頼が語り掛ける。

「なんでそんな事が分かるの？勝頼さんが実際に見たわけじゃないのに……。」

「確かにこの目で見たわけではないが、それでも分かるものなのだ。本当に人に見捨てられる時は一気に周りから人が去っていくのではなく、少しずつ自分の周りからいなくなっていくものよ。家臣たちに見捨てられて滅んだわしが言うのだ、間違いあるまい。」

勝頼は笑いながら自分の経験則を語る。

「それにな、この世に残ってるわしの魂が告げておるのだ。お主のために周りを巻き込み、全てを懸けて奔走している男がいるとな……。」

「それって……！」

勝頼の言葉を聞いた穂乃果はハツとした顔で彼に言う。

「恐らくお主の言つていた志郎という男であろうな。お主はまだ見捨てられてない、まだ立ち上がる機会があるのだ！だから諦めるなよ。」

勝頼はそう言うのと、再び歩き出した。

「勝頼さん、ありがとう!!私もう迷わない!今度こそ立ち上がるから!!」

穂乃果はそう言つて勝頼に向けてちぎれんばかりに手を振つた。

「それでよい。それでこそ諏訪部志郎が認めた女だ。」

「負けるなよ。」

「えっ……?」

振り向いた勝頼の顔を見た穂乃果は驚きのあまり、一瞬周りの時間が止まったかのようを感じた。

「志郎くん……!?!」

勝頼の微笑む顔があまりにも志郎にそっくりだったのだ。顔立ちは志郎とは違つて

はいるものの、どこか寂しさと儚さをにじませた微笑み方が志郎と瓜二つだったのだ。もちろん志郎と勝頼は同一人物なので当然のことなのだが、志郎が勝頼の転生者であることを知らない穂乃果が驚くのは無理もない話であった。

「待って勝頼さん!!」

穂乃果は勝頼を追いかけた。

「待って……!待ってよ……!!」

穂乃果は必死に駆けたが、どれだけ速く走っても勝頼の背に手が届かない。そればかりかどんどん勝頼から引き離されていった。

「待って勝頼さん!!ううん、志郎くん!!!」

穂乃果はそう叫んで手を伸ばしたが――

「ん、んん……。あれ?」

目を覚ました穂乃果はゆっくりと体を起こして周りを見回した。穂乃果の目の前に

広がっていたのは夢の中で勝頼と話していた真つ白な空間ではなく、朝日が差し込む彼女の部屋であった。

「私、また変な夢見た・・・ん？」

穂乃果は腕を上げ、背筋を伸ばしながらそう呟くと顔に濡れた感触が事に気が付いた。

「これって・・・、涙？」

穂乃果は頬のあたりを触りながら鏡を見ると、彼女の両目からそれぞれ一筋ずつ涙が流れていることに気が付いた。

「・・・どうして私、泣いてるんだろ？」

鏡に映る自分を見ながら穂乃果は呟く。

夢とは醒めた後に内容を思い出そうとしても思い出せないものだという誰かが言っていた言葉を穂乃果は思い出した。

「どんな夢を見てたんだろ・・・。」

穂乃果は首を傾げながら涙を拭う。だが、涙を拭いても彼女の心に引つかかるように刺さっている疑問が晴れることはなかった。

穂乃果は分からないものは考えてもしようがないと自分の思考を一旦完結させ、部屋

を出す。そうして今日も穂乃果の一日がいつも通りに始まろうとしていた。

ことりが旅立つまで、あと1日

56話 比興者は肅々と動き出す

「結局、あの夢の最後で私は何を見たんだろう……。。」

その日の穂乃果はどこか上の空な様子だったという。穂乃果は朝から学校が終わるまでずっとどんな夢を見ていたのかを思い出すためだけにその思考を費やしていた。だが、それでも夢の最後で穂乃果自身が抱いた確信がどのようなものであったかまでは思い出す事ができずにいた。

「……。帰ろ。」

穂乃果は考えることを辞め、一つため息をつくと言いつつ鞆を持って教室から出て行った。

「穂乃果く！たまには一緒に帰らない？」

穂乃果が校門を出ようとした時、その声を掛けたのはヒデコだった。

「え？いいよ。」

「もう放課後空いてるんでしょ？」

「わわっ、ちよつと！」

穂乃果に対するヒデコの言葉をミカがたしなめると、

「いいじゃない。だって穂乃果は学校を守るために頑張ったんだよ？学校を守るために

アイドルを始めて、その目的を達成したからやめた……。何も気にする必要ないじゃない！ね？」

とヒデコはミカ達にそう言った。

「……そうだね。」

穂乃果はその言葉に少し申し訳なさそうに応えた。

「学校みんな、感謝してるんだよ。」

「うんうん！」

「μ'sを見てうちの学校知ったって人もたくさんいたみたいだし！」

「……ありがとう。」

穂乃果は励ましとねぎらいの言葉をかけてくれる友人たちに礼を言った。

「じゃあ行くー！」

「うん！」

そうして、ミカに手を引かれて穂乃果はヒデコ達と4人で秋葉原の町に繰り出すべく走っていった。

「……これでいいのか？もうことりが日本を発つまで時間があまり残されていないというのに。」

屋上から穂乃果たちのやり取りを見守っていた志郎は、傍らに立つ幸雄に対して訝し気にたずねる。その言葉尻には焦りが見え隠れしていた。

「ふふふ、案ずるには及ばんよ。全部俺の計画通り、全てが順調に進んでるぜ。」

幸雄はそんな志郎とは対照的に余裕綽々な様子であった。

「それに、志郎もそんな様子じゃあ話したい事も上手く話せねえし、ちゃんと謝れねえぞ？」

「……。」

普段のへらへらとした表情から一転して真剣な表情で紡ぎ出された幸雄の言葉に志郎は全く反論できなかった。

「まあ、今日は天気もいい事だし座禅でも組みながら待つてな。来るべき時が来たら俺が連絡してやるからよ。」

幸雄はそう言うのとひらひらと手を振って屋上から去って行った。

「幸雄の言う通りだな……。たまには足を止めることも大事かもしれないな。静かなるところの如し、動かざること山の如し……。動かずに待つのも一興か。」

志郎はそう独り言ちるとゆっくりと床に腰を下ろして足を組んで座禅を始めた。

「海未ちゃん、いらっしやい。遅かったね、練習？」

「はい……。」

穂乃果がヒデコたちと秋葉原で遊んでいて、志郎が学校の屋上で精神統一をしていたその頃、留学に向けた準備をしていることりの家に海未がやって来た。

ことりの部屋に入る海未の表情は浮かないものだった。

「……海未ちゃんも断ったの？」

ことりが切り出したのは、sが活動停止になった後もスクールアイドルを続けているにこの話だった。にこは花陽と凜以外のメンバーにも誘いをかけており、海未もまた例外ではなかった。

「はい。続けようとするにこの気持ちも分かりますし、できる事なら……。」

「じゃあ、どうして？」

にこの想いを汲みながらも誘いを断った海未に、ことりは何故そうしたのかを問いかける。それはまるで「どうして海未ちゃんまでやめちゃったの？」と問いかけているようだった。

「私がスクールアイドルを始めたのはことりと穂乃果が誘ってくれたからです。」
「ごめんなさい……。」

海未の答えにことりは俯きながら彼女に謝った。

「いえ、人のせいにしたいわけじゃないんです。穂乃果にはあんな事を言いましたけど、やめると言わせてしまったのは私の責任でもありません。」

「そんなことない!! あれは、私がちゃんと言わなかったから……!」

海未の言葉に対し、ことりは責任は自分にあると反論した。

「穂乃果とは?」

「……。」

海未はことりに穂乃果と留学する前に話をしたのかをたずねたがことりは無言だった。喧嘩別れしてから今の今まで一度も穂乃果と言葉を交わしていないのだからそれも無理もない事だった。

「明日には日本を発つんですよね?」

「……うん。」

ことりは俯きながら海未の問いに返事をする。

「ことり、本当に留学するのですか?」

「え……?」

予想だにしなかつた海未の言葉にことりは一瞬面食らつたような表情を見せた。

「私は……。」

「海未ちゃん……。」

「いえ、何でもありません！」

海未は口から出かかつた言葉を自分に言い聞かせるように否定し、飲み込んだ。

「無理だよ、今からなんてそんなこと……。」

「分かつています……。」

海未はことりに背を向けたまま彼女の言葉に答え、ことりの部屋から出て行つた。

「よお海未。」

海未がことりの家から出ると、ことりの家の扉に幸雄が寄り掛かつていた。

「幸雄……。いつからそこにいたのですか？」

「待つてたわけじゃないぜ。お前さんがことりの家から出てくる頃合いは大体予想が付いてるさ、なんせそう仕向けたのは俺なんだからな。」

「……」

海未は幸雄の言葉に眉をしかめる。

「そんな顔しなさんなよ。少しその公園で話でもしようや。」

幸雄は自分を睨む海未を宥め、公園へと誘った。

「で、どうだったよ。ことりとの話は。」

幸雄は自販機で買った缶ジュースを飲み干すと海未に話を切り出した。

「ええ、幸雄に言うように言われた言葉はちゃんと行ってきました。ことりも幸雄の言つてたように少し動揺してたと思います。」

幸雄の問いに海未は淡々と答えた。

「よし、これで明日の策に向けての布石は打ち終わったな。」

幸雄は海未の言葉を聞くと頬を綻ばせ、上機嫌にそう言う缶ジュースの缶をゴミ箱に向けて投げ捨てた。

「さ、あとは明日の決行を待つだけ——」

「本当に、これでよかったですか？」

「……」

まるで詰問するかのような海未の言葉に幸雄は言葉を止め、いつもとは打って変わって真剣な表情になっていた。

「ああ、これでいいのさ。お前さんはことりに『本当に留学するのか』とたずねた。んでそれを聞いたことりが少しでも動揺したって事は俺がお前さんに託した策は実ったと言つてもいい。これでよかつたと言わずしてなんて言うよ?」

幸雄はまたいつものようにやけ顔を浮かべて海未に語った。

今日海未がことりの家にやって来たのは幸雄の差し金だったのだ。そして幸雄はその策を海未に提案した時、もう一つだけ海未に策を託した。それは、

「『本当に留学をするのか?』」

と言つてきて欲しいというものであった。

「確かに、私もことりが本当に留学したいようには見えませんでしたし、本当にことりが留学を望んでいるのかたずねたかったのも事実です……。ですが、何故あなたは自分の口でことりに言わず、私に言わせたのですか!?!」

海未は初めのうちは言葉を絞り出すように言っていたが、次第に幸雄への苛立ちか怒

りか、次第に語気を荒げていった。

「幸雄……あなたはずるい人です。私たちをまるで盤上から見下ろすかのように詛知り顔で全てを俯瞰して、人を……いいえ、自分さえも駒のように動かして何かを為すあなたはずるい人です。」

海未は幸雄の目を真つ直ぐ見据えながら彼にそう言つてのけた。相手は自分よりも遙か昔に生きた戦国武將で、自分よりも実力が上手であろうことは彼女自身もはつきり分かつていたが、それでも彼女は怯むことなく幸雄に言葉をぶつけた。

「……」

幸雄はそんな彼女の言葉に何か反論するわけでもなく、ただ黙つて耳を傾けていた。そして彼女の言葉が終わると、

「確かに海未の言う通り、俺はずるい男さ。お前を含めたμ sの9人を駒にして、志郎を駒にして、そして俺自身さえも、本懐を遂げるための駒にする……。そう、全ては『μ sを支える』という本懐のためさ。本懐のために手段を選ばないのは俺たちのには何ら不自然な事じゃあないのさ。」

幸雄は自らの持論を語り始めた。開き直つてる気配はなく、寧ろそのスタンスに対して誇らしさを抱いてるようすら感じられる。

「本懐……というのは何ですか？」

そんな幸雄に対して海未は1つの質問を問いかける。数秒あまりの沈黙が過ぎた後、幸雄は口を開いた。

「俺の本懐か……。俺は志郎が様々なしながらみや呪縛から解放され、この時代に享けた新たな生の中で、新しく手に入れた夢を成し遂げられればそれでいいと思ってる。だから俺はそれを援ける^{たす}ために知恵を凝らし、策を巡らせるのさ。」

「あなた自身の夢はないのですか？」

海未はさらに問いかけを投げかける。

「俺の夢か？真田の存続、それがかつての夢だったが叶っちゃったからなあ……。転生者ってのは大体志半ばで倒れたような連中が多いが中には俺みたいなのもいるんだよ。」

「ですがあなたは関ヶ原の戦いの後に九度山に押し込まれてそこで……。」

「ああ、死んだ。そりゃ武士としちゃひどい死に方だろうが、俺には源次郎とその子たちがいた。あいつが俺の代わりに『家康に一泡吹かせたい』という願いを果たしてくれた。もう2つも夢が叶っちゃったから志郎や穂乃果みたいに生き急ぐかのように夢を追い求める必要なんかないのさ。」

幸雄ははるか遠くの空を眺めながら海未に自分の抱いた夢に関する価値観を語った。その表情はどこか満足げであった。

「だから俺は本来なら志郎がいなけりや μ 、 s を支えるつもりなんて無かつたし、 μ 、 s が瓦解した時にはもうお前らを見捨てる気満々だったわけだからな。」

再び薄ら笑いを浮かべながらそう語る幸雄の顔を見て背筋に悪寒を感じた海未だったが、それでも彼から目を逸らさず質問を続ける。

「では、あなたが志郎と共に μ 、 s を支える原動力とは何ですか?」

「原動力ね \dots 。随分と核心を突くような質問をするね、海未さんよお。」

「ええ。私はあなたの真意が知りたいのです。真姫さえも触れる事ができなかったあなたの真意を。」

「 \dots 真姫から話を聞いたか。」

幸雄の表情が再び薄ら笑いを浮かべたものから冷徹さを感じるような真顔に変わった。

「はい。それにあなたは志郎が自分の想いを明かした時、何も自分の意思を話すことをしなかった。だからこそあなたの本心を知りたくなるのは不自然な話ではないと思います。」

「一理あるねえ。」

幸雄は顎に手を当てながら彼女の言葉に頷く。

「状況によつては μ 、 s を見捨てることさえも視野に置く事ができるにもかかわらず μ

、sに拘り、そのためならどんな手段を取る事さえも辞さないあなたの原動力は一体何なのですか？志郎が私たちを支えているからですか？彼の夢を叶えさせるためですか？」

海未は幸雄に詰め寄る。海未は幸雄の目を真つ直ぐ見据え、幸雄もまたそんな彼女から目を逸らすことなく、2人は対峙した。2人とも引く気配は見せず、合戦の前に2つの軍勢が前進する機を窺うために睨み合うような静寂と殺気が入り混じったような異質な空気が流れていた。

「確かに志郎の存在や、あいつの夢、そしてこの前交わしたあいつとの約束……、どれもこれもこんな俺が、sに尽くすには十分な理由だが、お前さんもまだまだ俺の事を分かってないねえ。」

しばらくすると幸雄はそう言つて首を横に振つた。その言動と仕草から海未の推測がすべて外れていることがうかがえる。

「え？」

「え？つてお前さあ……。俺が志郎のことしか考えてないような視野の狭い男だと思われてたのは流石に心外だぜ。大体俺がこの時代で志郎に出会つてからまだ半年しか経つて無いんだぜ？そんな短期間で自分の価値観が塗り潰されてたまるかつての！」

意外な答えに目を丸くする海未に対して幸雄は呆れ果てたように深いため息をつき

ながら語った。

「では・・・、何が幸雄を突き動かしているのですか？」

海末が恐る恐るたずねると、幸雄は意味深な笑みを浮かべた。

「ここまで俺の核心を突くために食い下がって来たお前に特別に教えてやる。俺がμ，sにここまで尽くす理由は、この音ノ木坂学院・・・いや、この東京にやって来る以前にあるのさ。」

「ここにやって来る以前・・・。いったい何があつたのですか？」

「おっと、そればかりは言えねえな。今はな。」

「今は・・・ですか？」

「まあ語るべき時が来たら教えてやるからよ。」

幸雄はそう言うのと、海末に背を向けて歩き出した。

「待つてください！どこへ行くのですか？」

「どこって、もう1つ打つておいた布石がちやくんと機能してるか確認しに行くのさ。」

幸雄は振り向きもせずにながら歩を進めるが、突然立ち止まった。

「流石に何も教えてやらないのは流石に意地悪が過ぎるから1つだけ教えてやる。俺はここちに引つ越してくる何か月か前に、ある人物と、とある約束を交わしていたのさ。」
「とある約束・・・。」

海未は嘯みしめるように幸雄が出した言葉をもう一度唱えた。

「それが俺の原動力さ。その出会いと、あいつと交わした約束がなかったら今頃俺はここにいなかっただろうよ。今俺が教えてやれるのはこれだけ、じゃあまた明日会おうぜ。」

幸雄はそう言うのと再び歩き出す。

「今頃ここにはいなかった・・・、幸雄にそこまで言わしめる約束とは一体何でしょう？」
公園に一人佇む海未は空を仰ぎながら静かにひとりごちるように呟いた。

57話 さらなる布石と出撃の黄昏

海末がことりの家に行き、その後には幸雄と対峙していた一方でその頃穂乃果たちは――

「やったー！」

「ああ、油断した〜！」

穂乃果たちは秋葉原の街を歩き回った後、ゲームセンターにやって来ていた。今もヒデコとフミコがダンスゲームをプレイしているところを観戦しているところだった。

「じゃあ次、穂乃果ね！」

「えっ？」

「負けないよ〜！私これ得意だから！」

「よ〜し！」

ヒデコに次のプレイヤーとして指名された穂乃果は一瞬戸惑いを見せるも、意気揚々と筐体の上に乗った。

「いっくよ〜！」

ゲームが始まり、曲が流れ出すと同時に対戦相手であるミカが踊り始める一方で穂乃果はただただ茫然と画面を見つめて立ち尽くしていた。

——1、2、3、4、5、6、7、8！1、2、3、4・・・

穂乃果の脳裏に練習中にリズムを取る志郎の声が流れてきたその時、

「穂乃果、始まつてるよー！」

「わわっ……。ほっほっほっほっほ……。」

ヒデコの声で我に返った穂乃果は慌ててスキップを踏み始めた。

「いい感じー！」

「上手いよー！」

ヒデコとフミコの声援を受けつつスキップを刻む穂乃果の脳裏にある情景が流れ始めた。

それは、スクールアイドルを始めた時からずっと続けて来た練習の日々であった。スポーツやダンスの経験もなく、何かに全力で打ち込んだことのない穂乃果にとって、今までのトレーニングの日々は厳しくて、失敗も多く、挫折そうになることもあった、だがそれでも穂乃果にとってそれらの日々はスクールアイドルを辞めた今でも思い

出すだけで笑顔になれる・・・そんな輝かしい日々であった。

「——ほっ！つと・・・。は、スツキリしたあ！」

ゲームの曲が終わると同時にポーズを決めた穂乃果は清々しい汗を拭った。

「すごい・・・。」

「練習してたの？」

「いやあ、全然・・・。」

ヒデコとミカにたずねられた穂乃果は苦笑いしながらそう答えた。

「スタートでミスしてなかったらすごいスコアだったんじゃない？」

「やっぱずっとダンスしてきただけあるね〜！」

穂乃果が画面に目を向けると、画面には『You are dance master!!』という称号と『AAA』というランクが映っていた。かつてセンター争いの時にプレイしていた時は、超人的な身体能力を持つ志郎を除くメンバーでは凜しか取れなかったランクであった。

「・・・。」

穂乃果はその画面を見て、ラブライブの予選ランク圏外から999位に入った時を思い出していた。

「じゃあねー！」

「うん、今日はありがとう！ばいばい！」

それからまた少し遊んだ穂乃果たちは、ゲームセンターから出た後、解散することにした。

『ばいばい！』

ヒデコ達を見送った穂乃果は少し寂しげな表情で彼女たちの背中を見送った後、とある場所に向けて歩き出していった。

「ふう……。これでよかったの？幸雄くん。」

穂乃果の姿が見えなくなるくらい離れた後、ヒデコがそう言うと、

「ああ、そりやもうオツケーさ。こつちの方も滞りなく俺の思惑通りに事が運んだと言えるな。」

彼女の言葉に応えながら彼女たちの後ろから幸雄がふらりと現れた。

「幸雄くんってばいつからいたの？」

「いつからか……。海未に用事があつてそこからこつちに合流したのは穂乃果がダンス

ゲーで踊り始めた時くらいかね。」

フミコの問いに幸雄はわざとらしい仕草で顎を撫でながら答えた。

「結構ずつと見てたんだね……。」

「いやいや、いくらお前らにあのゲーセンであのゲームをプレイするように指示していたとはいえ、アキバの街でうろついていたであろうお前らを探し回るのは結構骨だったんだぜ？」

呆れたような表情で笑うミカに対して幸雄は秋葉原の街を走り回った事を思い出しながら自分がただ高みの見物に徹してただけではないことをアピールする。

「でもさあ、そこまでするなら幸雄くんはどうして私たちにやらせたの？ 幸雄くんが直接穂乃果を誘えばわざわざ直接私たちの様子を見る必要なんて無かったと思うんだけど。」

ヒデコは真面目な表情で幸雄に問いかける。海未ほど強いものではないが、彼女の顔にも幸雄に対する不信感がにじみ出ていた。

「いやいやいや、お前らに任せたのには理由があるんだぜ？ 冷静に考えてみるよ。やめたとはいえ穂乃果はスクールアイドルだ。それが男と二人つきりで遊んでるのなんて見られたら炎上もんだろうが。ただでさえ女子高である音ノ木坂に男がいる時点でありアウトゾーンに足ツツコンでるようなもんだしな。」

幸雄は自分ではなくヒデコ達に穂乃果を遊びに誘わせた理由を説明した。

「確かに、よくよく考えたら志郎くんも幸雄くんもかなりヤバイ存在だよね……。ここら辺の地域の人たちは知ってても他の地域の人はずうちの学校の事情なんて知らないしね。」

「でもそれなら幸雄くんが来る理由なんて無いんじゃない？」

幸雄の言葉に一理ある事を感じたフミコが合点がいったように頷く一方で、ミカは首を傾げながら幸雄がここまで出張ってきた理由をたずねた。

「それは俺は自分の策が実を結んだかこの目で直接確かめたい性分だね。だからわざわざ今日日は策を託しておいた海未とお前らの様子を確認しに来たのさ。」

幸雄は自分の目を指差しながらもう一つの理由を語った。

「それで、幸雄くん的には策はどうだったわけ？」

「ふふふ、あの穂乃果の表情を見るに100%成功だと言っても過言じゃねえだろうな。そもそも俺はあいつの心の奥底に残ってるスクールアイドル時代に抱いた情熱の残りカスに火を付けるのが目的だったから、あれは十分な成果だと言ってもいい。」

ヒデコの問いに答える幸雄はどこか楽しげであった。

「私たちにはいつもの穂乃果にしか見えなかったけど……。」

「俺は人の表情や仕草からその感情や考えのパターンを見透かす事ができる。あの時の

穂乃果は間違いなく心が揺れていた。本当にこれでよかったのだろうか、わずかに思いついてはいるのを俺は見透かした！そう、まさに策が完璧に成ったと言えるな！」

「穂乃果の心を揺さぶるのが幸雄くんの狙いだ。たつてわけね。」

「そういう事だ。俺は策を仕掛ける前に標的の心を揺さぶる事で俺の術中にハマやすくするようにしてるのさ。だから俺はことりの想いを知っていた海未にことりの心を、そして海未やことりとは違う形で友人としてのポジションに立っているお前たちには穂乃果の心を揺さぶる策を託したつてわけよ。」

幸雄はヒデコ達を前に自分が今日仕掛けた策の全容を種明かしした。真田昌幸が人の心を揺さぶる事を得意とした、という事を明確に示す逸話は無いが、第一次、第二次上田合戦では徳川軍を挑発することで手玉に取つてみせ、天正壬午の乱ではかつて同輩であった春日信達を海津城主への復帰を餌に北条軍へ寝返らせようと試み、さらには沼田城を北条家に引き渡す際にも城下の民を丸ごと真田領に移住させるといふ嫌がらせじみた行為で北条家に惣無事令違反をさせるように挑発してみせた等といった行為から、彼が間違いなく人を煽り、揺さぶる術に長けていた事が伺える。

「なんて言うか、そこまで行くともう褒めるしかないよね。」

「本当なら幸雄くん自身がやればいいのにつて言いたいところだけと言う気が失せちゃうよ。」

ヒデコが呆れたようにため息をつき、フミコは苦笑交じりにそう言った。

「まあそう言ってくれるなよ。μ sは志郎含めてみんなお人好しなんだ、俺みたいに狡猾でずる賢くて、進んで憎まれ役を買って泥をかぶる人材が1人くらいいたってバチは当たらねえだろ。」

幸雄はそう言うのと彼女たちに背を向けて去って行った。

「じゃあな。明日の準備もよろしく頼むぜ。」

「任せといて!」

「幸雄くんもがんばれ!」

「これが終わったらクレープ奢ってね!!」

その場から立ち去る幸雄をヒデコ達は思い思いの言葉をかけて見送り、

「ああ、μ s復活が成った暁にやあクレープでもパフェでも奢ってやるよ。」

幸雄はミカの言葉に苦笑しながら振り向くことなく手をひらひらと振り、そう言っただけのまま街の喧騒の中に消えていった。

一方その頃、穂乃果はUTXに来ていた。UTXの正面玄関の大画面にはUTXのスクリーンアイドルであり、ラブライブの優勝者でもあるA—R—I—S—Eが映っていた。

「・・・きつと、すごいアイドルになるんだろうな。」

大画面を見上げる穂乃果は、ふとそう呟くと、UTXに背を向けて歩き出した。

——こんどは、誰も悲しませないことをやりたいな。自分勝手にならず済んで、でも楽しくて、たくさんの人を笑顔にするために頑張る事ができて・・・。

穂乃果は歩きながら次にやりたい事を考えていた。誰も傷つけず、身勝手になる事もなく、そして人々を笑顔にできる、そんな事を考えていたが、

「そんなもの、あるのかな・・・。」

穂乃果にはそんな完璧なものを思い浮かべることができなかつた。

「はあつ、はあつ、はあつ・・・。」

「かよちん遅いにゃ〜。」

「ご、ごめん！久しぶりだときついね。」

「あつ、穂乃果ちゃん！」

神田明神の男坂で凜と花陽が階段ダッシュの練習をしていると、そこに穂乃果が登つ

て来た。

「凜ちゃん、花陽ちゃん。練習続けてるんだね。」

と、穂乃果が2人に話しかけると、

「当たり前でしょ、スクールアイドル続けるんだから。悪い？」

と3人の所に歩いて来たにこが穂乃果に語り掛けた。

「いや……。」

「μ'sが休止したからってスクールアイドルをやっちゃいけないって決まりはないで

しょ？」

「でもなんで？」

「好きだからよ。」

「……！」

にこは穂乃果の問いかけに微塵もためらうことなく答えた。穂乃果は一瞬、そんな

にこの堂々とした姿に気圧されたような感じがした。

「にこはアイドルが大好きなの。みんなの前で歌って、ダンスして、みんなと一緒に盛り上がって……。また明日から頑張ろうって、そういう気持ちにさせる事ができるアイドルが私は大好きなの！」

にこは穂乃果に、自分のスクールアイドルへの思いの丈を語った。かつてスクールア

アイドルを志し、その理想の高さと想いの強さに仲間が付いて来れず、スクールアイドルとしての活動が破綻し、一度その夢は破れた。

だが、*μ's* が生まれ、にこが加入を決意するまでの2年間にわたる雌伏の時を経て、もなおアイドルへの夢を捨てずにいられたのは、今穂乃果へぶつけたスクールアイドルへの思いを胸に、「また明日から頑張ろう」と、毎日思う事ができたからだと言っても過言はないだろう。

「穂乃果みたいがいい加減な『好き』とは違うの!」

「違う! 私だって……!」

「どこが違うの?」

「っ……!」

「自分から辞めるって言ったのよ? やっててもしようがないって。」

「それは……。」

にこの厳しい物言いに穂乃果は反論しようとするが、あの時の屋上での物言いを思い出した穂乃果は、にこの問いに言い返すことはできなかった。

「ちよつと言いすぎだよ……。」

凜がにこを止めるが、

「ううん、にこちゃんの言う通りだよ。邪魔しちゃってごめんね。」

「穂乃果ちゃん！」

穂乃果はこの言葉が正しいと認めて帰ろうとした時、花陽が穂乃果を呼び止めた。

「こんど、私たちだけでライブをやるうと思つてて……。」

「穂乃果ちゃんが来てくれたら盛り上がるにや！」

「あんたが始めたんでしょ。絶対来なさいよ。」

花陽たちがライブをやるから来て欲しいと穂乃果を誘つた。

「みんな……。うん、絶対観に行くよ。」

穂乃果はそう言つて男坂を下りていった。

「……！」

穂乃果が神田明神を去つて家路についたのとほぼ時を同じくして、音ノ木坂学院の屋上で迷走していた志郎が目を見開き、ゆっくりと腰を上げた。

「風が変わつた、動くべきは今か……。」

志郎は武田勝頼だった頃の感覚を思い出しながら研ぎ澄まされた精神をさらに集中

させ、穂乃果の元へ向かうべき時が来たことを直感した。

そしてそれと同時にポケットのスマホが鳴りだし、志郎はそれを手に取った。

『よお志郎。準備はできたか?』

電話をかけてきたのは幸雄であった。

「ああ、いつでも行ける。というかさろそろ動き出そうと思ったところだ。」

『そりゃ奇遇だ、俺も今穂乃果が家路についたのを報せようと思ったところだな。』

志郎の言葉に意外な様子で幸雄は志郎に用件を伝える。

「報せようと思ったって……お前あいつをストーカーしてたのか?」

『ずっとしてたわけじゃねえよ! 策を託した海末の様子を見に行ったり、ヒデオ達の戦果を確認したり、今も神田明神でここに『あたし達までダシにしてんじやないわよ!!』って怒鳴られてきたところさ。』

呆れ気味な志郎に幸雄は自分が放課後になってからどれだけ町を駆けずり回ったのかを無然とした様子で語った。

「海末については知ってはいたが、まさかヒフミトリオやにここまで布石に使っていたとは……。流石お前というべきだな。」

あらかじめ幸雄の策を聞いていた志郎は、自分の知らぬ間に幸雄が更に手を広げていたことに驚くと同時に感心した。かつて真田昌幸に上野の攻略を命じ、期待以上の戦果

を携えて戻ってきたことを志郎はふと思いつ出した。

「褒めても何も出ねえって。そんな事より後はお前さん次第だぞ。」

幸雄は志郎の言葉に照れ臭そうにしていたが、まるでカードの表が入れ替わるかのようにならぬ口調で志郎に念押しした。

「・・・ああ。」

志郎は電話越しに伝わってくる幸雄の真剣な気配に息を呑みながら頷く。

「ま、気張りすぎるなよ。今のお前さんがやるべき事は説得じゃあねえ、穂乃果に謝る事だ。あの時みたいに想いを先走らせて空回りしないようにな。」

「ああ、行ってくる。征いってくるぞ幸雄。」

幸雄のアドバイスに志郎は『いつてくる』という言葉だけで応えた。これが今の志郎にできる幸雄への返礼だった。

「ああ行つて来い志郎、我らが大将。μ sの進む道を照らす篝火になつて来い。」
その言葉を最後に幸雄からの電話が切れた。

——懐かしいな、この緊張感。あの時代で戦いに赴く前のあの緊張感だ。

幸雄との通話を終えた志郎は緊張に震える自分の手を眺める。だがその表情はとて

も穏やかなものであった。

——この穂乃果との対面で俺たち11人のこれからの運命が懸かっているのか、つてのような重苦しさを微塵も感じないどころか心が躍つて来る。ああ、そうか……。

「これが、『本当にやりたい事をやる』というものなのか。」

志郎はかつて絵里に語った感情を本当の意味で心から感じている事に気が付いた。そんな清々しい想いで西に沈む陽を眺めながら志郎は気合を入れるために自分の頬を叩くと、

「よし、征こう！御旗楯無も御照覧あれ!!」

と、天に拳を突き上げながら誓いの言葉を唱え悠々と歩き出した。

58話 救われた者の想い

志郎が穂乃果の家に向かって歩みを進めている頃……

「おお〜！雪穂、これってシユークリーム？」

「違うよ、あんこ。豆を煮たものだよ。」

「ハラシヨ〜。」

穂乃果の家である『穂むら』の前で雪穂にもらった饅頭を不思議そうに見つめてる里沙に、雪穂があんこについて教えていた。そしてそのやり取りを、微笑ましそうに絵里が見守っていた。

「わざわざ送っていただいてありがとうございます。よかつたら上がっていただきますい！お姉ちゃんも喜びます。」

「ありがとうございます、お言葉に甘えさせてもらうわ。」

絵里は雪穂の厚意に応え、穂乃果の家に上がっていった。

「ごめんね。」

「いえいえ、お気になさらず。今お茶を——」

「違うの。」

絵里が穂乃果の部屋に入った後に穂乃果が絵里にお茶を淹れようとした時、絵里は彼女の言葉を遮った。

「え？」

「μ，sを活動休止にしようなんて言った事よ。」

絵里は腰を下ろしながら話の本題を切り出す。

「本当は私にそんな事言う資格なんて無いのに、つい……。ごめんなさい。」

「ううん、そんな事ないよ。ていうか、私が辞めるって言ったから……。」

絵里が頭を下げると穂乃果は絵里を宥めつつ、自分に非があつた事を絵里に伝えた。

「……私ね、凄くしつかりしてて冷静に見えるだなんて言われるけど、本当は全然そんな事ないの。」

「絵里ちゃん……。」

「いつも迷つて、困つて、泣き出しそうで……。実際、希に恥ずかしいところを見られたこともあるのよ。でも隠してる……。自分の弱いところを。」

絵里はかつてμ，sに入る前に、自分のやるべき事と自分のやりたい事の板挟みになつてどうすればいいのか分からず、希の前で涙した時の事を思い出しながら自分の本当の姿を穂乃果に語った。

「私は穂乃果が羨ましい、素直に自分が思ってる気持ちをもそのまま行動に起こせる姿が凄いなって。」

「そんなこと……。」

「……おいしい。」

絵里は自分が穂乃果に対して抱いてる羨望を穂乃果に語った後、穂乃果に淹れてもらったお茶を飲んで一息ついた。

「ねえ穂乃果、私には穂乃果に何を言っただけでもいいか正直分からない。私たちがさえことりがいなくなってしまうことがショックなんだから、海未や穂乃果の気持ちを考えると辛くなる……。」

実際の所、こたりの留学に関して絵里にできる事は何もなかった。この一連での全てを志郎と幸雄に委ねているという所もあるが、同じグループの仲間である以前に1人の人間として、穂乃果たちに比べて遥かにことりとの付き合いが短い彼女には言葉通り何も言う言葉が見つからなかったのだ。

「でもね、私は志郎と穂乃果に一番大切な物を教えてもらったの。」

「志郎くんから？」

穂乃果が首を傾げてそうたずねると、絵里はゆっくり頷いた。

「ええ。志郎からは私は独りじゃないって言う事、そして穂乃果からは変わる事を恐れ

ずに突き進む勇気をね。」

絵里は志郎と穂乃果から教わった大切な事を語ると、湯呑みを置き、穂乃果の前に自分の右手を差し出した。

「私はあの時、志郎の言葉とあなたが差し伸べてくれた手に心を救われたのよ。」

「私の手が、絵里ちゃんを……。」

穂乃果は自分の手を見て絵里の言葉を反芻するように呟いた。

「お姉ちゃ〜ん。」

するとそこに雪穂が部屋の扉をノックしてきた。

「どうしたの雪穂?」

「志郎さんが来たよ。今玄関で待ってるんだけど上がってもらっていいよね?」

穂乃果が扉を開けると雪穂は志郎がやって来ていることを穂乃果に伝えた。

「志郎くんが?」

「うん、なんかお姉ちゃんに話したい事があるんだって。」

「なんだろう……?」

雪穂の言葉を聞くと穂乃果は思案を巡らせ始めた。10日ほど前に喧嘩別れしてから志郎とは一度も言葉を交わしていない穂乃果には、志郎がどんな用件でわざわざ家に来たのかまったく見当が付かなかった。

「わかった、上がってもらって。」

穂乃果が雪穂にそう言うのと、

「じゃあ、私はそろそろお暇させてもらおうかしら。」

と、絵里が腰を上げた。

「え？もうちよつとゆつくりしてっつていいのに。」

「ええ、でも私が穂乃果に話したい事は十分に話したわ。それより、志郎とは2人つきりで話すべきだと思うの。」

絵里は穂乃果の引き留めをやんわりと断りつつ、志郎の話が穂乃果にとって大切な事であると暗に仄めかした。

「2人つきりで……。」

「気まずいと思うけど、しっかりお互いの本音を話してちょうだいね。それと、お茶美味しかったわ。」

絵里はそう言うのと部屋から出て行った。

「……。」

一方で志郎は穂乃果から許可を得た雪穂に家にあけてもらい、彼女に案内されて2階に続く階段を上っていた。その表情は緊張を帯び、険しかった。

「あれ、絵里さんもう帰るんですか？」

「ええ、穂乃果とは十分に話ができたから。」

階段から降りてくる絵里と雪穂がそう言葉を交わした後、

(頑張つてね、志郎。)

志郎とのすれ違いざまに絵里は彼の耳元で雪穂には聞こえないほどの小さな声でそう耳打ちし、そのまま歩き去って行った。

「ああ、行つてくる。」

志郎は去つて行く絵里を見送りながらそう呟くと、覚悟を決めて穂乃果の部屋へと足を進めた。

「はあ……。」

穂乃果の家を出た後、絵里はため息をつきながら歩いていた。

「どうしたのお姉ちゃん？」

そんな彼女の様子を不思議に思った亜里沙がどうしたのかたずねた。

「ううん、何でもないわ。」

絵里は慌てて笑顔を作りながら亜里沙に返事をした。

——分かってんだろ？お前さんの恋は報われない可能性の方が大きいって事くらい。

（ええ、分かっているわ。自分の思いが報われないかもしれないって事くらい。幸雄ならきつと、穂乃果に励ましの言葉を送ったところとか、志郎が穂乃果と仲直りできるように私が応援しているのを見たらきつと『本当にそれでいいのか？』って聞いて来ると思う。でも、私は志郎には笑顔でいて欲しいの。それがたとえ、穂乃果に向けられるものだとしても……。）

亜里沙の言葉に応えた瞬間、脳裏を走った幸雄の言葉を振り払うかのように絵里は自分の意思を固めるように心の中で呟いた。

「……それに、勝負するならやつぱりフェアじゃないとね。」

絵里は沈みゆく夕陽を見上げながらひとりごちると、そのまま亜里沙とゆつくり家に向かつて歩いて行つた。

59話 若虎と太陽

穂乃果と絵里の話が終わり、絵里が変えるのと入れ違いになる形で穂乃果の家に来た。来た志郎は、雪穂に案内されて穂乃果の部屋にやって来た。

「いらっしやい志郎くん、今お茶淹れるから座つてて。」

「ああ。」

穂乃果の言葉に頷きながら志郎はゆっくりと腰を下ろした。

『……』

穂乃果の部屋が沈黙に包まれる。聞こえるのは穂乃果が淹れるお茶の音と、外から聞こえる夕暮れ時に鳴く鳥の鳴き声やたまに通る車のエンジン音くらいで、志郎と穂乃果は無言であった。それもそのはず、志郎と穂乃果は彼女がスクールアイドルを辞めると宣言した後の言い争いから今日まで——部屋に入って挨拶するまで——のおよそ2週間余りにわたって一度も互いに声を掛ける事なく過ごしてきたのだから、志郎も穂乃果もどうやって話を切り出せばいいのか分からないのも当然であった。

「穂乃果！」

「志郎くんっ！」

『あっ……』

沈黙に耐えきれなくなったのかこのままではいけないと判断したのか志郎が穂乃果に声を掛けると同時に穂乃果も志郎に声を掛け、2人の声が同時に重なった。

「あつ、す、すまん……」

「こつちこそごめん、志郎くん先いいよ。」

「でも……」

「志郎くんが先だったから……。それに、まだ私言いたい事の整理がついてないから……」

「穂乃果……」

穂乃果はあくまでも志郎に先を譲るつもりであると感じた志郎は少し狼狽していたが、穂乃果の目を見て覚悟を決めて深呼吸を一度した。

「穂乃果。俺、あの日からずっとお前に言いたい事があったんだ。」

「うん。」

志郎の言葉に穂乃果が頷く。2人の脳裏にはあの日の言い争いが過り、穂乃果も志郎も互いに息を呑み込んだ。

「すまん穂乃果!! 本当に俺が悪かった!!」

志郎が出したのは謝罪の言葉だった。余計な言葉で飾ることなく、ただ純粹に「自分が悪かった」という自分の非を詫げる言葉と同時に土下座をした。

「し、志郎くん!?!」

穂乃果は驚いた。目の前にいた仲間がいきなり土下座をしたのだから驚くのは無理もない。もちろん止めようとも考えたが、志郎から迸る気迫に気圧されて穂乃果はミミりも動けず、ただ志郎の謝罪を聞くことに専念するしかなかった。

「俺がバカだった! 俺はお前が幼馴染みを、ことり達の事を大切に思っていたことは知っていたんだ!! それなのに……!! それなのに俺はよりよってお前のその心を踏みにじってしまった!!」
「sを想うあまりお前を傷つけてしまった……!!」

志郎は床に頭をこすりつけたまま謝罪の言葉を語り続けた。

「許してくれとは言わない! 俺を恨んだままでも構わん!! 俺は……、俺は……!ぐつ、うう……!!」

次第に志郎の声は震えていき、ついには肩を震わせ嗚咽し始めた。それだけ志郎はあの日の自分の失言を悔いていたのだ。

「志郎くん……。謝るのは私の方だよ。」

「……え?」

穂乃果の言葉に志郎は思わず声をあげた。

「あの時の私は冷静じゃなかった。ことりちゃんがいなくなっちゃうって事で頭がいっぱいで何も考えられなかったんだ。志郎くんが私達の為に必死に頑張ってくれたのも、*My* sのことをすつごく大切に思ってるのも知ってたのにカツとなつてあんな事言っちゃつて……。ホントにごめん!!」

穂乃果もまた志郎に向けて頭を下げた。

「私もずつと後悔してたんだ、志郎くんにひどい事言っちゃつたつて。でも気まずくつて声を掛けられなかった……。今日志郎くんが家に来てくれなかったらずつと言い出すことができなかったよ……。本当にごめんね、そしてありがとう。」

「穂乃果……。」

「だからもう仲直りしよう、ね?」

「穂乃果……、すまん……!」

穂乃果の提案を聞いた志郎の頬に再び涙が流れた。

「それにしてもなんか安心したなあ。」

「何がだ?」

志郎は穂乃果がふとこぼした言葉に首を傾げた。

「志郎くんも泣くんだった。志郎くんは堂々として、私たちなんかよりもずつと強

い印象があつて涙も流さないようなイメージがあつたからさ。でも志郎くんが泣いてるのを見て、志郎くんも私たちと同じなんだつて安心しちゃつたんだ。」

穂乃果は自分が今まで心に思い浮かべていた志郎についての印象を語つた。だが志郎はそんな穂乃果の言葉に、首を横に振つた。

「俺は強くなかないさ。幸雄やお前たちはそう言つてくれてはいるが、俺は弱い男だ。心も立場も弱い男だつたからこそ強くあろうと、雄々しくあろうと振る舞い、ただひたすらがむしやらに前へ前へと突き進むことしかできなかつただけにすぎないんだ。」

志郎は自嘲するように自らの本音を穂乃果に明かした。だが、そう語る志郎の表情にはどこか安心感に近いものが滲んでいた。

「立場？」

そう言つて穂乃果が首を傾げると、志郎は忘れたものを思い出したかのように慌て、「そうだ、お前に話したい事があつたんだ！」

と言つた。

「話したい事？」

「ああ、お前やことり以外の7人にはもう話したんだがな。俺と幸雄の正体について穂乃果に話しておきたいんだ。これは俺が何故お前たちを支えようとしたのかという理由の根幹でもあるから、しっかりと聞いてほしい。」

「……うん。」

志郎の言葉に、穂乃果は彼の目を真つ直ぐ見ながら頷いた。

志郎は穂乃果に、自分が武田勝頼の生まれ変わり——転生者——である事を明かし、武田勝頼として歩んできた生涯と、幸雄もまた自分と同じ転生者であることを語った。穂乃果は基本的に黙って聞いており、口を開くとすれば、所々に質問を挟み、志郎からの答えに頷くぐらいであった。志郎の話を書く穂乃果の表情はまさに真剣そのものであった。

「——とまあ、これが俺たちの正体ってわけなんだが……。」

「どうしたの志郎くん？」

志郎の言葉の端切れが悪いのに違和感を覚えた穂乃果は志郎にその理由をたずねた。

「いや、なんか少し意外だと思つてな。」

「意外？」

「ああ。こういう話をして一番大きなリアクションをするのが穂乃果だと思つてたもんだから、思いのほかりアクションが薄いというか、物分かりがいい感じなのに少し拍子抜けしてな。」

志郎が軽く笑いながら答えると、

「うん、なんて言うか志郎くんが武田勝頼さんの生まれ変わりだって言った時に、やっぱりそうだったんだって感じがしたんだ。」

と穂乃果は語った。

「やっぱり・・・？まさか穂乃果、お前俺が転生者だってこと分かっていたのか!？」

「ち、違うよ!?!そうじゃなくって・・・。実は私も志郎くんに話したい事があるの・・・!」

「話したい事?」

「うん。実は私ね、学園祭の前の夜から不思議な夢を見るようになったの。」

今度は穂乃果が志郎に自分がここ数日見続けて来た夢の内容を話し始めた。長篠の戦いを皮切りとした勝頼の後半生と、天目山で迎えた最期、そしてその後勝頼の魂と対話したことを志郎に語った。

「——それで私が志郎くんの名前を呼んだところで目が覚めたの。」

「なるほど・・・。まさか俺の、勝頼の魂がお前の夢に入り込んでたとはな。だがそれにしては何故武田勝頼が俺であると気づいたんだ?」

穂乃果の話聞いた志郎はなぜ穂乃果がその核心にまで至る事ができたのかを彼女にたずねた。

「夢の最後の所でね、勝頼さんが私に『負けるなよ』って言ってくれた時の笑顔が志郎くんとそっくりだったの。」

穂乃果はその時見た勝頼の笑顔を思い出しながら志郎に理由を教えた。

「笑顔……か。」

志郎は穂乃果の言葉を反芻するように呟いた。

「朝起きたら夢の事は忘れちゃってただけど、志郎くんの話を聞いたら思い出す事ができて、私の見た夢は夢じゃなかったんだって安心したんだ。」

穂乃果は満面の笑顔を浮かべて志郎にそう言った。

「そうか……。」

「あ、そう言えば幸雄くんも志郎くんと同じ転生者なんだっけ？」

穂乃果は突然話題を幸雄に関するものに変えた。

「ああ、真田昌幸と言ってな。俺のかつての家臣の1人だった。」

「すごいよね、何百年経った未来でまた会えるなんてさ。なんて言うかすごい絆を感じるよ。」

「言うほどの者でもないさ。お前や海未、ことりの3人の絆に比べればな。」

「ことりちゃん……。」

志郎がことりの名を口にした瞬間、穂乃果の表情が曇った。志郎はそんな穂乃果の表

情を見ると意を決したかのように深く息をしてから穂乃果に一言たずねた。

「ことりと仲直りしたいか？」

「え？」

「非常に勝手な話だとは思っているが俺はお前たちに仲直りしてもらいたいと思つてい
る。μ、sの為にもだ。」

「でも、ことりちゃんはいなくなつちやうんだよ？ μ、sは9人じゃないとダメだもん。
ことりちゃんがいなくなつちやつたらもうμ、sはμ、sじゃなくなつちやうの
に……。」

穂乃果はことりと仲直りしても何も変わらないと言いたげに、志郎に語り掛ける。

「そうだな。確かにお前たちが仲直りしてもことりの留学は止められんだろう。だが、
このまま喧嘩別れになるより、空中分解してしまうよりはいい結末だと思つている。」
「え？」

志郎の口から出た言葉に穂乃果は戸惑いを隠せなかった。どんな苦境を前にしても、
穂乃果たちが挫折そうになつても諦めずに前に向かつて歩いていた志郎らしからぬ言
葉に、疑問を抱かずにはいられなかった。

「俺は正直なところこのままμ、sが留学してμ、sが解散してしまうような事態に
なつたとしても、それはそれでこういふ結末もあるのだろうと受け入れることはでき

た。だが、お前とことりがこのまま喧嘩別れになってしまふのはどうしても止めたいんだ。」

「どうして・・・?」

「お前たちには俺と同じ道を歩んで欲しくないからさ。」

「志郎くんと、同じ道・・・。」

穂乃果の脳裏に、ここ数日に夢で見た勝頼の末路と、そこに至るまでの道筋がよぎつた。

「俺はこの学校に来た時にこの学校の現状が武田家と重なって見えた。お前たちsのメンバーと出会い、それぞれに俺の影を見た・・・。そして穂乃果自身にかつての、向こう見ずで無鉄砲で、いつも生き急いでいた頃の俺の姿を見たんだ・・・。」

志郎は穂乃果たちと出会った時、そして彼女たちと過ごして行くうちに感じた気持ちを語り始めた。

「俺もまた、向こう見ずで無鉄砲で生き急いでて・・・、そして最終的に滅び去った。この学校も、お前たちもいずれは形こそ違えども俺と同じような道を進んでしまふのではないかと思つたんだ・・・!」

言葉を紡いでいくうちに志郎の目から大粒の涙がこぼれ始めた。

「同じだ・・・。俺とお前たちは似ていた・・・。お前たちは俺なんだ!だからこそ俺は

お前たちに『惨めな滅びへの道』を歩ませたくなかった！俺はその一心でここまでやって来たんだ！」

志郎が叫ぶように口にした言葉、これこそがかつて穂乃果にたずねられた「なぜ元々無関係なはずの志郎が音ノ木坂学院の廃校問題に向き合い、μ s サポートに尽力したのか」という質問の答えだったのだ。

「志郎くん……。志郎くんはずっとそんな想いを隠して私たちを支えてくれたんだね……。ありがとう……。！」

穂乃果は志郎につられて泣きそうになったが涙を拭い、頭を下げて感謝の言葉を伝えた。

「穂乃果、ことりが旅立つのは明日だ。」

「えっ？」

「俺にはお前がどういう行動をとるべきか決める権利は無いし、こたりの留学を止められる力も無い。だが、お前の背中を押すことはできると思っている。」

「それってどういうこと？」

穂乃果は思わず首を傾げた。

「お前とことりに残された時間はあとわずかだ。だからこそお前には後悔してほしくない。」

「……」

まっすぐ穂乃果の瞳を見つめ、真剣な表情で語る志郎に気圧されながらも、彼から目を逸らすことなく穂乃果は無言で志郎の言葉に耳を傾ける。

「今こそいつものように一步を踏み出すべきなんだ。後悔しないように、たとえどんな結末が待っているようともな。そうしなければお前の心はかつての俺のように、武田家のように、少しづつ死んでいくだろう。」

「でも……!でも私は……」

穂乃果は不安そうにそう吐き出す。あの日以来ことりとは一度も言葉を交わしていないが故に抱く、当然の不安であった。今の穂乃果は不安に囚われていた。

「もしまたことりちゃんの想いを踏みにじっちゃったら、傷つけるようなことを言っちゃったらって思うと怖い……」

穂乃果はそう言つて涙を流しながら肩を震わせた。

「穂乃果……」

志郎は改めて穂乃果があの時ことりと喧嘩をしたことで心を痛めていたことを思い知った。そしてそんな穂乃果に無神経な事を言つてしまった愚かさに対する罪悪感や自己嫌悪が心の奥底から湧き出そうになったが、志郎はそれを振り払うかのように首を振つて、穂乃果の双肩に優しく手を置き彼女に激励の言葉をかける。

「大丈夫だ穂乃果。傷つく辛さと人を傷つける辛さ、その2つを知ったお前ならもう同じ過ちは犯さないはずだ。」

「え．．．？」

志郎の言葉に穂乃果は思わず顔を上げた。かつて見た夢の中で勝頼に言われた言葉にあまりにもそっくりな言葉だったからか志郎の顔と夢に見た勝頼の顔が重なってるように見えたのだ。

「安心しろ。こうやって穂乃果と仲直りできた俺が言うんだ、間違いないさ。きつとい方に向かう事をこの俺が保証しよう。」

「うん．．．！」

志郎の心強い言葉に勇気づけられた穂乃果は涙を拭って笑顔で頷いた。

「ふう．．．。」

志郎は陽が沈んですっかり暗くなった夜道を歩いていった。

「何とか穂乃果と仲直りできたな．．．。」

志郎は夜空を仰ぎながら軽く息を吐いて呟いた。実際やり遂げてみると、色々気に病

んでいた自分が馬鹿らしくなって来て、軽い笑みはその顔に零れてきた。

——ヴー、ヴー。

そんな時、志郎のポケットの中のスマホが鳴った。画面を開き、誰からの着信かを見ていると画面には幸雄の名が表示されていた。

「もしもし。」

『よお志郎。どうだい首尾は?』

幸雄が軽口交じりに成果をたずねて来た。

「ああ、穂乃果とはうまく仲直りできたよ。で、そっちは何の用だ?ただ成果を聞くために掛けてきたわけじゃあないだろう?」

『ああ、そうだな。俺も世間話してるほど暇じゃあ無いのさ。明日発動する最後の策の仕込みに向けて忙しいんでね。穂乃果にはお前さんと仲直りして健全な精神状態^{せいしんじょうたい}でももらわなくちゃあならないからその確認さ。』

「そんな事だろうとは思ってたさ。安心しろ、穂乃果はちゃんと激励してきた。お前に言われた通りにな。」

志郎が幸雄の言葉に応えると、電話越しに幸雄の口笛が聞こえて来た。

「・・・やっぱりあの策を発動するの?」

『言われなくてもする予定だが何か問題でも?』

「お前の策が成れば必ず成功するのは分かつてる。だが本当にそれで……、お前に泥をかぶせていいのかつて思つてな。」

『おいおい、そんなことお前が心配する必要なんかねえつて。俺はただこれが一番効果的かつ効率的だからこそそうするだけなんだからよ。お前はドンと構えて俺の報告と、穂乃果とことりが明日のライブに来るのを待つてりゃいいのさ。』

志郎の不安げな言葉に幸雄は自信ありげに返した。

「分かつた。お前がそう言うのであれば信じよう。」

『おう。じゃあ明日は任せるぜ志郎。』

「ああ。幸雄こそ、武運を祈る。」

2人が言葉を交わすと通話が切れた。

(μ s 復活計画もいよいよ大詰めか……)

心の中でそう呟き、夜空を見上げる志郎の瞳には様々な感情が入り混じっていた。

———ことりが留学に旅立つまで、あと数時間

60話 陽はまた昇る

志郎と穂乃果が仲直りした日の翌日、遂にことりが留学に旅立つ日がやって来た。

「みんなにさよなら言わなくていいの？」

「うん、会うと私きつとまた泣いちゃうから。」

「・・・そう。」

その日の朝、空港に向かうための都内某駅では理事長が娘であることりを見送りにやって来ていた。

「お母さんもここで大丈夫だよ。着いたらすぐ連絡するね。」

ことりがそう言つて乗り換えの改札に向かおうとした時、

「ことりー！」

理事長がことりを呼び止めた。

「身体に気をつけてね。」

「・・・うん！」

ことりは母の自分を案ずる言葉に、母を心配させないように笑顔で頷くも目頭が熱くなり、それを振り払うように速足で歩いて行った。

そしてそれと時を同じくして、学院では――

「海未。」

「志郎?」

講堂の扉の前で志郎と海未の2人が鉢合わせしていた。

「もしかして、あなたも呼ばれていたのですか?」

「あなたも……って事は海未も穂乃果に呼ばれたのだな。」

海未の問いに志郎が答える。どうやら2人は穂乃果に講堂に来るように呼び出されていたらしい。

「昨日の夜にいきなり『明日の朝、講堂に来て!』と電話で言われた時は一体何ごとなのかと思いました。」

海未は呆れ半分、嬉しさ半分といったような表情でそう言うと、

「俺もさ。きつと俺たちに……いや、お前に伝えたい事があるのだろうよ。」

志郎もその時の海未と穂乃果の様子を想像しながら微笑する。

「では行くか。」

「はい。」

そして2人は講堂の扉を開いた。講堂に足を踏み入れた2人がステージの方に目を向けると、ステージの上には穂乃果の姿があつた。

「ごめんね、急に呼び出したりして。」

「いえ。」

「別にいいさ。」

「ことりちゃんは？」

志郎と海未の返事を聞いた後、穂乃果は2人にこどりの事をたずねた。

「今日、日本を発つそうです。」

「そうなんだ……。」

こどりが今日日本を発つ、それを聞いた穂乃果の表情は寂しげであつた。

「穂乃果……。」

「私ね、ここでファーストライブやってことりちゃんと海未ちゃんと歌つた時に思った。もつと歌いたいわって、もつとスクールアイドルやっていたいって！」

穂乃果はかつて徹底的な敗北からスタートしたファーストライブで歌つた時に抱いた想いを語り始めた。

「辞めるって言ったけど、気持ちは変わらなかつた。学校の為とか、ラブライブの為とか

じゃなく、私好きなの！歌うのが！！」

そして自分がこれまでの活動を通して抱き続けていたスクールアイドルへの想いを海未と志郎へ吐露する。

「それだけは譲れない。だから・・・、ごめんなさい！！」

穂乃果はステージの上で海未と志郎に向けて頭を下げた。

「これからもきつと迷惑かける、夢中になって誰かが悩んでるのに気づかなかつたり、入れ込みすぎて空回りすると思う！だって私不器用だもん！でも、追いかけていきたいの！！わがままなの分かってるけど、私・・・！」

そして穂乃果は自分が不器用で誰かに迷惑をかけ続けるかもしれないが、それでも夢を追いかけていきたいという自分の偽りのない気持ちを2人にぶつけた。

「————ぷっ、ふふふ・・・！」

「ふっ、ははは・・・！」

すると突然海未が噴き出して笑い出し、志郎もまたそれにつられる様に笑い始めた。
「え？海未ちゃん！志郎くん！なんで笑うの!? 私真剣なのに！」

2人のそんな様子に穂乃果は納得いかないと言わんばかりに抗議する。

「ごめんなさい、でもね・・・。」

海未はそう言つて笑いを止め、

「はつきり言いますが・・・。」

と穂乃果に話を切り出そうとすると、穂乃果は海未からどんな手厳しい言葉を受けるのだろうかと身構えて真剣な面持ちになるも、

「穂乃果には昔からずつと迷惑をかけられっぱなしですよ。」

という真剣な表情から一転して満面の笑みで言い放たれた海未の言葉に、

「えっ!？」

と拍子抜けした様子で声を漏らした。海未はそんな様子の穂乃果もお構いなしと言わんばかりに階段を下りながら話を続ける。

「こつりとよく話していました。穂乃果と一緒にいるといつも大変なことになると。」

「確かに、幼馴染みなだけあつてずつと振り回されてきたんだろうな。お前たちとの付き合いが短い俺でさえも難儀なもんだと思うくらいだしな。」

志郎もまた海未に続いて階段を下りながら話に混ざった。

「志郎の言う通りです。どんなに止めても夢中になつたら何にも聞こえてなくなつて・・・。だいたいスクールアイドルだってそうです。私は本気で嫌だったんですよ?。」

「海未ちゃん・・・。」

「どうにかして辞めようと思いました。穂乃果を恨んだりもしましたよ。全然気付いてなかつたでしょうけど。」

「ごめん……。」

穂乃果は海末が穂乃果に半ば無理やり誘われる形でスクールアイドルになった時の恨み言を言われ、謝った。

「ですが、穂乃果は連れてつてくれるんです。私やことりでは勇気が無くて行けないような素晴らしいところに……！」

「海末ちゃん……。」

ステージの上にいる穂乃果を見上げながら、笑顔で語る海末の言葉に心の底から温かい何かが湧き上がってくるのを感じた。

「私が怒ったのは穂乃果がことりの気持ちに気付かなかったからじゃなく、穂乃果が自分の気持ちに嘘をついているのが分かったからです。」

「その通り。俺だって、あの時お前が自分の気持ちに嘘をつき、みんなやお前自身が抱いた夢を捨てようとしていたから本気で怒ったんだぞ？」

海末と志郎はそれぞれ穂乃果に向けて抱いた怒りの真意を彼女に教えた。

「穂乃果に振り回されるのはもう慣れっこなんです！だからその代わりに連れてつてくください！私たちの知らない世界に！」

「俺もまたこの時代に生まれてお前たちと出会い、武田勝頼として生きてきた37年の人生と、この学校に来るまで歩んできた17年、合わせて54年にわたって知る事の無かつ

た世界を知った！」

海末が穂乃果に想いを伝えた後、志郎もまた穂乃果への想いを語り始めた。

「どうか、俺や幸雄にもその世界を見せて欲しい！願わくばお前たちが歩む夢の道を共に歩み、その果てに映る景色を共に眺めさせて欲しい!!」

それは渴望であった。かつての自分では歩むどころかスタートラインに立つことすらできなかった夢への道、その道を歩みたいという志郎の心からの願いであった。

「それが穂乃果の凄いとこころなんです！私やことりや、sのみんなだけでなく、私たちよりもはるか昔の時代を生きて来た志郎や幸雄でさえそう思っている、あなただけが持っている最高のとりえなんですから!!」

海末は穂乃果にそう言うと、ステージの上に入り穂乃果の横に並び立った。

「だって可能性感じたんだ そうだ・・・ススメ」

海末が歌いだすとそれに続くように、

「後悔したくない 目の前に」

と穂乃果も歌いだし、

「僕らの道がある」

時を同じくして空港の入り口に立つことりもまた奇しくも同じ歌を口ずさんでいた。

「さあ、ことりが待つてます！迎えに行つてきてください!!」

「ええ!!?でもことりちゃんは・・・!」

予想もしなかつた海未の言葉に穂乃果は戸惑うが、

「私と一緒にですよ。ことりも引つ張つて行つて欲しいんです！わがまま言つてもらいたいんです！」

そんなのお構いなしと言わんばかりに海未は昨日ことりと話して気づいた彼女が隠していた気持ちを穂乃果に代弁した。

「わがままあ!?!」

「その通り。海外でも名の通つたデザイナーに見込まれたのにそれを突っぱねて残れな
どと、そんなわがままを言えるのはお前しかおらんよ!」

いつの間にかステージの上上がり穂乃果の横に立つていた志郎が穂乃果の肩を叩いた。

「志郎くんまで・・・。」

穂乃果はいつもなら自分が言うはずの無茶を言つてくる海未と志郎に苦笑いするも、
覚悟を決めたのか自分の頬を両手でびしやりと叩き、

「分かった！じゃあ行ってくるよ、ことりちゃんのものに!!」

と言ってステージから飛び降り、そのまま一目散に階段を駆け上がって講堂から出て行った。

そして校門を飛び出して駆けてゆく彼女の表情には一抹の曇りも無かった。

「まったく忙しないものだ。」

「まるで風のようにでしたね。」

穂乃果を見送った志郎と海未はステージの上に立ったまま語らっていた。

「さて、では俺たちはライブの準備でもするか。」

そう言ってステージの裏方へ行こうとする志郎だったが、

「ライブの準備で思い出したのですが、そう言えば幸雄はどうしたんですか?」

と言う海未の言葉に足をピタリと止めた。

「いつもなら俺と幸雄はだいたい行動を共にしているが、今日ばかりはあいつにはこの計画の別動隊として動いてもらっている・・・いや、今回に限っては寧ろ穂乃果に呼ばれ、海未と共にあいつを動かした俺が別動隊で、幸雄自身が本隊だというべきかな。」

「どういう事ですか？」

志郎の意味深な物言いに海未は怪訝な表情で志郎に問いを投げかける。

「幸雄は昨日までに俺たちに様々な策を授け、動かしてきただろう？言つてしまえば全てが今日この時のための布石だったのだ。そして幸雄は今日、それら全てを利用しこの『μ s 復活計画』の王手を掛けるために自ら動き出した。」

「まさかとは思いますが、幸雄が今いるのは……！」

「ああ。幸雄は空港にいるだろうな。そして今この時、間違いなくことりと接触しているだろう。」

志郎の言葉を聞いた海未が走り出そうとするが、志郎が左腕で彼女を遮り制止した。

「なぜ止めるのですか？」

海未は眉間にしわを寄せて志郎を睨み付けるも志郎はそれに気圧されることなく、平然とした様子で、

「今さら行つたところでどうにもならん。今は穂乃果と幸雄を信じ、3人が戻ってくるのを待つべきだ。」

と海未に待つように促した。

「志郎の前でこんな事を言うのは憚られますが、私は彼の事を信じる事ができません。いつも軽薄で、何があつても訳知り顔で高みの見物を決め込み、人の想いを逆撫でるか

のように先を見据え、その想いすら利用する……。そんな彼を私は信用できません……！」

正直なところ、海未は最初から幸雄に対してあまり良い印象は抱いてなかった。だがそれはあくまでも彼の軽薄な性格から来るものであり、実際に志郎と共に、sの為に尽力していることを知っている以上、嫌悪感を抱くという所までに行くことはなかった。

だが、この一連の騒動で穂乃果がスクールアイドルを辞めると言い出した時には他人事のような様子だった上に、今日までの数日間においては穂乃果以外のメンバーの行動をすべて利用しているかのような動きや物言いを見せていた事で、彼女の幸雄への不信感行きつく所まで高まっていた。

そんな幸雄がことりと接触しているという事を聞いて、彼が大事な幼馴染みであることりに何をしでかすかという不安と、そんな事は絶対にさせないという使命感を海未は抱いていたのだ。

「なるほど。確かにお前があいつを信用できないという気持ちは分からんでもないな。」

「え……？」

幸雄に全面的な信頼を置いているであろう志郎の口から出てきた言葉に海未は思わ

ず困惑した。

「確かに俺とて時々あいつに不信感を抱くことはある。現に岩櫃城に俺を誘ったのだから、ひよつとすれば俺の首を北条に渡して生き残りを図ろうとした策なのかもしれない」といふ思いがわずかによぎつた事もあるくらいだからな。」

志郎はかつて武田家滅亡の折に新府城から真田昌幸と小山田信茂からそれぞれ自分の居城に来るように誘われた時の事を挙げて幸雄に対する想いを語り始めた。

「それなのに、なぜ志郎は幸雄を信じられるのですか？」

「あいつは確かに信用できない所もあるが、俺の期待に期待以上の結果で応えてきてくれたからさ。あいつに沼田城や上野こうずけの攻略を任せたら見事な戦果を挙げてくれた。そしてこの時代でも変わらず俺が求めれば知恵を貸し、見限られかけもしたが結局ここまですべて来てくれた……。」

志郎は今まで幸雄が自分のためにしてきてくれたことを思い出しながら語り続け、海未はそれを黙って聞いていた。

「確かにあいつは打算に塗れ、とことん不実な男だが、自分のやるべき事に対しては誰よりも熱心で誠実な男だ。たとえ自分が泥を被るような事をしてでも、sを支える覚悟があいつにはある。俺にできるのはその覚悟を汲み、周りからの不信感を一手に受けるであろうあいつを信じることだけさ。」

「志郎……あなたは凄いですね。」

海未は、幸雄の信用ならない側面もひっくるめて彼を信頼しているという志郎の器に圧倒されると同時に、自分の未熟さを実感させられた。

「それにあいつは俺のブレーキにもなってくれるからな。そりや信用もするさ。」

志郎は笑って海未の言葉に答えるが、一転して真剣な表情になり、

「一言断っておくが、あいつの策にゴーサインを出したのは他でもないこの俺自身だ。もしもの事があれば責任を負うつもりだし、恨むならあいつじやなく、あいつを動かした俺を恨んでくれ。」

と、幸雄をことりに接触させた責任が自分にある事を示し、恨みをぶつけるなら自分にぶつけるように海未に頼んだ。

「はあ……。あなたにそう言われたら仕方ありませんね。ここはひとまず幸雄を信じて待つことにしましょう。ただし、全部が終わったらたつぷりと話したい事があるので覚悟してくださいね?」

志郎の懇願を聞いた海未はため息を一つ吐くと、そう言ってステージの裏方に向かって歩き出した。

「ふう……。。」

海未の背中を見送った志郎は何とか難を逃れたと言わんばかりに安どのため息を吐

くと、

「俺たちやみんなのこれからは全てお前に懸かっているんだ。しくじつてくれるなよ。」
と誰に言うでもなくそう呟いて海未の後を追うように歩き出した。

そして、穂乃果が海未と志郎に送り出されたのと時を同じくして空港では——

「ど、どうして・・・？どうして幸雄くんがここに・・・？」

「よおことり。せつかくなんだ、ちったあ話でもしようぜ？」

——策の終止符を打つべく比興者がその貌に歪んだ笑みを浮かべ、遂に動き出す

61話 比興者と情弱者

「どうして幸雄くんがここに・・・!?」

穂乃果がことりを迎えに行くべく学校を飛び出して空港に向かつて行くのとほぼ時を同じくして、空港ではことりが本来そこにはいないはずの幸雄と対面していた。

「よおことり。せっかくなんだ、ちったあ話でもしようぜ?」

幸雄はことりの問いに答えることなく、ただいつものようにへらへらと笑いながら彼女に話しかける。

「私、今日日本を発つて事以外誰にも言っていないのに・・・」

「そうだな、俺もそれ以外なくんにも情報は知らなかつたさ。だが、お前さんならこつちに来るだろうなって思ってお前さんが来るよりも早くここに来てちよつと張つてたのさ」

「どうして? 私がここじゃない方の空港に行つてたかもしれないのに・・・、それに私がもう飛行機に乗つてたかもしれないのにどうして待つてたの!?!」

常識を考えればことりの言うように別の空港に行く可能性や既に旅立っている可能性があつたというのにこの時間にここにやってくることを確信していたかのように

待つていた幸雄の行動が理解できなかったことりは叫ぶように幸雄に問いかけた。

「そりやあ俺だつて予想が外れるかもつて考えはしたさ。だがな——」

と、幸雄は何事もないかのように彼女の言葉に答えると、手に持つていた何かを天井に向かつて投げ、

「所詮人生の選択なんぞ博打に過ぎんよ。当たればよし、当たらなくともそんな時やそんな時さ。だが俺だつて適当に選んでるわけじゃあない。いろんな可能性を仮定し、吟味し厳選し、どれが最も正しいか自分に利をもたらすかを考えて選んでる。今日この時だつてそうさ」

落ちて来たものを掴み、それをことりに見せながら自分の人生観を語った。

「サイコロ……?」

幸雄の手に握られていたのは3つのサイコロだった。出目はそれぞれ4、5、6であつた。

「ふむ、シゴロか。いい目だな、まさにドンピシャでことりと鉢合わせた俺を象徴するかなのような出目だ」

幸雄はサイコロの出目を見て楽しそうに呟く。余談だがシゴロとはサイコロ3つを使いその出目で争う賭博、チンチロリンにおいて上から3番目に良い出目であり、出すのはなかなか難しい。

「あ、それで幸雄くんはどうしてここに来たの？」

「ことりが思い出したように幸雄にここに来た理由をたずねた。」

「せっかくの門出に誰も見送りに来ないなんて寂しいだろ？　それで俺が見送りに来たってわけよ、個人的に色々話したい事もあるしな」

「でも・・・」

「なあに、お前さんが乗る便が出るまで・・・、というか搭乗時間まではまだ余裕あるだろ？」

「う、うん。少しだけなら・・・」

「こどりの了承を得た幸雄は待つてましたとばかりに語り始めた。」

「今から俺はお前にとっちゃ非現実的で到底信じられないような事を話す。一応お前以外のメンバー全員に話してあるからその辺は安心して聞いてほしい」

「何を話すの？」

「俺たちが何者なのか・・・。その正体を、な」

幸雄はニヤリと笑いながらこどりにそう言った。

幸雄は自分と志郎が戦国武将の生まれ変わりである『転生者』で、この時代に生まれ変わる前は真田昌幸と言う戦国武将としてその生涯を全うしたことを簡潔に話した。

そして志郎がどうして音ノ木坂学院の廃校問題に穂乃果たちと共に立ち向かったのか、何故々、sに力を貸したのかという事についても語った。

「——これがお前たちに明かせる俺たちの全てさ」

「そうなんだ……。びつくりしちゃった」

「まあ、いきなりクラスメートが自分は戦国武将の生まれ変わりだなんて言い出してびつくりしねえ奴なんざいねえわな」

「でもどうしてそんな秘密を私に話してくれたの？」

「お前さんとはここで最後になりそうだからな」

ことりの素朴な質問に対して幸雄はそれまで彼女と和やかに談笑していた雰囲気から一変、冷徹な声で応えた。

「最後？」

幸雄の冷徹な声色とその言葉に反応したことりの顔を見て幸雄は、心の奥底でしめたとほくそ笑むも、表情を変えずにそのまま話を続ける。

「ああそうだ。お前さんは俺たちが卒業するくらいまでは戻ってこないんだろう？」

「う、うん」

幸雄の意図がいまいち掴めないことりは戸惑いながら頷く。

「俺たちだって大学以降の進路は別々になるんだ。なら他の連中ならともかく、今年の春に転入したばかりのぼつと出の俺たちとなんかあつという間に疎遠になっちゃうだろ」

「そ、そんな事ないよ！志郎くんも幸雄くんも大事な友達だから疎遠になんて……！」
幸雄の言い放った言葉にことりは若干食い気味に反論するも、幸雄はあからさまに大きなため息をついて、

「なぐるほど、お前さんもあれか。『変わらぬ友情』なーんてものを信じちゃってるクチか」

と、呆れと蔑みを混ぜたような表情で皮肉るような口ぶりですう言った。

「それってどういう……」

ことりは幸雄の言葉に嫌悪感を感じるも、それを表に出さず幸雄に問いかける。

「いやあ、前々から思っちゃいたがお前さんずいぶんとおめでたい感性をしてるなと思ってるな。」

「え……？」

「だってよお、いつの世だって人の心つてもんは些細な事で変わっちゃうのが真理だつてのに、その人の心から生まれる友情が絶対不変のものだって愚直に信じてるなんておめでたい以外の何物でもないだろうがよ！」

幸雄はまるでことりを嘲笑するかのようにそう言い放った。

「やめて！何がおかしいの幸雄くん!？」

ことりは幸雄の言葉に耐えかねてそう抗議するが、

「んな事言われてもなあ……。現に穂乃果と喧嘩別れしたまんま仲直りすらできてねえ、その不変の友情とやらが現在進行形で崩壊に向けてまっしぐら状態なお前さんに言われてもな〜んの説得力も感じねえなあ。」

「っ……っ！」

幸雄は動じるそぶりさえ見せることはなく、ことりが言いくるめられる形になった。それもそのはず、幸雄はことりと同年ではあるもののそれはあくまでも『武藤幸雄』と言う人物としての話で、彼自身は『真田昌幸』として65年にわたる生涯を全うし、合わせて82年にもなる歳月を生き続けて来たのだ。

17年しか生きていないことりと比べればベテラン中のベテランである幸雄が舌戦で不利になる事はよっぽどの事態がなければありえないだろう。

「俺は確かに忠告したはずだが、早いうちに打ち明けといた方がいいってな。なのにお前さんは相変わらずうじうじぐだぐだと穂乃果に打ち明けなかつたからこうなつたんだろうがよ」

先ほどまで嘲笑していたところから一変して、冷徹な表情で幸雄はことり現実を突

きつける。

「此度の事で薄々思つてたんだがよお……お前つてバカ野郎だよな」

「……」

幸雄の言葉にことりは反論できずに黙りこくってしまった。

「ふん、言い返すこともできねえか。そりやそうだよな、さつき俺が言ったことは全部事実だもんなあ！」

「……」

幸雄はさらに語気を強めてことりを詰るようにそう語っていたが、それでも反論するそぶりを見せないことりに対し幸雄は苛立ちを感じ始めていた。

「……前言撤回だ。お前は馬鹿野郎ですらない。情弱なんだお前は！」

幸雄は志郎の前でさえ出したことのないような大声で胸ぐらを掴まんばかりにことにそう言うその表情は怒りに染まっていた。

「*ts*が発足してからずつとお前らを見て来たが、一番気に食わなかったヤツが一人だけいた。それがお前だよ南ことり」

「私……?」

ことりは戸惑った様子で幸雄の言葉に反応する。彼女自身、普段はお茶らけたような表情や言動をしている幸雄がここまで激しく人に怒りを向ける姿を見るのは初めてだ

から無理もない話だった。

「お前はいつも何かを決める時、自分の意思ではなく他人の意思を尊重していたな」

「う、うん」

「それはとても素敵な事だろうよ、確かに美德だと俺も思う。だがそれは自分の意思があつて初めて成立するものなんだ。お前には自分の意思というものがいつだって存在していなかった」

「そんな事——」

「いいや、その通りだ！現にお前は留学の件だって『穂乃果がどう思うか』とうじうじ思
い悩んでいただろう。お前は自分の意思で決定すべき事すら他人の意思に委ねようと
していた！」

ことりは幸雄の言葉に反論しようとするも、幸雄の剣幕と怒気に押し負けてしまつた。

「お前は自分の意思で動くことのできない臆病者だ！否、むしろ臆病者という言葉さえ
お前には高尚すぎる！お前は懦弱な人間だ！！俺が最も忌み嫌う存在だ！！」

幸雄はついに我慢できなかつたのかことりの胸ぐらを掴み、自分の内面に燻らせてい
た怒りと憎悪を言葉に乗せて叩き込んだ。そして何度か肩で息をして呼吸を整えると、
ことりから手を離しました語り始めた。

「……臆病者は決断するまでの過程が長く、決断することを躊躇いこそすれど、必ず己の意思で決断するもんだ！だがお前はどうか!? お前は今までいつだつて『誰々がやりたのなら』つて言つていただろう? それこそがお前を情弱たらしめるものだ!! 自分も自我も持たずいつも人に委ねてばかりのお前が情弱でなく何だと言うんだ!？」

「それは……」

ことりは反論できなかつた。今までの自分の行動を振り返つてみれば確かに幸雄の言う通り、決断する場面において他のメンバーの意思に阿る所があつたのは否定できない事実であつたからだ。

「そっういえばバカ野郎で思い出したが、*Ms*にはお前以外にもう一人特大の大バカ野郎がいたなあ」

幸雄はふと何かを思い出したかのように指をパチンと鳴らすとそれまでの真剣な表情から一変してニヤニヤ笑いながらことりに語りかける。

「……?」

いきなり幸雄の様子が変わった事にことりはまた戸惑いを隠せない様子だったが、幸雄はそれにはお構いなしといった様子で目を細め、ニヤリと口角を上げてその人物の名を告げる。

「穂乃果だよ」

「!？」

「だってそうだろ？あいつ自分の幼馴染みが分つかりやすく思い悩んでたのにそれに付きもせず、さらには志郎たちの忠告に耳を傾けず無茶な練習を行って体を壊して学園祭を台無しにし、ラブライブを棄権する羽目になった上に、最終的にはお前と喧嘩した後スクールアイドルを辞めるとほざいた奴がバカ野郎じゃないわけ——」

「それ以上穂乃果ちゃんを悪く言わないで！」

幸雄の言い様に不快感を感じたことりは幸雄に初めて本格的な抵抗の意を示した。

「バカ野郎の片割れであるお前に反論する資格なんざねえよ。それにな、お前は知らねえだろうがあいつのせいでも、sは崩壊したんだぜ？」

「えっ!？」

幸雄の言葉に驚愕することりの表情を見た幸雄はわずかにニヤリと笑い心の奥底でしめたと呟き、さらに畳みかけるように語り始める。

「お前はしばらく休んでたんだ、知らねえのも無理はない。穂乃果がスクールアイドルを辞めたってほざいた時、海未と喧嘩になってよ。んで志郎も穂乃果に辞めるのを思い留まらせようとしたが失敗、首魁である穂乃果がいなくなった以上活動を続けても意味がねえって事で俺たちは解散したのさ」

「嘘！だって海未ちゃんはみんなで心の整理をつけるために活動を休止したって……」

「なんだ海末のやつ、こんな所で妙な氣イ遣いやがって。まあ幼馴染みに氣を遣う氣持ちも分からんでもないが、現実はやんと伝えるべきだぜ。よく考えても見ろよ、活動休止なんて言ってるがスクールアイドル活動してるのがにこ、凜、花陽の3人だけつうメンバーの半分にも満たない状態で他の連中は練習にすら参加してねえ、こんなどっからどう見ても実質解散してるようなもんじゃねえか。違うか？」

「それは・・・」

幸雄が流れるように並べ立てた正論を前にことりは反論できなかつた。もつとも、この時既にことり以外のメンバーが志郎の説得により、s復活の為に結集し動き始めているので幸雄の言っていることは嘘になる。だがそれこそが幸雄の策であつた。幸雄は嘘の情報（実際昨日までは彼の言う通りの状態ではあつたのである意味では本当ではあるが）を用いてことりの心をかき乱しているのだが、それだけが彼の狙いではない。

そしてことりの様子を見て幸雄は、さらなるダメ押しとして切り札を抜く。

「あいつは度し難いバカ野郎だぜ、あの日あいつなんて言つたと思うよ？『私がスクールアイドルさえやって無ければこんな事にはならなかつた』だぜ？」

「穂乃果ちゃんがそんな事言うわけ・・・」

「いや、確かに言つた。これが証拠さ」

幸雄はことりに向かつてボイスレコーダーを突き出し、録音を再生した。ボイスレ

コーダーからはあの時の屋上でのやり取りが流れてくる。

「……!」

録音を聞かされたことりの表情が絶望に染まる。もちろん幸雄の攻勢は止まらない。「俺たちはここまで来るのに色んな奴らを巻き込んできたよな。それなのにあいつは……、よりにもよつて発起人であるあいつが『こんな結果になるならやらなきゃよかった』なんて言い放ちやがったんだぞ?! あいつは自分だけならともかく、他のメンバーや最初からついて来た海末やお前、志郎の努力さえも否定したんだぞ!! 人の努力や夢を散々否定しやがった挙句に今まで積み上げてきたものをいとも簡単に投げ捨てやがった奴がバカ野郎じゃないわけねえだろうが!!」

幸雄は歪な笑顔を浮かべながらことりをまくし立てる。

「最初はあるつなら天さえも掴めると信じ、約束を果たすに相応しいと思つたが故に志郎と共にお前らに付いて来たが、こんな馬鹿馬鹿しく実にくだらないう結末で終わるとは思いもしなかつた! 人を見る目には自信があつたが穂乃果がこれほど度し難い大バカ野郎だと見抜くこともできなかつたとは俺も衰えたもんだ!! はっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

そして幸雄は絶望に打ちひしがれることりを前に、とどめを刺すかのように笑い声をあげ始めた。彼女の想いをすべて否定して打ち砕かんとするように、これでもかと言わ

んばかりに大仰に呵々大笑する。

「俺も志郎もとんだ茶番に付き合わされたもんだ！ まったく、貴重な花の高校生活を半年近くも無駄にしちまったんだからな!! はははははははははははははははははははははは!!」

幸雄の悪趣味で下卑た嘲笑が空港のロビーに響き渡る。その異様な光景を目にした通行人は眉を顰め、ひそひそと同行者とその不快なさまを語ったりしていたが、幸雄にとつてはただ見てるだけで自分の行いを咎めも止めもしない凡人の非難の眼差しなど気にも留める価値もなかった。

（——さて、ここまでは俺の計画通り。だいぶ煽りすぎた感もあるがことりめ、どう動く?）

呵々大笑している中で幸雄は脳内で冷静に思考を重ねていた。ことりの心を揺さぶるために露悪的に振る舞い、嘘と真実を巧みに混同させた情報で攪乱し、彼女自身と穂乃果を嘲笑する。ここからことりがどう動くかで全てが決まると幸雄は考えていた一方で、前日に志郎が彼に掛けた言葉が脳裏をよぎった。

——もし成功したとしてもお前とことりの仲は確実に決裂する事になるぞ!!

それは幸雄のこれからを案ずる言葉であった。もし仮に彼の策が成り、ことりが留学

を取り止めて戻って来たとしてもことりととの間に決して埋まる事のない溝ができてしまふのではないかと、志郎は危惧していた。

(どうなるうつつたつて大丈夫さ、俺は比興者なんだからな。今さら誰か一人だろうが九人だろうが嫌われたつてどこ吹く風だぜ。お前がいて、果たすべき約束があるかぎりな……)

幸雄は心の中でそう呟く。彼の覚悟はどうに決まっていたのだ。故に腹をくくり、策を企てたからには最後までそれを全うする。それこそが武藤幸雄の比興者としての矜持だった。そして彼が大笑しながら様々な思いを馳せていたその時——

パシー——

幸雄の嘲笑をかき消すかのように、乾いた打撃音が響く。

「——え？」

幸雄は突如として響いた打撃音と、自分の頬に突然生じた鈍い痛みに驚愕し、何が起こったのかを確認するために前を見ると、そこには——

「……」

——
右手を振り抜いた状態で肩で息をしていることが立っていた。

番外編

番外編 登場人物紹介

諏訪部志郎（武田勝頼） イメージCV：小野大輔（空条承太郎寄りの低い声）

身長：175cm

血液型：B型

誕生日：4月3日（太陽暦での勝頼の命日）

この物語の主人公。都内のある高校に通っていたが、親友を守るために暴力沙汰を起こしてしまい退学させられそうになるが、親友とその両親、そして彼に同情する生徒たちの嘆願により転校で手を打たれ、音ノ木坂学院に研究生として転入することになった。

性格はいたって冷静な常識人だが、たまに後先考えずに突っ込んだりするなど猪突猛進な一面がある。また信義を重んじる一本気な男でもあるが頑固というわけではなく考え方は割と柔軟である。

気が緩んだり、感情が高ぶると勝頼だったころの口調が出てしまう。

身体能力はかなり高く、特に足が速い。一度走り出せば彼に追いつくことが出来る人

はなかなかいない。ケンカにも強く、暴力沙汰を起こした時も抵抗を受けたが彼に傷を負わせられた者はいなかった。ナンパ男に襲われた際にはプロレス技のエルボードロップを披露したが、本人にプロレスの知識はない。

その正体は武田家の最後の当主、武田勝頼その人である。詳しくは [wiki](#) 参照。1582年に起きた「天目山の戦い」で妻の北条夫人と息子の武田信勝と共に自害するが、現代に再び生を享けた。

武田家を滅ぼしてしまったことを強く悔いているが、「過ぎたことを気にしていてもどうにもならない。同じ過ちさえ繰り返さなければいい。」と割と前向きに考えるようにしている。でも長篠の戦いはトラウマ。また、最近は再評価されているとはいえ自分が「武田家を滅亡させた暗愚な将」と評されていることは認めている。

μ's のメンバーの一部に対して過去の自分が重なって見えることがあり、彼は彼女たちに自分と同じ轍を踏まないように助言し、幸雄と共にサポートしていく。

かつての宿敵であり盟友でもあった北条氏政の生まれ変わりである北村政康とは殴り合いの末に和解し、この時代における盟友の一人となる。

同じ研究生の幸雄とは早くに意気投合して親友となる。また、同じく戦国時代から生

まれ変わった者（元々は主従）として、お互いを一番信頼している。二人っきりの時には、昔の口調で話し、かつての名で呼び合っている。

没になったが、もしこの作品に恋愛要素があつたら志郎の恋人候補になるのは穂乃果、海未、花陽、絵里、真姫である。

武藤幸雄（真田昌幸） イメージCV：中村悠一

身長：174cm

血液型：AB型

誕生日：7月13日（太陽暦での昌幸の命日）

主人公の志郎の親友。群馬県で生まれ育ち、父親が東京に転勤してきたことでそれに付き添い自らも東京に引っ越した。音ノ木坂学院に入った理由は母が音ノ木坂学院の出身で廃校しそうになっているという噂と、共学化に向けた研究生を募集しているという話を聞きつけ、母を通じて志願した。志願した理由は「女子高に入ったらハーレムを満喫できそうだったから。」と不純極まりないものだったが、登校一日目にして現実を思

い知らされる。初めての都会生活を満喫しており、秋葉原は一番のお気に入りスポットであり、オタクではないがサブカルチャーの知識もそこそこある。

性格は飄々としていて掴みどころがない。綿密に計画を練ってから動くタイプだが割と投げやりだったりする。時には普段の飄々とした態度からは想像できないほどの非情さを見せる。損得の見極めが上手い。人を煽るのが上手く、煽らせたら右に出る者はいない。志郎と同じくふと昔の口調が出てしまうことがあるが、志郎よりは上手く抑えられている。

実は意外と成績優秀だったり、志郎と同じく身体能力に長けるなど文武両道であるが、志郎のような突出した運動技能を持っていないわけではない。また、それを買われて生徒会に先生から勧誘され、仮入部ならぬ仮所属している。志郎同様ケンカが強いが、志郎とは違い力押しではなく技と策を用いており、搦め手からの攻撃を得意とする。

その正体は、武田信玄と勝頼の二代に仕え、その知力を以て乱世を生き延びた『表裏比興の者』真田昌幸その人である。詳しくは [wiki](#) 参照。紀州九度山で生涯を終えるがかつての主である勝頼と同様に現代に生を享ける。

特に前世に対する心残りは無く、新しく生まれ変わった現代を心から楽しむのが彼の目標。『表裏比興の者』と言われているが、信玄や勝頼に対する忠誠は本物で志郎と出会

いその正体を看破してからは、志郎や彼がサポートするμsをサポートするために尽力する。

他の戦国武将の生まれ変わりと交流をとるためにオフ会を開き、人脈の確保に成功した。

没になったが、恋愛要素があつたら幸雄の恋人候補はことり、凜、希、にこ、真姫である。

真姫が両方にいるのはどっちが恋人になっても違和感が無いからである。

番外編 登場人物紹介② 転生者編

鶴崎渚（大祝鶴姫） イメージCV：三澤紗千香

身長：161cm

血液型：B型

誕生日：6月26日

志郎と幸雄がミナリンスキーの正体を探るためにやって来たメイド喫茶で『お鶴さん』と呼ばれながら働いていた少女。流れるような黒髪のロングヘアに凛とした目付きが特徴的な大和撫子の理想形と幸雄に評される。性格は割と気さくな方で、志郎や幸雄たちとはすぐに打ち解けた。怒ると尋常じゃない殺気を放ちながら相手に詰め寄るタイプで、ミナリンスキーがマナーの悪い客に絡まれた時も殺気と話術を巧みに使いこなして相手を退散させたかなりのやり手。合気道や空手も嗜んでおり、弓も撃てるらしい。転生者の集まるサイト『転生者の夢幻郷』では『瀬戸内の鶴』と名乗っている。

その正体は架空の存在だとされていた『瀬戸内のジャンヌダルク』こと大祝鶴姫。詳しくは [wiki](#) 参照。

UTX高校に通っている高校3年生で、A—RISEのメンバーとはクラスメイトで

友人関係にある。2年生の頃に、ツバサに普通の人間ではないことを看破され、自らの正体を彼女たちに話した。受け入れてもらえないかもしれないという不安はあったが、彼女達はこれをすんなり受け入れ、今でも友人関係が続いている。UTXの生徒曰く、最もA—R I S Eに近い人物。

北村政康（北条氏政） イメージCV：関智一

身長：175cm

血液型：A型

誕生日：8月10日（太陽暦での氏政の命日）

志郎が音ノ木坂学院に来る前に通っていた高校に通っている高校2年生。志郎とは別のクラスであり交流自体は少なかったが、幸雄が主催したオフ会で再開したのと互いの正体を知ったことで交流を深める。オフ会後に志郎に彼が去った後の学校で起きた出来事を教えた。中性的な顔つきに鷹のように鋭い目つきをしており、顔面偏差値は転生者組の中でも1、2を競うほど。また、μ_sの最初期からのファンで推しメンは海未である。『転生者の夢幻郷』では『獅子の息子』と名乗っている。

その正体は小田原を拠点として関東地方を席卷した東国の覇者、北条氏政。詳しくは

Wiki参照。

志郎もとい勝頼とは盟友であり宿敵でもあるという戦国時代特有の複雑な関係であり、互いの正体を知った時は盛大な殴り合いに発展した。北条氏政は歴代当主の中ではあまり個人的武勇に優れてるわけではなく、戦闘力では勝頼に一步か二歩ほど譲る。だがこの時代に生まれ変わってからかなり鍛えたらしく、志郎と互角に殴り合えるだけでなく、守りに入れば志郎の攻勢を余裕で捌ききるほどにまで成長している。幸雄曰く防御特化型で守りは小田原城のように堅いとのこと。

浅倉良景（朝倉義景） イメージCV：緒方恵美

身長：154cm

血液型：AB型

誕生日：9月16日（太陽暦での義景の命日）

幸雄が主催したオフ会に参加した小学6年生。常にニコニコしており表情が読めず、発言も人を食ったようなものばかりで本心が読めない。卓越した観察力の持ち主であり、人の真意や本質などを見破る『炯眼』の持ち主である幸雄でさえも掴み所の無い人物と評している。『転生者の夢幻郷』では『越前の遊興王』と名乗っている。

その正体は越前の大名、朝倉家の最後の当主である朝倉義景。詳しくは [wiki](#) 参照。

世の中のあらゆる事象を『遊び』と考え、自分でさえも『乱世というおもちゃ箱で遊んでいた愚者』と評していた生粋の遊び人。行動する基準は『愉しいか愉しくないか』、または『面白いかそうでないか』で決める。かつて盟友の浅井長政と共に繰り広げた織田信長との戦いもただ『面白い』からやっていただけとのこと。志郎だけでなく、弁舌に優れ、煽りの名人でもある幸雄を相手に有利な状態で論戦を繰り広げるほどの弁舌を持っている。現在の名前とかつての自分の名前の読みが同じなのが最近の悩み事らしい。

大岩夢路（長宗我部盛親） イメージCV：梶裕貴

身長：168 cm

血液型：O型

誕生日：6月11日（太陽暦での盛親の命日）

幸雄が主催したオフ会に参加した中学3年生。活発な性格で、鼻のあたりに獣か何かにつ搔かれたような生傷の痕がチャームポイント（本人曰く強さの証）。小学生のこ

ろまで田舎で暮らしていたらしいが卒業してからは家族と共に上京した。幸雄のことを『左衛門佐の親父どの』と呼んで懐いている。身体能力は高く、志郎以上に脳筋。『転生者の夢幻郷』では『RTO』と名乗っている。

その正体は四国を統一した長宗我部元親の息子にして、大坂の陣では真田幸村や後藤又兵衛らと共に戦った『大坂浪人五人衆』の一人の長宗我部盛親。詳細は [wiki](#) 参照。前世では長宗我部家の再興に執念を燃やしていたが、現世に生まれ変わってからは長宗我部家が、叔父の末裔によって再興されていたことを知り、幸雄同様に現世での生活を目いっぱい楽しむようにしている。本人が言うには陸上部に所属しているとのこと。土佐犬を飼っており『相棒』と呼んでいる。また、雪穂と亜里沙と同級生であるらしい。

吉田輝久（毛利輝元） イメージCV：羽多野渉

身長：182cm

血液型：A型

誕生日：6月2日（太陽暦での輝元の命日）

幸雄が主催したオフ会に最後に参加した20歳の大学生。顔立ちが整っており眼鏡を掛けている。だが気弱な性格であり、他の面々からは『優男』と印象付けられてしま

う。お坊ちゃんオーラが出ているがごく普通の一般家庭出身。現在は教師を目指して猛勉強中。『転生者の夢幻郷』では『ボンボン中納言』と名乗っている。

その正体は、毛利元就の孫でありながら不手際で西国の太守から西国の一大名にまで転落した長州藩の藩祖、毛利輝元。詳細は [wiki](#) 参照。

幼いころから叔父の小早川隆景に折檻されながら育っており、今でもトラウマになっている。世間からは凡将、暗愚と評されているが、父譲りの人徳で多くの人を惹き寄せるところらかというところと太平の世の方が生きやすそうな人物。没落した後も家臣からは見限られることなく、支えられ続けた。志郎曰く『ほっておけないと思わせる徳の持ち主』であり、志郎からは敬意をもって接されてる。また、吉川広家の生まれ変わりである熊田広樹（後述）と友人関係にある。

熊田広樹（吉川広家） イメージCV：杉田智和

身長：185cm

血液型：B型

誕生日：10月22日

幸雄が主催したオフ会において、輝久の突然の思いつきで通話という形で一時的に参

加した。最近まではヤクザの下っ端だったがとある縁で小原というリゾートホテルチエーンの会長に雇われ、その娘の付き人をやっているらしい。輝久曰く『頭の回るインテリヤクザ』で、ガラの悪い顔つきにサングラスを掛けているというどう見てもチンピラにしか見えないとのこと。

その正体は吉川元春の息子であり、関ヶ原の戦いにおける小早川秀秋に次ぐ裏切り者の吉川広家である。詳細は [wiki](#) 参照。

毛利家を改易寸前に追い込んだ裏切り者であり毛利家を救った忠臣でもあるという、矛盾した評価を受けているが実際のところはどうか、それを知っているのは輝久と広樹だけである。経歴がなかなか破天荒だが年齢は輝久と同じ20歳。目的のために手段を選ばず、乱暴な手段に出ることが多い。実際に今の職に転職する前に所属していた暴力団の情報を洗いざらい警察にリークして壊滅させてから立ち去ったという徹底っぷり。

転生者

転生者とは過去の時代に生きていた人物がその死と同時に未来の全くの別人に生まれ変わった者たちが自分たちを指す呼称。中には他の転生者と出会う者がいればそうでない者もいる。どういう理由で生まれ変わったりするのか、最初の転生者は誰なのか

は一切不明。

分かつていることは、転生者になるのは戦国時代に生きた者であることと、その生涯の末路があまり良いものとはいえない人物が生まれ変わるということだけ。

転生者の夢幻郷

インターネットで転生について深く深く調べた者のみが行き着く事ができるというサイト。パスワードを入力した者のみが入ることが出来るが、これを解くことが出来るのは転生者かそうとう歴史に詳しい者だけだが、転生者以外が入っても『ただ武将になりきってる人だけが遊んでる場所』として気にも止められないらしい。だれが何の目的で作ったのかは一切不明。

匿名の掲示板があり、このサイトの会員はそこで交流をしている。匿名ではあるが、互いが何者かを識別できるようにハンドルネームを持つことが半ば義務化されている。

志郎や幸雄たち以外にも上で解説した人物たちや、他にも三好長慶や山中鹿之助、杉谷善住坊など様々な人物がいる。

番外編 次代の息吹

「まったく、お前は相も変わらず突拍子もないことを言い出すな。」

「まあ、こういうのも悪くないでしょ。」

「ああ、悪くはないな。ここがどこかよくわからないということを除けばな！」

今、志郎と幸雄はとある田舎町のバス停にいた。

どういう状況なのかあまりにも唐突すぎてわからないと思われるので、ここでちよつとした説明をしよう。

μ s のラストライブから年月は流れ、志郎と幸雄は大学二年生になっていた。そんな大学二年生の夏休みに志郎と幸雄は熱海に旅行に出かけようと計画した。

一日目はつつがなく終わったが、問題が起きたのはその翌日。幸雄が突然、

「せつかくの旅行だし、ただ熱海にいるだけじゃつまらねえからどっか行こうぜ!!」

と、言い出し事は始まった。

「電車とバスに乗って適当な駅で降りるってどっかの旅番組の真似事をしてたら二人しでぐつすりしてどこかわからないところについたって笑いごとにもならんのだが。」

「旅にハプニングは付き物っていうじゃねえか。それに二人とも寝てたから同罪ってこ

とでここはひとつ！」

「言わねえし、俺が言うならともかくお前が言うか!!」

「どうどう……。次のバスが来るまでまだまだ時間がかかりそうだし、こんなカンカン照りのところでじっとしてたらぶつ倒れかねんからぶらぶらしてようぜ。」

「そうだな。それがいい。」

そう言つて志郎たちはバス停から動き出した。

「そういえばここはどこなんだ？」

「ふむ……。内浦つてとこらしい。」

「内浦という沼津か。ずいぶん遠くまで来たんだな。」

「こういう見知らぬところで迷子になるつてのは穂乃果を思い出すな。」

「穂乃果か……。あいつらは今でも元気にやつてるのかね。」

「まあ、俺たちは通つてる大学こそ違うが会おうと思えば会えるんだけどな。」

「と言つても忙しくてそんな暇無いだろう。」

志郎と幸雄は見知らぬ街を歩きながら穂乃果たちの話に興じていた。

「穂乃果と海未は近場の大学に、ことりは服飾系の大学に進学して……。。」

「絵里はまたバレエの道を進んでるらしいな。希は神道を学ぶために進学、ここは芸能

界に入ったって聞いたときはビビったな。まあ、あいつ自身かなり向上心あるし努力の塊だし、問題なくやってるみたいで安心したな。凜と花陽と真姫はどうだっけ？」

「たしか花陽と凜は教育学部で、真姫は医学部に進学だよな。」

「しっかし凜が先生とは意外だな。」

「教師といっても体育関連だな。」

「ああ、それなら合点がいくな。」

「みんなそれぞれの道を歩んでるんだな……。」

「あの時を思い出しますな。」

「ああ、あの一年間は戦に身を投じてる時以上に血が沸き心が躍ったものだ。それに、最後まで物事を成し遂げることができるといふことがこれほど素晴らしいものだと感じることができた。俺は彼女たちに出会うためにこの時代に生まれたのかもしれないな。」

「ええ。そうですね勝頼さま……。わしもそう思います。」

そうして思い出話に興じながら歩き、曲がり角を曲がろうとすると、

「きゃっ！」

「うおっ。」

志郎は走ってきた制服を着ていた少女とぶつかってしまった。

「すまん、大丈夫か？ケガはないか？」

「い、いえ大丈夫です！ごめんなさい、ちよつと急いでて……。そつちこそ大丈夫ですか？」

「ああ、俺は大丈夫だ。」

「よかつたあ。あれ？お兄さん達ここでは見ない顔ですね。」

「ああ、俺たちは旅行者でな。」

「そうなんですか!? だったらうちの温泉宿に来ませんか？」

「悪いねお嬢さん。宿泊場所はもう間に合ってるんだわ……。。」

「そうなんですか。あ、内浦はいいところなので楽しんでいってくださいね！」

「おおーい！千歌く!! なにやってんのー！練習遅れるよー!!」

志郎と幸雄が声のした方を振り返るとぶつかった少女と同じ制服を着た少女たちが八人いた。

「あつ、曜ちゃん。じゃあ私はこれで！」

「ああ、部活がんばれよ。」

「はい！」

そういつて二人と少女は別れを告げた。

そして2時間後、志郎と幸雄は熱海に戻るためのバスに乗っていた。

「そういえば幸雄、あの娘は・・・千歌ちゃんと言ったか。一体どんな部活をやってるんだろうな。」

「なんだ志郎？そんなこと知って何をする気だ？ひよつとしてスト」

「んなわけあるか。ただ少し気になることがあつてな。」

「気になること？」

「ああ、彼女とその友達のもの、あの9人・・・。どこか『あいつら』に似たような雰囲気を感じなかったか？」

「そうだな。遠目ではあるがなかなか個性的な雰囲気してたな。そういう意味では『あいつら』にそっくりかもな。」

「もしもあの娘たちがスクールアイドルをやっていたらどうなるんだろうな。」

「さあ、さすがの俺でもわからねえな。」

「そうか。でも、きつと『あいつら』と同じようにどんなことでも乗り越えられるユニツトになりそうだな。」

「かもな。」

幸雄は簡潔に志郎の言葉に応えた。そして志郎は窓に映る景色に目を向けた。

志郎の目には、丘の上にある学校に向かって飛ぶカモメが映っていた。

番外編 スピリチュアルな出逢い

「希ちゃん！お誕生日おめでとー！！」

穂乃果の号令を皮切りに、希以外のメンバーと、志郎と幸雄の2人の10人によってクラッカーが鳴らされた。

いったい何事かと思う人もいるだろうが、今日は6月9日で東條希の誕生日なのだ。それを知っていた絵里やにこの発案により、希には知らせないで希の家にそれぞれプレゼントやケーキ、そして希が大好きな焼き肉を持ち寄って行き、パーティーを行なっているのだ。

音ノ木坂に来るまでの間の息つく間もない転勤の連続で、友達らしい友達を作れなかった希にとって、穂乃果達によるサプライズは効果てきめんで思わず泣き出してしまったほどだった。

パーティーはプレゼント渡し、焼き肉パーティー、そしてメインのバースデーケーキを楽しむといった段取りで行われ、楽しかったパーティーの時間はあっという間に過ぎ去っていった。

そしてパーティーが終わり、皆でパーティーの片付けをした後は希の家でお泊まりと
いうことで、穂乃果達は遊び疲れたのか早々と眠ってしまっていた。

「さて、あいつらも寝た事だし俺たちは帰ろうか。」

「ああ、いくら誕生日パーティーとはいえ、うら若き乙女達しかいない部屋に男が居座る
わけにはいかねえからな。」

志郎と幸雄は皆を起こさないように小声で話しながら希たちのいる部屋から退散し
ようとしたが、

「2人とも、どこに行くん？」

そうは問屋がおろさなかつた。

「希、起きてたのか。」

「うん、まだまだ興奮してて眠れなくなつて。」

「あちゃー、静かにささつと退散しようと思つてたけどこいつは計算外だったな。」

幸雄は戯けたような表情で自らの頭を軽く小突いた。

「ねえ、少し外で話そ？」

希の提案で3人はベランダに出た。空には月が輝いていた。

「今日はありがとうね。」

希は志郎たちにお礼を言った。

「おいおい、礼を言うなら絵里とにこに言つてやんな。」

「絵里ちとにこつちに？」

「ああ、今日のパーティーはあの2人の発案なんだ。2人とも言つてたぞ。『希は自分の事には割と無頓着なんだから私達がしつかりお祝いしてあげないと』つてさ。」

「そつか…。皆に迷惑かけちゃつたかな。」

「はい、それ悪い癖だぜ？俺たちは好きでお前さんを祝つてるんだからそういう事は言うもんじゃないぜ？」

「幸雄の言う通りだな。希は少し人に気を遣いすぎるところがあるからな。もう少しくらいあいづらや俺たちに寄つてかかってくれてもいいんだぞ？」

志郎と幸雄は希の人に気を遣いすぎるところをたしなめるが、その顔は穏やかだつた。

「うん。そうかもしれないけどね、うちの事はもう知つてたつけ？」

「希の事？ああ、そういうや高校に入るまで色んなところに転校してたんだつけか？」

「うん、それでうちは友達を作つてもすぐに別れちゃうからって人と深く付き合う事に臆病になつてたけど、絵里ちやにこつち、そして穂乃果ちゃんたちμ'sの皆や、志郎

くんと幸雄くんに出会えて本当に良かったって思ってるんよ。」

希は夜空を見上げながら語った。

「だから今はすごく幸せで、絶対に手放したくないって思ってるんよ。だから皆がずっと一緒にいれるように神様にもお祈りしてるんや。」

「なるほどねえ……。」

「今まで心を開ける友がでしなかつた故に、というわけか。」

「でもよ、希は少し思い違いをしてると思うぜ?」

「うちが思い違い?」

「ああ、確かに高校生活には限りがあるしみんながみんなずっと一緒にいれるわけじゃあねえ。そりゃ確かにずっと一緒にいたら嬉しいのは俺もわかるぜ。」

「だけど俺たちは皆を結びつけるのは直接的な繋がりではなくて縁だと思ってるんだ。」

「縁……?」

希は首を傾げた。

「そうだ、神社で働いてるお前なら言わずとも分かるだろうがな。人と人は縁で繋がってると俺は考えてるんだ。縁が強ければ強いほど離れ離れになってもまたどこかで会える可能性が増えるっていう具合にな。」

「今俺たちが持つてる『μ_s』という直接的な繋がりがあるからこそ俺たち11人が集

まったのは確かだ。でもさ、俺たちは出会うべくして出会う運命にあつたんじやないかって思うんだよ。」

「出会うべくして出会った……。」

「そう、現に俺と幸雄も縁が無けりやこの時代に生まれ変わる事もなかっただろうし、」

「この時代でまたダチとして同じ学校に通うなんて事はなかっただろうよ。」

「そして俺たち2人を結びつけてた縁が、お前たち9人の縁に引かれて今の俺たちがあると考えているんだ。」

「イミワカンナイって思ったらスルーしてくれてもいいけどな。」

志郎の話が終わると、幸雄が真姫のモノマネをしながら希にまた語りかけた。

「まあ、何が言いたかったのかっていうと、俺たちはそう簡単に離れ離れにならないから心配しなくてもいいってことだ。」

「全く、変にカツコよくまとめちやってまあ。『あの頃』のお前だったらそんな気の利いたセリフなんて絶対言えなかつたくせによ。」

「俺だって成長するさ。お前ほど長生きはしなかったが、少なくとも希たちの3倍は生きてるんだからな。」

志郎は誇らしげに語る。

「でもまさか、400年も前に生きてた人達が友達になつてるなんてうちらは思いもし

なかつたなあ。」

「あの時俺の正体に薄々感づいてたくせによく言うぜ。」

「ああ、そういうえば志郎は希に初対面で『普通の人とは違う気がする』って言われたんだっけか。」

「うちは他の人には見えないものがたまに見えるからね。幸雄くんを見た時もなんか志郎くんと同じ雰囲気かしてたんよ?」

「えっ、マジか! 志郎よりかは上手く隠せてると思つてたんだがなあ・・・。」

「うちの目は誤魔化せんつてことやね。でも流石にまさか戦国武将の生まれ変わりだつていうのは気づかなかつたんよ?」

「いや、逆に気づかれてたらこええよ。」

「話は変わるけど2人とも素敵な誕生日プレゼントをくれたよね。正直もつと渋い物かと思つてたな。」

ちなみに志郎が贈ったプレゼントは真珠がついた(もちろん作り物)のペンダントで、幸雄はムーンストーン(こつちも作り物)をあしらったブレスレットと、確かにかつて戦国武将だった男達にしてはえらく現代に馴染んだ物だった。余談だが、真珠もムーンストーンも希の誕生石である。

「おいおい、さつきも志郎が言つてたけど俺たちは確かに戦国時代で生きてきたけどお

前達と同じように17年間この世界でも年を重ねてきたんだぜ？17年も生きてりや嫌でもこの時代に馴染むさ。」

「まあなんにせよ、俺たちを引き合わせてくれたμsの慈母たる希には感謝しなくてはな。」

「ああ、そうだな志郎。」

そして志郎と幸雄は希の方に向き直り、

「希、お誕生日おめでとう。そしてこの時代に生まれてきてくれてありがとう。」
と言った。

「うん！こつちこそ皆に出会えてすごく嬉しい!!」

希は屈託のない笑顔で返した。

「さ、そろそろ俺たちはお暇させてもらうか。」

「ええ〜！2人ともうちら皆と一緒に寝てくれなきややだ〜！」

希が甘えるように二人の服を引っ張る。

「子供じゃねーんだから……。」

「甘えてもいいって言ったのはそつちの方やん！」

「まあ、仕方ないさ幸雄。今日くらいは年長者（中身的な意味で）として甘えさせてやろう。」

そして3人は小声で戯れながら部屋に入った。志郎達は結局帰らず、そのまま穂乃果たちとは少し離れた場所で眠ることにした。

「ふふ．．．。うち、本当に幸せ．．．！」

希はベッドの中で静かに、そして幸せそうに呟き眠りについた。

こうして、希にとって幸せだった1日は終わりを告げ、夜は更けていった…。

番外編 笑顔の魔法使いと猛勇の若虎

「悪いわねえ、買い物に付き合ってもらっちゃって。」

「いや、別に俺は特に何か用事があるってわけじゃなかったし、この程度の荷物は軽いもんだよ。」

太陽が西に傾きだした昼と夕方の境い目の時間に、二人歩いていたのは志郎とにこだった。にこは買い物帰りなのか、両手に買ったものが大量に入っているであろうレジ袋を持っており、志郎は米の袋を抱えていた。

「ほんと、まさか福引でお米が当たったのはいいけど重くて動けなかったところにあんたが来てくれて助かったわ。」

志郎が抱えていた米の袋はにこが福引で手に入れた物らしい。いくら妹弟の世話をこなして少したくましくなっているとはいえ、一袋10キロの米を3つ持つというのは彼女の体格や腕力を見る限り、無理なものであった。そんなわけでどうしたものかと途方に暮れていたところに偶然志郎が通りかかって現在に至るといふわけだ。

「ねえ、あんたが力持ちなのは知ってるし、頼んだあたしが言うのもなんだけどそんなに

持つてて重くないの?」

にこが志郎に聞くと、

「ああ、確かにこれは重いな。」

志郎はそう答えた。普通の高校生に比べると驚異的ともいえる身体能力を持つ志郎でも、30キロの荷物を持つのは一苦労なようだ。

「そうよね。じゃあちよつとその公園で休憩しましょ。」

「そうだな、そうしてもらえるとありがたい。」

そう言つて二人は公園に立ち寄つた。

「ほら、これ飲みなさい。手伝つてくれてるお礼よ。」

にこが自販機で買ってきたジュースを志郎に差し出した。

「ああ、すまん。それいくらだ?」

と志郎はにこにお金を払うためにポケットから財布を出そうとすると、

「別に要らないわよそんなもの。せつかくのおごりなんだからありがたく受け取つておきなさいよ。」

とにこが志郎の顔にジュースを押し付けた。

「相変わらずプライドが高いな、あんたは。」

志郎がジューズを受け取りながら皮肉っぽく笑って言うのと、

「意地を張りすぎて命を捨てたあんたには言われたかないわね。」

にっこもまた笑ってそう言い返した。

「そう言われては返す言葉もないな。」

志郎は苦笑いした。

「別に馬鹿にして言ったつもりはないわよ。私はあんたの『前』の生き様っていうの？ 結構嫌いじゃないわよ。自分の誇りを最後まで貫いたつてのは尊敬できるところね。」

にっこがそう言うのと、

「いやいや、そんな褒められたもんじゃないさ。俺はただ現実を認められなくて悪あがきしていたに過ぎなかっただけだよ。いくら意地を貫き通しても全てを失くしてしまつては意味がないからな。」

と志郎が返すが、

「でもいいんじゃない？ そのおかげでこの時代に生まれ変わって、大銀河宇宙ナンバーワンアイドルであるにこ達々、sに出会えたんだから儲けもんでしょ！」

とにっこが笑って言った。

「おいおい、俺は々、sが結成した時からいたんだぞ？ 寧ろあんたの方にあいつらと出

会ったことを感謝してほしいもんだな。まあ、俺じゃなくて幸雄にだけどな。」

「ふん！嫌よ、あいつ何考えてるのか分かんないから下手なことしようものなら希並みに厄介なことになりそうじゃない！いや、寧ろあんたと同じくあたし達より長く生きてる分だけあつて希以上にめんどくさくなりそうじゃない！」

「ははは！伊達にあいつは天下人を2度にわたつておちよくつてたわけじゃないからな！！にこが言いたいことも分かんでもないな。」

にこが幸雄の顔を思い浮かべながら苦々しそうに言うのと、志郎は大笑いした。

「そういえばにこはあの時幸雄に一人のスクールアイドルとして動き出さないと勧誘されてたらしいけど、結局それに関してはどう思っているんだ？」

「あんた、それどこで聞いたのよ……。まあ、大方察しはつくけど。」

「幸雄本人から聞いた。」

「やっぱりね。まあ、魅力的だとは思ったわよ。あいつのこと自体は希からたまに話を聞いていたし、あの時部室で二人つきりで話しててあいつがかなりのやり手だつていうのは大体察することは出来たわ。でもね、あいつにも言ったけどあたしは好きな事だからこそ誰かの手を借りて道を歩むんじゃないかって、自分の手で切り開いて行きたいって思ったからこそあいつの勧誘を断ったのよ。」

にこが自信満々な様子でその時を思い出しながら幸雄に話した心情を志郎に語った。

「やっぱあんたのそういうポジティブなプライドの高さは尊敬するよ。ほんとに。」

志郎は同じ境遇を経験していた絵里に対して敬意を抱いていたように、同じように誇りを胸に抱いて前に進んで言ったにこに対して尊敬の念を抱いていた。

「でもほんとの事を言わせてもらおうとあいつの誘いに乗るのも悪くはなかったんじゃないかなーとも思ったりもしたのよね。」

「そうなのか？」

「ええ、*μ* sのメンバーとして活動しながらあんた達の事も見てきたけど、あんたもなかなかの敏腕マネージャーっぷりを発揮してるけど、あいつもそれ以上にすごいと見せてくれてるしね。誰も考えもしないようなことを思いついてそれを実現させたりとかね。」

「ああ、そりゃああいつはそれほど頭の切れる男だからな！」

「だからあいつのそんなところを見てたら、あの時断つたけど勿体ないことしたかもなってるもんだもん。」

「ほう。」

「でもね、それでもあたしたちがバラバラになった時に、幸雄が自分が嫌われ者になるかもしれないリスクを負ったり、あんたが無茶しすぎてぶつ倒れるぐらいまでして繋ぎとめてくれた*μ* sってグループがあたしは大好きだし、それを守ってくれたあんた達に

は感謝してもしきれないのよ?」

「ここはウイנקをしながら志郎に言う」と、

「部長さんにそう言ってもらえたなら、あの時は天目山の頃以来の全力を出して正解だったな。」

「ほんつと、あん時のあんたは本当に化け物かと思ったわよ。」

「伊達に戦国武将をやつてきたわけではないからな。」

志郎がそう言うのと、二人とも笑い出した。

「あ、いけない!もうこんな時間じゃない!!そろそろ帰らないところ達が心配しちゃうわね。志郎、悪いけどもう少し付き合ってもらおうわよ!!」

公園の時計を見たには慌てて立ち上がって歩き出した。

「了解。ジュースも貰ったことだし給料分の働きはせんとだな。」

志郎も米の袋を抱えてにこの後を追って走った。

しばらく歩いていると、

「お姉さま!!」

「お姉ちゃん!!」

とにこの妹であるところとここあ、そして虎太郎が前から歩いてきた。

「ちよつとあんた達！なんでこんなところにいるのよ？」

「だつてお姉ちゃんが帰つてくるのが遅いつてところが心配してたんだもん。あたしは別に平気だつて言つたのにさ。」

「ここあこそお姉さまの事心配してたくせに！あら？お姉さま、そちらの方は確か……。」

「μ、sのお手伝いをしてくれる諏訪部志郎さんよ。」

「ああ！お姉さまたちのマネージャーさんですね！でもどうしてここに？」

「こころが首をかしげて志郎にたずねると、

「君たちのお姉さんが福引でたくさんお米を当ててね。俺はそれを運ぶのを手伝つてたんだ。」

と志郎は笑顔で答えた。

「まあ、そうなんですね！お姉さまのためにありがとうございます!!」

「こころは志郎の言葉を聞いて、ペこりとお辞儀をしてお礼を言った。

そして、にこの家までの帰り道を歩いてる人の数は5人に増えて賑やかなものになっていた。

「しかしいい妹弟に恵まれたもんだな……。少し羨ましいな。」

志郎がにこの前を歩くところ、ここあ、虎太郎の3人を見てしみじみと呟いた。

「あなたには兄弟はいないの？」

とにこが聞くと、

「ああ、『今』はいいな。」

と志郎は答えた。

「その口ぶりだと『昔』はいたって感じね。そういえばお兄さんがいたんだっけ？」

「ああ、義信兄上に、信親兄上、俺が子供のころに死んでしまったけど信之という兄もいた。義信兄上は父上と対立して死んだが、信親兄上にはよく相談相手になってもらったもんだ。姉には梅という姉がいたが夫と引き離された後すぐに亡くなってしまった。」

「……。弟とか妹は？」

「下には盛信、信貞、信清という弟たちと妹には松と菊がいた。」

「その人たちはどうなったの？」

「盛信は織田の武田征伐の際に高遠城という城に籠って玉碎、信貞は俺が死んだ後に自害したらしい。松は八王子に逃がしたが婚約者であった織田信忠とは結ばれなかった……。菊は上杉景勝のもとに嫁いでいたおかげで助かり、信清もその縁を頼って上杉家に逃げ延びたそうだ。……。全く、弟を二人も死なせて、妹は家の都合で思い人と

結ばれることができなかつたりと、振り返つてみれば俺はろくでもない兄だったものだな……。」

志郎がそう言つてしんみりとした表情になると、にこは志郎にデコピンをお見舞いた。

「な、何をするんだ!」

と志郎が驚くと、

「ふん、今さら昔の事をうじうじ言つてんじやないわよ!そりやあ、あんたの『昔』の弟さんや妹さんのほとんどがろくでもない最期を迎えたのは事実だけど、少なくともその人たちはあんたを兄貴として尊敬していたからこそ自分から命を捨てるような真似をしたんだし、家の都合で思い人と結ばれなくなつても何の不満も言わなかつたんじゃないの!?!あんたのその態度はあんたの弟や妹たちへの侮辱だと思いなさい!!」

とにこは志郎に対して言い放つた。

「……!確かにその通りかもしれないな。不快な思いをさせてしまつてすまないな。」
「分かればいいのよ。あんたはそうやってうじうじしたら変な方向に向かつてくんだからしつかりしなさい!」

「ははは。やっぱりあんたはいい姉であり、良い先輩だな。」

志郎がそういうと、

「当—然でしょ—もつとこのにこに—を尊敬してくれていいのよ!!」
と胸をふんぞり返らせた。

「それについては考えさせてもらうよ。」

「ぬあんてよお!!」

こうして、その日、7月21日の夕陽もまた暮れていく。

にこはこの翌日に、μ sのメンバーや志郎と幸雄のコンビにバカ騒ぎしながら祝われることはまだ知らなかった。

番外編 リーダーの在り方

八月某日、穂乃果の家にある彼女の部屋で志郎と穂乃果が向き合って座っていた。穂乃果はいつになく真剣な表情で正座をしており、志郎の方は怪訝な表情で胡坐をかいていた。その雰囲気はかつて戦国大名だった頃の風貌を思い出させるほど厳かなものであった。

そしてその二人を海未、ことり、幸雄の三人が見守っていた。

「志郎くん！お願いがあるの!!」

「お、おう……。」

「リーダーとしての在り方というものを教えてください!!」

穂乃果はそう言って深々と土下座した。志郎の返答は……。

「……あ?」

少し怒声の混じったそっけない返事だった。

(なあ、海未さんよ。今更だけど穂乃果ってああも人の地雷を踏むのが得意なのか?)

幸雄はヒソヒソと海未に意見を聞いた。

(ええ、穂乃果は真つ直ぐで表裏が無く、気さくでおおらかなのが長所なのですが、逆に言ってしまうば人の気になっているところにもズバッと切り込んでしまう無神経さが少し玉にキズですね……。)

海未は呆れながら幸雄に返す。

(ひよつとして志郎くん、怒ってたりする……?)

こつとりが苦笑いしながら小声で志郎に聞くと、

(ひよつとしなくてもだな。穂乃果の奴め、ちゃんと志郎のこと教えたはずなのに地雷を見事に踏み抜きやがった。)

幸雄はため息をついた。

(穂乃果は小難しいことは苦手ですから。)

(ああ、そうだったな。)

海未と幸雄はその言葉で話題を終わらせた。

「……穂乃果、それは俺が相手だと分かって聞いているのか?」

志郎は気分を落ち着かせるために深呼吸してから穂乃果にたずねた。

「うん、志郎くんしかびつたりな人はいないよ！」

穂乃果は志郎のあまりにも複雑すぎる心境など全く気にもしてない様子で無邪気に答える。彼女の名誉のために補足するが、彼女に悪気なんてものは一切存在しない。

「俺の正体はちゃんと教えたはずだったよな……？」

志郎は顔を引きつらせながら再度質問する。

「志郎くんって昔はお殿様だったんだよね!? お殿様だったらリーダーがどういう風にしてればいいのか分かるかなーって思っ……いひゃひゃひゃ！」

「ああ、確かに俺はかつては殿様だったよ！だが殿様は殿様でも『人心をまとめきれずにお家を滅ぼした』リーダー失格のお殿様であるこの俺によりにもよってそんな質問するか貴様あああああ!!！」

志郎はそう叫んで穂乃果の頬をつまんで引つ張る。

「いひゃい！いひゃいほひほうふん!!（痛い！痛いよ志郎くん!!）」

「そんなんが簡単に分かるなら俺の方が知りたいわちくしよおおおおお!!！」

志郎が半泣きになってた気がした幸雄はめんどくさくになると思って志郎を適当に宥めすかして穂乃果から引き離れた。

「全く、せっかく昼寝してるところに電話をガンガン掛けてきやがって。大事な話があるつつうから来てみたら半分嫌味のような質問を喜々として聞かれるとは思ひもしなかったぞ……。」

「大事な話だもん！」

穂乃果が納得いかない様子で志郎に抗議する。

「で、結局呼び出した理由はなんだよ？」

幸雄が聞くと、

「ほら、昨日私の誕生日だったでしょ？だからこれを機に心機一転しようと思って!!」

穂乃果はドヤ顔で答えた。穂乃果のその様子を見た二人は、

「なんだ、いつもの突拍子もない思いつきか。」

「このくそ暑い中来て損したぜ。俺達や中身は甲州人と信州人で暑いところは苦手なんだよ。早く帰ってクーラー天国を堪能しよう。」

そう言つて帰ろうとするが、

「帰らないでえええ!!」

と穂乃果は二人の足元に縋りついた。

「分かった分かった!話聞いてやるから!」

「暑苦しいからやめてくれ．．．！」

志郎たちは渋々穂乃果の部屋に引き返した。

「で、リーダーの在り方だっけか？ 話つてのは。」

「うん。」

「だつたらさつき言った通り俺に聞くのはお門違いだな。正体を明かした時にも言ったが、俺は家臣や領民の心をまとめることのできなかつたリーダーとしては落第クラスの男だつたのだからな。」

「でも、志郎くんは．．．！」

「ことりが志郎を弁護しようとするも、

「確かに生まれに恵まれなかつたのは事実だつたが、俺は自分の過ちをそれだけに押し付ける気は無い。実際にあの時の人生を振り返ってみれば自分の愚かさが招いた過ちも多かつた。」

と、遠くを見るような目で寂しげに言った。

「そういえば幸雄も大名でしたよね？ 幸雄なら．．．。」

海未が幸雄に話を振るが、

「あー、俺はどっちかっていうとリーダーってタマじゃねえんだよな。リーダーってりも俺はお屋形さまこと信玄公や志郎のような奴らの影で暗躍したりしてるのが合ってるんだよな……。」

と言つて幸雄は唸った。

「確かに幸雄はリーダーというより参謀向きですよね。」

「じゃあ、どうすればいいかは自分で考えるしかないのかなあ。」

穂乃果がため息をついて言うと、

「いや。俺たちはリーダーにこそ向いて向いてはいないが、乱世とこの現代を生きている中でその背中や生き様を見てきたんだ。」

「そうそう、俺たちはお前らよりも長く生きてるんだ。その分経験だけじゃなくて知識なんか豊富なんだぜ?」

志郎と幸雄はそう言つて穂乃果を励ます。

「志郎くんと幸雄くんが知ってること……?」

「ああ、そうだな。経験豊富な俺たちが思うに……。」

「思うに?」

「お前さんは今のままで十分だと思つぞ。」

「ええええ!?何それ!」

幸雄の答えに穂乃果は仰天した。

「いや言葉のまんまさ。お前さんはどつかの誰かさんみたいに気張らなくてもしつかりやれてるって事よ。海未とことりもそう思うだろう?」

幸雄はことりと海未に意見を求めた。

「はい。確かに穂乃果は見ててハラハラするところが多いですけど、私たちを引つ張ってくれているという意味ではその通りだと思います。」

「私もそう思うな。それに穂乃果ちゃんのおかげで、sは私たち9人だからこそ輝けるってことに気付くことが出来たんだもん。」

海未とことりは笑顔でそう答えた。

「海未ちゃん・・・、ことりちゃん・・・。」

「そう、お前は無理に変わろうとする必要はないんだ。」

「志郎くん・・・。」

「そりゃあ、変わろうとすることは大切なことだがお前には元から戦国大名であった俺でさえも凌駕するほどのリーダーの資質を持っているんだ。一つだけ言うことがあるとすれば、お前は自分らしさを捨てずに、自分が決めた道を諦めることなく進めばいい。ただそれだけさ。」

「自分……らしさ?」

「そうだ、お前はお前らしくあればいい。お前は甲斐武田家の最後の当主であるこの武田四郎勝頼が思わず嫉妬してしまうほどの器を持っているのだから。」

そう言つて志郎は穂乃果の頭に優しく手を置いた。

「ねえ志郎くん。穂乃果らしさって何? 私分かんないよ!」

と穂乃果が志郎に聞こうとすると、

「その答えはお前自身で見つけるんだ。恐らくこの場にいる中で幸雄を除けば俺のことを知っている海未ならばその答えを知つてるかもしれないが……、絶対に言うんじゃないぞ?」

とニヤリと笑つて言つた。

「ええ!!海未ちゃん! 答えが何なのかヒント教えて!!」

志郎の言葉を聞いた穂乃果が答えのヒントを聞こうと海未に縋りつくが、

「ダメです! それに言うなと言われたばかりなのに言うわけがないでしょう!」

と海未に脳天に手刀を喰らわされた。

「ねえ、幸雄くん。志郎くんが言つてた答えてなあに?」

とことりが幸雄にたずねた。

「いやあ、流石に俺も言うわけにはいかねえよ……。それにお前さん、穂乃果にはうつ

かり言つちまいそうだし……。」

と幸雄が洩ると、

「言わないもん！だから……！」

「げっ！よせ、それはやめっ……！」

「おねがぁい!!」

ことりが目を潤ませて幸雄にお願い攻撃を繰り出した。

「うおお!!そんな目で俺を見るなあああ!!分かった教えるから!!いいか、あいつが言ってるのはゴニョゴニョゴニョ……。」

「ああ……、そうなんだ！ありがと、幸雄くん！」

こどりの必殺技とも言える渾身のお願ひ攻撃に屈した幸雄は答えをこどりに耳打ちで教えた。

「ことりちゃん！私にも教えてよー!!」

「だくめく♪」

穂乃果とことりがじゃれ始めたが、それを尻目に志郎と幸雄は、

「さて、話は終わったし俺たちは帰るとするか幸雄。」

「おう、そだな。」

と言つて穂乃果の部屋から出ていった。

「しっかし、今日は勝頼さまにしては珍しい物言いでしたな。」

「む、それはどうということだ昌幸?」

志郎と幸雄は穂乃果の家から出るときに穂乃果の母親からもらった『ほむまん』を頬張りながら歩いていった。

「いや、いつもなら歯に衣着せぬ物言いでも事も真つ直ぐに伝える勝頼さまが今日は珍しく煙に巻くような物言いをされたのが不思議に思えましてな。」

「まあ、間違つてはいないな。」

「その真意は如何なるもので・・・?」

「大人げないと思うかもしれないんが単なる意趣返しよ。」

「意趣返し・・・と。」

「うむ、あいつはどうやら自分が大器を持っていることを分かつておらんようだからな。」

「なるほど、それであの大人げなさ全開のキレっぷりを発揮したというわけですか。」

「まあそれは置いとくとして、俺があいつを認めている一方で嫉妬心を少なからず抱いていることも確かだ。『何故俺ではなくこのような能天気な小娘に大器が宿っているの

か……』と葛藤した時もあった。」

「勝頼さま……。」

「まあ、もつともあいつの場合は自分に大器が宿っていることが分かってない方があいづらしい道歩んでいけるだろうと考えたうえであのようなのはつきりもしない言い回しをしたわけだ。それに、あいつならそんな難しいことを考えるよりも前に進んだ方がいいとすぐに気づくであろう。」

「なるほど……、そういう事でしたか。しかし勝頼さまも意外と哲学的な事をお考えになるものなんですな。」

「おいおい、俺だつて脳筋なわけじゃないんだぞ。色々考えもするさ。」

「箱を開ける鍵の無いプレゼントだなんて勝頼さまにしてはとんだ変化球の贈り物ですな。」

「誰が上手いことを言えつて言つたよ。」

志郎と幸雄はお互いに笑い合った。

（高坂穂乃果よ。お前は俺のように小難しいことを思い悩んで気を迷わせるのではなく、お前は自分の思ったように自分の選んだ道を歩むのだ。お前にはかつての俺のように血や名、そして国といった数多のしがらみに囚われるのではなく、大空に舞う鳥のよ

うに美しく、そして楽しそうに羽ばたいていけ。今のお前にはこのような難しいことは分からぬであろうがいずれ先ほどお前に言った言葉の真意が分かるときが来るであろう……)。

そして志郎はふと空を見上げ、

『諏訪部志郎』と同じ時代に生まれてくれてありがとう、穂乃果。」
と呟いた。

志郎が見上げる先には、白い鳥が志郎が胸の内で呟いた言葉を表すかのように雲一つない晴天を舞っていた。

番外編 ことりのおやつは六文銭

夏の残暑が少しずつつ鳴りを潜めつつ、夏の終わりから秋の始まりへと移り始めていた東京にある神田明神の階段の下で、武藤幸雄は誰かを待っていた。

「そろそろ来る頃かね．．．」

幸雄が腕時計を見ながらそう呟き、腕時計の針が10時を指した瞬間、

「幸雄くん！」

とことりが手を振りながら幸雄のもとに向かつて走ってきた。

「ごめんね、なかなか服が決まらなくて．．．。待たせちゃったかな？」

と少し息を切らしながら申し訳なきそうに言うことりに、

「いや、俺もついさつき来たばかりだから気にしてねえよ。別に息を切らすほど急いで来なくてもよかつたんじゃないかねえの？」

と幸雄は特に気にする素振りを見せずに言うと、

「私が気にするの！」

とことりは頬を膨らませた。

「はは、そうかい。そいつは悪かったな。ほんじゃ行くとしますか。」

「うんー！」

二人はそう言うと一緒に歩きだしていった。

さて、これを見る限りこれを読んでる読者の皆様方は「これってどう見てもデートじゃね!?!」とか「いつの間に幸雄とことりが付き合い始めたんだ!?!」と、驚かれるはず。確かに本編を見る限り、そんなフラグはどこにも建って無いしそもそもこの作品自体始まって以来、まったくと言っていいほど恋愛描写が見受けられないので、そう思われるのも無理がない話である。

ではどうしてこんな状況になっているのか。それは音ノ木坂学院の学園祭で起きた、ある騒動がきっかけとなって起きたある事件の後のこと……。

「なるほど、そういう事があったというわけか……。」

「ああ。嘘偽りのない100%事実の話さ。」

幸雄は志郎にその事件での自らがどのように暗躍していたのかを報告していた。

「お前がそういうのなら本当なんだろうな。全く、切羽詰まった状況で手段を選んでる暇は無いと言った俺にも責任が無いわけじゃないが、本当に思い切ったことをしてくれ

たものだな。」

「……こうでもしないとあいつの真意を引き出せないと思つてやった。今は反省してる。」

幸雄は志郎に土下座した。

「土下座はせんでもいい。今回はそれでいい方向に動いてくれたからいいものの、下手をすればもつとキツイ結末になつていたのかもしれないという事を理解してくれていればそれで十分だ。とにかくよくやってくれた、ありがとう。」

そう言われて顔を上げた幸雄の頬は赤く腫れていた。

「よし、反省会も終わつたことだしことりのところ行くぞ！実はことりに話があるという事で屋上に呼び出したんだ！」

「は？なんで？」

志郎の唐突な提案に幸雄は素つ頓狂な声で聞き返した。

「男ならば自分のやつたことにけじめをつけるのは当たり前のことだろう。お前もけじめをつけに行くんだよ！」

志郎はそう言つて幸雄の手を引いて歩き始めた。

「ちよつと待て志郎！いや勝頼さま!!話聞いてました!?一応謝つたけど顔合わせ辛いんですつてば！」

幸雄は懸命に抵抗するが、腕力で幸雄に勝る志郎の前ではただただ引きずられていくことしかできなかつた。

「というわけけでうちの昌幸……じゃなくて幸雄がとんでもないことをしてしまつて、本当に申し訳ない!!」

屋上にやつて来たことりに志郎は腰をきつかり90度に曲げているのかと思うほどきつちりとしたお辞儀でことりに謝罪していた。

「なんでお前が謝罪してんだよ……。」

「だつたらお前も頭を下げる幸雄オ!!」

志郎は幸雄の頭を掴んで力づくで下げさせた。

「別に気にしなくてもいいよお! 幸雄くんもその後謝つてくれたし……。」

ことりはそう言つて志郎たちに頭を上げさせようとした。

「いや! そもそも今回の一件はお前たちを上手く支えられなかつた俺たちの落ち度でもある!! だから一度こうして謝らなければ気が済まないのだ! それに幸雄も、sを再び繋げるためとはいえことりに不快な思いをさせてしまい、それでお前に合わせる顔がないと言つておつたのだ!!」

「そうなの幸雄くん?」

志郎の言葉を聞いたことりは幸雄に本当なのかたずねた。

「おい志郎！それ本人の前で言うか普通!? まあ、事実なだけだよ……。」

幸雄は志郎に抗議した後、ことりの問いにばつの悪そうな表情で答えた。

「と、いうわけで俺と幸雄から謝罪の意を込めてお前にこれを授けようと思う。」

そう言つて志郎は制服のポケットから一枚の紙を出してことりに渡した。

「え〜つと、『武藤幸雄一日絶対服従券』……?」

「ことりは紙に書かれていた文字を読んだ。

「はあ!?なんだそりゃ!!」

「書いてある通りだ。これを使えば一日だけ幸雄を好きにできるのだ。」

「ふざけんな!いくら志郎でもそんな横暴……うっ!」

幸雄はことりから券を取り上げようと、紙を掴んだがそこに書かれてあるものを見

て動きを止めた。

「どうしたの幸雄くん?」

「志郎め……。まさかこんなところでお前の花押(サイン)を拝むことになろうとはな……。」

「花押?」

「ああ、サインのことだよ。そこに書いてあるのがそうだ。」

「ことりが志郎に指差された場所を見ると、確かに志郎が書いたものと思わしき筆

ペンの文字があった。

「これが志郎くんのサインなの？」

「まあ、そんなものだ。かつて俺の家臣だった幸雄ならばその花押が入った書状を無視することは出来まいと思つて書いておいたのだ。」

「くそっ！こうなりや野となれ山となれだ！なんでもことりの言うことを聞いてやろうじゃねえか!!」

と幸雄がやくそくそ意味に言うのと、

「うーん……、じゃあ……。ことりと一日デートしてくれませんか？」

とことりはしばらく唸つて考えてから幸雄へのお願いを言った。

「おう、その程度ならお安い御用……つてはああ!？」

幸雄はその言葉に驚愕して、

「ははは！それはいいな!!そう言えば今週末は練習が休みだから思う存分満喫してくるといいー!」

と笑いながら言った。

(んで結局断ろうとしたらあいつの『お願い攻撃』をもろに喰らつて承諾しちまつて今に

至るんだよなあ。」

幸雄はことりと歩きながら事の発端を思い出し出していた。

(しかしこうして改めてじっくり見てみるとなかなかの美人だよなあ……)

幸雄は隣で歩いていることを横目に見ながらそう考えていた。彼は『信玄の両目』と呼ばれ重用されるほど優れた観察眼を持っており、暇さえあれば周りの人を観察してその人物像を分析する癖を持っていた。現代に生まれ変わり、音ノ木坂学院に入ってからはその観察眼のおかげで自分の容姿に自信を持ってなかった凜の背中を押し出したという隠れた功績も残している。

「ねえ幸雄くん。」

「うお!? な、なんだことり?」

幸雄はことりに見ていたのを気づかれたのかと思い、動揺で声を上ずらせながら返事をした。

「今日はいつぱい楽しもうね♡」

「お、おう……。そうだな。」

幸雄は見ていたことに対する糾弾しやなかったことに安心しながら返事をした。

「そういえばこれからどこに行くんだ? 俺こういうの初めてだし申し訳ない話、何も考えてなかったんだが……」

「この近くにシヨツピングモールがあるでしょ？今日はそこに行くんだ！」

「ああ、あそこか……。」

「だから今日はそこでお買い物とかいろんなことをして楽しもうと思うんだ！」

「そうか、そいつは楽しみな。」

そうして幸雄とことりはシヨツピングモールに向かつて歩いていった。

シヨツピングモールに着いた二人が最初に向かったのは洋服屋だったもちろん女性服の店である。

「なあ、俺ってここに居ていいんすかね……。」

女性服の店に入る幸雄は周りを気にしながらことりに言うが、

「大丈夫だよ、それに幸雄くんにお洋服の試着とか見て欲しいから！」

とことりは洋服を選びながら答えた。

（マジかよ……。都会人のデートってレベル高えな……。）

幸雄はことりの言葉に驚きを隠せなかった。

「あ、幸雄くん。こつちとこつちの服、どつちがいいかな？」

ことりが二つの洋服を幸雄に見せてどつちがいいかを尋ねた。

「ん？どつちがいいか、ねえ……。」

幸雄はことりが持っている服を品定めするように見比べる。

「こつちの色の薄いワンピースがいいんでね？なんとというか派手な色より薄めの色の方がお前さんには似合ってると思うぜ。」

そう言つて幸雄はことりが左手に持っていたワンピースを指差した。

「じゃあちよつと試着するからついて来て！」

「は!?え!?!」

ことりは幸雄の手を引いて試着室に向かった。

（しかしとんでもねえことになったもんだなあ。この後ろの試着室のカーテン一枚の先でことりが着替えてると思うと……。いかにいかに！煩惱を鎮める真田安房守昌幸……。カーテンが閉まってるとはいえ後ろを向くんじゃねえぞ……。!）

ことりが着替えてる間、幸雄は煩惱と戦っていた。

「幸雄くん、着替え終わったよ〜！」

「お、おう……。」

カーテンが開く音がしたと同時にこどりの声がしたので幸雄が振り向くと、

「ど、どうかな幸雄くん。似合ってる?」

淡い緑色のワンピースを着たことりが立っていた。

「おお、なかなか似合ってるな！やはり俺の目に狂いは無かったな。」

幸雄はうんうんと頷きながらことりと自分の観察眼を褒めた。

「本当？じゃあ今日はこの服で過ごそうかなあ・・・♡」

「ことりはそう言つてその服を着たまま買った。」

「幸雄くんは何か欲しいものとかないの？」

「ことりは歩きながら幸雄に声を掛けた。」

「俺か？特にねえなあ。俺たちやお前さんたちとは違ってファッションとかにも疎いしな。」

幸雄は自嘲するように言った。

「幸雄くんも志郎くんもかっこいいんだからもう少しおしやれればいいのに・・・あ！」

と幸雄の言葉を聞いたことりはそう言うと同時にふと立ち止まった。

「ん？お、おい！どうしたつてんだよ!？」

立ち止まったかと思えば急に走り出したことりを志郎は追った。少し走つてたどり着いたのはメンズファッションの店だった。

「ここは・・・、男もんの服の店か？」

幸雄はことりがそこに入っていった意図が読めず呆然としていたが、

「えいつ♪」

ということりの声と共に急に視界が暗くなり、

「うおわ!!」

幸雄は突然の出来事に戸惑った

「何しやがる！つてこいつは・・・。」

頭に手をやってみると、幸雄の手には黒い中折れ帽があった。

「えへへ・・・。前に来た時に幸雄くんに似合うかもって思ってたんだ。本当は誕生日のプレゼントにしようかと思っただけど、幸雄くん服を選んでもらったお礼♪」

ことりは舌を出していたずらっぽく微笑みながら言った。

「・・・ははっ。こいつはしてやられたな！ほんじやこいつは、大切にさせてもらおうと致しましょうかねえ。」

幸雄は照れ隠しをするように帽子を深く被って言った。

「おつとすまん。少し催したんでお花摘みに行つてくるわ・・・。」

「うん、じゃああそこの椅子に座つて待つてね。」

こことりはそう言つて幸雄を見送り、幸雄は苦笑いしながらトイレへ走つていった。

そして数分後、

（やれやれ、なんでこういう時に限って『大』が開いてねえんだよ……。俺としたことがたかだかお花摘み如きで人を、しかも女子を待たせるなんて不覚を取っちゃまったぜ。）
幸雄は心の中で愚痴りながらことりのもとへ走っていた。

「わりいわりい！待たせちまつ……。って、んん!？」

ことりを見つけたので声を掛けようとしたが幸雄は急に立ち止まった。

「ねえねえ。君、*μ* *s*の南ことりちゃんだよね？」

「は、はい。そうですけど……。。」

「今一人だよな？よかつたら俺と一緒に遊びに行かない？」

ことりが少しチャラそうな男にナンパされているのが見えた。

（な〜んかこういう場面、前にも遭遇したような……。まあ、あいつらに比べて見た目はまともそうなのが余計にタチが悪そうだな。さて、どうしたもんかねえ……。）

幸雄はその様子を見て彼女を助ける策を練っていた。

「あの、ごめんなさい！私いま、友達を待つてるんです！」

ことりは懸命に断ろうとするが、

「あ、そうなの？だったら用事が出来たとか言つて帰る振りをすればいいじゃない！」

男はことりの言葉に聞く耳を持たず、そのまま連れていこうとするが、

「おおつとそこの色男の旦那！無理やりナンパつてのはいただけませんなあ！」

幸雄が仰々しくおどけながら二人の間に入った。

「な、なんだよ君は！」

男はせっかくのところに水を差されて不快感を露わにするが、

「いやいや、俺はただの通りすがりのお調子者さ！ただ目の前で面白そうなお話があるもんで首を突っ込んでみようと思っただけのね！」

と幸雄は男の怒りを軽く受け流してみせる。

「幸雄くん……！」

とことりが言おうとするも、

「まあ、俺はナンパが悪いことだとは微塵にも思つてないしやりたければ好き勝手にやってろつて話なんだが、やるならやるにしても……。」

幸雄は彼女の言葉を自慢の軽妙な話術で遮った。ことりはそんな幸雄の様子を不思議に思っていたが、足元に転がってきた小さく丸められた紙を拾った。

『すまん。ここは他人の振りをしてくれ。』

と書かれていた紙を見て幸雄が何を言おうとしているのかを察した。

「・・・そんなわけで嫌がる女の子に無理やり迫るのは人として如何なものかって思うし、せつかくの色男（笑）が台無しだと俺は思うわけなんだが、あんたはどう思うね？」

幸雄が皮肉気に笑いながら男に言葉を投げかける。

「さつきから何なんだよ一体！無関係なら関わってくるなよ!!」

男は散々幸雄に煽られた怒りから手を上げるも、幸雄に腕を掴まれた。

「ぐっ！離せ・・・！離せよ!!」

男は悪あがきで腕を引っ張って拘束から抜けようとしたり、自由な方の腕を振り回して幸雄を振り払おうとするが、志郎に数段劣るとはいえ、元戦国武将として腕力がそれなりにある幸雄はどこ吹く風といった様子だった。

だが、頭にかぶっていたことりに選んでもらった帽子がはたき落とされた瞬間、幸雄は掴んでいた男の腕を急に引き寄せ、

「失せろ!!」

とドスの効いた小声で一喝し、至近距離の真正面から男を睨み付けた。幸雄の垂れ目

の三白眼が鷹の目のように鋭い眼光で男の目を射抜く。その歴戦の威圧感を漂わせる眼力は一瞬で人の戦意を完全に削ぎ落すには効果抜群であった。

「ちっ……!」

幸雄の炯眼に恐れをなした男はそそくさと逃げ出した。

「幸雄くん、ありがとう……ってきやつ?! 幸雄くんどうしたの?」

「なあに、今ので少し目立つちまったからこちらもスタコラサッサと退散するのさ!」

幸雄はそう言ってことりの手を引いて走り出した。

幸雄とことりがデパートから走り去ってしばらく経ち、二人はとある公園で休憩していた。

「はあ、はあ……。すまんなことり、いきなり走らせちまって……。」

「ううん。幸雄くんは私を助けるためにこうしてくれたんでしょ? それなら別に平気だ

よ。それに……。」

「それに?」

「走ってるときに幸雄くん、私の手を握ってくれてたでしょ? だから本当にデートして

るみたいにして面白かったよ。」

「手?。」

幸雄はことりの言葉を聞いて自分の手を見た。するとみるみる幸雄の顔が赤くなり、「うおおおおお!? 夢中になつてたとはいえ、女子の手をガツツリ握つてしまったああああ!!! うおおおおお顔が恥ずかしさで燃えること火の如しいい!!!」などと叫びながら悶え始めた。

「あはは……。幸雄くんつてば普段はみんなのことをからかつてたりするけど、自分のことになると結構照れ屋さんなんだね。」

そんな幸雄の様子を見てことりは笑つた。

「う、うるせえ! 大人をからかうんじゃねえよ!」

「幸雄くん中身は大人でも見た目は私たちと同じ高校生でしょ?」

「うぐつ! 確かにそうだ……。!」

幸雄は苦し紛れの反論をあつさりとしてことりに論破され、ぐうの音も出せなかつた。

「全く……。お前さんあの日からなんかどんどん強かになつてきてねえか?」

「ううん、私は別に特になつた事なんてないよ?」

ことりはキョトンとした表情で首を傾げながら言う。

(まったく、このお嬢さんつてばいつも俺の予想を斜め上に飛び越えた事をしてくれる

ねえ……。いや、ことりに限らずμsの面々はだいたいみんなそんなもんか……)

幸雄は帽子で顔を覆いながら小声で呟いてから、

「さあ〜て！ そんな南ことりさんのためにこの真田安房守昌幸……、否！ 武藤幸雄が隠し芸をおひとつ披露し仕つて候まうらう!!」

と言つて帽子を天高く掲げた。

「この手に持ちたるはことりに選んでもらつた小粋な帽子が一つ！ もちろん中には種も仕掛けもござらん！ あ、もちろん俺の手にも仕掛けは無いぜ？」

幸雄はおどけながらことりに帽子の中を見せてから、手や腕にも仕掛けが無いことを示した。

「何もないと分かつたところで、この帽子から取り出したるはなんでしょうか!？」

「鳩さんかうさぎさん？」

「いや。」

「花かな？」

と幸雄はことりと問答をしながら帽子の中を掻きまわす。

「この帽子から取り出すは……お嬢さんを飾る綺羅飾りでござい!!」

と言つて幸雄は帽子の中からペンダントを取り出し、ことりの手に優しく手渡した。

「うわああ……! かわいい〜!」

ペンダントには花の形をした飾りがついていた。

「その花はクレマチス、お前の誕生花で花言葉は美しい心だそうだ。なかなか見つからなくて苦労したんだぜ？」

幸雄はいつもの雰囲気に戻って頬を掻きながらそう言った。

「え？誕生花って・・・あ！」

「お前さん、どうやら忘れてたみたいだな。今日が自分の誕生日だったことを！」

「だって、ここ最近いろいろ大変だったから・・・。」

「まあ、無理もない話だわな。」

「でもありがとう幸雄くん。このペンダント、大事にするね！」

ことりは屈託のない笑顔で幸雄に礼を言う。

（素面じゃあ照れくさくて渡せねえからわざわざあんな道化師みたいな演技をして渡したってのに、素面に戻った後にそいつは反則じゃねえか!!）

幸雄は片手で赤くなった顔を覆った。

ヴー！ヴー！

「あ？なんだこんな時に。」

急に幸雄のスマホのバイブが鳴り出したので取り出してみると、志郎から電話が来ていた。

「なんだ志郎？」

『よ、幸雄。上手く行ってるか？』

「上手く行くも何も色々ありすぎて疲れてるよ俺は。」

『そうか、だが疲れてはられないぞ幸雄！こつちも準備が出来たからな！』

「は？準備？なんの？」

『それはだな、ゴニヨゴニヨ・・・。』

「はああ!?お前!そんな事一言もってオイ!」

志郎からの電話が切れた。

「どうしたの幸雄くん?志郎くんからみたいだったけど。」

「ハッ!どうやら俺は時間稼ぎの罠だったらしい!」

「?」

幸雄の言葉の意味が理解できず、ことりは首を傾げた。

「その『絶対服従券』には仕掛けがあるんだよ。ほれ、この表面のところ少しペラってなってるだろ?めくってみな。」

「え?こっぴか。」

ことりは幸雄に促されるままに『武藤幸雄一日絶対服従券』の表面をめくってみると、その下から『南ことり誕生日会招待状』という文字が出てきた。

「これって……!」

「俺も今志郎に種明かしされるまで知らなかつたぜ。どうやら俺がお前さんと出かけてる間に志郎が穂乃果たちを招集してパーティーの準備をしていたらしいぜ、お前さんの家でな。」

「私の家で!?!」

「ああ、理事長のお墨付きだそーだ。全く、志郎のくせに俺を謀たはかるとはやってくれたもんだぜ。」

「そうだったんだ……!」

「さ、これ以上はお客たちが待ちくたびれちまうから、早く主役の顔を見せてやろうぜ!」

「うん!」

そう言つて幸雄とことりは走り出した。この時、また二人の手は握られていたのだが、それを志郎や穂乃果たちに指摘されて幸雄の顔が赤備えの鎧のように真っ赤になつたというのは別の話である。

番外編 不器用者たちの残映

木の葉が赤や黄に染まる秋の夕方、志郎は図書室に来ていた。

「さて、次は何を読もうか。」

志郎はそう呟いて図書館の中をふらついていると、金髪のポニーテールの少女が読み終わったと思われる本を本棚に戻しているのを見つけた。

「よお。珍しいな、こんなところにいるとは。」

「あら、志郎じゃない。あなたこそ図書室にいるなんて珍しいわね。」

志郎の軽口を軽口で返した少女の名は絢瀬絵里。この音ノ木坂学院の『元』生徒会長である。元、というのは既に生徒会長の座を穂乃果に譲り渡して引退してるからである。

「ほら、私今まで生徒会長としての仕事ばかりしてたからあまりこうしてゆっくり学校の中を回ることもなかってなかったから。」

「なるほど、それで図書室で本を読んでいたというわけか。」

「それで志郎は何をしに来たのかしら？」

「俺は新しく本を借りに来ただけさ。とはいえ図書室の本は割とたくさん読んだから目

ぼしいものは特に無いんだけどな。」

志郎は頭を掻きながらそう言った。

「でも意外ね。志郎ってあまり本とか読まないタイプだと思ってたわ。」

「それ他の連中にも散々言われてきたが、俺は何も脳筋ってわけじゃないんだ。『昔』だって父上に倣って書物を読み耽る事だってあつたんだからな。」

「志郎はどんなものを読むの?」

「歴史の本や小説なんかを読むが、やはり今も昔も気に入ってるのは『孫氏』だな。」

志郎がカバンの中から取り出したのは文庫本サイズの、孫子の兵法を分かりやすくまとめたものだった。

「へえ、昔も読んでたの?」

「ああ、なにせ孫子は父上…信玄公が愛読していたものだからな。かつて父を超えんとした俺は穴が開くほど読んだものさ。たかが古い時代の兵法と侮るなよ?意外と現代でも通用することばかりだからな。」

志郎は誇らしげな顔をしながら絵里に孫子のすごさを語る。

「志郎は信玄さんの事を心から尊敬してたのね。」

「ああ、だからこそその背に憧れ、越えようと足掻いたのさ。さて、話をするなら外でしよう。あまり人はいないが怒られてしまいそうだ。」

「そうね、そうしましょうか。」

そう言つて志郎と絵里は図書室から出た。

二人は廊下を歩いていたが、突然絵里が足を止めた。

「どうしたんだ、忘れ物か？」

志郎がたずねると絵里は首を横に振つた。

「そうじゃないわ。覚えてない？この教室で私は志郎に一步を踏み出す勇氣をもらったのよ。」

絵里はその時のことを思い出しながら語る。

「ああ、あの時か。あれしか最善策が無かつたとはいえ、今思い出してみるとめちやくちや恥ずかしいな。」

志郎もその時の事を思い出して赤面する。

「そんな事ないわ。私は志郎のあの言葉と、穂乃果が差し伸べてくれた手に救われたんだもの。」

「穂乃果はともかく、俺はお前の背中を少しだけ押しただけだ。そこまで褒められるよな事はしてない。」

「もう、志郎も割と素直じゃないわよね。そういうのは素直に受け取っておくものなん

だからね。」

「そういうものなのか?」

「そういうものなのよ。」

そう言うのと二人はそのやりとりが可笑しかったのか、互いに笑いはじめた。

そしてひとしきり笑ったあと、絵里がまた話を切り出した。

「私ね、あの時からずっと志郎の事が気になってたのよね。」

「気になっていた・・・というのはどう意味でだ?」

志郎が首を傾げて絵里にたずねると、絵里は顔を真っ赤にしながら首を横に振り、

「べ、別にそういう意味で言ったわけじゃないのよ!」

と、否定してみせた。

「志郎があの時私の心を開いてくれた時、自分が私とそっくりだって言ったでしょ? そうやって自分の事を話す時の志郎の目がすごく寂しそうな感じで、私が志郎の胸で泣いた時もお父さんの胸に抱かれたような感じがしたの。なんていうか、その時は高校生とは思えないぐらい大人びて見えた気がしたのよ。」

「・・・。」

「志郎はあの時私が『あなたは何者なのか』ってたずねた時にはぐらかしてたけど、私はずっと志郎はひよつとしたら普通の人じゃないかもって思ってたの、もちろんいい意味

でね。そしてこの前、志郎と幸雄が正体を私たちに打ち明けてくれた時にあなたが一度人生を経験した人だって知ったらなんか不思議と納得できちゃった。」

「そうだったのか。あの時は上手く誤魔化せたと思っただが、意外と長く尾を引いていたようだな。」

「そりやそうよ。あんな誤魔化し方されたら余計気になっちゃうじゃない！でもそれを見て『これはあまり聞かない方がいいかな』って思ったから全く聞かなかったのよ。」

「ははは、それは感謝せねばならんな。」

わざとらしく頬を膨らませてみせる絵里に対して志郎は笑いながら答えた。

「それでね、私あなたの正体を知った時からずっと昔の志郎、武田勝頼さんについて調べてたの。」

「そう言つて絵里は鞆から一冊の本を取り出した。それは勝頼に関することが書かれたものだった。もちろん志郎もその本には目を通していた。」

「ほう、しかしよくまあ見つけたもんだな。神保町にでも行つて来たのか？」

「ええ、結構探すのには苦労したわね。図書室においてあるかなーって思つたら置いてないんだもの！」

「伝統校とはいえ俺みたいなマイナー武将個人の本なんぞそうそう置いてないだろ。」

「そうかしら？志郎は教科書に名前載ってるからマイナーじゃないと思うわ。」

絵里は志郎の言葉に首をかしげる。

「教科書に載ってるつつつても信長のやられ役じゃねえか。しかも書き方的に時代遅れ呼ばわりされてる気がするし……。それにそんな教科書の1ページだけに載ってる奴のこと憶えてるなんてよっほどの物好きだろ。」

志郎は自嘲するように言った。

「そんなことより、見つけたはいいけど読むのにも苦労したわね。知らない言葉ばかりでもう一冊戦国時代の基礎的な知識が分かりやすく書かれてる物まで買っちゃったわ。」

「そりゃあ、こいつは全くの初心者が手を出す部類の本じゃないからな。でもその様子だと最後まで読破できたんだろ？ 頑張った方じゃないか。」

「ええ、ほんとすごい大変だったんだからね！ でも、そのおかげで昔の志郎のいろんな一面を見れたような気がするわ。」

そう答える絵里の顔は晴れやかなものだった。

「ほう、それでは現代に生きる者から見た俺の……勝頼の姿とは如何なるものか聞こうじゃないか。」

「私から見た武田勝頼、ねえ……。まず印象的だったのは肖像画かしら。奥さんとお子さんと一緒に写ってるやつ。」

「あれか、確か高野山に預けた物だったか……。懐かしいものだ。」

「家族三人で写ってる物って凄く珍しいって書いてあったんだけどどうして志郎はこんな風に描かせたの？」

「前にも話したが俺は母上を幼いころに失い、父上からは武田家の者としては扱われなかった……。俺を家族として扱ってくれたのは義信兄上と弟と妹達だけだったのだ。そして信勝を産んだ最初の妻も信勝を産んですぐに亡くなってしまった。乳母はいたものの、母の温もりを知らずに育った信勝が不憫でな……。」

「確かにお母さんの温もりを知らないのは少し可哀そうよね。」

「そう思ってたところに北条との縁談の話が転がり込んできてな、これを機に信勝にも母の温もりを！って思っておったのだが、氏政の妹が信勝と3歳しか年が違わなかったのが少しばかり誤算だったな。まさか俺も自分の娘のような嫁を娶るとは思わなかったし、信勝も姉のような継母が出来るなど夢にも思わなかったな。」

志郎はそう言うとその時のことを思い出して笑い始めた。

「でも仲は良かったんじゃないの？」

「最初っからそうとうわけではなかったさ。こつちもどう接していいか分からなくて幸雄……。昌幸や釣閑斎、勝資に愚痴ったこともあったな。信勝の方も割と戸惑ってたしな。」

「意外ね……。どうやって仲良くなったのかしら？」

「三人で諏訪に行った。」

「諏訪？」

「そう、母上の故郷にして俺が幼いころから過ごしてきた場所だ。諏訪大社にお参りに行ったし、諏訪湖を三人で見たり、父上が見つけた温泉にも湯治に行ったものだ。」

「ハラショー！ 戦国武将でも家族旅行に行くのね。」

「だが最後の湯治の時には領民達が直訴に来てな、あまりゆっくりはできなかったがな。」

「本を読んだ時から思ってたけどどうして志郎は断らなかつたの？」

「桂の兄である氏政の言葉を借りるならば国は民があつてこそ、だからな。例え湯治中であろうとも民の求めに応じるのが主君というものなのさ。」

「へえ、この本を読んで思つたけどやっぱりこうして話を聞いてみると印象が変わつて来るわね。」

「……だいたい予想はつくが今までの武田勝頼に対するお前の印象はどんな感じだったんだ？」

「そうねえ……。あなたのことを調べるまでは志郎や幸雄から聞いた『強いけど猪突猛進で周りが見えなくなりがちな人』とか不器用な人ってイメージだったわ。」

「まあ、そんなものか……はは。」

絵里の言葉を聞いて志郎は自嘲気味に笑う。

「でもね、あなたのことを調べてみるとあの時志郎が私に言ってくれた言葉の1つ1つがすごく重みというか……、さらに深みを感じるようになったの。」

「深み、だと?」

「ええ。志郎のかつての生涯を辿ってみると私なんかとは比べ物にならないくらい重いものを背負っていて、でもそれに負けないように精一杯頑張る志郎の姿がすごく立派なものに見えたの。」

「立派か……。お世辞でもそう言ってもらえるなら嬉しいものだな。」

「お世辞じゃないわよ!心の底からの感想よ。」

「だが俺はお前とは違って、穂乃果のように手を差し伸べてくれる存在も、希のように寄り添って支えてくれる存在はいなかった……。強いて言うなら桂や信勝くらいか……。」

「あら、幸雄は違うの?」

「あいつとはそういう関係では無かったからな。どちらかという战友と言った方がしっくり来るな。」

「そうなんだ。でも志郎には他にもそばにいてくれた人がいるじゃない!長坂釣閑齋さんとか跡部勝資さんっていう人とか天目山に付いて来てくれた人達が!」

「……本当によく調べたもんだな。普通女子高生の口から釣閑齋や勝資の名前なんて出てこないぞ……。」

志郎は絵里の知識に舌を巻いた。

「そりや志郎の周りの人のことも調べたからね！　そういえばこの2人は奸臣って言われているけど実際はどうだったの？」

絵里は志郎に志郎の側近であつた長坂釣閑齋と跡部勝資のことをたずねた。

「確かに俺はあの2人を重用することが多かつたが、それは俺が諏訪にいた頃から付いて来てくれたのと俺の期待に応える働きぶりを見せてくれたからだ。それに本当に奸臣であつたならば木曾義昌や穴山梅雪のように寝返つてるか新府城を捨てる前に何処ぞに姿を消していたさ。だけどあの2人は最後まで俺に付いてきてくれた。これを奸臣と呼ぶことなんぞできまい……。」

志郎は夕陽に染まる空を見上げながら2人の側近について語つた。

「ふふふ。」

絵里はそんな志郎の様子を見て微笑む。

「どうしたんだよ絵里、何がおかしい？」

「ううん。おかしくなんかないわ。ただ、家族以外にも志郎の側にいてくれた大切な人たちがいたんだな……って思つただけ。」

「ああ、俺もこの時代に生まれて思い返してみれば俺の側にいてくれた者たちが家族以外にも結構いたもんだと思つたよ。四名臣に信豊、幸雄の兄たち、そして天目山まで共に付いて来てくれた忠臣たち……。俺にはもつたないくらいだ。」

「そんなことはないわよ。きつとその人たちも志郎の頑張る姿を知つてるからこそ一緒に戦つてくれたんだと思うわ。」

「……ありがとう。」

「どういたしまして♪」

志郎が絵里に礼を言うと、絵里はウインクをしながらそれに応えた。

「……。」

志郎はそんな無邪気に笑う絵里の姿を温かい目で見ていた。

「ん？どうしたのよ志郎、そんな顔しちゃつて。私に何かついてる？」

「いや、本当に変わったなと思つてな。」

「なによ急に……。」

「俺がこの学校に入った時には昔の俺のように強迫観念に駆られ、前に前に進もうとものがいていたあの絢瀬絵里がこんなにも無邪気に笑つてこんな与太話に興じるなど誰も予想できなかっただろうな、つて思つただけさ。」

「そうね……。確かにあの頃の私のままだったらこんなことは出来なかったかもね。そ

ういう意味でもあなたと出会えて本当に良かったって思ってる……。ありがとう、『人生の先輩』さん!」

「ははは、年上に先輩って言われるのはなんかこそばゆいな。」

「あら、体は年下でも中身は年上じゃない。」

「それもそうだな。」

「ふふっ。」

「はははは……。」

2人は笑いながらまた歩き出した。

「お姉ちゃん!」

しばらく歩いていると前の方から中学生の少女が絵里に向かって走って来た。

「あら亜里沙、亜里沙も帰り?」

「うん! あ、志郎さんこんにちわ!」

「ああ、こんにちわ。」

志郎も亜里沙に挨拶を返す。

「じゃあ俺はこの辺でお暇させてもらおうよ。」

志郎が別方向に歩き出そうとすると、

「あら、志郎は一緒じゃないの?」

と絵里がたずねた。

「姉妹水入らずの時間を邪魔するほど野暮じゃないさ。」

そう言つて志郎はそのまま振り返らずに手を振りながら歩き出す。

「じゃあ、また明日ね!」

「志郎さんさようなら!」

「ああ、また明日。」

そうして絢瀬姉妹と志郎はそれぞれ帰り路を歩いていった。

ヴー! ヴー!

「なんだ?」

志郎のポケットに入っていたスマホが鳴つたので見てみるとメールが一通来ていた。

「穂乃果から? なになに・・・。」

『さつき希ちゃんに教えてもらったんだけど、明日は絵里ちゃんの誕生日なんだつて! お祝いしたいからみんなプレゼントを用意してね! あ、もちろん絵里ちゃんには内

緒だよ！」

内容はこのようなものだった。

「やれやれ、またあいつの突拍子もない思いつきか。やるならもつと早くに言ってくれよ、もう夕方じゃねえか。」

志郎はため息をついてそう言うが、その顔はどこか嬉しそうだった。

「仕方ねえ、絵里のプレゼントでも買いに行くとするか！」

志郎は踵を返して家ではなく街へと向かっていった。先輩でありながら後輩でもあるという、志郎にとって不思議な関係を持つ絵里の誕生日プレゼントをかうために。

番外編 秋の空の一等星

『いったただきまーす!』

神田のとあるラーメン屋で2人の男女が手を合わせてからラーメンを啜り始めた。

「うおーこれはなかなか……! 麺は程よくコシが入ってるし、このスープも出汁が効いて最高に美味しいな!!」

一通り麺とスープを味わってから若干オーバーリアクション気味に食べてるラーメンを褒めているのは、*μ* sのサポートをしている音ノ木坂学院に2人しかいない男子の片割れであり、信濃の戦国武将真田昌幸の生まれ変わりである武藤幸雄だ。

「このラーメンは凄く美味しいから凜の行きつけのラーメン屋の中でもかよちゃんと真姫ちゃんにしか教えてないお気に入りスポットなんだにゃ〜!」

そしてもう1人は音ノ木坂学院のスクールアイドルである、*μ* sのメンバーの1人であり、幸雄の後輩である星空凜だ。

「ほー、最近は三人でラーメン屋行ってるのか。」

「うん、そうだよ! 練習終わりに三人で食べるラーメンは最高にゃー!」

「ははは、だがほどほどにしておかないとダイエツトする羽目になっちまうぜ?」

「凜は食べてもあまり太らない体質だから大丈夫にや！」

「…それ、花陽の前では言ってやるなよ？あいつ絶対泣くぞ。」

幸雄が顔を引きつらせながらそう言うのと、

「それなら中学生の頃に言つてちよつと喧嘩になったことあるよ。あ、でもすぐに仲直りしたよ！」

凜はそうあつさりと返した。

「なんか心配した俺が馬鹿だった気がするぜ…。」

幸雄はそう言うともまたラーメンを啜った。

『ごちそうさまでした！』

ラーメンを食べ終わった2人が店から出てきた。

「これからどうするよ？俺暇だけど。」

「うーん、凜もほんとは今日かよちんと遊ぶつもりだったんだけど、かよちんなんだか今日は急用ができちやつたみたいで遊べなくなつちやつたんだあ。」

凜はため息をつきながら言った。

「そうなのか。それで1人でフラフラしとつたんか。」

「そうなんだよねえ。あ、そうだ！だったら今日はかよちゃんと遊べない分幸雄くんと一緒に遊ぶにや〜！」

そんな凜の提案に幸雄は、

「そう言えば基本的にサシで遊ぶのは志郎だけだから他の奴2人で遊ぶのは新鮮だな。なかなかいい名案だぞ凜よ、褒美に砥石城をくれてやろうw」

と、冗談めかして笑いながら答えた。

「幸雄くんお殿様みたいにや〜！」

「まあ実際俺は信州上田の大名だったしな。ほんで、どこに遊びに行くよ？」

「う〜ん、そうだ！ゲーセンに行こ!!」

「おお、ゲーセンか！そんなじゃあいつちよ派手に遊ぶか！」

「にや〜!!」

そう言うなり二人はゲームセンターへと走っていった。

「また凜の勝ちにや〜!!」

「ぜえ．．．、ぜえ．．．。ほんとお前さんの運動神経も大概だなあオイ．．．！」

「幸雄くんつてば志郎くんに比べて体力無さすぎ！もう少し鍛えたほうがいいにや。」

「だーからあんな力と技の二刀流の遣い手とかいう武勇チートのクセにさらに有り余るスタミナでゴリ押ししてくるあいつと一緒にするんじゃないやねえよ！俺は頭と口を使う方が得意なんだよ!!」

「頭はともかく口って……いつも屁理屈ばかりにや。」

「屁理屈も使いようなんだよ！それに俺だってあいつやお前クラスからすりや見劣りするだけでそれなりに鍛えておるわい！」

2人はダンスゲームで遊んでいたようだ。何回かプレイするうちに、sの中でも1、2を争うほどの運動神経を持つ凜はともかく、平均よりも少し運動神経がある程度の幸雄は体力が尽きて脱落していた。

「次は何するにや？」

「そうさのお、流石にクレーンゲームはやめといた方が良さげだな。」

「なんで？」

「ほら、俺ら負けず嫌いだから一度どツボにはまったら大量に小遣いが持つてかれるから。」

「確かに……。」

2人はゲームセンターの中を歩きながら次に遊ぶゲームを探していた。

「あ、そうだ！凜ね、気になってたゲームがあつたんだ！」

「気になるゲーム？何だそりゃ。」

「こつちこつち！」

「お、おい！急に引つ張るなって!!」

凜は幸雄の手を引いて『気になってたゲーム』の場所へ走っていった。

「ここは・・・アーケードゲームのコーナーじゃねえか。」

凜が幸雄の手を引いてやってきたのはアーケードゲームのコーナーだった。

「えーつと・・・。あ、あつた！これだにや!!」

「ん？こりゃあ・・・、『戦国大戦』か！」

凜が指さしたのは『戦国大戦』というゲームの筐体だった。

「絵里ちゃんと希ちゃんがいなかった頃のセンターを決める時に志郎さんと幸雄くんがものすごく熱中してたから気になってたんだ！」

「ああ、あの時か・・・。」

幸雄は凜の言葉で当時のことを思い出した。

「ねえねえ、これってどうやって遊ぶの？」

凜が目を輝かせながら幸雄にたずねる。

「ああ、これをやるには『Aime』^{アイミー}つちゆうICカードが必要なんだ。要は会員証みたいなもんだな。」

「それがないと遊べないの？」

「ああ。まあ300円ありや買えるが今回は特別に俺のサブカを貸してやろう。」

「いいの!?! ってサブカって何？」

「ああ、サブカってのは簡単に言うとなんか複数アカウント持つてるようなもんで練習用なんかに使ったりする奴がいるのよ。あ、俺がサブカを持つてるってのは志郎には内緒にしといてくれよ。」

「なんで内緒なの？」

「サブカってのは初心者をいたぶる初心者狩りに使う奴が多いから嫌われてんだよ。」

「まさか幸雄くんもその初心者狩りっていうのをやってるわけじゃないよね？」

凜がジト目で幸雄に詰め寄ると、

「失敬な！俺は表裏比興のものと呼ばれてはいたがこれに関しちや誠実だ！大体二枚持つてるのは前にAimeを失くしたことがあって番号を控えてなかったから仕方なく別のカードを作ってプレイしてたら失くした方の奴が見つかっただけだからな!!」

と、弁明した。

「じゃあそれなら安心にや！それでどうやって遊ぶの？」

「ああ、まずはここにAimeを置いてだな・・・。」

こうして幸雄の凜への戦国大戦講座が始まった。

「よし、だいぶ上手くなってきたな。」

「幸雄くんが教えてくれたおかげにや！」

幸雄による綿密な指導のおかげで凜は戦国大戦の大まかなルールや簡単なテクニクを大方マスターした。

「じゃあそういうわけで幸雄くんと勝負にや!!」

凜が幸雄を指さして宣戦布告するが、

「お前デツキ無いじゃん。」

とあっさり返された。

「そうだったにやー!!」

「まあ今回の練習で何枚かカードは手に入ったが、勢力はバラバラだしデツキは作れないな。」

「カードがあればいいってわけじゃないの!?!」

「そりゃそうだろ! さつきも言ったがデツキを組むには勢力とかコストとか色々気にせにゃならんのだよ。」

「うう、せっかく練習したのに・・・。」

そう言つて凧が項垂れると、

「仕方ねえな。俺のデッキを一つ貸してやるよ。」

と幸雄は4枚のカードを差し出した。

「いいの!？」

「ああ、俺とか志郎はそれなりのベテランプレイヤーだから何個もデッキを組めるくらいカードは持つてんのよ。まあ、今あるのはこの小さなデッキケースに入ってる分だけだがね。」

幸雄は手の平より少し大きめのサイズのデッキケースをバッグの中から出しながら笑つた。

「じゃあこの幸雄くんから借りたデッキで勝負にや!」

「おう、望むところだ!!」

「ふふふ、初心者にしてはなかなかやるじゃねえか凧。」

「幸雄くんの指導のおかげにや!」

凧が使うデッキは柴田勝家、織田信秀、森可成、羽柴秀長の4枚デッキで、勝家の『掛かれ柴田』という勝家を中心に陣形を展開しその中に入った味方と自分の武力を上げる

が強制的に敵城の方に前進してしまう計略で制圧前進して攻めるデツキだ。

一方の幸雄は真田昌幸、真田幸村、真田信幸、山手殿の四枚による真田ファミリーデツキだった。

幸雄は臨機応変の策で凧を攻めるが、凧も初心者とは思えないテクニク（あと勝家や信秀の高い武力と強力な計略）で守り、戦況が膠着した状態で制限時間が半分過ぎた。戦場には凧の方の陣には4枚の武将が全員そろっていたが、幸雄の方は信幸が撤退させられて幸雄側の城内におり、数では不利な状態だった。凧はこれを見逃さなかった。

「よしー！これで勝負を決めるにや!!」

凧は勝家の『掛かれ柴田』を発動して幸雄の城に迫った。

「やってくれるぜ……。よし！幸村と昌幸で防戦、そして山手殿を二人の後ろに置いて砲撃で援護だ!!」

幸雄は昌幸と幸村を凧が操る勝家、可成、秀長にぶつけた。

「守る時間も与えないよ!」

「なに!?!」

凧は家宝を使った。家宝とは試合で一回だけ使える強力な必殺技のようなもので武將に持たせるとその武將を強化したり、家宝を使う『奥義』では持ち主や味方、或いは敵に様々な効果を与える。効果は種類によって違いますが凧が使ったのは、味方の武力（攻

撃力と防御力)を4上げる刀、『童子切安綱』だった。

「くそーただでさえ『掛かれ柴田』で6も武力上がってるの更に4上げて+10かよ！容赦ねえな凜!!」

この時の戦場にいる武将の武力は勝家が19、信秀が18、可成が17、秀長が14の合計68、昌幸の7、幸村の10、山手殿の3の合計20と下手にぶつかれば幸雄の武将たちが蒸発しそうな勢いだった。

「よーし、このまま押し切るにゃー!!」

凜はそのまま昌幸たちを押しつぶすために勝家たちをさらに前に出す。幸雄は絶体絶命の状況だったが、

「・・・かかったな凜ー」

そう言ってニヤリと笑うと幸雄は昌幸の計略、『宵闇の強襲』を使った。

『宵闇の強襲』とは、戦場にいる味方を一瞬で城内に入れ、その代わりに城内にいる味方を戦場の自陣中央付近に出現させて味方全員の武力と速度を上げる、まさに変幻自在の計略だ。

「にゃ!? 武将が3人消えて信幸さんが出てきたにゃ!? しかも後ろから!!」

幸雄の陣に深入りした凜の武将たちは背後を突かれる形となった。

「でも信秀さんで倒しちゃうもんねー!」

凜はそう言つて信秀を信幸に差し向けようとするも、

「ほい奥義。」

幸雄が奥義を使った。幸雄が使つたのは兵法書『海国兵談』という、相手の統率（押し合いや計略の強さ）を4下げてさらに速度も下げる家宝だった。

「これで騎馬は役立たず、さらにいい感じに固まつてくれるじゃあないの・・・。」

幸雄はニヤリと笑う。

「悪いが全員まとめて焼かせてもらうぜ!!」

幸雄は信幸の計略『厳酷火烈』を使った。これは使つた武将の目の前にいる武将にダメージを与えるもので、ダメージは使つた武将と喰らつた武将との統率力の差で決まってくるが、『厳酷火烈』は城内の見方が多いほどさらに威力が上がるものだった。

「にゃー!!!勝家さんたちが全員焼かれたにゃー!!!」

勝家、信秀、秀長の統率力は4、可成は0に下げられ、信幸の統率力は9、そして城内には味方が3人いるので一撃必殺ともいえる威力になっていた。

「勝負あつたな凜!」

幸雄は昌幸や幸村、山手殿を出撃させ、4人で総攻撃をかけて凜の城を落とす、見事対戦に勝利した。

「やっぱ幸雄くんは策士だにゃ・・・。」

「まあ、俺もお前の総攻撃には本気でビビったがな。」

2人は互いに健闘を称えた。

「うゝん、今日は楽しかったにやゝ!!」

「楽しんでくれて何よりだな。」

「今度はかよちゃんと真姫ちゃんに志郎くんも誘ってみんなでやりたいにや!」

「ははは、それはそれで面白そうだな。」

ゲームセンターから出た2人は街を歩いていた。

「楽しそうだな、凜。」

幸雄は感慨深げに凜に話しかける。

「うん!だってこの前の凜の誕生日会も、ファッシュンショーもすごく楽しかったし最近楽しいことばっかりだもん!」

凜は満面の笑みでそれに応える。

「楽しめてるようで何よりだねえ。俺より人生を満喫してる感すらあるわ。」

「そうかな、幸雄くんもいつも楽しそうにや。」

「そうかね? まあ凜がそう言うならそうなんだろうな。」

「えへへ・・・。」

「あと、お前さんはあの日からさらにのびのびとしてるようにも見える。」

「え？凧はいつつものびのびとしてると思うにや。それにあの日って？」

「フアツションショーさ。あの日からお前さん、練習着や私服も随分女の子らしくなつたよな。」

「そ、そんな事ないにや！これがいつも通りだよ!!」

凧は幸雄の言葉を否定してみせると、

「ふふ、そうやっていつも通りだと言うことが出来るくらい女の子らしい服を当たり前のように着ることが出来るようになったのは最高の成長だな。俺がもし真田昌幸の生まれ変わりではなくただの何の変哲もない少年だったら一目惚れするかもしれんくらいにな。」

幸雄は笑いながら答えた。

「えー、それってどういう意味にや!?!」

「おいおい、俺と志郎はお前らの倍以上生きてるんだぜ？俺たちからしたらお前らはまだまだ子供にしか見えんわい。」

「えーひどいにや〜!!」

お互いに軽口を言い合いながら歩いていると、

「あ、ご、ごめんなさい！」

凜がすれ違った通りすがりの男子とぶつかってしまった。

「いえ、こちらこそすいません．．．ってあれ？お前星空じゃね？」

「え．．．？」

凜とぶつかつた男子は凜の顔を見るなり、馴れ馴れしそうに話しかけてきた。

「凜、こいつと知り合いか？」

「う、うん．．．。」

幸雄の問いに答える凜の声色はさつきよりも暗くなつており、表情も心なしか強張つていた。目ざとい幸雄はそれを見逃さなかつたが、どうしてなのかまではわからなかつた。

「久しぶりだな。中学校卒業して以来じゃね？全然変わらないもんだな！」

「うん．．．。」

凜の表情が星空を雲が隠すようにみるみる曇つていく。

「にしても随分女子っぽい格好してるんだな、まるで女装みたいじゃね!? あはは。」

冗談を言うように笑う男子に幸雄は、

「おいあんた！いい加減に．．．。」

と抗議しようとするが、

「……!!」

「あ、凜!!」

男子の言葉に耐えられなかった凜はその場から走り去ってしまった。

「あれ？冗談のつもりだったんだけど怒らせちゃったかな？あはは、小学生とか中学生の頃は普通に笑ってたんだけどな〜。」

走り去っていく凜の背中を見て何事もなかったかのようにそう言って笑っていた。幸雄はそんな男子の様子に凜を追いかけることも忘れて思わず拳を握りしめた。

「あれ、あんた星空と一緒にいた人だよね？友達？それとも彼氏？まあ彼氏なんてありえないだろうけど、追っかけなくていいの？」

「……れ。」

「え？」

「黙れ小童あ!!!」

幸雄は叫んだ。普段なら滅多に声を荒げるような事はしない幸雄だったが、この時ばかりは我慢の限界だった。頭の回る幸雄は先程の男子と凜のやり取りを見て全てを察した。全てを察したからこそ怒りに任せてかつての、真田昌幸だった頃の幼馴染にして

ライバルでもあった、とある男の口癖を無意識に借りて怒りをぶつけた。

「な、え…!?!」

男子は面食らった。幸雄は垂れ目でいつも戯けた表情を浮かべてるため、こういう怒った時の姿が想像できないとよく周りの人物に言われており、この男子も例に漏れずそんな印象を幸雄に持つていただけであつてその驚きは計り知れない。

そして幸雄は大声で自分たちの方に人々の視線が向いたことに構いもせず男子のもとへずかずかと歩み寄り、その胸ぐらを乱暴に掴んだ。

「てめえな、さつきから黙つて聞いてりやあふざけたことばかりぬかしやがつて…! 『冗談のつもりだった』だ!?!寝言は寝てからほざきやがれくそつたれ!!」

「ふ、ふざけてたのはその通りだけどなんなんだよ一体!俺はただ昔のノリで星空に話しかけただけで…!。」

いきなり幸雄に胸ぐらをつかまれた男子は振りほどこうとしながら反論するが、

「やかましい!俺はお前の言葉を聞いていた凜の顔と、てめえのあいつを小馬鹿にした物言い、今の今まで知らなかった事が全て分かつたぜ…!。」

「だから何の話…!。」

「あいつが…、凜が『あの日』まで女の子らしい格好をすることを拒んでたのは…!・てめえらが『冗談のつもり』で凜に浴びせた『言霊』が元凶だったんだ!!」

「言霊・・・?」

「ふん、言霊も知らねえのか。言霊つてのは日本に古来から言葉に宿ると信じられてきた『靈力』のことさ。もつとも靈力なんてものがホントにあるのかは知らねえが、言葉に『力』が宿つてることだけは確かな事だ。言葉は、相手に善意を持つて使えば相手を元気づけることが出来るがその反対、つまり悪意を持つて・・・いや、悪意なんてなくても何となく喋つた言葉で人の心を傷つけることが出来ちゃうんだ!!」

「・・・」

「あいつは友達想いで真っ直ぐな心を持つてる純真な奴なんだ!だからこそめてめえらが『冗談のつもり』で言つた言葉を真に受けちまつて、それが呪いとなつてあいつの心に傷を与え、心を鎖で縛つちまつたんだよ!!」

「そ、そんなの冗談を真に受けるあいつが悪くね・・・?」

男子がうっかり口を滑らせて呟いた言葉が、さらに幸雄の怒りを駆り立てた。

「貴様ア・・・!!貴様はまだ自分たちがやったことの罪深さを感じないのか!!さつきも言つたがあいつは小学生の頃からつい最近、花陽と真姫達が背中を押してくれるまで貴様らの言葉が頭によぎつて女の子らしい格好をしたくても出来なかつたんだのだ!よく考えてみる、あいつが花陽や真姫、μ、sのみんなに会つてなかつたらあいつは・・・、あいつは一生女の子らしい格好をしたくてもできない『呪い』を死ぬまで背

負う羽目になってた可能性だつてあつたんだぞ!!」

そう叫ぶ幸雄の目にはうつつすらと涙が浮かび、口調も真田昌幸だつた頃のものに少しづつ戻つていた。

「貴様らが『冗談のつもり』で言ったことは人の人生そのものを狂わせかねんということ覚えておけ!」

幸雄はそう言つて胸倉を掴んでいた手を離した。

「ふ、ふう……。」

解放された男子は安堵のため息をついた。すると幸雄はまた胸ぐらを掴んで目の前まで引き寄せ、

「それともう一つ言つておくれ。俺は人を見る観察眼に長けていてな、貴様の顔は寸分違わず覚えさせてもらったぞ。いいか?もしまたあいつに会うことがあつたとして同じことをもう一度ほざいてみる……。貴様にこの世に生まれたことを後悔するような苦しみを死ぬまで味わわせてやるからな……!」

と、鷹のように鋭くなった『炯眼』で男子の目を真っ直ぐじつくりと睨み付けながら言い放ち、手を離した。すると男子は腰が抜けたのか地面にへたり込んで、

「(う)めんなさい……。二度としません……。!」

と半泣きになって幸雄に謝つた。

「ふん。言う相手が違うだろうが、クズめ。」

幸雄は軽蔑するような目で男子を一瞥し、凧を探すために彼女が走っていった方向へ走り出した。

「・・・ぐすつ。」

幸雄が凧を探しに街を奔走してる時、その凧はとある公園のベンチに座っていた。走ってる時泣いていたのか目元が赤くなっていた。

（かよちゃんと真姫ちゃんはある時「かわいいよ」って励ましてくれたけど、結局凧は何も変わってなかったのかな・・・。）

凧の頭の中で、花陽と真姫の笑顔ときつき浴びせられた言葉がせめぎ合っていた。

（やっぱり凧に女の子らしさなんて・・・！）

凧はそう思いながら髪につけてたヘアピンを無理やり外して地面に投げ捨てようとした瞬間、何者かが凧の腕を掴んだ。

「女たるもの、自分を着飾るアクセサリーを粗末に扱うもんじゃないぞ。ましてや友達に選んでもらったものなら猶更よ。」

幸雄だった。幸雄は静かに笑いながら優しく凧を諭す。

「幸雄くん……！だって、凧にはこんな格好似合わないって……。」

「おいおい、あの時俺が言った事を忘れたか？『そんな戯言を言う奴がいたら笑い飛ばしてやれ』って言ったのをよ。」

「忘れてなんかないにや……。でもあの時はかよちんと真姫ちゃんだけじゃなくって幸雄くんの励ましがあつたから凧はあのドレスを着ることが出来たのを今でも覚えてるもん！ただ……。」

「ただ？」

「ただね、凧はまだ不安なんだ。凧はまだあの日みたいにかわいい姿でいてもいいのになつて、あれはほんの少しだけの夢だったんじゃないか……って。凧、あの日からずっと不安だったんだ。」

凧は先ほどよりは穏やかな表情ではあつたが、幸雄に日々抱いていた不安を打ち明けた。

「不安……か。前から思っていたが、お前は本当に源次郎にそっくりだなあ。」

そんな凧の頭を優しく撫でながら幸雄はふと、息子だった男の名前を出した。

「源次郎？それって幸雄くんが昔の時代にいた頃の人だっけ？」

「ああ、何せ源次郎……真田信繁は俺の息子の一人だからな。ああ、幸村って言った方

が通りはいいか。」

「凜はその源次郎さんにそっくりなの?」

凜は首を傾げて幸雄にたずねる。

「おうとも、あいつは今では『戦国最後の英雄』だの、『日の本一の兵』だの持て囃されているが、俺の知る源次郎はお前さんのように活発でありながら、不安と戦いながら生きてきた男だからな。」

「凜と・・・一緒?」

「一緒だとも。今のお前さんの姿がびったり重なるくらいにはな!」

「源次郎さんは、何を悩んでたの?」

「ああ、あいつは幼いころと俺が死ぬ前に2人きりになるとこぼしておったのだ。『俺はこの世に生きた証を残せたのかな...?』ってな。」

「この世に生きた証?」

「そうだ。あいつは活発にして利発であったが、俺の後継者として表舞台に立つことが多かった源三郎・・・信之とは違って表舞台に立つことはほとんどなかったのだ。」

「どうしてそれが不安だったの?」

「そりゃあ俺たち武士にとつては活躍して名を上げることこそが最高の名誉だからな。」

源次郎は人質だったり秀吉の馬廻だったり日当たらないところにいることが多

かったからな。それが悔しかったのだらう。」

「幸雄くんは源次郎さんを励ましてあげたの?」

「ああ、今でも覚えてるとも。『わしは父から受け継いだ真田の『知略』を天下に知らしめ、源三郎は真田の『血』と『名』を守った。次は源次郎、お主の番よ。お主はこれより大坂で練り広げられるであろう戦で真田の『武勇』と『生き様』を人々の心に刻み付けよ。』ってな。そしたらあいつめ、あの糞だぬきの家康めを自害させようとするまで追いつめおったというではないか!この世に生まれ変わってそれを知った時は我が息子のことながら鼻が高くなつたもんよ!」

と幸雄は自慢げに話した。

「ねえ幸雄くん。凜も源次郎さんみたいに輝けるかな……。」

凜はおずおずと幸雄にたずねた。

「ああ、輝けるとも。お前はきつと誰よりもかわいい女の子として輝けるだらう。」

「ほんと?!凜、かよちゃんや真姫ちゃんに、sのみんなや志郎くんだけじゃなくて、幸雄くんのその言葉も信じていいの……?」

幸雄が凜の言葉に応えると、凜はさらに念を押す。

「ああ、もちろんだとも。仮に俺の言葉が信じられずとも、この俺の眼を信じればよい!」

幸雄は右手の指でピースを作ると、その指先で下から自分の両目を指し示した。

「幸雄くんの・・・眼？」

「おうとも、俺のこの眼はかの乱世の英雄が一人、武田信玄公から『我が両目のようだ』とお褒めに預かり、信玄公や勝頼さま亡き後も『信玄の炯眼』と恐れられた代物よ！そんな目の持ち主である俺がお前さんをここまで評価するんだからそれこそ間違いはあるまいて。」

と言つて幸雄はにかつと笑つた。

「うんーだから凜ね、もうくよくよするのはやめるにや!!」

凜もまた輝かしい笑顔でそう答えた。

「ふつ、ようやつといつもの凜に戻つたな！その底抜けに明るい笑顔こそお前がお前たりうる一番の証よ。」

「どういう意味にや?」

幸雄の言葉の真意が読めず、凜は首を傾げた。

「お前の名前だよ。お前がそうやって明るく笑つてるのを見てるとな、まるで『星空』に『凜』と輝く一等星のように思えてくるのさ。」

「一等星ってなあに?」

「一等星っていうのは光る星の中でも最も明るく輝くものを指す言葉よ。きつとお前さ

んの母親は凜がそんな一等星のように輝いてほしいと願って名付けたんだろうよ。」

「そつか……。じゃあ凜は誰よりもかわいくて誰よりも輝く一等星になってみせるにや
〜!!」

凜は公園の中心で宣言するように大きく叫んだ。

（いい顔をするなあ……。あの何もかも吹っ切った爽やかな笑顔も源次郎にそっくりだのお……。ただ一つ違いを挙げるとするならば、源次郎の顔には死相が浮かんでおつたが凜にはそれが無い。滅びゆく者の笑顔ではなく、輝かしい未来へと歩もうとする笑顔だ。それがここまで見てて気持ちいいものだとはな……。）

幸雄はそんなことを考えながら凜の楽しそうな笑顔を見ていた。

『ぐうううう……。』

すると突然気の抜けた音が鳴り響いた。

「えへへ……。たくさん遊んで走って、今こうして叫んだらお腹がすいちゃった。」

「ははは、俺もよ。いつの間にか日も沈んどるしな。」

2人は腹の虫が鳴いたのを笑った。

「お腹すいたから晩御飯にラーメン食べに行くにや〜!」

「おいおい、昼夜続けてラーメンは流石にきついぜ。それに親御さんが夕飯作って待つてるんじゃないか?」

「それもそつか。じゃあ幸雄くんも凧の家で食べてく?」

「いいのか? いきなり邪魔しても。」

「凧のママならきつと幸雄くんも歓迎してくれるにや! つてことで凧のうちに急ぐにや
!!」

そう言つて凧は幸雄の手を引いて走り出した。

「おいちよつ待てつて!」

幸雄は制止しようとするも、

(いや、たまにはこういうのも悪くないかもしれないなあ……。そうだろ? 源次郎……。)
そう思い直してそのまま凧に手を引かれながら走つていった。

陽が沈み、暗く染まる秋が深まる東京の夜空。いつもなら真夜中まで消えない街の明かりに隠れて見えない星の光だが、今日は先輩と後輩であり、味方を変えれば親子のようにも見える少年と少女を見守るように、一つの星が凧と輝いていた。

番外編 次代に開く花の蕾へ

「うう、今日も寒い……。こんな日はやはりこたつに入ってみかんに舌鼓を打つのが冬の娯楽の醍醐味だよな。」

1月も少しづつ終わりが迫り、さらに寒さが強くなつていく今日この頃、今日はμsの練習が休みなのか志郎は自宅でこたつに入ってみかンを食すという一般的な冬の日本人スタイルで休日を謳歌していた。

ヴー！ヴー！

「まったくこんな日に誰から電話だ？」

志郎は傍らに置いていた自分のスマホが鳴るのを見て、それをめんどくさそうに手に取った。

「花陽からか。」

画面には『小泉花陽』と電話をかけてきた人物の名前が映し出されていた。

「もしもし、どうしたんだ花陽？」

『あ、もしもし志郎さん？あのお……、今お時間はありますか？』

「ん？時間か？もちろん大丈夫だ。今もおこたでみかンを食すという平々凡々な冬の娯

楽に打ち込んでいたところだ。何か俺に用事があるのか？」

『えつと……。志郎さんにちよつと相談したいことがあるんです。』

「俺に相談？」

『はい。あ、直接志郎さんと会ってお話したいんですがよかったですら志郎さんの家に行きましようか？』

「いや、こんな寒い日にわざわざ足を運んでもらうのは申し訳ないから俺がそっちに行こう。」

『え!?でもなんか申し訳ないです!』

「なあに、歩けば体も温まるから平気さ。それにこの寒空のなかで女子を歩かせるのもどうかと思うしな。じゃあまた後でな。」

志郎はそう言つて電話を切り、食べかけのみかんを口に放り込みながらこたつを出て、外に出る準備をする。

(花陽が相談したいことか。だとすると十中八九あれのことかな……。)

志郎は上着を羽織り、マフラーを巻きながら花陽が相談したいと言つていた事について、感慨にふけるような顔をして思いを馳せていた。

「歩けば体が暖まるとは言った方がいいが、少しばかり距離が足りなかったか……?」
志郎はそんなことを言いながら花陽の家の前で体を震わせた。

「遠回りして走ってくれば体も暖まるのだろうか、流石に花陽を待たせるわけにもいからな……。」

志郎は脳筋的思考でぼやきながら花陽の家のインターホンを押した。

『はい！あ、志郎さん。入っていいですよ!』

そうインターホン越しに言われた志郎はそのまま花陽の家に入った。

「お邪魔します。」

「あ、志郎さん！寒かったですよね、私の部屋はこっちですよ。」

家に入ると志郎は花陽に部屋に案内してもらった。その道中で花陽の母に、

「あら？花陽が男の子を連れてくるなんて……、もしかして彼氏さん?」

と物凄くニヤニヤしながら言われて、

「そ、そんなんじゃないよお母さん！がっこうの先輩だよお!」

と顔を真っ赤にして抗議している花陽を見て、

(こんな花陽もなかなか新鮮だな。)

と想いながら志郎はほっこりしていた。

「お母さんが変な事言つてすいません．．．」

花陽は志郎を部屋に案内した後にお茶を持ってきて、志郎に渡しながら謝った。

「いやいや、別に気にしちやいないさ。まあ、花陽のお母さんのあのテンションの上がり方を見て少しばつくりはしたが．．．」

志郎は苦笑いしながら花陽から受け取ったお茶を飲んだ。そして湯飲みから口を離すと志郎の表情は真剣なものに変わった。

「それで、相談したいことつてなんだ？俺にできることなら何でも聞くぞ。」

「実は．．．。私、にこちゃんに次のアイドル研究部の部長になって欲しいって言われたんだ。」

「次期部長に．．．か。」

「うん。私は無理だよって言ったんだけどにこちゃんは『花陽だからこそ跡を任せたいのよ』って言つてて．．．。あ、でも本当にいやだったら断つてもいいって言つてたんだけど．．．。』」

志郎は花陽の相談内容を聞いて心のうちで少し唸っていた。

（うーん。やはりと言うかなんというべきか、俺の予想が的中したな．．．。確かにこの手の話は早くに済ませてしまふに越したことは無いがまだ花陽の心の準備が出来ていないというのに話すのが早すぎではないか？まあもつとも、花陽に次期部長を任せると

「いう話は俺と幸雄も一枚かんでるんだがな。」

「どうやら、志郎が出掛ける前に考えていたことは花陽がにこにアイドル研究部の次期部長を任されたという事であつたようだ。」

「花陽、お前自身はどう考えてるんだ？」

「私は……。私には無理だつて思つてます……。」

「それは何ゆえか？」

「それは……。私じゃあ荷が重すぎるといふか……。私が本当にこのアイドル研究部を背負えるのになつて思つちやうんです。」

「ふむ……。」

「このアイドル研究部はにこちゃんが独りぼちで守つてきて、私たちμ'sが入つて来て、そのリーダーの穂乃果ちゃんがここまで盛り立てて来て……。そんな素敵な部活を私なんか背負えるのになつて……。ひよつとしたら私たちの代で潰しちやうんじゃないかつて、不安になるんです……。」

花陽は不安に思う理由を志郎に話した。途中から声は少しづつ震え、語り終わる頃には涙声になつていた。

「……なるほど。花陽がどう思つているのか、そしてどれだけこのアイドル研究部を想つているのか、それはよく分かつた。だがそれでも俺たちは花陽に次の部長をやつて欲し

いと思っているんだ。」

志郎は諭すように花陽に自分の考えを伝えた。

「俺たち……ですか？」

花陽は志郎の出した『俺たち』という言葉に首を傾げた。

「ああ。言うのを忘れてたんだが、実は次期部長を誰に任せるべきかは現部長であるにこと、サポーターである俺と幸雄が話し合つて決めたんだ。ちなみに俺と幸雄も、ここと同じく花陽を推薦した。」

志郎は次期部長の選定に自分も関わっていたことを花陽に打ち明けた。

「そ、そうだったんですか!? ご、ごめんなさい! まさか志郎さんも関わつてたなんて知らなくつて……。」

「別に謝ることじゃないさ。」

志郎は慌てて謝る花陽に優しく笑いながら謝る必要はないと諭す。

「でも、どうして私を選んだんですか……? 穂乃果ちゃん達がいけない間の代理リーダーをやった凜ちゃんだっているし、真姫ちゃんだつて私なんかよりも色んなことを卒なくこなせるし……。」

「なぜお前を選んだか……か。次期部長を決めるにあたつて俺たち3人はまず今の2年生に託すか1年生に託すかを話し合つたんだ。」

「2年生か1年生か、ですか？」

「ああ、でもこれに関してはあるさきり結論が出たよ。」

「そうなんですか？」

「ああ、なぜなら穂乃果は生徒会長を務めてるから部活の部長にはなれない。なら海未とことりがいるじゃないかと思いがちだが、何せあいつらには穂乃果の補佐という重要な役目がある。穂乃果は絵里とは違つてあまりというか、正直なところほとんど事務的な仕事の適性が無いと言つても過言ではないからな……。」

志郎は2年生に白羽の矢を立てなかつた理由を話すが、最後の方ではため息交じりとなつていた。

「あはは……。志郎さんと幸雄さんはダメなんですか？」

花陽が志郎の様子に苦笑いしながら尋ねると、

「そりゃ論外さ。俺たちはあくまでもサポートに徹すると決めているからな。なにせ特例で在校を認められてるとはいえ表舞台に立つのは控えておきたいんだ。」

と志郎は答えた。

「それとあの3人はこれから受験勉強でも忙しくなるだろうから練習に出る頻度も少なくなるだろうから、部長が減多に来なくなってしまうのは如何なものかと思つて1年生に任せることにしたのさ。」

「そうなんですか……。そこまで考えていませんでした……。」

「次に1年生の中での選定だな。まず凜なんだが、確かに修学旅行の間に代理リーダーを務めたという実績はあるが、それはあくまでもユニットリーダーとしてであって、部長としてではないから外した。それにあいつはどっちかって言うど役職に縛られるのはあまり好きではなさそうだろうなって3人とも言つてたよ。」

「じゃあ、真姫ちゃんは……。？真姫ちゃんは花陽よりも何でもできるのに……。」

「うーん。確かに真姫は何事も卒なくこなせそうだと思ふんだが……。あいつは作曲担当っていう重要なポジションに就いてるのにさらに部長の仕事という負担をかけるわけにもいかないんだよな……。それにあいつ、人付き合いがあまり得意とは言えないだろう？。」

花陽に尋ねられて、真姫を選定から外した理由を挙げると、

「真姫ちゃんは初めの時に比べたら人当たりも良くなつてますよ！」

と、花陽は反論した。

「ああ、それは俺もよく分かつてるさ。でもそれはあくまでも彼女の事を知ってる俺たちや他の生徒だけがそのことを知るのであつて、真姫の変化を知らない後輩たちからすればあいつの言動は多少厳しく聞こえるだろう、と幸雄は言つていた。観察眼に長けている幸雄の『炯眼』だからこそその核心を突いた意見だと俺は思っている。」

「それで最後に残ったのが・・・私ですか？」

花陽が沈んだ表情で言うど、

「ああ、そうなるな。」

と志郎は頷いた。

「だが、何も消去法だけで決めたわけじゃあない。最初にも言ったが俺と幸雄とにこはお前に次期部長の座を託したいと思つてたんだぞ？」

と、頷いた後に志郎は付け加えた。

「え・・・？」

花陽がその言葉に俯いていた顔を上げた。

「まずはにこの理由からだな。あいつは同じアイドル好きの同志として、お前のアイドルに対する情熱をメンバーの中でも一番買つていた。そんな同志だからこそあいつは心置きなく任せられると思つたんだろう・・・。一応無理に薦める気は無いとも言つていたけどな。」

「にこちゃん・・・。」

「次に幸雄だな。あいつも・・・というより俺もだがにこと同じくアイドルに対する強い

情熱を評価している。そしてあいつが出した理由は、かつて息子だった源三郎……いや、信之に似ているという事らしい。」

「私が幸雄さんの前世での息子さんに……ですか?」

「ああ。あいつが言うには花陽と凜の姿を見ていると信之と信繁の2人の姿が重なる時があるらしくてな。凜の明朗快活なところや時々見せる突っ走りがちなところ、そしてその表情の裏に何処か不安げな様子を隠してる様子が信繁とそっくりで、信之と花陽は普段は穏やかで大人しいのにここぞという所では思いつきり前に踏み出せる、そんなところがそっくりだと言っていた。」

「そうだったんですか……。」

志郎と幸雄の正体を聞いた時に名前が出てきた歴史上の英雄の一人にそっくりだったと聞かされた花陽は少しポカンとしていた。

「俺はまだ信之が源三郎と名乗っていた頃にしか交流は無かったが、それでもあいつがいずれ父にも劣らぬ将となることはなんとなく予想できた。もつとも源三郎が真田家の危機を救い、その血と名を後世にまで残すことになるとまでは分からなかったがな! それにな、お前も知ってるだろうがあいつは人間観察の名手なんだ。そんな人を見る目に長けた幸雄のお眼鏡に適ったことは誇るべきことだと思うぞ。」

志郎はそう言って笑いながら花陽の頭を撫でてみせた。

「さて、最後は俺の理由だな。」

「……。」

遂に志郎が自分を次期部長として推す理由を話す時が来た。そう思った花陽は息を呑み、姿勢を正した。

「と、その前に一つ与太話に付き合ってくれ。」

志郎は先ほどとは違つて感慨深げに口を開いた。

「与太話……ですか？いいですよ。」

「そうか、じゃあ話すか。さつき俺は幸雄が自分の息子とお前の姿を重ねていた、と言つたな。実は俺もまた花陽と姿が重なつて見えた者がいたんだ。」

「それつて誰なんですか？」

「俺の息子の信勝さ。」

「志郎さんが勝頼さんだった頃の息子さん、ですか。」

「ああ、あいつは自分で言うのもなんだが豪胆な性格だった俺に似ず、繊細で大人しい子だった。だが信勝はいつも『父上のような強くて優しい武田の当主になれるように頑張るんだ！』と言つて一生懸命に鍛錬や読み書き、算術に取り組んでいた。そして元服する頃には立派な若武者に育つていった……。だが、そんな信勝も俺と共に天目山で16歳という若さで最期を迎えた……。」

「……」

「そして俺は自害してこの時代に生まれ変わり、そして17年間この時代に生き続けて信勝の姿が重なる人物と出会った。」

「それが私だったんですね。」

「ああ、花陽の何事にも一生懸命に臨もうとする姿が重なって見えたんだ。」

「……」

花陽は志郎の話を真剣な面持ちで聞いていた。

「さて、いよいよここからが本題だな。」

「……」

花陽は再び息を呑みこむ。

「さて、花陽は最初になが守ってきて、穂乃果が先頭に立つて共に盛り立ててきたアイドル研究部を背負えるかどうかが不安だと言っていたな。」

「はい、志郎さんの言う通りです。私にはにこちゃんみたいな辛抱強さも無いし、穂乃果ちゃんみたいに色んな人を引っ張っていける力も持って無いから、もし私が部長になってみんなが今まで一生懸命積み上げてきたものを私のせいで全部だめにしちゃうかもしれない、ひよつとしたらライブに来てくれる人もいなくなっちゃうかもしれないって思っちゃう時があるんです。」

「根拠のない根性論は好かないが、それはやってみないと分からないと思うぞ。」

「ううん、分かっちゃうんです。私はいろんな人に助けられっぱなしでなんにもない落ちこぼれだから・・・、そうなっちゃう風景が見えちゃうんです・・・。」

そう言つて花陽は顔を俯けてしまう。

「俺はそんな事ないと思うぞ?」

「・・・え?」

「俺はな、花陽にはここにも穂乃果にも、そして俺さえも持ちえなかった『リーダーの素質』を持つてると思つてるんだ。」

「リーダーの素質、ですか?」

「ああ、それは『徳』さ。」

「徳?」

志郎が出した言葉の意味が分からず、花陽は思わず首を傾げた。

「ああ。人徳とかそう言う意味で使われる『徳』のことさ。俺は花陽にはそれが十二分に備わつてると考えている。花陽は自分の力じゃどうすることも出来ないことに直面したら誰かに助けを求めらるだろう?」

「はい。でもそれが徳とどんな関係があるんですか？」

「あるとも、大有りさ。人間っていうものは見返りの無いことをやりたがらないものだが、『この人のためなら』って思ったことは時と場合によりけりだが何でもやりたくなる傾向があるんだ。簡単に言うると『徳』って言うのは『この人のためなら』と思わせる才のことさ。」

「『この人のためなら』……ですか。」

「ほら、凜や真姫が何か手伝ってくれた時もお前が何かお礼をしようとする、『かよちゃん（花陽）のためにやった事だからお礼なんていいよ。』って言われたこと、一度はあるんじゃないか？」

志郎がそう言うのと花陽は過去のことの思いを馳せ、

「確かにそう言われたこと……何回かあります！」

と言った。

「そうだろう！それが徳なのさ。俺はそんなお前に似ている武将を知っている。」

「私に似た武将ですか？」

「ああ、その名は毛利隆元と言う。」

「その人はどんな人なんですか？」

「隆元どのは広島県の小豪族であった毛利家を中国地方の覇者へと大成長させた毛利元

就公の長男で、穏やかで心優しい人柄だったそうだ。だが彼には大きな悩みがあったのや。」

「悩み…?」

「彼は穏やかな人柄ではあったが自分を卑下することの多い性格でもあったそうだ。なんせ彼の父、元就公は戦国時代でも最強と謳われるほどの謀略の名手で、次男の元春どのは合戦では負け知らず、三男の隆景どのは元就公の謀略の才を最も色濃く受け継いでいて、優秀な家族に囲まれ、劣等感に苛まれていたのさ。」

「私もその隆元さんの気持ち、よく分かる気がします…。凛ちゃんや真姫ちゃん、他のみんなも私なんかとは違って色々辛いものを持つてるから…。昔の人なのにすごく親近感が湧いちやいますね。」

花陽は、自分と似たような境遇だった毛利隆元に対して親近感を覚えていた。

「でもな、そんな隆元どのは実は誰よりも毛利家のために貢献していた事を証明する話が残ってるんだ。」

「どんなお話なんですか?」

「隆元どのは41歳の若さで父である元就公より先に死んでしまうんだ。その時の毛利家は戦さの準備中で、徴兵やお金や兵糧の徴収、そしてといった隆元の仕事を元就公や弟たちで担当することになったんだ。もちろん三人とも『隆元（兄上）』がやってたから

俺たちがやっても大丈夫だろう。』と思つてたんだが、実際はどうなつたと思う?」

志郎が花陽に質問すると、

「どうなつたんでしよう…?」

花陽もそう言つて首を傾げた。

「実は思うように集まらなかつたらしいんだ。」

「集まらなかつたつてどういうことなんですか?」

「簡単に言えば傘下に入つてた豪族はみんな兵士やお金を出し渋り、商人たちもお金を貸したがらなくなつてしまつたんだ。そしてみんな口を揃えて『隆元さまが生きていらつしやつたらなんとかするのに。』と言つたそうだ。」

「隆元さんのために…。」

「そう、隆元どのは父や他の兄弟が持ち得なかつた徳があつたからこそ商人や百姓、他の豪族にも慕われて、彼のために尽くそうと思う人たちが集まつて毛利家の繁栄に貢献する事が出来たんだ。それに彼はやる時はやる性格で、毛利家のターニングポイントである厳島合戦の時も、弱気だつた父を励まして決戦に踏み切らせてるんだ。」

「隆元さんは凄い人だつたんですね!」

「ああ。だがこれはあくまでも本などで仕入れた知識に過ぎないから実際のところはどうだったのかは分からないが、俺は彼の徳を受け継ぐ人物に出会つたんだ。」

「それはどなたなんですか?」

「俺や幸雄と同じ転生者の吉田輝久という男でその正体が他でもない隆元どのの息子の輝元どのでな、様々な媒体で聞いた話通り優柔不断で気の弱い男だった。正直武将としての才はこれっぽっちも感じられず、どうしてこんな男が毛利家を残すことが出来たのか、初めて会った時は真剣に疑問に思ったもんだ。」

志郎は夏休みに幸雄が開いたオフ会で出会った輝久のことを思い出しながら語った。

「だが答えは思った以上に単純だった。それは彼もまた父と同じように徳を持った人物だったからだ。」

「その人も徳を持つてる人だったんですか?」

「ああ、彼は世間からは暗愚とは言われてるし、実際に優柔不断で余計なことをしたり言ったりするような軽率なところもあって、だから祖父と父が築いた毛利の大領土を4分の1までに縮めてしまうという大ドジを踏んでしまい、自分や家臣の暮らしがままならない状態まで追い込まれることになった。」

「その輝元さん……じゃなくて輝久さんはどうやって切り抜けたんですか?」

「切り抜けたのは彼の力ではなくて彼の家臣たちの力さ。彼の家臣たちは自分たちの給料が今までの5分の1に削られてもなお輝元どのを見限ることなく、彼を支え続けたのさ。その中の益田元祥という男に至っては徳川家康から大名にならないかと誘われな

がらそれを断つたほどだ。」

「なんでその人は大名になれたかもしれないのに断つたんでしよう……。」

「どうもその誘われた時に『私は輝元さまに頼りにされてるので大名になるより輝元さまの家臣でいたいです。』と言つて断つたらしい。恐らく輝元どのには『この人はほつとけない』と思わせる何かがあつたんだろう。俺も輝元どの改め輝久さんと話してそんな印象を抱いたぐらいだ。」

「すごい人なんですな、輝久さんつて。」

「すごい人かどうかは微妙だが、まあ吉川広家に毛利秀元、清水景治に益田元祥と言つた知勇兼備の忠臣に恵まれたのは事実だから、これもまた人たらしなのかもしれない。」

志郎は輝久の顔を思い浮かべながら笑つて言った。

「さて。話が脱線しまくつてしまつたが、俺が言いたいのには花陽は今のままでもちやんとやつていけるつてことだ。」

「でも私、何も無いし徳と言われても自信なんて持てないですし……。」

「なあに、自信なんてものは少しずつ付けて行けばいいのさ。それに穂乃果の圧倒的なカリスマや、にこの執念深さやしぶとさというのが必要なのはあくまでも何かを立ち上げた時や低迷してる時、それを打破したい時に必要な物であつて、これからのアイドル

研究部のリーダーに必要なのは、*s*が積み上げたものを守りつつそれを後に続く後輩たちに教えて更にそのまた後輩へ託していくことなんだ。」

志郎は花陽の肩を優しくたたき、諭すように語る。

「積み上げたものを守って後輩に託す……。」

「そう、それをやるにはお前のその心優しく人を思いやることが出来る性格が必要不可欠なんだ。だからこそ俺たち3人は花陽を選んだんだ。」

そう語る志郎の顔は、まるで父親のような慈愛に満ちていた。

「でも、もしライブに誰も来てくれなくなっちゃったら……。」

「そんな事には俺が、いや俺たちがしないさ！もしそうなっても穂乃果たちの時みたい
に俺たちが観客になってやる！いや、俺たちだけじゃないぞ。政康や高校生になった夢
路なんかも招待してお前たちの門出となるライブを盛り上げてみせるぞ!!」

「どうして……。どうして志郎さんはこんな私のためにそこまで優しくしてくれるんですか……?」

花陽は声を振り絞って志郎に問いかけた。その顔は今にも泣きだしそうな表情をしていた。

「どうして……か。にこが言っていた『アイドルは人を笑顔にさせる仕事』って言葉がある
だろ？あれを借りて言わせてもらえば、俺たちファンはアイドルに笑顔にしてもらおう

のではなく、アイドルを笑顔にさせる為にいるんだからな。お前たちがより輝けるようにサポートするのが俺たちの仕事なんだ。だから何か困ったことがあつたら凜や真姫だけじゃなくて俺たちのことも頼ってくれていいんだぞ。お前が頼ってくれたら俺たちはその希望に全力で応える。だから何も心配せず、安心してやれ。」

志郎が泣き出しそうな花陽をそう言つて優しく諭すと、

「う、うう……。うわああああん！あああああん！」

花陽は今まで心のため込んでいた不安が志郎の優しい激励のおかげで流れ出たのか、志郎の胸に飛び込み、まるで子供のように泣き出した。

「うお！ちよつ……。そうだよな、不安だったもんな。」

志郎は花陽が胸に飛び込んだことに狼狽するも、彼女が抱えた不安が如何ほどの物であつたのかを想い、そのまま花陽の頭を子供をあやすように撫でた。

小泉家の玄関にて……。

「うう……。さつきはすいませんでした……。」「

「いやいや、別に気にしちやいなさ。」

しばらく経ってから花陽は我に返り、顔を真っ赤にして志郎に謝っていた。もともと志郎は絵里の時でこのような状況に慣れてるようなものなので、気にしてないと否定した。

「それにしても話を聞いてくれて本当にありがとうございます！」

花陽はそう言って深々とお辞儀をした。

「なあに、こうやってメンバーの悩み事を聞くのも俺たちの仕事の一つさ。どうだ？あれからお前の意思はどうなった？」

「次期部長の件ですが・・・やろうと思います！」

花陽は屈託のない笑顔で志郎の問いに応えた。その笑顔は憑き物が落ちたようにさっぱりとされていて太陽のように眩しかった。

「そっか。それはよかった。」

志郎はそんな花陽の笑顔を見て嬉しそうに何度も頷く。

「それにしても花陽にはやっぱり笑顔が似合うな。」

「え!?急にどうしたんですか志郎さん!？」

いきなりの志郎の言葉に花陽は困惑する。

「いや、お前の名前をふと思い浮かべてな。」

「私の名前ですか？」

「ああ、『花』に太陽の『陽』だろ？だから花陽の笑顔は『花』のように可憐で、太『陽』のように優しく人を照らすいい笑顔だと思って思ったんだ。」

「もう・・・変な事言わないでくださいよ志郎さん！」

そう言つて頬を膨らませる花陽だったが、その表情は満更でもないといった様子であつた。

「ははは、じゃあまた明日な！それとここには忘れないうちに伝えとけよ！」

「はい！志郎さんもまた明日!!」

志郎はそう言つて走り去つていた。

「徳か・・・俺が持つことの出来なかつた物を先輩面して語つてしまつたが、花陽をさらに一歩前に前進させられたからよしとするか。」

志郎は北風の吹く帰り道で独り言をつぶやいた。そして志郎はコートのポケットに手をつまむと手に何かが当たつた。

「ああ、そういうえば花陽の誕生日プレゼントに買ったのを部屋に置いてくのを忘れてたな。いつそさつき渡せばよかつたか？」

そう言つて目の前にかざしたのは椿のブローチであつた。

（花陽らしい花を選んだから当たり前だが、よくよく考えてみるとやはり椿は花陽に似合う花だな。）

志郎はブローチを眺めながら微笑む。

椿の花は花首がぼろつと落ちるので武士の間では縁起の悪い花である（今ではデマだという説が有力）とされてきた。だが、それも解釈次第では争い事を好まない花陽にはピッタリだと志郎は考えた。だがそれは眺めている時に思い浮かんだもので、本当の理由は違う。

志郎がこのブローチを選んだ本当の理由はその花言葉である。椿の花言葉は『控えめな優しさ』で、赤いものにはそれに加えて『気取らない魅力』、『謙虚な美德』などといった控えめさを強調したものがある。赤々と美しい花を咲かせながら謙虚な花言葉を持つ椿は実に花陽らしいという理由で志郎は選んだのだ。

「……やはり渡すのは誕生日になってからにするかって、その誕生日は明日か。」

志郎はブローチをポケットにしまい、スマホのカレンダーで花陽の誕生日を確認した。

「うう、寒っ！早く家に帰って温まりたい……！」

志郎はそう呟いて家に向かって再び走り出した。

次代に咲き誇る花はさぞかし美しいものになるであろう——
家路を急ぐ志郎の心中には、かつての自分の息子と姿を重ねた心優しき徳を持つ少女
がいずれ大輪の花を咲かせるであろう姿が鮮明に映っていた。

番外編 美しく誠実な貴女へ

「はああ!!」

「おおおお!!」

音ノ木坂学院からさほど離れてない場所にある、とある道場にて防具に身を固めた男女が互いに竹刀を打ち合っていた。もつとも、この打ち合いは剣道のようなものではなくどちらかと言うとチャンバラのそれに近いものだった。道場でチャンバラとはいかなものとは思っているだろうが、「スポーツチャンバラ」なるものがある他、打ち合っている片割れの少女はこの道場の娘であるため、そこまで気にするほどの事でもないのだろう。

「やつ!はつ!!」

少女の方は、流れるような太刀筋で男の攻撃を1つ1つ的確に捌き、わずかな隙を突きながら男の胴や面を狙う。

「ふっ!ぬん!!」

男の方は、一目見ると力任せに竹刀を振るっているように見えるが、その太刀筋は正

確に急所に狙いを定めており、何度捌かれても、また違う急所を狙い振るわれる。まさに力と技をほど良く混ぜ合わせた猛攻と言える戦いぶりだ。

互角ともいえる打ち合いは幾度にわたって繰り返されるが、

「しまつ、っー!」

少女の手から竹刀が弾き飛ばされ、首元に竹刀を突きつけられたことによつて勝負は決した。打ち合う事計78回、睨み合う事4回、そして勝負が決するまで5、6分と短いようで長い戦いであつた。

「はい(そう)まで。」

試合終了の宣言をしていたのは、同情の真ん中で二人の戦いを見守っていた幸雄だつた。

「いくら志郎が元戦国武将で実戦経験があるとはいえ、二度も負けるのは悔しいですね……!もう一度勝負してください!!」

肩で息をしながら面を脱いでそう言ったのは、この道場の娘である園田海未だ。彼女は負けん気が強く、既に2回敗れてるにも関わらずもう一度再戦を申し込んだ。

「ふう。負けん気が強いのはいいことだからその辺にしておいた方がいいぞ。これ以上の勝負は体に余計な負担をかけてしまうぞ。」

同じく面を脱ぎながら海未をたしなめるのは志郎だつた。息を切らしている海未と

比べるとまだ余力が残っているようだ。

「そうですね、志郎がそういうのであればこの辺で手打ちにしましょうか。」

「お、ずいぶん聞き分けがいいな。普段ならもつと粘るだろうに。」

海未が潔く再戦を諦めたのを意外に思った幸雄が彼女を茶化しながらその真意をたずねる。

「それでは普段の私が聞き分けが悪いみたいじゃないですか！武術に優れている志郎が言う事なら確かだろうと思つたから聞き入れたわけで・・・。」

海未は幸雄の言い分に納得がいかなかったのか、抗議するように反論した。

「幸雄、からかうのはそこまでにしとけ。お前海未にほぼ瞬殺で負けたんだから。」

「う、う、うるせー!!俺はお前みたいに刀や槍を振り回すのはそこまで得意じゃないんだつーの!」

志郎に、海未に完敗したことを突かれた幸雄は憤然とした様子で反論した。

「ですが、やはり志郎はとても強いんですね。2回もあれだけ打ち合っていたのに息一つ切らしてないんですから。」

「まあな。あいつ18歳の初陣の時から敵将と一騎討ちしてるし、小田原攻めの途中の滝山城攻めで北条氏照の家老と一騎討ちしたり、小田原から撤退する時も殿で松田憲秀の家老と一騎討ちしたり、駿河でも信豊さまと一緒に敵城に突撃してたからな

あ……。」

幸雄はこの時代に生まれ変わる前の真田昌幸だった頃に見た志郎、武田勝頼の戦ぶりを遠くを見るような目で語った。

「なんとというか、穂乃果みたいに猪突猛進だったんですね。」

「ああ、おかげでお屋形様……信玄公から大目玉をしょっちゅう喰らってたらしいな。」

「うるさいな、俺だって皆に父上の継承者だと認めてもらうためにだな……。」

「分かってるさ。そのための突撃だろ？まあおかげで『天下に隠れ無き弓取り』と信長に言われるほどの武勇を手に入れたんだからいいじゃねえか。しかも上杉謙信にも信長に對して『片手間であうような相手じゃない』って忠告させたんだからそこそこは誇るべきだと思うぜ？戦の腕だけなら信玄公を間違ひなく凌駕し得るんだからよ。」

「武田勝頼と言えば長篠の合戦で信長に敗れた武将というイメージしかありませんでした。志郎たちに出会ったおかげでそれ以外の一面を知ることができたのは素晴らしい事だと思います。」

海未が微笑みながらそう言うと、

「そう言ってもらえるのはまあ、悪い気はしないな……。」

志郎は満更でもない様子で水を飲みながらそう言った。

「実のところを言うと志郎の得物は槍だからな。全力の志郎と戦いたきや槍を用意した

ほうがいいぜ海未！」

「槍ですか。ですがうちは剣道と日舞の道場なので槍術に関してあまり……。志郎は槍の扱いが上手だったんですか？」

「ん？ああそうだな、あの頃は基本的に鎌槍を持って戦場を駆け回ったものだ。まあ、剣術もそれなりに鍛えていたから刀もそれなりに使えるんだがな。」

海未がたずねると、志郎は昔の事を思い出しながら淡々と答えた。

そして道着から私服に着替え終わった後、海未の部屋にて

「あ、そうそう。実は海未に渡したいものがあったな。」

何かを思い出したように志郎は自分のかばんを漁り始めた。

『？』

「えー、これなんだがな。」

そう言って志郎がかばんの中から取り出したのは小さな小包と一通の手紙だった。

「お、なんだそりゃ？」

幸雄はその2つに興味津々であったが、

「ああ、ある男から『後生の頼みだ！海未さんにどうかこれを渡してきてくれ!!』と頼まれて託されたものだ。」

「ああ、その口調と頼み方で誰か分かっちゃったわ。」

志郎の言葉を聞いた瞬間に一気に呆れた様子に様変わりした。

「私への贈り物でしょうか？」

海未が首を傾げると、

「ああ。政康からな。何が入ってるのかセキュリティも兼ねて聞いてみたんだが『それを知っているのは海未さんだけだ！貴様には教えられん!!』の一点張りだな。正直不安で渡すべきかどうか迷ってたんだが……。」

と志郎はバツが悪そうな表情で言った。

「まあ、あいつ他のメンバーはともかく海未に対しては狂信者染みたところあるからなあ……。そう思うのも無理はねえわな。」

幸雄は苦笑いしながら同意した。

「中身は何であれ、贈り物ならばそれを受け取るのが礼儀だと私は思います。それに、私のファンだと言ってくださった方からの物であれば、受け取らないのはなおさら失礼ですしね。」

そう言って海未は志郎から小包と手紙を受け取ると、その場で小包を開けた。

「え、その場で贈り物開けちゃうのは失礼ちゃうんか？」

幸雄は意外そうな表情で海未にたずねた。海未ならば「人前で贈り物を開けるなんて失礼ですよ！」と言って開けないと思っただからだ。

「確かにそうではありますが、志郎と幸雄は私の事を心配してくれてるので中身を見せて安心させたいと思ったので……。」

海未は少し顔を赤らめながらそう言った。

（やべえ、大和撫子だ。これはあいつも惚れるわけだ。）

（大和撫子はまだ生き残ってたんだ！絶滅してなかったんだ!!）

そんな海未を見た2人は心の中でそう叫んだ。そして中から出てきたのは……。

「こいつは……。」

「穂乃果んちの饅頭だな？」

「ほむまんですね。」

そう、小包の中から出てきたのは穂乃果の実家である饅頭屋、『穂むら』の名物である『穂むら饅頭』略して『ほむまん』であった。

「なんだ。身構えていたがなんてことない、ただのほむまんじゃないか。」

志郎は普通の品物であったことに安堵したのと、なにか特別なものが入ってたんじゃないかという期待が外れたという残念に思う感情が入り混じったため息をついた。

「だがこのほむまん、店に並んでるのと比べるとちよつと形が歪んでねえか？」

幸雄がそう言うのと、海未もほむまんをまじまじと見つめて、

「幸雄の言う通りですね。少し形がいつも買っている物とは違いますね。」

と形が違う事を確認した。

「俺が運んでる時に転がったりしてへこんだんじゃないのか？」

志郎がそう言うのと、

「いや、こいつはどう見ても衝撃の類でへこんだ物じゃねえ。そもそも衝撃でへこんだ物だったら。こんな小奇麗な形してねえよ。」

と幸雄は反論した。

「それに俺の推測だが、それに関してはこいつを読めばなんかわかるんじゃないか？」

幸雄はひよいと手紙の封筒を拾って言った。

「なるほど。」

「では、読んでみますね？」

海未は幸雄から受け取った封筒を開けて中に入っていた手紙を出して読み始める。

拝啓 園田海未様

こんにちは、北村政康です。此度は誕生日が近づいてるといふ事で手紙を書かせていただきます。

私はμ'sの、そして海未さんの1ファンとして貴女の誕生日を祝いたいと思いいち、手紙とプレゼントを送ろうと考えました。しかしプレゼントは何を送ればいいのか、まったく思いつきませんでした。

あまり高価すぎる物は気を遣わせてしまい、安値だと失礼かもしれないし、手作りの物は危険だと思われると耳にしましたし、既製品だと手渡しならばともかくこのような形で送るとなると気持ちが悪くもつてないと思われるのではないかな等々、どうすればいいのか迷ってしまいました。

そうしてプレゼント選びに苦心している時に、偶然にも穂乃果さんとことりさんとお会いしました。

そこで私は思い切ってお二人に相談させていただきました。すると穂乃果さんは『海未ちゃんはおうちのお饅頭が好きなんだよね・・・。そうだ！うちでお饅頭を作つてそれをあげたらいいんじゃないかな!』と提案してくださりました。

そういうわけで私は一時的に『穂むら』に弟子入りし、ほむまん作りを習う事にしました。穂乃果さんのお父上どのは厳しくも丁寧にはむまん作りを指導してくださいました。ですが饅頭作りは初めてだったので中々上手に作れず、数日にわたって『穂むら』に通い詰めました。

そして通い詰め始めてから11日が経った頃・・・つまり貴女の誕生日の2日前になんとか海未さんに贈るのに相応しいほむまんを完成させることが出来ました。できれば誕生日当日に直接海未さんに手渡ししたいと考えていたのですが、残念なことにその日は生徒会の仕事が入ってしまったので、涙を吞んで我が盟友たる志郎にこの手紙とプレゼントを託した次第となります。

長々と書いてしまい申し訳ありませんでした。厚かましい事とは存じておりますが、このプレゼントを受け取っていただけただけなら幸いです。そして園田海未さん、誕生日おめでとうございます。貴女の誕生日を心よりお祝い申し上げます。

敬具

北村政康

「なるほど、このほむまんは政康の手作りだったのか・・・。」

志郎は感心するようにほむまんを眺めて言った。

「しっかしあいつもよくもまあ、こんな手間暇かけたもんだよな。普通に買ったもんでもいいだろうに。」

幸雄は半ば呆れた様子だった。

「だがあいつは海未を熱心に応援していた。だからこそ海未に贈るプレゼントは最大限に心を込めた物を贈りたいという一心でこれを作ったんだろう。その心意気は賞賛に値するものだと思いがな。」

「それはそうなんだが、志郎よ。今日は何日だ？」

「え？あ・・・。」

幸雄に今日の日付をたずねられた志郎の顔面は蒼白になった。

「そう、今日は『16日』だ。海未の誕生日は昨日の『15日』・・・。言いたいことは

分かるな？」

「す、すまん海未！中身が分からなかった故に渡すか迷っていたら今日になってしまったのだ!!本当に申し訳ない事をした!!」

志郎は海未に土下座をして政康からの手紙とプレゼントを渡すのが遅れてしまったことを謝った。

「いえ、気にしてませんよ。志郎だつて私の事を気遣つてくれたんですから。それに今は夏じゃないんですしまだ普通に食べられると思いますよ。」

海未はそう言つと、政康の作つたほむまんを1個手に取り、一口食べた。

『ど、どうだ?』

志郎と幸雄は海未に味をたずねた。

「はい、とても美味しいです!」

海未は満面の笑みで答えた。

「……。」

「どうしたんだよ幸雄、そんな顔して。」

納得いかないと言いたげな表情をしている幸雄に志郎はその理由を聞く。

「いや、なんていうかあの氏がなあ。本当にそこまでしたつてのがどうも胡散臭くてのお……。」

幸雄は政康とは、戦国時代においては一貫して敵対関係であったが故にその魂胆を信用できない様子だった。

「おいおい、幸雄は政康とあの一件で共同戦線を張ってたんだろ？なら少しは信用してやってもいいと思うんだがなあ。それなら穂乃果に聞けばいいと思うぞ。」

志郎はそんな幸雄をなだめるように言うと、穂乃果に電話をかけた。

「もしも穂乃果？実は聞きたいことがあるんだが……。」

「ふむ、ふむ。おお！わかった、ありがとう。じゃあな。」

「で、穂乃果はなんつってたよ？」

「ああ、政康が穂むらに通ってたのはマジだつてよ。」

「あいつ生徒会の仕事があるとか言ってるくせに暇人かよ……。」

「あと写真も撮ってたみたいで送ってくれるみたいだな。あ、きたきた。これだ。」

そう言つて志郎が海未と幸雄にスマホを見せた。そこには穂乃果の父から厳しい指導を受けながら熱心にほむまん作りに励む政康の姿が写っていた。

「こいつあ驚いた……。確かにこんなもん見ちまったら信じるしかねえわな。」
幸雄はそこに写つてる政康を見て、ようやく彼の心意気が本物であることを確信した。

「これを作るためにこれほどまでに汗水を流してくださいななんて……！」

海未がそう言つてほむまんを食べながら感激していると、

「海未さん、お客さんがいらつしゃいましたよ。」

と、海未の母親がやつて来て海未にそう告げた。

「穂乃果かことりでしょうか？」

「いえ、男の人でしたよ？その諏訪部さんや武藤さんと同じくらいの年頃の……。」

海未の母親が来客の特徴を挙げると、

「……どつからどう見ても政康だ。」

「あいつ何しに来やがったんだ……。」

志郎と幸雄はそれだけで誰かが分かったのもう苦笑いするしかなかった。

「ど、どうも海未さん、こんにちは!!いきなりの訪問、平にご容赦ください!!」

海未の家の玄関に通された政康はそう言うなり、海未に腰をきつかり45度に曲げた最敬礼のお辞儀をした。

「というかお前なんで海未の家知ってるんだよ……。」

「まさか色々拗らせてストーカーとかしてたんじゃねえんだろうな!」

「違うわ!!俺は断じてそのような下劣な真似はせんぞ!!」

色々疑ってかかる志郎と幸雄に対して政康は抗議した。

「いえ、政康さんとは夏休みに少しばかり交流がありましたので。それがたまたまうちの前だったんです。」

と海未は志郎たちに事情を説明した。

「なるほど。」

「釈然とはしないが海未がそう言うんなら信じよう。」

志郎たちは海未の説明を聞いてあっさり引き下がった。

「うむ。で、志郎よ。あれはちゃんと海未さんに渡してくれたのか?」

「中身が分からなくて危険物かとも思ってた渡すのを躊躇ってたら今日になってしまったが、ちゃんと渡したぞ。」

「はい。政康さんが心を込めて作ってくださったほむまん、とても美味しかったですよ。」

海未が笑顔で政康にそう言うのと、

「あ、ああ……！海未さんの口から『美味しかった』という言葉が聞けるなんて！この北村政康、ただそれだけで1ー1日にも及ぶほむまん作りの苦労が報われる思いでございます!!まさに恐悦至極！天にも昇るような気分です!!」

感極まったのか政康は跪いて泣き出してしまった。

「なんつうか、ほんとフアンの鑑だよなコイツ。」

「ああ、だが政康が幸せならそれでいいじゃないか。」

幸雄はそれを見て呆れた様子だった。

「それで、今日は一体どのような用件で来られたのですか？」

「実はその……。手紙をお読みになられたかとは思いますが、昨日は直接海未さんにプレゼントを渡したかったのですが用事が入って行けなくなり、泣く泣く志郎にプレゼントと手紙を託したのですが、どうしても直接海未さんの誕生日を祝いたいと思った次第で……。」

政康はそう言うといったん玄関の外に出て、何かを自分の背中に隠し持つて戻って来た。

「プレゼントをもう一つ用意させていただきました!!」

そして政康は叫ぶように言いながら海未に『もう一つのプレゼント』を差し出した。

『これは……。』

「花束、ですか？見たことない花ですね……。」

「はい。これは君子蘭くんしらんという花で3月15日……。つまり海未さんの誕生花なのです。」

「すげーな、まさか誕生花まで探すとはガチ勢ここに極まれりだな。」

「でもなぜこの花なんだ？他にも探しやすい花とかあったらうに？」

志郎はスマホで3月15日の誕生花を調べながら政康に君子蘭を選んだ理由を聞いた。

「うむ、確かに他にも海未さんに合う花はあった。だが俺は花を贈るならば花言葉も贈る相手に似合う物でないといかんと思っつてな。それを踏まえて選んだ結果、これにしようと思っただのだ。」

政康は顔を赤くしながら答えた。

「で、この花の花言葉は何なんだよ？」

と幸雄は志郎のスマホの画面をのぞき込んだ。そこには『高貴』、『誠実』、『情け深い』と記されていた。

「どのような花言葉があるのですか？」

と海未がたずねると、

「それを贈り主の前で聞いちやうのはいささか酷なんじゃねえの？」

と幸雄が笑いながら政康を指さした。その政康は顔がもう茹でダコのようになっていた。

「それもそうですね。よかつたら政康さんも上がっていきませんか？せつかく来ていたのだのですし、お茶の一つでも……。」

「い、いえ！お構いなく!!それに俺はただこれを私に來ただけでお茶など恐れ多く……し、失礼しました!!」

海末が政康を誘うと彼はそれを断り、そのまま全速力で走り去ってしまった。

「行つてしまいました……。」

「どうする？追いかけるか？」

志郎が海末と幸雄にたずねると、

「いや、あいつがそう言うんなら追うのは野暮だと思つぜ。」

と幸雄は志郎の肩を叩いてそう言つた。

「それにしてもこんな素敵なものまでいただいてしまったのですから、何かしらのお礼をしなくてははいけませんね。」

海末が君子蘭の花束を愛おしそうに眺めながらそう言つと、

「そこまで気にする必要はないと思うがな。」

「そうそう、もし海末から直にお礼なんて貰つちまつた日には感動しすぎてそのままあ

の世にまで行っちまいそうだからな。」

「あいつは海未のフアンの1人として、海未がいつも通りに元気に活動していることが政康への最高の礼になると俺は思うぞ。」

と、志郎と幸雄は答えた。

「そういうものなのですか。」

『そういうものなんだって。』

志郎と幸雄がそろってそう言うのと、2人は海未の部屋へと戻っていった。

「……穂乃果やことりたち^μ sのメンバーや志郎と幸雄に祝っていただけたのはとても嬉しかったですが、こうやって私を強く想ってくれるフアンの方から直接祝っていただけるのもなんだか少しこそばゆいですが、とても嬉しいものですね。スクールアイドルを始める前の私にはこんな事は想像もつかなかったでしょうね。」

海未は君子蘭の花束に話しかけるように独り言を呟くと、花束のうちの1本を玄関の花瓶に飾ってから自分の部屋に戻っていった。

番外編 真姫の不安

μ s の練習が休みの日の放課後——

「しっかし真姫がいきなり呼び出すつてのはなかなか珍しいな……」

志郎は廊下を歩きながら独り言を呟いていた。そんな彼の視線は手の中にあるスマホの画面に映っていた一通のメッセージであった。

『ちよつと相談したいことがあるから音楽室に来て。』

というものであった。志郎は、

『相談？ 凜か花陽じゃダメなのか？』

と返信したが、

『今回は志郎に相談したいのよ。』

とだけ返って来たので志郎も何かを察して、

『分かった。』

と返信して音楽室へ向かって行った。

「・・・そうやって考えてるうちにもう音楽室か。」

志郎はピアノの音楽が聞こえてきたことで音楽室に着いたことを実感した。志郎自身はもうこの学校に慣れてるので音楽室の場所が分からないわけではなく、音楽室という『練習がない日や昼休みに真姫がピアノを弾いている場所』という認識があるため、音楽室からピアノが聞こえてくるとほぼ無意識にそう実感するのだ。

「入るぞー。」

志郎がそう言つて扉を開けると、

「あ、来たわね。」

「おつ、志郎も呼んでたのか。」

真姫と幸雄が志郎を出迎えた。

「なんだ、幸雄も来てたのか。」

「なんだとはご挨拶だな。俺だつて、sの補佐役の1人なんだぜ?」

「どつちかつて言うとな今日の本命は志郎なんだけどね。」

「真姫さん!?!じゃあなんで俺を呼んだんですかね!?!」

真姫の言葉に納得いかないと言った様子で幸雄は抗議したが、

「本命は志郎だけど、幸雄にも話を聞いてほしいって思ったから呼んだのよ。」

「なんだ、それならいいや。」

真姫が幸雄を宥めるような口調で言うと、幸雄はそれをあつさり承諾した。

「それで、話ってなんだ？」

幸雄と真姫の掛け合いが終わるのを待つてから志郎が話を切り出した。

「そう言えば俺もまだ相談内容聞いてねえな。作曲に関することだったら俺たちはド素人だから役に立てる保証はないぜ？」

「どうやら幸雄も志郎よりは先に来ていたものの内容自体を知らされているわけではなかったらしい。」

「別に作曲で悩んでるわけじゃないわよ。それに作曲で悩んでたらあんた達じゃなくて凛と花陽を呼んでるわ。」

「お、辛辣ウー！」

「つまり俺たちが相手だからこそ話せる内容ってことか。」

「ええ、そうね。」

「まさか彼氏ができたとか!？」

「んなわけないでしょ！イミワカンナイ！」

「茶化すのはやめてやれ……。」

志郎が幸雄をたしなめると、真姫はため息を一つついてから語りだした。

「私の家が病院の経営をしているのって知ってるわよね。」

「まあ、俺たちの間じやあ周知の事実だよな。」

「私は将来、病院を継ぐ後継ぎとしていろいろ勉強して、大学も医学部に入るつもりなの。別に特に不満があるわけじゃないわ。私はパパとママを尊敬してるし、そんな2人の期待にも応えたいとも思ってるの。だけど……。」

そう語る真姫の表情は少しずつ暗くなっていく。

「……不安なのか？」

志郎がそう真姫にそうたずねる。

「ええ、たまに私は本当にこれでいいのか……とか色々もやもやすることがあるのよね。」

「なるほど。自分の在り方ねえ……。」

幸雄はため息をつきながら呟いた。

「なんていうか、志郎たちも昔は私と同じように家の後を継ぐ立場に立っていた人だから、2人に聞けば何か答えが出せるんじゃないかって思ってここに呼んだの。」

「うーん。少しぶつちやけてもいいか？」

「ええ、別にいいわよ。」

「真姫は俺と幸雄を同じ立場に立ったことのある人間だと言ったが、厳密に言うとなんか俺たちはお前とはだいぶ違う立場だったんだぞ。」

志郎は真姫の言葉に反論し始めた。

「志郎の言う通りだわな。真姫、たしかお前一人っ子だったよな？」

「ええ、そうよ。」

「そう、お前さんは一人っ子にして生まれながらの嫡男ならぬ嫡女なわけだ。だが俺たちは他にも兄弟がいたし何より……。」

「俺も幸雄も本来は家を継ぐ立場ではなかった。」

「志郎の方は正体をバラした時に言ったが、こいつは元はと言えば四男で側室の子で、しかも生まれながら諏訪家の養子として武田の子として扱われてこなかった。俺の方はというと側室の子ってわけじゃあなかったが兄貴が2人いたから真田の家を継ぐ権利は一切なかったってわけだ。」

「俺の方は義信兄上が父上と対立して廃嫡され、信親兄上は盲目、信之兄上は既に夭折と後を継げるような状態では無かったので俺にお鉢が回って来た。」

「そして俺はお屋形様の命令で武藤家の後を継いではいたんだが、長篠の戦で兄上が2人ともおっ死んじまってな。それで真田家を断絶させまいとした志郎の命令で真田家

に出戻って後を継いだってわけよ。」

志郎も幸雄も、真姫とは違って本来家を継ぐような立場には無かったのだ。

「まあだからといって、真姫が不安に思っていることが理解できないわけではないな。」

「円滑に真田家を継承できた俺とは違って、色々面倒ごとがあつた志郎なら分かるだろうよ。」

「俺も武田の後を継ぐように言われた時は戸惑つたものさ。」

「嬉しくは無かつたの?」

真姫は首を傾げて志郎にたずねた。

「何せ武田の者ではなく、諏訪家の者として育てられてきたもんだからな。俺なんか義信兄上の代わりが務まるのか不安だつたよ。あとはもう知つてると思うが・・・。」

「お父さん・・・武田信玄を超えられるか、でしょ?」

「父上を超えようと志したのは、そこにいる幸雄含めて父上を崇拜レベルで尊敬してる者が多かつたつてのもあるんだがな。」

志郎が笑いながらそう言うと、幸雄は苦笑いしながら目を逸らした。

「真姫はご両親から医術の手ほどきを受けているうえに後を継ぐための基盤や時間はそれなりに与えられてるから志郎が如何にハードモードだったかが分かるよな・・・。」

「おまけに父上が外交で周りに喧嘩売りまくつたりしてバトンをトゲまみれにして渡し

てくれたりな。」

「なんか恨み言に聞こえてくるわね……。」

「別に俺自身は父上を恨んでいたわけじゃないぞ。父上は人としては色々どうかと思う部分はあつたが武将としては尊敬していたのはまぎれもない本心だからな。」

そう言う志郎の顔は爽やかな笑顔であつた。

「おっと、話が脱線してしまつたな。で、真姫は何が不安だつて言つたんだつたか？」

志郎は改めて真姫に質問した。

「将来の不安とかは今の志郎と幸雄の話を聞いてたら吹っ切れたわ。あとは私の在り方ね……。」

「真姫の在り方……か。」

「ええ。私は小さいころからパパやママに勧められて色々な習い事や勉強に励んできた……。でも他の子たちはそうやって私が将来のための勉強とかに打ち込んでる間に友達を作つたり遊んだりしてるのを見て羨ましいな……って思う事があつたの。」

「でも全くいなかったつてわけでも無いんじゃないの？」

「ううん。どんな風に声を掛けたり話をしたらいいのか分かんなくて友達は全然いなかったわ。」

「なんつーかお前らしいつちやお前らしいよな……。」

幸雄は苦笑いしていた。

「だから私を誘ってくれた穂乃果や、 μ sに入るきつかけをくれた凜と花陽には感謝してもしきれないわね。あ、これ誰にも言わないでよね。」

「言わない言わない。」

「あ、凜と花陽で思い出したんだけど・・・、不安があるのよね。」

「お、また新しい不安かね?」

「ええ・・・。きつと凜と花陽とも進む進路が違ってくるのは分かっているんだけど、それが怖いよね・・・。もし私が跡取り娘じゃなかったら μ sが終わって高校を卒業しても変わらずに今みたいに一緒に過ごせたかもしれないと思うと・・・。」

「真姫・・・。」

「医者として頑張っていきたいとも思うわ。でもこうやって家や生まれた家に決められた道を進むんじゃないかって自分で自分の道を開きながら人生を進んでいきたくたって思う事もあって・・・。どうしたらいいのか分からなくて・・・、うう・・・。」

語っているうちに真姫は徐々に涙声になっていき、しまいには泣き出してしまった。

「ま、真姫・・・。」

志郎は真姫が泣き出してしまったことに動揺して、どんな言葉をかけてあげればいいのか分からなくなってしまった。

「ここは俺に任せな。」

「幸雄……。」

幸雄は自信ありげにそう言うと、真姫の肩を優しくたたいて、

「気持ちに分かるぜ。お前さんはあいつらと一緒にいたいんだろ？」

と声を掛け、真姫はそれに対して無言で頷いた。

「確かに将来の道が決まっちゃまってのお前さんとそういうものが無いあいつらとじゃあ高校を卒業した後も一緒にいられるって保証がないのは事実だがよ、それでもお前とあいつらが友達だっっていう事には変わりはないと思うんだよな。」

「うん……。」

「確かに医者には、それも親の後を継いで院長にでもなっちゃったら友達に気軽に会える機会なんて全然なくなっちゃうだろうなって事は分かるが、それでも絶対会えなくなるってわけじゃないんだろ？ だったらそのわずかな時間を活用すればいいと思うぜ！ 院長なら一年に一度くらい好きな時に休んだってバチは当たらんだろうしさ！」

「それに、真姫はまだ1年生なんだ。卒業するまであと2年も残ってるからその2年でμsのみんなでもやりたい事を出来るだけたくさんやって思い出を作るのも悪くないと思うぞ。」

志郎も幸雄に続いて真姫を励ました。

「そうよね……。まだ2年もあるんだからくよくよしてられないわよね。」

真姫はそう言いながら涙をぬぐった。

「そうそうその意気よ！人生は楽しまなきや損損！」

「幸雄ははっちゃけすぎだっつ。真姫、あの時お前に言った言葉覚えてるか？」

「あの時？」

「お前たち1年生が、sに入る前の日に花陽と一緒に真姫の家に生徒手帳を届けた時に言ったやつだよ。」

志郎がそう付け加えると、

「ええ、覚えてるわよ。『義務を言い訳にして自分のやりたいことを諦めないでほしい。』よね。」

と真姫はウインクしながら答えた。

「ふう、なんか色々言いたいことを言ったらスッキリしたわ。2人とも、相談に乗ってくれてありがとう。」

学校からの帰り道を歩きながら真姫は2人に礼を言った。

「いいって事よ。」

「こうやって相談に乗るのも俺たちの仕事だからな。」

志郎と幸雄は満更でもない様子で答える。

「じゃあ私はこつちだから。」

「ああ、また明日な。」

「じゃあな。」

しばらく歩くと、真姫は志郎たちと別れて歩いて行つた。

「しかし今日の真姫はやけに素直だったな……。何かあつたか？」

志郎は今日の真姫の言動が普段とは少し違うような感じがするという疑問が浮かんだ。

「あく、たぶんこれのせいだわ。」

幸雄はそう言うのと鞆の中から箱を取り出した。

「なんだそれは？」

「これか。チョコだよ、親父の海外出張の土産さ。」

「まさかとは思うが……。一つ貰うぞ。」

志郎は真姫がやけに素直だった理由がこれにあるのではないかと思い、それを確かめるために一つ貰つて口に入れた。

「……これ、酒入ってるな。」

チョコを食べて少しすると志郎はそう言った。

「いや、まさか真姫が酒に弱いとは思わなんだ。」

「いやいや！なんでウイスキーボンボンなんて与えた!!というか学校に持ってきた!？」

「えー、だって親父が『これ友達にあげてやれ』って言うんだもん！だから穂乃果たちに食わせて反応を見てやろうと思ったたら今日練習休みとかタイミング悪すぎなんだよ！」

「言うに事を欠いて逆ギレかよ!!」

志郎と幸雄はギヤイギヤ騒ぎながら帰り道を歩いて行った。

「そう言えば真姫のプレゼントは決まったか？」

しばらく騒いで疲れた志郎は違う話題を切り出した。

「たしか明後日か。俺は決まったが、お前はどうか？またいつもの誕生日花シリーズか？」

「シリーズって言うな。しょうがないだろ、これくらいしか気の利いたものか思いつかないんだから。」

志郎は慥然とした表情で幸雄に反論する。

「4月19日って何の花なんだ？」

「デルフィニウムだな。花言葉は『清明』と『高貴』だ。」

「へえ、『高貴』つてのは真姫にしっくりくるな。」

「そういうのも考えてるからな。」

「志郎もなかなか気が利くやつだよな。」

「不器用なりに知恵を絞っただけさ。」

「素直じゃねえなあ。真姫のめんどくさいのが移ったか？」

「はは、そうかもしれないな。そういえば桂も真姫のように気難しい性格だったな。」

「んでしょつちゆう機嫌を損ねては俺や釣閑斎どのに愚痴つてな。」

「そのことはもういいだろう！」

2人は昔の話に花を咲かせながら、真姫の髪のように赤く染まった夕陽に照らされながら帰っていった。

番外編 紅月の夜に

6月9日の夜、志郎と幸雄は希に呼び出されてとある公園にやって来た。

「あ、来た来た。おーい、志郎くーん幸雄くーん！」

希は2人の姿を見るなり手を振って呼びかけた。

「一体どうしたんだ希？こんな時間に呼び出すなんて。」

「いくら一人暮らしだからってこんな時間に女が一人歩きつてのは流石にマズいんじゃないか？」

「お？幸雄くんってば心配してくれてるん？」

希はそう言うのと、ニヤニヤしながら幸雄に詰め寄った。

「ばっ……ちっちっげーし！別に俺は心配してねえけど志郎が心配してたからついて来ただけだし！」

「なんだその無駄に分かりやすすぎるツンデレみたいなセリフは……。」

「ん？たまにはこういうのも悪くなくろうと思ったんだがな。」

「演技かよ……。」

「いやそうでもないぞ。希は、sのメンバーの中でも1、2を争うグラマラスっぷりだから、今みたいにずっと寄りされると割とびっくりするんだぜ？」

「へえ、幸雄くんって志郎くん以上に長生きだったって聞くから結構精神的にも落ち着いてると思つたら意外とかわいい部分もあるんやね。」

幸雄の言い分を聞いた希は笑いながら言った。

「おいおい、爺呼ばわりは聞き捨てならねえな。俺たちは中身はともかく今はピッチピチの思春期真っ盛りの男子高校生なんだ、まあそれを差し引いても男つてのは年をとつてもこんなもんだけどな。」

幸雄はそれに対しておどけながら反論した。彼の言う通り、志郎と幸雄は戦国武将がこの世に生まれ変わった存在であり、その影響で魂、または精神の年齢は享年に17歳を足したご長寿状態であったが、17年間見た目に相応しい振る舞いを行なつてきたので相対的に若返つている傾向にあると、本人たちは考えている。

「まあ幸雄の茶番は置いておくとして、こんな時間に呼び出した理由を聞きたい。」

「茶番つてなかなかひどいな志郎……。だがまあ俺もそこところは気になるな。」

志郎は改めて希に夜中に呼び出した理由をたずねた。

「それはね……。空を見て欲しいんよ、ほら！」

希はそう言つて夜空に指を指した。

『ん……? おおー!』

希が空を指したのにつられて空を見上げた志郎と幸雄は驚嘆の声を上げた。

空に輝いていたのは月、輝く満月であったがこの日は『ストロベリームーン』という月が赤く輝く現象が発生していたのだった。

「おお、月が赤く輝いてる……。」

「すごいやネットニュースで見たが今日だったか。希は俺たちにこれを見せたくて呼んだのか?」

「うん、月が赤くなるなんて珍しいだろうな〜って思ってたね!」

希は幸雄の言葉に屈託のない笑顔で答えた。

「ねえ、2人とも知ってる? このストロベリームーンって恋を叶える月って呼ばれることもあるんやって!」

「へえ、そうなのか。」

「月が赤く輝くなんて俺たちの時代だったら間違ひなく凶兆として扱われるだろうが、現代人ってのはそういう意味じゃ俺たち旧時代の人間よりもはるかにロマンチストだよな。それにしても俺たちの前でそういう事言っちゃうって事は、俺たちのうちのどっちかに気があつたりするんかね?」

幸雄は皮肉っぽく笑いながらそう言った。

「うくん、別にそういうわけじゃないけど2人も μ sのみんなと同じくらい大切に思ってるんよ?」

幸雄のからかいに対して希はからからと笑いながら答える。

「きつぱりと否定されるとちと物悲しく感じるものがあるが、あいつらと対等に見てもらえてるってのはなかなか嬉しいもんだね。」

「志郎くんと幸雄くんも μ sにとつて無くてはいけない存在だって穂乃果ちゃんたちを支える姿を見て感じたからね。志郎くんはファーストライブで挫折そうになった穂乃果ちゃんたちを励ましてあげたり、学園祭の後に μ sがバラバラになっちゃいそうだった時も倒れるくらい無茶をしてもみんなの間を取り持つてくれたし、幸雄くんも絵里ちゃんにこつちの事を気にかけてくれたり、みんなが知らないところでうちらがいい方向に進めるように知恵を振り絞ってくれた……。うちもみんなも2人にはほんとに感謝してるんよ。」

希は感慨深げに志郎と幸雄が μ sのために力を尽くしてくれたことを感謝した。

「希が μ sに対して特別な想いを持つているように、俺にとつても μ sはそこまでする相応しいと思わせてくれた存在だからな!稀有な事なんだぜ?俺がここまで見限らずに忠義を尽くす相手はお屋形様こと信玄公や志郎意外にはいないと他でもない俺

自身が思ってたんだからな！」

「μ、sは俺に夢を追いかける喜びを教えてください、何よりもみんなほっとけない存在だったからな。だからこそ俺も無茶のし甲斐があつたつてわけだ。」

2人はそう言つて照れ臭そうに笑つた。

「それに俺たちだつて希には感謝してもしきれない事があるんだぜ？」

「え、そうなん？」

希は幸雄の言葉に目をぱちくりさせた。

「ああ、『μ、sはこの9人だからこそ輝く』……。そう言つて希が9人揃うようにみんなを導いてくれたからこそμ、sはここまで来ることができたし、みんなにとつてかけがえない存在になった。そして何より新しい時代に生まれ変わった俺たちに、かつての時代では絶対に見ることのできなかつた夢を見せてくれた……。みんなが希の事を大切に思っているように、俺たち2人にとつても大切な存在なんだ。」

「志郎の言う通り！簡単に言い表せば希は俺たちにとつての大恩人つてことになるわな！」

「志郎くん……。幸雄くん……。」

2人の言葉を聞いた希の両目から涙が溢れてきた。

「希!？」

「ちよつ、どうしたんだよいきなり！俺たち泣かすような事言っちゃまったか!」

希が泣き出したことで志郎と幸雄は狼狽えた。

「ううん、2人の言葉が嬉しくって……。前にも言ったけどうち、お父さんとお母さんが家にいないことが多かつたし、転校ばかりで友達も全然できなかったから一人ぼちでいることが多くって……。それでいつか友達とみんなで何かを一緒に成し遂げたって思ってたんよ……。でも、こうして奇跡のような出来事ばかり起きて、うちがこんなに幸せすぎているのかなって思う事もあって……。」

希は、他のメンバーに明かすことができなかつた自分の心情を志郎と幸雄の2人に赤裸々に話した。

「なくに言つてんだよ。」

「え?」

「幸せすぎて悪い事なんてあるもんかよ、なあ志郎?」

「ああ。人間幸せになるに越したことはないし、それに対して罪悪感を感じる必要なんて全くないと俺は思うぞ。」

「志郎の言う通り!それにお前さんはせつかく『希』っていう素敵な名前を授かつてるんだから、望みを追い求めることに臆病になつてちゃあそれこそ幸運の女神さまに失礼つてもんだぜ。まあ、俺たちにとつちやお前さんがその他でもない幸運の女神様なんだが

な。要は貰えるもんは病氣と災い以外なら奇跡でも何でも貰つとけて事だ！」

「幸雄みたいに面の皮を分厚くする必要はないが、希はもう少し自分のためにわがままになつても罰は当たらないと思うぞ？」

「おいおい志郎、そいつは流石に聞き捨てならねえぞ!」

「幸雄が節操無しなのは事実だろうに。」

「言つたなこの野郎!」

希を励ましているのがいつの間にか取っ組み合いになつていたが、

「ふふ・・・あはは!うちが女神やつたら志郎くんたちはそうやねえ・・・。阿吽の仁王様かもしれないな!」

それを見ていた希は可笑しくなつたのか笑い出した。

「そうそう、それでいいんだよ。」

「ああ、俺たちの幸運の女神さまはそうして笑顔でいるのが一番だ。」

希の笑顔を見て、志郎と幸雄は優しくそう呟いた。

「さつ!辛気臭いのはここまですて、中秋の名月にはちと早いが見としゃれこもうぜ!」

「お、それはいいな!」

「だつたらうちに来おへん?うちの家のベランダからならここよりもつと月がいい感じ

に見えるし、このまま1人で帰っても暇だから2人が来てくれたら嬉しいんやけど……。」

「ああ、もちろん!」

「ここは幸運の女神さまに甘えさせてもらうぜ!」

志郎と幸雄は希の誘いに快く乗って、3人はそのまま希の家に向かって歩き出す。

μ sの絆を紡いだ幸運の女神と、μ sをより良い方向へ導くために縁の下から支える仁王……。赤く輝く月に照らされながら歩く3人の姿はとても楽しいものであった。